

東方世變物語 ～lay one's own path for the future～

凱奏

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

part 1 infinite weapon (完結)

ごく普通の日常を送っていた青年が、ある事件をきっかけに非日常に巻き込まれていく。

あらゆる武器を駆使し幾多の戦場を乗り越え、青年は果たしてその世界でどう生きる？

part 2 戦妖流儀 (連載中)

幻想への道筋、力の渴望、旧友との再会、永きにわたる戦いの因縁、いざ、その物語に終止符を、

初投稿作品です。どうか暖かい目で見てください。

質問、感想などは気軽に書いてください。

目次

infinite weapon

プロローグ | 1

第一章・転世編

この世の神様 | 7

八意永琳と古代都市 | 17

永琳の超スパルタ特訓 | 23

剣の特訓、そして能力使用 | 29

最初の休日 前編 | 37

最初の休日 後編 | 43

二振りの刀 初陣 | 50

移住計画 | 56

妖怪の大群 | 61

二人を繋ぐ二刀流 | 68

女神の鬼畜試練 | 78

第二章・日本神話戦争編

守矢の祭神 | 84

逆転の一手 | 87

打倒・大和 | 93

大和の刺客 | 98

心を鬼に | 103

いざ決戦の地へ | 110

戦いの覚悟 | 115

必中の槍・グングニル | 119

そして戦友に | 128

VS 四天王の一角	248
再会・再開・また宴会	244
一段解放	238
過去の残党	233
裏ノ首謀者	225
撃	220
上下関係	214
GAME OVER	210
二人旅でのひと時	207
目指す先は	203
スキマ妖怪の初戦	197
第四章・妖怪の山第壱戦	
境界の妖怪	191
創造と破壊の神槍	185
霍青娥という邪仙	180
道教	176
聖徳太子	171
十人の話を同時に聞く者	166
気ままな一人旅	160
第三章・聖徳伝説編	
二つの旅立ち	157
悪夢の記憶	151
言葉より行動	145
新生活	141
大和と洩矢の決着	133

勇儀の悩み

256

第五章・太陽の畑編

一面広がる花畑

262

花の妖怪vs境界の妖怪

268

成長

273

昨日の敵は今日の友

280

爆走！妖怪車輪！

286

咲風隼の物件探し

298

第六章・妖怪の山第弐戦

二度目の訪問

305

黒神大暴れ

311

最高最速風神少女

318

空想の橋渡し

324

謎の占い屋敷

331

九天の滝

341

謎の弓

347

影の侵入者

353

侵入者の猛攻

360

弾幕反射

366

風縫・封滅

377

弦という青年の過去

389

第二の能力

397

集結！好敵手！

406

咲風隼の幻

415

最後の殴り合い

425

私の英雄

彩る夜明け

第七章・竹取物語編

八雲紫の式神

かぐや姫の噂話

護衛の依頼

幸せ

他の護衛者

数億年越しの出会い

永遠と須臾の罪人

心の迷い

実力者たち

五人の貴公子

正体

意思の剣筋

突然の訪問

流れゆく血

戦士喰らいし大蛇

安倍晴天の戦闘

安倍晴天の覚悟

怒りの拳

月光が照らす夜

決戦前日

竹取物語・戦 其ノ一

竹取物語・戦 其ノ二

437

444

453

459

464

470

480

488

494

500

507

514

520

528

536

542

547

555

564

572

579

586

593

600

必殺の一撃	777
鞍真陣 v s 犬神	771
妖怪の山の異変	766
技と技の対決	761
道場の乱戦	755
暗雲	749
二つの頼み	743
先と後	737
着飾り無き剣撃	729
真剣	723
疾走	716
目覚め	705
第一章・妖怪攻防編	
開幕	695
戦妖流儀	
決断の時	682
無限	669
蘇りし山の化身	660
終章	
少女の復讐心	650
蓬莱の薬 後編	645
蓬莱の薬 前編	639
嵐の後	632
竹取物語・戦 其ノ四	618
竹取物語・戦 其ノ三	609

名前

784

第二章・西行妖封印編

静寂の朝

789

夕陽の下の再会

795

負の涙

801

散り逝く桜の下

807

歌聖の娘・西行寺幽々子

812

大福の一件

818

異変発生

824

迷いの帰路

829

深夜の探索

836

妖怪桜の猛攻

842

巻き起こる旋風

846

花卉の斬風

852

妖怪夜桜封印

859

犠牲が創り出した光景

866

第三章・無双剣豪編

豪雨の日の翌日

874

雨宿りの死闘

881

哨戒天狗総大将

885

搜索依頼

892

宴会の準備、天魔の苦悩

897

休憩所に住まう者

901

夜を彩る宴

906

余興・妖闘祭第一幕

912

怨神縁機	1036
いざ、衝突の時	1028
天狗の対談	1023
運命の再戦	1019
剣客の穏やかな一日	1014
知らない回想	1009
友人としての	1005
強襲・辻斬り剣豪	998
鬼式眼楽の殺気	993
衝突	985
約束の用事	979
疾き再会	973
死から蘇りし鴉天狗	967
妖怪の山再統一録	962
試合の違和感	957
静まりゆく妖怪の山	951
邂逅	945
余興・妖闘祭終幕	939
余興・妖闘祭第五幕	934
余興・妖闘祭第四幕	928
余興・妖闘祭第三幕	922
余興・妖闘祭第二幕	918

infinite weapon
プロローグ

自分の道は自分で切り開け

n Part 1 infinite weapon

いつも通り学校のチャイムが鳴る前までに席に着き、
校庭を窓から眺める。

遅刻しそうで走る生徒。

それを急かす教師。

教室内では朝の挨拶が飛び交う。

昨日と変わらないごく普通の毎日。

こんな日々がずっと続くと思っていた。

最近、朝が騒がしい。

なんでも今若者に人気な新人アイドルが、冠番組を持ったんだと。
番組放送日の翌日はいつもの3倍くらいうるさく感じる。

よくあんなに早口で喋ってるのに息切れしないんだろうか、。

俺の名前は、咲風 隼（さきかぜ はやぶさ）。

18歳の高校3年生だ。

呼び方は人それぞれだけど、ほとんどのやつからは隼と呼ばれている。

あだ名は、、不名誉だが”窓際族”だ。

誰がつけたのかは知らないが、

「よう、隼。今日も相変わらずつまんなそうな顔してんな。」

この話しかけてきた相手はクラスメイトの秋水。俺の前の席に座ってるやつだ。

「お前、昨日何時に寝たんだよ。目の下のクマが酷いぞ。」

「何言ってるんだよ。寝てるわけねえだろ。新作ゲームの発売日なんだから、誰よりも早くクリアしたいと思うのがゲーマーってもんだろ。」

「俺はゲーマーじゃないからお前の感情は理解できねえ。いいから早く席に着け。1限目始まるぞ。」

そう言うとき秋水は席に座る。

同じタイミングで先生も教室に入ってきた。

・・・その瞬間、ハッとす。

1限目が苦手科目の英語だったからである。

あまり良い未来の見えない今日に、小さくため息をついた。

「おい隼。まだ帰んねえのか？」

6時間目が終わり放課後、俺と秋水とその他数名しかいない教室で秋水が話しかけてくる。

「ああ、ちよつと図書室で勉強してから帰るわ。」

「相変わらず真面目だな。なんでそれで成績が普通なのか。」

「うるせえ。いいからとつとと帰れ。」

「へいへい。頑張れよー。」

「ああ。じゃあな。」

そう言つて秋水は教室を出て行く。

さて、こちらにも図書室へ向かうとしよう。

あれから2時間ほど勉強して学校を出て、いつも通りの帰り道を歩いて家へと向かう。

この道は結構人通りが多い。

おそらくこの町で一番と言つていいほどだろう。

しかし今日は珍しく人や車通りが少ない。

俺は携帯にイヤホンを差し込み、お気に入りの曲を流そうとした。

ーーーその時だった。

「危ないッ！」

イヤホンをつけていても鮮明に聞き取れるほど、それは大きな声

だった。

何事かと思ひ声のした方を振り向くと、小さな子供がボールを追いかけて道路へと飛び出し、

その横から大型トラックが警笛を鳴らして迫っていた。

「な、何やってんだよ、！」

俺はその場に佇んだまま、思わずそう口に出していた。

しかし、動こうとする足を本能が引き留める。

『赤の他人を救う代わりに自分の命を捨てるか？どうせ見ず知らずの子供だ。俺には関係ない。』

その光景を呆然として見つめながら、本能が自身にそう語りかけてくる。

でも。

ここで動かなかつたら。

一生後悔する。

それでもいいのかよ。

「いいわけ、ゝ、ないに決まってんだろオオオー！ー！」

俺は身体に絡みつく躊躇という名の鎖を振り解き、道路へと飛び出して子供を突き飛ばした。

ーーその次の瞬間、俺の意識は途絶えた。

「ーーおはよう。隼君。」
「はえ?。」

その直後、微かに聴こえる穏やかかつ優しい声により、俺は目を覚

ました。

第一章・転世編

この世の神様

「おはよう。隼君。」

「はえ？」

目を覚ました時、俺の目の前には白い空間と、人の影が佇んでいた。男性か女性の区別はつかなかったが、声質からしておそらく女性だろう。

「何だいその顔。せつかく面白いやつを見つけたと思ったのに意外と反応は普通なんだね。」

『・・・な、何言ってるんだ、こいつ。そりゃあ驚くだろ、普通。』

俺は自分が置かれた状況に理解できないまま、無言のままその影を見つめる。

「面白いやつだろう、君は。後悔したくないから助ける！なんて、普通にゃ思わないよ？」

こちらは何も話していないのにも関わらず、そいつは俺の意思を悟ったようにそう語る。

「ん？私が何者かって？・・・確かに、”こいつ”や”そいつ”呼ばわりは気分が良くないな。

——そうだな、私は君の知っている言葉で言うところの、所謂神様ってやつかな。」

その瞬間、思考が完全停止した。

『・・・は？神様？このよくわからない影が？』

「ねえ、随分と失礼じゃないか？私だって傷つくんだぞ？」

またしてもその影は、こちらの心の声を読んだかのように俺に対してそう促す。

が、依然として思考が停止したままである為、耳には一切入ってこなかった。

その後、暫く問答を繰り返し、

「・・・ま、マジであんたは神様なのか？」

「さっきからそう言っているだろう。物分かりが悪いなあ。」

結果、俺はもう理解せざるを得ないと悟り、自身に状況を受け入れろと説得し、何とか思考を追い付かせる。

「さっきも話したけど、君が子供を助けるところを見て、面白いやつだと思つて連れてきたんだ。」

「・・・ってことは、俺は死んでないのか？」

「死んではないよ。ただあの世界で、君の存在が消えただけ。」

その言葉を聞き、またしても思考が遅れる。

「・・・ちよ、それどういうことだ？」

「ん、簡単に言えば、君はあの世界に存在しなかったことになったんだ。」

俺が聞き返すと、そいつは軽いノリでとんでもないことを口にした。

瞬間、怒りの感情が発生する。

「はア!?おい！何してくれてんだよ！」

俺はその影に掴み掛かろうとするが、全くもって身動きが取れない。

それを見てその影は、小さくため息を吐いた。

「はあ、いやいや、あのままだったら君は死んでいたよ？」

「・・・でも、君が死ぬには惜しい。だからそういう処置を取ったんだ。」

「でも、俺はあの世界で存在しなかったことになってんだろ!?!じゃあ結局死んだのと同じじゃねえか！」

「まあ、確かにあの世界の君は消えた。けど、君はまだ生きてここにいる。」

「い、いや、そうだけだよ。」

俺の込み上げる怒涛の疑問を、そいつに容易く丸み込まれる。

納得はしたいが、やはりそうはいかない。

「まあとにかく、君は生きています。私の言うことが信じられないか？」

「・・・分かったよ。要するに、俺はまだ生きてるんだな？」

尋ねると、そいつは頷くような反応を見せる。

「じゃあ、それならよ、俺はこのあとどうすりやいいんだ？一生あんなの話し相手か？」

数秒の沈黙の後にこいつは不敵に笑い口を開いた。

「君を、別世界へ案内しよう。・・・準備はいい？さあ、いくよ！」
「えっ？。。。ちよッ、!？」

。。。その次の瞬間、空間は白い輝きに包まれる。

恐る恐る目を開くと俺は空を飛んでいた。

どういう理屈かは知らないが、いきなり上空に瞬間移動したみたいだ。

それにしても、俺、空を飛んでる。

空を飛ぶってこんな感じなのか。

まるで落ちてる感覚みたいなの、ん？

下を向くと、少しづつ緑に包まれた森が近づいてくる。

「ーって、これ落ちてんじやねえかアアアアー!!!」

数秒後、俺の身体は地面についた。

いや、落ちたって言ったほうが正しいが、

地面に落ちた時、身体への痛みは一切なかった。

あの人が守ってくれたのだろうか、？

『そうだ。私に感謝したほうがいいぞ?』

「っ!? …って、あんたか、。まだ話せたなら早く言ってくれよ。」

脳内に直接語りかけてきた声に、思わずがビクリと跳ねる。

『どうだ？ 凄いだろう？ もっと褒めてくれてもいいんだぞ？』

こいつの姿は見えないけど、これだけは予測できる。

そう話すこいつの表情は、絶対にドヤ顔だろう。

『ーーさて本題に入るが、君はどのような種族になりたい？』

「え、種族？ いや、急に言われてもわかんねえよ、そんなん。」

『そうか、なら保留にしよう。君がこの世界で生きていくうちに、なりたい種族が見つかるかもしれない。だから、その時まで、君の種族は不明にしておくよ。』

「不明、？ 不明っていう種族か、？」

『細かいことは気にするな。呼び名がないから適当にそう言ったただけだ。』

そいつは不服そうな声でそう促す。

『ああ、それと、君には能力を与えよう。君の近くの地面に、能力名を書いた紙を埋めておくから、後で掘り出すといい。』

「今度は何、って、能力!？」

・・・もしかして、

漫画でよくある、火を操る！とか 時を止める！とかそういうやつか!？

それはテンション上がるな！

『・・・反応がおもちゃを買ってもらった子供みたいだぞ？』

「う、うるせえな！男ならそういうのに憧れるもんだろ！」

『私は女だからわからないよ。』

この興奮を理解できないとは、神というのはそういうものなのだろうか。

・・・それと、やっぱり女性だったのか、。

『まあ、とにかく、能力は強力なものだからね。どう使おうが君の勝手だが、後悔しない使い方を推奨するよ。』

「分かった。・・・まあ、世話になったな、色々。」

『別に二度と合わない訳じゃないけどね。まあ、君は私が見込んだ人間だからね。簡単に死なないでくれよ？』

「――ああ勿論だ。・・・そうだ、最後にあんたの名前、教えてくれよ。」

『いいよ。私はヴァル。・・・またね、隼君。』

「――ああ。ありがとう、。ヴァル。」

「さてと。早速能力を掘り出してみるか。」

俺はすぐ近くの、周りと少し毛色の違う地面を掘った。
すると、すぐにクシヤクシヤな紙が姿を現す。

「能力は、つと。なにになに？」

ありとあらゆる武器を具現化する程度の能力

名前だけではないまいちよく分からないが、
要するに、剣を出そうと思えば剣が出て、槍を出そうと思えば槍が
出る！みたいな能力だろう、

「シンプルだけど、、、これ、強いのか、？」

いくら武器を出そうが、使いこなせなければ無意味な能力ではない
だろうか、、、？

——その刹那、後ろから巨大な気配を感じ取る。

振り向くと、まるで熊のような獣が此方目掛けて突進を仕掛けてき
ていた。

「よく分からねえけど、”習うより慣れろ”だッ！早速試してやるッ
！」

右手を前に出し、意識を集中させる。

——次の瞬間、俺は鉄の剣を具現化した。

が、その瞬間、俺の体に強烈な疲労が走った。

「……は、はア、??なん、だ、よ、こ、れ、。」

突如襲った疲労により、俺は声も出せないまま膝から地面へと崩れ落ちる。

次の瞬間、獣の突進を避けられず、俺は背後へ15mほど吹っ飛ばされた。

「うぐアアアアツ!!」

今度は身体全体に激痛が走る。

「……ハア、ハア、ハア」

俺は激痛に耐えるので精一杯だった。

——しかし熊のような獣は、お構いなしに突進を仕掛けてくる。

「ち、ちくしょう、！こんな、ここで、死んで、たまるかアアツ!!」

そう叫んだ瞬間、背後から鋭い音を立てて矢が飛んできた。

矢は獣の頭に吸い込まれるよう向かっていき、獣の脳天を射抜いた。

「た、助かった。」

なんとか力を振り絞って後ろを向くと、白い髪をした美しい女性
が、弓を握り佇んでいた。

「大丈夫かしら?」

その女性は一瞬の沈黙の後、こう話しかけてきた。

「あ、ああ、ありがとう。た、助かったよ。」

俺は力を振り絞り絞り声を出す。

するとその女性は小さな笑みを見せた。

「間に合ってよかったわ。私は八意永琳、都の薬師よ。」

八意永琳と古代都市

「はい、これでよしと。そうねえ、このぐらゐの傷なら、あと2日で治るかしら。」

俺はあの後、白髪的女性に連れられて、身体の治療を受けていた。この医学は凄まじく、折れていたであろう肋骨は殆ど治っていた。

「2日!? どう考えても、完治までに早くて1カ月はかかる怪我だったろ!?!」

「私の腕を舐めてもらっちゃ困るわよ。あと、それほど重症でもなかったわ。」

「――貴方の生命力と回復力、正直言つて異常ね。」

そんな能力あったらどうか?

・・・まさか、ヴァルがくれたのか? だったら助かったぜ。

俺は思わず顔がにやけた。

「さて本題に入るわ。改めて、私は八意永琳。貴方は?」

「咲風隼だ。助けてくれてありがとう。ええつとく、八意さん。」

「永琳でいいわよ。さん付けもしなくていいわ。」

「わ、わかった。ありがとう、永琳。」

俺は素直に名前で呼ぶ。

あんまり人を名前で呼ばない為違和感が、。

まあ、すぐ慣れるとは思うが。

「じゃあ隼？聞きたい事が何個かあるけど、まず1つ目、この剣は貴方の？」

机の上には、鉄の剣が置いてあった。

見た目はRPGゲームのモブキャラが持っているような、至って普通の鉄剣だった。

先程、俺が具現化した剣だろう。

「ああ、多分そうだ。」

「多分？ねえ、貴方、何か妙な能力でも持っているの？」

俺は啞然とした。まさか能力の事について聞かれるとは思わなかったからだ。

「なんでそれを聞いたんだ？」

「この剣は貴方があの時作り出したものでしょう？私がこの剣を見つけた時、裏面は地面によって汚れていたけれど、表面は汚れひとつ無かったもの。その時作り出された物としか考えられなかったわ。」

だからその能力について聞いたの。貴方の能力、剣を作り出すだけじゃないでしょ？」

俺は驚愕する。

何も話していないのにも関わらず、剣を見ただけでそこまで予測してくるとは。

所謂、これが天才というものなのか。

「永琳も能力つてのを持ってるのか？」

「うくん、まあ、ええ、私の能力は、そうね、。あらゆる薬を作る程度の能力」と言ったところかしら。骨折くらいなら、薬で簡単に治せるわ。」

永琳は何故かを濁すような喋り方でそう話す。強そうには聞こえないが、よく考えるとチートなものなのかもしれない。

『不老不死の薬とかも作れんのかな。』

俺が妄想を膨らませていると、永琳は咳払いをして話を戻す。

「それで？貴方の能力は？私は教えたのだから貴方も教えてくれないと不平等でしょ？」

「そうだな。俺の能力は、ありとあらゆる武器を具現化する程度の能力だ。ただ、これを使うと尋常じゃない疲労に襲われてさ。全く使いたい気にならないよ。」

「それは貴方の体力不足じゃなくて？」
「う、。。」

永琳は容赦なくそう返す。

事実俺は全くもって体力に自信がないが、ストレートに言われるとやはり悔しい。

「ごめんなさいね。でも、体力がないのであれば、これからつけばいいじゃない。」

「・・・今、心読まなかった？」

「読んでないわよ。貴方、顔に出過ぎ。」

「昔はポーカーフェイスだった筈なんだけどな。」

「まあいいわ。じゃあ2つ目の質問。貴方どこから来たの？随分と見慣れない格好をしていたけれど。」

俺がこの世界に来た時は、確か学校の制服を着ていた。今じゃズタズタで、みる影もないが、。

「すまないけど、それは聞かないでくれ。」

俺は正直に話すか迷ったが、普通じや理解できない話かつ、話せばどう思われるか分からないので、答えなかった。

「そう、わかったわ。でもいつかは話して頂戴。」

「ありがとう、永琳。」

2日後、俺の傷は完治した。折れていた骨もすっかり元通りだ。こんだだけの医療が、元いた世界にあつたらいいのにな。

俺は傷が治ったあと、永琳に街を案内してもらった。

「……ここ、いつの時代だよ。」

この街は、まるで漫画に出てくるような近未来都市のようだった。もはや見渡すたびに衝撃が走る。

家や車は浮き、自然はありとあらゆる種類の花が咲き乱れている。

「どう？ 気に入った場所でもあった？」

「いや、凄すぎて何がなんだか。」

俺は見るもの全てに圧倒され、案内が終わる頃には殆ど忘れかけていた。

「ところで、隼。貴方はこれからどうするの？」

そう永琳に尋ねられ、自分が置かれた状況を思い出しハツとする。

「いや、どうするったって、お金は無いし、家も無いし、」

「貴方が良ければ、私の家に来なさい。貴方が能力を使いこなせるようになるのを見てみたくなつたわ。」

途方に暮れていると、永琳は俺にそう提案する。

「え、？いやいいのか？俺は死にかけてた得体の知れない者だぞ？」

「いいわよ。そのかわり、色々付き合つて貰うから。」

何故か少し嫌な予感を感じたが、仕事もない俺にはありがたい話だった。

「じゃあ世話になるよ。何かから何までありがとな。」

「どう致しまして。それじゃあ行きましようか。」

永琳の家は街の中心から少し離れた大きな家だった。にしても流石薬師、薬品がこれでもかというくらい揃っている。

「あつちは何があるんだ？」

「弓道場よ。貴方、武器を具現化するのなら弓も出せるでしょ？存分に練習するといいわ。」

「・・・弓か。すげえ難しいイメージあるけど、俺に出来るのかな。」

「まあ、出来るまでやるしかないわね。」

永琳はそう言いながら不敵な笑みを浮かべた。

「それじゃあ、寝る時は道場の隣の部屋を使いなさい。」

「本当にありがとう。明日からよろしくな。」

俺は言われた部屋に入り、布団に横になって意識を手放した。

「計画は順調だ。今に見ている、月詠ッ！」

永琳の超スパルタ特訓

『学校に来んな！』

真っ暗闇の視界の中、己を罵倒する声だけが反響している。

『この人殺し！』

これは悪夢、そして真実の記憶、

『そうだそうだ！』

『仕方なかったんだよ。何でそんな言葉を掛けるんだ、俺の気持ちを
考えてくれないのか、。』
こんな世界

『消えてしまえばいいのに、！』

「……おはよう。酷くうなされていただけ、大丈夫？」
ゆつくりと目が開くと、部屋の扉の前に永琳がいた。
彼女の反応を見るに、どうやらかなりうなされていたらしい。

「ああ、大丈夫だよ。少し悪夢を見ただけだ。」

「……そう。何かあったら相談しなさい？」

「……ああ、わかった。」

その後、俺は永琳が作った朝食を食べ、部屋に用意されていた黒い道着に着替えた。

ここで事件に遭遇する。

着ていた制服がボロボロで到底着れるものではない為、普段着る用のものがなかったのだ。

この道着で出歩くのも抵抗あるよな、。

そんな事を考えながら、昨日紹介されていた道場へ向かった。

昨夜、永琳に自身の特訓に付き合っって欲しいと頼んだのだ。

その依頼を、永琳は薬の実験に協力してくれる事を条件として受けてくれた。

その実験とやらは不安要素が残るが、まあ、永琳のことだから大丈夫だろう、。

「来たわね。待ってたわよ。」

いつもの奇抜な格好で永琳は待っていた。

「それじゃあ早速特訓を始めましょうか。」

「おう。全然スパルタで構わないぜ。」

「ふふ、了解。それじゃあまずは、」

「あの野郎絶対許さねえ！なんだよ道場の周り1千周って。この道場1周約100mだから、100kmってことかよ。しかも全力ダツシュって。殺す気か！」

そこで永琳が出したメニューは、2時までに道場1万周という単純かつ鬼畜なものだった。

要するに今9時だから、5時間で100km走破しろってことだ。はつきり言って、無茶苦茶すぎる、！

『それぐらいしないと、貴方の能力は使いこなせないわよ。ああ、この

メニューは毎日やるからね?」

澄ました顔で言いやがって!道着じゃ走りづらいし、そもそも俺は人間だぞ!、いや今は人間じゃないのか。

・・・しかし永琳の言う通り、あの能力を使いこなすには人間離れた体力が必要だろう。

自身の小学校低学年レベルの体力じゃあとても使いものにならない。

「・・・しゃあねエ!覚悟決めるか!!」

そして2時になる10分前、

俺は100km走破した。

何回気絶するかと思ったか、いや、もしかしたらしていたのかもしれない、。

『ともかく俺は走りきった!最高で5kmマラソンしかしたことのない俺が!』

内心で、俺は大きくガッツポーズをした。

「あら、やるじゃない。5百周目あたりで倒れると思っていたわ。」

「ハア、ハア、このぐらい、まだいけるぜ、。。。」

俺は肩で息をしながら答えた。正直、二度とやりたくはないが。

「それじゃあ、あと10分休憩したら次の練習に移りましょう。まず最初は、剣術の練習よ。」

「ああ、上等だ。ここまで来たらとことんやってやるよ。」

それから10分後、

休憩時間が終わると道場に薄紫色の髪をポニーテールでまとめた少女が入ってきた。

見た目からして、俺と同年代ぐらいだろうか？

「この子は私の弟子よ。かなりの実力者だから、遠慮せずに剣をふるいなさい。」

永琳は俺目掛けて竹刀を放り投げる。

俺は竹刀を掴み取り、それを構えて永琳の弟子と相對する。

「手合わせよろしくお願いします。遠慮は入りません。全力でかかってきてください。」

さもなれば、命は無いと思ってください。」

俺は一瞬たじろぐ。

竹刀でも命は奪えるということか、。

俺は一度首を振って気を入れ直し、再び相手の少女へ鋭く視線を向けた。

「俺は咲風隼！いざ、勝負!!」

永琳の合図と同時に地面を蹴り、一気に間合いを詰める。

そして距離が寸前のところまで近づいた瞬間、少女は構えを変えた。

「綿月依姫！参る!!」

――瞬間、俺と依姫の竹刀が衝突した。

剣の特訓、そして能力使用

「俺は咲風隼！いざ勝負!!」

「綿月依姫！参る!!」

俺と依姫の竹刀がぶつかり合った。俺はそのまま力尽くで潰しにかかる。

しかし、依姫はそれをいとも簡単にいなし、隙が生じた俺の胴に竹刀を入れた。

「ぐアッ！」

俺が痛みに悶えたその一瞬を依姫は見逃さず、そのまま足払いをかけられる。

そのまま俺はバランスを崩し、2回転ほど地面を転がった。

「力だけでは刀は扱えませんよ、隼さん。

「……さあ！もう一度!!」

「くそっ！今度は簡単にやられてたまるかよ、！」

直後、今度は依姫が仕掛ける。

フェイントを入れながら接近し、一気に俺の目の前まで近づいて竹刀を振り下ろす。

俺は依姫が振り下ろした竹刀を自分の竹刀で受け止め、身体の左側へといなした。

「なかなかいい筋していますね、。でも、！」

依姫は身体を翻し、もう一度面を目掛けて竹刀を振るった。

その攻撃には身体が反応しきれず、重い一撃を受ける。が、命中の瞬間、なんとか頭をそらして肩で受けた。

「くッ、まだまだア！」

依姫が間一髪で頭をそらした事に驚愕している一瞬の隙をつき、俺は竹刀を依姫の腕を目掛けて振るう。

しかし依姫は直ぐに対応し、相殺するように竹刀をぶつけてきた。その反撃の衝撃に耐えきれず、

俺は竹刀を手放し、依姫のカウンターを成す術なく面で受けた。

瞬間、重い衝撃と共に視界が遠退いていく、、、

「――天井が見えた。あれ？確か依姫と剣の練習をしてたはずじゃ、、、」

周りを見回すと、心配そうな表情で永琳と依姫が見下ろしていた。

「あら、やっと気がついたのね。貴方、1時間ほど気を失っていたのよ？」

「どうやら依姫のカウンターを喰らった瞬間、今までの疲労も相まって気絶してしまっただらしい。」

「ああ、すまねえな、、心配かけて。」

「あの一撃をまともに喰らって気を失うなって言う方が無理よ。むしろ、初心者にしては上出来過ぎる程だわ。」

成す術なくやられた気がしたが、ここは永琳の賞賛の言葉を素直に受け取っておくとしよう。

「今日は初めての特訓で疲れたでしょう。もう休みなさい。明日もあるのだから。」

「うげえ、。」

「何よその反応、嫌なら辞めたっていいのよ?。」

もう二度とやりたくないっつーの、と心の中で率直な感想を吐き出した。

しかし、これを毎日やっていれば確実に成長出来るだろう。

そう考えたと同時に、俺の中の覚悟は定まった。

「はは、辞めるかよ。ああ、上等だ。直ぐに誰よりも強くなってやる。」

部屋に戻る途中、廊下で俺は依姫に呼び止められた。

「わかった。でもここは廊下だし、場所は変えよう。」

俺は依姫を連れて自分の部屋へと戻った。

自分の部屋って言っても、俺の所持品はほぼない、ただの仮部屋に過ぎないが。

「それで、話ってなんだ？」

「・・・隼さんは最近この街に来たから知らないと思いますが、1週間ほど前まではよく妖怪がこの街の人を襲ったりしていたんです。

——しかしここ1週間、そういう知らせや前兆は全くありません。、単刀直入に聞きます。

・・・貴方は妖怪の類ですか？」

依姫は鋭い視線と共に、俺へそう尋ねた。

「・・・すまないが、俺の素性について話す事はできない。でもこれだけは断言できる。俺は依姫の言う妖怪っていうのとは一切関係無い。信じてくれないか？」

そう返すと、依姫は肩の力を抜いた。

「なら、いいんです。すみません、変なこと聞いて。それでは明日も宜しく願います。」

「ああ、よろしく。」

依姫はそう言い残して、部屋から去っていった。

俺は彼女を見送り、そのまま布団へ入って目を閉じた。

それから数日が過ぎた。

俺の剣の腕は、依姫との試合のおかげでかなり上達していた。

・・・当然、まだまだ依姫には遠く及ばないが。

それから、この鍛錬の中で友人もできた。

いや、好敵手ライバルと言った方が正しいだろう。

「よっ、隼。相変わらず朝が早いな！」

噂をすれば。この陽気な男は 焰ほむら 龍牙りゅうが。

俺より少し背が低く、赤色の髪と常に腕にはめている竜のような模様が描かれた真紅の腕輪がトレードマークだ。

『そういえば俺、私服とか持ってなかったな。』

特訓以外の時間、俺は永琳の勧めで都市の周りを警備する、所謂用心棒の仕事を行っていた為、多少はお金が溜まっていた。

いつか、そのお金で自分の私服を買いに行くとしよう。

しかし自身のファッションセンスを思い出し、付き添い人は絶対に連れていこうと心に決めた。

永琳あたりならば、良い服を選んでくれるかもしれない。

「俺はこれから100km走んなきゃならないんだから、早く始めた方がいいだろう？それとも、お前も走るか？」

「勘弁してくれ！絶対お前と同じメニューやりたく無いわ！」

「まあまあ、そう遠慮すんなって。」

「してねーよ！」

全く頑固なやつだ、意外と楽しいぞ？（大嘘）

龍牙を地獄の100km走に何とかして巻き込もうと、俺の中の悪魔が奮闘する。

「じゃあ走り終わるまで竹刀でも振ってろ。」

「おう、頑張れよー。」

まあ、こんな風に毎日をやっているわけである。

さて、今日も走るとしよう。

100km走には想像以上に慣れてきていた。

疲れるのには変わりないが、気絶しそうになることは無くなっていた。

「おー、お疲れ！よし！俺と打ち合おうぜ！」

毎日毎日、俺の体力を考えてくれよ龍牙。

何故ここには頭のネジが何本か飛んでいる奴しかいないのだろうか？

これを言ったら、永琳にヤバい薬の実験をさせられる可能性がある為絶対口には出さないが。

「ハア、待て、10分だけ待ってくれ、そんなぐらゐあれば回復できる。」

「あいよー。」

10分後、俺は龍牙と竹刀を打ち合っていた。

龍牙の剣の腕は依姫には及ばないが、俺より断然格上だ。

力でも技術でも負けている。

そんな相手に俺が勝つ方法は、、、

「そこだア！」

俺は龍牙の渾身の一撃を身体スレスレでかわし、その一瞬の隙をついて竹刀を振った。

少し遅れた為、狙っていた場所は外したけどな。

「あぶねえ！、狙ってたのか？この瞬間を。」

「俺がお前に勝っているもの、それは発想だ。力をいなして一瞬を隙をつくのが、俺がお前に勝つ方法！」

「流石は俺のライバル！だがまだまだア!!」

今日も龍牙には勝てなかったが、負けもしなかった。剣術は上達してるし、体力もついてきた。

——そろそろ能力を使ってみるか。

俺は部屋に戻り気持ちを落ち着かせた。

毎日、100kmも走ってんだ。

鍛錬も用心棒も楽なものじゃない。

今の俺なら多少は使えるはず！

緊張する自分自身に、そう言い聞かせて己を鼓舞する。

そしてあの獣相手に使った時のように、右手を前に出して神経を集中させる。

「・・・刀、具現化！」

——次の瞬間、俺は能力を使用し、依姫が持っていたような日本刀を具現化した。

多少の疲労は感じたが、息を乱す事はなかった。

「よ、よっしやアアア！」

俺は思わず自室で叫ぶ。

誰もいなかったよな？いや、居ないだろう。

とにかく俺は、成功したことに感極まる。

・・・しかし使用時の掛け声がどうも納得がいかなかった。

今度龍牙にでも名付けて貰うか。

俺は日本刀を記念に飾った。

シンプルな日本刀だが、俺にはその刀が強い輝きを放って見えた。

次の日、俺は永琳に部屋で叫んでいたのを聞かれていた事を知った。

一番聞かれたくない相手に聞かれた為、その日は暫く調子が上がらなかった。

最初の休日 前編

「今日の特訓はこれで終わりよ。1週間お疲れ様。」

それから一週間、俺は地獄の特訓を、何度か死にかけながらも乗り切ってみせた。

能力をある程度使えるぐらいまで体力をつけられたし、剣の腕もそこそこ上達した素晴らしい1週間だった。

・・・いや、流石に素晴らしいと言う褒め言葉は建前だが、。

「明日はゆっくりと休みなさい?とりたいところだけど、月詠が貴方に会いたがっているの。明日、彼女のもとに連れて行くから。」

「月詠?日本神話に出てくる人か?」

「え?何よそれ。ええつとね、月詠はこの街の支配者であり所謂神の座に位置する人よ。まあ、私よりは年下だけどね。」

神より年上とは、いったい永琳は何歳なんだろうか。

直接は失礼だし今度依姫に聞いてみるでしょう。

「じゃあその月詠って人のところへ行つた後さ、少し付き合ってくれないか?服を買いに行きたいんだ。」

「服?ええ、わかったわ。じゃあ明日の朝、私の部屋に来なさい。」

「りよーかい。」

さて、明日は初の休日だ。

思いつきり羽を伸ばすでしょう。

翌日の朝、俺は6時に起きてそのまま顔を洗い、道着を着て永琳の部屋へ向かった。

道着を着ている理由は、それ以外の服を持っていないからだ。

「おはよう、永琳。」

「あら？随分と早いじゃない。いつもの癖が抜けてないみたいね。」

「こんな身体にしたのはお前だろ。それで、何時に出かけるんだ？」

「あと1時間後に出かけるわ。準備は出来てるみたいだし、ここでゆっくりしていなさい。」

「あいよ。」

その後の1時間は、永琳と雑談をして暇を潰した。

永琳の言っている内容は難しい事ばかりだが、説明が上手くある程度は理解出来ていた。

「それでね、あら？もう1時間経ったみたい。さて、そろそろ出発するわよ。」

「了解。行こうぜ。」

それから俺は永琳に連れられて、街の中でも一際大きい屋敷の前に来ていた。

ここにその月詠が住んでいるとのことだが、一体どんな人なのだろうか。

流石に敬語は必須だろう。

「何突っ立ってるの？入るわよ。」

屋敷の中はまるで迷路だ。

永琳はよく迷わないな。
自分だったら数分で迷子になりそうだけど。

そう考えていると、あつという間に一際立派な部屋の前まで来ていた。

ちよつと緊張してきたな、まあ永琳がいるなら大丈夫だろう。

・・・しかしその安心は、次の瞬間砕ける。

「月詠は貴方と2人つきりで会いたがつてたわ。私は部屋の前で待っているから。」

「・・・まじかよ。」

俺は緊張しながら扉を開け、中に入つていった。

不安だ、果たして何を聞かれるのだろうか。

ともかく平常心だ、大丈夫大丈夫と自分に言い聞かせる。

「――待っていましたよ、隼君。」

部屋の奥にあるカーテンの後ろから、美しくも妙な威圧感のある声が部屋に響く。

「えつとく、初めまして、月詠さん。」

「敬語は使わなくていいですよ。貴方は元々、この街の人ではないのですから。」

「え？あ、えと、わ、わかりま、わかった。」

意外だ。

神というほどだから厳格な人かと思っていたが、予想に反して結構心が広い人らしい。

ひとまずは安心して肩を撫で下ろす。

「ふふ、大丈夫ですよ。今日は特に大事な話とかじゃなくて、単純に貴方と話してみたくなっただけです。永琳が話していた貴方と。」

「それで、そうなのか、安心したよ。てっきり説教でもされるのかと。」

「・・・何か悪いことでもしたんですか？」

「いや、ここに来たとき、直ぐに挨拶に行かなかったから怒ってるんじゃないかと思つて。」

そう返すと、その声は不服そうな反応を見せる。

「私、そんなに心狭くないですよ？でも貴方の性格、大体わかりました。不器用ですけど、優しい方ですね。」

「・・・急に褒めないでくれよ。褒められるのは苦手なんだ。」

「そうですね、、、私は貴方の過去が気になります。けど、永琳に聞かないで欲しいと聞いているので。けれど、いつか聞かせてくださいかね？」

「・・・ああ、いつか話すよ。」

そのあとは小1時間ほど、月詠と談笑を楽しんだ。

結構気が合うのかもしれない。

てか、平然とタメ口で話してるけど、神様に向かって失礼だよな、俺。

「今日は楽しかったですよ。ありがとうございます。」
「こちらこそ、今後もよろしく。」

部屋を出ると永琳が待っていた、ずっとここに居たのかな。

「あら、お帰り。随分と盛り上がっていたわね？」

「ああ、結構気が合ったんだ。待たせて悪かったな。」

「別にいいわ。さあ、服を買いに行くんでしょ？早く行きましょう。」

「よし！服を選ぶの頼むぜ永琳！」

「ふふ、任せなさい！」

俺と永琳はハイテンションでデパートに向かった。

俺はともかく、何で永琳はテンションが高いのだろうか。

「貴方って好きな色は何？」

「ん？黒と赤だけど。」

「へえ、成る程、じゃあこれとかいいんじゃないかしら？」

永琳が見せた服は、真っ黒に所々赤色の線が入ったフード付きのコートだった。

よく見ているうちに、俺はそのコートに一目惚れしていた。

よく見ていた時点で”一目”惚れではないのかもしれないが、

特に色合いがどストライクだ。

「ふふ、気に入ったみたいね？じゃあ全身黒一色にしましょう。変にカラフルにするより、一色にまとめた方が似合うと思うわ。」

「成る程な、今までカラフルにしてたのがいけなかったのか。流石永琳。」

「そのくらい自分で気付きなさいよ。」

永琳はそう言いながら、呆れたような素振りを見せた。

そのあと、俺は永琳に勧められたコートと、黒いシャツとジーンズを買い、その場で着替えた。

もう道着で外歩くのは懲り懲りである。

しかし思ったより代金が高く、財布の中身はすっからかんになった。

また用心棒を頑張らなければ。

「少しくらい出してあげたのに、そういうところ変に意地っ張りよね、貴方。」

「住ませて貰ってるのに、そこまでして貰えねえよ。それにほら、お金は足りたからさ。」

「私こそ実験に協力して貰ってるんだからお互い様よ。意地を張るのもいいけど、困ったことがあったならいつでも言いなさい?」

「感謝する。」

そんな話をしながら、俺たちは昼食を済ませるために飲食店に入っていた。

最初の休日 後編

俺と永琳が立ち寄った飲食店は、数多くの人で賑わいを見せていた。

今日は休日の正午、この活気も当然だろう。

俺と永琳は空いている席を見つけて、そこに座った。

椅子の座り心地がやけにいい。

「席が空いてて良かったな。さて、何を頼む？」

俺は椅子にコートを掛け永琳に尋ねた。

「そうねえ、特に食べたいものもないし、貴方と同じものでいいわ。」

「おっけー。・・・じゃあラーメンにしようか。」

俺は店員を呼んで、ラーメンを2人前注文した。

すると驚くことに、ものの数分でラーメンが運ばれてきた。

技術力が高いとはいえ、流石に早すぎないだろうか？

「じゃあいただきますでしょうか。」

「あ、ああ、いただきます。」

ラーメンを半分ほど平らげたあたりで、それは起こった。

「おいコラア!!なんだこのクソまずい料理イ！」

声が出た方を向いてみると、いかにもガラの悪そうな男が、店の店員に向かつて怒鳴り散らしていた。

いや、普通に美味しくないか？この料理。所謂、クレーマーというやつだろうか。

「おい永琳。あれ止めた方がいいよな？」

そう言っつて永琳の方を向くと、そこに彼女の姿はなかった。

再び男の方を向いてみると、紫色のオーラを放った永琳がすでにそちらへ向かっていた。

「ねえ貴方？それは私の味覚に対する侮辱？」

「あ!?!何でテメエ喧嘩売つてんのかッ！」

男は激情し永琳に殴りかかる。

が、永琳はいとも簡単受け流し、男の腹に蹴りを入れた。

「この街でそんな愚行は許さないわ。早く失せなさい。」

永琳は冷徹な目線と共に、威圧感のある声でそう言い放った。

男は顔を青ざめて、一目散に逃げ帰っていった。

その後、永琳は何事もなかったかのように、いつも通りの笑顔で席に戻ってくる。

「全く。顔は覚えたし、次やったら永久追放かしら。」

永琳こええ！絶対敵に回しちゃダメだ！

「何で貴方も青ざめてるのよ。早く食べましょう？冷めてしまうわ。」

「あ、ああ。」

・・・悪い事はするものじゃないと、一つ教訓を得た。
昼食を済ませて店を出たあと、永琳はこのあと用事があると言っ
て、店の前で別れた。

「じゃあ俺は龍牙の家でも遊びに行くとするか！」

龍牙の家は街の中心から少し離れたところにある、集合住宅の一室
だった。

何故場所を知っているかというところ、この前龍牙に家への地図を渡さ
れたからだ。

俺はエレベーターで三階に上がり、一番奥の部屋のインターホンを
押した。

「はい。どちら様？」

「隼だ。遊びに来たぜ。」

「おー、いらっしやい。まあ上がってくれ、ドア開いてるから。」
「ちゃんと鍵かけとけよ。」

ドアを開けて靴を脱ぎ、廊下を進んでリビングに向かう。

廊下は綺麗に掃除されており、正直龍牙らしくないと感じた。

「らっしやい、おーお前服買ったのか！結構似合ってるぜ。」

リビングにはソファに座ってだらけている龍牙がいた。灰色の

ジーンズに赤色のTシャツ、そして竜の腕輪をはめている。

「お邪魔します。まあ、服は永琳が選んだんだけどな。」

「なんだよーちよつと感心して損したじゃねえか！」

俺はコートを椅子に掛けて、その椅子に座った。

案の定座り心地がいい。

「それで？何か用があるから来たんだろ？」

「・・・いや大した用事じゃないんだ。ただお前に名前を付けて貰おう
と思っ、」

「名前？何のだよ。」

俺は龍牙に対して、俺の能力について説明した。

そして使用時に、かっこいい掛け声が欲しいことも。

「ふくん、成る程な。じゃあめちやくちやかっこいいの考えようぜ！」

「協力感謝するぜ。」

・・・一時間後、俺たちは疲弊しきっていた。

理由は簡単、一向にいい掛け声が思いつかないからだ、。

「ちくしよー！全然いい案が出ねえ！てか隼!!お前やる気ないだろ
!!」

彼の言う通り、龍牙はなかなか惜しい案を出していたのに対して、
俺はゴミみたいな案ばかり出していた。

ネーミングセンスも皆無なのか、俺。

「もう俺はダメだ。力になれなくてすまねえ隼。」

そう言っつて龍牙は冷蔵庫に飲み物を取りに向かった。

さてどうするか。

・・・多分、英語を使ったほうがカッコいいよな。

生成するつて英語で何て言うんだっけ。

born? いやあんまりカッコよく無いしbornは 生むだよな。

じゃあ 生成する つてなんだよ。辞書でもあればいいのに、

ん? 辞書つて重いし固いから実質鈍器だよな?

ワンチャン具現化出来ないかな、

試してみよう。

俺の持つてた辞書を想像して、

「具現化!」

瞬間、光に包まれて辞書が生成された。

「よし!」

思わずガッツポーズをする。

俺はその辞書を使つて、生成する を英語で何と言うか調べた。

「あつたあつた。えーつと、generate?」

結構カッコいいじゃん。

じゃあ generate っくにしよう。何がいいかな。

俺は龍牙が出した案が書いてある大量の紙を漁ってみた。

ん？命令？あれ、命令って英語で何て言うんだっけ？

すかさず辞書を開いた。どうやら命令は `command` と言
うらしい。

「……決めた！`generate command` にしよう！」

もし変だのダサいだの言われても、気にせずぶっ飛ばしてやろう。

「おい龍牙！決めたぞ！`generate command` でど
うだ！」

俺はハイテンションで龍牙に報告した。

「うーん。ちよつとダサくないか？」

よし！ぶっ飛ばす！！

それから3時間ほど龍牙の家に滞在して、永琳の家へ帰ることにし
た。

「じゃあまた明日な！」

「ああ、またな。」

龍牙に別れを告げて、永琳の家へと向かった。

「お帰りなさい。随分と遅かったわね？」

家に戻ると、既に永琳が夕食を作っていた。

そういえば永琳の用事ってなんだったんだろうか。

「ただいま。今日は楽しかったよ、ありがとな。」

「別にこれが最後の休日じゃないわよ？」

確かにそうだった。

「また明日からはガンガン行くから、覚悟しなさい？」

「上等だ、直ぐに強くなってやる。」

こうして俺の最初の休日は終わりを迎えた。

二振りの刀　　く初陣く

「オラア！」

「まだまだア！」

あの休日から2週間が過ぎた。

俺はいつも通りのメニューに追加で50km走り、10分間の休憩のあと龍牙と竹刀をぶつけ合っていた。

俺の剣の腕は、依姫には及ばないものの龍牙とは互角に戦えるようになっていた。

「どうした龍牙ア！最近腕が鈍ってきたんじゃねえのかア？」

「うるせえ！お前の成長が早すぎんだよ！」

今日は俺が優先だ。

ていうか俺、戦ってる時口悪くないか？

今日は20戦やって、13勝7敗だった。

どうも今日は調子が良い。

これなら依姫にも勝てるかもしれないな！

「今日は絶好調だな、隼。最近良いことでもあったのか？」

「強いて言うなら、色んな武器が作れるようになったぞ」

「ふーん。そういうえばお前、相棒の武器って無いよな？」

そういうえば無いな。初めて作った不格好な日本刀は部屋に置いてあるけど。

「なあーそういう武器作ろうぜ！」

「お前、自分も欲しいから頼んでんだろ。」

「イ、イヤ、ソナナコトナイヨ。」

凶星だな。

強い武器を作るとなると、結構体力使うだろうしあんまりやりたく無いんだけどなー。

まあこいつには色々世話になったし、お礼として作ってやるか。

「いいぜ。とびきり強いのは作ってやる。」

「よっしゃあああ！」

龍牙は手を空高く挙げ、飛び跳ねながら叫んだ。

そんなに嬉しいものなのか？

相棒ってのは。

その日のトレーニングが終わった後に、俺は龍牙を俺の部屋に招いた。

「よし！早速作ろう！まずはお前のから！」

「まあ慌てんな、落ち着いて。」

俺は深呼吸をして、能力を使う準備をした。

鼓動が速くなっていたからな。

相棒を作るんだ、そりゃあ緊張するさ。

「よし、いくぞ。」

さあイメージしろ、俺の思う最強の剣を！

「generate command! Black sword!!」

俺が能力を使用した瞬間、部屋の中は光に包まれた。

光が消えてから手元を見ると、俺の掌には全身黒塗りの黒刀が乗っていた。

長さには俺の身長ぐらいだろうか。

そしてかなり重い。

片手で持てないこともないが、今の俺では自由に操れないだろう。

「お！完成したか？！？見せてくれ！」

俺は立ち上がり、龍牙に俺の身長ほどある黒刀を見せた。

「おおー！いいじゃん！お前の服装に似合ってる！」

「やっぱり黒刀になったわ。じゃあ次はお前の番だ、どんな剣がいい？」

「お前にとっての俺のイメージで頼む！つまりお任せだ！」

「了解。」

俺は再び気持ちを落ち着かせた。

俺の中のこいつを剣の形にする、、いくぜ！

「generate command! 焰龍牙!!」

再び光に包まれた。

流石に2回目はキツかったが、なんとか目を開けると龍牙の手には平均的な大きさの日本刀が握られていた。

色は龍牙の腕輪と同じ濃い赤色だ。

「ついで、俺の剣が、、」

龍牙は感動でその場に立ち尽くしていた。
そんなに欲しかったならもつと早く言えよ。

「まあ剣つて言うより刀だけだな。多分、相当性能はいいと思う。」
「ああ、ありがとな！隼！」
「礼はいいよ、いつも世話になってる俺からのプレゼントだ」

けど流石に二本はキツイ。
まだ体力は余ってるけど、もう一本となると無理だ。

「じゃあ名前つけようぜ！何が良いかなー。」
龍牙はハイテンションだ、まあ俺もまだ動けるけど。
「今日はありがとなー。じゃあまた、」
その瞬間、

『妖怪だぁー！！助けてくれー！！』
外から声が聞こえた。

「おい隼。聞こえたか？」
「もちろんだ、いくぞ!!」
俺たちは刀を持ち、いつもの格好で助けに向かった。

外へ出てから声の聞こえた方向へ向かって走ること3分、妖怪と思
わしき獣4匹が街を襲っていた。

「いくぞ、龍牙！」
「おうよ！俺は左の2匹を狙うぜ！」
「了解!!」

俺は黒刀を持ち、右にいる狼のような妖怪達に向かっていった。妖怪達はこちらに気付き、爪を立てて突進を仕掛けてきた。

「遅い!!」

俺はすかさず爪を黒刀で割り、そのまま妖怪の右腕を切り落とした。

「グガアアアアアー！」

妖怪が怯んだ隙に、背後に回って頭を切り落とした。

「次はお前だ。」

すかさずもう一方の妖怪に近づき、居合切りで頭を飛ばした。

「妖怪といっても大したことないな。」

龍牙も終わらせているだろう。

さつさと合流するとするか。

「隼ー。こっちは終わったぞー。」

「俺も終わらせてきた。全然大した事なかったな。」

「まあ知能が低い妖怪だったし、今の俺たちなら楽勝だ。」

成る程、知能が高い妖怪もいるのか。

それは警戒しないと。

「じゃあさつさと帰ろうぜ。もう眠い。」

「まあまあ。せっかく初陣を勝利で飾ったんだから、刀に名前つけようぜー！」

また名前つけんのかよ。もう嫌だわ。

俺は露骨に嫌な顔をした。

「まーまーそんな顔しなさんなって！今度も直感で決めてみろ！」

どーせ馬鹿にされるだろ、じゃあ、

「・・・極夜。」

「え☒」

「極夜！俺の刀の名前!!」

「・・・お前、何があった?」

「何もねえよ!うるせえな!」

「なんだよ、良い感じの名前付いたら何があったのかって疑われんのかよ。」

「なあ、俺のも付けてくれよ。」

「ああ?俺が付けて良いのかよ☒」

「もちろん!頼む!」

「ただでさえ苦手なのに、人のものとなるとなあ。」

「刀の色は赤だし、」

「火神、でどうだ?」

「龍牙は うーん、と首を捻った後、

「気に入った!今日はありがとなー!」

「気に入ってくれたのなら良かった。」

「俺のネーミングセンス、上がってきてんのかな。」

「また明日。」

「そう言っつて龍牙と別れ、俺は永琳の家へと戻っていった。」

移住計画

俺がこの世界に転世してから、およそ30年と時が過ぎた。誰一人として見た目は変わっていないのが不思議だが。まあ神がいるなら納得は出来る。

「それっ！」
「うぐツ、」

俺はいつも通り、道場で永琳や依姫の姉である豊姫に見守られながら、龍牙や依姫と共に稽古をしていた。

今日は調子が悪い、依姫と手合わせした結果が10戦2勝8敗だ。

「隼さん、今日は調子が悪いですね。何か悪いことでもあったんですか？」

「ああ、昨夜変な夢を見てな。悪夢じゃないんだけど、どうも気になっちゃって。」

「それで竹刀に力が入っていなかったんですね。」

「・・・駄目だ。今日は休ませてくれ。」

「分かりました。しっかりと休息をとってください。」

「ありがとう。」

俺は竹刀を倉庫に戻し、部屋へと戻った。

俺は部屋に戻って、道着から私服に着替えて布団に横になった。それにしても、一体何だったんだ？
寝ている時、ずっと黒い煙が周りを覆っているような感覚だった。

「考えていても仕方ないな、何か武器でも作ろう。」

俺は剣の他に、槍、斧、弓などの武器を具現化出来るようになっていた。

まあ剣が一番得意だけど。

それに30年間合わせて約109万km走ったおかげで、いくら武器を作っても疲れない身体になっていた。

「generate command spear!」

俺は極夜よりも大きな槍を作り出した。

「何となく槍を作ってみたけど、これが一番苦手なんだよな。投げるだけなら使えるけど。」

この30年間で、剣は依姫、弓は永琳に教えてもらい、斧は独学で使いこなせるようになった。

が、槍だけはどうも苦手で、投げる以外の戦い方が出来なかった。

「そりゃあー!」

俺は試しに槍で近くにあったペットボトルを突いてみた。

「・・・狙った所に当たってない。結構練習したんだけどなあ。」

槍は狙っていた中心を外れて、上の方を突き刺していた。

まだまだ練習しなきゃな、そう思っていた時だった。

「隼? ちょっといいかしら。」

「ん? 永琳? わかった今行くよ。」

俺は永琳に呼ばれて、布団から飛び起きた。

永琳はついてきなさいと言って、屋敷の一番奥の部屋へと俺を連れて行った。

「ここなら誰にも聞かれないわね。さて隼、重要な話があるの。」

永琳の表情はかなり暗く重かった。

「なんだ？その顔を見る限り、ただ事じゃないのは分かる。」

少しの沈黙の後、永琳は話し始めた。

「・・・ねえ隼。貴方はここの人達の見え目が変わらない事を疑問に思ったことはある？」

「そりやあもちろん、月夜見の力がそうしてるのかと思ってたけど違うのか？」

「半分正解よ。完璧な解答は月夜見がこの街全体にバリアを張って、穢れを浄化しているから。」

「・・・穢れて何だ？」

「簡単に言えば、生きる事と死ぬ事よ。だからこの街は昔から変わらない、何一つね。」

「へえー、で？それがどうしたんだ？」

「昔は月夜見の姉、天照と共に穢れを浄化していたのだけれど、ある日天照は失踪してしまったの。」

何で失踪したのかは大体見当がついた。おそらく天照は、生と死がない世の中をつまらないと思ったのだろう。

「そうして現在、月夜見一人でバリアを張っているけど、もう限界なのよ。おそらくあと1年も耐えられないわ。」

「やばいじゃん、どうすんだよ？」

「・・・月に移住するわ。月なら穢れは存在しないから。」

永琳から月への移住計画が伝えられてから7カ月が過ぎた。

既に街の人には公表されており、月へ向かうロケット4台は完成間近だ。

「出発はいつだ？永琳。」

「そうねえ。あと1カ月後ぐらいかしら。」

もうすぐか、少し寂しいな。俺が生きてきた中で一番生活した場所だし。

「その時が来たら、貴方は2番目のロケットに乗ってね。」

「了解。でもいいのか？戦闘員は全員4番目何だろ？」

「貴方や龍牙は、月で何かあった時に必要でしょ？」

確かに、宇宙人とかいるかもしれないしな。いや、俺たちがこれから宇宙人になるのか。

「まあまだ1カ月あるんだから、荷物の整理でもしておきなさい。」

「そうだな。」

「なあ隼？月ってどんな所だと思う？」

「唐突だな。どんな所って聞かれても、何もないんじゃないのか？」

月を見上げた時に見えるものは、兎の形をしたクレーターだけだ。

何かあるとは思えない。

「俺はそう思わないぜ。実はここよりも発展してて、地球から見えないのも、科学で見えなくしてるのかもしれないだろ？」

確かにそう考えることもできるな、多分何も無いんだろうけど、考えるのは自由だ。

「じゃあそれを確かめる為に、絶対に移住成功させなきゃな。」

「おうー向こうでも頼むぜ相棒ー！」

俺は少し笑って頷いた。

「月夜見がロケットで月に移住するって!!? ちょうどいい! 飛び立つ時を襲って人間を滅ぼしてやる。」
隼の運命は大きく変わる。

妖怪の大群

それからの1カ月間は、鍛錬を積んだり、永琳の実験に付き合ったりと、今まで通りに過ごした。

思い出作りなんてしたら、出発する時に涙が出てしまうだろうと思っただからだ。

そして、出発まであと2日。

「もうすぐ出発だな、永琳。」

「そうね、向こうでも沢山実験に付き合ってもらうから、覚悟なさい?」

「おお、こわい。やばい薬だけは勘弁な。」

まあ、1回も死にかけたことは無いけどな。そんな失敗、永琳がする訳ない。

「じゃあ明日の予定をもう一度言うけど、私や月夜見、依姫、豊姫は1番目のロケットに乗るわ。貴方や龍牙は2番目のロケットに乗ってね。」

「わかってる、；、それにしても4台じゃ街の人全員乗り切れなくて、もう2台作らなきゃとなった時は焦ったなあ。」

あれは12日前、ロケットの大きさが少し小さい事に気付いて、永琳が乗れる人数を計算したところ、街の人の3分の1が乗れないことが発覚したのだ。

出発延期も考えたが、急ピッチで作業を進めて無事、6台のロケットを完成させて見せた。

「延期でも良かったのに、月夜見は何を焦っていたのかしら。」

「聞いても答えてくれなかったしな。それは聞かないでくれの一点張りだ。」

おそらくよっぽどの理由があるのだろう。もしかしたら力がもう限界なのかもしれない。

「それじゃあ明日は絶対成功させるわよ！」

「おー。」

元気がないって？これが俺のハイテンションだ。

そして当日、永琳とは朝の挨拶で別れた。次面と向かって話すのは月でだな。今俺は龍牙と荷物を運び込む仕事を手伝っていた。

「これで最後だ。あー！疲れたー！」

「ほぼ衣服だけど、流石に街の人全員分となると凄まじい量だな。」

出発2時間前というところで、ロケットに荷物を積み終えた。約3時間ぐらいかかったな。

「隼！もう俺達の仕事は終わったし、向こうで休んでようぜ！」

「いいねえ。自動販売機でジュースでも買って待っていいようか。」

俺と龍牙は自動販売機でジュースを買い、近くのベンチに座った。

「このまま何事もなくて欲しいな！」

「大丈夫だろ。永琳がちゃんと計算してくれてるし、ミスは無い、と思おう。」

「何だよその間！信用しろって！」

確かにその通りだ。30年も一緒にいたんだ、絶対にミスは無い！

おそらく永琳や月夜見は、もう既にロケットに乗り込んでいるだろう。

「龍牙。そろそろ俺たちも、」

『大変です!!妖怪が、妖怪の大群が押し寄せて来ましたア!』

俺と龍牙は急いで街の高台に登った。そこから下を見ると、妖怪と思わしき大群が街に押し寄せていた。数はおそらく2千はいるだろう。

「龍牙、いぐぞ。」

「当たり前だア！全力で止める！」

俺達は猛スピードで階段を降りて、大群の方へ向かった。

もう既に街の兵が食い止めてくれているが、数が多すぎて全く対応出来ていない。ここは一気になぎ払う！

「generate command！」

俺は大量の剣を具現化して、一斉に飛ばした。鍛錬の成果もあって、ほぼ全ての剣が妖怪の脳天を射抜いていた。

「まだまだいぐぞ、generate command！」

俺は更に剣を追加し、飛ばした。その時、

「ゴグアア！」

「！、しまった！」

俺は遠くの敵を狙い過ぎて、気配を消して近づいてくる妖怪に気付かなかった。これは一発貫うな、

「隼！おるるあ！」

間一髪で龍牙がやってくれた。幾ら相手一人一人が強くなかったって油断は駄目だよな。

「サンキュー龍牙。」

「油断すんなよ！まだ全然終わってねえぞ！」

出発まで40分前、妖怪全ては片付いた。結構体力を使っちゃったけどな。

「よし！戻るぞ隼！みんな乗り込んで！」

「やばいな、早くしねえと。」

俺達は全速力で走って何とか間に合った。俺達が乗るのは2番目のロケットだ。もうドアを閉める頃だろう。

「おーい！俺達も乗るぞー！」

俺は閉まる前のドアに向かって叫んだ。お！気付いてくれたみたい。

「よし！乗り込むぞ龍牙、、龍牙？」

いつもハイテンションな龍牙がこんな時に青ざめていた。

「どうした？何処か具合でも悪いのか？」

「・・・隼。まずいかも。」

「何がだよ？もう妖怪は倒し切ったろ？さあ乗り込むぞー！」

俺は無理矢理でも龍牙を乗せようとする。

しかし、龍牙は抵抗した。

「隼、俺、もう少し待ってみるよ。」

「ッ！龍牙アア！」

思わず叫んでしまった。

お前は俺がこっちに来てから、1番最初に意気投合した相手なんだよ。

一緒に月に行って、また鍛錬しようぜ、

「隼、俺の能力は 状況を即座に把握する って能力だ。確実にこの後何かある。」

「龍牙、お前、」

「俺の夢は、この街の人全員を守ることだ。何かあるって分かってて動かない訳にはいかない！」

「……………」

「隼、お前は乗ってくれ！俺のくだらない夢に付き合わせる訳にはいかない！」

龍牙が感情を押し殺そうとしていることは直ぐに分かった。

こいつは顔に出やすいタイプだからな、

「早く行け！行けって」

「馬鹿かお前。」

龍牙はハッ、と顔を上げる。

「今にも泣きそうな親友にお前だけでも行け、って言われて　そうかわかった　何て言うわけねえだろうが！」

龍牙は驚いた表情で俺を見つめる。

「ほら行くぞ、6番のロケットに。」

「……ありがとう。」

「ん？なんか言ったか？」

「何でもねえ！」

俺達はダッシュで6番のロケットに向かって行った。

その瞬間、ドゴオオオオオンという爆発音が鳴り響いた。

俺と龍牙は足を止めて、

「龍牙、何匹いるか把握出来るか？」

「5万、いや10万はいる。誰かが止めないと5番以降のロケットが飛べない！」

その時、永琳らに乗せた1番のロケットが発射のカウントを始めて

いた。

「隼！何やってるの☒ 早く乗りなさい!!」

1番ロケットの窓から顔を出して、永琳がこちらに叫んでいた。

「覚悟決めなきやな、、、永琳ツ!!」

俺は銀色の弓を具現化して、それを永琳に向かって投げた。

永琳はその弓をキャッチしたのを見てから、

「次会った時、それを返してくれ!!約束だ!!」

その瞬間、ロケットが発射された。

永琳が何か言っていたけど、発射音で聞き取れなかった。

「次会った時、それも聞くとしよう。」

少し涙を流しながらそう心に決めた。俺は龍牙の方を見て、

「龍牙、頼むぜ!」

「生きようぜ!隼!」

俺達は更なる妖怪の大群へ向かった。発射して行くロケットの爆音を背に。

俺達は妖怪の進行を止めるべく、大群の前に立った。

「相手は10万、1人5万だ!行くぞ隼!」

俺は一度深呼吸をして、

「上等だ、どんな不可能だって可能にしてみせる。」

「generate command!!」

戦いが始まってから5分が過ぎた。

もう既に4台のロケットは発射し、残り2台も発射寸前だ。

俺は近くの敵は極夜で切り倒し、遠くの敵は能力を使って射抜いていった。

思った通り、こいつらはそんなに強く無い!

ただ数が集まって脅威に感じていたに過ぎない!

一気に、片付けてやるッ!

「generate、、何だ、この異常な空気は!」

その時、妖怪とは思えないほどのおぞましい空気を感じた。

雑魚敵とは訳が違う、何百倍も上だ!

「龍牙!!」

俺は危険を感じて龍牙の方を向くと、

胸の辺りから血を流した龍牙が吹っ飛ばされていくのが見えた、

見えてしまった。

「リュウガアアアアア!」

二人を繋ぐ二刀流

「リュウガアアアアア！」

俺は吹き飛ばされた龍牙の方へ走った。

「妖怪共、邪魔だア！」

前に出て邪魔してくる妖怪を殺し、倒れている龍牙に駆け寄った。

「龍牙！しっかりしろ！」

「隼、俺は、駄目だ。」

龍牙の声は掠れていて、今にも消えてしまいそうだ。

「なあ、俺の刀と腕輪、持って行ってくれ、」

そう言つて龍牙は、龍の腕輪と、火神を差し出す。

「そんな事言うなよ、一旦逃げるぞ！まだ間に合う！」

「隼、お前が、今ここで止めなきや、街の人が、飛べない。」

そうだった。

まだ6番のロケットは発射していない。

ここで逃げたら落とされる。

「大丈夫、お前ならやれる、一緒に、練習したろ？俺の夢、叶えてくれ。」

咲、風、、隼、

「・・・わかった、任せとけ。街の人は俺が守る！」

俺は龍の腕輪は黒赤のコートの上からはめ、火神の鞘を背中に担いだ。

「来やがれ妖怪、全員消し飛ばしてやる。」

その瞬間、5匹の妖怪が同時に襲いかかって来た。上等だ、今こそ練習した技を見せてやる。

「極夜・深淵！」

俺は腰に付けた鞘から思いっきり極夜を引き抜き、真空波を発生させて妖怪の頭を纏めて飛ばした。

しかし、息をつく暇も無く巨大な妖怪が襲って来る。それなら、龍牙！使えお前の技！

「火神・極炎！」

俺は妖怪の頭目掛けて刀を振るった。

「グガガガアア！」

妖怪は斬られたと同時に身体中が燃えて、一瞬にして灰になった。

「もういい!!お前らでは話にならん！役立たずめ。」

この声！先程凄まじい空気を放っていた奴の方から聞こえる。お

そらく親玉だろう。

丁度良い！

「おいコラア！妖怪の親玉、一騎討ちしようぜ。負けた方は勝った方の言うことを何でも聞くってルールでなあー！」

「フンッ！いいだろう。だがお前、そんなに叫ばなくても我はここに居るぞ？！」

ハッ、と向いた先には親玉と思わしき妖怪の姿があった。

姿は人間に近いが顔は獣のようで、高い鼻、長い耳、そして鋭い牙を持っていた。

「いつからそこにいやがった！」

「お前が話し始める前から居たぞ？この未熟者め。」

「ああ？じゃあ俺に負けるお前は更に未熟者だな！」

俺は極夜と火神を両手に持って、二本で同時に親玉目掛けて振った。

が、刀は謎のバリアによって弾かれた。

「戦い方は未熟だが、力も未熟か。その程度の威力じゃ我が障壁は破壊できない！死ぬのは貴様だけだ！」

俺はその妖怪の攻撃をまともに喰らった。

「ガアア！」

やばい、強すぎる。全く歯が立たないッ！

「そういえば名乗っていなかったな。私の名は 天逆毎 せいぜいあの世で覚えておけ！」

二発目が来た。死ぬのか俺、
あいつと一瞬に死ぬのなら、

『何諦めてやがる！隼！』

「アアア！まだ終わってねえぞオオオオ！」

俺は龍牙の声に反応して、目の前に盾を具現化した。

「何☒ お前の体力は限界の筈だ！」

限界だって？その通りだ、限界だよ。でもなあ、

「ここで負けたら、あの世であいつに合わせる顔がねえ！」

天逆毎は驚いた顔をして、

「・・・未熟者と言ったのは取り消そう。素晴らしい精神力だ、是非名前を聞かせてくれ。」

「咲風 隼!!」

「隼よ！化け物じみた精神力を持つ人間よ！我を超えて見せよ！」

「上等だ、天逆毎！俺は貴様を確実に超える!!」

両者の一撃がぶつかり合った。

戦いが始まって4分が過ぎた。

俺は何度も攻撃を当てるも、全くダメージには至らない。

逆に天逆毎の攻撃は、俺にとって全て致命傷だ。

「どうしたア！その程度じゃ障壁は破れんぞ！」

「うるせえ！今秘策練ってんだよ！黙っとけコラ！」

こんなこと言ってるが、秘策なんて無い。

しかし、極夜と火神の同時攻撃で通らないんじゃないじゃあ勝ち目が無い。

「お前のその武器じゃ力不足だ。散れい！」

天逆毎は、俺の身長の倍近くある弾丸を飛ばしてきた。これを喰らったら死ぬ！

「generate command！shield！」

俺は反射的に能力を使って塞いだ。しかし体力が足りない。

「もう限界のようだな、我にここまで歯向かった奴はそう居ない。せめてお前にもう少し力があれば勝てたかもな。」

体力は限界だ、俺がここで切り札を使ったらおそらく身体は耐えられない。

だけど、

「負けるのはもつと無いッ！」

「！ 何をする気だ！」

俺は少し笑みを浮かべた。見ていろ龍牙、俺の切り札、

「天逆毎！伝説の武器の力を、とくと思い知れッ！」

「generate command」

「・・・エクスカリバーアアアアアア！」

辺りは強い光に包まれた。

「今のは効いたぞ隼、まさか私の障壁を砕くとは。しかしお前の身体は耐えきれず、消し飛んだようだな。久しぶりにいい戦いが」

瞬間、黒と紅の閃光が走る。

「おるるるるるるあああああ！」

「何ッ☒ ガハアッ!!」

俺はエクスカリバーを具現化して振るった後、天逆毎の背後にまわ

り込み、極夜と火神の二刀流で奴の身体を切り裂いた。

「終わりだ、天逆毎。」

「まだ動くか、やはり凄まじい精神力だ。」

「・・・最後に聞かせてくれ。何故街を襲った。」

少しの沈黙のあと、天逆毎は答えた。

「私の仲間の妖怪を殺した月夜見達が許せなかった。それだけだ。」

ああ、こいつもこいつなりの正義で動いてるんだな。

敵ながら見事だ。

「いい勝負だった。礼を言おう、強き者よ。」

「ああ、お前の意思は伝わった。」

天逆毎は少し笑みを浮かべて、

「さらばだ、隼ッ！」

天逆毎は光に包まれて消えていった。

俺は龍牙のもとに駆け寄った。

もう意識は無い、助かる事は無い。

それでも俺は声をかけた。

「龍牙、やり遂げたぞ！街の人は全員無事だ！お前の夢、叶えたぞッ
！」

激しい戦いに必死で気付かなかったが、無事6台のロケットは発射されていた。

「俺が強くなれたのはお前が居てくれたからだ。本当にありがとう！」

そして、

「さよなら、安らかに眠ってくれ、龍牙。」

その時、空から何か降ってくるのが見えた。

「ん？何だあれ？」

よーく目を凝らして見てみると、先端が尖ったまるで核爆弾のような、、

「核爆弾ッ☒ まずい！」

俺は最後の力を振り絞って能力を使おうとする。

だが、足りない！

普通の盾じゃ守りきれない、せめて神話級の盾じゃないと！

その時、龍牙の手から光が溢れ、力が送られてくるのを感じた。

「龍牙ッ！最後の力を貸してくれエエ！」

俺の手に大量のエネルギーが伝わった。

ありがとう龍牙！これだけあればいける！

「generate command！アイギスの盾！！」

街は跡形もなく消えた。

俺達が鍛錬を積んだところも、永琳と一緒に服を買ったところも全て、

俺は元道場だった場所に龍牙を埋葬した。

「天国で見えてくれ、俺の生き様を。」

『おう！ちゃんと見てるぜ！』

今、龍牙の声が聞こえた気がした。

いや、聞こえたんだ。

涙は流さねえぞ、またいつか会えたらいいな。

俺は外していた龍の腕輪をコートの上からはめ、腰の両側に付けた鞆に、左には極夜を、右には火神をしまった。

「さて、これからどうすりゃいいんだ、俺。飯は野生の動物で何とかなるけど、」

『久しぶりだね、隼君。』

「この声、ヴァルか」

俺は思わず空に聞き返した。

『心が折れてなくて良かったよ。辛い事が沢山あったのに、成長した

ね?』

そりゃあ、30年もここで生きたんだ。いつまでもガキのままじゃないぜ?

『ごめんごめん。それで、これからどうするつもりだい?』

どうするつたつて、穢れが無くなったんだから寿命が出来たわけだし、俺の命もあと30年くらいだろ?

『確かに人間の寿命は80年くらいだけど、忘れてない? 君人間じゃないよ?』

.....あ。

『君の寿命は、君がなりたいたいと思つた種族になつてから決まる。今、そういうのあるかい?』

ないな、だつて人間と妖怪と神にしか会つてないんだから。

『つまり君は、次に文明が栄えるまで待たなきゃならない! さあもう一度聞くよ? これからどうするつもりだい? 隼君!』

.....更に強くなりたい。俺の周りの人、場所を全て守れるくらい強いなりたいッ!

『私の修行はハードだよ? ついて来れるかな?』

答えは簡単だ、

「ついていくさ! そして強くなるッ! 死んだ龍牙の為、永琳にまた会う為、そして未来で出会う人の為ッ!」

『よく言った! ならば行くよ! 鬼修行開始ッ!』

女神の鬼畜試練

『さあ！修行を始めるよ！君はついて来られるかな？』

ついていくさ。で？何から始めればいいんだ？

俺は心の中でヴァルに修行の内容を聞いた。

『修行といっても、私から君に教える事は多くないよ、それも難しい事は教えない。至ってシンプルなものさ。』

どうせ内容は鬼畜なんだろう？空から何も言わずに落としたりするような神様なんだから。

『察しがいいね。でも、そのぐらいしないと強くなれないよ？誰も守れずに死んでいくだけさ。』

・・・大丈夫、覚悟は出来てる。

『見事私の出す試練を乗り切って見せたら、君にいい技を教えてあげよう。』

・・・つまり生き残ったら教えてくれるって事だな？オーケー、意地でも生き残ってみせる。

『いい覚悟だ！それじゃあいくよ！』

女神の試練！開始っ！

「あの野郎ツ！いつか殴り飛ばしてやるツ！」

俺は街があつたところから、東に走り続けている。

「どうせ鬼畜だと思つたけど、永琳の何十倍も鬼畜じゃねえか！」

ヴァルの出した試練はこの3つだ。

- ・地球1周
- ・回復術を使うのはOK
- ・100日以内に達成

「頭おかしいだろ！それに回復術なんか使えるかよ！」

俺は文句を言いながら走り続ける。

『使えないなら使えるようになればいいんだよ？』

それと、君は何を食べても死ぬ事はないから。』

今までは優しい声だなどか思ってたけど、

前言撤回だ！死ぬほど腹立つ！

それに、何を食べても死なないって？言われる前から何でも食べる
気でいたっつーの！

あともう一つ！回復術の使い方ぐらい教えてくれよ！

この意地悪女神！！

「文句言っても仕方ないな、」

これが俺の選んだ道、最後まで進んでみせる。

『そうだー、がんばれー！』
テメエは後で覚えとけコラ！

女神の試練 が始まって20日が過ぎた。少しずつ疲労は溜まってきたが、体力はまだまだ有り余っている。

20日間を終えて思った事は、地球1周という試練は厳しいものだが、同時にかなり楽しいものでもあった。

30年を同じ場所で過ごした事もあって、初めて見る景色や初めて見る獣、その他全てが新鮮に見えた。

「ん？何だこの大量の水が落ちるような音。この岩山の奥からか、それなら。」

「極夜・奈落！」

俺は岩山を砕き割った。

岩山の先は、凄まじい大きさの滝が騒がしい音を立てていた。

「大量の水が落ちる音は、ここからの音だったのか。それにしても大きい、ナイアガラの滝とかの比じゃないだろうな。」

俺は滝に近づいて、滝壺の水を飲もうとした。ちょうど喉がカラカラだったからな。

水を飲んでみると、一瞬前が暗くなったあと、直ぐに体力が回復した。もしかしたらこれをヒントに、回復術を編み出せるかもな。

「・・・今どれくらい進んだんだ？4分の1くらいは進んでるといいな。」

俺は再び走り出した。

また時は進み、60日が過ぎた。

「回復術・治癒ノ湖！」

俺は20日ほど前に、オリジナルの回復術を編み出した。使える回数
数は1日4回程度だ。

名前はあの滝壺の水から取った、割と気に入っている。

「さて、おそらく道のりは半分を切っている事だし、気合入れ直して走るか！」

俺は再び走り出した、その瞬間、

「ギガググウウウー！」

「気持ち悪い叫び声の妖怪だな、ちょうどいい。俺の新技を見せてやるよ。」

俺は迫りくる妖怪に対して、極夜と火神を引き抜いて構えた。

この技に重要なのは、距離とタイミングだ。ここはジツと待つ！
……今だ!!

妖怪が俺の半径4mに近づいた瞬間に、刀を振るった。

「二刀流・灼熱地獄!!」

高速で斬りつけて跡形もなく妖怪を消した。

そして97日目、俺は龍牙の墓がある場所へと戻ってきた！身体は
ポロポロだが、女神の試練を乗り切ってみせた！

『お疲れ様。よく乗り切ったね！ひとまず服や傷を治してあげるよ。』
すると光に包まれて、俺の服や傷は治った。流石は女神と言ったところか。

「ヴアル、乗り切ったぜ、お前の鬼畜試練。」

『まさか本当に達成するとは思わなかったよ。いつか逃げ出すと思っていたからね。』

・・・ちなみに逃げ出してたらどうなったんだ？

『ご想像にお任せしますっ！』

逃げ出さなくて良かった。絶対なんかする気だった。

マジでこの女神、鬼畜すぎるだろ。

『さてさて、約束通り、君にいい技を教えてあげよう。』

ロクな技じゃ無かったらぶつ飛ばすぞ？

『なんでそんなに当たりが強いのか大丈夫、凄いいい技だよ。その名も 瞬間移動。1日1回しか使えない大技だから、使う時はよく考えるんだよ。』

・・・めちやくちや便利じゃん。でも1日1回か、せめて2回使えればな。

『1回でも十分だよ。それに、全てがメリットな技じゃないからね？ デメリットだって沢山ある。』

・・・そうだな。それで？どうやって使うんだ？まさかそれを使う修行もあったりしないよな？

『あるに決まってるだろう？、なーんちゃんで！』
うざい。

『そんなこと言わないでくれよ。』

言っつてねえよ。

『怒らないで怒らないで。大丈夫、今からその力を与えるから。』

その言葉を聞いたと同時に、俺の中に新たな力が入っていくのを感じた。

『これで使えるようになったよ、それじゃあまたいつか会おうね。次会った時、君がどれだけ成長しているか楽しみにしているよ。』

『改めて試練クリアおめでとう！』

「・・・ありがとう。」

この100日間で、俺の全てが成長した。

やり方はどうかと思うけど。とにかく感謝だ。

俺は大きな階段を一段登った気がした。

それから数億年の時が過ぎた。寝れる時間をコントロール出来る様になったから、殆ど寝てたけど。暇だったから仕方ないだろう？

数億年の間にさまざま生物が誕生し、絶滅していった。

個人的に恐竜を見れたのは感激だったな。

そして、俺が何千年か寝ている間に、いつの間にか文明が誕生していたみたいだ。数億年前にいた街には遠く及ばないけどな、いや当たり前か。

「それじゃあ、今の人々と出会ってみるとするか！」

俺は遠くにチラツと見えた小さな村に向けて歩き出した。新たな出会いに心躍らせながら。

第二章・日本神話戦争編 守矢の祭神

今現在、俺は木で作られた牢屋にぶち込まれていた。
「どうしてこうなった。」

時は遡り、あれは俺が小さな村に足を踏み入れた時だった。

「結構、いい村だな。」

俺は長い間、野生の獣しか食べていなかったの、久しぶりに人が作った料理を食べたいと思い、村の大通りを進んでいた。

「さて、まずはどこにいったらいいんだ？」

俺は周りを見渡した、その瞬間、

「止まれ！その不届き者ッ！」

一瞬にして、武装した兵に囲まれた。

正直、兵を全員蹴散らすのは簡単だが、厄介な事に巻き込まれるのは困る。ここは大人しく連行されるか。

そして現在、俺は木造の牢屋に入れられている。

「まず捕まった理由を考えよう。」

俺は自分の服装や持ち物を確認してみた。

黒赤のコートに二本の刀、食料として持っておいた獣の肉。

うん、捕まる要素しかないな！

さて、どうするか。この村との関係は終わった事だし、看守の目を盗んで逃げるか。

いや、瞬間移動があるじゃん。

看守が別の牢屋に行った瞬間に使おう。

……今だ、瞬間移動！

俺は龍牙の墓まで瞬間移動した。

俺は手にかかった手錠を引きちぎった。

「散々だったな。でも服は変えないと何処にも行けないか。お気に入りでだから変えたくないんだけど。」

流石に服とかは作れないよな、鎧とかならまだしも。

「バレないように移動して、服屋で購入するしかないか。でもあの村は無理だよなあ。」

そう考えている時、さつき行った村と反対方向にかなり大きめの町を見つけた。いや、町どころじゃない、もはや国だ。

今までどうして気づかなかったんだろう。

「よし！次はあの町だ、なるべく人に見つからないように移動しよう。」

俺は気配を消してその国に近づいたが、問題発生。関所がある、これは無理だろ。

「もしかしたら、快く受け入れてくれるかもしれないし、一か八か行ってみるか。」

結果は予想通り、警戒されて、国のトップまで呼ばれる始末だ。

「まったく！俺が何したってんだ！」

「諏訪子様に伝えろ！早く!!」

諏訪子様？この王様か、それにしても何を急いでる？

そして数分後、紫色の服に目のような装飾のついた帽子を被った少女が現れた。身長はおそらく145cmぐらいかもっと下か。

その少女が俺を見た途端に、表情を変えた。こつちに向かっている時は退屈そうな顔だったが、今では別人のように真剣な表情だ。

「あんたがこの国の王様か？」

「うん、私は 洩矢諏訪子。それにしても君、随分と強そうじゃないか。それに、面白い格好をしているね？話を聞くところ、この国に入りたいたらどう？どうだい？私とひと勝負して、君が勝ったらこの国に入ることを許そうじゃないか。」

「勝負か、面白い。俺は咲風 隼。いいぜ、打ち負かしてやろうじゃないか、洩矢諏訪子。」

「諏訪子でいいよ、隼。それじゃあ中心の広場でやろうか。簡単に負けてくれないですよ？」

上等だ、数億年単位の修行の成果を見せてやる。

俺と諏訪子は中心の広場のような場所に移動した。

周りには沢山のギャラリーが集まっている。

「これだけの広さがあれば、思う存分戦えるでしょ？」

確かに十分な広さだ、だけどギャラリーに何かあったら良くないな。

generate command shield!

俺は周りに大きな盾を展開した。

「おおー！凄い能力！後で教えてよ、それ！」

諏訪子は子供みたいにはしゃぐ。

「これは俺だけの技だからな、残念だけど。」

「・・・そっか。まあいいや！私は私の技で勝つ！」

「・・・じゃあ始めようぜ。」

俺は二本の刀を引き抜いた。

「いくよ！守矢の祭神の力、見せてやる！」

「修行の成果、ここで発揮するッ！」

逆転の一手

「ほらほら！避けてばっかりじゃ勝てないよ！」

諏訪子との勝負が始まって数分、俺は諏訪子による弾幕の嵐に防戦一方となっていた。

諏訪子の出す弾幕は、天逆毎が使っていたものよりも圧倒的に小さいが、数が尋常じゃないほど多い。

飛行速度、連射速度、密度、どれをとっても一級品だ。

「極夜・深淵！」

自分の方は飛んでくる弾幕を斬ったところで、また次の弾幕が押し寄せるだけだ。

「やるねえ。でも、それだけじゃ勝てないって言ったでしょ！ほらっ！」

諏訪子は手を休めずに青色の弾幕を放つ。

「このままじゃ駄目だ！能力で勝負する！」

俺は二本の刀を鞘にしまった。そして、前に手を出す。

「generate command

hundred sword！」

俺は鉄の剣を大量に具現化した。数には数で対抗だ！

「届けっ！」

俺は青色の弾幕に向かって、一斉に鉄剣を発射した。

頼む、相殺してくれ！

だがその希望は虚しく散る。

「まだまだ数が足りないよ！」

弾幕と剣は激しくぶつかり、跳ね返し合った。しかし数は向こうの方が断然上だ。これじゃあ届かない！

「残念っ！それじゃあここまでかな？」

考えろ、あの弾幕の攻略法を！

でもどうすりゃいい!?!?

剣をぶつけ合ったところで、数が向こうの方が多くんじや話にならない!

そもそも、剣と弾幕の威力は互角だ。

結局は両方跳ね返されるだけ、、、

・・・さてよ?跳ね返されるだけ?

「・・・これを逆転の一手にしてみせる。」

これだけ撃つてもまだ抵抗するなんて、人間じゃないのは分かっていたけど、それでも凄まじい体力ね。
だけど、

「残念っ!それじゃあここまでかな?」

私はトドメに弾幕を追加した。

隼は今にも倒れそうな状態だ。

これはもう避けられないでしょ!

「・・・まだまだア!」

隼は息を吹き返した様に、霧囲気が変わった。

さつきまでは敗北の霧囲気だったけど、今は少しの勝算にかける希望の霧囲気!

「何か作戦でもあるの?見せてよ、隼の秘策!」

「とくと見やがれ！俺の秘策！逆転の一手！」

generate command sword!

そう言うのと、隼は広場はぐるぐると回り始めた。

そんなの体力を消耗する無駄な行動じゃ、

時々、こつちに向かつて剣を投げているが、狙いが全く定まってい
ない。

一体何のつもり？

まさか私の視点を回して、目を回そう見たいな作戦!?!?

いや違う！そんな確信の無い作戦なら、あんな目はしない！

あの目は絶対に成功させるといふ自信の目！

「困惑してるな諏訪子！その迷いが命取りだぜ？」

私を困惑させるのが目的!?!?

でも、もし私が冷静に対処したら、それは失敗に終わる。

わからない、隼の考えが。

・・・も面白い。

「もういいーこれで終わりッ！」

私は今までに無いほどの密度で弾幕を展開した。

これで、隼にトドメを刺す!!

「待ってたぜ諏訪子！お前が今まで以上に弾幕を飛ばす瞬間をな!!」

generate command wide shield

!!

私が放った弾幕は、全て隼の作った巨大な盾にぶつかった。

しかし、弾幕は消えることなく跳ね返り、その跳ね返った先には地面に刺さった剣が。

まさか!!

弾幕は盾から剣に当たり再び跳ね返ると、私に向かって飛んできた。

「弾幕！間に合わない！」

私の、負け、

「お！目え覚ましたな、おはよう。」

目を開けると、雫が座り込んで私の顔を見ていた。

あれ、どのくらい気絶してたんだろう。

「にしても早かったな、数分で起きちまうなんて。」

「数分？それなら良かった。」

私はホツと息をついた。倒れているところを国の住民に見られたら、信仰が減ってしまうかもしれない。

「それにしても、よくあんな事を思いついたね？」

「跳ね返すやつ？あれは剣と弾幕がぶつかった時、消えずに跳ね返っていたから思いついたんだ。全くの偶然、奇跡の作戦ってやつ。」

「それでも凄いよ。途中、剣を投げてきたのは、私の注意を逸らすためでしょ？剣を地面に刺す為に。」

「ああ、そうだ。いやー、バレなくて良かったぜ。まあ、ぐるぐると回ったのが効いたかな。」

おそらく、回るのが無ければ私に迷いが生まれる事はなかった。真剣勝負の場に、不自然な行動をするという事に、深読みしすぎちゃっ

たみたい。

「とにかく、私の負け。国には自由に出入りしていいよ?」

「よっしゃあああ!」

そんな喜ぶ事かな?

多分、孤独だったんだらうな。

「ありがとう諏訪子!」

「うん! それともう一つ、頼みたい事があるんだ。」

きつと、隼が力になってくれれば、

「私の、修行に付き合ってくれないかな?」

きつと国を守る!

「・・・あれ?あの、返事が欲しいんだけど。」

「・・・また修行かよ。」

打倒・大和

「で？何で特訓なんてするんだよ。」

諏訪子との勝負が終わった後、俺は諏訪子が住んでいる、守矢神社に招待された。

今は、茶の間の様な場所で、諏訪子と話をしている。

「諏訪子は十分強いじゃねえか、それなのに何で特訓なんてする？理由を教えてくれ。」

諏訪子は数秒後、口を開いた。

「隼がここに来るちょうど2週間ぐらい前にね、大和の神から一通の手紙が届いたんだ。」

「・・・用件は？」

「この国を、大和の支配下に置くって。」

俺は刀を持って借り物の和服に着替えた。あの格好じゃ目立つからな。今は諏訪子と一緒に神社前の長い階段を降りている。

諏訪子の依頼は引き受ける事にした。あんな真剣な目で頼み込まれたら、断るにも断れないよ。

だからって今からかよ、少し休ませてくれたっていいじゃねえか。

「引き受けてくれてありがとう！内容は隼のおまかせでいいよ！さあ、どんどん行こう!!」

何でテンション高いんだよ、これから特訓だつてのに。

まあいいや。それなら、

「隼！もうやめようよ、もう無理だつて！」

俺が考えた特訓の内容は、階段を100往復だ。結局、シンプルなものしか思いつかなかつたよ。

いや、シンプルで鬼畜な特訓をさせてきた奴らが悪い！

もちろん俺も特訓する、諏訪子だけにやらせるのは流石に気が引ける。俺は鬼になりたく無いからな。こんなこと言ったら月から矢が飛んできそうだけど。

「頑張れ諏訪子！あと少しだ！」

「何で隼は、そんなに疲れてないのさ！自分に有利な内容にしてずらい！！」

・・・駄々を捏ねるな、神だろお前。

「もうちよいだから！終わったら何か美味しいもの作ってやるから！」

そう言うത്諏訪子の目つきが変わった。そーいや勝負の後何も食べないし、

「言ったね！おりゃー！」

諏訪子は速度を加速させて、一気に登っていった。さっきまでのペースの倍以上のスピードで登っていく。

「やりやあ出来んじゃん！よし、残り10往復！」

「うりゃー！」

「さて、何を作ったらいいんだ？」

無事俺のシンプル特訓を終えたあと、俺は守矢神社のキッチンに立って、料理の準備をしていた。

といっても、大した料理器具はないし、もちろん火を自分で起こす必要がある。

火を起こすのは面倒なので、俺は火神を引き抜き薪に火をつけた。便利だなこれ。

「さて、調味料はいい感じにあるし、うどんでもいいかな。具は一切無いけど。」

その時、茶の間の方で諏訪子の物じやない声が聞こえた。

「ただいま戻りました、諏訪子様!?! 何でそんなに疲れて、」

女性の声だな、女性って言うより女子か。

俺と同年代ぐらいかな、いや俺は億を軽く超えてるのか。

「あーうー、早紀ー、おかえりー。」

早紀って言うのか、この神社の巫女か何かかな？

そう考えながら、お湯を沸騰させる。

「何があったんです？とにかく、夕食の支度しますから、」

「あっ！待って早紀！」

「へ？台所に何かあるんですか？」

そうやって台所への扉を開けた早紀と俺の目が合った。てかちよつと待て！俺のこと言っていないだろ！

「あ、ど、どうも、」

気まずい、すげえ驚いてるし、

「だ、誰ですかああああ!!」

駄目だこりや。

「諏訪子様、そう言うことなら早く言ってくださいよ!心臓止まるかと思っただじやないですか!」

結局あの後、俺は早紀と一緒にうどんを作った。その場でなんとか誤解は解けたからな。

「ごめんって!疲れててそんな事考える余裕無かったの!」

「だったら!私が台所に向かう時に無理矢理止めてくれれば良かったじやないですか!」

諏訪子はうぐぐと声を上げる。

ここは止めないと厄介だな。

「すまない、俺が来てからバタバタしちゃって諏訪子も説明する余裕がなかったんだ。その、許してやってくれ。」

「・・・隼さんがそう言うなら許します。でも!これからは気をつけてくださいね!」

とりあえず一安心だ、こんな事で仲が悪くなったら洒落にならん。

俺と早紀は、初対面こそ最悪だったものの、話していくうちに悪い印象は無くなった。どうやら、結構気が合うみたいだ。

「そーういや諏訪子?手紙の返事の期限はいつなんだ?」

「・・・あと1週間後、もう時間がないの。そんな時、力になってくれそうな人がこの国に来たって聞いて、」

だから俺が関所で待っている時、あんなに急いでたのか。

「成る程ね、じゃあ明日から少しでも強くなれるように特訓しようぜ！大和の神を圧倒するくらい強く！」

「おー！」

何で早紀が返事するんだ？

諏訪子は顔死んでるし、

それから、丸い机を囲んでうどんを食べながら会話をし続けた。諏訪子や早紀の話、それから俺の話まで、説明するの難しかったけど。「それで、あ、もうすっかり夜だな。今日はありがとう、俺を国に入れてくれて。」

「……隼？この国で行くあてあるの？」

「……宿屋とかないの！？」

まずい、それは想定外だ、最悪野宿だな。

「いやあるにはあるけど、ここに泊まりなよ！早紀だって嫌じゃないでしょ？」

早紀は縦に首を振る。

いやいいのか！？」

「ね？決まり！じゃあこの部屋の隣を使ってね！」

「ちよつと待て！俺は得体の知れない部外者だぞ！本当にいいのかよ！？」

そう言うと、諏訪子と早紀は首を傾げた、

「隼さんがいい人だっというのは、会話の中で既に分かっています。遠慮しないでください。」

「そーそー。もともと行くあてもなかったんだから、」

決めつけんなよ、俺だって色々考えてるわ、でも、

「ありがとう、二人とも。よろしく、」

二人はニコツと笑った。

大和の刺客

翌朝、俺はいつもの服装に着替えた。変に思われなにかと思うが、諏訪子は大丈夫と言っていたから多分大丈夫だろう。

台所に行くと、既に早紀が朝食を作っていた。

「おはよう、朝早いんだな。」

「おはようございます、諏訪子様の教えですから。」

そいつはまだ寝てる気がするけど。

「何か出来ることあるか？」

「じゃあその野菜を切って貰えますか？」

「あいよ。」

俺は包丁を持って、野菜を切り刻んでいった。

料理中は、早紀と他愛の無い話で盛り上がった。同年では無いけど、見た目は同年だからな、結構気が合う。

「じゃあ隼さんっていくつなんですか？」

「数えてないけど、3億ぐらいじゃないかな。殆ど寝てたからあんまり実感ないけど。」

「てことは諏訪子様とどっちが年上なんでしょうか？」

「諏訪子の年齢がわからないからな。聞くのもありだけど何か失礼な気がする。」

神様の年齢っていまいちよくわからないんだよな。

「ふふっ、そんな事気にしているんですか？優しいんですね。」

「優しいかどうかは知らないけど、人はあんまり傷付けたくないからな。」

そう言うと早紀は笑って、味噌汁の味付けを始めた。

俺は皿を机に運んで、茶の間で待機する事にした。

「おはようー。みんな早いよー。まだ全然明るくないじゃないかー。」

その頃、諏訪子が部屋から起きてきた。

「もう日は登ってるぞ、早く顔洗ってこい。早紀が朝食作ってくれるから。」

はいいと言って諏訪子は洗面所に向かって行った。

「隼さーん、お味噌汁運ぶの手伝って貰えますかー!」

「今行くよー。」

俺は味噌汁を皿に盛り付け、茶の間の机に運んだ。

全て運び終わった直後、諏訪子が顔を洗って戻ってきた。まだ寝ぼけてるけど。

「ただいまー。お腹空いた早く食べよう!」

「じゃあ、いただきます。」

朝食を済ませた後、俺は部屋で特訓のメニューを考えていた。一体どんな事をすれば、直ぐに強くなれる?

俺がやってきたものは、効果はあったがその分リスクも高かった。諏訪子には戦争が控えている、体を壊すような事をやっても意味が無い。

「どうしようかなー。わかんねー。」

その瞬間、俺はとんでもない気配を感じた。邪悪なものではないが、圧倒的強者の気配だ。

俺は急いで支度をして、刀を持って外に出た。

そして、気配のする方向に向かって走っていった。

「やばいー!これはやばすぎるッ!」

国を出て、開けた場所に出ると、直ぐ気配の正体は分かった。

俺が見ている方向から、大量の兵が向かってきている。一人一人は大した事ないが、この人数は相手できない!

それに先頭で軍を率いているやつ、あいつがやばすぎる！確実に俺より強い！

期限は1週間じゃなかったのかよ、諏訪子の間違いか!?？ いや、自分の国がかかっている場面で、そんな間違いをする筈が無い！
てことは、完全に向こう側の判断か。

とにかく、止めないと国が潰れる！

俺は最大速度で軍を率いているやつの前に移動した。

「何だ貴様、見慣れない格好をしているが、」

「そりゃあこっちの台詞だ、1週間後じゃなかったのか？」

いざ目の前にすると、さつきより何十倍も強く感じる。どうにかしてやり過ぎさねえと。

「こっちの指揮者の判断だ、別に1週間待つ必要も無いからな。」

「それが大和のやり方ってやつ？随分と姑息だな、そんなに急がなきゃいけない理由でもある？もしかして、こっちの国が短期間で力をつけて、それに敗北するのが怖くなったのか？」

やり過ぎす為俺は敵を煽る。するとそいつは怒りをあらわにした。とりあえず成功だ。

「言ってくるな？ではこうしよう、俺と貴様がここで一騎討ちをして、貴様が勝ったら期限まで待つとしよう。」

負けたら、このまま攻めるって訳か。上等だ、

「いいぜ、さあやろうやー！」

俺は刀を引き抜いた。パワーが向こうの方が上なら、剣術で出し抜く！

「威勢がいいな、では本気で相手をしないと失礼だな。」

そう言つて、軍を一旦下げた。

そして、剣を取り出して、

「名を教えてください、俺は須佐男！」

「咲風 隼！いざ勝負ッ！」

「行くぞ隼！」

須佐男はまず剣を、俺の腕を狙って振ってきた。成る程、戦闘不能狙いか。でも、

「遅いぜ！極夜・奈落！」

俺は須佐男の剣を弾き飛ばした。そのまま、首を狙って振るう。

だが、これは避けられる。そう簡単にはいかないか。

「どうやら、少し甘く見ていた。ならば、一瞬でけりをつける！」

「来るならとことん来やがれ！」

俺は二本の刀を構えた。

「いくぞ隼ッ！」

天叢雲剣・八岐大蛇!!

その瞬間、須佐男のもう一つの剣から、大量の竜が現れて俺を襲った。

「ガアッ！」

俺は反応が遅れて避けることが出来ず、直撃した。

それを喰らった後は、麻痺したような感覚に襲われて動けなかった。

「この技は喰らった者の力を奪う。俺の勝ちだ！」

成る程、強すぎる。これはまともに戦ったら絶対に勝ち目はないな。

まともに戦ったらね。

「ではトドメを刺そう、なかなか楽しめたぞ。」

そう言っただけで俺の前に須佐男が立った瞬間。

バリバリバリッ！

俺が密かに仕掛けておいた電撃トラップが作動した。

トラップだって武器だぜ？

「なッ！貴様ア！」

「回復術・治癒ノ湖」

俺は麻痺を回復させた。

「須佐男、油断したな？とつととトドメを刺しておけば良かったのにな？」

須佐男は怒りを露わにする。

「さて、ここで俺がトドメを刺してもいいが、そんな気分じゃない。1週間後、正々堂々と決着をつけようぜ。」

「貴様が正々堂々だと？こんな事をする奴がか？」

確かにそれは正論だ、だがね、

「奇襲を仕掛けようとしたお前が何を言う。それともここでトドメを刺してやろうか？」

ぐぬぬと須佐男は唸る。

「・・・今は俺の負けだ。1週間後、覚えていろ！隼！」

「ああ、次は決着をつけようぜ。」

「相変わらず甘いんだよって龍牙に怒られるかな？いや、あいつもそうするよな。」

俺は帰り道、考え事をしながら国に戻った。

それにしても、大和はあんな奴が沢山居るんだろうな。厳しい戦争になりそうだ。

心を鬼に

須佐男と戦った後、俺は守矢神社に戻った。

身体はボロボロだけど服は何ともなかった。ヴァルが一度直してくれた時に、丈夫にしてくれたのだろう。

「あ、隼さん。おかえり、って何ですかその傷!?!」

「ただいま早紀。今すぐ茶の間に来てくれ、話がある。あと諏訪子も。」

早紀は諏訪子を茶の間に呼んだ。諏訪子には俺の顔や腕にできた傷に相当驚かれた。まあそりやそうか。

「じゃあ、話すよ。俺はほんの数十分前に、大和の軍の須佐男と勝負をした。理由は攻めてきた大和の軍を止めるためだ。」

「ちよつと待って!期限までは1週間あるじゃないか!」

「向こうの指揮者の判断だと。それでだ、俺は一度大和の国王と話をつけに行く。」

「なんでさ! 追い返してくれたんでしょ!?! なら後1週間猶予があるって事じゃないか!」

「・・・確かに猶予はある。だけど、こっちは戦えるのが数人なのに対し、向こうは何万といる。勝てるわけがないんだよ。」

諏訪子は顔を青ざめて、下を向いた。無理もないな、絶望的状况なんだから。

「・・・じゃあどうするのさ! 素直にこの国を渡せって言うの!」

「だから脅す、脅して俺の考えた戦争のルールを認めさせる。」

「・・・どうやって?」

俺はおそらく不気味であろう笑みを浮かべて、

「人質をとるんだよ！」

今日俺が考えたメニューは、ひたすら弾幕を撃ち続けるってメニューだ。

「行くよー！隼ー！」

「よし、来やがれ！」

諏訪子は青と緑が入り混じった弾幕を放つ。色が違うだけでなく、緑の方が早く、青の方が遅い。そして見づらい。

「ほらほらー！どんどん行くよー！」

諏訪子は更に弾幕を増やす。

俺は飛んできた弾の間を細かく躲す。前までは大きく動いていたが、ロスを少なくして躲せるように工夫した。今では最小限の動きで対処出来る。

「もうー！一発ぐらい当たってもいいじゃないかー！」

上から諏訪子が駄々を捏ねる。

「当たったら痛いんだよそれ！」

その後、3時間ほどそれを続けた。

「もう疲れたよ、お昼にしよう？」

「そうだな、一回部屋に戻ろうか。」

「わーい！」

俺と諏訪子が部屋に戻ると、茶の間で早紀が座っていた。

黒いオーラを発しながら。

「さ、早紀? どうしたの?」

「諏訪子様?」

「はいっ!」

早紀の声に諏訪子は思わず敬語になる。

「窓、壊しましたね?」

「・・・あ。」

「ちゃんと直してくださいッ!」

「すみませんでしたー!」

諏訪子、俺の方だけに向かって撃てつつあったのに。調子に乗って全方向にばら撒くから。

「ほら隼! 一緒にやるよ!」

「なんで俺も何だよ!!」

窓を修理して、昼飯を食べ終えた後、俺は大和に行く準備をした。

「ほんとに大丈夫? 隼?」

「任せとけ、俺には秘策がある。」

俺は刀を持って、いつもの服に着替え、国から出た。

成功すれば良いけど、失敗したら死ぬな。

覚悟決めよう。

俺は須佐男が向かってきた方向に走り続けた。大和が何処にある

のか分からないからな。

1時間後、諏訪の国の何十倍も大きな国を見つけた。

おそらく、あれが大和だろう。

「さあ、一矢報いてやる。」

隼との戦いの後、俺は大和に戻って結果を報告した。力では勝っていたが、俺は考え方が甘かった。だから簡単に罠にかかったのだ。

「負けたのかい？須佐男。」

「負けては無い。それより神奈子、諏訪を治める準備は出来ているのか？」

「まだ勝つと決まった訳じゃないだろう？それよりもどう戦を進めるか考えるべきだ。」

ふん、勝ち負けなど最初から決まっている。軍の人数が違うからな。

「それに、思わぬ伏兵がいるかもしれないじゃないか？お前を追い返した男のような。」

「負けてないって言ってるだろ！」

「お！いつもの口調に戻ったねえ。お前にはそっちの方が合ってるよ。」

ムカつくやつだ。

俺はそっぽを向いた。

「全く、少しは自分の為に動いたらいいのにねえ。」

「・・・自分の事は二の次だ。今まで迷惑をかけてきた分、俺は他の人の為に力を使う。」

神奈子はハア、とため息をついて、

「それをやめなよって言ってるのさ。わかんないやつだねえ。」

「貴様には関係、」

『報告しますッ！街で見慣れない黒い服を着た男が、街の人を人質にとっていますッ！』

「神奈子ッ！早く行くぞ！」

「勿論！早くしないとッ！」

街に出て、それが起きている方向に向かうと、黒い服を着た男が屋根の上に人質数人を連れて立っていた。

「お前は、隼ッ！」

隼はこっちに気付くと、

「やつと来たか、この国は伝達速度が随分と遅いな。」

「何のつもりだ貴様ッ！」

「安心しろ、人質を傷付ける気は無い。お前らが俺の提案を飲んでくれたらな。」

「提案だと？何だそれは！」

「何、簡単なことさ。俺の考えた戦の決まりをそっちにも守って貰うって話だ。」

「決まりだと、人質をとっている時点で認めざるを得ない状況にしているじゃないか！」

そう言うとき隼から少しの笑みが消え、

「期限まで待たず攻め込んでこようとした奴らが何言ってやがるッ！もし俺が気づかなかったら、あのまま制圧するつもりだったんだろう！」

さつきまでは落ち着いた声だったが、今はそんな印象は無い。

「まあ、大和が不利になるような事は要求しない。大和と諏訪を平等にするだけさ。」

「・・・飲まないと言ったら、」

隼は人質一人の首に刀を突きつけた。

「首を飛ばすだけだ。」

「・・・わかった、要求を飲もう。」

俺は要求を飲んで貰った後、内容を説明し瞬間移動で守矢神社に戻った。

「隼！どうだった？」

「成功だ、完璧。」

「ほんとに!?？」

諏訪子は手を挙げて喜んだ。早紀も手を叩いて喜んでいる。

「でも、どうやってあの要求を飲んで貰ったの？」

俺が考えた要求は、簡単に言えば戦争を大人数でやらず、国の代表だけで戦う、と言うものだ。

大和にとって、この要求は飲むメリットがない。

「まず人質をとる、そして街の人に注目されながら交渉する。それだけだ。この作戦なら、須佐男達が人質を見捨てれば大和の信用は地に落ちる。だから飲まないわけにはいかない。」

「でも、要求を無視する可能性もあるんじゃない。」

「もし無視をしたら、大和は卑怯な国だって言う印象がつく。そんな事、全国統一を目指す国が許すわけがない。」

その証人はいくらでもいる。

「隼、なんか怖いよ?」

「心を鬼にしないと勝てないぜ?」

諏訪子は微妙な顔をしているが、これも俺をこの国に入れてくれた恩返しだ。

「さあ！明日から更にキツくするぞ！頑張ろうぜ諏訪子！」

「・・・うん！頑張ろうー！」

「須佐男、要求を飲んだのですか？」

「みんなが見てたんだ、飲まないわけにはいかないだろ？天照。」

「・・・そうですか。でも、状況が平等になっただけ。結局は武力で制圧するだけです。」

いざ決戦の地へ

「いい？この順番で、」

俺と諏訪子は明日に迫った決戦の作戦会議をしていた。

作戦会議と言っても、難しいことを話し合った訳ではない。ただ戦う順番を決めたただけだ。

「ああ、諏訪子、俺、諏訪子の順番だな？でもいいのか？お前の方が1試合多くなるけど。」

「これは私の国を守る為の戦いだもん。信仰してくれる国の人たちの為に、絶対に勝って見せる！」

「俺も全力で戦うよ、俺にも戦う理由が出来た。」

「戦う理由って、敵との決着？」

「ああ、あいつは本気を出していなかった。いや、出せなかったんだ。その枷を外してやるって意味でもな。」

諏訪子は難しい顔をした。

「よく分からないよ、隼の考えてる事。」

「こればかりは戦ってみないと分からない。でも、戦えば絶対に分かる。」

「そういうものかー。」

諏訪子はぐでー、と寝っ転がる。

緊張感のないやつだな。

「隼さん、諏訪子をよろしくお願いします。どうかご無事で。」

「絶対帰ってくるよ。なんなら無傷でな。」

俺はにっ、と笑ってみせる。

早紀も安堵の表情を浮かべた。

「そう信じてますから、きっと貴方ならって。」

翌朝、俺はいつも通りのコートに着替えて、神社の鳥居の前に向かった。

「待たせたな、諏訪子。」

「時間ぴったりだよ、さあ行こう！」

「二人とも、どうかご無事で。」

俺たち3人は手を重ねて士気を高めた。

大丈夫、なんとかなるよ。

俺と諏訪子は、俺の指定した場所に歩いて向かった。

着いた時にはまだ誰も来ていない。

「ちよつと早すぎなんじゃないの？」

「早いに越した事はないだろう？大丈夫、すぐに来るさ。」

そしてその数分後、大和の軍が現れた。兵と思わしき人は沢山いたが、敵意は感じられない。

「来たか。」

そして俺たちと大和の代表と思われる2人が向かい合った。

「あんたが隼だね？全く思い切った事をしてくれたじゃないか。」

口を開いたのは、紫色の髪を持つ高身長的女性だった。高身長といっても女性の中だけけど。

「それだけの覚悟を持つてるって事だ。あんたらもそうだろう？」

「気に入った！あんだ、私と勝負しようよ！」

「光荣だけど、決着をつけたい奴がいるんだ。悪いな。」

「そうか残念。あ、名乗ってなかったね。私は八坂神奈子だ。」

「律儀だな、もしかしたらこのあと死んでるかもしれないねえのに。」

「死なないよ、私はそう感じる。」

そう言っつて神奈子は手を出してきたので、俺も応えて握手を交わした。

「じゃあルールだけど、3本勝負って事でいいんだよね？」

神奈子が聞いてくる。

「いいぜ、こっちは2人だからお前の方が有利だけど、このルールを承諾して貰った訳だし、そのぐらいのハンデは受け入れる。」

諏訪子の方を見ると、緊張して震えている。いや、もしかしたら武者震いかもな。

「よし！じゃあ早速始めよう！まずは大和から須佐男、そっちは隼だろう？」

「勿論、さあ始めよう。」

諏訪子と神奈子はその場から少し離れて、俺と須佐男は向かい合った。

「少し前の結局をつけさせてもらうぞ、隼。いや、黒神ツ！」

「おう！、待て、黒神ってなんだよ。」

「大和の兵がつけたあだ名だ。服が黒いのと、神に匹敵する力を持つから、黒神。」

何であだ名なんかつけられるんだよ、みんなに注目される場所をやったからか。

「では行くぞ黒神！」

「いやだから、もういいわ！」

俺は刀を構えた。

「前は最初、全く本気を出していなかったが、今度は最初から本気で行くぞ！」

天叢雲劍・八岐大蛇!!

最初からかよ！だけど、

「二度も喰らってたまるかっつーの！」

極夜・閻嵐!!

俺は極夜を縦横無尽に振り回して、風の壁を作り出した。

須佐男の剣から放たれた八岐大蛇の幻影は、その壁によって消し飛んだ。

「この技を防ぐだと!? 一体どんな修行をした！」

「特別な事はしてねえ。基礎を極めきただけだ！次はこっちから行くぞ！」

二刀流・灼熱地獄!!

須佐男はこの技を剣で受けるが、力が足りず吹き飛ばされた。

「クッ！」

「まだまだア！」

俺は追い討ちをかけるように、極夜による居合切りで真空波を飛ばした。

当たった感触はあった。

しかし、

「今のは驚いた。だがまだ足りない。」

須佐男は無傷だった。

まさかこの能力って！

「お前の剣では俺の障壁を破れないッ！」

戦いの覚悟

戦闘が始まってから数十分が経ったが、俺は八岐大蛇による傷が増えていく一方、須佐男は謎の障壁によって無傷でいた。

「どうした黒神！その程度じゃ傷一つ付けられず俺に負けるぞ！」

喋りかけんじやねえ、今対策を考えてんだよ！

「畜生がア！」

俺は八岐大蛇を止める為に必死で刀を振るう。

「そろそろ終わりにしよう、八岐大蛇！」

「generate command wide shield！」

俺はギリギリでそれを止める。

「ほう、止めたか。だがいくら防ごうと俺には勝てない。潔く負けを認めろッ！」

「・・・やだね。二度と負けないって決めたんだよ！」

generate command 天叢雲剣！

「何ッ!?？俺と同じ剣をッ！」

俺は須佐男と全く同じものを具現化した。

「目の前にあったから作りやすかったぜ？」

「貴様ア！」

須佐男は天叢雲剣から八岐大蛇を出したが、

俺はそれに合わせて同じく八岐大蛇を出して相殺してみせた。

「・・・なあ須佐男。お前は今、何をもってどんな感情で戦ってる？」

「・・・俺は昔、どうしようもない奴だった。いろんな人に迷惑をかけ

て。やった事といえ、村を襲った八岐大蛇に酒を盛って不意打ちで殺したぐらいだ。」

「それが何だよ。」

「八岐大蛇を討伐した後も、俺は嫌われ続けた。それを救ってくれたのは天照だ。天照は俺みたいな奴に居場所をくれた、俺の印象を変えてくれた。今、俺の戦う理由は恩返し！天照に少しでも恩を返す為！他の理由は無い！」

「・・・恩返し。ならこの勝負、俺が勝つ。」

「何だど？俺はお前のような奴に負ける訳にはいかないんだよ！こんなところで負ける訳にはいかないんだよ！」

天叢雲剣・八岐大蛇!!

須佐男は更に多くの蛇を放つ。

俺では到底出せないような。だがね、

「こんなところまで？じゃあお前はここで終わりだ。お前の敗因は、先を見過ぎた。」

generate command エクスカリバー

エクスカリバーによって大蛇は全て消え去り、そのまま須佐男の障壁にぶつめた。

「何度も言っているが、俺の障壁は破れない！絶対だ！」

「破れないのであれば、破らなきゃいいんだよ。」

エクスカリバーを空に投げて、須佐男にぶつかりながら、

generate command

shield & bomb!

具現化した盾で俺は身体を覆い、そのまま爆弾による爆発で須佐男もろとも吹き飛ばした。

「何のつもりだア！隼ア！」

「これで決める！エレキトラップ！」

吹っ飛んだ先に電撃トラップを具現化し、須佐男の身体をそれに押

し付けた。

「ぐああア！」

須佐男が痺れた瞬間、障壁が一瞬消え去った。

その隙を見逃さず、

「チエックメイト。」

g e n e r a t e c o m m a n d
a t o m i c b o m b

須佐男の障壁が消えたのは一瞬だった為、爆発は障壁の中に閉じ込められ、俺は爆発による傷を受けなかった。

「勝ったのか？あの爆発で死なない訳」

天羽々斬

「ツ！generate command！」

俺は背後からの剣撃に気づき、咄嗟に盾を具現化した。

しかし、俺の身体には至らなかつたものの、盾は簡単に破壊された。

「生きてたのかよ、化け物野郎。」

剣を振るってきたのは、左腕を失った須佐男だった。

片手で盾を破壊はやばすぎるな。

「・・・隼。」

「俺とお前の決定的な違いは、この勝負に懸けている覚悟だ。」

須佐男は俺の話の黙ってに聞く。

「俺はこの勝負に死ぬ覚悟で臨んでいる。だけどお前はお前の強力な障壁によって、死ぬ覚悟がなかった。命を賭けてなかった。」

長い静寂の後、須佐男は口を開いた。

「命か、反論は無い。最後の一太刀が塞がれた以上俺に勝ち目は無くなった。俺の」

『隼！国が、国が妖怪に襲われてる！』

その瞬間、俺の脳内に諏訪子の声が聞こえた。

特訓をしていた時に、戦に使えると思つて練習したものだ。

「諏訪子!?!? 須佐男、勝負はお預けだ。俺は国に」

「俺も行く。」

・・・え?!

「俺も行く、勝負はその妖怪を多く倒した方が勝ち。それでどうだ?」

嘘だろ?俺と須佐男が共闘?

いやだけど心強い!

「おう!それじゃあ行くぞ、捕まってる!」

「片手になつても弱くなつたと思うなよ?妖怪如き一瞬で蹴散らしてくれる!」

瞬間移動!!

必中の槍・グングニル

「須佐男！数は200ぐらいだ。一気に蹴りをつけるぞ！」

「・・・ちよつと待て。何故数が分かる？」

「・・・ん？何で数が分かるんだ？確かこれは龍牙が持っていたような能力じゃ、」

「まあいい！」

「何でもいいだろ！さあ、101体倒した方の勝ちだ。行くぞッ！」

「ちよっ！待ちやがれ！」

「待ってたら被害が出るだろ！あと、早い者勝ちだ！」

「火神・噴火！」

俺は火神から大きな炎を出して、妖怪を焼き払った。

それほど火力がある訳ではないが、雑魚妖怪ならこれで十分だ。

「これで大体30体、これで」

「天羽々斬

その瞬間、須佐男の剣撃によって、俺より多くの妖怪が散った。

「悪いが今のおそらく超えた。」

片手だけだつてのに、どんだけパワーあんだよ。

「なら、もう一度抜かすだけだ！」

「最後に勝つのは、この須佐男だッ！」

「二刀流・灼熱地獄！」

「天羽々斬！」

「これで100体！リーチだぜ？」

「悪いが俺も100体だ、残ってる妖怪も居ない。どうやら引き分けのようだな。」

引き分けか、結構いいペースだったと思うんだけどな。

「それにしても、お前の言った通り丁度200体だったな。何だその能力は？」

「・・・じゃあ話すから、お前の秘密も話すってのはどうだ？」

「いいだろう。」

「じゃあ話すけど、あの能力は俺の能力じゃない。俺の親友の能力だ。」

「お前の親友？じゃあ何でお前も使える。」

「・・・そいつは昔死んだ。ある戦いで出会った妖怪によってな。」

「ある妖怪？」

「多分、俺がこの能力を使える理由は、この龍の腕輪だ。最後に力を託してくれたのかもしれないな。」

二人の間に沈黙が流れる。

少しした後には俺は口を開いた。

「それじゃあ、俺の質問。その妖怪はある力を持っていた。まるで身体の周りに壁でも張っているような。そして、お前と同じような。」

「ッ！まさか！」

この反応、

「知ってるんだな、そのこと。」

「……おそらく天逆毎。俺の猛気によって生まれた妖怪だ。」

「そういうことか。」

「俺はあいつを生み出したのにも関わらず、討伐出来ずに逃してしまっていた。」

須佐男はゆっくりと話し始める。

「……お前が生きてるってことは、倒してくれたんだな。天逆毎を。」

「ああ。」

そういうと、須佐男は頭を俺に下げた。

「ありがとう、そしてすまなかったッ！」

「頭なんか下げんなよ。お前が送った訳じゃないんだろ？」

「そうだが、元は俺のせいだ。やっぱり俺は迷惑しかかけていない！俺なんて存在するべきじゃ」

言い終わる前に、俺は須佐男の顔面を殴り飛ばした。

「テメエ、お前を救ってくれた人の気持ちを考えやがれ。どんな気持ちでお前を救ったか考えろこの間抜けッ！」

須佐男は頬を押さえながらびっくりした顔で俺を見つめる。

「……俺とお前の勝負は引き分けた。さあ戻ろうぜ、多分被害も無いしな」

『隼っ！早紀が、早紀があ!!』

……諏訪子、早紀がどうしたって

『妖怪の、人質に、』

「ッ！待ってるオ！」

俺は猛スピードで守矢神社に向かった。

「隼。」

「諏訪子！何処だ、何処にいるッ！」

守矢神社の鳥居の前に着くと、青ざめた諏訪子が座り込んでいた。

「隼あ。早紀があ、妖怪にい。」

「泣くな！まだ何かあったらとは限らないだろ！早紀の居場所は！」

「ここから、西に向かった方って。」

「わかった、諏訪子はここで待ってる！もしかしたら早紀が帰ってくるかもしれないからな。」

「うん、、、気をつけてね。」

「任せとけ。」

俺は西に向かって走り出した。

西に向かつて走り続けた。何個か山も越えて、走り続けた。

だけど、一向に妖怪の姿が見え無い。一体何処にいやがる！

その時、空から巨大な岩が！

「ッ！ あっぶねえ！」

「ヨケタカ、イマノデコロスツモリダツタガ。」

・・・岩が喋りやがった！いや、岩というより山だ！

「お前か！早紀を連れ去ったやつは！」

するとその山の化け物はむくつと起き上がって、こちらを向いた。

「モシオレニオマエガマケタラ、コノオンナハコロス。」

「・・・何が目的だ。」

「オマエガアマノザコヲタオシタヤツ。チカラダメシダ、オレトオマエノ。」

そんな事の為に、早紀を連れ去りやがった。

「ぶち殺す、お前だけは跡形も無く。」

「ヤツテミロ！」

「やってやるよ。」

generate command エクスカリバー！

俺はエクスカリバーをそいつの身体に打ち込んだ。すると、その山の化け物は徐々に崩れていった。

「は！随分と弱つちいな！そのままくたばりやがれッ！」

化け物は崩れていく。まるで、土砂崩れのように。

「トドメを刺してやる！generate、何ッ!?!?」

俺がトドメを刺そうとした瞬間、その化け物は少しずつ再生していった。俺が唾然としている少しの間に、もう殆どが元に戻っている。

「ナカナカイイチカラダ。ダガ、オレノサイセイソクドニハオヨバナイ。」

「まじかよ。」

「ナノツテイナカッタナ、オレハ ダイダラボッチ！サイキョウノウヨウカイ！」

なんか馬鹿っぽいけど、力は確かだ。しかもダメージを与えても一瞬で再生されてしまう。

『隼さんっ！助けてっ！』

「早紀!?!? 何処にいる！」

「オット、サイミンガトケテシマッタ。」

「貴様アア!!」

「ソウダ、モットカンジョウテキニナレ。ソツチノハウガオマエノホンキガミレル。」

「黙れエエ!!」

俺はがむしやらに刀を振るう。ダメージは当たっているが、一瞬で再生され、俺の体力が減っていくばかりだ。

「ソナモノカ、モウヨウハナイ。キエロ。」

ダイダラボツチの拳が俺にぶつかる。

俺は吹っ飛ばされ、木にぶつかった。おそらく骨が折れてるだろう。

「ヤクソクドオリ、コノオンナハコロス。」

また守れなかった。誓ったのに、誰も死なせないって誓ったのにッ。

俺にもつと力が有れば、知恵があればッ。

「隼アアアア!」

その瞬間、またもや空から一人の男が。

「・・・須佐男?」

「何くたばろうとしてやがる! さっき俺に説教してた癖に!」

「説教は、関係、ないだろ。」

「ダレダオマエ! マアイイ、フタリマトメテシネ!」

天羽々斬

須佐男はダイダラボツチの腕を切り落とした。

「ナニ!?」

「立ち上がれ、隼。もう一度！」

「須佐男、ありがとう！」

俺はその場から跳ね起きた。

「オマエ、ダガオマエハボロボロ。トテモタタカエ」

回復術・治癒ノ海！

俺は 治癒ノ湖 の上位互換とも言える技を使った。1日2回までだが、傷は全部癒せる。

「頼むぜ、須佐男。」

「任せろ、黒神。」

「その呼び方やめろッ！」

「結構気に入ってる癖にッ！」

俺たち二人は同時にダイダラボッチに切り掛かった。

「コシヤクナ！フタリマトメテシマツシテヤル！」

ダイダラボッチは拳を振り下ろした。

「ここで、新技を試してやる！」

極夜・腐食！

俺はダイダラボッチの拳を横に避けて切り落とした。

「フン！イクラキツタトコロデサイセイスレバ、、シナイ!?？」

「腐食は切った部分を腐らせていく、お前の拳が元に戻るの、その効果が切れる時だ！」

「ナニイ!!」

「須佐男、時間を稼いでくれ！俺は早紀を助ける！」

「・・・おう！任せとけ！」

generate command グングニル！

俺は具現化した槍をダイダラボッチとは逆方向にぶん投げた。

「ドコネラツテル!!」

ダイダラボッチは激情し、もう片方の拳を振るった。

その瞬間、俺の前に須佐男が立ち塞がる。

拳は須佐男の障壁の前に止まる

「力不足だな、再生力だけに頼った妖怪。」

「グー！」

「もうちよつとだ、もうちよつと頼む！」

「任せろ、俺の障壁は破れない！」

ダイダラボッチは障壁目掛けて、殴り続ける。

「そのままじゃお前は死ぬだけだぞ！」

しかし、ダイダラボッチの顔が一瞬笑った。

「シヌノハオマエラダ！クラエ！」

その瞬間、ダイダラボッチは蹴りを繰り出した。もちろん俺を狙って。

「！ 隼ッ！」

「大丈夫、チェックメイトだ。」

蹴りがぶつかる前に、俺が逆方向に向かって投げた槍がダイダラボッチの背後から現れ、早紀が縛られている肩を撃ち抜いた。

「ナ、ナゼ！」

「必中の槍、グングニル。油断の隙をつかせて貰ったぜ。」

肩は崩れて、早紀が落ちてくる。

「早紀！」

俺は猛ダツシユで落下地点に入り、早紀の身体を受け止めた。

「早紀、大丈夫か？」

早紀から返事はない。どうやら気を失ってしまっている様だ。

「待ってる、直ぐに終わらせてくる。」

俺は動揺するダイダラボッチの前に立った。

「さて、人質が居なくなった今、遠慮する必要は無い！」

「さあ、決めるぞ須佐男！」

二刀流・黒龍烈火斬！
天叢雲劍・無限八岐大蛇！

「キサマラアアアア!!!」

ダイダラボッチの身体は跡形も無く消え去った。残ったものは何一つ無く、再生出来ぬほど粉々に消えた。

そして戦友に

「なあ隼、お前の言ってた事、わかった気がするよ。」

「・・・そうか。」

ダイダラボッチを倒し、早紀が目を覚ますまでの間、俺は須佐男と地面に座り込んで話をしていた。

「さっきの戦い、不謹慎かも知れねえけど、楽しかった。久しぶりの感覚だよ。」

俺は須佐男の話を黙って聞く。

「最後に技を決める時、多分今までで一番良い顔してたんじゃないかな。」

「・・・人が真剣にやってる時に楽しみやがって、」

「すまないな。」

「・・・でも、俺も楽しかったよ。勿論真剣だったけどな。」

俺と須佐男は笑い合った。さっきまでの二人が嘘の様に。

全く、俺の周りはいいい奴ばかりだ。

「ん。」

その時、早紀が、目を開いた。

「早紀!? 大丈夫か?」

「隼、さん、? 大丈夫です。怪我もないし、」

「よかった、本当によかった!」

幸い、早紀に怪我はなかった。

あのバカ妖怪だったら強く締め付けたりしそうだったけど、隼さん、助けてくれてありがとうございました。」

「いいよ、それより早く諏訪子に報告しに行こう!」

「はいっ!」

瞬間移動!!

「俺を置いてくくなアアアア！」

あの野郎ツ！絶対許さんツ！覚えとけツ！

俺と早紀は、瞬間移動で守矢神社に戻った。

「諏訪子様！ただいま戻りました！」

「早紀？、、早紀っ！」

早紀の叫び声が諏訪子に届いた様で、神社から吹っ飛んできた。

・・・俺に向かって、

「ガハア！」

「・・・あ、間違えちゃった。」

「ごめんって！わざとじゃないよ！」

いや、別に俺はいいけどさ。

「もし早紀にぶつかっただらどうするかだったんだよ。あれは生身の人間じゃ命が危ないぜ？」

「一応、諏訪子様の加護を受けてますから、大丈夫だったと思いますけど。」

「その諏訪子がぶつかって来るんだから、そんなの貫通しそうだろう。」

「・・・確かに。」

「だからごめんってー！」

「さてと、ともかくよかったよ。無事で帰ってこれて。」

「・・・無事でしたかね？」

俺は自分の身体を確認してみると、服にも身体にも傷は付いていない。やっぱり回復技は偉大だ。

俺は立ち上がって、くるりと一周して見せた。

「な？無事だろ？」

うーん、と早紀は顔を傾ける。

「一回私が見た時は、凄い傷だらけだったと思うんですけど。」

「気のせいだ。」

「いやでも、」

「気のせいだ！」

あんまり心配をかけさせたくないの、無理矢理押し切った。実際、傷だらけだったけどな。

「・・・もういいです、無事ならなんでもいいですから。納得してくれてよかったです。」

「さて、諏訪子。須佐男と今後について決めただけど、

俺は表情を変えた。

それと同時に諏訪子の表情も変わる。

「俺と須佐男の勝負は引き分けだ。だから、諏訪子と神奈子の勝負で勝った方が、この戦いの勝者になる。」

「・・・そっか。」

「試合は明日か明後日って決めただけど、諏訪子はどっちがいい？」

諏訪子は数秒間、頭を悩ませた後に、

「明日がいい。」

「そうか、じゃあ伝えてくるよ。」

「うん、お願い。」

瞬間移動!!

「諏訪子様？なんで明日にしたんですか？」

「もう終わりにしたいもん。それに、どっちが勝っても仲間になるのには変わらないでしょ？仲間が多ければ今日みたいな事もなくなると思うし。」

隼、ありがとう。後は私が決着をつけるよ！

大和と洩矢の決着

大和の国の風景を思い浮かべながら、俺は瞬間移動をした。

「よし到着、うわっ！」

その瞬間、前から石が飛んできた。

俺は咄嗟に手を前に出して、石がぶつかるのを防いだ。

「あつぶねー。なんで石なんか、」

前を見てみると、石を沢山持った子供たちがこちらを睨んでいる。

「待て！俺何もやって、」

「兄ちゃん！後ろ!!」

その言葉に反応して振り向くと、男4人が刃物で俺に襲いかかってきていた。

「そういうことか、極夜・奈落！」

男達が俺に攻撃する前に極夜を地面に叩き込み、地響きで男達を転ばせた。

generate command knife

すかさず4本のナイフを具現化して、転んでいる男達の顔の横に投げて突き刺した。

「ひいっ！」

「みんな今だア！足投げつけろオ！」

子供たちに呼びかけると、一瞬戸惑った顔をしたが、直ぐに持っていた石を投げつけ始めた。

数分後、男達は石が直撃した様で気を失っていた。今は、後から来た国の人に綱で縛られている。

まあ、自業自得だな！

「さてと、いきなり前に出て悪かったな。大丈夫だったか？」

「うん！ありがとう兄ちゃん！」

「感謝される様な事はしてないよ、お前らがトドメを刺したんだから。ただ悪人以外には絶対やるなよ？」

子供たちは大きく頷く。

「よし！それじゃあな！」

「ばいばい！」

随分と良くできた子供たちだこと。

「……。」

「なー須佐男ー。悪かったってー。」

「思っていないだろ！」

俺は今、須佐男を置いていったこと謝っている最中だ。
てか神奈子！横で見えてんだったら手助けしてくれよ！

「・・・もういい、それより何の用だ。」

「えつと、神奈子に話があるんだけど、」

「ん、私かい？」

神奈子は完全に油断していたようだ。信用されてる証拠だし、なんか嬉しいな。

「うちの諏訪子が決着の日を明日にしたいと言ったんだけど、神奈子はそれでいいかな？」

「・・・そうか、まだ決着がついていなかったね。よし、いいよ！」

「じゃあ明日、正午に今日と同じ場所で。」

「あいよー。」

瞬間移動！

「須佐男、どうした？そんな迷った顔して。」

「・・・明日。天照を連れて行きたい。」

「えっ？なんでさ。」

「まだ隼と会ってないからな。明日が最後になるかもしれないし。」

「・・・あんたの好きにしたらいいさ。」

翌日の正午、俺は諏訪子と共に昨日と同じ場所に来ていた。今回は向こうの方が早かった。

須佐男達と目を合わせると、凄い目でこっちを見てくる。

「なんだよ、遅刻はしてねえぞ。」

「分かってるよ。」

分かかってんならそんな目で見るんじゃない。

「じゃあ諏訪子！始めようか！」

「負けないよ！神奈子！」

お互いの弾幕がぶつかり合った。

「隼、合わせたい人がいるんだ。」

「分かってるよ、そこにいるんだろ？天照。」

そう尋ねると、光に包まれた後に月夜見によく似た女性が現れた。

「貴方が咲風隼ですね？須佐男から色々聞いています。」

「こちらこそ、須佐男から色々聞いてるよ。」

「・・・隼、ありがとう。」

「うおっ！急になんだよ！」

天照はいきなり俺に頭を下げてきた。

「須佐男にいろんなことを教えてくれた事への感謝です。私じゃ出来ませんでしたから。」

「大した事は教えてないし、俺だって須佐男に助けられた、お互い様だよ。」

すると天照は笑みをこぼして、

「ふふっ。謙虚なのはいい事ですけど、偶には貪欲にいった方がいいですよ?」

「ここは謙虚にいく場面だろ?それとも、そうだ!俺に感謝しろ!なんて言った方が良かったか?」

俺は冗談を交えて答える。

「そこまでしなくとも、感謝していますから。」

いや、そういうことじゃ、

「とにかくありがとう、隼。」

「あ、えと、うん。じゃあそういう事にしておくよ。」

なんだ、この人天然なのか?

「それともう一つ。」

「え?まだあんのか?」

「月夜見が貴方に会いたがっていましたよ?お礼がしたいって。」

・・・え?

「月夜見?何でお前が、」

「姉妹ですから、それじゃあ。」

そう言っつて、再び光の中に消えていった。

「ちよつと待て!」

呼び止めた時には、もう天照の姿は無く、包まれた光すら消えていた。

「月夜見と会ったことあるのか?隼。」

「ああ、遠い昔だけだな。」

「そうか。」

無事に月へ移住出来たんだな。

俺は龍の腕輪を見つめた。

「龍牙、守り切れたな。」

諏訪子と神奈子は激闘を繰り広げた。

両者一步も譲らぬ弾幕勝負の末、最後に立っていたのは、

神奈子だった。

「諏訪子、いい勝負だったよ。ありがとうね。」

「負けちゃったかー。悔しいけど、ちよつと楽しかったよ。こちらこそありがとう。」

2人は握手をして、互いを讃え合った。

「いい話だな、須佐男。」

「何だその保護者みてえな言葉。」

現在、俺と諏訪子と神奈子は守矢神社の机を囲んで、話し合いをしている。

まだ、早紀は神奈子と親交を深めていないので、ここは席を外してもらった。

「さて、困った事になったね。」

「どうしよう、隼ー。」

いやお前らが決めろよ。

戦いに勝利した大和は、守矢神社に神奈子を送って支配をする事になったのだが、ミシヤクジ様を恐れている国民達が神奈子を受け入れる事が出来ずに猛反対。

そして、今に至る。

「私は国を明け渡すつもりだけど、国民が信仰しなかったら意味ないし。」

「隼、何かいい案でもないか?」

何で俺任せなんだよ、いい案って言われても。

「・・・2人で支配すりゃいいんじゃないやね?」

すると、2人同時に え? という顔でこっちを見てくる。
わかりやすいリアクションだな。

「2人っただってどうやって?」

「表向きは神奈子、でも裏では諏訪子を取り仕切る。」

「成る程！名案だな！」

神奈子は意見に賛成のようだ。

「でも、2人で何て聞いたことないよ？」

諏訪子は心配があるみたいだけど、

「聞いたことない様な事をやっちゃいけないなんて誰が決めた？何事も挑戦してみないと始まらないさ。」

「・・・うん、そうだね！」

「よし！諏訪子、やってみようよ！」

神奈子はバンツ！と立ち上がって、諏訪子にグーを出した。

「おーーー！」

諏訪子はジャンプして、神奈子の拳に拳を合わせた。

こうして、大和と洩矢の戦いは終わりを迎え、同時に新たな洩矢の王国が始まった。

新生活

神奈子が守矢神社に来た翌日、俺はいつもより早く目を覚ました。理由は簡単、いつもの朝と違って話し声が聞こえたからだ。

「神奈子様！火が強いですって！」

「あわわわわ、」

話し声を聞きながら、俺も台所へ向かう。神奈子が早紀の手伝いをしてるけど、あんまり上手くないかなくて感じか。

「おはよう。早紀が早いのは知ってるけど、神奈子も早いんだな？」

「あれ？てつきりあんたが1番遅いと思ってたんだけどねえ。」

「失礼だな、規則正しい生活は送ってるぜ？」

「そうなのか、意外だねえ。」

こっちの方がもっと意外だったの。

そのあとは、3人で朝食の準備をした。神奈子は最初こそぎこちない動きをしていたが、色々やるにつれてどんどん手際が良くなっていた。

「よし、じゃあこれ机に運ぶぞー。だれか諏訪子を起こしに行ってくれ。」

「じゃあ私が行ってきます。」

「頼んだ早紀。」

そう言っって早紀は諏訪子がいる部屋に走っていく。

「じゃあ神奈子は机に運んでくれ。」

「あんたはやらないのかい!?!？」

「やるわ！お前俺のことどんな奴だと思ってんだよ！」

「人質を取ったりする冷たい奴。」

「いや、あれはすまんかった。」

痛いところ突きやがって、やりたくてやったわけじゃないのに。

「まあ、誰も傷つけてないし、もう気にしてないさ。ちよつとからかうつもりで言っただけだよ。」

「じゃあ言うな。ほら！ 諏訪子がこつち来る前に運ぶぞ！」

4人で朝食を済ませて後片付けをした後、俺は早紀と一緒に山に来ていた。

「晴れてますねえ。」

「どうした急に？」

山に来た目的は、山菜なんかを採る為だ。あと気晴らしに。

「雨って誰が降らせているんでしょ？ やつぱり神様が？」

これはどう答えるべきだ？ 科学的に答えるのは意味分かんないだろうし。

「・・・どうだろうな。」

結局、言葉を濁して答えた。

「もし、雨を操る方がいるなら、今日の天気には感謝しないですね。」
「・・・そうだな。」

他愛も無い会話をしながら、山を登っていく。

この山は何度も来たことがあるから、もう慣れた道だ。既に人が歩いた跡もあるから、絶対に迷うこともないし、獣が出たりするわけでもない。比較的安全な山だ。

「この辺は沢山ありますね！早速採取しましょう！」

「ああ、でも余分には採るなよ？あくまで最低限だ。」

「分かってます！」

そう言って早紀は山菜を籠に入れていく。

なんか早紀の目が凄え輝いてる。早紀ってこういうの好きなんかな？

「ほら！隼さんも手伝ってください！」

「お、おう。」

すっげえ勢い。

「これだけ採れば十分ですかねえ。」

始めてから数時間後、籠には8割ほどの山菜が溜まった。

「そうだな、それじゃあ帰るか。」

「はい！じゃあ籠持ってください！」

「何で俺がツ!?!？」

「力仕事は隼さんの出番でしょう！」

「大して重くないだろ！」

「お願いしますよー。」

俺は呆れながらも、籠を持ってやる。

やっぱり大して重くないじゃねえか！

「ありがとうございます。さあ行きましょう！」

「はいはい。」

言葉より行動

「少し休憩でもしませんか？」

「じゃあその木の影で休もうか。」

山を降りている途中、早紀が休憩したいと言ったので、大きな木の影で少し休憩を取ることにした。

「・・・今日は楽しかったです。」

少し暗い表情で早紀が口を開く。

「ああ、また来ような。」

そう答えると、早紀の顔が一段と暗くなる。

こんな早紀の顔は見たことがない。

「なあ、早紀。俺に何か隠してることないか？」

「っ！」

その瞬間、早紀は悲しそうな顔をして俺の方へ振り向く。

「話してくれないかな？俺たち、他人じゃないぜ？」

「・・・隼さん。」

正直、聞きたくない。

早紀に話して欲しくない。

だけど、聞かなきゃならない気がした。

「・・・私がまだ幼い頃の話です。」

早紀は落ち着いて話し始める。

「幼い頃と言っても、物心はついていきます。その頃私は、いつか諏訪子様に仕える者としての教育を受けていました。」

「・・・なあ、お前と諏訪子ってどんな関係なんだ？」

話の途中だったが、ずっと気になっていた為聞いてしまった。

「そういえば言っていないませんでしたね。諏訪子様は私の御先祖様です。」

「じゃあ早紀は子孫ってことか。」

「そういうことです。」

どうりでなんとなく雰囲気似てた訳だ。

「そして6歳の頃、それは起きました。」

早紀の言葉が一層暗くなる。

「私は、人殺しをしました。」

「ッ！」

予想の遥か上をゆく内容で、思わず声を出して驚いてしまった。

「原因は私には分かりません。諏訪子様には私の能力が起こしたという事だけ教えてもらいました。」

「……。」

「その能力は諏訪子様が封印して下さったので、もう私が人に危害を加える事はありません。」

早紀は淡々と話し続ける。

「……でも、その能力は私が生きる為に必要な生命力の8割を占めていたんです。」

「8割!? それじゃあ、」

「私は二十歳になる前に死にます。それがいつかは分かりません。二十歳になった瞬間かもしれないし、もしかしたら明日かもしれないん。」

声が出なかった。

事実を受け止められなかった。

「……でも、生きる方法はあるんです。」

「ッ！それを教えてくれ！」

俺だったらそれを出来るかもしれない！

しかし、

「能力の封印を解く、これ以外の方法はありません。」

その答えによって砕かれてしまった。

早紀は今にも泣き出しそうな顔をしている。

「……昔は受け入れようと思ってたんです。それが私の運命だって。」

数秒間の静寂のあとに、早紀は口を開いた。

「でも、隼さんが来て、神奈子様が来て、もつと生きたいと思うようになりました。」

「……早紀。」

「生きたいですッ！もつともつと皆さんと一緒にいたいッ！」

早紀は叫ぶ。こんな姿、見たことがない。

「隼さんッ！私、どうしたらいいですか！」

俺は数秒、迷いに迷った。どんな言葉をかけてやればいいかを、

直ぐに答えは出た。

「早紀！行こう！」

俺は早紀の手を掴んで走り出した。

言葉より先に、行動で示してきただろ！

どんな時でも！

「隼さん、此処は？」

俺は早紀を連れて、龍牙の墓にやってきた。

「遠い昔に死んだ、俺の親友の墓だ。」

「・・・此処が、なんだって言うんですか？」

「こいつは、まだまだ生きることが出来たんだ。でも、最後まで信念を曲げなかった。守りたい人の為に戦って死んだんだ。」

「信念、ですか。」

「俺はこいつを尊敬してる、親友だけどな。」

少し笑いかけながら早紀に言うと、早紀の顔に少しだけ笑顔が戻る。

「なあ早紀、俺はお前が能力の封印を解きたいと言っても、反対をする気はない。誰だって長く生きていたいさ、当然だ。」

「・・・隼さん。」

「もし、お前の能力が暴走し、人に危害を加えようとしたならば、俺や諏訪子や神奈子が命をかけて止める。まあ、そんなに強力な能力なら、全員が命を落とす可能性もあるけどな。」

「・・・いやです、絶対にそんなのいやです！」

早紀は俺に向かって叫ぶ。

「分かってるよ。あくまで能力が暴走した場合、だけどな。」
俺は優しく早紀に言葉をかける。

「それともう一つ、早紀は人殺しをしてしまったって言ったな？」
「・・・はい、取り返しのつかないことを、私は、」

「早紀!」

震え出してしまった早紀を、しっかりと呼び戻す。

「は、はいっ!」

よしよし、ちゃんと保てたな。

「こんな場だからこそ言うぜ?」

「俺も人殺しだ。」

あれは、俺が小学一年生の時の出来事。

一生思い出したくなかった

悪夢の記憶。

悪夢の記憶

「隼、車で待っててね？」

あの日は、母さんと買い物に出かけていた日だった。

俺は買い物に付き合ったりするのが面倒だった為、いつも車の中で待っていた。

「早くしてよ？母さん、買い物長いんだから。」

「分かってるわよ。」

そうして、母さんがスーパーに入っただけで数分後、事件は起こった。

「暴れんな！このガキイ！」

俺は突然やってきた男3人に誘拐された。

車には鍵がかかっておらず、当時の俺では到底太刀打ちできない。

俺はその男たちの車に乗せられ、睡眠薬を飲まされた。

当時は何がなんだか分からなかったが、今考えれば身代金目的で誘拐したのだろう。

そのあとは、睡眠薬を飲まされていたから覚えてない。

なんとなく、車の走る音だけは聞こえていた。

「とつとつと金を用意しろお！」

俺は男の怒号で目を覚ました。

手足はロープで縛られていて、身体はズキズキと痛んだ。

その時は、目を覚ましたことをバレちゃまずいと感じて、咄嗟に寝ているフリをした。

「お前んとこのガキを返して欲しかったら、明日までに1000万持ってこい！さもないと命は無いぞ！」

男の視線はこつちを向いていない事を、こつそりと目を開いて確認していた。勿論、当時そんな事は考えていなかったけど。

そして、ゆつくりと移動を始めた。

その時は確か窓に向かって進んでいた気がする。

しかし、

「おいガキイ！何勝手に動いてんだ！」

それがバレてしまい、男はこつちに向かってきた。

「く、来るなあー！」

その瞬間、俺は身体を捻って必死に抵抗した。

偶然にも、それが男の足に当たり足払いをかけた形になった。

「うっ！このガキイ！」

男は激情し、持っていたピストルを発砲した。

パアアアン！！

爆音と共に銃弾が発射されたが、偶然俺の足を縛っていたロープに当たり、それは解けた。

「おりやあああー！」

足が自由になった瞬間、立ち上がって男に体当たりをした。

全体重をかけた体当たりだった為、いくら小学生の攻撃といえど、大した鍛えても無い身体で立ってられるわけがない。

「くっ！」

男はその衝撃でピストルを離した。

そのピストルは、地面を転がって俺の前で止まった。

俺はそれを拾い上げて、

「それを渡せエー！」

「くっ！来るなあアア！」

パアアアアン！！

そのあとのことはよく覚えてない。

確か、その部屋にあったハサミでロープを切って、窓から脱出して、警察に保護されたって流れだった気がする。

その数日後、犯人の1人が死んだことがわかった。

あの時発砲した弾は、男の脳天を打ち抜いた。

即死だったようだ。

勿論、学校でその話は出ていないが、それを知ったいろんな人が周りに話して、結局クラスの全員に知れ渡った。

「もう学校に来んな！」

「この人殺し！」

クラスのガキ大将みたいなのやつは、俺のことを責めた。みんなそいつのことが怖かったのか、クラスの大半は、それで俺を責めた。

味方をしてくれる人もいたけど、ごく僅か。

幼なじみだったり、普段から仲良くしてた友達だったり。

「僕は味方だから。」

こんなふうになっているやつもいたけど、殆どは肝心な時に多数の味方をする。

そのいじめは、1年から3年の時まで続いた。

何度も死にたくなかったが、励ましてくれる人たちも少なからずいた為、その人たちの気持ちを裏切りたく無いという気持ちから踏みとどまった。

しかし、4年生の時。

母さんが亡くなった。

交通事故だった。

「母さんっ！何でだよ！」

俺は泣き続けた。葬式も、家に帰った時も、寝る時も。

でもいくら泣いても、母さんは戻ってこない。

その後の3日は、学校を休んだ。

4日後、学校に登校するとガキ大将が教卓から俺に話しかけてきた。

そして、そいつはこう言いやがった。

「母親が死んだんだってな！ざまあ見ろ！」

その瞬間、怒りが大爆発した。

その日の後は、よくカウンセリングを受けた。
まあ正直、何も変わらなかったけど。

あの日は、あの言葉を言われた瞬間にブチ切れ、そいつに飛び蹴りをかまし、何も考えずに顔をボコボコに殴った。

直ぐに先生が駆けつけて、俺をそいつから引き離した。

そいつは先生に対してはいい子を装っていた為、怒られるのは俺だけだった。

その日からは、仲のいいやつとだけ関わって過ごした。

ガキ大将は全く突っかかって来なくなり、結果的には良かったんだと思う。

中学は、全く同じ小学校の子がいない場所に進学し、友達も増えて、平穏な日々を送れるようになった。

とまあこれが俺の昔話だ。

それと、この出来事から、銃が大嫌いになった。

だから能力で銃を使わない。

理由は怖いから、それだけ。

「え!?? 本当ですか!??」

そして今、俺は早紀に人殺しであることを打ち明けている。

「本当だよ、まあ話はできねえけど。」

「嘘、」

「そんなに信じられないか？俺は沢山殺しをしてきたぞ、生きるために。」

早紀は思わず口を押さえている。無理もないだろうけど。

「早紀、間違いは誰だってある。早紀にも、諏訪子にも、勿論俺にも。だけど、それを引きずってても何も変わらないぜ？」

「それは、」

「自分のことは自分で決めろ、俺が決めても仕方ないからな。ただ、絶対に後悔したりするなよ？信念も曲げるな。」

早紀は何も言わない。だけど、真剣に聞いてくれてる。

俺は笑いかけて、

「大丈夫、早紀なら大丈夫だよ。」

そつと頭を撫でてやった。

「・・・はい。」

早紀の目から涙が溢れた。

二つの旅立ち

「・・・本当にもう行っちゃおうの？」

「ああ、そう決めたからな。」

ある日の朝、俺は旅立つ。

昨夜、早紀はあの世へと旅立った。

早紀は能力の封印を解いて、長く生きるという選択肢を捨てた。たった18年の短い人生に幕を下ろしたのだった。

「もうちょっとゆっくりしていても、早紀は怒らないと思うけどねえ。」

少し呆れた表情で神奈子は言う。

「早く見せてやりたいからな、早紀の見たことの無い世界を。」

死ぬ前に、早紀と交わした約束。

それは、早紀が亡くなる数日前。

「隼さん。私が死ぬ前に、お願いがあるんですけど。」

数週間前から体調を崩して、布団で寝込んでいる早紀の看病をしている時にそれを交わした。

「まだ死ぬと決まってるじゃないだろ？」

「いえ、自分の身体の事ですから。」

なんとか俺を安心させようとする目でこっちを見てくる。

そんな目をされたら、余計に辛くなるだろ。

「お願い、聞いてくれますか？」

「・・・うん、いいよ。何？」

「私が死んでも、どうか悲しまないでくれませんか？」

「・・・そんな事言われても、じゃあその時の思いを何処にぶつけりやいいんだよ。」

「思いつきり、褒めてくれませんか？自分の運命と戦った、私を。」
その時の早紀の顔は絶対に忘れる事はないだろう。

「ああ、思いつきり褒めてやる。絶対に。」

俺は笑顔で返した。

「それともう一つ、いいですか？」

「ん、何だ？何でも聞くよ。」

「いつかまた会った時、私が見た事の無い世界の話を、してくれませんか？」

「それは、俺に色々見てきて欲しいってことか？」

「そうです、駄目、ですか？」

「いや、全然いいよ。じゃあ約束だ、いつかまた会った時、飽きるまで話をしてやるよ。だから待ってる？」

「はい！」

そうして、早紀が亡くなった次の日、俺も旅に出ることにした。

早紀との約束を、より濃いものにする為に。

「風邪に気をつけてね？隼。」

「俺は風邪引かねえぞ。まあ、怪我には気をつけるよ。」

「ほんとだよ！隼、直ぐ無理するんだから！」

そんなに怒るなって諏訪子。

「じゃあ、そろそろ行くよ。」

「偶には帰ってきてよ？」

「ああ、またな！」

「またねー！」

俺は歩いて、守矢神社の鳥居をくぐる。

そして振り向き、

「お世話になりましたア!!」

神社に向かつて、思いっきり礼をした。
俺の声が、みんなに届くように。

「早紀、今から出発するんだ。」

俺は出発する前に、早紀の墓に寄った。

葬式の時は感情が定まらなくて、ちゃんとお別れを言えなかったからな。

「いつか俺がそつちに行った時、お前の記憶力じゃ間に合わないぐらいの話をしてやるから、覚悟しておけ？」

そう言っつて、俺は墓に向かつて笑いかけた。

「それじゃあ行くな？ 偶に寄ると思うから、その時はここに居てくれよっ。」

それと、

「今まで頑張ったな、本当にお疲れ様、早紀。」

その時、早紀の声が聞こえた気がした。

きつと、言葉が届いたんだな。

さあ、一つ目の約束は果たした。

もう一つを果たしに行こう！

俺は国を後にした、最後にちゃんと礼をして。
新たな景色や出会いに向けて、旅立った。

第三章・聖徳伝説編 気ままな一人旅

国を出てから、俺は色々な村に立ち寄ったり、森の中で気ままに生活したりしていた。

「一人は気楽だけど、暇だな。」

ついこの前までは、いつでも話し相手がいたが、森に立ち寄る人は少ない。

だからといって村に立ち寄っても、そんな簡単に親交を深める事が出来る程、俺のコミュニケーション能力は高くない。

「誰か森に入ってきてくれないかな。」

その時、背後から足音が聞こえた。

「人か?？」

即座に振り向き姿を確認したが、

それは熊だった。何回も遭遇した。

「またお前か!」

この熊とは、最初に森に入った時に初めて遭遇した。直ぐに夕食の為、捕らえようとした。

が、逆らう意思が無く、かなり怯えていた為、捕らえるのをやめたのだった。

そんなに俺も鬼にはなれないからな。

それからこの熊は俺に懐いたのか、よく俺の前に顔を出すようになった。

「何だよ、今日はまだ飯取れてねえんだけど。」

そう言うと、熊は手に持った何かをこっちに渡してきた。

それは、おそらく熊が取った魚だった。

「・・・くれるのか?」

熊は頷く。

てか、何でこいつ人間の言葉わかるんだよ。

「じゃあ料理してやるから待ってろ。」

そしてその1年後、俺はその山を後にした。
ずつとここにいる訳にもいかないからな。

「じゃあなー！頑張って生きろよー！」
最後に熊に別れを告げて、荷物を持って出発した。
さあ、次は何と出会えるかな。

次に俺が辿り着いた場所は、洩矢の王国には到底届かないが、それでもかなりの大きさを誇る国だった。

「他にもこんな国があるんだな。」
そう思わず呟いた次の瞬間、

『怪物だあー！逃げろおー！』

国の中から叫び声が聞こえた。
「どうやら、俺に休息は無いようだな。」

俺は地を蹴って、一気に最高速度まで上げると、国を囲っている壁を走って中に侵入した。

そこには、暴れている怪物の姿が。
多分妖怪だ。

「妖怪ってのは、どんだけ迷惑をかけりやあ気が済むんだよツ！」
極夜・深淵！

妖怪の姿を捉えてから、1秒以内に首を切り裂いた。

「これで死ぬなら、大した事ないな。」

国から歓声が聞こえる。

この声から察するに、怪我人はいないだろう。

よし、巻き込まれないうちに、

「あんた！待ってくれよ！」

まーた巻き込まれたよ。あーあ。

「隼さんを歓迎して、乾杯！」

「乾杯!!」

どうしてこうなった。

あの時、呼び止められてから直ぐに宴の準備が始まり、物の数時間で宴が始まってしまった。

こうなってしまうては引き返せない。

「隼さん！本当にありがとう!!」

「いや、大した事は、」

「いえいえ、あんなに我々が苦勞した相手を簡単に！」

「あの、いや、どうも、」

この人、押しが強いッ！

「さあさあ、隼さんも飲んで！」

「いや、俺、いいです、」

強く断りたくはないけど、俺はお酒が駄目だ。

飲むと一瞬で体調が悪くなる。

「そうですか！じゃあ他の物を！」

「……つらい。」

宴が終わって、国の人々が寝静まった頃、俺は隙を見て立ち去ることにした。

「よし、誰もいないよな？」

宴の会場から出て、周りを見渡した。

誰もいない事を確認して、走り出そうとしたその瞬間、

「あれ？隼さん？」

影から声をかけられた。

えっと、この人、料理を用意してた人だ。

「あー、っと、どうも。」

やべっ、どうやって誤魔化そう。

「どうかしたんですか？こんな遅くに。」

「いや、それはごつちもですよ。こんな時間に何してんですか？」

とりあえず、適当に誤魔化す！

「後片付けがありますので。」

「じゃ、じゃあ俺も手伝うよ！」

「え!?？ そんな、隼さんはおお客様ですから、」

「いやいや、客人が手伝っちゃいけないなんて理由はないだろ！さあやろうー！」

無理矢理押し切ってやるぜ！

「そ、そうですか。それならお願いします。」

よっしやあああー！

押し切りこそ正義イ！

「さあ早くやりましょうー！」

その後、数十分ほどで後片付けをした。

「ありがとうございます。本当は私たちがやるべき事なのに。」

「いいっていいって、困った時はお互い様だろ？」

さて、もうちよつと経ったら脱出しよう。

「・・・凄い人ですね。」

「ん、凄い？あんな妖怪ぐらいどうって事、」

「いえ、十分凄い人です。」

「・・・。」

俺は今まで、たくさんの凄い人と出会ってきた。

それは、単純に頭の良い永琳、いつも冷静だった依姫、勇氣と覚悟を持った龍牙、そして、自分の運命と戦い続けた早紀。

他にも、諏訪子や神奈子、須佐男だってそうだ。

「俺は、凄くなんかないよ。ただちよつと力があるってだけさ。」

「貴方には、力以外にも素晴らしい力がある。」

「・・・そんな事。」

「貴方にとつてはそうかもしれないませんが、私たちにとって貴方は命の恩人です。」

「っ！恩人!?!?。」

「心から感謝し、尊敬します。」

誰かに尊敬されるのは、初めてかもな。

「そうか、ありがとうございます。それじゃあ。」

そう言つて、その場を後にした。

ありがとう、
あんたも十分、『凄い人』だ。

その日の真夜中、俺は国から出た。
色々収穫もあったしな。

「さあ、次は何と出会えるかな。」

長旅はまだ、始まったばかり。

十人の話を同時に聞く者

洩矢の王国を旅立ってから、実に300年が過ぎた。その間は、いろんな場所を転々としたり、山に籠って修行をしたりしていた。

「久しぶりだな、ここに戻るのも。」

この日、俺は久しぶりに都に訪れていた。

昔は大和の国があった場所だが、今は殆どが変わっていて、まるで別の土地だ。

俺がここに来たのには理由がある。

「ほんとにそんな奴いんのか？十人の話をいっぺんに聞く人なんて。」

小さな村に訪れていた時に、その住民から聞いた話だ。

「ええ、都にいるらしいですよ。」

どうやら、今の話通り、十人の話を同時に聞くことが出来る人間が、都にいるらしい。

「でも、聞いたから何なんだよ。それだけじゃ何の意味も無いんじゃないか？」

「それが、全部の話を聞き分けて、尚且つ的確な指示が出来るそうです。その為、周りから聖人と持て囃されているそうです。」

そこで名前も聞いた。

「名を 豊聡耳神子 と言うそうです。いやはや、いつか会ってみた
いものすな。」

「どうも引つかかるな、その能力。そういうことが出来る人が、歴史上にいた気がするんだが。」

そう呟きながら、都の中心を目指す。

おそらくそんな有名な人なら、都の中心辺りにいるだろう、というただの憶測で進んでいる。

「その人！ちよつと待って！」

「ん？俺か？」

突然、街の人に声をかけられた。

「君、仏教を信仰しない？」

「仏教!? いや、宗教関連はちよつと。」

「そうかい、じゃあ考えてみてくれ！」

「あ、はい。」

そういえば、この時代は仏教が栄えている時代だったな。それにしても押しが強い。遠慮を知らないのか。

そうこうしているうちに、都の中心までやってきた。

龍牙の能力で、場所は大体わかる。

「さて、探すとしますかねえ。」

搜索を始めようとした、次の瞬間。

『みんな！向こうに豊聡耳様がいるぞ！』

『今日はどんな話を聞かせてくれるんだ!?』

大きな声と共に、沢山の人々が走っていった。

お、意外と早く会えそう。

走っていく人たちについて行くと、やがて人だかりに辿り着いた。おそらく豊聡耳神子はある中にいるのだろう。しかし、人が多すぎて全く見えない。声も聞こえないし。

「……最後まで待つか。」

数十分後、人が少なくなってきたタイミングで近づいていった。

「なので、、おや、貴方は。」

「え?」

少し近づいた直後、俺とその女性の目が合った。

「少し待って頂けませんか? 話がしたいのです。」

「あ、はい。わかりました。」

俺は少しだけ待つことした。

やがて、人が居なくなると、

「お待たせしました。」

「いや、いいんです。俺も話がかかったんで。」

「そうですね、、あ、自己紹介してませんでしたね。私は 豊聡耳神子。呼び方は神子でいいです。敬語もいりませんよ。」

やっぱりこの人が豊聡耳神子か。女性なのは意外だったな。

「わかりま、、わかった。よろしく、神子。」

「ええ、よろしくお願いします。」

「いや、俺にも敬語じゃなくていいぞ?」

「慣れていきますから、この喋り方が。」

「そうなのか、。あ、俺も自己紹介してなかったな。咲風隼って言うんだ。改めてよろしく。」

「では、隼 と呼びますね。」

お互い自己紹介が終わったところで、早速神子が切り出した。

「隼、貴方は何処から来たのですか?それに、妙な気配を感じる。」

「何処から?いや、俺はいろんな場所を転々としてる、所謂旅の者だから何処から来たと言われても。」

「そうですか。では、貴方のその妙な気配はなんですか?」

「妙な気配?俺はなんとも、」

「微妙ですが、神の力のようなものを感じます。」

そこで俺は気付いた。おそらくそれはヴアルの恩恵を受けているからだろうと。

だが、どう説明すれば良い?素直に話していい話じゃない。

迷っている時に、神子から口を開いた。

「貴方のその服装、そしてその気配。まさか、」

「・・・まさか?」

「いえ、なんでもありません。まだまだ話したいのですが、今日は遅いですし、明日また会えませんか?」

「いいよ、じゃあ明日にしようか。」

「はい。では、宿の手配をしますので。」

「あー、大丈夫。俺は野宿するからさ。またここに来るから。」

「ええ!?? 大丈夫なんですか?」

そんなに驚かれるかな。

「大丈夫だよ、十分戦える。」

「・・・気をつけて下さいよ?」

「勿論。それじゃあ。」

その夜、俺は森の中で野宿をした。

「豊聡耳神子、どうも引つかかる。・・・よし！まだまだ時間はあるし、気になる要素はちゃんと確認しよう！」

再び物語の歯車は動き出す。

聖徳太子

翌日、俺は再び都に訪れた。
そんな遠くない位置で野宿した為、ものの数十分で戻って来れた。

いち早く話をする為に直行で、

「お兄さん、お団子はいかが？」

「お、一つ頂戴。」

途中で寄り道をしたりしながら、昨日神子と会った場所へと歩いて向かっていった。

屋台の誘惑には敵わない。

「こちらにどうぞ。」

「別にもてなさなくてもいいのに。」

「いえ、お客様ですから。」

昨日と同じ場所で神子と合流すると、直ぐに彼女の屋敷に案内された。

「神子ってお偉いさんなのか？」

「まあ、それなりに。」

へえーって顔をしながら周りを見渡した。

屋敷の中は、普通の貴族ではあり得ないぐらいの広さがあった。
能力といい、もしかして神子って。

「それじゃあ昨日の続きから始めましょうか。」

「えーっとー、どこまで話したっけ?」

そう言った瞬間、部屋のふすまがバンツ!と音を立てて開かれた。

「貴様!太子様に何するつもりじゃああ!」

ゴチンツ!

「隼!ごめんなさい!布都には話を通してなくて、」

俺は突然部屋に入ってきた少女にハンマーで殴られた。気絶する程の威力じゃないけども。

「いや、いいよ。慌てる気持ちも分かる。」

でもハンマーはねえだろ!

言わないけどさ!

「でも、さっきので確信がついたよ。」

「? 何がですか?」

「いや、こつちの話だ。何でもない。」

確信。それは、神子がこの世界の聖徳太子であるということ。

何故か今まで存在を忘れてたけど、急に思い出したぜ。

「悪かった、太子様のお客様だってわからなかったのじゃ。」

ハンマーで殴ってきた子も謝ってきた。

「いや、結果はどうであれ、まず最初に疑うのは悪い判断じゃない。何でも信じ込む方が良くないからな。」

それはそれで、人間性が問われるけども。

まあ人間じゃないし。

「布都は後で説教です。」

「そんなあー！最初は屠自古が言ったのじゃ！」

「そうですか、なら2人共説教します！」

「ひえー！」

前言撤回、やっぱり暴力は良くないな。

「それで？話したい事ってなんだ？」

そろそろ本題に入らないとまずいという事で、俺から話を切り出した。

「不思議な雰囲気纏う貴方という存在に、お尋ねしたい事があります。」

「俺はそれに対して、実感はないんだけど、」

神子が、あまりにも真剣な目をしている為、俺もそれにちゃんと答える事にした。

「隼、貴方は人間の死について、どう思いますか？」

「どう思う、っていうのは？」

「この地は、はるか昔から変わる事はなく、海は水を湛え続けています。しかし、何故人は死にゆくのでしょうか。私はそれに不満を持っているのです。」

「・・・なるほどねえ。」

「貴方は姿こそ若者ですが、年齢は若者とは思えない。おそらく長く生きているのでしょうか？貴方の意見を聞かせて欲しいのです。」

へえ、見抜いてくるのか。

「・・・人はいつか死ぬ時が来る。それこそ、不老不死にならなきや必ず。でも、命は限りあるからこそ、生きていることを実感し、必死で生にしがみつく。」

「っ！」

「不老不死が悪いって言っているんじゃない。ただ、それになると今度は死ぬ事について考えるだろう。人は手に入らないものを求める生き物だから。」

「・・・確かにその通りです。」

「この都は、仏教が信仰されてる。最初に広めたの、お前だろ？」

「ええ、しかし、亡くなった人たちが救われたのかはわかりませんがだからこそ！」

「大事なのは、自分がどうしたいかだ。どうなりたいかだ。・・・俺は何億年前から生きてる。」

「えっ!?？」

「不老不死じゃないけど、まだまだ生きていく。」

神子の目をしっかりと見て話した。

「俺は人の決断を止める気はない。中途半端じゃなければな。だから考えろ！自分がどうしたいかを！どうなりたいかを！」

「っ！」

「・・・今日はこれで帰るよ。またいつか聞かせてくれ、君の道を。」

俺はその場を立ち上がって、ふすまへと向かった。

「お前の答え、待ってる。」

「私の、道。」

隼が帰った後、しばらく自分の部屋で考え事をした。

「私がどうなりたいか、ですか。」

「太子様。」

「私は、不老不死を実現したい。」

「太子様？」

「でも、一体どうしたら、」

「太子様!!」

「はっ!ごめんなさい、布都。」

「客が来てますぞ。」

「お客様？」

「名前は、霍青娥と言っておったぞ。」

道教

神子の屋敷を出てから、しばらく都の中を歩き続けていた。
まあ、何処に行っても暇なのは変わらないがな。

その時だった。

『向こうに妖怪が出たって！行ってみようぜ！』

道を挟んだ向こう側から、子供たちが走っていくのを見た。

「なっ！待てっ！」

俺は止めたが、子供たちは気にも止めずに走るのをやめない。

もちろん、見捨てる気はないので、俺もそれを追った。

しばらく走ると、沢山の人だかりに遭遇した。

「妖怪だ！やっちまえ!!」

「飛んだ弱虫だこいつ！」

その風景を見て、俺は絶句した。

街の人が、寄ってたかって妖怪をボコボコにしている。

「やめろッ！」

俺はその妖怪の近くにジャンプして、その妖怪を庇った。

「何だテメエ！妖怪の味方をするのか！」

俺は叫んできたやつを睨んだ。

「この妖怪に敵意は無い。お前らはそれを分かって攻撃するのか？それとも、それすら気付けない間抜けか？」

「なっ!!? でもそいつは妖怪だッ！妖怪によって沢山の人が殺され
たんだぞ！」

「でもこいつには関係ないだろ？ それとも、連帯責任だとも言う
のか？」

「ああそうだ。妖怪はどいつも一緒だろ！」

その言葉で、完全に頭に血が昇った。

その勢いのまま、そいつの胸ぐらを掴んで投げ飛ばした。

「お前らはそういう妖怪と同じだ。自分の勝手な正義感で、何の罪も

ないものを傷付ける。ある意味妖怪よりもたちが悪いな。何故なら自分は良いことをしていると信じ込んでいるから。」

俺はそいつ含めて周りのやつに言い放った。

「この世界に生きるものが、人間だけだと思ふな！」

俺は妖怪の手を掴んで瞬間移動をした。

「お前、大丈夫だったか？」

都から離れた所に瞬間移動したあと、俺は妖怪に尋ねた。

その妖怪はこくりと頷く。

「まだ喋れないのか、災難だったな。」

そう言つて、そいつを見つめる。

「お前、狐か。」

そいつは狐の妖怪だった。今までしっかりと見なかったから全く気付かなかつたが。

「まあ、頑張れ。この近くにある山は妖怪が多いから、そいつらと一緒に生きていけ。じゃあな。」

もう既に日が落ちていた為、切り上げて別れを告げた。

狐に背を向けると、そいつの小さな鳴き声が響いたのを感じた。

「答えは決まったのか？神子。」

翌日、再び神子の屋敷を訪れた。

「隼は、道教というものをどこぞで存知でしょうか？」

「道教？いや、わかんないな。」

実際のところ、名前は知っていた。昔、歴史の授業で学んだ事があるからだ。

しかし、内容は全く分からない為、完全にわからないふりをした。

「昨日、貴方が帰った後、1人の客人がここを訪れたのです。名前は霍青娥。そして彼女は、私に道教というものを信仰しないかという相談を持ちかけてきました。」

俺が帰った後、か。おそろく外から見ただな、そいつ。

「彼女曰く、道教は不老不死を実現させる宗教。修行をすれば、誰でも仙人になれるそうです。」

「・・・でも、今街の人は仏教を信仰している。それは政治の為でもあるんじゃないか？」

「私もそれを考えました。道教は政治には向かない、と。」

「それじゃあ、」

「そこで、彼女はこんな提案をしてきたのです。表向きには仏教を普及させて、私達のような権力者のみ道教を信仰すればいいと。」

賢い策に思わず声を上げて驚いてしまった。その霍青娥という女、相当頭が切れるようだ。

「それで？お前は どうしたい？」

「・・・私はその策を採用します。それが私の『答え』です。」

俺は一瞬つぶって、少しだけ息を吐いた。

そして、笑顔を浮かべて、

「じゃあ何も言わないさ。頑張れよ、神子！」

「ええーもちろん！」

帰り道、街の薄暗い道を通っている時。

「いるんだろ？そこに、霍青娥。」

「あれ？バレちゃった？」

俺の真上、上空に青色の衣を纏った女性が姿を現した。

霍青娥という邪仙

「あんとと丁度会いたかったんだ、霍青娥。」

空中を浮遊する霍青娥にこちらから話しかける。

彼女から、敵意は感じない。

「私は会話するつもりなんか無かったんだけど。まあいいか。」

「じゃあ何でつけてたのさ？」

「何でって、暇つぶしー。」

呑気なやつだな。

「それなら、少し暇つぶしのつもりで付き合ってくれよ。こっちは色々聞きたいんだからな。」

「仕方ないねえ。いいよ、出来るだけ答えてあげる。」

話を通じるやつで助かったぜ。

いきなり攻撃してくるのも想定してたからな。

「・・・早くしてくれない？」

「悪い悪い。・・・いや、暇ならいいじゃねえか。」

「無駄な時間は過ぎしたくないの、ほら早く。」

「へいへい。じゃあまず、お前は何者か教えてくれ。」

「いきなりかい。まあいいけど、私は昔は人間だったけど、今は仙人になった身だ。・・・天からは認められなかったけど。」

「じゃあ仙人から堕ちて、邪仙になったってことじゃ、」

「うるさい！とにかく私は仙人！」

突然に霍青娥の表情が変わった為、思わずたじろいでした。

おそらく、昔何かあったのだろう。

これについては、あまり触れないことにした。

「じゃ、じゃあ次の質問。お前の目的は？」

「私の目的？豊聡耳様に道教を教えたことかい？」

「それ以外に何があるんだよ。で？何が目的か教えてくれよ。」

「んー」。秘密！教えないっ！」

思わず体勢を崩してしまった。

こんな漫画みたいなズッコケ方あるんだなと思った。

「何でだよ！話してくるって言うってたじゃねえか！」

「全部とは言っていないでしょ！とにかく教えな！」

「だー！もういいッ！じゃあ最後！俺を少し前からずっと監視してやがったろ！それは何でだよ!!」

「んーっとねえ。」

もうこの時点で察した。

「それは貴方自身が考えてみて！じゃあね！」

「ちよっ！待ちやがれ！」

そう言っつて、青娥は何処かへ飛んでいってしまった。

「・・・だるい。」

翌日から、俺は住み込みで大工の仕事をすることにした。今まで、仕事っていう仕事をしたことがなかったからな。

「にいちゃん、お前すげえ力だな！」

「まあ、鍛えてますから。」

職場の人はみんないい人で、すぐに馴染むことも出来た。

大工の仕事も、俺からしたらそこまで辛いわけでもないし、結構楽しい。

因みに、勿論年齢は適当に偽ってる。

「よし！今日はここまでだ！解散ツ！」

その日は、早めに仕事が終わった為、久しぶりに神子の屋敷を訪れることにした。

向かう途中、団子屋に寄り道したりした。

もはや、常連と化している。

団子を食べ終えて屋敷につくと、玄関の見張りに声をかけた。

「今つて、神子はいるか？」

「隼さんですね？太子様は茶の間にいらっしやると思います。」

「どうも。」

玄関の扉を開けてもらい、茶の間へと向かった。

何回かしか来ていないけど、なんとなく場所は分かる。

茶の間に辿り着くと、神子が机で書物を書いていた。

「よう、神子。元気かい？」

「隼！お久しぶりですね。」

「元気そうで何よりだ。仕事が早めに終わったんでな、久しぶりに寄ってみた。」

「そうですね、貴方もお元気そうで。」

その後は、他愛のない会話をしばらくした。久しぶりに会った為、話題も尽きなかった。

「国は順調か？いや、聞かなくても分かるな。」

「そう言つて貰えると嬉しいです。でも、課題は山積みなんですよ？」

「まあ、それ含めて頑張るしかない。」

「そうですね。」

そして、外が暗くなって帰る時間が近づいた頃、あの話を切り出した。

「……ところで、道教はどうなんだ？」

「順調ですよ、とつても。」

「そうか、体は壊すなよ?」

そう言っていると、神子は笑顔を浮かべた。

「ふふつ、大丈夫ですよ。随分と心配性なんですね。」

「そりゃあ、心配するさ。友達だろ?」

「ええ、そうですね!」

しかしその数ヶ月後、神子は体を壊してしまった。

その知らせを聞いた時は、血相を変えたのが自分で分かるぐらいの衝撃から、最高速度で屋敷へ駆けつけた。

「神子!大丈夫か!」

「今は安静なんだ、あまり騒がないですよ。」

そこには、神子の看病をしている青娥の姿が。

意外と優しいところあるじゃねえか。

って言ってる場合じゃねえ!

「神子は、大丈夫なのか!??」

「大丈夫、とは言い切れないね。」

「・・・何があつたんだ?」

「修行の過程で用いる薬品が原因だ。例えば、水銀とかね。」

「・・・助かるのか、神子は。助かるのか!なあ!」

「今が山場なんだ、それはわからないよ。」

俺は、そうか、と言葉を吐いて部屋から出た。

今は、祈ることしかできない。

2日後、神子は無事山場を超えた。

完全回復とまではいかないが、その辺は俺の技でカバーした。

「無事でよかったよ。」

「すみません、色々迷惑かけてしまつて。」

「俺は特に何もしてないさ。礼は青娥に言つてくれ。」

「はい、彼女にも伝えます。」

そして、沈黙が流れた。実際はそこまで長くはなかったが、2人からしたら永遠とも呼べるほどの長さの。

先に、神子が口を開いた。

「隼、私、決めました。」

「ん？何だ？」

「私は、一度死にます。」

「……は……？」

創造と破壊の神槍

「お、おい。悪い夢でも見たのか？」

状況を整理しよう。

今神子は死ぬと言ったんだ。

死に疑問を持っていた奴がおかしな話だろ？

「見てません。本気です。」

「ちよつ、ちよつと待てよ。なんで急にそんな事、」

「仕方ないんです。尸解仙になるためには。」

「・・・は？」

「尸解仙になるためには、一度死ななきゃならないんです。」

「あー、そういうことか、」

一旦、落ち着いて考えるべきだったと後悔した。

「それで？何だよ尸解仙って。」

「仙人のことです。でも、それになるには一度死ぬ必要があるんです。」

「・・・蘇れるんだよな？」

「保証はありません。でも、言いましたよね？覚悟は出来た、と。」

「蘇るのは、いつになるんだ？」

「それは分かりません。直ぐなのか、何百年後なのか。」

「・・・そうか。まあ、人の覚悟を妨げるつもりもないし、いいじゃないか？」

「随分軽いんですね。」

「さっきまで本当にお前が死ぬと思ってたからな！それに比べりやマシだッ！」

「なっ！急に叫ばないで下さいよ！」

「うるせえ！紛らわしいことしたお前が悪い！」

「ちゃんと話を聞かない隼が悪いです！」

「はあ!?!？」

その後しばらく討論を続けた。

多分、俺は少しでも長く神子と話していたかったんだと思う。
どんな形であれ。

「はあ、はあ、もういい。」

「私も、限界です。」

「・・・で、いつそれを決行するんだよ。」

「今週中には決行します。長い間待つ必要はありませんから。」

「そっか、。じゃあそれまでに、俺はここを離れる。」

「え!? 何ですか?」

「何であろうと友人が死ぬ瞬間に居合わせたくない。単なる我儘だよ。」

「・・・じゃあ、次に会うのは私が復活した時ですね!」

「そうだな。楽しみにしてる。」

「ええ! 約束です!」

俺と神子は指切りをした。

てか、この時代に指切りなんてあるんだな。

3日後、俺はこの場所から離れる。

「体調、崩さないようにして下さいよ?」

「安心しろ、ここ暫く崩したことないからな。」

「それならいいですけど、」

旅立つ前に、神子の屋敷で軽く雑談をする。

「てか、心配するのはこっちだぞ?」

「え?・・・あ、そうですね。」

「そうですね、じゃねえよ。ん！」

俺は拳を前に突き出した。

「絶対成功させろ。」

「勿論！」

神子は自分の拳を俺の拳にぶつけた。

「・・・じゃあこれで、」

その瞬間、

バアアアアアアン!!

その音は、まるで天を切り裂くように響いた。

おそらく、ここから100km離れていても、余裕でうるさいと感じるだろう。

「と思ったが、どうやらもう一仕事必要みたいだわ。」

「な、何言ってるんですか!ここから逃げないと!」

神子は萎縮している。

まあ、これで萎縮しないのは、よっぽどの強がりか人外かだ。

「この音がなんなのかは検討がついてる。任せとけ、これでも経験が違う。」

瞬間移動!!

俺は瞬間移動で、街の高台に登った。この高台からなら、ある程度
のものは見える。

「あれか。」

その姿は、割とよく見かけたことのある生物、百足だ。

でも、大きさが尋常じゃない！

「久しぶりに、生死をかけた勝負になりそうだッ！」

極夜・深淵！

高台から、真空波を放つ。

しかし、びくともしない。

「はッ！やっべー！」

その攻撃で、大百足はこちらに気づいた。

おそらく、すぐに突進してくるだろう。

「みんな！離れろオオ！」

街の人たちに、精一杯呼び掛けた。

といつても、もうほとんどが避難してる。

「さて、どうするかな！」

その刹那、大百足は突進してきた。

俺はその攻撃を間一髪で避ける。

「スピードは大したことないな。それなら！」

二刀流・灼熱地獄！

虫には炎だという単純な考えから、灼熱地獄を使った。

だが、これもあまり効かない。

「ガギャガアガアガアガア！！」

おぞましい鳴き声と共に、再びこちらに迫る。

「・・・仕方ない。あれを試す！」

generate command アイギスの盾！

アイギスの盾で、大百足の攻撃から身を守る。

「頼む、アイギスの盾！しばらく耐えてくれ！」

俺は左腕に力を込め始める。

一切緩めることなく、込め続ける。

他のことは一切考えずに。

大百足は、盾に突進し続ける。

知能が低くて助かった！

そして、力が込め終わる。

その時！

「ギャガアガアガガ!!」

大百足は、何故かこちらへの攻撃を止める。
そして、大百足が潰した街へ矛先を変える。
その先には、逃げ遅れてしまった家族が。

「なッ！止めるオオオオ！」

しかし、俺は動くことが出来ない。

この奥の手は、しばらく動けない。

その次の瞬間、ドゴオオンという音が鳴り響いた。

終わったと思った。あの家族は助からなかったと思った。

しかし、奇跡が起きた。

「キュウウン!!」

「・・・お前、まさか!!」

何といつかの狐が、大百足の攻撃から家族を救ったのだった。

「ギャガガガッ！」

大百足は激情する。

でも、もう遅いッ！

「狐ッ！ありがとう!!」

俺は左手に、思いつきり力を込めた。

「準備完了!!」

generate command!!!

「全て消し飛べ、トリシューラ!!」

その瞬間、左手に具現化された槍から禍々しい光が発生し、俺の周囲は全て消し飛んだ。

まるで、その地に隕石が落ちたように。

「そして、再びその姿を元に戻せ！」

更にもう一声かけると、再び槍から光が発生し、消し飛んだ筈の近くの山や街は全て元通りになった。

勿論、生き物も、大百足を除いてその姿を取り戻した。

「・・・やった。」

左手から槍は消え、俺は地面に倒れた。

境界の妖怪

大百足との戦いの後、俺は丸1日、目を覚さなかった。幸いあの戦いで怪我人は出ず、大百足のみが死ぬという結果となった。

そして、俺が目を覚ましたその翌日。

「今度こそ、一旦お別れになるかな。」

「どうでしょう。また巨大妖怪が攻めてくるかも知れませんよ?」

「勘弁してくれ。」

神子が冗談を言ってくる。

それを聞くのは初めてかもしれない。

「それじゃあ、また会えるのを楽しみにしてる。」

「こちらこそ、ですよ。」

最後に握手を交わした。

「またな!」

そうして、歩いて都から離れた。

後ろは振り返らずに。

再び1人旅が始まった。もう何百年とやっている為、ある程度のこととは何でもできる。

しかし、最近は森の奥に行かない限り、食料が調達出来ない。人が繁栄してきちやったからな。

「あー、どうしよう。畑でも作ろうかな、」

ある日の夜、そんな独り言を呟いている時。

背後から妙な気配を感じた。

俺は殺気を出さずに、戦闘態勢に入る。

その気配は、段々と近づいてくる。

俺は、気づいてないフリをして、その気配をおびき寄せる。

そして、

「・・・そこだッ！」

射程圏内に入った瞬間、そこに目掛けて刀を振り抜いた。

「隠れてないで出てこいよ。そこに居ようと、斬ろうと思えば斬れるぜ？」

そういうと、一瞬の間の後、空間に裂け目が出来た。

その中を覗いてみると、薄暗く多数の目が見えた。

「わ、わかったから！出てくるから！」

間も無く、その中から人が覗いてきた。

まあ、すぐに妖怪だと判別はついた。

「わかりやあいんだ。」

俺は、刀を鞘に収める。そして、その妖怪と向き合った。

その妖怪の容姿は、人間の少女と何ら変わりはない。でも少女って言うには、随分と大人びている。

髪は所謂、金髪ロングヘアだ。でも、ギャルって感じはしない。

正直、第一印象は変わったやつ、だ。

「で？何の様だよ、人が生活に困ってるってのに。」

そういうと、その妖怪はキョトンとした顔をした。

「何だその顔、そんなに驚くかよ。」

「・・・食べ物持ってないの!?!?」

「はっ！」

「てつきり、身なりがいいから食べ物に困ってなさそうだったのに。」

・・・頭に血が上った。

「帰れエ！」

大声を出すと、その妖怪は裂け目にサツッと入っていった。全く腹立つ妖怪だ。

翌日、俺は山に入って、山菜を探っていた。

あくまで、自分に必要な量だけ。

「ふう、このぐらいで大丈夫かな。」

自前の籠に、必要な量だけ詰める。

適当に木で作った籠だが、結構気に入っている。

「・・・あれ？もうこんな暗くなってるのか。」

周りを見渡すと、既に太陽の光は少なくなっていた。

山に入ったのが遅めだったのだろう。

「今日は、この山で野宿するかな。」

その山の中でも、大きめな木の下で自前のテントつばいものを貼る。

これも木で作ったものだが、テントというには歪すぎるので、テントつばいものと呼んでる。

そして、木で火を起こして、料理を始めた。

それを始めたから数分後、また背後に妙な気配を感じた。

まさかと思って、その気配がする方向をガン見する。

数十秒後、またあの裂け目が現れた。

「な、なんでわかるの！」

案の定、そいつだった。

「お前、こっそり食べる気だったろ。」

「い、いや、そうゆうんじゃないの。ただちよつと頂こうかなーって、」
「はあ、全く。食べたいなら素直に言えばやるよ。」

「えっ!?? いいの!??」

「何、俺は鬼じゃないぞ? いいからそこ座れ。」

そういうと、そいつはパアアと顔を明るくした。

そして、秒速で指定した場所に座る。

「早ッ!?? どんだけ腹減ってんだよ。」

「仕方ないじゃない! 暫く何も食べてないんだから!」

一体何が仕方ないのか分からなかったが、とりあえず料理をよそつてやった。

そいつの前にそれを差し出すと、物凄いスピードで食べ始め、数十秒で食べ終わってしまった。

よそつた皿を空にすると、一瞬落ち着いた後にこちらを見てきた。期待をする様な目で。

「・・・おかわりするか?」

そいつはコクコクと頷く。

仕方なくもう一杯よそつてやった。

が、それもすぐになくなり、再び期待の目でこちらを見てきた。

「・・・もう全部やるよ。」

結局、その妖怪が全部食べてしまった。

まあ、あげたのは俺だけどき。遠慮つてものを知らないなこいつ。

「腹いっぱいになったか?」

「ええ、ご馳走様でした。ありがとう。」

「どう致しまして。」

「自己紹介をしてませんでしたわ。私は八雲紫。貴方に感謝します。」
「うおっ！急に礼儀正しくなんなよ！俺には敬語じゃなくていいから。」

「そう？じゃあ敬語なしでいくわ。」

「ああ、そっちの方が楽だ。」

正直、敬語で話されるのは得意ではない。

接するの難しいし。

「それで、貴方の名前は？」

「あー言っただけじゃなかったな。咲風隼だ。」

「それじゃあ隼って呼ぶわ。」

「じゃあ俺も名前で呼ぶよ、紫。」

お互い自己紹介が済んだところで、色々聞いた。

紫のこととか、俺についてきたこととか。

そして、一番気になったことも、

「お前のその、変な裂け目みたいの、何？」

「それは、わからないわ。私の能力ってことだけはわかるのだけど。」

「ふーん、何て呼んだらいいの？それ。」

「私はスキマって呼んでるわ。」

なんだろう、なんか負けた気がした。

気のせいだろうか。

「それ、具体的に何が出来るんだ？」

「殆どは移動に使ってるわ。便利でしょ？」

「・・・体力なくなるぞ？」

「・・・大丈夫よ。」

「ちよつと動揺してない？」

「大丈夫よ！」

それから、その夜は紫と雑談し続けた。

最初は変わったやつだと思ったが、話してみると割と話しやすい。

だけど、会話するにつれて、一つの疑問が大きくなり続け、とうとう我慢の限界を迎えた。

第四章・妖怪の山第壹戦 スキマ妖怪の初戦

「な!?? 何言ってるのよ!何が面白いの!??」

「いやいや、面白いつて!誰も考えたことねえよ!」

笑いながら、紫に答える。

思わず、自分の膝を叩きながら。

「つ!何よ!悪いことじゃないでしょう!」

あまりにも紫が怒るので、必死で笑うのを止めた。

「あー、久しぶりにこんなに笑った。」

「私は笑えないわよ。」

紫は不機嫌そうにする。

まあ、当たり前か。

「夢を貶した様に感じたなら悪かった。そんなつもりはなかったんだけど、」

「・・・信用できないわよ。」

「んー、まあそうだな。どうやったら信じてもらえる?」

「貴方の心のうちが分からないと、信用は出来ないわ。」

「成る程、ね。」

心のうち、か。

どうすれば見せれる?

今ので、言葉では証明出来ないことが確定したからなあ。

「何考え込んでんのよ。」

紫、感情的になってるしなあ。

どうしよう、

いや、迷ったら考えるより先に、行動してきただろ?

何やってんだよ俺。

俺は自分の頬をパチンと叩いた。

「ちよ！何をしてるの！」

「よし！紫、ここで決闘しようぜ！それが一番早い！」

「・・・ええッ！私、戦闘なんかしたことはないわよ！」

「丁度いい、スキマ妖怪の初戦って訳だ。」

「何よスキマ妖怪って!!」

「種族が分かんないから、暫くはそう呼ぶぜ。」

スキマ、と、妖怪、を混ぜただけの適当な名前だ。

変に考えるより、マシになるだろ。

「さあ、全力をぶつけろ。俺を殺す気で来い。」

「殺す!?? いやよ！そんなの、」

「そうか、俺は殺す気で行くぞ。死にたくなければ、殺す気で来いッ！」

俺は、二本の刀を引き抜いた。

「ちよ！ちよっと待って！」

「そんなに待ってたら、死ぬまで夢は叶わないッ！障害物を殺す覚悟も無しに、お前の夢は実現されないッ！」

極夜・深淵！

「いきなりイ!??」

紫は、スキマに身を投じて回避する。

「お？避けれんじゃねえか！」

直ぐに、スキマから顔を覗かせる。

「不意打ち何てずるいじゃない！」

「あ？準備出来たかって聞いたろ！」

極夜・深淵！

「聞いてないわよっ！」

再びスキマに身を隠す。

そして、スキマは閉ざされた。

「成る程、身を隠して隙を突く作戦か。」

俺は周りに神経を集中させる。

「作戦はいい、だが！」

空中の一点に刃を突き立てた。

「殺気だだ漏れだぜ？」

直ぐに、そこからスキマが現れる。

「……いや、この距離なら十分当たるわ！」

「何ッ!?？」

その瞬間、紫は弾幕を発生させて、俺に向かって発射する。

目を凝らして見るに、その弾幕はかなり精度が悪い。

少しでも距離が離れていたら、かすりもしないだろう。

「至近距離なら当たるってことか！」

精度の悪い大量の弾幕は、殆どが俺に当たる軌道を描かないが、流石にこの至近距離！何発かは絶対に当たる！

案の定、およそ10発の弾幕は俺を捕らえる。

何とか身を回転させたりしながらそれを避けるが、最後の1発は避けることが出来なかった。

「ぐあア！」

1発は俺の腕に命中した、かなりの威力だ。

こいつ、威力を上げることしか考えてねえな!?？」

やべえ、楽しくなってきた！

「紫イ！俺は弾幕は貼れねえけど、弾丸1発なら撃てるぜ！」

およそ、今から300〜400年前。

「なあ諏訪子、どうやったら弾幕を貼れる様になるんだ？」

「……やだよ、隼に教えたくないもん。」

「何で!?？」

諏訪子と神奈子の弾幕勝負を見て、俺も使えるようになりたいと思
い聞いたのだが、

「隼に教えたら、私の勝ち目が無くなっちゃうもん！」

「いや！そんなことないぞ！」

諏訪子は目を細めてこつちを見てくる。

そんなに信用ならねえってのか！

それならこの技を喰らえ！

座る体勢を正座に変えて、

「頼む！頼れるのはお前だけなんだよ！」

必殺！土下座！

これなら断れねえだろ！

「・・・はあ、分かったよ。でも！ちよつとだけだからね！」

「え!?? 嘘でしょ!??」

「嘘か本当かは、自分の目で確かめろ！」

練習の成果！今こそ見せる時！

俺は右手に力を込めた。

発射まで時間はかかるが、かなり強力だ！

「さあ、行くぞ紫ィ！弾丸発射アア！」

右手から、漆黒の弾丸を放つ。

「っ！させないわ！」

紫も負けじと弾幕を貼る。

「お前の弾幕と俺の弾丸！力比べだ！」

漆黒の弾丸は、紫の弾幕を突き抜けていく。

しかし、一発一発ぶつかる度に減速する。

俺の威力が下がるのが先か、紫の弾幕がなくなるのが先か、

いざ、勝負！

「そのまま、ぶち抜けエエエエ！」

「止まれ、止まってエエエエ！」

その刹那、爆発が起きる。

あたり一面を、その光が包む。

「ありがとう、俺の負けだ！」

「いや、決着はついてないわ。あの後続けてたら、私が負けてた。」

「何言ってるんだよ、俺は一発食らっていて、勝負は打ち切った。つまりお前の勝ちだぜ？」

俺の放った弾丸は、紫の弾幕を全て突き抜けることなく、最後の最後で止まったようだった。

その場の光が消えた後、俺は勝負を打ち切った。

「で？伝わったか？俺の心のうち。」

「・・・ええ、十分過ぎるぐらいに。」

「そりゃあよかった、ん。」

俺は手を差し出す。

「え？何？」

「握手だよ、勝負の後はする様にしてる。」

「へえ、分かったわ、はいっ！」

紫も手を差し出して、決着の握手をした。

目指す先は

「やだ。」

「お願いよー!」

今現在、紫にある場所へ共に行って欲しいと頼み込まれている。

「私の手伝いしてくれるんじゃないの!?」

「だとしても俺はお前の助手じゃない!」

「一緒に行ってくれないと、至近距離から弾幕撃つわよ!」

「あ?上等だ今度こそ首を跳ねてやるよ。」

時は20分前に遡る。

それは、2人の戦闘が終わった直後、

「それで?これからどうすんだよ。」

「え?何の話よ。」

「何の話って、お前の目標についてだよ。手伝ってやるって言ったじゃねえか。」

「・・・無謀な挑戦よ?」

「何億年と生きてきたんだ。無謀な挑戦でも絶対出来る!」

「・・・え?」

「え?」

暫く沈黙が続いた。

2人共、表情1つ変えずに。

「あつ、そうか、そうだった。」

そういえば、そんな話一回も出さなかったな。

一応、話しておこう。

「俺、結構長生きなんだぜ?見た目はこんなだけど。・・・いや、お互い様だな。」

「・・・あ、そ、そうなの。知らなかったわ。」
「ああ、悪い悪い。」

何この空気、居心地悪い。

「ま、まあ、そんな話はどうでもいい。それより、さっきの質問だよ。具体的に何をするんだ？」

いつまでも沈黙でいる訳にもいかないので、適当に誤魔化してやった。

「それは、まず人を集めるところから？」

「何で疑問形なんだよ。お前のことだぞ。」

「え、ええ。そうよね、分かってるわ。まずは人を集める！」

「・・・。」

「そんな目で見ないでよ！」

そんなに怒るなよ。シワが増えるぞ。

・・・やっぱ今のナシ。

「それで、どうやって人を集める？」

「話を誤魔化さないで！」

「いーからいーから、どうやって集める。」

「・・・もういいわ！人集めね！いいわ、当てはあるもの！」

「お、あるなら話は早い。それで、何処に居るんだ？」

「それは、ここからかなり離れたところの山よ。」

「山？そんなところに人間なんて住んでるかな。」

「人間？いいえ、妖怪の住む山よ？」

そして、今に至る。

「誰がそんなところ行くか！」

「大丈夫よ！仲間意識は高い妖怪ばかりって聞くから！」

「尚更駄目じゃん！余所者に対して厳しいに決まってるーがッ！」
「そんなことないわ！きっと私達にも良く接して、」
「言ったな？じゃあもし攻撃されたら盾になれよ？」
「い、いや、前言撤回よ！まだ分らないわ！」
「じゃあ行かねえって言ってんだろ！」

そんなこんなで、約2時間が経過した。

「しゃあねえ、腕相撲で決めるぞ！」

「貴方有利じゃない！それなら鬼ごっこで勝負よ！」

「お前有利じゃねえか！」

そして、更に2時間が経過した。

「いい加減、諦めろ！」

「いいえ、諦めないわ！」

こいつ！最初は大したやつじゃないとたかを括っていたが、めっちゃくちやしぶとい！

飯が三食全部同じだった時の諏訪子といい勝負だッ！

『どう言うことさー！』

ん？今諏訪子の声が聞こえた気がしたけど、まあいいや。

「お願い！貴方が居れば心強いから！」

「・・・だー！もう分かったよ！行きやいいんだろ行ってやるよ！その代わり、何かあったら全責任をお前に押し付けるからな！」

「ぐっ！わ、分かったわよ！」

「よし、決まりだ。」

俺は無理矢理、紫の手にハイタッチをした。

「ちよ！痛いじゃない！」

「そのぐらいの痛み、この先幾らでも受けるからな！」

「い、いいわ！上等じゃないの！」

紫も負けじと俺の手に本気でハイタッチをする。

まあ、たいして痛くないけど。

でも、少し顔がにやけたかな。

「その粋だ、よしもう一発！」

今一度、ちゃんと手を構えた。

紫も合わせて手を上げる。

「目指す先は、妖怪の山だア！」

パァン、という音が響いた。

二人旅でのひと時

「お前、、早すぎじゃね?」

妖怪の住む山を指して、初めての二人旅が始まった訳なのだが、
「仕方ないじゃない!いつもスキマで移動してるんだから!」

「・・・だから言ったじゃん。」

6、7時間ほど歩いたところで、すでに紫が弱音を吐いていた。

「ならお前はスキマで移動すりゃいいじゃん。変に強がらなくてもいいのに。」

「う、うるさいわね!別にいいでしょ!」

「いや良くはないけど、」

実際、進むのが遅くなる訳だから、こつちとしてはスキマを使ってもらった方がいい。

しかし、紫の強がりへし曲がるのも良くないと思ったので、やっぱりこのままのペースで行くこととした。

「そういえば、」

「ん?どうした?」

それからもう暫く歩いたところで、紫が突然口を開いた。

「何で歩くの?飛べばいいじゃない。」

「・・・ん?」

「・・・え?」

紫は俺の顔を覗いてくる。

「もしかして、隼、貴方飛べないんじゃない?」

・・・凶星。

「努力はしたんだよ、努力は。」

「そう、いかにも飛べそうな名前なのに、」

「黙っとけ。」

俺は飛ぶことが出来ない。

一応、諏訪子とか神奈子に教えては貰ったのだが、いくらやっても少しも飛べなかった。

「難しいんだよ、飛べる奴は何言ってるんだって話だろうけど。」

「そうねえ、私は昔から飛べたから分からないわ。」

すっげえ腹立つ！

しかも、ドヤ顔してるのが余計に腹立つ！

「・・・まあそんなに支障がある訳でもないし、いいんじゃないやねって思ってるよ。」

「そういう気持ちがあるから、飛べないんじゃないやなくて？」

「お前、人の気持ちを考えるということを学びやがれ。」

・・・でもまあ、その通りかもしれないな。どこかで大丈夫だろうと考えてるから、

「よしーちよつとやってみるかー！」

いきなり声を上げたので、紫はビクツ、と体を震わせた後、こちらを睨みつけてきた。

「いきなり大声上げないでよ！びっくりしたじゃない！」

「ははっ！悪りい悪りい。ちよつと昂ってた。」

「本気で悪いと思ってるじゃないでしょー！」

「さあ？それはどうかかな？」

そんな時の俺、相当悪い顔してたと思う。

「絶対凶星じゃない！」

「よし、それじゃあどうやれば飛べるか教えろ。」

俺と紫が落ち着いたところで、飛び方を聞いた。

「いや、そう言われてもわからないわよ。知らない時から飛べるんだし。」

「あー、そうか。・・・じゃあ一回やってみるから、どんな感じか見てくれ。」

「うーん、いい助言は出来ないと思うけど。」

「いーからいーから。」

「・・・分かったわ、じゃあ一回見せてみて。」

「了解、行くぜ?」

両足に力を込めた。

自分が重力に逆らうイメージをしながら、精神を統一する。

そして、一気に解放!

「オラアア!」

ドンツ、という低音を立てて、俺の体は空高くへ吹っ飛んだ。

その高さ、ノーマルサイズの山なら軽く飛び越えるだろう。

やがて、俺は地面に降りた、対空時間は約3分と言ったところだろう。

「どうだ紫! 割と対空したぞ!」

「・・・」

「どうした? 意外にもいい線いってたか?」

「・・・た、」

「ん?」

「ただ高く跳躍しただけじゃない!!!」

その声は、数秒間のその場に残り続けた。

周りに壁とか一切ないのにね。

GAME OVER

妖怪の山を目指して、2週間が過ぎた。

遅過ぎな気もするが、紫が歩くと意地を張ったものだから、かなり時間がかかっている。

まあ、偶にはいいよな。

「紫、あと山まではどのくらいだ？」

一度立ち止まって、紫に尋ねた。

「多分、もうそんなに遠くないわよ。あと数日で辿り着くと思うわ。」
「そりゃあ良かった。じゃあこの先にあるっぽい村で休んで行こうぜ。」

俺は2つ目の能力を使って、先にあるものの位置を確認した。

「?、なんでそんなの分かるのよ。」

「ん?・・・あー、秘密。」

もう一つの能力についてはややこしいものがあるからな。

「何で!?? 教えてよ!」

「いつか、な。さあ、行こうぜ!」

「くっ! いつか教えなさいよ!」

そうして、再び歩みを始めた。

それから2時間ほど歩くと、小さな村を確認した。

「本当にあった! 益々気になるわ、」

「まーまー、小せえ事は気にするなって言うだろ？」

「小さい事じゃないわよ！」

「へいへい、さあ、ここで休憩させて貰おうぜ。」

「はぐらかすな！」

村に立ち入ると、少しだけ歓迎してくれた。

割と追い返されるのも覚悟してたんだけど、心配無用だったな。

因みに、紫は人間ということを通して話している。

更に、村の人は宴会を開いてくれた。

そんなにビックイイベントなのかな？

しかし、そこで違和感を感じた。

そこではお酒が出されていて、かなりの数が飲まれていた。

紫を含めて、その場にいる人全員が酔っていたのだが、

不思議だった。

酔っているように見えなかったのだ。

勿論、意味不明な動きを見せる酔っぱらい、その場で寝てしまった人も数多くいる。

しかし、まるで本物の人間ではないように感じたのだった。

考えすぎだろうか？

翌日、俺と紫は出発の準備をして、村を出た。

「この先の山を三つ超えた所に、妖怪が沢山住んでいますので、お気を付けて。」

「最後まで、お世話になりました。では、失礼します。」

村の人は、最後まで親切だった。

多分、違和感も気のせいだったのだろう。

「さあ、隼！行くわよ！」

紫は何故か凄いテンションが高い。

「お、機嫌良いな？酔ってるのか？」

「もう酔いは覚めてるわ！ただ機嫌が良いだけよ！」

「体力残しとけよ？もしかしたら戦闘になるかも知れないぞ？」

「そんな事にはさせないわ！任せなさい！」

それなら、頼りにさせて貰おう。

村から離れて、一つ目の山を登っている時。

「すっげえ霧が濃い。見えるか？紫。」

「大丈夫、なんとか見えるわ。歩けるくらいには、ね。」

「どうする？一旦引き返すか？」

「うーん、まあ、見えない事もないし、早く超えちゃいませう？」

「りよーかい。」

しかし、更に何時間も登ったのに、いつまで経っても山頂が見えない。

霧が消える気配も一切無い。

「ねえ、隼。流石に長過ぎないかしら？」

紫は不安そうな声を上げる。

「迷ってんのかな、これ。」

「ええっ!?? 遭難!??」

「遭難、はしてないと思うけど、」

その時、霧が薄くなり始めた。

「あ！晴れてきたわ！これで安心ね！」

しかし、そこで大きな疑問が生じた。

「え？、霧って、一瞬で消えたりするの、か、？」

俺は考える事なく、反射で龍牙の能力を使用した。

瞬間、この状況を理解したッ！

自分たちが置かれたこの状況を！

「ッ！紫ッ！スキマに隠れて直ぐにこの場から離れろ！」

俺は反射的に紫へ叫んでいた。

自分でもまだ完璧に理解しきれていないのにも関わらず。

「え!??」

「いいからア！早くッ！」

無理矢理にでも、紫をスキマに隠れさせた。

そして、霧が完全に晴れるッ！

「これは、一旦GAME OVERかな？」

俺の周りを、大量の妖怪が取り囲んでいた。

上下関係

「まあ待て！俺に敵意はない！」

現在、俺は大量の妖怪に囲まれている。

種族は、犬？いや狼か？

「貴様、もう1人を逃しおいて、信用できると思っかッ！」

・・・紫を逃すには迂闊だったか。

弁解の余地が無え。

「じゃあ、ここに武器を置く！それなら良いだろ！」

そう言っつて、俺は地面に刀を置いた。

まあ、能力で出せるんだけどね。

それは知らないと思うし、

すると、妖怪たちは何やらコソコソと話し始めた。

つて事は、ここにリーダー的存在は居ないのだろう。

要するに下っ端だ。

数分後、妖怪の1人が発言した。

「今から、貴様を連行する！手枷足枷をして貰うぞ！」

そう言っつと、周りの妖怪たちが枷を取り出して、俺の体に装着してきた。

抵抗出来ないこともないが、

いずれ協力を求める相手だ。

慎重にやろう。

「さあ、歩け！」

妖怪たちは、無理矢理俺を引っ張る。

さっつきから思っつたけど、随分荒っつぽいなあ。

数十分程歩いたその場所は、まさに1つの町だった。

住宅街は勿論、道場や銭湯など、今まで出会ってきた妖怪の知能では考えられない。

これが、妖怪の山ってやつか。

勿論、住む者は全て妖怪なのだが、その中でも、上下関係つてのがあるっぽいな。

その最上位のやつさえ説得出来れば、俺の勝ちって訳だ。
簡単に言えば。

連行中、すれ違った妖怪は全員、不審者を見るような目でこちらを見してきた。

実際、不審者なのは間違い無いかも知れないが。

そして、更に歩いて数分。

大きな屋敷に辿り着く。

直ぐに俺を連行していた妖怪の1人が中に入っっていた。

そいつが、一応責任者か何かなのか？

だとしたら、さっきの相談といい優柔不断な野郎だな。

数分後、その妖怪は戻り、

「貴様は一旦牢に入れる。ついて来い！」

また俺を引っ張っていった。

しかも、更に乱暴に。

それが気になったので、試しに聞いてみる。

「お前、屋敷でなんかあつたのか？」

「貴様には関係のないことだ。」

そいつは随分と苛立ちを覚えている状態だった。

それは、誰が見ようと一目でわかる。

そのくらい露骨に。

やがて、俺は牢屋にぶち込まれた。

イメージとしては、昔の日本の刑務所って感じ？

いや、刑務所って言葉が存在しない頃の牢屋かな。

とりあえず脱獄の手立てを探ってみる事にしたが、特にそんな必要も無さそうだ。

鉄格子は錆びかけているし、天井も簡単にぶち抜けるだろう。

問題は見張りだ。

見張りは数十分交代で常に目を光らせている。

バレずに逃げるのは不可能と言っても過言ではない。

考えても無理なものは無理なので、隙が来るまで牢屋の中で寝る事にした。

『ちよつと寝ないですよー』

ん？今紫の声がしたような、

気のせいかな？

再びゴロンと寝転がった。

『だから寝ないでつてば!』

「紫!?」

「騒ぐな!」

思わず叫んだせいで、見張りに怒鳴られてしまった。

いや、そんな事はどうでもいい。

「紫? 何処にいるんだ?」

見張りどころか、俺ですら聞き取れるかわからない声量で話しかけた。

『スキマの中よ。今は、貴方の耳元にスキマを開けてるの。』

「成る程、無事だったんなら安心だ。」

『・・・それで、隙はありそう?』

「いや、無いな。スキマに入って抜け出すって作戦だろ? でも、強引に行ってしまったら、目的達成が不可能になっちまう。」

『・・・そう。』

「まあ、なんとかするよ。」

『大丈夫?』

「まあ、スキマの中から見とけ。」

数時間後、何回かの見張りの入れ替わりによって、さっきの責任者っぽい妖怪が見張りに変わった。

「さっきの話、問いに答えろよ。」

「すぐさま俺は声をかける。」

「牢の中で大人しくしている!」

益々苛立っているな。

「そう怒るな、怒る意味などあまり無いぞ?」

「黙れと言っているだろう! 貴様はいつらが処分を決めるまで、そこで大人しくしていればいいんだッ!」

「あいつら? 上司にそんな態度とつていいのかな?」

「ッ! 別に奴らのことを尊敬なんかしていない! ちよつと腕っ節が強いだけの癖に、」

腕っ節? つてことはやつぱり何かあったんだ。

この山の主権を巡る何かが。

「大体、あいつらが悪いんだよ!」

そいつは、聞いてもなしに勝手に喋り始めた。

「あいつらつてのは、今の主権か?」

「違え! 元だッ! あいつらが鬼なんかには負けるから!」

その言葉に違和感を覚える。

「なんだよ、負けるからつて。」

「あ? 元俺たちの上司だよ、あいつらに力がない所為で!」

そいつはそのまま続ける。

「鬼くらい撃退しろよ! 簡単に負けやがつて!」

「・・・じゃあ、お前らが」

「はあ!?? なんでだよ、長がしつかりしとけば良いだけだろ!」

その次の瞬間、身体が勝手に動き出していた。

鉄格子を無理矢理引きちぎり、そのままの勢いでそいつに飛び蹴りを浴びせた。

「甘ったれてんじゃねエ！テメエの力不足を人のせいにするなツ！」

そいつは蹴り飛ばされた部分を抑えながら、こちらを怯えた目で見ている。

直後、足音が聞こえてきた。

「あんた、面白いねえ！」

そいつは、突然話しかけてくる。

「誰だ、お前。」

すると、そいつは突然戦闘態勢に入った。

「私は星熊勇儀。一戦、やろうよ！」

撃

「あつぶなッ！」

「そういう割には避けてるじゃないか！」

「避けれてなかったら、危なじゃなくて痛いだよッ！」

今俺は、星熊勇儀と名乗った鬼と決闘をしている。

とは言っても、正式な勝負でも何でもない。

「待て！話せばわかる！一旦手を止めろ！」

「私は話すより、こっちの方が早い！」

勇儀の拳は止まらず、猛スピードで顔面に迫る。

俺は顔を逸らして交わすことは出来た。

瞬間、ズドオオオオン!!と音が鳴り響く。

拳は後ろにあった柱にぶつかったのだが、その柱はもはや見る影も無く、ただの瓦礫の残骸だ。

「お前！命中してたらどうすんだッ！」

「そしたら、それまでの奴ってことさーほらもう一発！」

「待てエエエエ!!」

ズドドドオオオオオン!!!

戦闘が始まって数十分が過ぎた。

俺を閉じ込めていた牢屋は、もはや牢屋の意味を成さず、単なる瓦礫の山だ。

周りには沢山のギャラリーが集まって、完全に見せ物と化している。

「うーん、ちょっとはそっちから仕掛けてきてくれないかねえ。」

「だから戦うつもりは無いって!」

勇儀はまだ余裕そうだ。

「もつと白熱しないと、周りが飽きちゃうじゃないか。」

「見せ物じゃねえぞ!」

周りのギャラリー達は、座り込んで酒を飲んでいたり、野次を飛ばしていたりと自由だ。

よく見たら、周りにいるのは全員鬼だな。

やっぱり鬼に侵略されているのか。

「・・・気が変わった。お前を全力で叩き潰してやる。」

「やっとやる気になってくれたかい?なら私も容赦しないよ!」

「勿論、手加減無しだぜツ!」

generate command!

「・・・と思ったけど止めだ。武器を使うのはフェアじゃない。」

俺は勇儀に拳を突き出した。

「素手でやろう、言い訳出来ないように!」

「え？ 良いのかい？ あんたにとって不利な勝負になるよ！」

「逆境を覆ってこそだろ？ さあいこうぜツ！」

「はっ！ どうなっても知らないよ！」

刹那、勇儀が仕掛ける。

目に見えないほどのラッシュ攻撃が繰り出されるが、それを直感で交わす。

というか、見えないから直感以外に術はない。

一度攻撃が止むと、その隙をついて地面を蹴り、至近距離へと迫る。

「オラアツ！ 喰らえツ！」

そのままの勢いで拳を打ち込む。

しかし、それに反応した勇儀は体をのけ反ってパンチを交わして、カウンターを仕掛けてきた。

「遅いよ！ それじゃあ私には届かないツ！」

カウンターを完全に処理しきれずに、勇儀の拳が右頬に掠った。

「・・・擦り傷で、これかよ、」

掠ったところの皮膚は破れ、そこから赤い血が流れた。

「ありや？ 決まったと思ったんだけどねえ。 楽しませてくれるじゃないか！」

「こっちは面白くもなんともねえよ！」

すかさずこちらから拳を連打する。

しかし、素手の勝負未経験である俺の速度など、勇儀の足元にも及ばず、簡単に捌かれてしまう。

「まだまだ！ 速さが足りないよ！」

再び勇儀のカウンターが炸裂し、腕の骨が悲鳴を上げる。

「今の音、もう終わりにしとくかい？」

勇儀から打ち止めの提案を持ち出された。

だけど、

「はッ！同情なんか要らねえ！戦闘中に欲しているものは、勝利だけだア！」

回復術・治癒ノ海！

その提案は、バツサリと切ってやった。

一瞬の沈黙が流れたが、直ぐにその場は盛り上がりを見せた。

周りからは、いいぞー！とか、やれやれー！とかの野次が大量に飛んでくる。

またその野次が、戦闘欲を刺激する。

それは、勇儀だって同じ、

「あはっ！やっぱりあんた面白い！いいよ！まだまだやろう！」

「さあ、次は簡単に捌かせないぜ。」

「奥の手ってやつかい？是非見せてよ！あんたの力！」

勇儀は再び身構える。

一切手加減無しって顔つきだ。

「・・・of course。」

イメージは居合切りだ。

自分の身体から、俺の拳を引き抜く。

俺はいつも通り、極夜を引き抜くポーズをとる。

一撃で仕留める、そのイメージのまま、

「・・・極夜、」

呼吸を整える。
完璧なタイミングを狙って、

「今だ！」

瞬間移動ツ!!

刹那、俺の身体は勇儀の前に一瞬で移動する。

「なッ!? その技は!?」

流石の勇儀も、突然の瞬間移動には反応しきれない。

「もう、手遅れエ！」

極夜・深淵・撃!!

瞬間、ズダアアアン、と重低音が鳴り響く。

裏ノ首謀者

拳に確かな感触はあった。

十分な速度に完璧なタイミング、未来を予知するみたいなのが出来るらないと、あれを防ぐのは不可能だろう。

だが、しかし、

「うわあ、こりやあダメだわ。」

勇儀は防いでいた。

あの理不尽とも言えるような攻撃を、なんと防いでいたのだ。

「ふう、危なかった。もう少しで大怪我を負ってたよ。」

「・・・まだ余裕に見えるけど?」

「そんなことないさ。今ので左腕が折れちゃった。」

「それは、まだ右腕があるって意味か?」

「くくつ、どうだろうなあ?」

再び身構えた。

体力はまだ大丈夫だが、決め手を防がれた以上、戦う気力がある訳もない。

「・・・今度はこっちから行くよ!必殺ッ!」

勇儀の全員からオーラのようなものが溢れ出る。

「ッ! 来いッ!完璧に受け止めてやるッ!」

「・・・あはっ！」

「は？何笑ってんだよ。」

「いや、本気で身構えるもんだからさー！」

意味不明だ。

そりゃ本気で構えるだろ。

「降参降参！もう本気は出せないよ！腕が悲鳴を上げてんだ。勝負は終わりっ！」

は？

鬼って負けず嫌いじゃねーのかよ。

それとも、本気か？

「・・・あー、そうかい。じゃあ俺の勝ちだな、やったぜ。」

とりあえず誤魔化してみたが、ハツタリなのは既に分かっている。鬼の大將クラスのやつだし、少し粘れば回復だって出来たはず。それに、片手でも俺を潰すぐらいの威力は出せた筈だ。

これに、どんな意図がある？

「ん？何て顔してんのさ。多少の安堵とか喜びとかあると思うんだけど。」

「俺も気になるわ、何で勝負を取りやめた。」

勇儀は少し考えた素振りを見せ、質問に答える。

「うーっ、あんたの主流は武器を扱う事なのに、主流が素手の私
が追い詰められたから、これじゃ駄目かい？」

「・・・お前は負けず嫌いじゃねえのか？」

すると、勇儀はキョトンとした顔をした後、笑ってこう答えた。

「いやいや、負けず嫌いだよ！だから、」

突然、俺との距離を詰めてきた。

「うおっ！何だよ！」

「次は負けないよ！完璧に叩き潰すさ！」

「・・・お、おう。受けてたつてやるよ。」

本当は二度とやりたくないわ！

この鬼ッ！

「ほらほら！隼も吞め！」

「俺は飲まないって言っただろ！勇儀お前、聴力と記憶力が無いのかッ!?？」

「あつはつは！宴会の場で私に悪口は通用しないよ！」

「鬼は酔わないんじゃないのか!?？」

「酔ってないさ！ただ上がってるだけ！」

「同じ事だア！」

勝負の後、何故か周りにいた鬼達が宴会を始め、それに妖怪の山に住む殆どの妖怪が集まっていた。

それは、鬼は勿論、天狗や河童など、

てか紫イ！お前どこにいんだよ！！

「あんた凄えな！今度俺と戦おうぜ！」

「いやいや、俺の方が強えぞ！」

などと、俺に勝負を挑んでくる妖怪も沢山だ。

形だけでいえば、あの勝負は勝利だからな。

形だけなら、ね。

「悪いけど、進んで戦いたがる性格じゃないんだ。勝負は断る。」

とりあえず、隠密に断る。

あまり嫌われるのは良くないから。

「でもよ、戦ってる時のあんたの目、戦いを拒む性格の目じゃねえぜ？」

「そう、あれは完全に戦神の目だ！」

戦神？須佐男とかの事かな、

それが気になったので、なんとなく感覚で聞いてみた。

「戦神って、誰だ？神様？」

「あつ？・・・ああ、そんなに甘つちよろいもんじゃねえぜ？遙か昔、妖怪を全滅寸前まで消しとばした奴の事だ。あれは人間だった何て言われてるが、そんな訳ねえよな！」

「全滅、；、それいつの事だ？」

「いやあ、もう何億年前の話だよ。そんな時生きてた妖怪何て、もう生き残ってねえさ。」

・・・まさか、ロケット発射前のあの戦い!??
ってことは、それは俺のことになるんじゃない、

「あ！あともう一つ、それは2人いたらしい。」
龍牙のことが、

「戦神って呼び方が多いけど、黒い悪魔、紅き龍って呼ぶ人もいるな。」
「・・・。」

「ん？どうしたこの世の終わりみてえな顔して。」

「あああッ！」

「うおッ!??!」

格差おかしいだろッ！

何だよ龍牙のやつはカツコいい感じの名前なのに！

俺のあだ名は黒い悪魔て！

台所によくいるアイツじゃねーかッ！

何だよこの格差龍牙コラアアア！

「お、おい。大丈夫か？」

「あ?・・・あ、ああ、大丈夫だ。ちよつと頭痛がな、」

嘘は言っていない。

実際頭が痛い。

いろんな意味で、

「お?盛り上がってるねえ。」

そうこうしてたら、勇儀が近くに寄ってきた。

なんか面倒そうなやつを連れて。

「あんたが咲風隼かい?私は伊吹萃香。よろしく！」

こいつ、酔ってんな!??

因みに、自己紹介はさつきした。

「あんだ、一杯も呑んでないじゃないか！」

萃香という小柄な鬼は、初っ端から俺に酒を進めてくる。

鬼つてのは物分かりが悪いなア！

「酒は駄目なんだよ、聞いてねえのか？」

「いやー、だってさつき帰ってきたばっかだし。」

そっぽを向くな。

「どうせなら私も戦いたかったんだけど。」

「ごめんだね、二度とごめんだ。」

「なんでよ!?!?。」

「勇儀、一つ聞きたいんだけど。」

宴会の途中、勇儀に尋ねた。

「ん？何の質問だい？」

勇儀は酒を持ちながら答える。

「・・・この山、みんな意外と仲がいいんだな。」

「うーん、あんまり考えた事ないなあ。」

「確かに、鬼に他の妖怪は頭が上がってないけど、それでもだ。」

勇儀はちよつと誇らしげにこちらを見る。

「ははっ、まるで侵略があつたなんて思えねえよ。」

そういうと、勇儀の杯から酒が少し零れ落ちた。

「え？何言ってるのさ。」

「・・・え？鬼が侵略したって、話。」

「いや、私達は昔からここに住んでるよ。侵略って、何の話さ?」

「侵略は、存在しない、、、?」

「さてよ、こんだけフレンドリーな連中が、入ってきただけで捕えたりするか?」

「今までの会話からして、鬼っていう種族は、卑怯なことを嫌うはずだ。」

「そいつらが、果たして人数有利を優先したり、騙したり、つけてたりするか?」

「というか、私も聞きたかったんだけど、」

「何で牢屋なんかにしたの?」

その時、

「うわあああつ!止めろオ!」

突如、楽しい宴会場から、残酷な悲鳴が上がった。

悲鳴が聞こえた方向を見ると、

そこには、何体か鬼を殺した、大きな鉈を持つ、

俺が殴った天狗が佇んでいた。

「ここまででは、計画の内だ。」

過去の残党

「お前、どういうことだ。」

現在、鬼を何体か殺した天狗と対峙している。

勇儀は怒りを抑えるのが、既に限界だ。

「どういうこと、だど？」

淡々と、そいつは話し始める。

「やはり、警戒する必要は無かった。簡単に感情を乱すような奴に、な。」

「いいからどういいうつもりか話せッ！」

「・・・フン。いいだろう、話してやる。ただし、」

突然そいつは飛び上がった。

そして、

「これを耐えきれたらなアア！」

終焉ノ波動

「ッ！アイギスの盾！」

そいつの身体から、何色とも言えない波動が放たれる。

その場にいる妖怪は、咄嗟に盾へ隠れた俺と勇儀と萃香以外、全員がそれをまともに受けた。

数秒後、まともに受けた妖怪達は次々と倒れ始めた。

まるで、生気を全て抜かれたかのように。

「ほう、防いだか。これで仕留めるつもりだったのだがな。」

「・・・何をした、みんなに、。」

「安心しろ、力を抜き取っただけだ。死んではいない。・・・まあ、後で殺すが。」

「テメエ、許さ」

その瞬間、俺のすぐ隣から凄まじい速度で何かが飛び出していた。

「よくも私の仲間を！あんたは絶対叩き潰すツ!!」

それは、怒りを抑えきれなくなつた勇儀であつた。

勇儀は目にも止まらぬ速さで、そいつに急接近していく。

「ほう、凄まじい速度と気迫だ。」

「余裕を見せるのも今の内さ！喰らいな！」

そのままの勢いで、勇儀は攻撃を繰り返す。

しかし、勇儀の攻撃は簡単に躲かされてしまった。

「なっ!!?」

「星熊勇儀、確かに貴様は強い。恐らく俺よりも・・・だが！まだ傷が癒えきっていないな！」

「ツ!!? そんな訳！」

「そう、普通なら治るのだ。だがこの現状！普通の状況では無いツ！怪我人は大人しく地べたで這いつくばるがいいツ!!」

そいつは勇儀へと拳を叩きつける。

「ぐあああ!!」

勇儀は地面へと落下する。飛び上がった時よりも早い速度で。

「勇儀イー！」

大急ぎで勇儀に駆け寄つたが、完全に気を失つてしまつていた。

俺は天狗を睨みつけた。

するとそいつは、ゆっくりと俺の目の前まで降りてくる。

「まだ戦意があるのか、今を見て。呆れたやつだ。」

正直限界がきている。

もう戦う体力が残っていない。

全く動いていない筈なのに、だ。

「・・・教えろ、テメエの狙いを。」

俺は力を振り絞って、そいつに話しかけた。

「・・・私はこの山を自分の根城にする。そして、いずれ世界を滅ぼす。」

そいつは淡々と話し始めた。

「もうかなり前から、計画は進めていた。この山の住人の一人として。そして、もうじき第一段階を実行するつもりだった。・・・だが！」

そいつは俺の喉元に爪を突き立てる。

「貴様がやってきた！俺は知っている、貴様は一度、須佐男に勝利した男。」

「須佐男!?!? 何故それを！」

「そんな厄介者、当然野放しにする気はない。俺はまず、貴様の前に幻覚の霧で偽物の村を作った。」

偽物の村!?!?

ということとは、あの時の違和感はそういうことだったのか！

「そして、偽人による嘘で油断を誘い、そこを俺の幻影で囲んだのだ。」

「あれも、偽物ツ！」

「そして牢屋での芝居。お前の感情の乱すところは、素晴らしく滑稽だったぞ。」

「・・・クズ野郎が。」

「そして今に至る訳だ。まあ、長話する気はない。」

そいつは刀を取り出した。

「さあ、別れだ。死ねェ！」

首目掛けて、刀を振り下ろした。

「何言ってるのさ。死ぬのは、あんたの方だよ？」

「!?!? 貴様は!?!?」

その攻撃は何者かによって防がれた。
天狗は慌てて距離を取る。

その正体は、

「萃香！」

「お待たせ、色々てこずつちやつてさ。」

「何してたんだよ！さっきまで！」

「笑顔になってる場合じゃないよ！隼！」

「えっ!?？」

気づかぬ内に、どうやら笑顔になっていたらしい。

実際、少し安心していたのだが。

「伊吹萃香！貴様今まで何処に！そして何故、衰弱の霧の効果を喰らっていない！」

「衰弱の、霧？何だよそれ！」

俺は萃香に問いかけた。

「隼、あいつは私達の宴会の途中、こっそり力が衰弱する霧を撒いていたのさ！」

「何だと!?？ ってことは、体力が限界の理由は！」

「そう言うこと。さあ、その姑息妖怪！何で私が効果を喰らっていないと聞いたね？」

萃香は焦るあいつに話しかける。

「なっ!?？ ……あ、ああ！何故効かない！答えろ伊吹萃香ア！」

「……ふっ、教えてあげるよ。ただし、」

次の瞬間、萃香はさっ、と左に身を投げた。

「これを受けきれたらね！勇儀!!」

背後には、力を溜めた勇儀が構えていた。

「ツ!?？ ……な、何故貴様がアアア!!」

終焉ノ

「もう遅いよ!!」

四天王奥義・三步必殺!!

辺りに凄まじい衝撃が走った。

一段解放

「・・・やったか、勇儀。」

「いいや、まだ油断は出来ないさ！」

辺りに静寂が走る。

先程の騒ぎがまるで嘘のように。

次の瞬間！

突然地面が揺れ始めた。

その音は、山が悲鳴を上げているような。

そして、ドゴンツ！という音と共に、砂煙と巨大な影が辺りを覆った。

「なツ!? あれで死なねえのかよ！」

「嘘だろ、確かに手応えはあつた筈なのに！」

三人は再び身構える。

奴の霧の効力は消えている為、体力は完全に戻っている。

だが、体力ではなく気力の問題だ。

度重なる事件、戦闘により、既に気力は底を尽き掛けている。

やがて、砂煙の中からその正体を現した。

「なあ!? あの姿、まさか!?」

その姿は、

「八岐大蛇!!」

八つ首の大蛇だった。

「お前は須佐男が討伐した筈だろ！何で生きてやがるツ！」

はるか昔、八岐大蛇という八つ首の大蛇の妖怪は、須佐男命によって討伐された。

筈だった。

「フン、あんなものはまぐれだ。我を騙して殺したに過ぎない。」

首の一つが喋り出した。

「だが、所詮は単なる荒くれ者。我を殺し切るなど思い上がりも甚だしい。」

また一つの首が喋る。

「我はあの時、完全に死ぬことは無かった。だが！奇妙な剣の力によって、我の力の殆どが奪われてしまった！」

「そして我は姿を変えて、この山に潜伏し、力を回復させた。」

「いずれ、須佐男とかいう奴含めた全てを破壊する為に！」

「だがしかし！お前らのせいで、特に隼！貴様が来たせいで全てが狂った！」

「まだ力は完全では無いが、そんなことどうでもいい！我を追い詰めた貴様ら三人に敬意を払い、」

「本気ので殺してくれる!!」

刹那、八岐大蛇は首を引っ込めた。

「ヤバイ！来るツ！二人共俺の背後に入れツ！」

「もう遅い！直撃は免れない！」

猛毒の息!!

八岐大蛇の首から吐き出された息は、凄まじい速度で三人目掛けて放たれた。

「アイギスの盾!!」

「金剛螺旋!!」

「濛々迷夢!!」

それぞれ自分の身を守った。

だか、しかし、

「そんな小細工、猛毒の前では単なる埃！丸ごと薙ぎ払ってくれろ！」
盾は一瞬で溶け、相殺しようとした勇儀と萃香の技も、簡単に押し切られてしまった。

「三人同時に、この威力かよ！どうする萃香！」

「どうすんのさ、勇儀！」

「何で私に丸投げなんだよ！」

その時、対策を考えるので精一杯で、八岐大蛇の動きをちやんと見ておらず、密かに構えていた首に気付かなかった。

「まずは三人で、、って不味い！」

「気付くのが遅いぞツ！まずは貴様だ咲風隼ア！」

石化の息!!

隠れて準備していた首からそれは放たれた。

「genera 間に合わねえ!!」

石化の息は、一直線に向かってくる。

俺は苦し紛れで目を閉じて手を出した。

防げないことを知りながら。

だが、それはいつまで経っても当たるとは無かった。
「な、なんで。はッ!?!?」

俺の目の前には、俺を庇った勇儀の姿があった。

「……隼、負けたら承知しないよ!」

瞬間、勇儀の体は石になってしまった。

「ゆ、勇儀。お前、」

「勇儀いいいい!!」

その瞬間、自分の中で何かが外れた気がした。

完全には無いが、重要なことの鎖が一個外れたような感覚を覚えた。

「ふ、ふはははははははは!」

八岐大蛇は、高笑いをした。

「代わりに受ける、か。その根性は認めるが、結局は同じことよ! 貴様
全員死にゆく」

「黙れ。」

その一言に、

八岐大蛇は一瞬たじろぐ。

「……おいおい隼ア。感情的になるなどあれ程忠告してやったのに、
また同じ過ちを繰り返すのか?」

「……10秒だ。」

「……はあ?」

「10秒後死ぬ。お前は。」

数秒後、身体は全て消えて無くなり、首一つとなった状態で、ボソツと呟いた。

「こんな、ところで、死んで」
ズシヤツ

「ジャスト10秒、勝ったのは俺達だ。」

八岐大蛇は今、完全消滅し、

その場には、剣の山だけが残った。

再会・再開・また宴会

「……なあ、もう終わりにしないか？」

「え？まだ始まったばかりじゃないか。」

「これはそうだ。だけどさ、」

「今日宴会、何回目だと思ってんだッ!!!」

八岐大蛇はあの攻撃によって完全に消滅した。

幸い、怪我人は一人もおらず、石化された勇儀も元に戻った。

そこまではいい。

問題は今、この現状。

倒れていた妖怪達が起き上がるや否や、即座に宴会を始めたのだった。

これで何回目だよ！

今日一日で三回以上やってんだろうが!!

「まーまー、隼も飲みなつて。」

「やっぱり勇儀が勧めてくる。」

「酒は嫌いって何回言っただと思っただよ!この酔っ払いが!」

「何言ってるのさ、決着も着いたんだし、やる事と言ったら宴会だろ?」

「意味不明だ。」

全く石になつていたのに、何だこの飲みっぷりは。

もう既に、何杯飲んだのだろうか。

「とうか、何であんたは宴会が好きじゃないんだ?」

「酒が飲めないからだ。以上。」

「でも雰囲気とかは嫌いじゃないだろう?」

「・・・それは、まあ、そうだけどよ。」

「じゃあ騒ごうよ!あんたの為の宴会でもあるんだから!」

「・・・お気持ちだけ。」

その日は、夜を越す勢いで宴会は続いた。

そして、辺りが鎮まった頃。

ちよつと離れた場所に、萃香を呼び出した。

「お前、何であの場において大丈夫だったんだ?」

「ん?あー、私は現場に居たからねえ。何となく異変に気付いただけさ。」

酒を飲みながら萃香は答える。

こいつはこいつで意味がわからない。

「いや、そうじゃなくて、何で霧の効果を受けなかったのかなーって。」

「・・・隼、毒は毒に侵されないでしょ?」

澄ました顔でそう答えた。

「・・・なんかすげえ納得した。」

「納得したならそれでいいんじゃない?・・・さ!この話は終わり!」
すると萃香は、傍から何か瓶のような物を取り出した。

「何だそれ?」

「酒嫌いの隼でも飲めるように薄めた酒。飲んでみなよ。」

「・・・大丈夫かよ。」

「私にとっては水同然だから、きつと大丈夫!」

こいつ基準は絶対に良くない。

しかし、興味の方が強くなったので、

「分かった、ちよつと飲んでみる。」

萃香はニヤリと笑って、それを差し出してきた。

「ほら、乾杯っ!」

「乾杯。」

それを少しだけ飲んでみた。

「・・・萃香。」

「どう?流石に薄めす」

「駄目だ倒れる。」

バタツ、

「ええええ!!? ちよつと!弱すぎだつてえ!!」

その後の記憶はない。

翌日、

「・・・ん？あれ、何でこんなところに。」

俺はよく知らない場所で目覚めた。

「やっと起きたかい？一口飲んだだけで倒れるなんて、」

俺が起きたと同時に、萃香が近づいてきた。

「いくら何でも弱すぎだよ、全く。運ぶの面倒だったんだから。」

「面目ない。」

「まあ、勧めた私も悪かったから、お互い様って事で。」

どうやら、あの一口で俺は倒れてしまったようだ。

苦手だとは思っていたけど、よもやそこまでとは。

よ。
というか、何で萃香は何にも無かったみたいに酔いとかがないんだ

やっぱり意味不明だ。

V S 四天王の一角

「待て萃香！落ち着け!!」

「何でさ、約束したでしょ?」

そう言つて、萃香は弾幕を放つ。

「手合わせしようつて!!」

そんなモン承諾してねえぞ!!

そんな理不尽な対決が始まつて、数分が経過した。

「うーん、何で攻撃してこないの?」

一向に仕掛けない俺に痺れを切らしたのか、いきなり手を止めて話し出した。

「だから手合わせするつもりはないって言つてんじゃん!」

ていうかそのセリフ、勇儀にも同じ事言われた気がする。

全く同じシチュエーションで。

「……よしわかった!」

突然、萃香が何か閃いたかのような声を上げた。

「何だよ急に。」

そう言うと、萃香はニヤリと笑い、

「今から殺す気で行くから！抵抗しないと絶命するよ!!」

・・・は??

「戸隠山投げ!!」

萃香は一瞬にして俺に近づき、俺を掴んで投げやがった。

岩のようにぶん投げられた俺は、そのまま地面に衝突した。

「こべえっ!!」

休む間も無く、萃香は接近してくる。

「ほらっ!!まだまだ行くよッー!」

マジでこの種族頭おかしいッ!!!!

その後、暫く俺は投げられ続けた。

何十回にもなる地面の激突によって俺は、

怒りのボルテージがMAXに昇った。

「……だー！もう限界だ！そこまで言うならいいよぶち殺してやるッ！」

「おーやっとその気になった？じゃあ改めて、」

萃香は再び弾幕攻撃に切り替える。

密度はそこまでだが、一発一発の威力が桁外れだ。

おそらく、並大抵の盾なら数秒で破壊される。

アイギスの盾でもいいが、あれはここぞと言う時に使いたい。

悩んだ挙句、暫く自力で避けることを選んだ。

弾幕を上下左右に躲し、なんとかやり過ごす。

流れ弾は地面を抉り、足場は悪くなる一方だ。

「ほらほら！避けてばかりじゃ何も始まらないって言ったでしょ！」

「黙つとけ！今色々考えてんだよ！」

適当にブラフを立てる。

いや、ブラフではないが、特にいい案が思いつく様子がない。

「考えるのもいいけど、直感だつて大事だよ！」

「直感だけを信じても、あんまりいい経験が無いんでね！」

「どうだろう、ね！」

萃香は更に弾幕の密度を上げる。

この密度だと、間を縫つて躲すのは難しそうだ。

俺は火神を引き抜き、躲し切れない弾はそれで弾いた。

何故、火神なのかは、極夜より短く振り回しやすいからだ。

それでも割と長い刀だが。

「畜生ッ！どんだけ体力余つてんだよッ！」

「隼だつて、まだ余裕そうじゃない！……つて危なッ！」

ん？危ない？攻撃もしてないのに何で、

「あー、びつくりした。自分の弾幕にやられちゃうかと思った。」

「どうやら、俺の弾いた弾幕の一つが、偶々萃香の方へ向かっていったらしい。」

「威力があまりにも高いから、弾き返すのは無理だと思っていたが、作戦は弾き返して攻撃するか??」

「いや、一回弾き返せることがバレてしまったら、諏訪子戦みたいな作戦は出来ない。」

「なら、どうすれば、」

瞬間、俺の脳裏に一つの記憶がよぎる。

それは、あの事故が起こる前、偶々テレビをつけた時見た記憶。

ある一人の人物の、ある物の光景。

『直感だつて大事だよ!』

更に、先程の萃香の言葉がふとよぎる。

「・・・試してみるか、見様見真似で！」

generate command

俺は、極夜より、更に火神よりも短い剣を作り出した。
そしてそれを、両手で構える。

「今度は何のつもり？・・・もっと楽しませてよ！隼！」

「・・・ああ、任せとけ。」

思い出せ、その記憶を限界まで絞り出せ、
想像しろ、この山は、このフィールドは、

「戦場のテニスコート」

俺は弾幕を躲しながら、少し弱目の弾を見抜いて、
それを萃香目掛けて打ち返した。

「なっ!?？ 何それ!!」

打ち返された弾を、萃香は反応し切れずに足へ命中した。

そう、俺が思い出した、テレビの映像。

それは、プロテニスの試合だった。

「・・・まさか完璧に打ち返してくるなんて、でもまだまだだ！」

萃香は更に弾幕を増やす、密度はもはや諏訪子と同等レベルだ。

その弾幕を、テニス風の剣技で向かい撃つ！

これはテニスに似ているが、やる事は真逆だ。
来るボールはなるべく躲し、チャンスボールを敵の死角ではなく、
敵目掛けて打ち返す！

しかし、この直感的な作戦、決定打が無い。

このままだと、萃香だって適応してくるだろう。

だから、完璧なタイミングで、仕掛ける必要がある。

油断は絶対にしないだろう。

ならば、弾幕で身が隠れた瞬間、

そこしか無い！

その瞬間を狙って、俺は弾幕を見切り続ける。

「まだ返せる？なら、もっと増やすだけだよ！おりやああああ！」

萃香は更に弾幕を増やす。

もう密度は、諏訪子どころじゃない。

完全に、全身全霊の攻撃だ。

そろそろ、俺の腕も悲鳴を上げてくる。

早いところ、その瞬間を見つけないと！

その次の瞬間、それは突然やってくる。

萃香の弾幕増量が仇となったのだろう。

真正面に弾幕の壁とも言える物が向かってくる。

「ここだアア!!」

アイギスの盾!!!

こここの為に残しておいたアイギスの盾を使い、その壁弾幕を反対方

向に弾き返した。

その弾幕の壁は、俺を死角に入れて、萃香の方へ直進する。勿論、俺はその弾幕と同じ速度で、死角から萃香に接近する。

だが、萃香も既に気付いていた。

隼は死角から打撃を入れようとしている、と。

「甘いよ！私だって待ってたんだ！隼が接近してきたこの瞬間を!!」

萃香はその弾幕を躲して、俺に急接近し、

大江山悉皆殺し!!!

「私の、勝ちだツツツ!!!」

違うぜ、打撃じゃない。

弾丸だツ
!!!!!!

その瞬間、超特大サイズの弾丸を構える。

「ちよっ?!?」

「発射アアアアアアアアアア!!!」

瞬間、爆発音が辺りに響く。

その弾丸は、萃香だけでなく、
俺をも纏めて吹き飛ばした、、

勇儀の悩み

咲風隼と伊吹萃香。

二人の勝負の決着は、

伊吹萃香の勝利に終わった。

「痛ってえー、」

現在、勝負によってついた怪我の治療をしている。
ただ包帯を巻いているだけだが、

至近距離から放った弾丸は、萃香に命中したかと思われた。
だが、萃香は寸前まで放っていた弾幕によってダメージが和らぎ、
逆に反動で俺の体を地面に吹き飛ばした。

まあ、何だ。簡単に言えば、自爆だ。

「そんな落ち込む事はないって、。ほら！實際運が悪かっただけだし！」

萃香はこんな風に言ってくれているが、

「・・・勝った奴に言われてもなあ、。」

「ええ!?？」

「ま！後悔しても仕方ねえや！一度負けたからって、次勝てばいいだけだな！」

「そうそう！その息だつてさ！」

リベンジの相手はこいつなんだけどなあ。

「おいおい紫イ。いくらなんでも遅いんじゃないかア？」

「痛い！痛いってばあ！」

隼と二人で山に入った時、二人は全方向を包囲された。

私はスキマで逃れようとしたが、何故か隼を通す事が出来なかった。

その後も、山への侵入を試みたが、何度やっても移動が出来ず、私もよく知らない場所へと移動する羽目になってしまった。

「・・・成る程、言い分は分かった。何度も試してくれていたことも。」

「だが元凶を倒したのは二日前だッ！昨日ならいい、だが二日前だぞ！昨日何してやがったア！」

「ごめん！ごめんってえ!!・・・昨日は、ちよつと寝てて、」

「寝てただだア？テメエ人が命がけで戦ってたつのにッ！」

「だからごめんってエエエ!!」

そんなこんなで、数十分ほど説教された。

「なあ隼。聞いてくれないか？」

「ん？何だ急に。再戦はしないぞ。」

勇儀が突然、後ろから話しかけてきた。

因みに紫なら萃香に付き合わせてる。

飲みの、な。

ご愁傷様だぜ。

「何、ただの愚痴だよ。隣いいかい？」

そう言つて、俺が腰掛けている横に座つてきた。

「お前も愚痴とか吐くんだな。」

「そりゃあ、私は聖人じゃないんだから。」

「確かに。」

まあ、いきなり喧嘩吹っかけてくる奴に愚痴が無いわけ無いわな。

「で、どんな愚痴だ？」

勇儀の愚痴、ちよつとワクワクする。

「何でそんなに機嫌がいいんだ？」

「暴言つて面白いじゃん。」

「いい性格してるねえ。」

「私は、あんたに会えて久しぶりに楽しい勝負をした。」

勇儀がそう切り出した。

「・・・俺は全然楽しくなかったけど？」

「自分ではそう思ってるかもしれないけど、戦つてた時のあんたの顔は笑っていたよ。」

そうだったけ？

「単刀直入に言うよ。．．．私達鬼は、いずれここを去る。」
真剣な眼差しで、勇儀はそう言った。

「．．．それは何故？暮らしが不満か？」

「いや、不便な事は特に無い。そうじゃないんだ。」

すると突然、ビツ！つと俺を指差した。

「昔はあんたみたいで人間が割といたんだ、純粋なやつが。」
「俺を馬鹿って言いたいのか？」

「ははっ！そう言う事じゃないさ。ただ真つ直ぐに生きようとする人間ってこと。」

勇儀は少し笑みを浮かべたが、再び真剣な顔に戻り、

「最近の人間は、結果さえ良ければ何でもいいんだ。だから、手段は選ばない。卑怯な手だつて沢山使う。」

「．．．」

「もう、楽しさを見出せないんだ。」

少しの沈黙の後、勇儀は立ち上がった。

「悪かったね、変な話聞かせて。そんなな勝手にしろよって思ってるだろ？」

「．．．いや、そんなことない。難しいなって、思っただけさ。」

「そうかい、なら良かったよ。」

そう言うと、勇儀はその場を去ろうとした。

俺は、

「勇儀イ!!」

勇儀はゆっくりと振り返る。

「まだお前と、決着ついてねえからな！もう戦いたくないとか、絶対言うんじゃねえぞ！」

そう言うと、勇儀はニヤリと笑い、

「勿論！覚悟しときなよ!!」

その日は、勇儀の酒に徹夜で付き合わされた。

それでやめとけて何回言っても聞かないのに、酔う気配が全くないのはマジで引いた。

第五章・太陽の畑編 一面広がる花畑

「……あづい。」

あの後、妖怪の山を出発した二人。
それから数百年経過。

季節は、真夏。
猛暑日。

「……紫、何とかしてくれ。」

サツ、つと紫の方を見ると、そんなに暑そうにはしていない。
何でだ、

「無理よ、そんな能力持ってないわ。」
んだよ、ドラ○もん見てえな能力持つてるくせに。

「……今、理不尽なこと言われた気がするのだけど。」
「知らないね。あー、暑い。」

結局、妖怪の山への交渉はまたの機会になった。

縦社会はあったが、取り仕切っている者がハッキリとしていなかったのが理由だ。

「……無駄足だったわねえ。」

「……いや、そんな事はない。鬼っていう種族と接せただけでも、多分収穫だ。」

「そうかしらねえ、」

「で、次は何処に向かってんだ？」

「……えっ？」

紫はそっぽを向いた。

まさかこいつ、

「おい、お前適当に進んでるとか言うんじゃねえだろうな？」

「い、いや！そんな事はないわ！今目的地目指して進んでる途中よ！」

口調が誤魔化す時と同じだ。

「へえ？じゃあ何処向かってんだ教えてくれよ。」

「えっとー、それは、その、秘密よ！とにかく行くわよ!!」

……駄目だこりゃ。

それから数日、山を四つほど超えた位置で、

「もう限界、沈む。」

「だらしないわねえ、」

「ってかお前、何で暑くないんだ。」

依然として、紫は平気そうだ。

「スキマの中だから、だと思っわよ？」

「はあ？じゃあ俺も冷やしてくれよ。」

「それが、何故か貴方はスキマに入れないの、仕方ないでしょう？」

「・・・初耳なんだけど。」

自分の身体、呪うぞ。

「他の人に言うわけじゃないでしょ。妖怪の山に入った時、何故か貴方はスキマに入れなかったの。」

「まじかよ。ってかヤバイ、暑さで溶ける。」

無駄口を叩いている暇もなさそうだ。

瞬間、一瞬だけだが、自分の身体に冷たい風が伝わったのを感じた。

「え、紫か？」

「?、何のこと?」

しかしまた次の瞬間、またしても冷たい風がぶつかる。

「紫じゃ、ないな。」

「ええ、私も感じたわ。夏の今の時期とは思えない風、」

「・・・流れてきた方向へ行ってみるか。」

感覚を空けて伝わる風を頼りにしながら、その発生した場所へと歩みを進めた。

そして、歩くこと数十分。

「・・・何だ、ここ。」

その場所は、一面巨大な花畑。

「おい紫、見たことあるかこんなの。」

「ある訳ないじゃない。」

一面に広がる花は、綺麗と不気味の中間のような雰囲気醸し出していた。

「・・・立ち寄ってみるか？」

「嫌よー！どう考えても何かいるじゃない！」

紫が強く拒否した理由は、その花にある。

普通、夏に咲く筈のない花が咲いていたのだ。

その時点で、何者かの能力によって守られていると考える。

だが、

「立ち止まっても意味がない。行くぞ紫！時には勇気を出して進まなきゃ行けない時があるツ!!」

「・・・そう、ね。ええー！このぐらいへっちやらよ！単なる一つの障害物に過ぎないわ!!」

二人は、その花畑に歩み寄る。

その花畑の、小さな家にて、
「・・・何者かしら？いや、関係ないわね。畑を荒らす者なら、容赦無く殺すだけ。」

いざ、太陽の畑の陣!!

花の妖怪 V S 境界の妖怪

「とはいえ、気が抜けるって。」

「ねえ、やっぱりそんなに警戒しなくてもいいんじゃない？」

警戒しながら、異質な花畑に入った二人。

気が和むような花の香りに惑わされながら、その道を進んで行く。

「……いや、何が起こるかわからない以上、警戒するに越した事は無い、はず？」

「何で疑問形なのよ！」

果たして二人が侵入した花畑は、単なる休憩スポットか、それとも恐怖のトラップか。

二人は暫く歩き続けた。

やはり、この季節には咲くことの無い花が咲き乱れている。

何かが関わっていることは間違いない、のだが、

「……そろそろいいんじゃないかしら？これは自然の産物ってことで、」

いくら探索しても何も起こらなかった為、紫はついに痺れを切らした。

「あー、もう観光しようぜ。」

それは青年も同じ。

結局、何も起こらなかった為、遂に観光へと移った。

まあまだ俺はいいい、いや良くはないが、

問題は紫だ。

「隼、この花は何?」

「いや俺に聞くな、別に詳しくないし。」

「何よ、何億年も生きてるくせに。」

「かなり理不尽!」

とまあこんなふうに、完全に観光にやって来た人間の反応である。

「うーん、じゃあこの花は!?!?」

「だから知らねえっての。」

そして、暫く探索という名の観光を続けた先。

遂に、

始まろうとしていた。

「……わあ、この花は?」

「だから知らねえ、あ、それは知ってる。」

何も考えず歩いてきた為、勝手に知らないと思い込んでいたが、それは強く記憶に残るような花だった。

「何だこれも知らないのね、って知ってるの？」

「すまん、知らなき過ぎて投げやりになってた。その花は、向日葵って花だ。確か、夏に咲く花だった気がする。」

「へえ、じゃあこれは不自然な物ではないのね。」

「まあ、そうだな。」

その時は、既に入る前の覚悟など消えかけていた。完全に油断し、安心しきっていた。

瞬間、右方向から迫った弾に反応しきれなかった。

「ッ！紫イイ!!危ないッ!!」

俺は紫を吹っ飛ばした。

あくまで軽くだが、

その弾は、俺の左腕に命中した。

「痛ッ!!」

「は、隼!??」

「こつち向くな構えろ紫イ!!」

間髪入れず、弾幕が迫る。

「畜生がアア!!」

generate command!

wide shield!!

弾幕は、全て塞ぎきった。

だがしかし、

「ヤバイ、左腕が、動かねえ、。」

「ちよ！早く手当てしないと！」

「いやいい！それより早く構えろ！攻撃は止まねえぞ！」

しかし、そこで攻撃は止まった。

そして、一人の人影が近づいて来た。

「随分と手厚い歓迎だな、ここの妖怪か？」

「ふふ、かなり警戒していた様子だったから、奇襲をかけさせて貰ったわ。卑怯だと言うかしら？」

「・・・いや言わないね、警戒をやめたこつちが悪い。」

「あら、意外と潔いじゃない。」

そいつはかなり余裕な様子だ。

「貴方達の目的は完璧には理解していないけれど、恐らくそれでしよう？」

「はあ？どれだよ。」

「とぼけないで。今まで幾度となく、その向日葵を盗もうとした人間がいたわ。貴方達もその一つでしょう？」

「・・・え？いい、いや、誤解だ！」

「口では何とでも言えるわ。さあ、ここで始末してあげる！」

「ちよ、ちよつと待つ」

「何よ、いきなり。」

その瞬間、隣で誰かが口を開いた。

声の方向へ向くと、そこには紫以外居ない。

じゃあ一体誰が、

「隼、貴方は自分の左腕を直しておいてね。」

この言葉で、誰の発言か確信した。

それは、紛うこと無き、八雲紫の発言だった。

「なっ!?? 紫!??」

正直、俺の中で紫を、過小評価というか、少し甘く見ていたのかも

しれない。

それは、出会いが会いだった為である。
だからこそ、今の声は紫だと思えなかったのだ。

「その妖怪、隼は卑怯じゃないこつちの落ち目だ、何て言っているけれど、私はそうは思わないわ。強いて言うなら、この卑怯者め！かしらね？」

「っ！・・・へ、へえ。なかなか言ってくれるじゃない？この侵入者。」
紫はその妖怪に煽りを入れる。

全くいつそんな技を、

「隼、ここは私が戦うわ。とくと見せてあげる！」

「・・・あ、ああ、任せた、よ。」

まるで別人である。

いや、もしかしたら本当に別人??

「妖怪！私は八雲紫！貴方の名前は？」

「・・・風見幽香よ。」

「よろしい。じゃあ行くわよ幽香!!」

「・・・中々楽しめそうじゃない。いいわ紫、本気で相手してあげる!!」

刹那、互いに弾幕を放つ。

遂に、二人の戦いの火蓋が切られた。

成長

瞬間、両者一齐に弾幕を放つ。

美しき花畑から一旦、弾幕の戦場と化した。

二人の弾幕は共に相殺し合い、華やかな花火の様に碎け落ちる。

幽香の弾幕には勿論驚いたが、それ以上に紫の弾幕に驚いた。

全く、いつの間に練習したんだか、

「くっ、中々やるじゃない、八雲紫。」

幽香は一度、手を止める。

それを見た紫もまた、弾幕を放つのを停止する。

「そういう貴方は、意外と大したことないわね？」

「なっ!? い、いつてくれるじゃない。いいわ!じゃあこれは捌き切れるかしら。覚悟なさい!」

そう言うと、幽香は高く飛び上がった。

そして、

「受けて見なさいッ!この弾幕をッ!」

幽香を中心に、全方向へ弾を撒き散らした。

だが、こちらから見ても、大した弾幕ではなかった。

「その程度、馬鹿にしてるのかしら!」

紫はその弾幕を、ふわりと避けようとする。

その時、幽香がニヤリと笑った。

俺の背中に寒気が通る。

「待てっ、。紫！動くなッ!!」

急いで、紫を止める。

が、

遅かった。

瞬間、紫の周りで大量の弾幕が発生し、それは襲いかかる。

「な!?？ 何で」

弾幕は直撃した。

避ける間も無く、

その後、発生した弾幕達は互いにぶつかって、その場を煙で包んだ。

「どうやら、私の勝ちみたいね。」

幽香が、ゆっくりと空から降りて来た。

「八雲紫、思ってた以上に強敵だったけれど。まだまだ未熟者ね、さあ次は貴方の番よ！・・・ええっとく、名前は？」

服に付着した埃を払いながら、俺に近づいて来る。

「・・・咲風隼だ。」

「そう、隼ね。じゃあ早速」

「何個かいいか？」

幽香が言い切る前に、それを遮る様に発言する。

「な、何よ。何か言うことでも？」

「ひとつ、お前の弾幕は凄い。避けることを見越して、実はその場で躲さなければならぬ弾幕を貼る。」

「・・・何が言いたいのかさっぱり分からないわ。どういう意味かしら？」

幽香は質問を投げる。

だが、それを無視して俺は続ける。

「ふたつ、だがあの弾幕、種が分かってしまえばどうって事ない。つまり、俺相手ならば通用しないという事。」

「なっ!? .. .だ、だから何? ならあれ以外の技を使えばいいだけじゃない! というか、それぐらい私は分かっているわよ?」

「・・・そして、最後に。」

「勝負は、まだ終了していない。」

その刹那、幽香はバツ！つと後ろを振り向く。
が、もう遅い。

「さあ、続きをしましょう！風見幽香!!」

スキマが現れ、その中から紫が弾幕を放つ。

「八雲紫!!?」確かに命中した筈なのに!」

慌てて幽香もガードするが、既にかんりの数をばら撒いていた為、
塞ぎ切れる訳も無く、

「あぐっ!...や、やるじゃない。どうやって、生き延びたのかしら?」

幽香は上手く身体を使って、被弾を数発に抑えていた。
だが、その数発はかなり意味のある被弾だ。

「簡単よ、私の能力でやり過ぎたの。」

「へ、へえ、一体どんな能力なのかしら?」

「...教えてあげる。ただし、この戦いの後でねッ!」

再び、スキマから弾幕を放つ。

これは、今作り出されたものではなく、恐らく少し前に用意していたものだろう。

まさか二段構えとは、

だがこの弾幕で、確実にトドメが刺さる!

行け紫イ!!

「……面白い。」

しかし、幽香は何処からか傘を出して、そこから弾を放ち相殺した。まだ立ち合えるのか、風見幽香。

「八雲紫。……いや、紫!こんなに楽しい気分にしたお礼に、とっておきを出してあげる!」

な!?!? とっとおきだと?!?
まだ隠してやがるってことかよ。

だが、紫も闘志は落ちていない。

「もう、出し惜しみはなし。本気の本気で行くわ!幽香!!」

間に休みなく、幽香は紫に傘を突きつける。

「あら?それがとっとおきかしら幽香。」

「……ふふっ、受けて見なさい。」

すると、傘の先端に光が集まっていく。

最初は小さな光だが、それがどんどん成長し、

「行くわよ紫イイイ!!」

最大まで成長した光は、傘の一点に集中し、
そこから一気に放出された!

その姿は、

まるで破壊光線!!

その光は、一瞬で紫を包み込んだ。

やがて、光が消えると、そこにはもう誰も居ない。
紫の姿は、無かった。

「ハア、ハア、あれは防げる筈ないわ。・・・私の、勝ちかし」
「いいえ、私の勝ちよ。幽香。」

その瞬間、幽香の後ろからスキマが開く。

そして、中から飛び出したのは、

幽香のとおっておきの一撃!!

「……次は、私が勝つわ、」

小さな声で、幽香は宣言した。

再び、辺りは光で包まれる。

決着は付いた。

もう、どんでん返しは無い。

もう既に、二人の決着は付いた。

勝者!! 八雲紫!!!

昨日の敵は今日の友

突然ですが、俺咲風隼は困り果てています。
今この現状を、

ただ一つの障害物の無い斜面を下るスケートボードの様に、
滑らかに解決する者がいるのなら、是非ともお会いしたい。

俺をここまで追い込んだ問題、

それは、

「・・・。」

「・・・。」

勝負後、少し距離を空けて一言も喋らない二人。

こいつらだよ。

どう対応すりゃあいいんだ。

あー、見えてイライラする。

何だよこの、新しいクラスで隣の席の人が初対面だった時みたいな
雰囲気は。

勝負の後、俺と紫は幽香の家に招待してもらった。
のだが、

この通り、二人はダンマリだ。

俺と幽香は少し話したが、二人はさつきまで戦っていた訳だし、気まずいのだろう。

誰だってそうなる。

まあ、こうしてても何も起きない。

とりあえず、紫に煽りまくった事、謝罪させるか、そうすりゃあ、楽に話せるだろ。

「紫、ちよつと来い。」

小声で、紫を呼びかける。

紫はそれに応じて、幽香に聞こえないように話した。

「この雰囲気は良くないから、まずはお前から切り出せ。勝負前に色々言ったんだから。」

「・・・分かったわ。」

何かを決心したような表情になった。

これなら、大丈夫だろう。

「あ、それと一つ。」

「え？何よ。」

「さっきの煽り、正直ビビった。非の打ち所無し。」

「え!?? そ、そう、練習した甲斐があったわ。」

瞬間、ザワツと背筋に冷たい風が走った。

・・・何だ。今背筋を走った嫌な予感ほ。

「じゃあ、幽香のところ行ってくるわ。」
「あ、ああ。」

．．．頼む、どうか気のせいであれ。

「．．．幽香。」

「え？何かしら、紫。」

紫は幽香に近づいて行く。
紫からは、一切緊張は感じ取れない。
本当に、いつの間に成長したんだか、

まあいい！

さあ、紫！

行けッ！

「何かしら、紫。」

「幽香、、勝負は私の圧勝だったわね！」

「．．．え？」

．．．は？

「先に攻撃する対象を間違えたわね！隼じゃなくて、この私、八雲紫を潰すべきだったのよ！」

・・・やっぱごいつ、何も成長してないんじゃないやねえの？
はあ、褒めるんじゃないや無かった。

「紫、言ってくれるじゃない？さっきは貴方が勝ったけど、あくまでまぐれだって事がわからないのかしら？」

あくあくあく、こつちも参戦しちゃったよ。

「フフンッ！まぐれでも勝ちも負けは勝ち、負けは負けよ！ねえ隼？そうでしょう？」

巻き込むんじゃないよ。

てか、そんな事お前に言っただけな。

無視して、幽香に入れて貰ったお茶でも飲もう。

あ、美味しい。

「紫、その理論、否定はしないわ。だから、気をつけなさい？次は完膚なきまでに叩き潰してあげる。」

「その自信、次で消してやるわ！」

「さあ、どうかしらね？」

お、なんだかんだで仲良くなったっばいな。

昨日の敵は今日の友ってやつか。

友かは怪しいけども。

いや、全部今日の出来事だから、さっきの敵でも今は友、かな？
ひとまず、一件落着だな。

俺、この数話、何してたっけ？

「紫、隼、一つ頼みを聞いてくれないかしら？」

幽香の入れた茶を頂いていると、突然幽香が話し始めた。

「頼みって何かしら、幽香。」

「・・・最近、良く花畑が荒らされるの。何者かは分からないけど、七日に三回は起こるわ。それも、私の不在中や、睡眠中に。」

「それで、俺たちをその犯人だと思って攻撃した訳か。さっきから聞こうと思ってたんだ。」

「そこで頼みよ、犯人を探すのを手伝って欲しい。」

思った通りの頼み事だ。

勿論、断る理由もない。

「・・・まあ別に」

そうOKしようとした瞬間、

「いいわよー！手伝ってあげるわ。」

俺より早く、紫がOKを出した。

「その代わり、それが成功したら、次は私の頼みを聞いてもらうから。」

「ありがとう、頼りにするわよ？」

「任せなさい！」

高速で話が進んでいく。

出る幕無いんだけど。

でも、ちよつと嬉しい気持ちかな。

爆走！妖怪車輪！

その夜、

幽香の住む家で、作戦会議が行われた。

「私の家は畑の丁度真ん中ら辺にあるわ。だから、玄関から向かって前側を私が、左側を紫が、そして、後ろ側は隼が見張る。こんな作戦でどうかしら？」

「作戦はいいけど、右側は誰が守るんだ？もう一人、助っ人でもいるのか？」

「・・・残念ながらいないわ。だから、罊を仕掛けておくわ。直ぐ場所を特定出来るような罊をね。」

夕方頃、幽香は周りに罊を仕掛けに行ったが、その時右側だけ強く貼ったのだろう。

「質問いいかしら、幽香？何故今までは罊を貼ってなかったのかしら？」

「確実に捕らえられる保証がなかったからよ。下手に罊を貼って、もうここには来なくなったら、傷つけられた花の仇を撃つことが出来なくなるじゃない？」

「成る程、理解したわ。」

「それじゃあ、今から見張りに着くわよ？お願いするわ。」

「任せとけての。」

「完璧に遂行してやるわ。」

三人は、各自三方向に散らばった。

それから数時間、隼と幽香と別れてから、持ち場で待ち続けた。

「・・・それにしても、やっぱり綺麗ねえ。どんな手入れをしているのかしら。」

体力とか、気力とかは無くなってないけど、花を見てみると、自然と心が緩んじやうわねえ。

そんな風に、心が緩み出した同時刻、カラカラ、カラカラと、遠くから車輪が回るような音が聞こえた。

「何の音かしら？まるで風車が回るような、何でこんな時間に。」

しかし、その音は徐々に近づいてくる。

「え!?？何で、」

その音は、止むことなく更に音を大きくして近づいてくる。

「風車なんかじゃない！道を走る車輪だわ！それも、かなりの大きさ

！」

花畑から少し離れた場所で、それは姿を現した。見た目は、ただの木製の車輪だ。

だけど、近くに動かしている人は見えない！
つまりあれは、

「あれが犯人ね！さあ、直ぐに捕まえてあげるわ！」

私は、車輪目掛けて弾幕を放つ。

しかし、車輪は移動方向を巧みに変え、それを全て躲し切った。

そのまま、車輪は私から離れて行く。

「ま、待ちなさい！絶対に逃さないわ！スキマを展」

瞬間、良くない予感が脳裏に走った。

「・・・駄目ね。近づいたら、向こうの思う壺だわ。ここは観察しないと。」

良く観察するのよ、八雲紫。

ここで感情に任せて、下手な行動をしたら、それこそ夢なんか叶えられない！

車輪は、幽香の見張る方へと徐々に移動する。

あれが鳴らす音は、恐らく幽香も薄々聞こえてくるだろう。

「・・・狙うなら、挟み撃ちかしら。それなら、スキマで幽香に呼びか

けないと、」

私はスキマを開いて、幽香に語りかけた。

「幽香、犯人らしきものが現れてるの。そっちに向かっているから、挟み撃ちにしましょう?。」

『紫!?・ そんなこと出来たの?・・・分かったわ、場所を見つけて、挟み撃ちにしましょう。』

スキマの奥から、幽香の返事が聞こえた。

幽香に呼びかけるのは成功したわ。

私はスキマを閉じて、車輪の姿を確認しようとした。

「よし!これで大丈夫、え!?。」

が、そこにその姿はなかった。

いつの間にか、カラカラ音も消えている。

「ど、どうして!?? そんなに目を離れた訳じゃないのに!。」

何度見渡しても、その姿はない。

そして、気配も感じ取れない。

「い、いや、油断しちゃいけないわ。逃げた訳じゃない、きつと隠れているのよ。」

神経を研ぎ澄ませる。

一瞬の気配も見逃すことなく、埃程度の小さな音も見逃さない。全神経を、研ぎ澄ませた。

「……………」

瞬間、土の中から、あの車輪が飛び出してきた。
そのまま、体当たりで襲いかかる。

だが、

私は、土から飛び出す寸前に鳴った小さな音を聞き逃さなかった！

「甘いわ！その奇襲は失敗ね！喰らいなさい!!」

容赦無く、近距離で弾幕を放つ。

車輪は避けれずに、全弾命中。

軽い爆発が起こった。

やがて、爆発によって舞い上がった砂煙が消える。

「やったかしら。」

そこには、ボロボロの車輪が転がっていた。

「私の勝ちね。さあ、幽香に報告しましょうか。」

私はスキマを開いた。

「幽香？倒したわよ、犯人。」

『本当？感謝するわ、紫。じゃあ戻りましょうか。』

「そうね。車輪も持つてくるわ。貴方は復讐出来てないでしょ？」

『ふふっ、助かるわ。』

そして、スキマを閉じた。

「さあ、車輪を回収しましょうか。」

そのの転がる方へ、一步踏み出した。

その瞬間、

「紫イイ!!その一步踏み出すなアアア!!」

背後から、隼が私を掴み、後ろ方向へ投げ飛ばした。

「ちよ、ちよつと！隼!?」

隼は、向かって来た勢いで、私が踏もうとした一步を踏んでしまった。

「罨、だ、気を、。」

「は、隼!!」

突然、隼の身体から感じ取れる気力が、どんどん抜けていった。

対象に、車輪の大きさが、どんどん大きくなっていく。

やがて、弾幕による傷痕もなくなり、巨大な妖気を放ち出す。

そして、

「クハハハハア!!間抜けだなア!まさか自分から嵌るとはなア!」

「しや、喋り出した!?!」

車輪が、喋り始めたのだ。

「全く危ねえところだったぜえ、完璧にぶっ壊されるかと思つたア!」

「・・・隼に、何をしたのよ!」

「ああ?そうだなアア、教えてやるよ。吸い取つたんだ、正気を。俺の仕掛けた罨からナア。」

「そんな、罨を仕掛けた動作なんて、」

「何言つてんだア?常に仕掛けてんだよ!俺の走つた跡がそれき!」

「な!?!」

そう、この妖怪は、常に罨を貼りながら動いていた。

こいつの走つた跡から、それを踏んだ、もしくは踏みつけたものから、正気を奪つていたのだった。

「特別に、俺の名を教えてやろう。俺の名は、片輪車!!能力は今のと、もう一つ!」

その瞬間、車輪が炎を放った。

「体に炎を纏わせる！さあ、焼いて轢き殺してやラア!!」

「ま、まずい！」

スキマで移動し、片輪車から少し距離を取る。

「チイ！どこ行きやがった！」

死角に移動したので、直ぐには見つからない筈

しかし、直ぐに場所を見つけて来た。

「そこか！直ぐに行ってやラアイ!!」

ガラガラと大きな音を立てて、片輪車は迫る。

私は、再びスキマを開こうとした。

しかし、それをする前に、追いつかれてしまう、

「な!?？」

片輪車は、一際大きな炎を放つ。

「さあ追いついたぜエ!!ぶち殺して」

その瞬間、地面から蔓のようなものが、片輪車を縛り付けた。

「な、なんだアこれエ!!」

「・・・知らなくていいわ。知る前に、貴方を殺すから。」

すると、空から人影が降りてきた。

それは、見覚えのある影。

その姿は、

「幽香!!」

それは、この花畑の、花の妖怪だった。

「ふふっ。紫、ありがとう。おかげで完璧に隙から攻撃出来たわ。」

幽香は、優しい笑みを浮かべる。

そして、

「さあ、どんな処罰を望むかしら? この屑妖怪。」

動けない片輪車に、幽香が話しかける。

放っていた炎は、幽香が全て消化してしまった。

暴れまくるが、蔓が切れることはない。

「は、離せよ!! 卑怯者がア!」

「卑怯者?・・・そうね、離してあげる。」

「え？」

突如、幽香は蔓を操って、片輪車をぶん投げた。

片輪車は、花畑をぶっ飛んでいく。

「な!??　ク、クハハハア！馬鹿か！これで逃げられる、ぜ？」

突然、片輪車の身体が小さくなり始めた。

「な、何で、何で身体が縮んだア!??」

「再び返してもらったからだよ。」

小さくなった車輪を、一つの影が覆う。

「な、なア!??」

その正体は、黒神・咲風隼！

「何で、何で俺の身体がア？」

「天叢雲剣・八岐大蛇。こつちも吸い取らせてもらったぜ。」

「な、何イ!??」

天叢雲剣・八岐大蛇は、正気を吸い取ることができる。

本物ではないとはいえ、そこらの妖怪程度じゃ逆らうことは出来ない。

隼は、正気を吸い取られる前に、それを地面に突き刺し、片輪車が

近づいたタイミングで、それを発動したのだ。

「や、止めるオ。これ以上は、許してくれエ。」

やつは、勝てないと思ったのか、許しを求め始めた。

「・・・安心しろよ。喋れるぐらいは残してやる。」

隼は、不敵な笑みを浮かべた。

「ほ、本当か？」

「ああ、それじゃねえと、」

「テメエの悲鳴が、聞けねえだろ。」

「ヒア！止」

generate command

天叢雲剣・限解!!!

「ぶち壊れるオオオオオオオ!! ウルルルアアアアアアア
アアアアアアアア!!!」

「ぎゃあああああ!!」

片輪車、絶命!

後に、海の藻屑になりましたとき!

めでたしめでたし!

咲風隼の物件探し

幽香の家にて、

「その車輪、どうすんの？」

「残りの正気を吐き出させてから粉々にして海に捨てるわ。」

「・・・容赦ないな」

「当たり前じゃない。花を荒らす者は誰であろうと生かすつもりはないわ。」

おっかねえー。

これが、片輪車が海の藻屑となった経緯である。

犯人退治が終わった頃には、既に日が昇っていた。

幸い、花は片輪車から正気を回収することで、全て元通りにするこ
とが出来た。

「ところで、紫は何処へ行ったのかしら？」

「ああ、さっき出て行ったぞ。用事が出来たって言うて。」

「あら、そんなに直ぐ行くなんて。そんなに急ぎの用事なのかしら？」

「さあ？紫の考えてる事は、よく分かんねえから。」

「へえ、じゃあ何で二人で旅をしていたのかしら?」

「・・・俺も、よく分かんない思考回路してるって事じゃねえの?」

「ふーん、似た者同士ってこと?」

「まあ、それはどうだろうな。」

その日の朝食は、幽香の家で適当に済ませた。

そして、幽香の家、花畑を出ようとしたその時。

「貴方、いつまで旅を続けるつもり?」

「え?・・・あんまり考えた事ないな。まあ、終わりは考えてないよ。」

旅を続けること。

それは、沢山の景色を見る為。

それが、あいつとの約束。

「家とかは持ってないのかしら?」

「家?持ってる訳ねえじゃん。住み込みで少し働いた事もあるけど、結局野宿してたからなあ。」

「ふーん、まあいいわ。それじゃあ、またいつか会う時を楽しみにしているわ。」

「ああ、またいつか。」

そうして、幽香の花畑を去った。

「家、か。」

山道を歩いている途中、ふとあの話を思い出す。

確かに、旅をしている訳だし、俺に家は必要ない。だけど、自分の家つてのも、少し憧れる。

「はあ、ったく。面倒な話してくれやがって。」

でも、家があったら確かに便利だな。

食料とか保存したり、旅で得た物とかをしまったり、
だけどいちいち帰るのもなあ、
せめて一瞬で帰れたり出来たら、

いやまで、瞬間移動出来るじゃん。

最近使ってなかったから忘れてた。

いや、あれって一日一回が限界じゃ、
あれ、二回だっけ？

「すっげえ変わってる。何年ぶりだっけな。」

その数日後、俺は久しぶりに旧都に訪れていた。

この時代では、既に都の位置は変わっている。

つまり、元々都だった場所って訳だ。

まあ、そんなに離れてはいないが。

ここに来た目的は二つ。

まず一つは、単純に気になったから。どんな風に変わっているのか。

そして二つ目は、物件探した。瞬間移動の回数は判明していないが、恐らく一回だ。

となると、物件探しは無駄になるが、いつか二回に成長するかもしれないので、なんとなく探してみるという訳だ。

ってか、今何時代だよ。

ええつとー、聖徳太子がいた時代が飛鳥時代だろ？

それから何百年が過ぎてるから、平安時代ぐらい？

でも何年経ってるか分かんないんだよなあ、

適当なことを考えながら、町を搜索する。

因みに、今は奈良時代中期である。

「あれ？久しぶりだね、何してるの？」

道を歩いている途中、突然後ろから声をかけられた。振り向いてみると、

「お前、変装してるけど、青娥か。」

「あれ、よくわかったね。」

「分かんなかったら、どうするつもりだったんだよ。」

「さあ?・・・それで、何してるの?」

「こつちも聞きたいが、まあいい。家探してんだよ、良い場所あるかなーって。」

「へえ、それって必要?」

「知らね。」

「意味ないじゃん。」

「かもな。」

「かもなって、まあ、ここに住むのはお勧めしないよ。結構妖怪が出やすいし。」

「そうなのか、確かに妖怪が出やすいのはやだな。」

「隼は妖怪が嫌いかい?」

「妖怪自体は嫌いじゃない。でも、妖怪って面倒なのが多いから。」
「成る程ねえ。」

再会した青娥と、他愛のない話をしながら旧都を歩く。

途中、出店に寄り道をしながら。

因みに、さつき銭の表が裏かを当てる、いわゆるコイントスの賭けに負けたので、全額俺の奢りになった。

お金?

俺が持つてる訳ないじゃん。

物物交換でなんとかするんだよ。

旅で手に入れた珍しい物で何とかなる。

「ところで、お前はこんな所で何してんだ?」

「ん?単なる暇つぶしに来てただけだよ。」

「へえー。」

「・・・何その反応。」

「いや、思ったよりも予想通りだったから。」

「悪かったね。予想通りのつまらない返しで。」

「そう怒んなって!」

「別に怒ってないよ!」

結局、旧都で良い物件は見つからなかった。

「多分、どこに住んでも妖怪は避けれないと思うよ?それこそ、今の都とかじゃないと。」

「そうだよなあ、でも都はなあ、」

「この際だから、妖怪と共存するってのは?」

妖怪と共存。

でもそんな物分かりの良い妖怪が住むところって、

あ、妖怪の山は?

「あー、一ヶ所心当たり有り。」

「じゃあ、そこに行ってみなよ。」

「ああ、そうしてみる。」

目的地が決まった所で、旧都の出口に歩いて向かった。

そして、出口の前にて、

「私はもう少しここに残るよ。」

「そうか、じゃあまたいつか会おうぜ。」

「次はどうする?・・・千年後ぐらい?」

「ははっ!良いな、それ!じゃあ千年後、またな!」

「幸運を祈っておくよ。隼、またね。」

そうして、旧都を離れた。
行き先は、再び妖怪の山へ、

第六章・妖怪の山第弐戦 二度目の訪問

旧都を出てから、数週間経った頃。

「本当にこっちで合ってるのか？通った記憶無いんだけど。」
「合ってるって言ってるじゃん。そんなに私って信用無い？」
「いや信用はしてるけどよオ。」

現在、青娥に勧められて、妖怪の山を目指している。
しかし、その道中、一度道に迷った。

あの時は、八岐大蛇の霧によつてよく見えず、曖昧なまま辿り着いてしまったから。

さてどうするかと途方に暮れていた時、

「ところでお前、何であんなところに居たんだよ。」
「鬼つての神出鬼没なんだよ？」
「合ってるけど間違ってるな。それはお前だけだ。」
「酷いねえ。」

萃香と再会した。

そして現在、道案内をしてもらっているという訳だ。

「それで、最近どうなんだ？山の様子は。」
「・・・それは、自分の目で確かめて。私の口からは、何も言うことないから。」

萃香の顔が一瞬強張った。

何か事件でもあったのだろうか。

「まあ、私は道案内を頼まれてるだけだからね。道に迷った哀れな隼君の為に。」

「悪かったな。哀れで馬鹿で間抜けで。」

「そんなに言ってるよ!?？」

そんなこんなで、妖怪の山へと歩みを進めた。

「ここから真つ直ぐ行けば山に着くから。隼がよっぽど方向音痴じゃなければね?。」

「道が知らなかっただけで、方向音痴ではない。安心しろ。」

「説得力がないよ。」

歩くこと数時間、妖怪の山の麓に到着した。

どうやら、道に迷った場所からそんなに遠くは無かったようだ。

よし!行くか!

と、山に立ち入ろうとしたその時。

「……どうしたの?立ち止まって。」

「いや、お前は行かねえのか?。」

何故か、萃香がその場から動かなかった。

「……行かないよ。そして、なんで?って問いにも答えない。言った

でしょ？自分の目で確かめなよって。」

「・・・分かった。じゃあな！ありがとう！」

「どう致しまして。あんまり騒ぎを起こさないようにね！」

おいおいフラグ建てんなっての！

妖怪の山。

それは、様々な種族の妖怪達が住む場所。

住む妖怪達は仲間意識が強く、

侵入者には容赦しない。

近くに存在する村で、

子供はこう教えを受ける。

『山に入っては決してならない』
と。

「・・・長え。」

現在、山を登っている最中

な、訳なのだが、

道が長い！

別に体力に問題は全くない！

だがよオ、

そこまで風景が変わることがないし！

話す相手もいねえ！

一人で山登んのかってこんなにつまらなかつたか？

誰に文句言ってるんだろ。

そうこうしているうちに、だんだんと風景が変わってきた。

完全な自然物から、誰かが整備したような形に、

「よし！気合入れ直して行」

その瞬間、ビュンツ！と耳元で、何かが通る音が鳴った。

耳元を通過した物体は、一瞬ではあつたものの、目には完璧に映つた。

その正体は、矢！

「止まれ！侵入者!!」

息をつく間も無く、数十人の人影が近づいてくる。

全く、またこの光景を見ることになるとは！

「待て！俺は敵じゃねえ！」

「その格好からして、只者じゃないことは目に見えている！」

「な、なら！勇儀に合わせろ！それなら証明出来らア！」

勘違いを晴らす為にそう言った。

のだが、

「何？」

そいつらは困惑し始めた。

知らないふりをしてやがるな。

「……は？何って、勇儀に合わせてみろって」

「……言っていることがよくわからないぞ！やはりお前は敵だ！」

その時は、完全に奴らが知らないふりをしていると思っていた。
しかし、次の会話でそれは覆されることとなる。

「……いいから通せつつってんだよツ！演技なんかしてんじや」

「お前！ゆうぎとは何だ！そんなもの知らん!!」

「……今何だった？」

奴らは、勇儀のことを 何だ と言ったのだ。

誰だ、ではなく。

勇儀のことは知らない、萃香は山に入らない。

「・・・まさか、勇儀は、いや、鬼達は、」

本当に、山から出て行ってしまっていたのか!?!?

黒神大暴れ

妖怪の山、
数百年前は、鬼を筆頭とした縦社会が築かれていた。

しかし、
今では違う。

「鬼は、もういないのか？」
「何？それなら少し前に去って行った。今は大天狗、天魔が指揮をとっている。」

囲んでいる妖怪の一人が答える。
少しすると、その中で指揮をとっていた妖怪が声を張り上げた。

「それにしても貴様！何故鬼を知っている！」
やべっ！そうだった！
ゆっくり考えている時間はねえ！

「昔、ここに来たことがあるだけだ！決してお前らに危害を加えるつもりは無い！だから、その、大天狗って奴に合わせてくれッ！」
「何いっ？」

そう叫ぶと、妖怪達は頭を悩ませ始めた。
辺りに緊張が走る。

そして数秒後、

「……いいだろう。」

「ほ、ほんとか?!?」

「ああ、ただし、」

バシユツ!!

「ひとまず眠ってもらおう。」

音が鳴った方を見ると、肩に矢が刺さっていた。

周りを見ると、妖怪の一人が弓を構えているのを見た。

「貴様には毒矢を撃ち込んだ。数秒後、効果が出るだろう。……お前ら! 連れて行くぞ!」

「ハ、ハア?」

男の体内を何か嫌なものが巡って行く。

だんだんと、体力がなくなっていく。

毒に蝕まれていく、

瞬間、男の感情が、

も、

もう、

我慢の限界だッ！

「舐め腐んのもいい加減にしろオオオオ!!」

瞬間、近づいて来た妖怪を殴り飛ばした。
さらに、そのまま肩に手を伸ばし、刺さっている矢を引き抜いた。
そこから、少し血が飛び出す。

「な!?? 何故眠らない!??」

「いつまでも従っていられるかアアアア!!」

隼は、地を蹴り、そのまま木々を蹴り、速度を上げていく。

服装も相まって、まるで高速で動く影と化す。

「碎け散れエエ!!」

そのままの勢いで、妖怪一人一人を殴り飛ばしていく。

力×速度によって、パワーは並大抵の鬼は軽く越す。

その一撃をまともに喰らえば、軽傷程度では済まされない。

「オラオラオラオラアア!!!」

片っ端から、一撃を浴びせていく。

その姿と様子は、完全にバーサーカー。

「ひ、怯むな！矢を放てえ！」

妖怪達は、その一言に応じて必死で矢を放つ。

しかし、あまりの速度に当たる気配はなく、

もし命中するコースに放ったとしても、

「そんな小細工通じるかよッ！」

最も簡単に、矢はへし折られていく。

実は、この矢は全くもって脆くない。

人間の骨を砕いてそこに毒を流し込む為、かなり強固なものだったのだ。

しかし、やはり速度を上げに上げた隼の一撃に耐え攻撃を通すのは、

1キロ離れた場所にあるダーツの的のど真ん中を当てる程、難しいものになっている。

「た、退避しろオ！このままだと全滅される！」

「退避だあ!!」

敵わないと悟った妖怪達は、その場から全力で逃げ去って行った。

それを確認した隼は、動きを止めた。

「初めてだな、こんなに暴れ回ったのは。」

そう吐いて、再び山を登り始めた。

案の定、数分後また囲まれた訳だが。

今度は数が更に多い。

二倍とか、十倍どころじゃない。

まさに、妖怪の山総出って感じた。

「危害を加えるつもりは無いっていつてんのになあ。」

いや、さつき加えまくったな。

でもあれは正当防衛だろ！

あつちから攻撃して来たんだし！

その瞬間、一人の妖怪が前に出て、近づいて来た。

「先程はすまなかった。私が天魔だ。」

「いや、俺も悪いです。すみません。」

なんかいきなり敬語になってしまった。

「敬語はよしてくれ。・・・私達は、荒っぽいことはしたくない。だから、一つ勝負を受けてくれないか？」

突然、そんな話を持ちかけられる。

「勝負で、勝負？一体どんな、」

「内容は、まず頭に標的をつける。そして、一対一で勝負し、先にその標的を攻撃した方が勝ち。」

「・・・それ、即興で考えたのか？」

「この前、山の子供の妖怪がやっていたんだ。荒っぽくないし、丁度いいだろう？」

「へえ、俺が勝ったら？」

「山への侵入を許可しよう。ただし、負けたら立ち去ってくれ。」

ある種のゲームだな。

「・・・上等だ。やってやろうじゃん。」

「交渉成立だな。・・・文！」

はい！と声を通る。

元気いっぱいな声、ではなく、規律整った声だ。

数秒後、沢山の妖怪の中から、一人の少女が出てくる。

「任せても、いいな？」

「わかりました。」

女性か、

ちよつとやりづらいな、

だが、手加減はしねえ！

「名乗ってなかったが、咲風隼だ。」

「射命丸文、です。」

周りの妖怪が一斉に掃ける。

俺と射命丸文は、渡された布を頭に被る。

「射命丸文！いぎ、勝負！」

「手加減はしません！」

瞬間、二人は同時に地面を蹴った。

最高最速風神少女

試合開始の合図と共に、二人は一斉に地面を蹴る。

先に仕掛けたのは文。

「早々に決めさせてもらいます!」

言葉と共に、弾幕を放つ。

「うおっ!?? 早えって!」

隼は頭に気を付けながら、弾幕の隙間を縫って躲す。

「広い場所は不利か、よしッ!」

そのまま隼は方向を変えて、近くに生えていた木を蹴った。木を踏み台にして加速し、木々に囲まれている所目掛けて吹っ飛ばす。

途中、文に手で挑発を入れながら、

「ついて来いってことですか? いいでしょう。天狗の力、見せてあげます!」

挑発に乗っかり、黒い羽を羽ばたかせて追跡する。

それを確認した隼は、先程のように木を蹴飛ばしながら移動していく。

「乗ってきたな、とりあえず距離を、いッ!??」

距離を開けようと考えたその瞬間、文が既に真横に迫っていた。

「はアア!?? ちょっと！待っ！」

「これで、トドメー！」

すかさず、文は弾幕を放つ。

「あつぶねー！」

「今の避けれるんですか!??」

弾が当たる直前、隼は身体を晒して躲して見せた。

文は完全に頭の上の標的を狙っていた為、身体への被弾も無かった。

「驚く方が逆だ、君早すぎるって。」

「どうです？天狗の力と速さは？」

「ああ、よく見せて貰ったよ。」

「そうですか。・・・どうします？ここで降参してもいいですけど。」

「降参？何だってそんなこと、」

「別に、この状況は誰にも見られてない訳ですし、勝負は貴方が勝ったってことにしてもいいってことです。」

「はあ？それ君に良いことある？」

「その代わりに、少し天狗の任務を手伝ってくれないかなーって。」

「……。」

少しの間、辺りは沈黙に包まれた。
別に悩んでいた訳ではないが、状況に隼は困惑していた。

「さあ、どうします！断ったら容赦なく的を撃たせて貰いますよ！」

「……確かに、俺にも、君にも良い話だ。」

「そうでしょう？さあ、降参で」

言い終わる瞬間、隼は後ろに向かって地を蹴り、飛び上がった。

「これが返答。」

数秒遅れて、文も羽を動かして飛び上がった。

「……良いんですか？先程天魔様との話は聞いていましたけど、負けたら侵入を断られるんじゃない？」

「……そうだなあ。負けたらここは立ち去る。」

「だけどさ、」

「俺さ、昔ある戦場で、相手に向かってこう言ったんだ。二度と負けな
いって決めた、ってね。」

「あれは、あの時の勢いで言ったことだけどさ。今はこう思うんだ。」

戦わず逃げて負けたのなら、
とつとつとテメエの心臓に刀を突き刺せ

「だから戦う。戦友に、恥じることないように、ね。」

隼は、右手で拳銃の真似をして、それを左手で支え、文に向けた。
拳銃とは、隼にとって最も苦手なものであり、最も憎いものである。

「だからさ、もう少しだけ付き合ってくれないか？」

「・・・分かりました。では、私が勝たせて貰いますから。」

「ありがとう、文。」

瞬間、両者同時に地面を蹴る。

文はすかさず弾幕を放ち、隼の標的を撃ちに行く。

それを、木々を蹴りながら躲けていく。

その時、両手はまだ拳銃を構えたままに。

文の弾幕は、どんどん激しくなっていく。

だがそれも、木々を蹴りながら、躲し切っていく。

「流石に躲してきますか！でも、速度は私の方が上です！」

木々を移る隼に、猛スピードで文は追いつきに行く。

そして、追いつくと思われたその瞬間。

「このまま！押し切って」

「そう来ると思ってたぜ！」

generate command!

瞬間、巨大な剣を具現化し、ほんの少し前に突き刺した。

「な!?? 何を!??」

隼はその剣を踏み台にし、方向転換をした。

途中、文の標的に拳銃の標準を合わせながら、

文は、隼はもう少し先で追いつくつもりだったため、勢いが殺し切れずにいる。

反応しきれず、ほんの少し、止まるのが遅れる。

「そ、その能力は!??」

止まった頃には、既に遅く。

「チェックメイト。」

構えていた手の拳銃の人差し指から、圧縮された隼の弾丸が放たれた。

その弾丸は、文の標的のど真ん中へ、吸い込まれるように、

バシユンツ！

空想の橋渡し

指先から放った弾丸は、文の頭の上の標的、ど真ん中を撃ち抜いていた。

標的早撃ち対決

勝者、咲風隼

怪我人、無し

「能力を隠しておくなんて、ずるいですよー！」

試合後、いきなりこの天狗の少女に、強い口調で問い詰められている。

「誰が戦う前に不利になる事を話すんだよ、」

気持ちにはわかるが、

「それはそうですけど、」

何でここで辞めんだよ、

「ならさ、能力を教えるから、君の能力も教えてよ。それなら平等だろ？」

そう言うത്そいつは、うーん、と迷って、

「それは嫌ですねえ、まだ貴方が完全に味方だと分かった訳では無いですし、」

どうやら、まだ信用はされていないようだ。

それなら、

「どうしてもと言うのなら、何か信用できる証明でも」

「俺の能力は武器の具現化。特に弱点がある能力じゃないけど、強い武器となると体力を消費する。割と想像した物は何でも作れる。」

「ちよ!?? ちよつと!??」

信用出来ないなら、力の全てを暴露してしまえばいい。

能力の全てを話してやる。

その後、途中文が慌てて止めながらも、能力を全て教えた。

後悔は無い。

「以上。どうだ? こんだけ曝け出して、まだ信用出来ないか?」

彼女は、怪しんだ目でこちらを見つめる。

「・・・良かったんですか? このあと私が山のみんなに話して、後で殺しにかかるかもしれないのに、」

すぐさま質問が飛んできた。

当然の質問だ、だけど、

「・・・するのか?」

「そ、そういうことを言っているんじゃないよ!」

「なら何故話した? 本気でそういうことを考えているのなら、そんな忠告はしない。後でこっそり始末するさ。」

「で、でも! 貴方が話した時はその確証が」

「確証がなければ動かないのか？」

「えっ!?？」

「・・・俺だつてそう思う。確証がないのに、何でそんなに危ない橋を渡るのかつて。」

それでも、

「そんな危ない橋を、渡った馬鹿野郎が居たんだ。助かる道なんて無かった。俺だつて運が良かっただけ。」

それなのに、

「危険でも、助かる道が存在する橋なら、幾らだつて渡つて魅せる。」

じゃねえと、

「みんなに、顔向け出来ないから。」

その時、今は左腕につけている腕輪が、一瞬輝いた気がした。

「本当にこつちなのか？」

「間違える訳ないじゃないですか。ここに住んでるんですから。」

今は、山の妖怪達の集まった場所に戻る為、来た道に戻っているのだが、

「全く、さつきはあんな決め台詞言ってたのに。」

「面目無い、」

無我夢中で木々を蹴り飛ばして移動していた為、道を完全に把握していない、

どころか、全くもって分からない。

なんだろう、

すっげー、恥ずかしい。

「・・・信用して、くれてるんだな。」

「逆にあれで信用しなかったら、それは邪神か何かですよ。私は鴉天狗です。」

言い回されているが、信用してくれているらしい。

橋は渡り切った訳だな。

「一つ、質問いいですか？」

「え？あ、ああ、いいよ。」

「試合中、何で私を名前で呼んだんですか？」

「・・・あゝ、いや、特に深い意味は無いよ。割と初対面でも、名前と呼ぶし、」

でも、

文ほど、すんなり名前を言えたことは無かったな。

「そう、ですか。結構珍しいですね。」

「そうか？名前の方が呼び易いじゃん。」

「・・・確かに。」

．．．ここは、何処だ．．．

．．．死んだ筈では．．．

．．．みんな殺された．．．

．．．最悪の気分だ．．．

．．．許せない．．．

．．．欲望に塗れた．．．

．．．あの人間共が．．．

「ならば、皆殺しにすれば良い。」

「貴様には様々な能力を与えて蘇らせた。」

「さあ、己の思うがままに、」

人間を皆殺しにしろ

謎の占い屋敷

「ええっ!?? 何で先に居るんですか!??」

「ま、まあな、」

再び、先程の場所に戻ってきた。

危うく文に、俺の勝利を取り消されるところだったぜ。

割とマジでやりかねないし、

ったく、無駄に瞬間移動使わせやがって。

「うーん、絶対私の方が早かったと思うんですけどねえ。」

「結果は結果だ。納得しろ。」

文は納得がいかない様子だ。

ま、そりゃそうだけど。

そうこうしていると、さつき試合を持ちかけてきた妖怪が話しかけてきた。

確か、天魔だっけ？

「その様子だと、勝ったのは君のようだな。」

「・・・これで、侵入を許可してくれるんだよな？」

そう言うと、天魔はニヤリと意味深な笑みを浮かべた。

「な、なんだよ。」

「いや、ね。ああ、この山に入ることを許可するよ。」

「・・・。」

何だ、この感じは。
何かを隠すような、
かと言つて、それを吐き出そうとする、
この感じは、

その後、天魔が周りに呼びかけ、多種多様の妖怪達はみんな戻つていく。

やがて、俺と文、そして天魔の三人となった。

「さて、みんなが戻つたところで、隼。君に話したいことがある。」
「うえっ?・・・あ、ああ話か、何だ?」

急だつたもんだから、変な声が出た。
だつてすげえ空気感なんだよ。
仕方がない。

「本当は二人でするつもりだったが、試合の中で何か一悶着あつたよ
うだし、文がいてもいいだろう。」

その瞬間、天魔は俺に、頭を下げた。

「礼を言いたい。数百年前、あの悍しい妖怪を倒してくれた、咲風隼
に。」

・・・え？

「ちよ、ちよつと待て！最初から話せよ！」

俺は少しパニックになってしまった。

文もどうしていいか分からなくなっている。

顔を上げて、真剣な眼差しでこちらを見ながら、
天魔は話を続ける。

「先程まで集まって居た妖怪の中に、あの現場に居た者はいない。私
だけだ。」

だから、

「天狗を、山を代表して、礼を言いたい。」

「ま、待てよ！急すぎだつて！悍しい妖怪つて何の、」

瞬間、あの風景が脳裏を走る。

俺がいて、隣に二人の鬼がいて、前には巨大な蛇が、

「・・・まさか、八岐大蛇との、」

「そう、薄らと記憶があるんだ。あの時、薄らと。」

「そう、か。」

確かに、数十人くらい居た、

あの時、あの戦いの現場にいた妖怪の一人が、

鬼が去った今、完璧に山を率いている。

戻っていく妖怪達を見る限り、反抗しているやつは一人も居ない様子だったし、

誰も、不満が無いんだ。

「・・・すごいな、ほんと。」

思わず、口からその言葉が漏れた。

「な、すごい、？」

「ああ、こんなに上手く山を纏めることが、だ。」

「それは、みんなのおかげだ。」

「そうか？俺はそうは思わないが。」

多分、そう思っているところなんだろうな。

「さア！暗い話は終わり！もうやめようぜ過去を見続けるのはよお。」

この雰囲気です、文は耐えられなさそうだし、俺も嫌いだから、バツサリと切ってやった。

「そ、そうですよ天魔様！侵入者が客人に変わったんですから！」

ナイス文！

そのワードは強え！

強制力がある！！

「文、そうだな。・・・よし！」

改めて！ようこそ妖怪の山へ！

太陽の光が、もう少しで真上に行く頃。

俺は文の案内で、妖怪の山を登る。

天魔は麓の方で仕事が出来たと言って、下っていった。

「ところで、隼さんは何でここに来たんですか？」

「ああ、それはな。」

俺は文に、ここに来た経緯を説明した。

「成る程。そういうことですか。」

「うん、妖怪の山を選んだのは、正解だったと思ってる。」

「この妖怪は、仲間意識が強いですから、入り込むのは難しいですけ

どね。」

「その辺は、さっきの話でもあったように、大丈夫だと思った訳だ。」
「悍しい妖怪との戦いの話、ですか？私よく分かってないんですけど。」

「じゃあ知らなくていい。凄い興味があったら話すけどね。」

そう言うと、文はうーん、と考え込むような表情をした。

せっかく知らない方が良いつて言ってるのに、あんま考えるなよな。

その後は、暫く山を散策した。

しかし、良い物件は見つからない。

「どうです？良い所は見つかりました？」

「いや、そもそも俺ってここに家を持っていいのか？天魔に話通してないし、」

「少なくとも、拒絶する妖怪は居ないですよ。天魔様の態度からして、貴方はここを守ってくれた人ですから。」

「・・・それに、頼るのもねえ、」

その時、ふと右を向いてみると、何やら怪しげな建物が目に入った。
古びていて、苔がつき、そこまで大きくない。

「文、ここにっつて？」

聞いてみると、文は何やら奇妙な笑みを浮かべて、

「ふっふっふ、ここはですねえ、、訳あり物件なんですよ。」

「いつ!?」

「夜になると、この家から、変な音が聞こえて来るんです。」

「ま、待て。俺そういう話、そんなに得意じゃなくて、」

「呪う、とか、殺す、とか、そんな声が沢山。昔ここで、虐殺事件があったとか、」

「う、嘘、だろ?」

「はい嘘です。」

んだよこいつ!

腹立つなア!

思わず地面を蹴り飛ばした。

「本当のことを言うと、ここで占いをやっているらしいですよ。私は行ったことないですけど。」

最初からそう言え。

だけど、

「あれ、もしかして隼さん。興味あるんですか?」

「・・・ああ。何でかは知らないけど、惹かれるんだ、ここに。この建物に。」

「じゃあ入ってみたらどうですか?言葉より行動、ですよ。」

なんか昔、そんな言葉言わなかったっけ?

気のせいかな、

「うん、入ってみる。」

「わかりました、じゃあ私は外で待っています。あまりそういうの得意

じゃないんで。」
「了解。」

その家の中は、まるで宇宙空間の様だった。
空へ飛んだら、幾らでも先に行けそうな。
そんな空間だった。

「変な家だ。」

『貴様には、何が見える』

突然、声が聞こえた。

「え？、ど、どこだ、」

『何が見えると聞いている』

宇宙空間の様な場所で、何処からともなく声が響く。
声を聞く限り、老人のような声だ。
そして、そいつは問いかけて来る。

「何が見えるって、別に何も、」

『それはあり得ない。ならば我の声は聞こえない筈だ。』

「はあ？あり得ない？、、、じゃあ、何処までも行けそうな宇宙が見える。これでいいかよ。」

『そうか。それが貴様の見えるものか。珍しい風景だ。』

「さつきから意味がわからねえ！何処にいんだよ！」

そこから先は、返事が無かった。

その屋敷から出ると、文が待っていた。

「どうでした？占いは。」

「そんなものされてない。何だよあの老人の声。」

「え？老人の声？」

突然、文の表情が変わる。

「ああ、何が見えるだのなんの、意味がわかんねえ。」

「隼さん、一ついいですか？」

「ん？何だよ。そんな真剣な顔して。」

「この占いをやってるの、」

女性ですよ？

「え？」

じゃあ、さっきの老人の声って何だよ！
俺は、一体何処に入ったんだ!?!?

九天の滝

「だ、大丈夫ですよ！きつと、何か見間違えたんです。」
「・・・見間違え、ねえ。」

いや、そんな訳ない。

確かに見たんだ、

あの風景を。

確かに、聞いたんだ、

あの声を。

「だアアー！もういいや！」

「うわっ!?? なんですか急に！」

俺の大声に、文が反射で身構えた。

「あ、悪い。偶に出るんだ、これ。」

「はああ、もうやめてくださいよ！」

まあ、これは先程までの仕返しということにしておこう。

謎の占い屋敷の件は、考えていても仕方ない。

何回入り直しても、あの天井には再び入れなかったし。

・・・忘れよう。

「そういえば、

「文は、天魔？の命令で戻らなくて良かったのか？」

「え？・・・ああ、大丈夫です。天魔様に隼さんの案内を任されたので。」

「あゝ、そうなんだ。なんか、悪いな。」

「気にしないでください。ここだけの話、」

すると、文は耳打ちで、

『面倒な山の警備の仕事、さぼれるので。』

と言ってきた。

「お前さ、なんでそんな嫌なのに警備の仕事やってんの。」

「仕方ないんです。私はまだ下っ端天狗ですから。」

「あゝ、そういう決まりとかあんのか。」

「・・・でも！乗り切りますよ！将来やりたいこととか有りますし！」

「お、いいねえ。例えば、何を仕事につけたい？」

「そうですねえ、一番は、やっぱり広報係ですかね！」

広報係？

今で言う、新聞屋って感じか？

だとしたら、向いてるな。

「向いてると思う。文、飛ぶの速いし。」

「んゝ、でも他にも色々あるんですよね。」

「へえ、例えば？」

そんな雑談をしながら、妖怪の山を見てまわった。

勇ましい轟音が辺りを響く。

「・・・文、何処に向かってんだ？」

「それは、着いてからのお楽しみです。」

妖怪の住む家が密集している場所から、文の案内で離れていき、この辺は特に何も無い。

ただ、先程からうつつすらと水が落ちる音が聞こえてきていた。

「聞き覚えのある音だ。」

「予想させてもらってもいいかな？」

そう言うと、文に露骨に嫌な顔をされた。

「なんでそんな嫌な顔すんだよ。」

「・・・」

「あーわかったわかった。じゃあ何も言わないよ。」

めちやくちや嫌そうな顔をするので、黙ってついていく事にした。

それから数分歩いたところ。

「凄いな、これは。」

「どうです？・・・この山で一番の名所、九天の滝です。」

俺は目の前に広がる、力強い滝に魅了されていた。

過去に滝を見たことがあるが、そのサイズとは比べ物にならない。

「成る程、これが文のサプライズって訳か。」

「?、なんですかそれ?」

「いや、何でもない。」

それにしても、やっぱり何度見ても凄い。

そういえば、回復術はあの滝で思いついたんだっけ?
懐かしい思い出だ。

見てるかな、みんな。

この世界に来てから、何度も辛い思いをしたよ。
でも、
それ以上に、

「楽しいことも、沢山あったよ。」

「・・・あれ?今何か言いましたか?」

「・・・いや、何も言っていないよ。」

独り言は、滝の轟音でかき消された。

「さあ!そろそろ行きますか!」

「え?・・・あ、ああ、そうだな。」

そうして、九天の滝を離れようとした。

その時、

「おい、なんだあれ。」

少し離れた場所で、何者かが何かを放っている様子を見た。

「あれって、何ですか？」

「あれだよ、あれ何やってんの!?？」

文に、方向を指差して伝えた。

「あく、あれはですねえ。おそらく弓の稽古場ですよ。」

「弓!?？ こんな場所では!?？」

「ええ、偶に見かけるんです。私は弓を使うことはないので、参加したことないですけど。」

「まじか。」

先程までで気づいたのだが、ここは気候が荒っぽい。

「あややく、今日は一人ですか。」

矢を放つ時、心を落ち着かせる動作。

果たして、鳴り響く轟音の中で、それが出来るだろうか。

そして、更に目を凝らして見ると、

狙っているのは、滝を跨いだ向こうにある。

そんな的を、果たして打ち抜けるのか!?!?

「さあ、行きましよう隼さん。・・・隼さん?。」

「文、すまねえ。止めようとはしてるんだ。」

「え? 一体どういう、」

「あの弓の稽古、やってきてもいいか?。」

「・・・え!?？」

あの様子を見た瞬間から、全く鼓動が止まらねえ！
まるであの空間に吸い込まれていくように、
あの様子に惹かれている！

「でも隼さん、弓使えるんですか？」

「そりゃあね。昔天才に鍛え上げられたよ。」
だから、

「試してみたい。どれだけ通用するのかを。」

言い終わる前、既に足は動いていた。

謎の弓

「……おや。」

弓の稽古をしている天狗と思わしき妖怪に近づくと、直ぐに反応を示してきた。

「何か私に、用ですか？」

見る限りだと、かなり年配の天狗だ。

中々の威厳を放っている。

話し口調は、ゆっくりしていて、落ち着きがある。

「いえ、邪魔するつもりは。ただ、興味があつて。」

まずは、敵意がないことを示そうとした。
が、

「私に敵意がないことは、直ぐにわかる。その娘さんと一緒にいる時点で。それに、殺気も感じぬ。」

とりあえず、ファーストコンタクトは順調だ。

「……興味があるのは、弓のことですか？」

質問に頷く。

「弓を扱ったこと経験は？」

「かなり前なんだが、その時みっちり。」

そう返すと、老妖怪は弓を渡してきた。

「ではあの的に。」

そして、滝を挟んで反対側の的を指差した。

早速、チャレンジしていいということか。

よし、

「試しに、見せてもらおうか。」

俺は弓に矢を構えて、的を狙う。

中々の距離があるため、そのまま真っ直ぐに狙っても当たらないだろう。

的の上を狙う必要がある。

そして、今は気候は穏やかだ。

真っ直ぐ飛ぶだろう。

「……ここだッ！」

的の少し上を狙って、矢を放つ。

狙いは完璧な筈！

しかし、矢は全く違う方向へ飛んでいった。

「隼さん、何処狙って放ったんですか？」

「……これじゃ当たらないか。」

すると、突然老妖怪が弓を構えて、矢を放つ。

矢は、的のど真ん中を捉えた。

「名は何と？」

「……え？」

「お主の名を、教えてほしい。」

「……あ、ああ！名前か！ええつとー、咲風隼。」

答えると、また再び矢を放つ。

またしてもど真ん中だ。

「隼よ、お主の弓の技術は中々のものだ。だが、それは競技や暗殺としての技術。これは、戦闘の技術。」

「戦闘の、技術、。」

「見るのは的だけではない！視界も全て見るのじゃ！さあ構えろ！」

再び、的を狙って弓を構える。

「的だけじゃなく、視界を見る、。」

俺はそつと目を閉じた。

自分で閉じようと思ったわけではないが、自然に目が閉ざされた。

耳で捉える音は、ほとんどが滝の音。

「・・・いや違う。」

更によく耳を澄ませると、

右耳に音が響く。

微かに何かが流れる音。

風の音だ。

微かだが、右から小さな風が吹いている。

肌では感じ取れない程の小さな風が。

そしてもう一つ、何かが跳ねる音。

水の、音か、これは。

それも、滝の音じゃない。

流れ落ちる音ではなく、跳ねる音。

「・・・そうか、全て分かった。」

その瞬間、空間を全て掌握した気がした。

そして、掌に、輝きを見た。

「なッ!?? これは!??」

「は、隼さん!?? 持っている弓が、光ってる!??」

自然と、弓と手に、空白が消えた。

完璧に、掌に収まっている。

まるで、何十年も離すことなく握り続けたように。

次の瞬間、矢が放たれた。
意識したわけでもなく、自然と放たれた。

矢は吸い込まれるように、猛スピードで的を狙い、

ズバアアン!!

「……あれ？」

気がつくのと、弓にセットした筈の矢が消えていた。
的を見ると、ど真ん中に穴が空いている。

「今、俺何を、」

二人を見ると、驚愕の顔でこちらを見ている。

次に手元を見ると、

見たことのない弓が収まっている。

先程借りた弓じゃない!!?

しかも、妙にフィットする!

「……隼よ。お主の能力は、一体、」

「……わからねえ。全然何が起きたのか、俺が何をしたのかわからない。」

ただ、

「制御出来なかったってことか。」

おそらくこの弓は、俺が作り出したもの。

しかし、今はこれを操ることが、出来なかったのだ。

「……上等じゃねえか。俺の弓と生まれたなら、絶対操ってやる。」

影の侵入者

「どうだ？この山は。」

「ああ、いいよ。収穫だらけだ。」

その後、文の案内で天魔の住む屋敷へ立ち寄った。
ちなみに、文は見張りの仕事に戻らされている。

「そうか。・・・ん？その弓は？」

「あ？ああ、これか。」

俺は背中に担いでいた弓を差し出した。

「俺の能力で作りに出した弓なんだけど、な。」

「ちよつと待て。能力？一体どんな。」

「あ、説明してなかったっけ。」

天魔に、一通り能力の説明をした。

「へえ、そんな能力を。」

「じゃあ、俺は話したから、お前も話してくれよ。あんまりこの話はしたくないんだぞ？」

「何を言ってる？私は特殊な能力なんて持ってないぞ？」

「・・・え？」

「そんな驚くことか？」

「いや、そりゃあ、ここの長なんだし、ねえ。」

何の能力も無しにこの地位に上り詰めたのか。

やっぱり只者じゃねえな。

「で、結局その弓は？」

「ああ、途中だったつけ。この弓、俺に使いこなせないんだ。使ったことすら分からなかったよ。」

「それじゃあ、その弓は捨てるのかい？」

不適な笑みを浮かべて聞いてきた。

なんて返すか分かってるくせに。

「んなわけねえじゃん。いずれ使うさ。」

「だろうね。」

また背中に弓を担いだ。

「そういえば。」

「何？」

天魔との雑談中のこと。

「すつげえ聞きたかったんだけどさ。」

「うん。」

「お前って、女性？」

「・・・は？」

天魔の顔が、めちやくちや変わった。

「待て！別に深い意味なんてないから！刀をしまえって！」「なんだと？なら聞かなくてもいいじゃないか。」

「違う！ハッキリさせたかっただけ！」
「そうか、なら指一本で手を打とう。」
「落ち着け！落ち着けてエエエ!!」

その後、数十分かけて説得した。
何回能力を使ったことか。

「はああ、全く、疲れたじゃないか。」
「知るかよ。」

「・・・ハッキリさせると、私は女だ。何か悪いか？」

「いやいや、全然。なんか悪かったな。」

「悪かったと思っっているのなら、もういいよ。それにしても、そんなに紛らわしいか？」

「いやね、見た目は女性なんだけど、雰囲気かね。妙な威圧感と威厳を感じる。」

正直、最初声を聞いた時は、声が高い男だと思ったぐらいだ。
そのくらい、強みを感じていた。

「まあ、昔ここを救ってくれた英雄に言われるのは、悪い気分じゃないけどね。」

「やめてくれ、そういうの苦手なんだ。俺は勇者でもなんでもないし、手段も選んだことはないぜ。」

「何か、悪行でも積んできたのか？」

「まあ、一番悪いのは、無関係の人を使って敵を脅したことだな。」

「最低じゃないか。」

「俺もそう思う。」

そんなこんなで、雑談は盛り上がり続けた。

「それで、今後はどうするんだい？」

それから数時間が経過した頃。

「旅を再開するよ。それが俺の生き様だから。」

「そうか、いい場所は見つからなかったかい？」

「いや、そんなことないさ。ただ、今ここに家を持っても仕方がないんだ。」

「そうなのか、達者でな。」

「別に、永遠の別れじゃねえだろ。」

天魔があまりにも変な口調で言うので。

少しおかしくなってしまった。

「そんなこと考えていないぞ？」

「そうかい、じゃあそろそろ行くよ。」

そして、屋敷の部屋の扉を開けようとした、

その瞬間。

「天魔様!!」

目の前でバァンと扉が勢いよく開けられた。
全く心臓に悪い。

「ど、どうした、そんなに慌てて。」

すぐさま、天魔が反応した。

「報告します！侵入者です！」

「し、侵入者!?!? そんなものになんでそこまで、」

「強すぎるんです！全く歯が立ちません！」

「何だと!?!? わかったすぐに向かう!・・・隼!?!?」

そう天魔が言い切る前。

自然と飛び出していた。

『やばい、何かやばい気配がする!』

「ごっちか！」

気配を辿って、現場に向かう。

そして、走ること数分。

「なツ!?!?」

一人の人影が、見回り妖怪達を蹴散らしていた。

それも、オーバーキルだ。

「止めろオオオオ!!」

それを見た瞬間、木を思いっきり蹴り、そいつに向かう。

そして、至近距離に接近。

「極夜・深淵!!」

鞘から、極夜を引き抜いた。

が、刀は空を切る。

「な!?? 何処に、」

瞬間、隣に影が迫っていた。
それに反応しきれず、

「い、いつの間に、」

まともに、そいつの蹴りを喰らった。

俺の体は、それを受けて吹っ飛び、そのまま木に打ち付けられる。

「ガハアツ!!」

黒い影は、こちらへ歩み寄る。

「何だ貴様。まあいい、邪魔者は消す。」

「ごいつア、やばいな。」

起き上がり、二本の刀を引き抜いた。

侵入者の猛攻

妖怪の山に、緊迫した空気が流れる。

「来いよ、相手してやる。」

剣先を影に隠れた人影に突きつける。
それ即ち、命を賭けたと同然である。

しかし、

「・・・フン。」

そう吐き捨て、一瞬にして人影は姿を消した。

「な!??・逃さねえぞ!」

再び気配を追い、追跡しようとした。
その瞬間、

「隼! 一体何が!」

空から天魔が飛んできた。

文も一緒だ。

「俺の心配をする前に、あっちの奴らの心配をしろ。侵入者にボッコボコだぞ。」

「それは大丈夫だ。間も無く他の天狗達も追いついてくる。」

そう言った瞬間、天魔達が来た方向から天狗達が向かって来た。すぐさま、治療を始めている。

「それより、状況を説明してくれ！どんなやつだったんだ、隼！」
「状況って、こういう状況だよ。侵入者が無差別に妖怪を攻撃してんだ。理由は知らねえけどよ。」

それにしても、随分とめちやくちやに痛めつけるもんだ。
力試しとか、八つ当たりとかじゃない。

「ありやあ憎悪の塊だぜ。お前ら過去になんかやったのか？」

「・・・確かに、ここの妖怪は仲間意識が強く、侵入者への対応は最悪だが、」

「なら恨み買われても仕方ないわな。・・・じゃあ俺は追うぜ。多分だけど、あいつは俺と無関係じゃない。」

「知り合いなのか!?!」

「いいや、知らねえよあんなやつ。だけど、何処かで繋がりがあある。」
勿論、悪い意味で。

「だから早く行かねえと、」

その瞬間、脳裏に見たくもない想像を見る。

流れ落ちる水、そして飛び散る血。

「・・・あいつ!」

瞬間移動!!

「ま、待ってはや」

最後、文が何か叫んだ気がした。

瞬間移動したその先は、酷い惨状だった。
妖怪達が散らばって倒れ、様々な場所に飛び血している。
力強さを感じた滝の音も、悲鳴にしか感じられない。

「おいッ！何処行きやがったッ！」

周囲を見渡すと、負傷者しか見当たらない。

「……ここには居ねえ。今度は何処に」

その刹那、微かながら声が聞こえた。
低く、まるで老人のような声、

「……この声はー！」

無意識の内に、地面を蹴っていた。

そして、少し前、弓の練習をした場所に辿り着くと、

血を流したあの老妖怪と、返り血が飛んだ侵入者がいた。

「generate command!グングニル!!」

その姿を確認してから、二度目の瞬きをする前にグングニルを放った。

その槍は、影を纏った侵入者の腹部に突き刺さる。

「な!?!?」

腹部に槍が刺さって、動揺している侵入者に、
間髪入れず、

「generate command!」

shield & bomb!

「何イ!?!?」

老妖怪の周りを盾で囲み、侵入者を爆弾の爆風で吹っ飛ばした。
侵入者は、数十メートル離れた場所まで吹き飛ばす。

「おい爺さん!しっかりしろ!」

「・・・おや、お主は、」

老妖怪は、かすれた声で反応する。

「目え瞑んな死ぬぞ!気を失うな!」

「・・・隼、何故、そこまでわしを、気にかける、。」

「・・・確かによオ、あんたと俺は少し前にあったばかりだ。
だから!」

「まだ使えてねえぞ!あの弓!もつと色々教えてくれよ!」

その時、老妖怪の目がパツチリと開いた。
そして、その先に不思議な輝きを見た。

『貴様アアアア!!』

「は、隼! う、うし、ろ!」

老妖怪はかすれた声で叫ぶ。
言われた通り振り返ると、

「邪魔する奴は皆殺しだアア!!」

侵入者が拳をこちらに振りかざしている。

「貴様もあの世に送ってくれるツツ!!」

ゴンツ! つと鈍い音が鳴った。

「……なア!?」

侵入者の顔が一瞬青ざめる。

「皆殺し？あの世に送る？・・・違うな。」

再び、ガアンツツ！つと更に大きな音が鳴る。

「ギイイツー！」

辺りに侵入者の悲鳴が響く。

「・・・き、貴様、！その、威力は！」

「generate command ミヨルニル。」

黒衣の男の手には、黄金に輝く金槌が握られている。

「あの世に行くのは、テメエだけで十分だツ!!」

次は、侵入者の顔面に、ミヨルニルの一撃を叩き込んだ。

今度は、悲鳴すら聞こえない。

「さあ、反撃開始だぜ。」

弾幕反射

顔面を殴られた侵入者は、激情して連続で蹴りを放つ。

「反撃、だとオ?・・・調子に乗るなアア!」

が、隼はそれを全て躲す。

「当たんねえよそんな塵みたいな攻撃。」

返しのカウンターに、蹴りを放った足を金槌で潰す。
辺りに、侵入者の絶叫が鳴り響く。

「ぐああつ!・・・キ、キサマアアアア!!!」

「それしか言ってねえな。全く話にならない、ゼツ!!」
極夜・深淵!!

高速で刀を引き抜き、腕を切った。
生憎、切り落とすまではいかなかったが、
今度は避けられていない。

「な、何イイ!?? この俺に斬撃を!」

急いで侵入者は地面を這い、切られた腕を庇いながら肩で息をす
る。

だが瞬間、隼は距離を詰め、極夜を首へ向けた。

「さあ、チェックメイトだ。」

「ハア、ハア、ハア、」

侵入者は、呼吸をしながら睨め付ける。
もう動く気力すらなくなったかのように、脱力もしている。

「さあ、聞きたいことは山ほどあるんだが？」

次の瞬間、侵入者は隙をつくつもりで弾を放つ。
が、警戒している力が対等かそれ以上の存在に、それが通じる訳もない。

隼はサツと首を傾けてそれを避ける。

「・・・それがやつとか。まあいい、このまま首を」

『隼さん！そこから離れてください!!』

瞬間、遠くから文が叫びながら、猛スピードで飛んできた。

「あ、文!?？」

隼はそれに驚き、侵入者への警戒を完全にゼロにしてしまった。
それを、奴は見逃さず、

「フ、フフ、フハハハハハハ!!」

「な、何笑って」

隼が言い切る前に、両手を向けて奴は叫んだ。

「もう遅いッ！再生爆破ア!!」

その刹那、悍しい爆音と、凄まじい威力の爆発が起きた。

辺りは最悪の光に包まれた。

「なんとか助かりましたね！」

「ああ本当だよ。あの野郎、自爆しやがった。」

間一髪、俺は文に助けられた。

流石のスピードと言ったところだろう。

「にしても、なんで危ないって分かった？」

「いえ、こっちの方で変な音が鳴ったので飛んで向かったんですけど、二人の姿が見えた瞬間、嫌な予感がしたので。」

「へえ、でも、あの音聞こえたんだ。そんなに大きな音でもなかったと思うが。」

あの音っていうのは、金槌でぶん殴った時の音だ。

「うーん、ちよつと違うんですよ。」

「え？」

「鳴った音が聞こえた、頭に響いた、なんですすよねえ。」

「な、何言ってるんだ？」

「まあ簡単に言うると、ちゃんと聞いたんじゃないやなくて、聞こえた気がしたってことです。」

「聞こえた、気がした、？」

俺は数秒間、思考停止したが、すぐに気付く。

「・・・成る程、これか。」

generate command

再びあの金槌、ミヨルニルを具現化する。

「多分、これの能力か何かなんだと思う。」

「結構、ゴツゴツした金槌ですねえ、。」

「・・・あんまり好きな形状じゃなさそうだな。」

「いや重そうですし、。」

「まあ確かに、すげー重い。」

「それじゃあ、侵入者の確認をしよう。」

「そうですね！じゃあ私は天魔様に報告をしてきます！」

文が翼を広げて、地面から浮遊した。

「よし！行ってこい！」

「了解しましたっ！」

言うと共に、バツ！つと敬礼をした。

随分、ノリがいいな。

俺は少し文に微笑みかけて、あの爆発が起きた場所へ歩く。

そして、遺体を確認した。

その時だった。

「さて、あいつはどうなつ、た、」

「あれ?どうか、しましたか?」

「・・・無い。」

「え?無いって、何が」

「爆発跡が無い!!自爆なら絶対に残るはずの肉片とか!細かな塵すら残って無い!」

それに、あの爆発力。

かなりの力を持つ妖怪でも、ゼロ距離で喰らえば即死だろう。

なのに!

「なんで、何故残って」

『後ろだア!』

瞬間、背中にナイフか何かは突き刺さる痛みを感じる。

「は、隼さんッ!」

「テメエ、なんで、。」

文の呼び叫ぶ声には目もくれず、俺を睨み付けてきやがる。

「自爆して、死んだとでも思ったのかア？そんな訳、ねえだろうがッ
！」

奴は、更に背中に刺さった刃物を奥へ突き刺す。

「ぐっ……この、野郎、。」

まずい、。

このままだと、多分背中から身体を貫通してきやがる、。
どうにかしねえと、。

いやまで、奴は文に目もくれてない！

なんとかか、指令を送れば、。

ミヨルニル、？

いや駄目だ。あれを使うには、恐らく何かを殴らないと、。

仕方ねえ、ダメもとだが、手で合図を、。

「あ？どうした、黙って。」

俺は奴に気付かれないよう、手を動かして合図を送る。

「何か、作戦でも考えているな？」

文、頼む!

この合図に気付いてくれ!

「……何のつもりだツ!」

その瞬間、奴は更に奥まで刃物を押し込む。

「がはっ、!くっ、。」

「お前、あの天狗に合図を出していたな?」

な!?!?

気付いてやがった!?!?

「だが無駄なことだ。あの天狗は動けていない!」

どうやら、奴は文の方を今見たようだ。

畜生!折角無警戒だったのに!

突然、奴は俺の耳の近くで囁き出した。

「恐怖しているんだよ、この状況に。」

「……」

「クツクツクツ、残念だったな、無能な味方で」

『ええ、私も残念です。』

「クハッ!そうだろうか?」

『はい、こんなにも、』

『嫌な気持ちにさせられてツツ!!!』

直後、背後から風が吹き荒れる！

ただの風じゃなく、一般人が受ければ、簡単に吹き飛ばされる程の風が！

「風神一扇！」

背後に高速で移動していた文が、空から大量の弾幕を放ち、二人に襲いかかる。

「な！何イイ！」

焦った侵入者は、真上へと飛び上がる。

それと同時に、背中に刺さっていた刃物が消えた。

「成る程、実体がある刃物じゃないのか。」

見上げると、飛び上がった侵入者。

正面は迫りくる大量の弾幕。

「これは、あれをやるしかないア！」
generate command!

ノータイムで、角度をつけて盾を具現化した。
丁度、弾の反射が奴のところへ行くように。

「な、何だとオオ!?？」

弾幕は盾によって反射され、その全てが侵入者へと襲いかかる。当然、奴は反応しきれず、その全てが命中した。弾が当たって弾ける音が、耳が壊れる程鳴り響いた。

やがて弾幕の打ち込みが終わると、侵入者は上から落ちてきた。ドスンという鈍い音を立てて、

「死んだんですかね？」

「いや、警戒は続けるぞ文。」

回復術・治癒ノ湖！

「分かっています。」

俺と文は、回復術をかけながら、転げ落ちた奴へとゆっくり近づく。なるべく慎重に、隙を作らず、

が、次の瞬間。

「・・・ツハハハハハ!!」

「ツ!??文下がるぞ！まだ生きてやがる！」

倒れている奴が、突然笑い始めやがった！
どんだけ生命力あるんだよ！

「・・・俺は倒れない。絶対に。」

そう言いながら、ゆらゆらと奴は立ち上がる。

「だがここまでやったお前らに、特別に教えてやろう。」

侵入者は、淡々と話を続ける。

「さっきの再生爆破、あれは爆発と共に身体を再生させる。そして、

「そ、そして、なんだよ、？」

「その後数時間、何があろうと一瞬で再生するッ！」

「ちよー！待てよ!!?！」

一瞬で再生!!?!

しかも、数分じゃなくて数時間だど!!?!

「は、反則じゃないですか！」

文も続け様に叫ぶ。

戦いに反則なんて存在しないが、実際反則級だ。

あの爆発力に、完全回復！そして無敵って！

「もうお前らは限界の筈。あとは簡単に始末するだけだ。さあいくぞッッ!!」

奴は地面を蹴って、こっちに突進を仕掛けてきた。

「チィ!!どうすりゃいいんだよツツ!!!」

風縫・封滅

物凄い勢いで攻撃を繰り返す侵入者の攻撃を、隼はひたすらに躲し続ける。

反撃を何度も試みるが、直ぐに回復されて全く意味がない。

「その体力が、いつまで持つだろうなッ！」

「うるッせえなアア!!」

generate command!天叢雲剣イ!

数多くの敵を打ち負かしてきた天叢雲剣も、無敵の前では全くの無力だった。

気力の吸収も効かない。

突然、侵入者は攻撃の手を止めた。

「無駄な足掻きだな。死ねば楽になるものを。」

「なんだ急に手エ止めて。死ねば楽?そっくりそのままお前に返してやる。」

「・・・何故そこまで強がるのか、理解に苦しむな。」

「へえ、じゃあ教えてやるよ。」

瞬間、隼は侵入者から距離を取った。

遠目から見れば、ただ警戒して距離を取っただけに感じる。

「何のつもりだ。」

「教えてやるって言ってるんじゃない。それともなんだ?あんなにさつきまで余裕ぶつてた癖に、この俺との距離が怖いか?」

「・・・何だと?」

「あれ?お前ビビりなだけでなく耳も悪いのか?」

隼はひたすら侵入者を煽る。
ムカつく動作も入れながら、挑発をし続ける。

「ほら、来いよ。教えてやるって言うてんじやん、腰抜け野郎。」
どうやらそれが決め手だったようだ。

「何だと貴様アア!!」

今までで最高の激情を表して、地面を蹴って殴りにかかる。
が、

「フツ、かかったな。」

generate command!

電撃トラップ!!

およそ半分ぐらい近づいた瞬間、侵入者の身体に電撃が走る。

「な!? こ、こんなものオ!」

侵入者は、必死に身体を動かそうとする。

しかし、全く思うように動かない。

まるで、水の中に入ってしまった蟻のように。

「いくら再生出来ても、痺れは簡単には治らないようだな! 待ってた
ぜお前が怒るのをよオ!」

さあ! このままトリシューラで消させてもらおうぜ!

隼は、侵入者目掛けて手を翳す。

全身の神経を、その先に集めて。

が、突然全身を押さえながら奴が起き上がる。

「なッ!?? 動くんじゃないっ!」

「・・・お、俺は、。」

いきなり、奴の身体が光り出した。

まさか!この光はッ!!

「死ぬつもりはッツ!!」

再生イ!爆破アア!!

「に、二回目エエ!??」

generate command アイギスの盾ツ!

俺は咄嗟に最高防御の盾を具現化した。

あの爆発はそんならいヤベエ!

「・・・あ、あれ?」

何でだ、いくら待っても爆発が起きねえ。
いや起きないに越したことはないが、

一体何故、、

『随分とこの美しい滝を荒らしてくれますな。』

「え、!??ここ、この声は、!??」

大きくなくとも、強く聞こえるこの威厳ある声は、

「隼さん!もう一人助っ人を連れてきましたよっ!」

「あまり、ここを汚したくはないのだがね。」

文!もう一人は、、爺さん!

生きてたのか!

いや、治療が間に合ったのか!

って待て!

あいつが爆発したまうって!

「一旦引くかこの盾の後ろに来いッ!爆発するぞあいつが!」

「大丈夫ですよ!」

はあ!??

何であいつは余裕なんだよ!

まだ爆発してないだけで次の瞬間には、

「あ、く、くそ、。」

次の瞬間に聞こえた音は予想に反し、
爆発音じゃなくて、奴の苦しむ声だった。

「な、何で、。」

「動けないだろう、狼藉者。」

瀕死だった筈の老妖怪が、倒れた侵入者に近寄る。

「ちよ、爺さん！一体何をしたんだ!?？」

「特製の毒矢を、二、三発程。」

「そんなん持ってたのか、あんた。」

「わしの心構えは、常に戦場にありますがからな。」

「だけど毒矢は効果的だ。」

「奴は傷は治せても、毒や電撃の痺れには弱いらしい。」

「原理は謎だけだよ。」

「まあ、これで奴は動けない筈だ。今度こそ、」

generate comm

「ま、待つんだ！」

その時、三人がその一瞬を見逃してしまった。
痺れに撃たれながらも、立ち上がり、奴は叫んだ。

「アアアアアアアアアア!!!」

再生爆破アア!!

「ま!? マジかよオオ!!」

やばいッ!

トリシューラの具現化中は動けねえエ!!
こんなことでッ!!

「文ア! その石で俺をぶん殴れエ!」

「ええ!? 何で」

「いいからア!」

「は、はいっ!」

ゴツンツと鈍い音が耳元でなる。

もう痛いのか痛くないのか分かんねえ。

でもこれで!

「盾をもう一度具現化すればッ!」

generate command

「間に合えエエエ!!」

しかし、それは間に合わず、辺りは壮絶な光に包まれた。

「間に合わなかつ」

そして次の瞬間、強烈な爆音が再び辺りを響く。

さらに、爆風までも襲いかかり、

俺は目を開き、周りを見た。
爆風によって弾かれる筈の砂や石で、目をやられるか、開いても潰されるか。

確実に三人纏めて、よくて致命傷、普通に即死だった。
筈、なのに、、、。

地面はぐちやぐちやに崩れ、木々の葉は落ち、
そして、

俺と文の目の前には、

血だらけの、老いた天狗がいた。

「・・・あ、あ。」

「爺さん、何で、。」

文は言葉が出ず、俺はそう言うことしか出来なかった。

『・・・今度は、見せつけたかったですがな。』

老妖怪は、ゆっくりと話し出す。

それはそれは、かすれた声で、

「見せつけるって、何をだよ。・・・この死に様かよッ！」

何で守った。

そこまでして、

あんたは、逃げれた筈なのにッ。

『大昔、わしは、、ある戦いに参加した。』

「・・・急に、何言ってるんだ。」

『当時わしは、まだ、ガキで、。』

「おい喋るな。マジで死ぬって」

『大して強くない癖に、、強がって参加して、。』

「いいから黙れ！一旦引くぞ、幸いあいつはまだ目を覚ましてない！」

『結果は、何も、出来なかった。』

「二回目からは、多分かなり痛みがあるんだッ！文、爺さんの肩持つぞ
！」

「わ、分かりました！」

協力して、爺さんを担いでこの場から引く。

このままだと、確実に負ける！

『ただ戦う様子を眺め、倒れていく妖怪を、、見ている、だけだった。』

「よし行くぞ。文、慎重にな。」

「わかってますって！」

『相手は、、たった、二人だったのに、。』

「・・・爺さん、今なんだった。」

大昔、戦い、二人、。

『確かに、わしは、何も、出来なかった。けど、目標、が、』

爺さんは、俺を指差した。

『最後に、一つ、弓は、。』

「・・・ああ、あ。」

『弓、は、矢が、あつて、初めて、成り立つ、もの、です、ぞ。』

そう言った次の瞬間、老妖怪の息が途絶えた。

苦しむような声を出さず、眠ったように、

「・・・爺、さん、。。」

「空座さん、。。」

「文、誰だ、それ、？」

「さつき、聞いたんです。名前を。」

「・・・そうか。」

まさか、あの戦いに参加していたとは。

何億年前かの、あの戦いに。

「何処へ行くつもりだツツ!!」

「は、隼さんツ！後ろツ!!」

起き上がった侵入者が、背後から襲いかかる。

文も反応して叫ぶが、

「遅いッ！このまま、背中を切り裂いて」

次の瞬間、ザシュツ！と身体を刃物で貫く音が鳴る。

そして、連続して血が流れる音も、

侵入者の身体から、。

「どうせそんな事やってくると思ったぜ。何回目だア？」

「な、気配を消した筈、なのに！」

「喋るな、テメエの声は聞きたくない。」

一段解放・限解ツ!!

エクスカリバアア!!

大量の聖剣が、侵入者に突き刺さり、その身体は吹っ飛ばされる。飛んだ先にも剣は襲いかかり、連続で勢いを増しながら突き刺さっていく。

「うぐツ！だ、だが！こんな傷ウ！」

「治させる訳ねえだろうが!!」

俺は背中に担いだ、あの弓を手を取った。

そして、弓の弦を引く。

「爺さん！いや、空座！お前の言葉、確かに貰った！」

弓は、弓だけじゃ戦えない！

矢を持って、初めて武器なんだッ！

「風よ嵐よ、吹き荒れろッ!!」

風縫!!

弓の弦を、吹き飛ばされる侵入者目掛けて放った。

瞬間、凄まじい衝撃と風、轟音が鳴り響く。

更に、何も無かった筈の弓から、透明な矢が放たれた。

飛行するうち、

やがて、それに色がついていく。

色は、紫だ。

弓は、一直線に奴へ飛び、

「行っけエエエエ!!」

ザシユンツ！と音をたて、腹部に突き刺さった。

「な、この矢は!?」

突然に矢が刺さり、同様を見せる。

だが、驚くのはここからだッ！

「そして、弾き飛ばせッ！」
封滅ッツ!!

直後、矢が紫の輝きを放った。

弦という青年の過去

腹部に突き刺さった矢は、紫色の光を放つ。
鮮やかに、そして禍々しく。

「こ、この光はア!?？」

「さあ？自分でこれから体験しろ。」

更に追い討ちをかけるように、上から輝く聖剣の追撃。
侵入者は、なす術なくそれを喰らい、そのまま地面に叩きつけられた。

「ぐ、こ、これしきの、ことッ。」

「そう思うなら、また再生してみろよ。爆発込みでな。」

地面を這う侵入者に、歩いて隼は近寄る。

「ああ言われず、とも、その余裕をッ、後悔させてくれるッ！」
再生爆破ッ!!

しかし、何も起こらない。

「・・・は、はア？何だよ！何で発動しないッ！」
再生爆破！

侵入者は、焦って何度も何度も宣言を繰り返す。

しかし、何かが起きる様子も、気配もない。

「何で！一体何で！」

「それが、封滅の矢の能力だ。」

「ハ、ハア？そんなの無関係だッ。」

奴は理解出来ないといった表情を見せる。
能力が使えないという現実を、認められずに。

「その矢は、突き刺さった対称の能力を一つ、強制的に弾き飛ばす能力がある。簡単に言えば、そう、、、」

「お前は能力を使えない。」

「ッ！黙れエエ!!」

それを聞いた侵入者は、狂ったように隼を殴りにかかる。

しかし、最早戦いの中で攻撃を全て見切りきつた隼に、通常攻撃など無駄に等しかった。

「ああッ！くそッ！くそオオ!!」

「いくら叫んで攻撃しても、もう全部わかってんだよ！」

火神・極炎！

隼は攻撃を避けて、左手に握られた真紅の刀で、侵入者の左腕を切り落とした。

「グアアアアッ！な、なんだよこの熱はアッ！」

「残念ながら、もう再生はしない。」

すかさず隼は近寄り、首に寸止めで極夜の刃を向ける。それをサツと振り落とせば、確実に首が飛ぶ位置に。

「くツ、ここで、死ぬのかよツ。」

「……ああ死ぬさ。お前が、もしくは、俺が。……終わりだ、あばよ。」

隼は、剣速をつけて、刀を首目掛けて振り下ろした。

が、しかし、

「畜生がツ！話と違いじゃねえか！」

その言葉を聞き、振り下ろされる刀の動きが止まる。

「……それどういう意味だ。」

直後、謎の衝撃波が、侵入者の身体から放たれた！
とんでもない音響と、計り知れない威力で。

「ちよ！今度はなんなんだよツツ!!」

その衝撃波によって、隼の身体は後ろへ飛ばされる。

しかしその瞬間！隼の脳裏に、一つの記憶が駆け巡った！

『ふ、これは？！』

時は遡ること、古墳時代。

さまざまな土地にて、豪族と呼ばれる一族が、権力を握っていた頃。
そんな時代の、小さな村の話。

「母さん！こんなに沢山野菜が取れたよ！」

「あらーやったじゃない！」

元気な声で、野菜を収穫した少年。

彼の名は、弦（げん）。

この小さな村にて、父、母、弦の三人暮らしをしていた。

父は山へ狩りに、母と弦は、畑仕事し、

貧しくも、楽しく暮らしていた。

そんなある日、

「母さん！何で、何で父さんは帰って来ないんだよ！」

「・・・弦。」

いつものように、山へ向かった彼の父は、何時になっても帰ることはなかった。

村の人が言うには、熊か何かに襲われたとのことだ。

「弦！やめなさい！」

「嫌だよ！僕が、僕が父さんの仇を！」

「ダメよ！家に入りなさい！」

「う、うああああああ!!!」

その日、生まれてきた中で、弦が最も泣いた日になった。

そして月日は流れ、

弦は、すっかり背が伸び、優しい青年へと育った。

「母さん、僕が掃除やっておくよ。」

「そんな、いいわよ。弦は畑仕事があるじゃない。」

「そんな大変なことじゃないさ。遠慮しないで。」

「そう？じゃあお願いしようかしら。」

彼は、父親が死んだという現実を受け止め、強く成長したのであった。

のだが、

「オラア！とつとつと従えゴミ屑共がア！」

何か鈍器で殴られる村の人たち、お構い無しに暴れ回る男達。

そう、少し離れた場所にあった大きな村から、豪族達が侵略しに来たのだ。

村を一瞬で恐怖に陥れた豪族達、

勿論、その矛先は弦の家にも向いた。

「止めろ！母さんに、母さんに手を出すなッ！」

「ああ？なんだアこいつ。おい、このガキを縛り上げろ。」

男数人が、弦に近づく。

が次の瞬間、弦は自作の棍棒で男たちを殴り飛ばした。

「うごおっ！な、なんだこいつ！」

「近づくなつつつてんだろ！早くこの村から出て行きやがれ！」

「こんの、ガキイ！」

その後、暫く抗戦が続く。

弦は頑張つて抵抗したが、

結果は敗北。

「ち、畜生ッ。」

「クハハッ、おいガキ、そんなにこの村から出て行って欲しいなら、条件がある。」

「な、なん、だよ。」

「テメエ一人が死ぬ。そしたら、村は見逃してやる。」

「ほ、本当か、？」

「ああ、約束してやる。さあどうするよ。」

「・・・喜んで、死を受け入れよう。」

そして、弦は豪族によつて殺された。

だが、死ぬ直前。

弦は安堵に包まれていた。

『良かった、これで村は助かる。』

彼は殺されたあと、少しの時間だけこの世に留まった。

そこで、村が安堵に包まれる光景を見てから、死のうと考えた。

が、見た光景は真逆だった。

豪族達は武器を振り回して村を脅し、

あろうことか、少し抵抗した何人かが殺された。

自分が死んだら見逃してやると言ったのにも関わらず、男の死の覚悟を裏切ったのだった。

『許さねえ、いつか、必ず皆殺しにしてやるッ。』

『生き返ってでも、生まれ変わってでもッッ。』

『僕の大切な人達以外をッッッ!!!』

目を開くと、人影が二つ、俺の顔を覆っていた。

知ってる面影だ。

「よし、目を覚ましたな。」

「大丈夫ですか？隼さん。」

文と、天魔か、。

「つてヤベエ！どんくらい寝てた!?!?」

「いや数秒だぞ。吹っ飛ばされる隼を私と文で空中で拾って、岩陰に隠れてから数秒。」

「え?」

「ていうか寝てたと思ってるんですか!?!? こんな状況で!」

次の瞬間、恐らくこれで身を隠したのだろうという岩が、突然砕け散った。

「・・・成る程、寝てたら一瞬でくたばるな。」

三人は、それぞれ戦闘の構えをとった。

第二の能力

「……さあ、今度は何をしてくんだらうな！」

砕け散った岩の裏側に潜んでいた三人は、一斉に戦闘態勢に入る。同時に、地面に屈していた侵入者も起き上がった。

「二人とも、、作戦は無しだ。早急に叩き潰すッ！」

「全く、適当なのか真面目なのか！」

「勿論です。手加減無しで行きますよ！」

次の瞬間、文と天魔は空へ、隼は侵入者に向かって地を蹴った。空へ飛び上がった二人は、すかさず弾幕を敵目掛けて放つ。その弾幕の波に乗るように、隼は先陣を走る。

「さあ！これを対処できるか！」

極夜・深淵！

更に弾幕の流れと同時に、刃の真空波を放つ。

起き上がったばかりの侵入者は、それを対処出来ず、まともにそれを喰らった。

「どうしたッ！もう何も出ねえか！」

あいつは弾幕を避けられてねえ！

それどころか、完全に戦意喪失してやがる！

次で決めてやるッツ！！

「トドメだアアアアア!!!」

極夜・奈落

「待て隼！一旦引け！」

その時、後ろから天魔が叫んでいた。

が、それに気づかず、

思いつきり、その黒刀を振り下ろした。

「・・・な、何イイ!?」

最高威力を誇る技で、確実にあいつの肩を切り裂いた。
筈なのに!!

「なんで、なんで刃が通らねえんだよ！」

極夜の刃が折れることはなかったが、侵入者の肩に傷がつくことも
なかった。

「駄目だ隼！早くそこから」

天魔は必死に叫び続けた。
だが、しかし、

「遅いッ!!」

「なッ!?？」

直後、俺の身体が後ろへ吹っ飛ばのを感じた。
同時に、腹部に痛みもある。

「隼ア!!」

かなりの飛距離を殴り飛ばされた。
多分、俺の後ろにある木がなかったら、まだまだ吹っ飛ばされてた
だろう。

「痛ッ、拙いなこれ。」

お腹がすげえ痛い。
ほとんどの人が、腹痛を起こしたことがあるだろうけど、
そういう痛みじゃねえ。
もつともつと惨いやつだ。

「・・・回復術・治癒ノ湖。」

ひとまず、腹部に負った激痛を治す。
これくらいなら、弱い方でも治るだろう。

「さあ、早く戻んねえと」

「その必要はない。」

瞬間、前方方向から物凄い速度で何かが迫ってきた。
・・・おい、まさか、

「ッ!?? 瞬間」

って、今日はもう使った気が、

・・・やばい!!

ズドオオン、と、大きな音が鳴り響いた。

「避けたか。」

間一髪、スライディングで横に避けるのに成功した。
大きな音は、木が真つ二つに殴り切られた音だ。

「おいおい、まずは俺を仕留めるってか?」

「当然。お前が一番厄介だ。」

「へえ、まあゆっくりしてけよ。」

直後、耳の横でビュンツと轟音が響いた。

「ゆっくりする必要はない。」

「・・・急ぐねえ、紅茶でも入れてやろうか?」

「全く意味がわからない。」

ああ、紅茶って日本にまだないっけ。
煽りも兼ねて、ティーポットを傾ける動作をしてやったが、

無意味だったか。

「くだらないお前の煽りに付き合う気はない。俺にはまだまだやらなきゃいけないことが」

「それは、仕返しか？」

そう言った瞬間、奴の身体がピクリと動いた。

「・・・どういう意味だ。」

「いいやなんでもねえ！」

generate command!!

天叢雲剣!!

至近距離から、奴の体目掛けて剣を具現化した。
が、ギリギリで躲される。

「・・・不意打ちか、卑怯な真似を。」

「卑怯で結構。だが、分かったぜ。テメエの能力がよオ！」

極夜・奈落と、天叢雲剣、なら、斬れ味としては奈落の方が上！
だが奈落が効かないなら、今の攻撃を避ける必要がない筈！
つまり！

「テメエの第二の能力は、身体を硬化させる能力！だが、瞬発的には使えない！」

「・・・成る程、確かに、硬化させる点は間違っていない。だが、」

次の瞬間、ビィィィィン!!と、まるで蟋蟀が羽音を鳴らすかのような音が耳を襲った。

「な!? この、この音はア!」

何だこれ!

耳を塞いでもうるせえ!

「特別に教えてやる。俺の第二の能力は、」

「虫状態変化」

「ありとあらゆる虫の体軀に、身体を変化させることが出来る。」

「・・・え、む、虫イ!?」

「確かに、一見すると雑魚そうな能力だ。」

だが、しかし、

「例えば、兜虫は自重の二十倍もの物を持ち上げることが出来る。もしそれが、人の大きさまでになったら?」

「・・・な!」

「例えば、蜂はあの大きさでさえ、人間と互角かそれ以上に対峙する。もしそれが、人の大きさなら?」

次の瞬間、とんでもない初速で、やつは空中に飛び上がった。

「成る程オ! Very Crazyだなッ!」

空中へ飛び上がったやつは、そのまま体勢をつけて、突進を仕掛けた。

これも、異常なスピードで！

「くっ！generate」

「無駄だア！」

体躯・蟋蟀！！

迎え撃つ武器を具現化しようとした。
が、再びあの耳鳴り音響が響き渡る。
今度は、さっきの何倍もやばいッ！

「か、身体が！音で、身体が動かねえ！！」

まるで、身体全体が麻痺してるみてえに！

「今度はこちらが言わせてもらおうッ！これで、」

体躯・兜虫！

トドメだアアアア！！

『死ぬには早いぞ、咲風隼。それでも我を超えた者か？』

・・・誰だ、？

・・・女性の声だ。それも、よく覚えてる。

『あんなカス相手に死ぬことは、断じて許さんぞツツ!!』

・・・二人、？

・・・こつちは、男性の声。

・・・一体、誰だ、？

『いいから起きろ！この未熟者！』

「ええッ!?」

バツツと目を開くと、俺の周りに、何かドームのような障壁が張られている。

・・・って！この障壁!!

『このまま寝るつもりかッ！ならばこの俺がトドメを貴様に刺すぞッ！』

続け様に、俺の身体から衝撃波のようなものが広がる。

これも！確かに覚えがあるッ！

次の瞬間、瞬きのその一瞬。

何も見えない筈の目の奥に、二人の姿を見た。

姿こそ違う、だけど、

間違いようがねえ。

「八岐大蛇、そして、天逆毎、。」

集結！好敵手！

「な、なんで、お前らが、。」

「何だ？そんなに私が憎い対象か？」

女性の姿をした影、天逆毎が、そう尋ねてきた。

「え、い、いや、憎んでは、ねえけどよ。」

「つて違う！」

「そうじゃねえ！」

「お前も！八岐大蛇も！あの時消えた筈じゃ！」

「ああ、確かに消えたさ。身体はな。」

「・・・は？身体あ？」

「そうだ、数億年前、私は確かに消えた。お前との勝負に負けたな。・・・しかし、不思議なものだ。まさか力と魂はこの世に残るとは。」

「ちよ、ちよつと待てよ。じゃあお前らはずっとこの世に残ってたってことかよ。」

「そうだ、理由はわからないがな。普通はあり得ないさ。」

「いや、全然ついてけねえ。」

「理由はわからない、普通はあり得ないって。」

「まあ、そんなことはどうでもいい。」

いやどうでもよくないと思うが、

「結局、しばらくの間この世を彷徨っていたのだが、」

すると突然、天逆毎の影が指を指してきた。

「隼！何勝手に死にかけている！それでも私に勝利した人間か！」

「あ、いや、人間じゃあないんだけど、」

「それがこの行動の理由だ。いいか！今回だけだ、今回だけ特別に手を貸してやる！」

さあ、意識を戻せ！

咲風隼!!

目を開いた瞬間、再びこの戦場に戻ってきた。
美しい筈の山は、もう見る影もない。

「……貴様、その力は、？」

そして、障壁によって跳ね返されたあいつと、再び相對する。

「さあ、？・・・これから知ることになるだろう、俺も、お前も。」

「・・・ならばそれが力を振るう前にッ！仕留めてしまえばいいだけのことッ！」

体軀・飛蝗!!

次の瞬間、やつは地を蹴って、俺に急接近する。
今までで、一番の速度だ。

「壁など、連打でぶち割ってくれるッ！」

体軀・兜虫!!

そのまま侵入者は、思いっきり拳を振り下ろした。

「て、天魔様！あつちで音がしましたよ！」

「何!?？ 早く向かうぞ文！」

隼が殴り飛ばされた方向に向かって、私の文は飛んで向かっていった。

あの侵入者、まだ確実に何か隠し持っている！

このままだと、隼が死ぬ！

次の瞬間、少し木々を超えた先に、二つの人影を見た。

「いましたよ天魔様！木々の向こうです！」

「ああわかってている！もつと飛ばすぞ！」

私と文は、さらに速度を上げる。

前に立ちはだかる木々を躲しながら、

そして、木々を抜けると、

「ツ！隼ツ!!」

棒立ちしている隼に、侵入者が上から殴り付けようとしている！

隼をここまで吹っ飛ばした力で、はけ口のない方向に殴られたらひとたまりもない！

「隼！避けるー！」

私は叫んだ、

が、遅かった。

無慈悲にも、奴の拳は振り下ろされた。

その時、不思議な光景を見た。

何故か侵入者が飛ばされ、隼はそのまま棒立ちしている。

「はや、ふぎ、？」

そしてもう一つ、彼の背後に、二つの影を見た。

「よお天魔、文。・・・少し待ってろ。」

直後、隼の身体が空を飛んだ。

そして、そのまま侵入者目掛けて直進した。

「な、何故だアア!!」

『そんな攻撃で、私の障壁を破れるとでも?』

「そ、それならッ!」

体躯・蟋蟀!

侵入者は、再びあの音響を放つ。

今度は、先程よりもさらに強い。

だが、

「無駄だ、もうそれは意味がない。」

『終焉ノ波動!!』

隼はそれを、更に上の波動で打ち消した。

当然、力同士がぶつかり合えば、力が強い方だけが突き抜ける。
よって、侵入者は隼の波動を、モロに喰らった。

「ぐーぐあぁッ!!こ、これはアア!」

「よく効くだろ、それ。」

それはかつて、この山で、隼が八岐大蛇から受けたものと同じものである。

『直撃したものは、力を奪い、そして生気を奪い取る。』

「ぐ、な、なんのこれしきッ、。」

「へえ、直撃なのに耐えるのか。なら、」

灼熱ノ波動！

次に放たれた波動は、辺りを強烈な熱気で包んだ。

勿論それも、侵入者に直撃する。

「く、くそがアア！」

「さあ、降参するなら今の内だぞ。」

トドメと言わんばかりに、隼はもう一回波動を構える。

「・・・降参、だと、？」

「ああ、もし降参するなら、お前を殺さない。絶対にもう誰も傷つけないと約束するなら。」

「・・・」

この時、隼は、侵入者を殺したい気持ちは山々だった。

だが、たとえ殺したところで、傷つけられたもの達の傷が治るわけではない。

その考えが、この質問に至らしめたのだった。

「さあ！とつとと降参しろ！」

「・・・嫌だ。」

「・・・はア？」

その瞬間、隼の腕にはまっている、真紅の腕輪が輝きを放った。

「え、ちよ、ちよっと」

再び、隼の意識が移動した。

「・・・あれ、ここ、何処？」

『目覚めたか。』

「ッ！だ、誰だ！」

『まあそう身構えるな。敵ではない。』

「え、敵じゃない、？」

『ああ、協力者だ。貴様のな。』

「き、協力者？」

『貴様、憎しみを抱いているな？』

「・・・」

『凶星だろう。だからこそ、協力してやる。』

「・・・あんたに何がわかる。」

『分かるさ。俺も、裏切られてきた。』

「えっ、。。。」

『貴様、名をなんと言う。』

「・・・弦。」

『そうか、弦、か。ならば、捨てる。』

「・・・え、何を言って」

『捨てると言っただ、その名前を。』

「ちよ、待てよ！誰がそんなこと」

『捨てるのは名前では無いッ！過去だッ！過去を捨てるのだッ！』

次の瞬間、再び意識が戻る。

「今のは、一体、。。。」

再び意識を戻した隼は、あの光景を思い出す。

「なあ、お前、。。。」

直感的に、隼は侵入者に話しかけた。

「降参は、しない。早く殺せ。」

「違う、質問だ。」

「・・・ああ？」

「お前の名前、弦っていうのか？」

「・・・え？」

その瞬間から、少しの間沈黙が流れた。

二人には、永遠とも感じられたであろう沈黙が。

「・・・知らねえ。」

「本当か？」

「知らねえ、。知らねえよそんな奴。」

「・・・」

隼はこの時、侵入者から何かを感じ取っていた。

「・・・それより、油断しすぎじゃねえのか？」

「何だど？まだ何か隠し持って」

次の瞬間、隼のしている空が変わり始める！

「な、何だ、これは、。」

「フハハハハッ！もう遅い！とくと味わえ！」

第三の能力！幻覚術！！

咲風隼の幻

「こ、ここ、何処だ、？他のみんなは、？」

そこは、何処かの山の様だった。

草木が生い茂り、小鳥が囀り、川が流れる。

自然豊かな場所だった。

そして、周りを見渡しても、人一人居ない。

天逆每や、八岐大蛇も語りかけてこない。

「妖怪の山、じゃねえよな、。でも、」

何か懐かしさを感じる。

確か、よくここに来たことがあるような、

そこから、少しの間歩いた。

少しずつ、

山を降りるようにして、

「やっぱり、ここ、来たことがあるような、」

周りの風景を確かめながら歩くうちに、益々来たことがあるような感覚に襲われた。

耳に響く様々な騒音も、どこか懐かしさを感じた。

「って、ゆっくりしてる場合じゃねえ。多分、何かワープの能力とかで、」

『隼さんっ！』

直撃、背後から声が聞こえた。

「ツ！誰だツ!?？」

地を蹴り、声の先から距離を取る。

そして、その声の正体を見た。

「え、？」

見覚えがあった。

それも、よく。

巫女服にロングヘア、特徴的な女性。

「早、紀、、、？」

「え？私のこと忘れてたんですか!?？」

「え、いや、、、一度も忘れたことは、」

何度も目を疑った。

それもそのはず、早紀は遠い昔に亡くなっている。
だからこそ、俺は旅を続けていた。

彼女に、いつかあの世で思い出話を聞かせる為に、

「早紀、何で、こんなところに、、、。」

「こんなところって、よくこの山に山菜を採りに来たじゃないですか
！」

「えっ、山菜、？」

ハツとして、再び周りを見渡す。

その瞬間、全部思い出した。

この山は、何度も来たことがあることを、
前にいる、この女性と、

「そうか、だから、。 って違う！そうじゃなくて、！何で、生きて、ここに、？」

「ふふっ、そんなことどうでもいいじゃないですか。」

「いや、全然どうでもよくないって、」

「私だって生きてたかったんですよ。それは、周りの人に能力で危害を
与えるかもしれないけど、私が死ぬ必要ないでしょう？」

「・・・え？」

「おい！この壁を退けろ！」

「駄目です天魔様！全然びくともしません！」

「クッ！この中で、一体何が起きているんだ！」

場面は移り変わり、現在、侵入者の作り出した謎の空間の壁を、天魔や文を含めた妖怪の群勢で、破壊を試みている。

『フツハハハハ!!残念だが、この壁は中からじゃないと開かないツ!』

「な、この声は!」

『折角だから説明してやる。この空間は、第三の能力、幻覚術ツ!定員は一人だが、その一人に対して幻を見せる。勿論、人によって幻覚は違うぞ?』

「幻、だと、?」

『そうだ。大体は、己の悔やんだものを見せるらしいが。・・・ああ、折角の機会だ。お前らにも、奴が見ている幻を見せてやろう。』

直後、先が見えなかった空間の壁が透ける。

その先は、

何処かの山の風景、

咲風隼、

そして、巫女服を纏った一人の女性がいた。

「ツ!隼さん!早く外に出てくださいツ!」

一目散に、文は中にいる隼に呼びかける。

だが、

『無駄なこと、こちらの声は、中にいる奴らには聞こえない。定員は一人だツ!』

「そ、そんな、。」

「文！落ち着け！」

「・・・天魔様、。」

「見守ることしか出来ないのなら、全力で見守れ。最善を尽くすんだ。」

「・・・わかりました。」

念のため、妖怪達は周りを囲んで中を見守る。

現在の様子は、隼ともう一人の女性が何かを話しているようだ。

「あの女、一体何者だ、？」

「多分、昔の友人か何かじゃないですかね？隼さんって、誰とでも仲良くなりそうですし。」

天魔や文は、壁に張り付くようにして中を見る。

「おい侵入者！この空間の説明は分かったが、結局これは何が狙いだッ！」

『狙い？ああ、確かに、。まあ、知られたところでどうてことない。教えてやる。』

それは、

『中に閉じ込められた者が、幻を見破った場合空間は消える。見破れなかった場合、』

「・・・場合？」

『いずれ、幻に囚われ、死んだように生きることになるな。』

「な、！」

侵入者が放った恐ろしい一言、死んだように生きる。

それ即ち、死よりも恐ろしいことかもしれない。

『まあ、到底みやぶれないと思うがな。』

「・・・何故そう思う。」

『言っただろう、悔やんだものを見る、と。この幻は、良い結果にして見せるもの。そりゃあ、墮ちるさ。』

「く、くそッ！」

天魔は怒りに任せて壁を殴る。

そして、それを止めようとする者もない。

みんな、絶望に打ちのめされている。

『だが、それは面白くない。だから、俺が直々にトドメを刺す。』

「え、？」

次の瞬間、空間の中に、侵入者が入り込んだ。

それと同時に、中の声も聞こえて来る。

『、、、、れないけど、私が死ぬ必要ないでしょう？』

『・・・え？』

「は、隼！早くそこから離れるんだ！」

必死に天魔は叫ぶ、文も同じく、妖怪は皆、空間の中に叫ぶが、

『向こうの声は、俺の侵入で聞こえるようになったようだな。だが、向こうから出てくる奴がいない限りツ、こっちの声は聞こえないツ！』

空間の中に入って侵入者は、隼の背後へ回り込む。

それに、隼は気づいていない様子だ。

完全に、幻に囚われている。

『さア!!色々と手間が掛かったがア、これで終わりだツ！』

侵入者は、身につけていた短剣を抜き、隼の首へ、

バアアアアン!!つと、その瞬間、強烈な打撃音が鳴り響く！

同時に、空間の壁が、砕け散った！

「あ、あがア、な、何で、。うぐツ!!?」

息をつく間も無く、倒れかける侵入者の首を、隼はガシツと掴む。

「テメエ、よくも、」

「い、いギッ！」

「よくもッ！早紀の覚悟を踏みにじってくれたなアア!!」

一段解放・限解ッッ!!

瞬間！隼の周りに、無数の武器が現れる！

標的は、ただ一つッッ!!

「や、止め」

「地獄の底に落ちろオオオオオ!!!」

無数の武器達は、止まることなく、侵入者目掛けて飛ぶ。
更に、至近距離から!!

「う、ガアアアア!!!」

そのまま、侵入者は後方に吹っ飛んだ。

「な、何故、何故、殺さなかったッ。」

吹っ飛ばされた侵入者に、隼が近づいた。

そいつは、至近距離から、無数の武器の攻撃を受けた。当然、剣や槍も沢山混じっている。

心臓を貫けば、一撃で殺せるような武器だ。

だが、死んでいない。

それどころか、それによる切り傷刺し傷は一つも付いていない。

「お前には、さっきの攻撃で、もう二本、封滅の矢を射させてもらった。お前はもう、能力を使えない。」

「・・・まだ、能力がある、と言ったら、？」

「また潰すだけだ。」

「・・・降参だ。さっさと殺してくれ。」

侵入者は、手を上に上げて、降参宣言をした。

「・・・いや、お前は殺さない。」

回復術・治癒ノ海

直後、隼と侵入者の傷が、全て治った。

「え、な、何のつもりだ！」

侵入者がそう言った瞬間、隼は少し距離をとった。

「ほら立て。俺も能力を使わない。」

「・・・え？」

「武器禁止。素手の一騎打ちだ。」

最後の殴り合い

「何がしたいんだよ！お前！」

妖怪の山に、疑問と怒りの詰まった叫びがこだまする。
直後、ゆっくりのそいつは立ち上がった。

「別に、お前が気に食わなさそうな顔してるからよオ。」

「余計なお世話だ、。早く僕を斬ればよかったじゃないか！この山を荒らした怒りと憎しみで！」

「あれ、お前って自分のことは、俺って呼んでなかったか？」

「あつ、。」「

青年の言葉がそこで詰まる。

まるで、隠していたことを間違えて喋ってしまった少年のように。

「とにかく、傷は治しちまったんだ。」

次の瞬間、隼はその青年と少し距離を空けた。

「やろうぜ、。話はこれで、だ。」

少し間を開けて、返事は返された。

「・・・わかった。ああ！わかったよ！」

そして、二人は向き合う。

「これは真剣勝負だ。だから、ちゃんと名乗りを上げさせてもらう。名は咲風隼！」

隼は、右足をより一層深く踏み込んだ。

「さあ、勝負だ。」

瞬間、隼は地を蹴り加速する。

その、対戦相手目掛けて、

「ちよ！ちよつと！」

その青年は、慌てて左に身体を投げた。

その直後、轟音と共に、背後に生えていた木が倒れる。

「どうした、さつきまでの威勢は。」

「ちよ、ちよつと油断しただけだ！そもそも、あんたが名乗ったから、僕、俺も名乗らなきゃいけないのかと思ったじゃないか！」

「・・・やつぱり、さつきまでと口調が違うな。僕呼びが少し出てるし、そもそも俺のことは貴様って呼んでた筈だ。」

「チツ、うるせえな！」

今度は、青年の方から仕掛けた。

折れた木の残骸を踏み台にし、拳を構えて、隼の顔目掛けて突進する。

が、それはいとも容易く躲された。

「もうそんな攻撃、通用なんかしない。」

「ク、クツソオオー!!」

攻撃を躲された青年は、がむしやらに隼目掛けて拳を振るう。

当然、そんな攻撃が当たる訳もなく、

次の瞬間、隼はその青年の腹部目掛けて、拳を打ち込んだ。

「う、ガハアツ、！」

青年はその場で、口から血を吐いた。

「質問だ。・・・いや、確認だ。改めて聞くが、お前の名前は弦って言うのか？」

隼は、再びその質問を投げかけた。

『違う。』

その瞬間、辺りに謎の気配が漂い始めた。

「な、何だ、この気配は、！」

『俺は、弦じゃない。』

「さっきまでの、怒りとか憎しみの感情じゃねえ！」

その時、その気配が一点に集まりだした。

その行き先は、

『そんな、弱い奴の名前じゃないッッ!!』

瞬間、青年は、隼の背後に回っていた。

更に、そこから拳を振り下ろした。

「なッ!!? いつの間に」

隼は、咄嗟に手を出してガードする。

しかし、

「こ、この威力は！」

その手は、振り下ろされたその拳によって弾かれた。

「俺は、強くなったんだよッ!!」

続け様に、もう片方の拳を撃ち込む。

「ハ、このッー！」

隼は、それを足を振り上げて、腕ごと弾いた。
そのまま、少し距離をとる。

「お、お前、。」

「俺は、弦じゃない。今の名は、幻だッ!!」

直後、再び幻は距離を詰めた。

それも、能力を封じる前よりも早く!

「おるるあああ!!!!」

隼から、数メートル離れた場所から、幻は拳を放った。

「くっ、、！」

それを、隼は瞬発的にしゃがんで躲す。

「そんな名前は捨てた、。俺は、もう弱い自分じゃないッ!」

追い討ちに、幻は蹴りを放つ。

「・・・何が、、幻だ、。」

その刹那、その蹴り攻撃を、隼は自分の足で地面に叩きつけた。

「何が名前を捨てただだアアー!!!!」

その時、偶然なのか必然だったのか、

「な、何イ!?？」

突如、元いた隼の位置から、時を止めて移動したかのように、

隼は、一日で二度目の瞬間移動を放った！

「そんなことで、強くなかなれるかアア!!」

そのまま、いつも通り鞆から極夜を引き抜くが如く、
幻の腹目掛けて、右足を振り抜いた。

「うッ」

振り抜かれた右足は、そのまま幻の腹部にクリーンヒットし、
幻は、その反動のまま後ろに吹っ飛んだ。

「名前を捨てても、過去は捨てられないんだよッ。」

だが、吹っ飛ばされた幻は、再び立ち上がった。

恐らく、骨が何本も折れて、普通なら再起不能の重傷なものにも関わらず、

「黙れッ！お前なんかには、誰も守れない、弱かった僕の気持ち分かるのかアアアアアア!!!!」

「ああ知らないねッ！知りたくもないなッ!!そんな反吐が出る気持ちはよオ!!」

その刹那、互いの拳が、両者から放たれた。

「・・・俺の、勝ちだッ。」

幻から放たれた拳を、隼は躲して、
そのまま頭蓋骨に、自分の拳を叩き込んでいた。

そして現在、地べたに幻は倒れ込んでいる。
起き上がる気配も、ない。

「ちくしょう、。まだ、弱いままかよ、。」

「・・・お前、本当は、何の能力も持ってなかったんだろ？」

「・・・ああそうさ。僕は、ただの人間。」

「俺、多分お前の過去を見たんだよ、さつき。」

「えっ、？」

「村を守る為に、一人で戦って。」

「・・・なん、だよ。馬鹿な奴だって、笑うのか、？」

「そんな訳。・・・尊敬するぜ、弦。」

「なっ、!?」

「だけど、憎しみに負けて、他人の力を借りて、無関係な人を傷つけたのは許せないな。」

「……山を襲ったのは、山とか妖怪が嫌いだったからなんだ。」

「それは、なんで? ……いや、言わなくていい。大体わかってる。」

「そう、か。」

「最後に、お前に手を貸した奴は誰だ?」

「……ごめん、わからない。僕も、意識が朦朧としてて、」

「そうか。ならいいんだ。……弦?」

その時、隼は何かを感じた。

すぐさま、弦の心臓に耳を当てる。

既に、鼓動は止まっていた。

「……ッ。」

「あ！隼さん！」

俺は、弦の身体を背負って、文たちの元へ戻った。
どうやら、最後の勝負の時、かなり距離を移動していたらしい。
全く無意識だったけど。

「よお文。怪我とかないか？」

「私は大丈夫ですよ。ほら！」

直後、猛スピードで文が上空に飛び上がった。
間も無く、その場に文は戻る。

「元気そうでよかったよ。」

文は、ニコリと笑顔を浮かべた。

「それより、隼さんは。怪我とか、」

「ああ大丈夫。さつき治したよ。」

「よかったです。」

俺は、ゆっくりと弦を地面に下ろした。

「気絶してるんですか？」

俺は首を横に振る。

「もう、息がない。完全に死んでるよ。」

「・・・隼さん。」

再び、俺は弦の身体を担いだ。

「さあ、行こ」

「なんで、そんなに怒ってるんですか？」

「・・・えっ、？」

文の一言は、一瞬理解出来なかった。

「別に、怒ってなんか」

「嘘、凄い形相ですよ。」

そう言っつて、文は鏡を見せてきた。

なんでそんなもん持つてんだよ。

俺は、鏡に映る自分の顔を見た。

そこに映っていたのは、

「な、なんだこの顔。」

まるで、今から鬼か何かに変身しそうな顔だった。

まさしく、鬼の形相。

「ちよ、文！お前なんか細工でもしてんのか！」

「いやしてませんよ！普段身嗜みの時使ってるんですから！」
「だとしても、なんだこれ。特に目！怖すぎるだが。」

「自分のこと怖いって言ってどうするんですか、。」

俺は、なんとか普段通りの表情に戻した。

「よし、これで大丈夫か。」

「別に、さつきも駄目なわけじゃ。」

「いやそうだけど、。」

「それで、その人はどうするんですか？ 私はその人を許す気なんかないですけど。」

文の怒りは理解出来る。

沢山荒らされたし、殺されもした。

「……こいつの、故郷に埋めるよ。」

「えっ、わかるんですか？」

「ああ、多分な。」

大変だろうけど、あの記憶を頼りに探そう。

「……この辺かな。」

少し妖怪の山を離れて、探し回ること数時間。

山の風景とかを頼りにして、なんとかその場所を探し出した。

そして、地面を掘り、そこに弦の遺体を埋めた。

「・・・成仏しろよ、今度は。」

その場で、手を合わせた。

それにしても、あの死に方は何だったんだ。

まるで、魂を抜き取ったかのように死んでいった。

そして、眠るようではなく、瞬間的に。

俺じゃない、誰かが殺したってことだ。

「考えられるのは、あの協力者か。」

私の英雄

「もう、すっかり夜か、。」

弦の村跡地を見つけて、その場所に彼を埋めた頃には、もう既に辺りは真っ暗になっていた。

空を見上げれば、雲一つなく、星がよく見える。

「あれは、ペルセウス座、だっけ？」

夜空を見上げていると、少し見覚えのある星座を見つけた。

何故そんなこと知ってるかっていうと、

まあ、少し興味があっただけだ。

そんなに詳しい訳でもない。

「ペルセウス、英雄、か、。」

その後の数分間は、ずっと夜空を見つめていた。

「案の定、やってるねえ、。」

妖怪の山に戻ると、幾多の妖怪達が、酒の杯を交わしていた。それも、天魔の屋敷の前で、多分天魔が開いたんだらうな。

てか、この山で見るのは一体何回目だよ、。

「あつー隼さんっ!!」

その光景の前に棒立ちしていると、文がこちらに気づいた。そのまま、酒瓶を持って近づいてくる。

「待ってたんですよ？天魔様も、今日の主役が居ないぞ？って探し回ってましたし。」

「誰が主役だ。そんなもん文にくれてやるよ。」

「まーまー、いいからこっち来てくださいっ!」

「・・・先に言つとくが、俺は酒飲まないぞ。」

「えっ、苦手なんですか?」

「知らん、酒飲んだ瞬間ぶっ倒れてるから覚えてない。」

「うーん、そう言われると、飲ませてみたくありませんねえ。」

「それはいいが、後で拳骨の二、三発は覚悟しておけ。」

「・・・やめときます。」

「賢明な判断だ。」

・・・これ言う前だったら、絶対強制的に飲まされたな。まあ、盛り上がるのは嫌いじゃねえけどよ。

「ほら、お前のいた場所に戻るぞ。」

「え、飲むんですか?」

「飲まねえつつつてんだろ。ただ、宴に参加するだけだ。」

そう言うと、文が目を細めてこっちを見てきた。

「いやそんな目されても、。」

「あややく、冗談ですよ！さあさあ行きましよう！」

「ちよ！押すなって！ってか、あややくって何!?？」

「まあまあいいからいいからっ！」

そのまま、半ば強制的に文に連れて行かれた。

こいつ、何か企んでないよな!!

その後は、その場にいた妖怪達と盛り上がった。

妖怪達の種族は、文たち鴉天狗は勿論、狼のような白狼天狗や、河童なんかもいた。

一応上下関係はあるのだろうが、みんな楽しそうに盛り上がっていた。

俺に対しても、フレンドリーに話しかけてきたり、

無理矢理酒を飲まそうとしてくる奴がいたり、

いきなり喧嘩ふっかけてくる奴がいたり、

その場において、本当に楽しかった。

「隼、ちよっといいか?」

数時間後、妖怪達はほぼ全員、疲れて寝てしまった。

それに、俺も眠い。

その時、天魔が俺に話しかけてきた。

「天魔、お前、何処にいたんだ？」

「いやこつちの台詞なんだが、まあいいか。ちよつと、向こうで話さないか？」

「・・・？」

そのまま、屋敷の玄関前に移動し、
そこに座り込んだ。

「ほら、水。あ、いや、酒の方が良かったか？」

「いや、水でいいよ。私もあまり酒は得意ではないんだ。」

「へえ、意外。」

そこで、水の入った瓶をカチンと打ち合わせた。

中身がなんか閉まらないけれど。

「で、話って？」

「いや、大した話じゃないさ。ただ、お礼を言いたいだけでね。」

「お礼って、こつちが言いたいぐらいだよ。多分、一人じゃ勝てなかった。」

「でも、倒したのは隼だ。」

天魔は、”倒したのは”を強調して、俺にそう言った。

「・・・助けてもらうのは、これで二度目だな。」

そう言う天魔の顔は、安堵に包まれていて、何処か悲しそうだった。

「やっぱり、君は英雄だよ。」

「ちよ、やめてくれよ。俺はそんなこと微塵も思っていないし」

「いいや！」

直後、天魔が自分の顔を、俺の顔の直前に近づけてきた。びっくりして、俺は少し後ずさる。

「隼は英雄だ。少なくとも、私にとっては英雄だ。」

「・・・あ、ありが、とう。」

す、すつげえ気迫、。

氣イ抜いたら吹っ飛ばされそう。

「お、おい！いま失礼なこと考えただろ！」

「い、いやあ、知らねえな。」

つつい変な顔をしてしまったせいで、

また詰め寄られてしまった。

「まーまー落ち着けて。な？なんでもねえよ。」

「白々しいぞ！、凶星だから誤魔化しているんだな！」

その後は数十分程、天魔と会話を続けた。

そして、話す話題が尽きかけたその時。

俺と天魔は、倒れるように同時に眠った。

・ 宇宙の暗示を示した者よ。 ・ ・
・ お前はこれから、幾多の試練と ・ ・
・ 計り知れない数の選択肢と出くわすだろう ・ ・
・ そう、まさしくそれは星の数のように ・ ・
・ だが決して、進むことを辞めてはいけない ・ ・
・ どんなに長い道のりであろうと ・ ・
・ 進み続ければ、いつかは辿り着けるだろう ・ ・
・ たとえ誰に馬鹿と笑われようとも ・ ・
・ 己の心の声には逆らわないことだ ・ ・
・ 運命は、口先などでは動くことは無い ・ ・
・ 変えたければ進め ・ ・
・ 己の望みという一番星を目指し ・ ・
・ 歩み続けろ ・ ・

その声は、誰も聞こえていなかった。
しかし、何故か同時刻に、
隼は、起き上がって夜空を見上げた。

彩る夜明け

早朝、それも、まだ日の光が差していない時間。

一人の青年が、山の頂上付近から景色を眺めていた。

暗闇の空に見える雲は僅かで、快晴と言っていいだろう。

『何故こんな時間にこんな場所に来たんだ？』

「・・・まだ居たのか、。天逆毎。」

何処かから、聞き覚えのある声がした。

昨日、助けてもらったあいつだ。

『完全に私のこと忘れていたな？全く。因みに、八岐大蛇もいるぞ。』

「へえ、その割には、全然喋ってないけど。」

『寝ているんだよ、きつと。怠け者だから。』

天逆毎が、そんな煽りをした瞬間、

『誰が怠け者だッ。一回も寝ていないわッ！』

もう一つの声も聞こえてきた。

てか、寝てないんだ、。

「そういえば、天逆毎って、自分のこと”私”って呼ぶっけ？前あった時は、”我”って呼んでた気が。」

『普段は”私”呼びだ。だが、”我”の方が強そうだろうか？』

「単純な理由だな。」

『まあ、気にするな。』

そんな感じで話していると、正面から光が差し込む。
妖怪の山の、日の出だった。

『お、日の出時だな。』

「ああ、。なあ、二人とも。」

『ん？どうした、急に暗くなって。』

「いや、正直、お前らのことあんまり好きじゃねえけどよ。」

『好かれているとは思っていないがな。』

昔の話ではあるが、俺はこの二人を倒している。
それに、俺もこいつらに何かを奪われている。
好きになる理由は特に無い。

だけど、

「それでも、今回は仲間として戦ってくれた。改めて言いたいんだ、ありがとうって。」

『お、おい、。小っ恥ずかしいぞー！』

いきなり、天逆毎の声に焦りが混ざる。

「多分、お前らが居ないと勝てなかった。だから、さ。」

『・・・ふっ、まあいいさ。それより見なよ！この山の景色を！お前が守った風景を!!』

「えっ、？？」

そう言われるがまま、目を日の出の方向へ向けた。
そこに見えたものは、

「・・・すっげえ。」

少しだけ顔を出した太陽。

その光に当てられた山。

そして、紅葉。

「こんなに、綺麗だったんだな。」

『山を外から見なかったのか?』

「まあ、色々あってだな、。」

その後数分間は、その景色に見惚れて動けなかった。
太陽の光、穏やかに靡く風、雑音、
その全てが、心地良かった。

「お前ら、これからどうなるんだ、？」

『どうなるんだって、消えるよ、多分ね。』

「え、？」

『というか、恐らくもう直ぐ消えるさ。それは、多分八岐大蛇も分かっている。』

『・・・まあ、そうだな。』

八岐大蛇も、感じていることは同じと同意を示す。
その声は、まるで気にしていないかのような声だった。

「最後に、さ。・・・何で、助けてくれたんだ？」

『・・・隼は、あまり私を好んではないようだが、私は違う。私はお前のこと嫌いじゃないからな。』

「それは、なんで？」

『なんでって、あれが初めての敗北だったからな。だから助けた、他にも理由が欲しいか？』

「いや、いいよ。十分だ。・・・じゃあ八岐大蛇は、」

『ああ？』

「あー、いいや。言わなくても。」

こいつは絶対俺のこと嫌いだし、
そういうことは触れないのが良いだろう。

『・・・隼。』

直後、少し小さめな声で、天逆毎が呟いた。

「え、何？」

『どうやら、もう保てないみたいだ。かなり力を使ったせいだな。』

「え、ちよ、ちよっと！」

その時、俺の周りに、謎の煙が集まってきた。直ぐに、その煙は俺の体を覆う。

そして、その中で目を開くと、そこには二人の人影が。

一人は小さく手を振っていて、もう一人は腕を組んで背中を向けている。

『では、さらばだ、咲風隼！次また会えたら、好敵手として！』

手を振っていた人影が、徐々に消えていった。

『咲風隼ッ!!』

次の瞬間、俺の耳に怒鳴り声が入る。

腕を組んだ人影が、こっちに向かって叫んでいた。

『俺が貴様を助けた理由はたった一つだッ！俺に一度勝った癖に、あんな雑魚に負けるのは許せないッ！』

「八岐大蛇、。」

そして、消える直前、

『いいか！もう追い込まれるのは許さんぞツ！分かったかツツ!!』

そう叫んで、その影も消えていった。

数秒後、周りの煙が消えた。

また再び、美しい山の景色が目に入る。

俺は立ち上がって、太陽に向かって言った。

「上等だ、お前らは黙って向こうで見てろ。」

それから数時間後。

山もすっかり明るくなり、妖怪達も目を覚ました頃。

「隼、これからどうするんだ?」

天魔の屋敷の前で、俺は天魔に話しかけられている。

「・・・まだ、色々気になることがあるからさ。とりあえずここを去る

よ。」

「そうか、気を付けて行けよ？」

「大丈夫だ。」

俺は、刀や道具などの荷物を持った。

「じゃあ、行くよ。」

その時、

「・・・みんな今だ！」

天魔の掛け声と共に、いろんな場所から妖怪達が飛び出してきた。

「うおっ！ちよ、何だよ！」

「見送りだよ！」

次の瞬間、辺りは凄まじい声援に包まれた。

殆どが、ありがとう！っと言った声だが、

少しだけ、頑張っつて！とかいう声も聞こえた。

「・・・いつから計画してたんだよ！」

俺は思わず笑ってしまった。

あまりにも、いきなり過ぎて。

「まだ、ちゃんとお礼をしていませんでしたから。」

その群衆の中から、よく見覚えのあるやつが出てきた。

「文、お前かこの計画持ち出したの。」

「あやや？分かつちやいました？」

「いや適当に言った。お前だったか企画案を出したのは。」

「ちよ！ずるいですよ！」

「騙されんのが悪い。」

でも、この声援のおかげで、一気に気分が高まった。

「こちらこそありがとうよ！」

こちらからも、精一杯手を振った。

そして、背を向けて、山を降りて行った。

歩き出した後でも、声援は止まらなかった。

月、ある人物の屋敷にて、

その部屋はパツと見れば綺麗かもしれないが、よく見れば、薬品などが乱雑に置かれていた。

『くく様！お客様ですよ！』

「ええ、すぐ行くわ。」

銀色にも近い白い髪をした女性が、椅子から立ち上がる。そして、部屋に飾られた二つの写真を眺めた。

一つは、その女性含めた四人が映る写真。

もう一つは、その女性と長い黒髪をした女性の写真だった。

第七章・竹取物語編 八雲紫の式神

時は、都が奈良へと移動する少し前。
飛鳥時代後期、。

後の都から近く、少し大きめの町に、
ある一つの店が存在した。

名前を、『黒屋』と言った。

「申し訳ありません、こんな少額ですが、」
「いやいや、有り難いですよ。ありがとうございます。」

妖怪の山での戦いから数年後。

俺は都近くの町で、ある一つの店を開いた。

本当は旅を再開しようと考えたけれど、

完全に食糧不足に陥ってしまって、

「本当に助かります。これからも宜しくお願いします。」

「ええ、どうか宜しく。」

こうして、商売をしている。

商売と言っても、何かを作って売ったりしてる訳じゃねえ。所謂、何でも屋ってやつだ。

依頼者の仕事の手伝いとか、ちよつと悪さをする奴らの討伐、とかね。

最初開いた時は、結構不審がられた。

まあ見かけない格好してるし、

でも、一人依頼者が出てから、その不信感は無くなって、利用者も沢山増えた。

あんまり言いたくないけど、結構儲かってる。

因みに、店名は常連さんが決めてくれた。

これまた、結構気に入ってる。

最初の名前は、聞かないでくれ、。

直後、店の扉に括り付けた鈴が、チリンチリンと鳴った。

お客さんかな。

「すみませ〜ん！依頼をしたいんですけど、」

その音に重なるように、扉を開いたと思われる人物の声が聞こえた。

多分、女性だ。

「はい、今行きます！」

俺は急いで玄関へ向かった。

「すみません、お待たせして、、、」

玄関にて、その依頼者と対面した。

見かけない傘に、金髪。

そして、白と紫色の服、

「お前、、、紫!!」

「久しぶり!隼。」

それは、八雲紫だった。

「ふふっ、面白い商売してるのね。」

居間に紫を通して、お茶を出す。
お茶の入れ方は、何となくで習得した。
何回も不味いの作ったけど、

「面白いって、まあいいや。で、何でここがわかったんだ？」

「別に、偶々通りかかったら、黒屋って名前のお店を見つけて、多分貴方になって思っただけよ。」

「・・・その話、どこまで本当で、どこまで嘘だろうな。」

「さあ、？」

その後は、この話には一切触れず、
一緒に居なかった時間の出来事を、思い出話を話し合った。

「へえ、そんなことがあの山であったのね。」

「全く、あの場所は好きなんだけど、なんか災難ばかりだ。」

「それは、何で好きなのよ、。」

「フツ、さあね。」

紫は数年間、人探しをしていたらしい。
でも、それってわざわざ一人でやることだったのだろうか？

「それで、探し人は見つかったのか？」

「・・・見つかったと思う？」

その質問に、俺は首を縦に振る。

「・・・ふふつ、正解よ。」

「だろうな。もし見つかってないなら、ここでそんな話はしない。」

「あら、協力を求めるつもりだったとは考えなかったのかしら？」

「一人で用事があるとか言って、内容は何も言わずに行ったやつが、そ

んなことする訳ねえだろうよ。しかも、そいつは面倒なスキマ妖怪だ。」

「め、面倒って何よ!」

「言葉の通りだよ。」

紫は悔しそうな顔で、ぐぬぬと声を漏らした。

「まあ落ち着け。で、そいつと会って何をしたんだ?」

「くっ、まあいいわ、。人を探していた、と言ったわよね?」

「ああ、そうだな。」

「正確には、それが誰なのかは分かっていたいなかったのよ。」

「・・・というと?」

「もう一つ、それは人間じゃなくて、妖怪よ。」

直後、紫は指を、パチン!と鳴らした。

次の瞬間、再び店の扉の鈴が鳴る。

「あれ、お客さんか、?」

依頼者が来たのかと思って、俺はそこから立ち上がる。が、それを紫は止めた。

「違うわよ、隼。・・・紹介するわ!」

さらに次の瞬間、居間と廊下を区切る扉が開いた。すると前には、

紫と似ている服と、動物の耳のような被り物を纏った人が立っていた。

髪は、紫と同じ金髪だが、髪型は全然短い。

所謂、ショートボブヘアってやつだ。

「私の式神、藍よ。」

「初めまして、隼さん。八雲藍、と申します。」

俺は暫く反応出来なかった。

確かに、紫の言ったことも驚いたが、それよりも、

尻尾がある。それも、九本も。

こいつ、九尾か！

「えっと、どうしたのですか？」

「あ、いや、どうも……。咲風、隼、です。」

そう答えたのは、丁度三十秒後だった。

かぐや姫の噂話

「ええつとく、藍、って呼べばいいのか？」

「ええ、それで構いません。」

紫の隣に藍を座らせ、その正面に俺は座った。

そして、とりあえず呼び方を聞く。

「・・・ちよつと！何でそんなに緊張してるのよ！私の時はそんな感じじゃなかったじゃない！」

「え、いや、お前の初対面は、当然の反応だと思うが、。」

少し緊張したその場の雰囲気、紫が声を上げてかき乱す。

「紫様と隼さんの初対面ですか？是非お聞きしたいです。」

「えくつとねえ、確かあれは俺が野宿を、」

瞬間、何者かが正面に飛び出し、俺の口を塞ぐ。

「むぐつ、な、何だよ紫、」

すかさず、俺に耳打ちをする。

「隼、藍には絶対話さないですよ。」

「え、何でだよ。別に減るもんじゃ」

「いいから駄目っ！」

そう強い口調で口止めして、紫は元の場所に座った。

「紫様、一体何の話を？」

「藍、世の中にはねえ、知らなくてもいいことが沢山あるのよ?」
「?」

別に恥ずかしい話か?

ただあの頃は戦い慣れしてなかっただけじゃ、

「ねえ隼、こんな話知ってる?」

「え、何?」

町で買い溜めていた菓子をつまみながら世間話をして、すっかり藍と打ち解けられた頃。

紫はそう話を切り出した。

「ここからそう離れてはいない場所に、とある大きな屋敷があるらしいの。」

「・・・それで?」

「最近建てられた屋敷らしいんだけどね。で、その屋敷には、この世のものとは思えない程の美しさを持つ女性が住んでいる、っていう噂よ。」

「・・・へえ。」

「名を、『かぐや姫』っていうそうよ。」

「!、かぐや姫、か、。」

知っている名前だ。

確か、竹取物語に登場する人だ。

「隼、知ってるの?」

「いや、同じ名前の人を聞いたことがあるだけだ。同姓同名なだけかもな。」

あの話を昔読んだ時は、気の毒だな、なんて思ったっけ。

自分の風貌に振り回されて、沢山の男から目をつけられて、
しまいには、無理矢理月に、

「・・・までよ、月、?」

「隼さん、どうされたのですか?」

その時の藍の言葉は、全く耳に入ってこなかった。

翌日、その早朝、。

「おはよう、藍。朝早いな。」

「おはようございます。早く目覚めてしまったもので。」

昨晚、紫達はこの店に泊まることになった。
寝室には、使っていなかった部屋を使ってもらった。

「悪いな、毛布とかなくて。この家には一枚もないんだ。」

「いえ、私は構いませんけど、。」

「俺も欲しいんだけど、値段がなあ、。」

「そんなに高額なんですか？」

「いや、バカ高いわけじゃないんだけど、それ買うなら他のものの方がいいだろつてなるんだよ。」

別に絶対必要なものじゃないし、

ていうか、昔は地面に寝てたわけだし。

「ところで紫は？」

「いま起きたわ、。」

藍に聞いた瞬間、廊下の角から姿を見せた。
完全に寝ぼけているが、。

「お前、早く顔洗ってこい。」

「わかってるわよ。」

そのままフラフラと井戸へ歩いて行った。

「いつもあんな感じなのか？」

「ええ、起こすのに苦労してます。」

「・・・大変だな。」

俺は、朝食の準備をする為に、台所へ向かう。

その時だった。

『咲風隼はいるか？依頼を頼みたいのだが！』

黒屋の扉の、鈴の音が鳴った。

護衛の依頼

その日、まだ日が昇ってから間もない時刻。
『黒屋』の扉の鈴が鳴った。
それと共に、ドシドシと数人の男性の足音、
そして、

『咲風隼はいるかアア!』

一人の男の、大声が響く。

「悪いな藍。紫を連れて、居間でお茶でも飲んでてくれ。」
「ええ、分かりました。」

そう言い渡し、俺は店の玄関へと向かった。

「おいおい、いきなり失礼な奴らだな。」

玄関口で、その男達と対面し、
大声を出してやがったやつに、そう言い放ってやった。

「で！何の用だよ、こんな朝っぱらから。」

その瞬間、バンツツ!!と何かを叩く音が鳴り響いた！
俺は思わず身構える。

「失礼なのはどっちだッ！こちらは依頼主だぞッ！」

「は、はア？何だっつてんだテメエ！いい加減にしねえと」

ドスッ、

言い終わる前、次はそんな鈍い音がした。

「勿論報酬は出す、先払いだ。」

「・・・ツツ!!」

その音の正体を見た瞬間、

俺の身体に、強烈な電撃が走った！

「こ、これ、つて、！」

鈍い音を立てた、その床に落とされたもの。

それは、袋に入った大量の金貨だった。

「これは依頼の報酬だ。その依頼は一つ、護衛の依頼だ。」

「ハ、ハアア、、？」

金を手に入れたことがない訳ではない。

今までの旅の中で、価値があるものは沢山手に入れてきた。だが、それは所詮過去の価値。

現在の価値あるものは、触れたことがない。

勿論、現在高価とされているものは知っている。

それは、米や布など様々だが、

最も価値をわかりやすく表すものがある。

それが、今日の前に見ている。
金貨、だ。

「……おい、どんな依頼を出すつもりだ、？」

「……内容は以下の通りだ。」

そう言うと、すぐそばにいた男が、
一枚の紙を縦に広げた。

依頼状

今日から三日後

かぐや姫の元に、五人の貴公子がやってくる
目的は、かぐや姫との婚約
其方には、かぐや姫の護衛を依頼したい

「内容は以上だ。」

バサツと男は紙を閉じた。

「……おいおい、色々と説明不足だぜ。」

俺は正面の男にそう聞いた。

「依頼は受ける。報酬も、これの三分の一でいい。」

だが！

「それは俺がそっちの事情を完全に理解している前提の話だッ！だが今の内容の説明！明らかに説明不足つてもんだ！」

「・・・ならば、この話は無し、と言うことか、？」

「いいや違えな！」

俺はその言葉と共に、男達へ一歩詰め寄った。
強く鈍い音を立てて、

そして、こう言い放った。

「聞きに行く。その事情を聞きに、直接な。」

「随分と揉めていましたね。」

居間に戻ると、寝っ転がっている紫と、お茶を注いでいる藍がいた。

「ああ、朝っぱらからすまねえな。」

「いえ、。それで、何があったんですか？」

藍は、俺へのお茶を注ぎながら、そう尋ねた。

「いや、単なる依頼さ。ちよつと失礼だったから、熱くなつちまつたよ。」

「あれは仕方がないかと。逆に、熱くならない方が以上です。」
「そうかねええ、。」

でも、あんなことで熱くなつちまつたのは反省だ。
ああいうのは、冷静に対処するべきなのに。

「はあ、成長してねエなあ、。」

「・・・それで、結局どうなったのよ？」

寝つ転がつてる紫が、そこで口を挟む。

「明日、案内してくれる、ってよ。そのかぐや姫の住む屋敷に。」

「へえ、意外とすんなり受け入れるのね。」

「確かに、それは駄目だ、って否定するかと思っただけだよ。」

「というか、かぐや姫の噂話ってほんとだったのね。」

紫がそう話した瞬間、俺はハツとした。

竹取物語の内容に、五人の求婚者がくるって内容があつた筈だツ。
そして、今さっきの依頼の内容には、それと全く同じ状況！

「ってことは、かぐや姫ってのは、！」

「く様！何処にいらしたのですか！」
「ちよつと、来客があつたのよ。」

此処は、地球から遠く離れた、
ある、小さな星、月。

現在の地球の技術とは、比べ物にならない程発展した都市が形成されている。

「もう直ぐなんですよ！ちゃんと顔を出してください！」
「ええ、わかっているわ。」

ある部屋から、一人は出て行った。

もう一人の、白髪の女性は、
その位置から、写真を眺めた。

「・・・輝夜、。。。」

幸せ

翌日、いつも通りの早い時間に目を覚ました。
支度をして居間に向かうが、まだ誰も起きていない。

というか、そこで紫は寝ていた。

「つたく。寝落ちしてんじゃねーよ。」

パチンと、寝ている紫の額にデコピンをした。

「んっ、！うくん、な、何よ、。」

それに反応して、ゆつくりと目を覚ます。

「何でこんなところで寝てんのさ。」

「え、？あ、あれ、？」

「あれ、じゃねえよ。風邪ひくぞ。」

居間は、この店の中で最も風通しがいい。

良く言えば 涼しい が、悪く言えば夜は 寒い。

「・・・大丈夫よ。妖怪は、風邪ひかないもの、。」

「どーだか。まあ早く水で顔と寝癖直してこい。」

紫の髪は、ぐしゃぐしゃに乱れていた。

「うくん、わかってるわよ、。」

紫はゆつくり立ち上がり、ヨロヨロしながら水場へ向かって行っ

た。

「紫は最近、いつもあんな感じなのか？藍。」

「……いつから気付いていたのですか？」

居間と廊下を区切る扉の横から、藍がサツと姿を現した。

「ほんの数秒前だよ。起きてたんだな、お前。」

「ええ、少し外を散歩してました。」

「その姿で？」

「いえ、流石に尻尾は隠しますよ。」

藍の九尾の姿は、遠目から見てもかなり目立つ。

紫はまだ、ひと目のつく場所を彷徨いても、妖怪と思われることはないと思うが、

藍の場合は完全に妖怪だ。

だから、普段どうやって紫と行動しているのか？と思っていたが、成る程、隠せるのか、人間から見て不自然な部分を。

数時間後、思ったよりも早く、昨日の約束の迎えが来た。昨日よりも、人数は増えている。確かに警戒するに越したことはないがな。

店の玄関から外に出て、その集団と顔を合わせると、昨日とは違った男が、代表として前に出てきた。

「約束通り、屋敷への案内に参った。…それと、先日は申し訳ない、咲風隼殿。」

「……へ?..」

いきなり、その男は頭を下げてきた。

その光景を見て、思わず変な声が出る。てつきり、また偉そうな態度で接してくるのかと。

「あ、いや、顔上げろよ、別に気にしてねえから、！」

急いで、顔を上げるようにその男に言う。しかし数秒間は、頭を上げることはなかった。

「……それでは、屋敷へ案内致します。」

「紫様、大丈夫でしょうか、？」

「それは、隼のこと？」

隼の見送りをした藍は、居間に戻って紫の正面に座った。

どこか、心配そうな様子で。

「そんなに心配することないわよ。たとえ身の危険があっても、隼は簡単に切り抜けるわ。」

「しかし、隼さんは、武器を、。」

藍は、居間の隅に置かれた二本の刀を見る。

極夜 と、火神 だ。

「それは当然でしょう？信用しきれしていない相手に、武器を持たせる訳ないじゃない。」

「それはそうですが、つまり隼さんは、武器を持たない丸腰の状態です！もし向こうが命を狙ったら」

藍は、紫に対して、強く問いかける。

が、紫はそれを、お茶を飲みながら、

何ともないという様に聞き流す。

「・・・藍、隼はそれを承認したのよ。私達がとやかく言うことではないわ。」

「た、確かにそうですが、！」

「それに、武器を持ってない、と言ったわね？」

「え、。は、はい、。」

「それは不正解よ、藍。だって、あの人は自身が武器みたいなものなんだから。」

紫はそっと、お茶の入った湯呑みを机に置いた。

「到着です。ここにかぐや姫は住んでいます。」

歩くこと数時間、大きな屋敷の前に案内された。
直後、その門が開かれる。

「お待ちしておりました、咲風隼殿。」

その門の奥から、一人の女性が出迎える。

その周りには、またまた護衛の人が何人か。

「いえ、急に無理を言って申し訳ない。早速だが、案内してもらってもいいかな?」

「ええ、では此方に。」

女性は後ろを向いて歩き出した。

「翁様は、玄関から直ぐの部屋にてお待ちされております。」

広い庭を抜けて、ようやく玄関に着いたその時、案内の女性はそう話した。

依頼主の名前は、翁って言うのか。

そして、この時一つ疑問が生まれたので、興味本位で聞いてみた。

「その、かぐや姫ってのは、どちらに？」

「・・・姫様は、屋敷の奥にある部屋に好まれていらっしやいます。」

数秒後、女性は振り向いて答えてくれた。

「成る程。無駄な質問を、失礼。」

そう言うと再び前を向いて、女性は玄関の扉を開いた。

屋敷に入ってから、ほんの数秒歩いた所の部屋の前に案内された。

「この部屋です。では、ここで。」

そう言うと、女性とその護衛の人達は戻って行った。

よし、入るか。

「失礼します。」

コンコンと部屋をノックして、その扉を開けた。

そのまま部屋に入ると、一人の老人が座席に座っていた。

「ようこそ、隼殿。」

「貴方は、翁殿 で間違いは？」

「ええ、私が翁でございます。どうぞ、その座布団へ。」

翁は、目の前に置かれた座布団を指差す。

「・・・では、遠慮なく。」

俺は座布団の前に移動し、それを、

両手で掴んで、引き千切った！

「!!」

座布団は、バリバリバリーイ!!と音を立てて破れる。

そしてその中から、綿と刃物がこぼれ落ちた。

「随分と、滑稽な出迎え方だな。」

「い、いつ、座布団の中に仕掛けがあると、、！」

翁は、驚愕した顔でこちらに尋ねる。

「座布団ってのは、使えば使うほど中心が凹む。だがこの座布団を見た時、凹んでいるどころか、不自然に膨らんでいた。何かを仕込んだ

かのような。」

「・・・そ、それを、一瞬見ただけで、！」

「さて、これはどういうつもりだ？分かりやすく説明を」

そう言い終わる瞬間、凄い速度で翁が近寄り、手を握ってきた。

「な、！何のつもり」

「やはり、貴方に依頼したのは正解だった！」

「・・・は？」

「先程は無礼なことをして申し訳ない！」

理解する間も無く、翁は一步下がって土下座をする。

「お、おい！ちよつと落ち着けて！」

数秒後、翁はゆつくりと顔を上げる。

姿勢は、土下座のままだが、

「・・・姫に五人の貴公子が求婚に來ると言う話はご存知で、？」

「・・・ああ、それは昨日」

「私はその話を聞いた時、とても舞い上がった！これで、姫が幸せになれると！」

「あ、ああ、。。。」

なんだこの老人！凄え元気だな！

「しかし、それに対して、護衛が必要と言う者がいた、。。。」

「な、成る程、。。確かに、何が起きるかわからないもんな。」

「そこで、近頃噂の『黒屋』に依頼するか、都に住む武士に依頼するかに割れたのです。」

その後、数十分程話は続いた。

途中までは立って聞いていたが、流石に疲れて俺も床に座った。

老人は話が長いとは言うが、そういう次元じゃねえなこれ。

「つまり、要約するところだな？」

- ・五人の貴公子がやってくるにあたって、護衛が必要。

- ・一体どこに、その依頼をすればいいのか。

- ・安心と信頼の武士にしよう派と、新参だが評判の高い黒屋にしよう派に別れる。

- ・結果、翁が黒屋に決断。

- ・しかし武士派は心配だと言い、座布団にトラップを仕掛けた。

- ・それを、俺が見事に見抜く。

「ええ、その通りでございます。」

「よし、事情は分かった。依頼も、受けましょう。」

「誠ですか！感謝致します！」

再び、翁は深く頭を下げた。

昨日までのイメージは、偉そうな人かと思ってたのに。

まあ、こつちの方がやり易いが。

「しかし、俺からも聞きたいことがある。」

「はい、なんでもお答えしますぞ。」

「・・・なんで、求婚の話聞いて、貴方が喜んだのか、と。」

この話の中で、そこだけが頭に引つかかっていた。

「それは、この翁にとっての幸せは、姫が幸せになることで」

「違う。何故貴方はその求婚で、姫が幸せになると考えたのか、と聞いているのですが。」

「え、？そ、それは、。」

「姫はひよつとしたら、今の生活をずっと望んでいる、とは考えないのですか?」

「・・・」

「これはただの憶測です。かぐや姫にとっても、結婚こそが最良の幸せかも知れません。」

俺は立ち上がって、部屋の扉に向かった。

「今日は、これにて失礼します。護衛は、任せてください。」

その間、一度も振り返らずに。

「・・・今日は呆れたことばかりだ。」

そのまま、屋敷の門へと歩いて向かった。

他の護衛者

一度も後ろを振り向くことなく、大きな屋敷の出口へ向かう。出口の門の前には、優雅に飾られた庭が、歩く者全てを立ち止ませるような光景が広がるが、

来た時と違ってその光景に、何の感情も抱かなかった。

「すまないが、通してもらえるか？」

門の手前まで近づいて、数人の門番に呼びかけた。

が、突然門前にいた人たちは、こちらを見ることなく左右に移動した。

正確には、大人数が横一列に通れるほどの道を作った。

「ほらッ！どけッ！」

直後、男の声が出たと同時に、肩を掴まれた。

「ああ？」

「どけと言っただろッ！いいから横に、」

瞬間、更に強く肩を掴まれる。

そのまま、右側に圧力がかかった。

だが、

「な、！こ、こいつッ、、！」

正直、全く動く気がしなかった。

簡単に言えば、全然力が入ってない。
他の門番の力量もこの程度なら、賊か何かが押し寄せたら終わりだなこりゃあ。

そこで数秒間、立ち止まっていると、
門の奥から、団体の人影が見えた。

ここで横に退くのは、この男に負けたみたいだから嫌だったが、
しやあない、退くか。

「き、貴様、！いい加減に、うおっ!!」

俺は肩に加わっていた小さな力に乗っかるように、
門前の右側に退いた。

続けて、俺の横に退かそうとした男が移動する。
そこから視線を感じるが、どうでもいいか。

その数秒後、二十人程の団体が門を潜り抜けた。

そして、俺の数メートル近くに来た時、
その中から小さな声が聞こえた。

『この度は、宜しく願います！』

『任せるといい。我らにかかれば一人の女性の護衛など、至極簡単なことよ、ハアツハツハツハ！』

『それは勿論！心強いですよ！』

話し声からすると、一人は初老、もう一人は三十前後、といったところか。

やがて、俺の目前をその団体が通り過ぎようとする。
その瞬間。

「ん？なんだ君は、見慣れないやつだな。」

その団体の中心辺りから、先程敬語で話していた初老の男が近づいてきた。

「これはどうも。先日翁殿から依頼を頂いた、咲風隼と申します。」

「依頼？一体翁殿は何の依頼を。」

「かぐや姫護衛の依頼、という内容ですが？」

そういえば、さつき小声で『護衛』って言葉が出てたような。
だけど、翁は話し合いで俺の方に任せる、って。

『おやおや、中々変わった格好をしているな君は。』

次の瞬間、その団体の中から、もう一人先程喋っていた男が顔を出す。
そこで顔を合わせてみるに、やはり年齢は三十前後ぐらいか。

身長は、俺よりも少し下だ。

それに、武装もしている。

武器は、槍か。

「さつき話し声が聞こえたが、君も姫の護衛を任されたのかな？」
「ええ、話の通りですが。」

その武装した男は、ムカつく態度でこっちに近寄ってくる。

しかも、警戒心是一片も感じない。

これで本当に武士か？

「クツクツク、。そうか、君も護衛か。クツハツハ。」

「・・・その態度は、少々失礼ではないですか？」

「クツ、ああ、すまないねえ。」

そいつは嘲笑うような顔で俺を見る。

この男、自分が天下第一だとも思っているのか。

「いやあ、翁殿も中々面白いことをするものだ。」

「それは、一体どういう意味で？」

「なあに、こんな弱そうな男を雇うことだよ。なあ？」

そう言つて男は、もう一人の初老の男を見る。

すると初老の男も、縦に首を振った。

「さあ、悪ふざけは終わりだ、行くぞ。・・・君も、早くお家に帰るといい。」

そう言つて、再び団体を動かし始めた。

勿論最後に、俺を見下した顔をして。

「ええ、では一度帰るとしましょう。ただ一つ、足元をよく見たらどうでしょうか？・・・では。」

そう言つて俺は再び門へと向かった。

まあすぐそばだが。

そして、俺が門の真下に来た瞬間。

『うギャアアア!!』

背後から叫び声が上がった。

門の周りに配置された門番も、一斉にそっちへ振り向き、その声の方向は駆け寄った。

generate command エレキトラップ

「だから言ったじゃん。足元をよく見ろって。」

門を出てから、案内された道を遡るように歩みを進める。

屋敷を敷地外から眺めると、改めて屋敷の大きさを実感する。

決してこここの周辺が、賑やかでない訳ではない。

それどころか、かなり発展した町並みだ。

しかし、この屋敷に比べるとやはり見劣りする。

何故そんなに、あの翁は財力を持っているのだろうか？

そんなことを考えながら、屋敷の真横の道を歩く。

やがて、屋敷の外壁の終わりが見える。

どんだけ広いんだよここ。

「……ん？なんだ、あれ、？」

屋敷の端に当たる場所の、曲がり角の道を見た時、
遠くの方で、何かわからない光が目に入った。

その光は数秒間同じ場所を浮遊し、次の瞬間角を曲がっていった。

「……ちよつと行ってみようかな。」

帰り道は直進だが、俺は興味本意でその曲がり角を曲がった。

少し小走りで、曲がり角の先の小道を進む。横幅はひと一人分ほど
しかない小さな道だ。

少しすると、光が飛んでいたような気がする場所へと辿り着く。

しかしそこは、曲がり角がある訳でもない。

が、周りを見渡していると、あるものを見つけてしまった。

小さな戸と、あの光だ。

先程よりも、小さく光っている。遠くからだと恐らく確認出来ない

程の光だ。

その光は、その戸を潜ったり戻ってきたりしている。

「この戸って、この屋敷に繋がるものだよな。しかもこの光、誘導しているのか？俺を。」

勿論、最初は勝手に入るのは駄目だと、この場から引こうとした。

しかしその光を見ると、どんどん好奇心が強くなっていく。

そして、

「・・・見つかったら謝罪すりゃあいいか。」

結局、光を追って戸を潜り抜けた。

が、次の瞬間！

「なッ!!!」

異変を感じて真横を見た瞬間、少量の弾幕が寸前に迫っていた。数は決して多くはないが、いつの間に！

「generate command！」

俺は咄嗟に盾を展開した。

しかし、

「こ、この威力はアア!!」

その弾幕に力負けし、俺の身体は背後に吹っ飛んだ。

数億年越しの出会い

突如、真横に現れた弾幕は、盾を具現化して受けたのにも関わらず、それごと背後へ吹っ飛ばされた。

「と、止まれエ!!」

地面に足をつけて、本気で踏ん張る。

しかし、身体は止まることなく、踏ん張った地面は深く抉り取られていく。

「チツ、！generate command!!」

何本もの剣を重ね合わせて地面に突き刺し、先に小さな壁を作る。そこに足を着地させ、ようやく弾幕の威力を殺す。小さな壁とした剣は、その圧力によって大きく曲がっていた。

「今の弾幕、一体誰が、」

次の瞬間、再び気配を感じて死角へ振り向くと、またしても弾幕が迫っている！

今度は、さっきの倍近くだッ！

「ッ、！generate command アイギスの盾エ!」

刹那、盾と弾幕によって、鮮やかな光が発生し、それと共に、巨大な爆音が響いた。

身体は数ミリ程度動いただけで、弾幕の威力を殺しきった。

『嘘、今のを防ぎ切るなんて、』

「誰だッ!!」

直後、左方向から声が聞こえた。

反射的に、俺はそっちの方へ振り向き睨みつける。

「・・・お前か？今の弾幕は、。」

そこには、一人の女性が立っていた。

髪は長く、ストレートな黒髪。

服装は、かなり目立つ格好をしている。

例えるなら、和風のドレス、といったところか。

そして顔立ちだが、相当整った顔をしている。

いや、相当どころじゃ無い。

ここで、察しがついた。

「お前が、『かぐや姫』だな？」

噂のような綺麗な容姿。

お姫様のような格好。

そして、先程の光を追って歩いた距離からして、

ここはこの屋敷の奥地だ。

つまり、この女性が噂の『かぐや姫』だ。

「『かぐや姫』。そうね、此処ではそう呼ばれているわ。」

その女性は、そう言いながらゆっくりと近づいてくる。

「おいおい、そんな近づいていいのか？今度はこっちから叩き潰しにかかるかもしれないぞ。」

「あら、それは無いわ。貴方にはその気はないもの。」

そいつに忠告をするが、その足取りを止めることはない。ゆっくりゆっくり、二人の間が狭くなっていく。

「何だど？さも俺を知っているみたいない言い方だな。」

「ええ、知っているわ。まだ確証はなかったけれどね。・・・でも、今の防御で確証を持ったわ。」

「へえ、なら俺が誰だか、試しに確認してみたらどうなんだ？」

やがてその女性との距離は、ひとり分ほどの距離となる。

こちらは変わらず警戒を続けているが、そいつからは少しの警戒すら感じない。

一体、こいつは俺とどんな接点がある!?!?

「いいわよ。当ててあげる、貴方の名前。忘れてないわ、永琳からよく聞いたもの。」

それを聞いた瞬間、身体に稲妻が落ちたかのような衝撃が走った。そして、無意識にその女性の肩を掴んだ。

「・・・おい、今なんつった。」

「永琳からよく聞いた、と言ったのよ。」

「な、なんで、その名前を、。」

直後そいつは、ふふつ、と微笑んでこう言った。

「初めまして、ね。咲風隼。私の名前は、蓬萊山輝夜よ。」

その後、俺は輝夜の案内によつて、屋敷の奥にある小さな部屋に通された。

その道中では、特に会話はしなかった。

いや、会話したいことが山ほどありすぎて、何から持ち出せばいいのかかわからなかった。

というのが正しい。

「さて、隼。何から話しましょうか？」

輝夜はその部屋にあった座布団を敷き、そこに座った。

俺も、少し輝夜と距離を空けて座る。

「・・・じゃあ、さ、何でいきなり攻撃をしたんだ？もし俺じゃなかったら、」

「大丈夫よ、あの光は、それなりの力量がなければ、目視することなん

て出来ないもの。」

「あれお前の仕業か。」

「そうよ、貴方をこっちへおびき寄せる為に、ね。」

この女、中々に良い趣味をしてやがるな。

あの弾幕の容赦の無さは、何処か永琳っぽいところを感じるが、

「・・・でも何で、ここに昔永琳から聞いたことのある人がいるって分かったんだ、？」

「簡単な話よ。屋敷の中を歩いていたら、貴方と翁の話し声が聞こえて、そこで『隼』って名前が出てたから、まさかと思ってね。」

「なんだ、盗み聞きしてただけかよ。」

「何よその反応！別にいいじゃない盗み聞きぐらい！」

「いや、なんだ、何かを感じ取った、みたいなことを言うのかと、」

「悪かったわね！期待外れで！」

輝夜はピイツとそっぽを向く。

そんなに怒るようなことだったかよ、。

「ま、まあ、その話はいいとして、」

そう言うと、輝夜はふてくされた顔でこっちを向く。

それに対して、俺は少し苦笑いをした。

「・・・まあいいわ。で、何よ？」

「ええつとー、永琳とはどういう関係でしょうか、？」

「何で急に敬語なのよ!!」

そこから、数億年にもわたる出来事の話が始まった。

この時の俺は、まさかそんな話を聞くことになるとは、夢にも思わなかった。

永遠と須臾の罪人

時は、遙か昔に遡る。

それは、月人たちがまだ、地上に住んでいた頃。

科学力は未来の地球よりも、遙かに発展した都市が築かれていた。

その時代、月への移住計画が出る前。

当時、咲風隼が知ることの無かった話、、、

「話っているのは何かしら？月夜見。」

月夜見の屋敷にて、八意永琳は月夜見に呼ばれていた。

「急に呼び出したりして悪いですね、永琳。実は、貴方に頼みたいことがあると、ある人から言われたもので。」

「あら、何でその人は直接私のところに頼みにこないのかしら。」

「貴方が近寄り難い雰囲気を漂わせているからじゃないですか？それに、貴方のしている薬の実験も怪しいですし。」

「そんなに危ないことじゃないわよ？現に死人は一人も居ないわ。」

「逆に出されたら溜まったもんじゃありませんよ、、、。」

月夜見は呆れた表情でため息をつく。

死人は出ていないと言ったが、体調不良者は幾度となく出していいる。

主に、最近この都市にやってきた青年だが、

「まあいいじゃない。役に立つ薬だって沢山開発しているのだから。それより早く用件を言いなさい。それが呼び出しの理由でしょう？」「そうですね、、、。脱線して申し訳ないです。ええっとく、その頼み

事って言うのは、」

そのあと、八意永琳が聞いた頼み事とは、
とある一人の少女の教育係を務めてほしい。といった話だった。

そして永琳は、面倒に思いながらも承諾したのだった。

「その少女ってのが、輝夜ってことか？」

「そうよ。周りの人たちが、教育係をつけるだなんて言い出したから。
私は反対だったんだけどね。」

最初に輝夜は、自分と永琳の馴れ初めについて話した。

「へえ、永琳がちよくちよく出かけてたのはそういうことか。」

「というか、永琳から何も聞かなかったの？」

「いや、永琳は何考えてるか訳わかんないからさ。聞いても分かんないかなと思って。」

「その気持ち、分かる気がするわ。」

隼の弁解に対して、輝夜も苦笑いをしながら共感する。

「で、月ではどうだったんだ？」

「・・・あまり良い話にはならないわよ？それでも聴きたいかしら？」

和んだ空気から一転、一気に輝夜のテンションが下がる。

「え、。ま、まあ、ここまで聞いたんだし最後まで、」

「・・・あの日、私は最初のロケットに乗ったわ。」

「あ、ああ、つてことは永琳たちと同じ、」

「ええ、そうよ。前から永琳に聞かされてたの、月移住の話も、ね。」

移住計画決行日、地上から月へ6台のロケットが飛ばされた。

突然やってきた妖怪の大群によつて、予定よりも少し遅れたが、無事6台飛ばすことに成功。

都市に住んでいた全ての人の、移住が完了したのだった。

ただ、二人を除いては、、

「永琳、ロケットの中で凄い落ち込んでたわよ。慰めるのに苦労したんだから。」

「あく、それは申し訳ない。まあ俺はこの通り生きてるから、いつか会った時に謝るさ。」

「謝る前に、弓で射殺されるかも知れないわよ？」

「それは恐縮」

「だけど、ほんとに謝らないとな。」

「半ば無理矢理地上に残った訳だし。」

「それで、月に移住した後はどうなったんだ？」

「別に、順当に月を発展させて、また都市を造ったって感じよ。」

「まあ、その辺は苦労しないよな。あの技術力なら。」

「流星に、大昔の都市よりかは劣ると思うけどね。」

そして輝夜は、その後の年月の出来事を話した。
隼はその話を、世間話程度に聞く。

やがて最近の出来事の話を持ち出した時、隼は一つの疑問を持ちかけた。

「そういえば、何で輝夜はこの地上に居るんだ？月の生活に飽きた、とか？」

その話を持ち出した瞬間、輝夜の表情が変わった。

「……ええ、そうね、。後で話そうと思ってただけど、」

「あ、いや、話したくないなら別に」

「いいえ、話すわ。話さないと駄目なことだから。」

その時、輝夜は少し強い口調になっていた。

その口調に押されて、隼の言葉は止まる。

「あ、ああ、じゃあ、聞こうかな、。」

「……数十年前、。」

少し間を開けて、輝夜はゆっくりと話し始めた。

月での事件を、蓬莱山輝夜が地上にいる理由を、

「私は、永琳にある薬を作ってくれるよう頼んだの。」

「薬、？」

「その名は、『蓬萊の薬』。服用者は、不老不死となる薬。」

「・・・それは、俺とかお前とかとは違うのか？」

「隼がどうかは知らないけど、貴方はただ長生きなだけ。だってほら、自分を殺したら死ぬでしょう？」

「じゃ、じゃあお前は？永琳とかは？」

「月には穢れが無いわ。だから月人には寿命が無い。穢れに蝕まれた生命は、永遠を剥奪されるの。」

「あ、あく、そういうえば永琳からそんな話をされた気が。」

「話を続けるわよ？」

「あ、ああ、悪いな。」

「永琳は私の要求を受けて、蓬萊の薬を作った。そして、それを私が飲んだ。」

「・・・それが、どうしたってんだ、？」

「これが答えよ、私がこの地上にいる理由の。『蓬萊の薬を飲んだ事』」

「え、ちよつと待てよ、！何も関係無いじゃねえか。」

「いいえ、『蓬萊の薬を飲む』という事は、月人にとって禁忌。重い処罰の対象になるわ。」

そして輝夜は、不老不死である自分への罰は、この地上への流刑だと明かした。

月人にとって穢れた地上で住む事は、最も重い処罰の一つだということも。

「そして、もう少しで刑期が終わる。月の使者が迎えに来るわ。」

「・・・」

隼は、一言も発せなかった。

いや、発すべき言葉を見つけられなかった。

心の迷い

その日、俺は輝夜に何も言うことが出来ず日が落ち、そのまま屋敷から店へと戻ってしまった。

帰りのルートは、輝夜の案内のおかげで誰の人目にもつかず、迷うこともなく帰ることが出来たが、

輝夜のことを、月の決まりならと流すべきか、それは間違っている
と否定するか、

心は、未だ迷い続けていた、

「……ただいま。」

店の玄関口を開けて、小さく細い声でそう言った。
数秒後、居間から紫が顔を出す。

「……何かあったの？ 貴方、随分と顔がやつれているわ。」

「いや、何もないさ、」。

靴を揃えて、家の中に入る。

そのまま紫が開けた扉を越えて居間に入ると、藍が湯呑みにお茶を
注いでくれていた。

「悪いな、入れてもらって。」

俺は空いているスペースに座って、藍が入れてくれたお茶を飲ん

だ。

「・・・それで、何があったの?」

「別に、特に何も」

「あら、本当に何もなかったらそんな顔をしないでしょ? 伊達に長い付き合いじゃないんだから。」

駄目だなあ、流石に紫には分かっちゃうか。

・・・よし、

「・・・遠い昔、今の時代より遥かに発展した都市があったんだ。」

「それは、貴方の生まれた時代ってことかしら?」

「うーん、そうだけど、実際はそうじゃない。・・・まあそれはいいとして、」

その後、今日の出来事と関連付けて、過去のことや月のことなどを話した。

「ってな訳だ。・・・っておい! 何眠そうにしてやがる!」

その話を終えた瞬間と同時に、紫が声を上げてあくびをした。

「お前、人が真剣に話してやったのに、」

「ふああくく、。ええ、確かに聞いたわ。とっても眠くなりそうな話を、ね。」

「眠くなりそうって、俺にとっては一発で目が覚めるような話なのに、」

やっぱり、紫にこの話をするのは間違いだったか、

そう思った矢先、突然紫が口を開いた。

「・・・ねえ、聞いてて思ったのだけど、隼は何を迷ってるのかしら？」
「は、？いや、それは、」

「別に、今の貴方は月の人とは無関係でしょ？」

「いや、だけどそれは、」

「確かに、迷うかもしれない場所は沢山あるかも知れないわ。だけど、」

直後、紫は立ち上がって、俺の両肩を掴んできた。

「隼はいつも、迷う暇があつたら動け！でしょ？」

「紫、。」

「・・・はいっ！じゃあ私は寝るわね。もう眠いんだから、」

そう言つて、紫は居間から立ち去つた。

横を見ると、真剣な眼差しで藍がこちらを見つめている。

「・・・ああ、紫、そうだな。」

瞬間、心に覆い被さっていた迷いの埃が、一気に吹っ飛ばされた。

「藍、見苦しい姿見せたな。」

そう言つと、藍は口角を上げて、静かに首を横に振つた。

自然と、俺自身の口角も上がった気がした。

「紫、夢にも思わなかつたよ。お前に、立ち直れる言葉を貰えるなんてな。」

そして、約束の日、
俺は再び店にやってきた人たちに案内されて、
かぐや姫の屋敷へとやってきた。

勿論、両腰に鞘と二振りの刀を装備し、
左腕には真紅に輝く龍の腕輪。
大昔に永琳に揃えてもらった黒一色の服装。
まさに、完全装備状態だ。

やがて、再び屋敷に辿り着いた。
今回も正面の大きな門からの入場だ。
そして、俺を案内した集団の周りにも、いくつかの集団が同時に門
を潜る。

おそらく、他に護衛の依頼をされた者たちだろう。

『おやおや、先日の。』

直後、横から声がした。一度聞いたことのある声だ。

「……」

「フン、無視ですか。まあいい、せいぜい足手まといにならないよう

に。」

相変わらず偉そうな野郎だ。

人の不幸を祈りたくはないが、こいつに関してはいつか痛い目にあうだろうなと考えてしまう。

「あ、あのくく、。」

「あ？」

その瞬間、左後ろ辺りから声がした。

「ええつとく、ふ、不思議な格好してますね、！」

「え？あ、えつと、君は？」

その方向に振り向くと、背丈の小さい少年がいた。

年齢は、13歳くらいだろうか？

それに、服装はかなり立派な和装だ。

「僕は、安倍晴天（あべのせいてん）って、いいます。えつと、陰陽師です。あの、どうか宜しく、。」

「あ、ああ、咲風隼だ。よろしくな、晴天。」

第一印象に過ぎないが、幼いのに立派だなと思った。

あの自称武士ゴミ屑野郎とはえらい違いだ。

「あ、えつと、その、お願いします、咲風殿。」

「え？・・・ふははっ！そんなに改まって呼ばなくていいよ。名前を呼び捨てで構わない。」

あまりに真面目に呼ばれたものだから、思わず笑ってしまった。

一度も言われたことないぜ、咲風殿、なんて。

「え、いやでも、目上の方は、」

「呼ばれる側がいいならそれでいいだろ？まあ、好きに呼んでくれていいさ。」

「・・・じゃ、じゃあ、隼、さん。」

数秒迷った挙句、結局俺が一番呼ばれてる呼び方に落ち着いたようだ。

「ああ、それでいい。堅苦しいのは苦手だ。」

そうこうしていると、やがて屋敷の庭を抜けた。
そして室内への入り口に入っていく。

そのまま、奥から順番に護衛者たちは配置された。
形としては、入り口の周りを囲うような感じだ。
当然俺の隣は、あいつと晴天となった。

直後、

力強い音の太鼓が鳴った。

『どうぞ皆さま！屋敷の中へ!!』

間髪入れず、先程とは比べ物にならない程の行列が出来る。
どうやら、今回の役者は出揃ったようだ。

が、次の瞬間!!

バガアアアン!!と何かの破壊音が鳴り響いた!

「・・・いきなりか。さあ、任務開始だぜ。」

俺は力強く、その地面を蹴った。

実力者たち

突然鳴り響いた破壊音、多くの人間が地を駆ける音、そして男の大きな怒号、。

「おい貴族どもオ!!命が欲しけりや金目の物をとつとと出せエエ!!!」

男の怒号と共に、貴族たちの悲鳴が上がる。

冷静に避難を誘導する者もあれば、その状況に、怯え、恐怖し、ただ地を這うことしか出来ない者も。

そして、もう数名。

逆方向へと走り抜ける者もいた。

状況把握の能力を使い、敵の数を測る。

数は、20人ほど、。素性は、盗賊か山賊、。

それも、中々手練れの者か、。

「generate command、。。。」

向かい風のように押し寄せる人の波を、隙間を即座に見つけて擦り抜ける。

隙間が無いのであれば、高く飛び上がって、また屋根を蹴り地に戻る。

そして、一瞬目にその姿が映った瞬間。

「来いッ!!風縫イ!!!」

風を纏った弓が左手に具現化される。

すかさず狙いを定め弓の弦を引く、

その瞬間、風斬る矢が放たれる。

放たれた風の矢は、大きく屋敷の周りで弧を描き、

「オラア!!早くしねえとぶっ殺、」

急かす賊のリーダー格の前に、強大な力の風が吹き、

屋敷の関係者と賊の者たちを、地面の抉り跡にて隔てた。

賊の男達は驚き、逃げていた群衆たちは戸惑い逃走を止めた。

「な、なんだ、、何をしやがっ」

直後、戸惑う群衆の中から、黒衣の青年が姿を現した。

「聞け、賊の者。」

慌てふためく男達を睨みつけながら、青年は口を開いた。

「別に俺はお前らを殺すつもりはない。だから、素早く身を引いてくれるとありがたい。」

そう言いながら、そいつは腰に身に付けた、巨大な黒刀を抜いた。

「だが、命を賭けてまでこの屋敷を襲うと言うのなら、」

同時に、己の得物を敵へと向ける。

「その境界線を越えろ。全力でお前らを迎撃する。」

それを聞いた賊たちは、驚きや戸惑いの感情が消え、皆武器をとつた。

「この、ガキイイ!!!」

男達は激情し、線を越えて刀で斬りかかった。

「・・・極夜・深淵。」

が、それが振り下ろされるよりも早く、そいつの刀は飛んだ。しかし、刀は未だ握られたまま。

「・・・み、右手がアア!!!」

黒き斬撃は、男の右手ごと跳ね飛ばした。

その光景を見た仲間の者たちは、更に怒り線を踏み越えた。

「結束力は高いのか。．．．交渉決裂だ。少し痛い目見てもらおうぞ！」

青年は二本目の刀を引き抜き、その賊へと突っ込んだ。

「調子に乗るなガキイイ!!」

雄叫びと共に、正面から太刀が振り下ろされる。

それを、人と人の間、足の隙間を滑り抜けるように躲し、
賊の者たちの足首や膝に、刀の柄を打ち込む。
致命傷にはならない一撃だが、少しの時間なら一発で再起不能だ。

「さあ、とつとつここから立ち去れ。」

そう賊に言いかけるが、止め処なく刀は振られる。
が、この程度の剣筋。簡単に弾き飛ばせる。
すかさず刀の柄を打ち込むだけだ。

『トドメだアアー!!!』

瞬間、背後から勝利宣言が叫ばれる。

しまった、。打ち込んだ場所に、プロテクターか何か仕込んであったか、。

やむを得ない、斬る、、!!

身体を捻って、刀の重さによる遠心力をかけ、そいつを斬ろうとした。

が、

「な、何、、」

その男は刀を振り下ろさない。動けていない。

まるで、何かに縛られたように、。

その機を逃さず、今度は確実に再起不能にする。

『だ、大丈夫ですか、？隼さん、。』

直後、その戦いを傍観する屋敷の群衆の中から、小さな少年が歩み寄る。

「お前、晴天か、、？」

その姿は、先程顔を合わせた少年と酷似している。

だがその纏う霊力は、比喩物にならない。

「驚いた、凄い霊力だな。」

「いえ、まだまだ、全然、、攻撃とかは、出来ないですし、、。」

「それでも、だよ。」

そう言って後ろを振り返ると、再び賊が押し寄せていた。

今のも見ても尚攻撃を続けるとは、

「さあ、残りも追い返すぞ、晴天！」

「は、はい！」

その突進に対して、二人は戦闘の構えをとった。

が、その直後！

恐るべき威力の衝撃波が、屋敷の方向から放たれた！

「な、この威力ッ!?!」

その衝撃波は、瞬く間に賊の集団を吹き飛ばした。

男達の顔つきは、一気に絶望へと変わる。

「ッ、！撤退だア！撤退イイ!!!」

その後、たった数秒間のうちで、かぐや姫の屋敷を襲った賊は逃げ帰っていった。

『申し訳ない、ちよつと遅刻してしまつて。』

背後から、優しそうな男の声があった。

瞬間、晴天と同時にそちらの方向を向く。

「……お前か、今の斬撃は。」

背丈は俺より少し下、よく見る和服、頭を覆う傘のような帽子、そして、極夜と同じぐらいの大きさの刀。

「ええ、僕は 鬼式眼薬 と申します。よろしく。」

そいつは、笑顔でそう名乗った。

五人の貴公子

突如、屋敷を襲った賊の者たちは、雇われた数人の護衛人によって、完膚無きまでに叩きのめされた。

怪我人は、賊の者だけに留まり、屋敷の者、貴公子の関係者に、死傷者は出なかった。

「あの、隼さん、、、。怪我とか、してないですか、？」

「・・・ああ、見ての通り傷はない。」

壊された屋敷の外壁を、雇われた護衛人のみんなで積み直す。
所詮、応急処置程度にしかないが、

「それよりも、お前。」

瞬間、隼と先程の剣士の目が合った。

「お前、鬼式眼楽つつたっつけ？」

「ええ。眼楽で構いませんよ、咲風隼君。」

眼楽と名乗ったそいつは、一度補強の手を止める。

「何か、僕に言いたいことでもあるんですか？」

「・・・いやね、見事な剣撃だった、って言いたかっただけさ。」

隼は少し笑みを浮かべてそう言った。

「それはどうも。・・・だけど、見事だったのは僕の剣じゃない。君こそ、剣の柄だけで完璧に彼らを圧倒していた。」

「完璧、か。」

その時、隼の脳裏には、ある光景が過ぎった。それは戦いの中、一人に背後を取られた瞬間。剣の刃を使わざるを得なかったあの状況。

あれを引き起こしておいて、圧倒と言えるだろうか？

「・・・褒めの言葉は有難いけど、あの戦闘に褒められる要素は無かったかな。」

「どうだろうね。僕なんて、斬ることしか技がないんだから。」

その直後、

『咲風隼殿！隼殿は何処に!!』

一人の男性の声がした。

直後、屋敷の入り口の方向だ。

「悪いな、晴天、眼楽。ちよつと行ってくる。」

隼は積もうとした外壁のかげらを地面に置いて、その声の方向へと向かった。

「何か、御用ですか？」

「おお！隼殿！」

入り口にて、先程俺を呼んだ人と会う。

その人は、翁だった。

「こんな場所で、一体どうされたのですか？翁殿。かぐや姫の近くに、急いで行った方がいいのでは？」

「いえいえ、勿論急いでおりますとも！ただ隼殿！貴方にお願いがありません。

「え、お願い、？」

俺は今、屋敷の中にいる。

それも、かなりの大きさの部屋の近く、輝夜が控えている部屋の側の廊下に、。。。

「これはお前が仕組んだことか？輝夜。」

「いいえ、そんな訳ないじゃない。」

翁に要求されたこと、それはかぐや姫の側近で護衛をして欲しいというもの。

俺のような見ず知らずの男をかぐや姫の側近に配置するなんて、危険すぎるだろう！

と、先程までは言われていたらしいが、あの戦闘で考えが変わったのだろうか？

『お願いします！私は、貴公子の殿方の案内をしなければならなくて、かぐやの側には居られないのです、！』

あんな口調で言われたら、断れないだろう、。

俺が、極悪非道でない限り、

「で、大丈夫かよ。俺と話していて。」

現在は、障子を挟んで、輝夜と会話をしている。

流石に、同じ空間にいるのは許されないのだろう。

「何よ、貴方だって話してるじゃない。むしろ、心配されるのは隼の方でしょう？」

「別に、俺にとって地位とかどうでもいいし。もし指名手配か何かをされたとしても、特に問題はない。」

そう話していると、やがて大人数の足音が聞こえてきた。

恐らく、求婚をしにきた貴公子とやらだろう。

「お前、どうすんだ？」

「聞くまでもないでしょ。元々、地球に住む人じゃないのだから。」

「いやそれは分かってる。問題なのは、どう断るか。」

「・・・まあ、そこで黙って聞いてなさい。」

その瞬間、とてつもなく嫌な予感がした。

まさか、こいつも、。。。

数分後、所謂お見合いが始まった。

お見合いと違ふところは、既に男性側が求婚目的だということ、もう一つ、まだ輝夜は顔を見せていないということ。

障子越しにその男たちの話を聞いていたが、正直良い気分はしなかった。

長々と綺麗な言葉を並べて、自分が優位に立つため周りの人間を貶め、

そもそも、よく顔も見えない女性に対して、愛だの結婚だの言えるものだ。

あり得ないが、もし輝夜の容姿が、自分の好みでないものだったりしたなら？

今グダグダと語っている言葉に、責任が持てるのかよ。

そう考えていると、輝夜も似たようなことを、声を出して話し始めた。

別に、声に出さなくてもいいでしょうに、。。。

『か、かぐや姫こそ！そろそろ、顔を見せてくれてもいいのではないでしょうか！』

おっと、流石に気に触る人が居たみたいだ。

まあ、プライドの高い貴族なら、少し頭にくるのも当然か。

その瞬間、

『お、おお、！』

五人の貴公子が、同時にそんな声を上げた。

どうやら、輝夜を隠していたカーテンのような布を、輝夜本人が
取っ払ったようだ。

反応を聞く限り、容姿に不満はないのだろう。

『くく。皆様のお褒めの言葉、大変喜ばしく感じます。』

輝夜は、そんなことを話す。

だけど、求婚は断るんだろう？そんなん言っただうすんのさ。

『くくく。．．．それならば、』

次の瞬間、輝夜はとんでもないことを口にした。

五人の貴公子も、動揺の反応を見せる。

しかし、自分にとっては、微かに聞き覚えのある話だ。

竹取物語中盤、五つの難題。

- ・ 龍の頸の玉
- ・ 仏の御石の鉢
- ・ 火鼠の皮衣
- ・ 燕の子安貝
- ・ 蓬菜の玉の枝

どれも、この世に存在が定かではないもの。

「輝夜、お前も、あの話通り、鬼畜難題を出すのか。」

嫌な予感の中した瞬間であった。

正体

「結構迷ったが、無事着いたぞ。」

共に護衛を全うした、隼、晴天、そして眼楽。

かぐや姫の屋敷から、少し離れた場所に位置する山にて、夕方、三人は合流した。

「やあ、待ってましたよ。隼君。」

「あの、遅かったですね、！何かあったんですか、？」

少し開けた場所に、二人は呑気に団子を食べていた。

「いいや、ちよつと立て込んだだけだ。それより、団子残ってるよな？」

「安心して下さいよ、ちゃんと君の分もある。」

そう言つて、笹に包まれた三本の団子を差し出してきた。

特に何もかかっていない、シンプルな団子だ。

「どうも。・・・で、何でここに呼び出したんだ？」

「いや、折角だし、交流でもと思ひまして。」

苦笑いを浮かべて、眼楽はそう言った。

「眼楽さん、酷かったんですよ、！団子屋さんで、二十分ぐらい値切つてたんですから、！」

「な、!?何を言うんですか、晴天君！安くなるなら極限まで安くするべきでしょ！」

「限度つてもものがあるんです！人が集まってきて、大変だったんです

よ、！」

そう言われた眼樂は、悔しそうな顔で、グググと唸った。
数秒睨み合って、結局眼樂の方が折れた。

「ま、まあ、落ち着けて。」

「・・・あつーご、ごめんなさい、！つい熱くなっちゃって、。」

その瞬間、ハッと我に帰ったように、晴天は申し訳なさそうな顔を浮かべた。

晴天って、二重人格か何かなのか、？

「じゃあ、話を変えよう。うくん、そうだなあ、」

分かりやすく、話題を考えるような素振りを始めた。
こいつ、感情豊かだな。

「す、好きな食べ物とかはどうでしょう、！」

レベル低すぎるだろ、晴天、。

「おお、いいですね。」

何処がいいね なんだよ！

え、なに、俺が間違ってるの？

「お前ら、付いてけねえよ、。」

晴天と眼薬による、沢山の謎の話題により、俺の精神は疲れ切っていた。

いや、好きな食べ物 はまだいい。

だがよ！何なんだよ！

モグラになったら何がしたい？とか！

トウモロコシ何粒食べれる？って！

「隼さんは、どっちだと思えますか、！？」

そして今現在は、空に浮かぶとある雲と、太陽の沈む速度、どっちが早いのか話してるんだってよ。

どっちでもいいわ！そんなもん。

「次は、そうだなあ、。夢でも語ります？」

「いや、そんなん、。は？」

突然眼薬から出てきた話題に、思わず素っ頓狂な声が出た。

いや、そりやそうだろ。

「何だよそんな声上げて。ほら、隼君、君はどんな夢を見てる？」

「え、夢、？ええつとく、夢か、。」

それを聞かれて、俺は言葉に詰まった。

今まで、沢山の人の夢を見てきた。

守る、生きる、戦う、創る、強くなる、。

じゃあ、俺の夢は、？

「俺の、夢は、多分まだ無い。」

「そ、そうなんですか、？てつきり、大きい夢を持っているのかと、。」

「・・・そうじゃない。そういうことじゃないんだ、晴天。」

夢は、何回かもう叶ってる。

それを、何度も近くで見届けた。

友が、仲間が、戦友が、夢を叶える。

それが、今まで抱いた俺の夢。

だから、俺にだけの夢は、無い。

「いや、忘れてくれ。何でもない。じゃあ次！晴天はどうなんだ？」

「・・・ええ!?!？」

「お前は、でっかい夢でも持ってるのかよ。」

「え、そ、そのく、笑いませんか、？」

晴天は顔を赤くして、小声でそう言った。

それに対して、首を縦に振る。

眼楽も同様に。

「僕の、夢は、ひ、日の本一の陰陽師になることです!!」

晴天から強い口調で放たれた、その夢。

直後、二人はその夢に圧倒された。

「・・・あ、あのく、。」

「・・・んだよ晴天。」

「え、？」

その衝動を抑えられず、俺は思わず晴天の背中を叩いた。

「最高の夢持ってんじゃん、晴天。」

「え、そ、そうですか、？」

隣に座る眼楽も、静かに首を縦に振った。

それを見て、晴天は安堵する。

そんなに自信がないのだろうか？

「・・・じゃあ、眼楽はどうなんだよ。」

「うくん、僕の夢はですねえ、。」

またしても、わかりやすい迷うような素振りを見せる。

「お前、それ癖なのか？」

「・・・え？何がですか？」

自覚無しってことは、多分癖だな。

にしても、珍しい癖だが。

「強いて言うなら、出来るだけ多くの人を救済したい。」

数秒後、眼楽は口を開いてそう言った。

その後！

ズドオオオオン!!と鈍く強烈な音が近くで鳴った。

「へ、な、何の音、ですか、？」

「・・・慌てんな晴天。とはいえ、急ぐ必要はありそうだ。行くぞ。」

三人は、その音がした方向へ向かった。

向かった先は、まさしく、酷い惨状だった。

どうやら、脆かった山の壁が壊れ、それに数人が巻き込まれてしまったようだ。

巻き込まれた人の身体は、多くの血を流して、地面に倒れ動かなくなっていた。

「ひ、酷い、。」

「これは、不運としか言えないな。」

俺たち三人は、手分けして人を潰している瓦礫をどかした。しかし、息をするものはいない。

が、その瞬間。

『……う、うう、。』

三人以外の誰もいない、一人の呻き声が聞こえた。

「そ、そこですか、！」

晴天が真つ先に反応し、そこへ向かう。
そして、その場に転がった瓦礫をどかした。

『う、うう、き、君は、？』

そこには、一人の男性が血を流して倒れていた。

「だ、大丈夫ですか、!? は、早く手当てを」
『か、家族は、！みんなは、！』

直後、その人は、今にも死にそうな声を出しながら、そう小さく叫んだ。

恐らくその人は、家族みんなで山を歩いていたのだろう。

「・・・晴天。変わるよ、俺が手当てする。あんた、あんまり動くな、傷に響く。」

「は、隼さん、。」

「大丈夫、すぐに治せる。」

回復術・治癒ノ、

次の瞬間！風が吹いた。

正確には、風ではなく、強い刀の衝撃波。

「どういふつもりだ、眼楽ッ！」

「隼君、邪魔をしないでくださいッ!!」

瞬間、眼楽は隼の刀を弾き、肩目掛けて斬りかかる。
それを、隼は身体を逸らして躲し、黒い斬撃を放った。

「これ以上やるなら、本気で斬るッ！」

極夜・深淵!!

斬撃は、眼楽の帽子を斬り、髪を少しだけ掠めた。
直後、眼楽は一旦手を止める。

「眼楽、テメエ!!!」

眼楽の頭を隠していた帽子が落ち、その額が姿を現す。

彼の額には、不自然なものが存在した。

それはまるで、鬼の角のようだった。

意思の剣筋

「何のつもりだ、その角は何だ、答えろ眼楽アア!!」

その刹那、再び眼楽が攻撃に移り、両者の大太刀がぶつかり合った。またしても、強烈な風が吹き荒れる。

「・・・隼君、退いてくれませんか。これじゃあ、彼を斬れない。」

「斬らせる訳ねえだろうがッ!」

極夜・奈落!!

隼は地面を踏ん張り、力づくで眼楽を太刀ごと吹っ飛ばした。

その衝撃により、一度眼楽は地に膝をつく。

「さあ答えろ眼楽。何故怪我人を斬るのかをッ!!」

眼楽はゆつくりと立ち上がりながら口を開いた。

「隼君、言ったじゃないですか。僕の夢は、救済だと。家族を失ったここからの道を生きる彼を、僕はとても見てられない。」

「救済だど? 殺すことが救済だとも言うか! 本当に救済したいなら、死者を生き返らせる術でも身につけろッ!」

「・・・隼君、それが出来ないから殺すんですよ。それが出来る人がいるなら、救済なんて考えは生まれないッ!」

直後、眼楽は刀を構えて隼に斬りかかった。

「ッ、! 来るか、!」

瞬間、隼は不自然な感覚に襲われた。

まるで、自分の意識が何処か遠くへ行ってしまったかのような、

「なッ、！」

次の瞬間、頬から血が流れた。

反応が遅れた隼は、咄嗟に背後へと地面を蹴る。

「・・・おい、テメエ何しやがった、。」

突如として頬に現れた切り傷から流れる血を、拭き取りながら隼はそう言った。

「首を撥ねたつもりだったんですが、まあいいでしょう。どうですか？これが僕有能力、『意識を強制的に吹っ飛ばす能力』」

「へえ、面白い技を使うな。だが、殺すには至ってねえぜ？しかも、能力がばれる前にも関わらずな。」

すかさず隼は二本目の刀、即ち『火神』を抜いた。

「さあ、まだやるか、？」

すると突然眼薬は、背中に背負った刀の鞘に、その大きな太刀を納刀した。

「……そうですね。どうやら、僕は君に勝ち目が無いみたいだ。」

更に、さっきまでの夥しい殺気も消えた。

「いいのかそんな事してよ。お前が危害を加える妖怪と分かった以上、殺すことに躊躇は無い。」

「別に問題はないですよ。勝てないと言っただけで、逃げるのは容易ですから。」

その空間に、更に緊迫した空気が流れる。

少し気弱な生物が、そこに足を踏み入れた瞬間に失神してしまいうな、息のつまる空気。

次の瞬間、隼の黒刀の空を斬る音が鳴る。

「極夜・深淵ッ!!」

禍々しく、漆黒に輝く斬撃は、眼楽の首の位置を捉えて放たれた。

一瞬の間で、およそ数センチ程度まで斬撃は迫る。

「問答無用、ですか。……ならばッ!」

漆黒の斬撃が、首を跳ね飛ばそうとするその直前!

全く無駄のない動きで、背中に納まった刀が抜き取られる。

「その斬撃、見切ったッ!!」

白塗・吹雪!!

その大太刀は、漆黒の斬撃と全く同じ形で振り抜かれた。

斬撃は斬撃どうし相殺し、空気へと消えた。

「な、！」

その光景を見て、隼は思わず一步後ずさる。

眼樂はその隙に、すかさず剣先を隼の方へと向けた。

「……隼君。久しぶりなんですよ、こうして、刀同士をぶつけ合うのは。」

「ハ、ハア、？テメエ何言つて」

「言葉の通りですよ。僕が刀同士をぶつけ合った相手の刀は、簡単に斬れてしまう。」

次に眼樂は、隼の右手に握られた黒刀に剣先を向けた。

「君の刀は、確かに良いものだ。腕利きの鍛冶屋でさえ、その性能を出すことはできないだろう。」

「……」

「けれど、さっきの黒色の斬撃は、その刀の固有能力でも何でもない。君自身が刀に伝えた力だ。」

「ず、随分と知ったような口を聞くじゃねえか。なら！こっちの刀はどう説明する、！」

瞬間、隼の左手に握られた刀、火神が炎を纏った。

荒々しく、そして鮮やかに、。

「・・・それも、同じことですよ。使用者の意思が、刀に伝わって成ったに過ぎない。」

「ならば、他の奴がこの刀を使っても、こうはならないと、？」

すると眼楽は、怪しい笑みを浮かべた。

「・・・そして、刀をぶつけ合った時、どっちの刀も斬れなかった。それは、君と僕の剣筋が一緒だから。」

『『斬る意思の剣筋』』

「例え話ですが、包丁が身勝手に動いて人を殺しますか？何も知らない心弱き人が、名刀を握っただけで人を殺せますか？」

「・・・」

隼は言葉を発さずに、睨みを続けた。

単純な嫌悪と、敵の牽制の意を込めて、

眼楽はそのまま話を続ける。

「人を殺すには、刃物だけじゃ足りない。それも決定的に。それが、斬るという意思、殺すという意思です。」

そして、

「僕や君は、それが著しく強い。だから、両者の刀とも斬れることはなかった。」

そう言うと、その剣先を向けていた刀を、隼に見せた。

その刀をまじまじと見た隼は、またしても一步下がる。

刃の色が、真っ赤に染まっていたのだ。

だけれど、血で染まっているとかではなく、まるで元々赤い刀だっ

た、というような染まり方だった。

「見てください、この刀。昔は、名刀白塗　なんて言われてましたけど、今じゃとても呼べる物じゃない。」

そいつは少しの間だけその刀を見せると、また背中 of 鞆にしまった。

「僕は沢山斬りました、良い物も悪い物も。そうして、この剣筋に行き着いた、。隼君、君の斬ってきたものは何ですか？」

数秒の沈黙が流れる。

両者には、その数秒が何十分にも感じられた。

「・・・少し喋り過ぎましたね。お先に失礼します。」

沈黙を切り裂いたのは眼薬だった。

言い残して、山の奥へと去って行った。

一度の振り返りすらも無しに、

「・・・は、隼さん!!!」

「うおっ!・・・な、何だよ晴天。」

「もう何度も呼びかけてますよ!それより、こ、この人、もう弱りきってますよ!」

晴天の言葉で、意識を戻した。

しかし、未だ思考は疑問でめちやくちやだ。

鬼式眼薬、。あいつは、何なんだ、?

意思の剣筋だと、?俺の斬ってきたものだと、?

「隼さん!!!」

直後、晴天が今日一の大声を上げた。

「え?・・・うわっ!ちよっ、やっべー!」

回復術・治癒ノ海

怪我人の傷が、一瞬のうちに癒えていく。

直後、その人は目を開いた。

「よ、よかった、!無事みたいですよ、!」

「あ、ああ、そうだな。」

晴天、お前も動揺しまくってる筈なのに、。怖かった筈なのに、。なのに、

この場から逃げ出さず、その人が助かることを望んで、

あいつについて考えるのは、後でも出来るな。

「……よし晴天、その人掴んで、俺に捕まれ。」

「え？……わ、わかりま」

「行くぞ。」

瞬間移動！

その場所から、三人が消えた。

静かな山奥にて、突然木々の倒れる音が響いた。

「…咲風隼。今の僕じゃ、とても勝てるような相手じゃないな。…
もつともつと斬り裂かなくては。」

再び赤に染まった刀が、右方向へ振り抜かれる。

直後、その方向に佇んでいた木々が、次々と倒れた。

木に断面が生じる時、音は全くなかった、。

突然の訪問

日は沈みかけ、道が提灯の灯火によって照らされ始めた頃。
例の屋敷付近に位置する町を、二人は歩いている。

「よかったな。あの人、無事で。」

「は、はい、。」

本来であれば、これは良い知らせの筈だが、喜びの感情が伝わるような様子はなかった。

「どうした？・・・眼楽のことか？」

「・・・あの人、あの、本当に悪い人でしょうか、？」

今にも消えそうな声で、晴天はそう言った。

「悪い人、かどうかは分からないな。だが晴天、あいつは多分俺の敵になる。善悪関係無く、な。」

「・・・」

別に、妖怪は敵、とは微塵も思っていない。

だが、あいつと刀を打ち合い、会話し、そこで感じた。

あいつ、性格は違えど、あの妖怪の山で戦った奴と、同じ何かを感じた。

だから、いつかあいつは必ず立ちはだかる。

その時は、躊躇無く殺すさ。

「ところで、晴天。お前、家は何処なんだ？」

「……えッ!?？」

町中を歩きながら、晴天に帰る家について聞くと、わかりやすく驚きの声を上げた。

そしてその驚きの表情を変えず、数秒間何も言わなかった。

「ん、どうした？」

「……あ、いや、その、。」

「何か、言いたくないことなのか？ならいいぞ、忘れてくれ。」

その後、晴天は特に何も話さなかった。

気まずそうな顔をして、ずっと俯いていた。

もう辺りに日の光は完全に消えた頃、俺は店に戻ってきた。
店の前に、提灯とかはないため、手探りで店の扉を開く。

「ただいま。・・・あれ？」

誰かいる。しかも、一人だけだ。

そして、妖怪の気配じゃない、。

右手で黒刀の柄を握り、ゆっくりと廊下を進む。
次の瞬間、勢いよく居間の戸を開けた！

「誰だテメエ!!」

そこには、一人の女性が正座で座っていた。

黒髪に長い髪、綺麗な和服、。

するとそいつは、こちらへ振り向いた。

「・・・何してんのお前、。」

「あら、随分と辛辣なのね。」

そこに居たのは、他でもない、蓬萊山輝夜だった。

お茶を飲みながら、寛いでいやがる。

「そりや辛辣になるだろ。で、何してんだよ。」

「別に、屋敷がうるさくて仕方なかったから、ここに避難しに来たのよ。」

「・・・はあ、。ったく、多分それお前の所為だぞ。」

俺は自分のお茶を湯呑みに注いで、輝夜の正面に胡座で座った。

にしても、よく正座で座ってて疲れねえな。

「全く、本当にかぐや姫って鬼畜なんだな。」

「え、何の話？」

「いや、こつちの話だ。」

「・・・ふくん。」

俺は適当に、お茶を飲んで誤魔化した。

そういう話しは、中々面倒だ。

「で、輝夜。何でここが分かった？どうやって入った？」

「・・・場所は、屋敷の人から聞き出したの。扉は開いてたわよ？」

「聞き出したって、。って待てよ、来た時誰も居なかったのか？」

「誰も居なかったわよ？」

犯人は紫か。後で覚えとけよ、。

「それで、どうすんのさ？今日はここに泊まるとか言うなよ。その場合摘み出すからな。」

「ふふ、もう帰るわよ。そろそろ、無断外出がバレるでしょうし。」

無断で来たのかよ、こいつ。

まあ、帰るなら安心だ。もしここに來てることが判明したら、色々とめんどくさい。

「・・・ねえ隼。」

湯呑みに入ったお茶を、輝夜が飲み干した頃。

輝夜が俺に問いかけてきた。

「ん？どうした？」

「・・・貴方にとっての、生きるって何？生きてると感じる瞬間はある？」

「急だな、一体なんでそんなことを聞く？」

「そうねえ、ちよつと気になったから？単なる好奇心よ。」

「へえ、。生きる、か。考えたことないな。」

「そう、。じゃあ、今度教えて？次屋敷を訪れた時の土産は、それでいいから。・・・それじゃあね。」

そう言い残して、輝夜は店から出て行った。
ったく、勝手なやつだ、。

翌日、俺を起こす声で目が覚めた。
ほのかに、畳みの香りがする。

「隼さん、起きてください。」

「……んあ?？」

自分の身体が左右に揺れる。

力強さはないが、少しずつ目が覚めていくのを感じる。

「おはようございます。隼さん。」

「……藍?おはようく、。」

また睡魔が襲ってきた。藍に朝の挨拶をすると同時に、夢の中へと落ちていく、。

「隼さん!二度寝しないでください!」

「んわっ!ああ、悪い悪い。」

藍に強く起こされて、ようやく完全に目が覚めた。

どうやら、居間で寝てしまっていたらしい。

「隼さん。いきなりですけど、店の前にこんなものが置いてありましたよっ。」

「ん、何だ?」

すると、藍は一枚の紙を渡してきた。

その紙には、ある二文字が書いてあった。

『緊急』と、。

「え、何これ、?」

流れゆく血

太陽は、昨日と変わらない輝かしき光を見せて地を照らす。
空に雲は無く、その光を隠すものはいない。

今日は、快晴だ。

いつも通り、部屋を片付けて店を開く。

前々からの依頼はない為、今日誰も訪れなかった場合は、一日中暇
ということになる。

悪くはないが、良くは決して無い、。

「……隼、その持つてる紙、何て書いてあったの？」

先程、蘭に渡された紙を保管するために空き部屋に向かう途中、起きた紫に話しかけられた。

「ん、これか？」

「それ以外何があるのよ。最初に見るのは貴方がいいと思って、中身までは見なかったけど。」

「中身って、別に封筒じゃねえぜ？」

「折り畳まれてたじゃない。気づかなかったの？」

「あれ、そうだったけ。」

藍からあの紙を渡された時は、寝起きで意識が完全ではなかった
為、無意識で開いていたのだろうか？

しかし、あの二文字を隠す意味ってあるか？

「……まあいいわ。それで、何て書いてあったの？」

「ああ、えくつとな、『緊急』って、たったそれだけ書いてあったんだ
けど。」

「それだけ？誰々より、とか書いてなかったの？」

「ああ、後は何も。」

「そう、。心当たりはある？」

「・・・まあ、多分な。」

恐らくだが、昨日のあれと関連している筈だ。

今のところ、『竹取物語』通りのシナリオのまま事が進んでいる。

このままいけば、次に起こる出来事は、

「まあ、より警戒しろって事だ。・・・てかお前、昨日は何処に行つてやがった？」

「昨日？・・・ああ、ちよつと、幽香のところに、ね。」

「へえ、あいつ、元気だったか？」

「相変わらず、だったわ。」

「そうか、。」

数秒、二人は何も言わず、沈黙が流れた。

外から小鳥の囀りがよく聞こえる。

「あ、じゃ、じゃあまた後でな、！」

とりあえず紙をしまうために、紫にそう伝えた。

その時、

「・・・待って。」

「え、な、何？」

いきなり、紫に腕を掴まれた。

強く握られているわけではないが、振り払える気はしなかった。

「昨夜ね、夢を見たの。完璧に覚えてるわけじゃないけど、間違いなく『悪夢』だったわ。」

「そ、そうなのか。・・・どんな夢だったんだ？」

「・・・貴方が居たわ。その、全身から血を流す、隼が。」

「ッ、！」

その時、紫はその夢で見た光景を脳裏に映していた。

大量の血を流し、骨は折れて砕けて、力を失い崩れ、この世から散っていくその姿が、。

「だから・・・隼、無茶はしないで。死んだら、元も子もないんだから。絶対、正夢なんかにしらないで。」

「・・・紫。ああ、分かってるよ。」

そこでようやく、紫は俺の腕を離した。

それから数日が過ぎた。

その間は、特に変わったことがあったわけでもなく、普段通りいくつかの依頼が来て、それをこなして、

かぐや姫の屋敷や、輝夜本人からの連絡も途絶えていた。

しかし、音沙汰が無かったわけじゃない。

依頼に来てくれた人たちが、世間話でその話題を持ち出したことが多々あった。

なんでも、あの難題を本気でこなそうとして、哀れにも酷い目に遭っているのかなんとか、。

全く、気の毒なもんだ。

「隼、これって何？」

「ああ、それは、思い出の、刀なんだ。」

部屋の片付けをしている時、紫がとあるガラクタのようなものを見つけた。

それは、刀の柄だった。それも、刃は無い。

「刀？でも、刃がついてないじゃない。」

「・・・昔、折れちまってな。」

その刀は、俺が一番最初に具現化した刀だった。

大事に保管していたが、あの戦いによつて、刃は失われてしまっていた。

「これが俺の原点なんだ。だから、絶対捨てることはない。」

「・・・じゃあ、元あった場所にしまっておくわね？」

「ああ。」

その後、、!!!

もの凄い数の足音が辺りに響いた、!!
数は恐らく、この前の倍以上だ、。

やがて、足音は止まった。

それも、この店の前で、。

俺は急いで玄関口へ向かい、勢いよくその扉を開けた。

「は、隼殿!!」

扉を開くと、大勢の人々が玄関口を取り囲んでいた。

同時に、先頭にいた一人の男が俺に叫ぶ。

「一体何の騒ぎだ。あまりこの辺で大きな音を、」

「お願いです！隼殿!!今一度、貴方の力を!!」

注意喚起をしようとしたが、言い終わる前にその言葉は掻き消された。

「あのなあ、だから大きな音を、、あんた、翁か？」

いきなり頭を下げられて気付かなかったが、その人は紛れもなく、翁本人だった。

戦士喰らいし大蛇

数十にも及ぶ足音が町中に響き渡る。

町の人は何事か、と表へ出向き、その風景は何処かのパレードのようだ。

町中を駆け抜ける足音の兵士たちは、武装をぶつけてゴツゴツと鳴らし、まるで足音と共に楽器を奏でるようだった。

「もう一度確認するが、遂に”帝”が姫に求婚を迫って来ている、ってことで良いんだな？」

隣で息を切らしながらも並走する翁にそう聞くと、疲労に襲われながらも首を縦に振って頷いた。

全く、何かしらに乗ってくればいいのに、にしても、予想的中というか何というか、やっぱりこうなったか。

想像通りのこの状況に、少しため息が出る。

「・・・おい、大丈夫か？」

「なんの、これしきではこの翁、倒れませんが、!!」

店から屋敷までという長い距離を、休みなしで走り続ける翁を少し見直した。

だけど、もう流石に限界だな。

と、思ったが、どうやらこの人粘り勝ちのようだ。

直後、屋敷の門が見えた。

残り距離は、もう百メートルも無い。

門の前に着いた瞬間、一斉に足音が止まった。

そのまま、門を潜って屋敷の中へと入っていく。

『・・・は、隼さん、!!!』

突然、俺を連れてきた兵士の集団の外から、聞き覚えのある声が聞こえた。

俺は翁に断りを入れて、その声の方向へと集団を抜ける。

「お、いたいた。よう、晴天。」

「おはよう御座います、隼さん。」

出会うや否や、晴天は服を正して頭を下げた。

こちらからも、おはよう と返事を返す。

「よく俺があの中に居るって分かったな?・・・気配か?」

「え、い、いやいや、違いますよ、!?ただ、何となく居るかなー、つて、。」

そんなとんでもない!というような素振りをしながら晴天は否定をする。

その姿勢に俺は少し疑問を感じ、更に少し苛立ちを覚えた。

「・・・なあ晴天。謙虚を捨てろって言うわけじゃねえが、もう少し自信を持つたらどうだ?」

「えっ、。」

「別に良いんだぜ?胸張って『この程度僕にとっては余裕だ!』って感じに応えても。」

「ええっ!??・・・さ、流石にそれは、」

「ほらそれだよ。日の本一を指す奴が、そんな低姿勢でどうすんだ。」

「・・・そ、そうですよね!わかりました!もっと胸張って、もっと威張り散らして、」

晴天はブンブンと腕を振って、張り切るような素振りをする。

「いや、威張り散らす必要は無いが、。」

その後、

『オイ!早く全員位置につけッ!!!』

男の大きな声が響く。

その声により、屋敷の庭に乱雑に残っていた兵たちが、一斉に配置を整えて位置についた。

俺と晴天も、前と同じ場所に移動する。

「・・・あ、あの、隼さん。えっと、眼楽さんは、」

少し控えめな声量で、晴天がそう聞いてきた。

「・・・まあ、残念ながら来ることは無い。いや、幸いとも言えるか、。」
「そ、そうですよね、。」

晴天は残念そうな顔を浮かべる。

俺よりも、長い時間あいつと話していたもんな。

「・・・まあ、いつか会えるさ。俺にとっては敵だが、お前にとっては友達だもんな。」

「・・・はい、。」

『オイ！そこ静かにしろ！』

小声で晴天と話していると、今度はその大声が、俺たち二人に向けて放たれた。

それを喰らった晴天はビシッ！と背筋を伸ばした。

「お、おっかないですね、。」

「・・・そうか？」

その直後、少し離れた場所にて、大勢の人の気配を感じた。間違いなく、これが帝の護衛とその本人か。

やがて、その集団は門を潜って、屋敷の中へとズカズカ立ち入っていく。

殆どの者は武装し、長槍や刀、弓など装備も様々だ。

それもそのはず、この集団を率いているのは、現在この国を治める帝であるから。

まあ、輝夜の噂を聞いて尚、あいつに求婚を申し込むとは、よほど自分に自信があるのか、はたまた後先考えない馬鹿なのか。

屋敷の者たちは、その瞬間が通りかかる瞬間に深く頭を下げている。

それも、膝を地につけて。

横を見ると、晴天も同じようなことをしていた。

更に、俺を見上げて『隼さんも！早く！』と言わんばかりの表情を見せる。

仕方なく、上に羽織っている黒いコートを整えて、膝を地面につけた。

この時代での礼儀なのなら、それは仕方がない。
なにせ、権力なんぞどうでもいい、というふうに生きてきたからな。
ここで、俺の方が長生きだから、という様に振る舞うのはお門違いだ。

無論、敵となるなら容赦はしないが。

『ハツハツハ、苦しゅうない』

頭を下げる屋敷の者に対して、別に構わないというように宥める帝の声が微かに聞こえる。

優しそうな声質だが、俺は何処か嫌なものを感じた。

考えすぎか、それとも、。

『殺れ、野槌。』

その瞬間！ゴクリと喉を物が通るような音が、その屋敷の庭に悍しく鳴った。

一斉に人々は音の方向を向く。

そこには、、巨大な大蛇が佇んでいた、。

次の瞬間、辺りは阿鼻叫喚の嵐に飲み込まれる。

声が掠れながらも、恐怖ゆえに叫び、地を這ってその場から逃げようと人々はもがく。

その刹那、巨大な大蛇が数人の兵士を呑み込んだ。

呑み込まれる瞬間、悲鳴は一切無く、まるで元々存在していなかったかのように、この世から消える。

間も無く、大蛇は人の集団へと狙いを定めて呑みにかかる。

『国を滅ぼすには、まずは一番上の奴からだ。帝が消えれば、国の民は慌てふためき、一気に協調性を失うだろう。』

屋敷の屋根の上から、二人の人影がその光景を見下す。

『……しかし、まだ邪魔をするか！黒野郎ツ!!』

大蛇は猛スピードで兵士へと迫り、口を大きく開いた。

「だ、誰か助けてくれエエエ!!」

呑まれる寸前、兵士は多少の涙を流しながら、少しでもこの世にしがみつこうように大声で叫んだ。

「ギュロロロロオオ!!」

大蛇は、絶好の餌を喰らう猛獣の如く、けたたましい唸り声を上げて、兵士へと食らいついた。

その瞬間!!

「好き勝手に暴れてんじゃあねえぞツ!!」

極夜・闇嵐!

呑まれかけた兵士の周りに、黒き暴風壁が展開された。

それと共に、一人の剣士が立ちはだかった。

『〜殿、私が彼の妨害をしてきます。十分程度なら、足止め出来ますよ。』

屋根の上から、一人が地面に飛び降りていった。

気配を出さず、更に隠れ潜みながら、

『よし、任せよう。・・・眼楽!』

二振りの刀を構えた剣士は、巨大な大蛇と相對する。

大蛇は軽く突進をあしらわれたことで、怒りと畏怖が混ざって少し後ずさる。

「根は臆病か。なら、一瞬で決めさせてもらおうツ!」

generate command

黒い服を纏った青年の周りに、数本の剣や槍などが具現化された。矛先は一斉に大蛇へ向き、

「・・・撃てッ!!」

全ての武器が同時に大蛇へと放たれた。

そして、それらが大蛇の目の前まで迫る、

刹那、大太刀が振られ、武器は全て叩き落とされた。

「ッ、！・・・眼楽アア!!!」

「申し訳ないですが、少し君を足止めしますッ!」

直後、両者の刀がぶつかり合った、!!

阿倍晴天の戦闘

突然そこに現れ人々を襲う大蛇の位置から、両者は徐々に離れながら刀をぶつけ合う。

もはや、二人の戦う場所から、大蛇の姿は見えない。

片方は赤く塗られた大太刀一本。

対してもう片方は、真つ黒に染まった大きな黒刀と、真紅に輝く刀の二刀流。

現在の戦況は、赤塗り刀を扱う剣士が少し押している状況だ。

「邪魔すんじゃないやねエ！今はテメエに構ってる暇なんか無いんだよツ！」

「残念ですが、僕は君を邪魔しなければならぬですよツ！」

眼楽は隼の左手に握られた真紅の刀を弾き、首筋を狙って刀を振るう。

が、それを隼はしゃがむように躲して、返しの太刀を放つ。

それに対して、真似をするように眼楽は躲し、背後へ向かって地を蹴って距離を取る。

その時、またしても大蛇の妖怪いる方向から、耳が詰まるような叫び声が上がった。

「ッ、！時間ねえから、容赦しねえぞツ!!」

generate command!!

瞬間、空間から光が現れ、一本の剣が顕現された！

『輝けッ！エクスカリバアアアアッ!!』

目が壊れる程の輝きを放ち、それと共に風を吹き荒らしながら、金色の聖剣が振り下ろされる。

斬撃すらも輝いて、正面に立つ眼楽目掛けて迫る。

その刹那、眼楽は力強く地を踏み、名刀”白塗”を構えた。

「その一撃、全力でお受けしますッ!!」

斬撃が衝突する直前、眼楽は身体を二転させて勢いをつけ、その刀を振り抜いた!

「奥義! 斬殺ノ冬ッ!!!」

いきなり人を飲み込んだ大きな蛇は、勢いを止めずに暴れ続けている。

なんで! 動きを止めてる筈なのに!

「止まって! お願いだから止まってよッ!」

何度も何度も霊力を使い、大蛇に術をかけた。

しかし、あの蛇は止まらない！

手を抜いてるわけでもないのに！

僕は、本気で術をかけているのにッ！

僕の妨害を全く気にする様子もなく、怯える人たち目掛けて大蛇は食らいつきにいつている。

幸い、あまり食べられた人は居ないみたいだけど、多分時間の問題だ、。

優しかった眼楽さんは、敵に回ってしまった、。

カツコよくて、頼りになる隼さんも、今は一緒に戦ってくれない、。

「僕が、僕がやらなきゃいけないんだッ！僕が、あいつを止めないと、倒さないといけないんだッ！」

その時、あの大蛇の動きが少し鈍った、。

何で、僕の力で止まったようには感じないのに、。

『皆の者！帝の為にッッ!!』

「オオオオオオオオ!!!」

僕が戸惑ったその一瞬、そう叫んだ大きな声が聞こえた。

追い討ちをかけるように、男の人たちの雄叫びが次々に上がる。

その直後、何かを槍で刺すような音や、ザシユツといった斬る音が次々に鳴った。

同じ時、あの大蛇の狂乱する声が鳴り響いた。

「え、な、一体何が、。」

そう思つて蛇の妖怪が暴れていた方向を見てみると、そこにはなんと、活気盛んに蛇と戦う大勢の兵士がいた。

その兵士たちは、まるで命を捨てるも惜しまないような戦いつぶりだった。

「・・・あ、あの人！」

その最前線には、少しだけ見覚えのある人がいた。

確か、僕が話しかける前に、隼さんにちよつかいかけてた、。

しかし次の瞬間、大蛇の反撃が始まった。

遠目から見てもその様子はわかるぐらい、酷い光景だった。

尻尾により殆どの人は吹っ飛ばされて、何人かは、食べられて、。

「う、うぐあアツ!!」

その時、僕の真横に、あの人々が飛ばされてきた。

しかも、地を吐いてる、！

「あ、あの、大丈夫で」

「ええいッ！、ハア、ハア、鬱陶しい！、。」

呼吸が乱れてるし、多分、尻尾払いを喰らつて、骨が折れてるんだ、。

このままじゃ、この人、死ぬ、！

「だ、駄目ですよ！あの、一旦引いて」

「黙れ!!」

肩に触れようとしたら、怒鳴られて振り払われた。
な、何で、本当に死んじゃうかもしれないのに!

「・・・いいか、子供、！」

「は、はいっ!」

こ、子供って、確かに子供かもしれないけど、。

「私は、武士だ、！力がなくとも、誇りがあるッ、！」

「ほ、誇り、？」

「そうだ、。それを守る為なら、命捨てるぐらい容易なことよ!」

「い、命って、！」

「さあ退け!まだあの妖怪は倒れていない!」

そう言っ、その人は再び立ち上がって、大蛇目掛けて走って行っ
た。

その、誇りを背負って、勇敢に、!!

僕も、命を捨てるだろうか、？

あんな風に、勇敢に戦えるだろうか、？

「いや、違う、！」

だろうか?じゃない。

そうしなきゃ駄目なんだ、!

戦わなきゃ、勇敢に、!!

そう思った時、僕はもう走り出していた。

勿論、行く先はあの大蛇だ！
負けない！あの人たちに負けない！

「あのッ!!」

「ッ、、！お前は、」

必死で走って、あの人に追いつく。

普段こういう動きをしないから、心臓が張り裂けそうだ、、！

「やりましょう！僕が動きを止めます！だから、その隙にみんなでトドメを！」

「お前、、。．．いいだろう！では五秒後、あいつの動きを止めろ！」

「はい!!!」

心の中で、間を知らせる秒針が動き始めた。
止まるまで、残り五秒前、

「さっきの力じゃ止められなかった、なら！」

四秒、、三秒、、

「簡単だ！さっきの倍、靈力を込めればいい!!」

二秒、、一秒、、

「零!!出力最大ッッ
!!!!!!」

僕はありつたけを込めて、あの大蛇に術をかけた。
その時僕は初めて、相手に対して霊力が伝わる、光線のようなものが見えた気がした。

次の瞬間、あの大蛇の動きは静止した。

それに、雄叫びもない。完璧に術がかかっている！

『今だ、叩けエエー！！！』

畳み掛けるように、兵士たちが一斉に大蛇へ襲い掛かった。

刀で斬り、槍で刺し、弓で射る。

たった数秒間で、大蛇はズタズタになった。

そして、喜びの声が巻き起こった。

手を上げて喜ぶ兵士も居れば、少し涙を流す兵士もいた。

恐らく、殺された兵士たちを思って、

でも、良かった、勝ったんだ、

ふと大蛇の遺体の方を見ると、あの人が何かをしている。

僕は、近づいて声をかけた。

「・・・勝てましたね、武士さん、。」

「おお、お前か。・・・そうだな。」

「・・・？何をしてるんですか？」

「なに、勇敢に戦い、命を落とした者たちへ、敬意を払っているだけだ。」

その時、その人の目から、涙が溢れたように見えた。

明らかに、敬意の感情だけじゃない、。

「あの、友人とか、いたんですか、？」

「・・・いや、戦場の、友だ、。」

こんなこと言ってるけど、どう考えても、

いや、

あまり首を突っ込むのは、野暮だつて隼さんは言いそうだ、。

「先に、戻ってますね！」

その人にそう伝えて、僕は屋敷の方へと歩き出した。

『馬鹿な奴らだ、まずはそいつから殺れ、野槌。』

次の瞬間、ゴクリという鈍い音が背後から聞こえた。
何かと思つて、後ろを振り向くと、

「・・・え。」

あの人がいない、、、しかも、何故かあの人が履いてた草履がある。

そして、あの大蛇が起きてる。

大蛇が起きている?!?!?

「ギュルルルロロロロオオオ!!!」

再びその大蛇は、口を大きく開けて、暴れ始めた。

阿倍晴天の覚悟

「何で！確かに倒した筈なのに!!」

再び大蛇は起き上がり、身体を振り回して暴れ狂う。

付けられた傷は、まるで存在しなかったように回復し、もう既に初期の状態と瓜二つだ。

僕は何度も何度も、停止の術をかけ続けた。

しかし、そんなのお構いなしにあいつは動く。

「そんな、別に霊力は弱めてないのにッ、。」

段々と、力が抜けていく。

睡眠薬を飲まされてるみたいなのに、どんどん目蓋が重く、

それに、なんだか、少しずつ視界が白く、。。。

「ギョルルララララアアア!!」

瞬間、大蛇の雄叫びで気がついた！

だけど、時すでに遅しだった、！

「ッ、!!ウグッ、。」

直後、僕は後ろに吹っ飛んだ。

同時に、お腹にとんでもない痛みが、！

やがて僕の身体は地面を転がり、何回転もしたところで止まった。

身体の何箇所にも、切ったような痛みを感じる。

明確だったのは腕の傷、かなり地面に出血している。

多分、地面を転がってる時に切ったんだ、。

「・・・だ、駄目だ、。早く、立たないと、。」

痛みを堪えながら、僕はその場で起き上がり、暴れる大蛇へと近づく。

微量の霊力を振り絞って、また何度も術をかける。

しかし、もう大蛇は、反応すらしない、。

次の瞬間、一気に僕の足が力を失った。

そのまま前に、地面に身体を打ち付けるように倒れる。

「・・・もう、本当に、駄目なのかな、？・・・ごめん、なさい、。父様、母様、。」

阿倍家。先の時代、最も有力であった陰陽師の名家である。

他の陰陽師は、安倍家を尊敬し、中にはその力を妬ましく思い嫌う者もいた。

それほどもでに、強大な力を持っていたのである。

しかし、数十年前から、その力が弱くなっていた。

世代が渡るにつれて霊力は落ち、少し前には、霊力を全く持たない子までもが生まれてしまったという。

まさにその、崖っぷちの状態であった頃。

安倍晴天が生まれた、。

彼は赤ん坊であった頃から、並の陰陽師など遥かに超える霊力を持っていた。

それも、彼の両親は殆ど霊力を持たないにも関わらず、である。

すぐさま、安倍家の者たちは、彼に陰陽師としての修行をさせるよう考える。

しかし、それを彼の父と母は拒絶した。

普通の子として育てたいと、抗議したのだった。

当然、安倍家はそれを許さなかった。

陰陽師としての安倍家が完全に消滅する、ということの意味するからである。

それからは毎日のように揉め事が起き、

日を重ねるごとに、晴天は親からの愛情が注がれなくなっていた。

そして、やがて決着へと話は近づく。

晴天は、安倍家の人に引き取られ、

彼の両親は、土地や地位、財産などを渡すことを条件に、安倍家と

縁を切れと言ひ渡される。

しかし勿論、彼の両親は納得しない。

その提案に、猛反発する。

そこで、阿倍家の者たちは、決め手となった最大の提案をしたのである。

『もし晴天が、日の本一の陰陽師になったら、彼と再会させ一緒に住めるようにすることを約束しよう。』

この提案に、渋々ではあるが彼の両親は乗り、この話は決着したのであった。

彼の両親は、阿倍家から渡された土地に移り住み、晴天の将来を祈り続けて生活をするようになる。

数年後、晴天に物心がついた頃。

既に彼は、一流の陰陽師と同等かそれ以上の力を身につけていた。

更に、同じ時期に、幼いながらも単独で妖怪退治を成功したのであった。

しかしながら、彼は一度も幸福の笑みを浮かべなかつた。

その理由は、

「・・・あの、僕のお父さんとお母さんは、？」

物心ついた頃、よくこれを世話係の者に問いかけていた。当然、世話係はその問いかけに上手く答えられなかつた。

しかし、いつまでも隠し通すわけにもいかない。

そしてやがて、阿倍家の者は彼にこう伝えた。

『晴天、お前は日の本一の陰陽師になりなさい。そうすれば、お前の両親と会えますから。』

阿倍家は嘘をついた。

昔、全く霊力を持たない晴天に呆れて、阿倍家からお前を捨てて出て行ったと。

しかし晴天は、両親を恨むことはしなかった。

ただ自分に霊力が無かったと信じ、その嘘の事実にはただけであつたのだつた。

それから、晴天は今まで以上に鍛錬に励んだ。

基礎の術や、実戦向けの術。

中には、危険な術式にも挑戦した。

幾度となく、身体を壊した。

全ては両親に認めてもらって、両親に会いたいから。

段々身体が重くなっていく。

もう、自分の重さで潰されそうなくらい、身体に重量を感じる。

僕、もう強くなれないのかな？

この屋敷にいる人すら助けられなくて、

日の本一になれずに、

父様と母様に、一生会えずに、。

でも、別にいいのかもしれない。

もう十分、僕は頑張ったと思う。

ただ、会えないのは、ちよつと寂しいけど、。

その瞬間！辺りに光の輝きと共に、凄まじき風が吹き荒れた！

その一瞬は、光と風で目も開けられなかった。

やがてそこにいる人全員が、焦りでざわざわと騒めき出す。

「っ、！今の、光は、！？」

僕はその時、直感でそれを感じ取った。

確証があるわけではないけど、確信はあった。

この風は、この光は、。

「隼、さん、！」

向こうで、隼さんが大技を決めたんだ。

それも、眼楽さんに対しての、。

前は、友人として、二人は語り合っていたのに、

その時僕は、とある言葉を思い出した。

それは、僕の修行に携わっていた、僕にとっての、師匠、

『いいか晴天。物事、全てを取れるわけではない。極限の場面にて、大切な何かを捨てる必要だってある。』

隼さんは、捨てたんだ、。

眼楽さんとどういう関係なのかは分からないけど、あの人との友としての関係を捨てて、

そう思った時、勝手に身体は起き上がっていた。

もう霊力なんかない筈なのに、不思議と力が湧いてくる。

「日の本一にはなれないかもしれないけど、少なくともあいつは倒す！」

捨てるんだ、その選択肢を選ぶ為に、！

「僕の命！燃やしてでも守るツ!!」

それは、過去に本棚を見た、。

禁忌の術式、。

「限界突破!! 霊裂疾走ツツ!!」

傷口から、更に血が噴き出る。

心臓が、今にも爆発しそうに鼓動する、！

だけど、！

耐えろ！耐えろ！死んでも耐えろ！

そして、僕の霊力が最大限に達した瞬間！！

「ツ！！弾け飛べツツ！！」

瞬間、大蛇の身体に稲妻が走る。

息つく間もなく、その身体に亀裂が入り、

『ギュロロオオオオオオオ、ゝ！！』

大蛇は断末魔を挙げ、弾け飛んだ、ゝ。

「……勝てたよ。」

同時に、僕は地面に崩れ落ちた、ゝ。

怒りの拳

急ぎ足で現場に戻ると、そこは酷い惨状だった。装備をボロボロにした兵士。あちこちに転がった人の残骸。だが、同時に妖怪の姿も見えない。

仮に討伐されていたとしても、その妖怪の残骸は必ず多少は残るだろう。

しかしどういいうわけか、かけらも残っていないかった。

「一体何が・・・ッ！晴天ッ!!」

血を流して地べたに倒れた晴天の姿が目にとまった。しかも、かなり重症だ、!!

「おい晴天！しっかりしろ！」

回復術・治癒ノ海!!

俺は晴天に急いで近寄り、回復術をかけた。少しずつ、晴天の傷が癒えていく。そして数秒後、晴天が目を開いた。

「ッ、！大丈夫か！」

「・・・隼、さん、？」

消え入りそうな声で、晴天は応答する。かなり弱っているが、命に別状は無さそうだ。

「あ、れ、？何で、？僕、禁忌の、術、を、。」

「喋るな晴天！話は後で幾らでも聞くから！」

辛そうに喋る晴天に対して、止めるように強く言う。

「取り敢えず今は休め。寝ちまっても良いから、」

「・・・いえ、大丈夫です、。これぐらいの痛み、。余裕、ですよ、。」

すると晴天は、ゆっくりと地面から起き上がった。

「お、おい！やめといた方が」

「心配しないで下さい、。何故か、わからないけど、。どんどん痛みがひいて、いくんですよ、。」

「ほ、本当か、？」

回復術で傷は治ったとしても、痛みが引くわけではない。

しかも、見る限りだとかかなりの重症だった筈だ。

常人ならとても我慢出来るような痛みじゃない。

・・・いや、常人では無かったな、こいつ。

「たくさんの人を、死なせちゃいました、。」

十数秒後、既に普通に喋れるようになった晴天が、周りを見ながらそう言った。

「・・・そうか。」

「・・・何も、責めたりしないんですか、？」

「ハア？責めるわけねえだろ。戦いもしなかった奴が、戦って勝った奴に文句を言える権利なんてあるか。」

とはいえ、この戦いで晴天は、かなりのショックを受けたんだろう。心なしか、目が虚だ。

「どうした？何か嫌なものでも見ちまったか？」

「・・・大丈夫です。」

人が目の前で死ぬ光景を見た時は、身体にかなりのショックが走る。

それは、敵味方関係なく、だ。

当然、味方の死を見た時の方が辛いが、

晴天にとって、このような戦いは初めてだったのだろう。

「・・・さー隼さん。傷を負ってる人の治療をしないと！」

「そうだな、。」

晴天は、傷を負って倒れた兵士に向かって行った。

続けて俺も、その後を追っていく。

その時だった。

『貴様ら！事が済んだのなら、早急に配列を戻せ！時間の無駄だ！』

背後から、そんな高い声が辺りに響いた。

それに反応して、俺や晴天、他の兵士もそちらへ向く。

『し、しかし帝よ、。まだ沢山傷ついた兵士が』

『知ったことかッ！これ以上時間をかけるな！自分の傷は自分で対処すれば良いだろう！』

そんな帝と一人の兵士の会話を聞いた時、俺の中で何かが変わった。

前向きじゃない。当然、後ろ向きの変化だ。

「は、隼さん、。？」

誰かの声が聞こえたが、内容は全く頭に入らない。

次の瞬間、俺は無意識で歩み始めていた。

その方向は、帝のいる場所、。

『いいからさっさと準備をしろ！全く、使えない兵士どもめ。』

『し、しかし、』

『何？反抗するつもりか貴様！』

会話を聞けば聞くほど、より感情が沸騰していく。

また無意識に、今度は拳を強く握っていた。

『・・・も、申し訳ありません、。』

『フンッ！まあいい、さあ早く準備をしろ！我に恥をかかせるつもりか!!』

その次の瞬間、帝の顔面が歪んだ。

そのままその勢いの方向へ、帝は吹っ飛ぶ。

「う、うぐウウ、、。」

帝は、声にならない呻き声を上げた。

頬を押さえて、地べたに転がり悶えている。

直後、沢山の兵士たちの『帝!!』といった呼び声が屋敷に鳴り響いた。

近くにいた兵士は、急いで帝の治療へ向かう。

がしかし、その向かおうとした兵士たちの道が、弾丸によって遮られた。

同時に、帝は左手で胸ぐらを掴まれて、呻き声を上げながら宙に浮かんだ。

「ぎ、貴様ア、、。」

苦しみなながらも、帝はそう言った。

帝の顔面は、涙や頬の腫れによって歪みまくっている。

「・・・テメエ、さつき何てほざきやがった?？」

「ウツ、!!」

胸ぐらを握る力が更に強まって、帝は呻き声を上げる。

しかしその状況で、帝を助けようとするものは居なかった。

「兵士は、テメエの為に戦ったんじゃねえのかよ。テメエの為に傷を負ったんじゃねえのかよッ！」

「こ、こんな、真似、ツ!!」

「それが当のお前は何だア? 知ったことじゃない? 時間の無駄?」

再び、そいつの右手に力が込められる。

息つく間も無くその拳は放たれて、再び帝の顔面に命中する。

今度は、更に遠くまで吹っ飛んだ。

「ならテメエが妖怪と戦えツ! 自分の身は自分で護れツ! それが出来ないのに文句を言う資格なんてあるかツ!」

また拳を握り、帝の吹っ飛んだ方向へと歩み寄る。

しかし、それは一人の少年の手によって止められた。

「隼さん! 落ち着いて下さい!」

「っ、!晴天、。」

目の前に、手を広げた晴天が立ちはだかる。

その表情は、今にも泣き出してしまいそうだった。

「駄目! このままじゃ、帝が死んじゃいます! そうなったら、あの人の為に戦って死んだ人の気持ちはどうなるんですか!」

必死で晴天は俺に訴えかける。

が、正直言つてその言葉はしっくりこなかった。

「・・・晴天。なら言わせてもらうが、自分が命をかけて護った人が、あんなゴミ屑だったと知ったら、一体そいつは何を思うだろうな?」

「そ、それは、」

「・・・わかった晴天。もう手は出さない。だが、二度と奴の為の依頼を受けるつもりも無い。」

「は、隼さん、。」

そう言い放って、俺は屋敷の門へと向かった。

勿論さつき言った通り、この依頼は放棄する。

今回の話が公になれば、悪評は増えるだろうし、依頼者数も減ることになるだろう。

だけど、あんな奴に協力する依頼を受けるよりは1億倍マシだ。

「じゃあな晴天。また会えたらいいな。」

周りから見たら、ただの我儘に見えたかもしれないし、人に暴力を振るう乱暴者にも見えたかもしれない。

だけど、そんなものどうでもいい。

ただ、さつきとその空間から出たかった。

そう思いながら、俺は店への帰路を歩んだ。

月光が照らす夜

月光が辺りを光で照らす。雲一つない空。様々な種類の鳥が囀り、四方八方から虫がさざめく。

自然の音以外は何もなく、ただただ静かな美しき山。隣には、町の甘味処で入手した団子。

俺はこの山に独り、開けた場所にて月を眺めていた、

「あら、こんなところで何をしているのかしら？」

背後から声がした。

その声の主が誰かは、それを聞いてすぐに分かった。しかし、何故か振り向く気になれなかった。

「何で無視するのよ。……まあいいわ。あ、このお団子貰っていい？」
「……会って直ぐにそれかよ、輝夜。」

俺の隣に、輝夜は座って団子を食べ始めた。
引き続き俺は、月を眺め続ける。

「……気にならないの？帝を私がどうしたのか。」

「まあ、何となく予想がつくからな。どうせお前のことだし、何かしらで脅して、追い返したんだろうよ。」

「……貴方、私を何だと思ってるのよ。」

輝夜は目を細めて、こちらを睨みつけてくる。
が、そんななお構いなしに、次の団子へ手を出した。

「ていうか、貴方帝に何したの？あの人、顔がボコボコだったんだけど。」

「・・・簡単に言えば、ムカついて殴りつけた。」

それを聞いた輝夜に、少し引いたような顔をされた。

「お前だけにはそういう顔されたくないんだけど。」

「え、何で？」

「ちよっと前までのお前の行動を見返してみろ。俺以上に鬼畜じゃねえか。」

「そうかしら？寧ろ良対応だと思うのだけど。」

そう言って、また一本団子を手に取る。

「なあ、輝夜。」

「ん、何？」

団子が全てなくなり、より一層辺りが寒くなった頃。
俺は静かな声で輝夜に聞いた。

「月からの迎えって、結局いつなんだ？」

「あと、二週間後よ。」

輝夜は少し間を開けて、落ち着いた声でそう言った。
俺はその声に、どこか躊躇いを感じた。

「……本当は、何も言わずに帰ろうかと思ってたの。」

「酷いな、それされたら落ち込むぜ？俺。」

「言っておくけど、私月では大罪人よ？多分だけど、万全の対策を取ってくるわ。それこそ、あなたの対策もね？」

「それ、お前が帰るのを拒否した場合だろ？……ってことは、逆らうのか？」

そう聞くと、輝夜は「さあね」と言った素振りを見せる。

「……貴方をあまり巻き込みたくないもの。無断で帰れば、貴方が落ち込むだけで済むでしょ？」

「……」

次の瞬間、輝夜はその場から立ち上がった。

「それじゃあ、元気だね。」

そして、輝夜はそこから立ち去ろうとした。
が、

「何言ってるんだお前。」

直後、輝夜はピタツと足を止めた。

「何？俺が落ち込むだけって。俺そういうの嫌いなんだけど。」

「・・・隼、言ったでしょ？相手は万全の対策をしてくるって。悪いけど、貴方が敵う相手じゃ、」

「お前が決めてどうすんのさ。」

俺は地面から立ち上がり、輝夜のところへと足を進めた。

そして、輝夜との距離が人1人分程度となる。

「帝はお前が帰るのを阻止しようとする。だから多分だけど、俺もそれに召集されることになると思う。」

「・・・」

「もうそうになったら、絶対断ろうと思ってた。・・・だけどな！」

俺はもう一步、距離を詰めた。

もう、殆ど二人の距離はない。

「当のお前が、随分と言ってくれたじゃねえか。敵わねえだの、役に立たないだよオ！」

「・・・や、役に立たないなんて言っていないわよ！」

「そうだったけ？まあ兎に角！そこまで言われちゃ黙ってられねえな！だから見せてやるよ、俺の本気ってやつをな！」

言っていて、すごい恥ずかしい気分だ。

普段なら、絶対こんなこと言っていないし、もう二度と言いたくない。だけど、発言にはよりインパクトがないとな。

「・・・死ぬかもしれないわよ？」

「上等。」

「死よりもっと酷い結末かもしれないわよ？」

「上等だって言ってるんだろ。」

「何ですよ！別に放っておけばいいじゃない！」

「・・・ここまで言われて、放っておくわけ無いだろ。それに、お前は戦うんだろ？なら俺も戦うさ。」

すると、輝夜は数秒目を瞑ったあと、
直ぐに笑顔でこう言った。

「・・・分かったわ。・・・じゃあ、せめて足手纏いにならないように
！」

「おいおい、まだ言うかこの生意気小娘。」

「小娘って、別に貴方と年齢変わらないでしょ！」

そのあとは、また暫くそこで月見を楽しんだ。
まだ話していなかった昔話をしながら、

そこから三つほど山を越えた、その奥地にて、

『失敗したか、。』

「申し訳ない、私の力不足です。」

一人の男と、傷を負った青年が会話を交わす。

『眼楽、いや、貴様の力不足ではない。現に野槌を打ち倒したのは、あの陰陽師のガキだ。』

「・・・今一度鍛錬を積み、次こそは咲風隼を、基帝を」

『いや、その必要はない。』

「えっ、？では、また新たな刺客を？」

『いいや、それもしない。あの男は邪魔だが、案外こちらが手を下さずとも、別の誰かが滅ぼす気がしてな。』

そう言つて、男は夜空に不敵な笑みを浮かべた。

その日、月面、地球に向かう宇宙船の前にて、

「八意殿、こちらを。」

一人の者が、八意永琳へあるものを差し出した。

「何、これ？」

それは、一台の鉄の兵器。

持ち手にグリップが巻かれ、その先端には吸音材のようなものが、

「弓よりも速く、更に殺傷力も上の兵器です。吸音材をつけているため、音もしません。」

「そう、でもいいわ。私はこれを使うから。」

永琳の手には、銀色の弓が握られている。

「そうですか・・・わかりました。では、出発日に、」
「ええ。」

そいつは、そう言って永琳に背を向け、その場から去った。
その時、そいつは永琳に隠れてニヤリと笑った。

決戦前日

一週間と数日が過ぎ、遂に明日、月から輝夜の迎えが地球にやってくる。

その日、俺はとある小さな村にある一軒の民家に訪れていた。

今現在は、その家の中の小さな部屋にて、布団に寝ている少年と顔を合わせている。

「よう、結局また直ぐに会ったな。・・・体調はどうだ？晴天。」
「そうですね。もう体調は良くなってますよ。」

そこで俺は、晴天から彼の生い立ちの全てを聞いた。
彼の生まれから、この状況に至るまでの経緯を。

今晴天が住むこの家は、阿倍家の家ではない。
晴天から話を聞く限りでは、本家は大きな都に存在するという。

では何故、晴天はこの家にて休息をとっているのか？

「・・・捨てたんだな、靈力を。」

「・・・はい、それが最後の条件でしたから、。でも、全く後悔はしていませんよ。だって、」

直後、廊下と部屋を遮る薄い障子が開かれた。
そこには、一人の女性が立っている。

「どうも、お邪魔してます。」

俺はその人に向かって、軽く会釈をする。

「・・・あ、ああ！いらつしやい！」

一瞬の沈黙の後、その女性は慌てて返してくれた。

「つて晴天！お客様がいるなら先に言つてよ！」

「ちやんと言つたよ！なんで忘れてるのさ母さん！」

どうやら、この人が晴天の、少し前まで離れ離れだった母親か、。

晴天は先日騒動にて、帝を守って勇敢に妖怪を倒したことにより、その力を権力者たちに認められた。

”最強の陰陽師”と称する人も少なくなかったらしい。

しかし、晴天はその時の戦闘にて、大きな欠陥を負ってしまった。

原因は野槌に対して使った最後の術式

『霊裂疾走』

その術式は、阿倍家の禁忌とされる術式であり、全てを破壊する程の一撃を放てる代償として、かなりの霊力を消耗するらしい。

そしてその霊力は、今現在では取り戻すことが出来ない、とか。

そのことを最も早く理解した晴天は、阿倍家の者へと強気な姿勢でこう言った。

『僕は先日の戦いで、十分な力量の信頼を得た。最強の陰陽師とも称されている。だから、僕の願いを聞き入れて欲しい。』

そこで晴天は、まさに彼にとっての最大の願い。

両親と再会し、一緒に住みたい、という話を持ちかけたのだった。

まあ、阿倍家の人間は誤魔化すなりしてその話を揉み消そうとした訳だが、

その時、一人の人間が阿倍家を訪れ、晴天の加勢をしたそうだ。その人間は、あの戦闘にて晴天に助けられた、帝の側近だったらしい。

「その後は、どんどん話が進みました。帝側の人間に来られてしまったては、追り返す訳にもいかなかったみたいで。」

再び二人になった部屋で、晴天はその時のことについて語る。

「ま、名家ってのは、地位を大切にするからな。帝の側近に反抗したとなれば、その家の地位は真っ逆さまだ。」

そして、無事その願いを受け入れてもらえた訳だが、
しかし阿倍家は最後に、一つだけ条件を提示した。
その内容が、

「成る程、この先で陰陽師と関わりを持たぬように、靈力を捨てさせてたってわけか。」

「・・・でも、それは直ぐに受け入れられました。だって、両親と再会する為に、僕は鍛錬を積んだんですから。」

そう話す晴天の顔は、初めて出会った時よりも、遙かに明るい顔をしていた。

「だから、僕はもう阿倍晴天じゃありません。これからは、雨矢晴天として生きていきます。」

雨矢（あまや）、晴天の両親の父親の苗字らしい。

「……って、あんまり胸張って言うことじゃないですかね？」

苦笑いをしながら、晴天はそう言う。

「晴天、それがお前の選択なんだろう？、胸張れなくてどうすんのさ。」

「……そうですよね！なら、とことん胸を張っていきます！」

その時の晴天の顔は、今日で一番の清々しさを見せていた。

「おっと、そろそろ帰らねえと。じゃあな、晴天。」

太陽が、丁度真上に来たあたりの時間で、俺は晴天にそう告げた。
晴天は少し寂しそうな顔をする。

「まあ、また直ぐ来るさ。それまでに、身体完治させとけよ？」
「……分かってますよ。では、また今度に！」

そう言い残して、俺は障子を開け、その部屋から出た。
そのまま廊下を歩いて、玄関口まで辿り着く。

そこで、晴天の母と出くわした。

「あ、お帰りですか？今日はありがとうございます。・・・それと、」

その次の瞬間、晴天の母は深く頭を下げた。

「咲風隼さん！晴天がお世話になりました、！！」

「ちよ、！やめてくれよそういうのは。」

詰まるような口調でそう言われたので、俺は少し動揺する。

「こうして、晴天と暮らせているのは、貴方のおかげだと息子は言っていました。一体なんと御礼をしたらいいか、！！」

「・・・まあ、なんだ、これから先、晴天と幸せに暮らしてやってくれ。御礼は、それでいいさ。」

「隼さん、。本当にありがとう、！！」

そう言つて、その人はもう一度頭を下げた。

その気持ちをしっかりと受け取り、俺は雨矢家を後にした。

また直ぐ来るさ、か、。

今はなんとも言えないけど、せめて祈るぐらいはしておこうかな、明日、無事であることを、

その夜は、俺、紫、藍の三人で、机を囲んで食事を取った。
俺が適当に用意した、なんの豪華さもない、簡素な食事だ、。
その空間には、あまり良いとは言えない空気が流れる。

そして、食事が済んだ頃、

「ご馳走様、さて、準備するかな。」
「待つて。」

居間から出ようとした時、紫に呼び止められた。
振り向くと、紫は強張った顔つきをしていた。
それは、藍も同じだった。

「……ねえ、本当に加勢しなくていいの?」

紫たちには、明日のことは事前に話してある。
それに加え、その戦いに紫たちは参加しないでくれ、と。

「ああ、これはお前と出会う更に過去との戦いだ。お前らを巻き込む
訳にはいかねえよ。」

「……分かったわ。ただし!絶対に無事で帰ってきなさいよ!貴方は
私の部下なんだから。」

「クハッ、いつからだよ。でもまあ、無事で帰ってくるさ。」

そう言うと、紫は笑みを浮かべて何も言わなかった。

藍も、同様に、

それを背に、俺は物置へ向かい、明日の準備を始めた。

竹取物語・戦 其ノ一

決戦の日、真夜中、

屋敷の周りは武装した兵士が囲い、幾つもの小さい光が辺りを薄く照らしている。

月は満月、暗闇の夜空に、妖しい光を纏っている。

緊迫した空気の中で、そこにいる人皆がその時を待った。

『お、オイ！何だあれは!?!』

次の瞬間、一人の兵士が、月の方から一点の人影を見つける。

兵士の叫び声と共に、人々は一斉にその人影を見る。

すると直後、またしても一人の人影。

更に重なるように、人影の数は増えていく。

『ひ、ヒッ！ど、どうなってんだよ!!』

『怯むな！ぜ、全軍構えろッ!!』

兵士たちは、怯えながらも武器をその方向へと向ける。

しかしながら、当然その人影は止まることはなく、徐々にこちら側へと近づいてくる。

『……く、くるなら来い！相手して、や、』

次の瞬間、人が地面にゆっくりと倒れた。

誰に攻撃されたわけでもなく、ただ勝手に自分から気絶するよう
に、

『な、ど、どうした！早くこいつ、を、』

その場からその兵士を連れていこうとした一人が、またしても気絶
し倒れた。

続けて、バタツ バタツ、つと、

息つく間もなく、兵士たちは次々とその場に倒れていく。

その様子を少し離れた場所から見ていた帝は、

「へ、兵士共、！どうしたというのだ！は、早く起きろ!!」

顔を青くして、必死に兵士たちへ呼びかける。

その側近の者たちも同様に。

しかし、次の瞬間、帝の直ぐ隣に位置していた一人の部下が気絶し
た。

「ひ、ヒイツ!! や、やめ、」

懇願するや否や、続けて帝は気絶した。

全軍戦闘不能、かぐや姫護衛部隊、全滅、

帝が配置した兵士たちは、怪我なく無事に気絶した。

これで、私が素直にあちらの要求を受け入れて、そうすれば終わり、

私、蓬萊山輝夜は今現在、月の使者の軍と対峙している。

護衛はもう一人も居ない。

そして、今私のそばに、咲風隼の姿もない。

『近くにいると怪しまれるだろうし、少し離れたところに俺は構えておくとするよ。』

隼はそう言った。

多分、隼は私を裏切ることはない。

もし私が月の使者と交戦することになったら、直ぐにそこから加勢してくれる。

けど、そうなれば無傷では済まない。

もし今私の隣に彼が居たなら、私のこの葛藤に気付いて、何か言葉をくれるだろう。

でも今は、私一人。

彼は見ていない。

この前、戦うって話をしたけど、

そうならば、私の身勝手に一人の人を傷つけることに、

「……輝夜。」

瞬間、目の前で女性の声がした。

その声は、私がよく知っている声。

「永琳、。」

永琳と目が合った。

とても真剣な眼差しをしている。

数秒間の沈黙の後、永琳はゆっくりと口を開いた。

「……輝夜。私は、十分な覚悟が出来てるわよ？」

その時、永琳の右手に握られた銀色の弓が、その言葉に反応したように、月の光を反射させ煌めいた。

……そうね、隼は自分から加勢してやるって言ったんだもの。

私が月へ素直に応じたら、彼の意思を裏切らせることになる。

だからその全ての思いを込めて、永琳に言い放った。

「……永琳、私は月に帰りたくないわ。もうあの場所にはうんざりよ。」

「……ふふっ、承知したわ、輝夜。」

次の瞬間、永琳は弓の弦を引き、背後に迫った月の使者へと矢を放った！

その矢は一人の人影を射抜き、そいつは血を流して地に落ちる。

「月人たち、よく聞きなさい！ 姫様は月に帰ることを拒絶したわ、よって、」

再び永琳は弓を構えて、月の使者へと矢を放った。

「邪魔する者は、皆殺しよ。」

放たれた矢は月の使者へ一直線に進み、また一人の人影を射抜こうとする。

その瞬間、ガキン！と鉄同士を打ち合わせたような音が鳴り響く。と同時に月の使者の周りの影が晴れ、その姿を現した。

その姿、まさに宇宙戦艦。

鉄の装甲、月をも隠す巨大さ、幾つもの武装。

そしてその戦艦の周りには、大人数の月の兵士が取り囲んでいる。

『八意永琳ッ!!』

直後、低い男の声が辺りに響く。

戦艦の方を見ると、その鉄板の装甲の上に、一人と男だ立っている。その顔は、激しい怒りに包まれていた。

「あら、そんなに堂々と身体を晒しているのかしら？ 名前も知らない誰かさん？」

そう言われたその男は、更に表情を怒りで覆う。

「減らず口を、!! 大罪人を助けたとすれば貴様も大罪人! 今ここで捕え処刑してくれるツ!!」

その男の命令で、一斉に矢が放たれる。

その矢の軌道は、私と永琳纏めて射殺しに放たれている。

だけど、、所詮はただの強化された矢ね。

私は適当にあしらうように弾幕を放ち、矢を全て跳ね除けた。

「いい? 永琳。本気でいくわよ。」

「ええ、勿論。」

瞬間、私と永琳は同時に、月の使者の戦艦目掛けて飛び上がった。

「ツ!! 小癩なアア!! 殺せ兵士共よツツ!!」

戦艦の方へと飛ぶ私達の前に、何十人もの月人が立ち塞がる。

その兵士たちは、男の掛け声に合わせて弓の弦を引いた。

「ツ、、! 輝夜、一旦下がるわよ!」

初っ端から動いた大量の月人を前にして、永琳は一旦引こうと提案してきた。

「だけど、」

「いいえ、永琳。その必要は無いわよ。」

その刹那、私と永琳の間の空間を、黒い影がすり抜けていく。

と、同時に、

「・・・generate command」

月人は次々に呻き声を上げて、血を流して落ちていった。

永琳はその時、二つの光景を見た。

一つ目は、心臓部に剣や槍が刺さって落ちていく月の兵士たち。

もう一つは、

「悪い輝夜、少し遅れた。・・・それと、久しぶりだな、永琳。」

「隼、？」

遙か昔の友人と、再会した。

そいつは直ぐさま敵の方へ向き、二本の刀を引き抜いた。

「さあ、始めようか、命懸けの戦を、」

竹取物語・戦 其ノ二

永琳と輝夜の背後から、一気に速度をつけて二人を抜き去り、そのまま数人の月人に武器の嵐を浴びせる。

距離が空いている奴にはガードされてしまうが、至近距離なら不意打ちで十分撃ち落とせる。

「悪い輝夜、少し遅れた。．．．それと、久しぶりだな、永琳。」

直後、振り返って二人にそう伝えた。

「は、隼、？」

輝夜は少し安心したような顔をし、対して永琳は驚きの表情と共に詰まるような声で俺に語りかけた。

「元気だったか？ま、その様子をみりやあ元気ってことだな。」

「え、ええ、元気だけど、．．．そう、無事だったのね。」

そこで永琳は少し安堵した。

だが、今はそういう場合じゃねえ、

「さて、折角の再会なんだけど、まあそういう状況じゃねえ訳だなッ！」

瞬間、何十本もの矢が俺たちを襲う。

その数、密度、躲すことなど容易ではない。

ならば、！！

「躲す必要なんか無エ、真ン中に大穴ブチ抜きやあいだけだッ！」

「ええ隼！その作戦、乗ったわ！」

俺は黒刀で斬撃を放ち、輝夜は高密度の弾幕を放つ。

その攻撃により矢は次々と弾かれて、三人の前にはあの戦艦への道が開かれた。

しかし、月人たちはまたしても矢を構える。
が、

「見逃すかよッ!!」

generate command!!

刹那、俺は大盾を具現化し、足下に踏み台を一瞬展開！

「二人とも！周りは任せたッ！」

そう叫ぶと、二人は小さく頷いた。

すかさずその盾を蹴り、矢が困うその道筋を駆け抜ける。

そして、

「さあテメエも出てこいよッ!!」

追い討ちとして放たれていた数本の矢を躲し、甲板にて司令を出していた男目掛けて二振りの刀を振るった。

「くッ！グアッ!!」

その男は鉄のパイプのようなもので塞いでくるが、所詮は想定外の奇襲攻撃をその場しのぎで乗り切るための防御。

俺は甲板に立ち、男は背後へ勢いよく吹っ飛んだ。

「くっ、な、何者だ貴様ツ、!!」

「・・・咲風隼。ただのしがない旅人だ。」

直後、視界ギリギリの位置から、月人が矢を放とうとしているのが見えた。

それを見逃すことなく、即座に反応して司令の男に向かって走る。

「こうすれば、下手に矢は撃てねえだろうよ!」

瞬間、再び刀を男の首を狙って振るう。
が、

「・・・フツ、馬鹿め。」

「!!」

突然、甲板に小さな穴が開き、そこから網のようなものが発射される。

その網は俺の周りで展開され、四方八方を囲う。

「間抜けめ!こんな安易に捕らえられるとはな!」

「チツ!燃えろ火神!!」

真紅の刀を赤く燃やし、その網を断ち切る。
幸い、大した強度は無かった。

「フン、抜けたか。だがいつまで持つかな?」

「……その様子だと、まだまだ芸を隠してる訳だ。それなら、！」

瞬間、俺は周囲に大量の剣や槍などの武器を展開！

逃げ場を残さぬよう、男に向かって放った！

が、しかし、男はニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

「フハハハッ！タイムアップだ咲風隼ッツ!!!」

直後、

破裂音と共に、俺の肩に激痛が走った、。

突然激痛と共に、肩から血が流れ始めた。

更に、急に身体のあらゆる箇所が重くなってきた、。

一体何なんだ、？この激痛と衝撃は、。耳に響いた悍しい爆音は、。

そして、この絶望と恐怖の感情は何処から巻き起こってる、??

次に、段々と息が荒くなってきた、。

震えが止まらない、。

不思議と変な汗までかいている、。

だがそんなもの全く気にならなかった。今俺が注意を置いているものはたった一つ。

間違いないッ、あれは、あの武器は、!!

「さあ！一斉に撃てッ!!」

「ッ、！」

無意識で正面に盾を展開し、その攻撃の嵐から身を守る。

しかし音までは防ぎきれない・・・攻撃を受け続けるごとに、徐々に鼓膜がおかしくなっていく、。

「・・・一旦止める！」

数秒後、男の指令によって攻撃が止まる。

俺にとっては数十分にも思えたその短い時間、。

あいつらが使い始めた武器、あれは銃器だ、間違いない、!!

直視しなくても分かる、分かってしまう、!!

種類は違えど、あれは確実に銃器だッ、!!

俺の大嫌いなものであり、一生好むことがないであろうトラウマ、。

「・・・おい貴様、何故その盾に箆るだけなんだ？」

不味い、このままでは、向こうの思う壺になってしまう、。

こうなれば、克服するしかないッ!!

「こ、箆るだけなんて言っていないぜ、？さ、さあ、第二ラウンドだ、。」

俺はゆつくりと盾を退かして、それらと相對する。

恐る恐るで見える限りでは、武装した月人は八人程度。

しかし、

「・・・あれ、何で、？・・・少しだけ、震えが収まってきている、？」

あれは確かに銃器だ。見るのは勿論、音でさえ恐怖を覚えてしま
う、。

だけど、抑えられる！動ける！戦える！

理由は直ぐに分かった。

それは銃器の形状だ。

あの時の銃と形がまるで違う。

何故かはわからないが、銃口の部分が長くないし、銃全体が丸みを帯びている。

そういう銃の種類なのか？

まあいい、要するに形状に恐怖は無い！

本当に不幸中の幸いだ!!

「しゃアアツツ!!それなら一気に畳み掛けるツ!!」

一段解放・限解ツツ!!!

瞬間、銃器を持った全て月人に対して、数十本の武器を展開した！
月人は対抗して銃を連射するが、全て剣や槍に命中し落ちていく！

これで、あの野郎への道は開けたツ!!

「な、何なんだその力は!?」

その様子に動揺して、男はその場で腰を抜かして尻もちをつく。
当然！絶対にその隙を見逃さないツ!!

「今度こそ喰らえエ!!」

「ヒイツ!や、やめろオオーーー!!!」

その一瞬、まさに刀が命中して首を跳ねようとしたその時、

男は俺に向かって何かを向けた、

「……へ、へえ?」

次の瞬間、二本の刀が甲板に落ちた。
ガチャンガチャン、と音を立ててその上を転がっていく。

「……な、何のつもり、だ、?」

俺はその場で立ちすくんでいた。
あれを身の前にしてしまったからだ。

「お、おい、お前、何で、それ、を、。」

その男の手には、一丁の銃が握られている。
その銃は、

あの時の銃と、そっくりだった、

「な、何か知らんが、丁度いい！さあ、邪魔者は死ね!!」

これ、死ぬ、。

ほんとに、全く身体が動かない。
能力も使えない、完全に、詰んで、

直後、男は引き金を引いた。
続くように、周りの月人たちも銃器を連射した。

その刹那、俺の目の前に一人の人影が現れ、その射線を遮ってきた。

そいつは妙な格好で、綺麗な髪をしていて、。

俺のよく知る、人物だった、、

「ツ!!永琳ツツ!!
!!!」

直後、彼女は俺を掴んで、その甲板から飛び降りた。
そこで、ようやく意識が戻ってきた、。

竹取物語・戦 其ノ三

甲板から飛び降りた永琳と俺は、地面に叩きつけられてその場にころがる。

銃で撃たれた傷が擦り、激烈な痛みが全身を駆け巡った。

しかし幸運にも月人たちの死角に入った為、追撃が来ることはなかった。

「痛ッ、・・・お、おい、永琳、！しっかりとしろ、！！」

あまり力を込めずに、俺を庇ってくれた永琳を揺さぶって呼びかける。

その直後、永琳が掠れた声で呟いた。

「・・・ふっ、初めて会った、時、から、成長して、ないわね、？」

「・・・え、永琳、。」

が、次の瞬間、永琳は痛みにも悶える呻き声を出す。

「ッ！ま、待ってろ！すぐ、回復させっから、」

俺は自分の出血痕を手で止血しながら、永琳に手を翳して傷を癒そうとした。

しかしその手を、突然永琳は押し除けた。

「ちよ、な、何やってんだよー！」

「・・・私は、いいから、貴方の傷を、治しなさい、。」

「ハ、ハア、！？」

確かに見る限りでは、奇跡的に弾痕は急所を外れている。ただ！出血量次第では死ぬ可能性だつて!!

「お、おい、いいから手を離せ!」

「・・・嫌よ、まだ、貴方は戦わなくちゃ、ならないのよ、?無駄な体力を、消費することなんて、ないわ、。」

「・・・え、永琳、。」

次の瞬間、ドゴオオン!!と辺りに爆発音が響き渡った。

恐らく、輝夜が月人たちと交戦を、

「隼、恐れているのね、?」

凶星だった、

兵士たちが装備していた銃は、少し形状が変わっていた為恐怖心を抑えられた。

しかし、最後に向けられたアレは、

「・・・抑えてんだよ、でも抑えようとしても、震えが、止まんねえんだ、。」

永琳を回復させようと翳した時も、今こうして掴まれている時も、ひたすらに俺の身体は震えていた。

何度自分を鼓舞しても、どうやっても抑えることが出来なかった。

「俺が、このまま、戦いに戻っても、ただ足手まといになるんじゃない、」

また誰かを守れずに、過去のトラウマに怯えて足手まといになることが、とにかく怖かった、。

輝夜には、一緒に戦うって宣言したのに、

ただ自分の都合で逃げるなんて、最低じゃないか、

しかし直後、永琳は優しく微笑み、左手に握られていた弓を差し出してきた。

「ほら、いつかの約束、。」

それは昔、俺が別れ際に永琳に渡した銀色の弓。

「・・・永琳、今の俺に、それを受け取る資格なんて、」

俺はその弓を受け取することを拒んだ。

が、永琳はそれを引つ込めることなく、俺に差し出し続ける。

「隼、資格の有無なんて、関係ないわ、。ただ、多分この弓は、今の貴方を、支えてくれる。だから、受け取って、？」

数秒の間、沈黙が流れた。

まるで時の流れる速度が落ちたかのように、その一瞬を長いものを感じた、。

「・・・ふふつ、大丈夫よ。行って、また貴方の、全力で戦う、姿を見せて？」

「・・・永琳、ありがとう、。」

俺はそれを、静かに受け取った。

次会った時返してくれと 約束したあの光景が蘇る。

「それと、もう一つ、。戦いが終わったら、もう一度、私に返して、

「？」
「・・・ああ、分かった!!」

永琳の言葉を背に、
次の瞬間、俺は思いつきり地面を蹴って走り出した。

禍々しく輝く月の光、その方向から降り注がれる矢の嵐。
月人の兵たちと輝夜が交戦しているその場所に、猛スピードで突き進む。

次の瞬間、輝夜の姿を確認した。

「ツ！輝夜アアアーーー!!!」

瞬間！銀色の弓を構えて、輝夜に向かって叫んだ。
同時に、俺の方向にも矢の嵐が襲いかかる！

「邪魔だ、退けツツ!!」

俺は銀色の弓の弦を引き、十分に矢を引きつける。
そして矢が、命中寸前までできた瞬間!

「・・・元は俺の弓、俺が一番使いこなせる筈だツ!」

一直線に狙いを定めて、弦を離した。

その瞬間、弓から銀色に輝く光線のような矢が放たれた!

その矢は風を纏い、矢の嵐さえも消し飛ばしながら月人の兵士たちへと突き進む。

その矢に気付いた月人たちは、一斉にその場を退こうとするが、
・・・時すでに遅し、逆に一斉に退いたのが仇となり、数人を一撃で貫いた。

それを確認した俺は、そのまま地を走り輝夜のもとへと移動する。

「隼、遅いわよ!」

「・・・すまない、輝夜。その、永琳が、。」

「人の心配してる場合? ほら、まだまだ来るわよ!」

その刹那、俺と輝夜の間矢が放たれた。

戦艦の方を見ると、まだまだ月人が大人数、

「ツ、!!」

更には、数人が銃を持っていた。

形状的にまだ我慢できるが、それでも少し震える、

恐怖は心に有り続ける、だけど克服するしかねエ、

無理やりにでも、押さえつけるしかツ、!!!

『兵士たちよ！攻撃はするなッ！』

直後、あのリーダー格の男の声が響き渡った。

その声に反応して、月人たちは一旦退く。

「……どういふつもりかしら、？」

が、その刹那！

ガシャアン!!と大きな音と共に、地上に振動が走った!!

「な、何だよありやあ、??」

その塊はすぐさま動きだし、徐々に形状を変えていく。

そして数秒後、その塊はまるで砲台のような姿に変わった、

「な、何が相手だろうと倒すだけよ！さあ行くわよ隼！」

「ちよ、ちよっと待て輝夜！」

しかしその言葉が届くことはなく、輝夜はあの砲台に急接近していく。

「動き出して早々悪いけど、邪魔だからとっとと破壊させて貰うわ！」

次の瞬間、輝夜は至近距離から無数の弾幕を浴びせた！

弾幕が砲台にぶつかると同時に土煙が上がり、その砲台と輝夜を包んだ、

「・・・嘘、。」

土煙が消え、輝夜が砲台を直視する。

そこで見た光景は、絶望的な光景だった、！！

「そ、そんな！確かに最大威力で弾幕を、！！」

直後、ガシヤンと音を立ててその砲台が動き出した。

「ッ！輝夜ッ！一旦戻ってこいッ！！」

generate command!!

叫んだと同時に、大量の剣や槍を具現化して砲台に浴びせる。

が、砲台には傷一つ付かない、

しかしその攻撃の間に、無事に輝夜は戻って来れていた。

「助かったわ。・・・だけど、私の攻撃が、。」

「・・・ああ、俺の攻撃も駄目だ、。」

輝夜の弾幕の威力は、並大抵の妖怪ならば一撃で仕留められる程の威力を持っている筈、

それを、あの至近距離から放ったのに無傷なんて、

「こうなったら、一瞬で存在ごと消して、、あれ、あの砲台は、？」

既にそこに砲台の姿は無かった。

その瞬間！腹に強烈な痛みが走った！！
同時に身体ごと後ろへと吹っ飛ばされ、屋敷の岩に叩きつけられる。

「あ、あがッッ！！」

全身に、尋常じゃない痛みが駆け巡る！
あらゆる箇所から血が吹き出て、意識が朦朧とする、

「・・・は、早く、立ち上が、ら、ないと、」

必死で意識を保ちながらその場を這う。
痛みを我慢しながら、足に力を入れて立ち上がり、
そして顔を上げて輝夜のいる方を見渡した、

が、そこで最悪の光景が目映った。

「・・・や、やめろ、！」

砲台が輝夜に向かって大量の銃口を向けていた、！
しかし輝夜は、睡眠薬を盛られたかのように、地べたに倒れて眠っ
てしまっている、！

「ヤメロオオオー！！！！」

刀を引き抜いて、必死に叫びながら走った。

しかし、

辺りに悍しい数の銃声が鳴り響いた、

竹取物語・戦 其ノ四

その銃声、音は全く違えど、身体全体に異常な程の恐怖心が立ち込め、全く身動きが取れなくなる。

それ以外の音は全くもって聞こえなくなり、ただその音の恐怖に怯えるしかなくなるのだ。

あの時もそうだった。

銃の引き金を引いた瞬間、鼓膜を破壊するような一生忘れぬ振動、手首に残り続けた反動の痺れ、

そして、吐き気を催す死の気配、、

だから、それに似た全てが恐怖だった。

イベントのピストル、玩具屋のモデルガンやエアガン、ましてやただの水鉄砲ですら目を背けたくなる。

咲風隼にとってそれは、死に至らしめる、残虐に殺すものだから、

瞬間、意識が戦場に戻る。

その時間軸に歪みを感じたからである。

ハツとして見ると、

輝夜が周りの時間の流れを減速したように砲台からの銃撃を躲していた。

更に次の瞬間、輝夜は俺のいる位置まで移動してくる。

「か、輝夜、？」

顔を覗くと、かなりやつれた顔をしていた。

顔色も悪く、動くのがやつとであると直ぐに伝わってくる程だった。

「輝夜、だ、大丈夫か、？」

倒れそうな輝夜を支えようと、俺の上半身は動く。

が、足がついてこない、身体は完全に萎縮してしまっている。

しかし、

「隼、ごめん、、ちよつと、眠ら、せ、」

直後、輝夜は俺の方向へと倒れかける。

「っ！輝夜ッ、、!!」

動かなくなっている両足をぶん殴って起こし、なんとか輝夜が地面に倒れるギリギリで支えた。

が、そんな状況をお構いなしに、月人の兵たちが攻撃を仕掛けようとしてくる！

何故かあの砲台は動いていないが、流石に集中攻撃されれば防ぎ切れない！

「くッ、瞬間移動!!」

俺は咄嗟にそう叫び、輝夜を連れて屋敷の中へと瞬間移動した。

ひとまずその場に輝夜を寝かせ、容体を確認する。
どうやら、気を失っているだけのようだ。

「・・・きて、行かなきゃ、戦いに、」

休憩する間も無く、俺は屋敷を出ようとする。

しかし、ふすまを開ける直前に足が止まった。
足を止めるつもりなんてなかったのに、

「・・・クソッ！早く動けッ！動けてんだよッ!!」

俺は何度も何度も己の動かぬ足を叩き、大丈夫だと鼓舞する。

しかし足は全く動かず、おまけに震えまで発生する始末、

「決めたんだろ、最後まで戦うって、。永琳が託してくれたんだろうがッ！何テメエの都合で投げ出そうとしてんだよッ！」

左手で握っている銀の弓を見つめながら、必死でそう叫んだ。
しかし、足は動こうとしない、

が、その直後！

外と屋敷を隔てているふすまを、鎖のようなものが突き破り俺の腕に巻きついた！

「な!?!何ッだこれ!!」

息つく間もなくその鎖は、俺の身体ごと無理やり外へと引っ張り出した！

そのままの勢いで俺は地面を引きずられて、大きく開けた場所に出る。

「ちよっ！何だよこの鎖イ!!」

generate command! Axe!!

咄嗟に斧を具現化し、潰すように鎖を切り裂く。

そのまま地面で受け身をとって、二本の刀を構えた。

『さあー隠れるのは終わりだ!』

空の方から声が聞こえた。

バツ！と上を見上げると、そこにはあの巨大戦艦が、その周りを武装した月人が大勢、

そして、甲板にはあの男が立ちメガホンのようなもので叫んでいる。

その次の瞬間！

戦艦から鉄の塊が送り込まれた！

その塊はガシヤガシヤと音を立てて動き、再びあの砲台の形を取り戻す、

「ッ、!! generate command! エクスカリバアアー!!!」

砲台が攻撃を仕掛けてくる前に、最大火力の剣を叩き込む！

しかし、砲台は無傷のままだった、

『フハハ！そんな攻撃は通用しない！』

一体何でだ!?

エクスカリバーの最大火力は、町一つ消し飛ばすほどの威力を誇るはず！

少し前の輝夜の弾幕だって、神話級の盾でやっと受け切れるレベルなのに!!

何故無傷のままアレは動いてる!?!?

脳に様々な思考が飛び交う。

今にも脳が爆発しそうなくらいに！

『いくつか教えてやろうー!』

直後、あの男の声が辺りに鳴り響いた。

俺は思考を巡らせながら、そいつの方向を向く。

『まず一つ、蓬莱山輝夜には特別な銃弾を撃ち込ませてもらった。…』

月の頭脳、八意永琳特製のな!』

その時、一瞬思考回路が止まった。

「・・・おい、何て言いやがった、??」

『言葉の通りだ。事前に八意永琳に作らせた、不老不死の為の特効薬を混ぜた弾丸を使用したのだ。』

・・・は？

永琳が、作った、？

なんで？永琳は輝夜を味方してたんじゃないのか、??

『そしてもう一つ、その砲台もまた、特殊な施しがされている。・・・その施しとは、打撃や剣撃、更には弾幕すらも無効化する特殊コーティングだ!』

「・・・おい、まさかそれも、永琳の、？」

『いいや違う。これに関しては八意永琳は関わっていない。おかげで長い年月をかけたよ。・・・名付けるならば、そう!月光の砲台ムーンライトタレット!!』

その瞬間、砲台が俺に標準を定めて、銃口から弾丸をぶっ放した!

「ッ、!!」

間一髪、それは身体を晒して避けた、が、

上を見上げれば、銃器を構える大勢の月人、

正面には、勝ち目の見えない月の兵器、
そして、たった今聞いた不老不死である輝夜への対策、

既に頭の中は『絶望』の二文字で埋まっていた、

『さあ、そろそろ終わりだ。やれ！兵たちよ！』

その刹那、一斉に矢や銃弾が放たれた、
俺は本能的に死を覚悟し、諦め、そつと目を瞑った、

真っ暗闇の中、一人の声が語りかけてきた、

『へえ、諦めるんだ。』

「・・・」

『君は、それでいいの?』

「・・・良いわけ、ないだろ、」

『じゃあ、どうしたいの?』

「・・・戦い切りたかったよ、」

『何言ってるのさ、まだ終わってないよ?』

「・・・でも、勝ち目なんてないじゃないか、」

『フフツ、よく言うね。まだ全力を出し切ってないのに。』

「はあ、?全力なら、出したじゃないか、」

『そう?私はまだまだに見えたけどな。』

「・・・お前に、何がわかんだよ、」

『わかるよ。ずっと君を見てたんだから。』

「ああ?・・・言ってる意味が、全く、」

『教えて言わせてもらおうよ?』

「・・・な、なんだよ、」

『君はまだ、一度も全力で戦ったことがないよ?』

「……え、？それ、どういう、」

『いつも思うんだ。まだ心の底で迷ってるって、怖がってるって。』

「………」

『……銃が怖いのは、なんで？』

「……あれは、俺にとっては、人を殺める為のものでしかなくて、」

『確かに、そうかもしれないね。……けどね、剣だって人を殺められるんだよ。』

「……いや、そう、だけど、」

『でも君は剣を怖いと思ったことはない。それはね、君が剣のことを、誰かを守る為の道具と考えているから。』

「……誰かを守る、為、」

『……ねえ、君は何で今戦っているの？』

「……それは、」

『大切な人たちを、守る為でしょ？』

「っ、!!」

『君はその為なら、何だってできる筈だよ。』

その瞬間、真つ暗闇の風景が、一瞬にして白色に晴れた!!

『さあ、選んで。死ぬか、、全力で戦うかを!!』

．．．俺は、

「後者だツ!!!」

generate command!!アイギスの盾!!

銃弾の弾速よりも早く、神々しい大盾が展開され、弓や銃の猛攻を
全て跳ね返す!

全く、その通りだ。

いつも戦う時、心の何処かで躊躇ってたんだ、
だけでももう躊躇わない、迷わない。

答えは出した!!

「最後まで戦い抜く。そして、」

一段解放・限解!!

全身に力を込める。

一点に集中ではなく、全てに満遍なくでもなく、

身体的全てに、己のありったけを、!!

「さあ、死んでも魅せてやる、」

『二段解放・極限!!!』

次の瞬間、顔を上げて相手からの攻撃全てを見通す。

矢が約三十本、弾丸約二百発、

方向、速度、距離、その他全てが手に取るように把握出来る。

「撃ち抜け、グングニル!」

刹那、周りに何十本もの大槍が具現化され、一気に月人の兵へと放たれた!

大槍は矢や銃弾を弾きながら、一寸の狂いも無く月人に突き刺さる。

それにより、次々に月人たちは血を流して落ちていく。

『や、殺れ!・ムーンライトタレット!!』

甲板の上から、男の慌てる声。

その声に反応して、砲台は大量に銃器を露わにし、一斉に発射し始めた。

砲台を正面にして、銃弾の位置は完璧に把握出来る。

ならば、!!

「今ここで、長年のトラウマを味方に付けるッ!」

generate command!!

銃弾が飛んでくる方向へ両手を構え、
神経を集中させ、その両手に二丁の武器を具現化させる！
そして、引き金を思いつきり引いた！
辺りに、超高速の連射音が鳴り響く!!

俺の放った銃弾は、砲台の放った銃弾を全て撃ち落とした。

「人を殺める為の道具ではなく、大切な誰かを守る為の武器として使う。」

もう震えはない、恐怖心も消え去った。

コイツらと共に戦い抜く!!

直後、地面を強く蹴り、横移動しながら砲台へ向けて銃を連射する。
正確には、砲台の装備している銃器の銃口！
外部がコーティングされているなら、銃器の内部で銃弾同士をぶつけて、内側から破壊してやるッ！

しかしながら、砲台はそれを簡単に許してはくれない。

連射速度を更にとって、逆に物量で押し切ろうとしてくる。

だが！

「物量対決だど？見誤ったな！」

generate command!

俺は更に銃器を空中に具現化して、一斉に砲台へと連射する。

流星に自分で狙いを定めているわけではない為、銃口狙い撃ちは出来ないが、

「砲台は全部銃口ねらいだと踏んでくるだろうさ。だからこそ隙が生じる！」

generate command! 剣ノ道!!

砲台の周りを囲うように、地面に大量の剣を突き刺す。

まるで、一本の道のように、

更に!

「generate command!!」

足下に二つ盾を具現化し、それに両足を乗せる。

そしてそのままの勢いで、剣の道をスケートのように滑走!

こうすれば、弧を描くように素早く動ける。

「背後をとらせて貰った!」

まだ空中に具現化した大量の銃器に気を取られて、砲台はこちらに標準を定めていない。

「チエックツ!!」

generate command!!

空中に巨大な対戦車ライフルを具現化し、両手でそれを構える。

狙いは一点、砲台がこちらへ振り向き標準を定める直前の、本体と銃器の間の僅かな空洞、

次の瞬間、砲台は本体を回転させ、ライフルを構える俺の方へと振り返る！

対戦車ライフルの引き金を少し引き、僅かな隙間、その一点を見極め、

「そこだアア!!!」

力強く、引き金を引いた。

その弾丸は僅かな隙間をすり抜け、

「ありがとう、戦い抜いたよ。」

砲台は本体を膨張させ、大爆発を起こし粉々になった、

爆風に巻き込まれた俺は、その場から少し離れた場所まで飛ばされ、その位置でゆっくりと眠りに付いた。

嵐の後

目を開けると、雲に覆われた夜空と妖しく輝く月が目に入る。
辺りに人の声や足音は無く、虫のさざめく音ぐらいしか聞こえては
こなかった。

俺はひとまず身体を起こそうとする、が、

「ん、痛ッ、!!」

身体を傾けた瞬間、あらゆる箇所激痛が走る!

戦闘中はアドレナリンが出ていて気付かなかったが、いざそれが途
切れるととんでもない痛みだ、!!

「・・・ああ、これ、相当やられてんな、。」

銃で撃たれた傷は勿論だが、おそらく骨も何本か折れていた。

あの鎖で引き摺り出されたときか、?

しかし動かない訳にもいかないので、俺は襲いかかる激痛に耐えな
がらも少しずつ立とうとする。
が、

「大丈夫よ、今は横になってなさい。」

上の方からからかけられた声によって止められた。

俺は動きを止め、その声の方向へゆつくりと顔を向ける。

「・・・永、琳、?」

そこには、よく知っている人物がいた。

しかし、その印象はそれに似ても似つかない、

彼女の姿が、血に濡れていたからだ。

「お、お前、その格好、。」

「話は後よ、とりあえずこの薬を飲みなさい。」

永琳の服や肌についた血について聞いたが、永琳は先に薬を差し出してきた。

俺はそれを恐る恐る手に取る。

「・・・これ、蓬萊の薬とやら、じゃないよな、？」

そういうと、永琳は軽くため息をつく。

「そんな訳ないでしょ。それは単なる回復薬よ、それを飲めば数分くらいで痛みは引くわ」

「そ、そうか！じゃあ、ありがたく飲ませてもらうな。」

俺はもらった薬を、口の中に放り込んだ。

その瞬間！

「・・・うツ!？」

とんでもない程の苦味が口内を駆け抜けた！

もはや苦い漢方薬とかそういう次元じゃねえ!!

苦いものが苦手な人なら一瞬で失神するレベルだ!!

「・・・な、なんてもん寄越しやがんだ、!!」

俺は苦味に悶えながら、永琳に文句を言う。

その永琳はというと、安心したような顔をしてこちらを見てやが

る。

「それに耐えられるなら、心配はなさそうね。・・・ああ、安心して？
効き目は本物だから。」

「テ、テメエ、こんなもん飲むくらいなら、痛みに苦しんだ方がマシ
だろうが！」

正直、今まで生きてきた中で最も不味いものだったと感じた。

数分後、永琳の言うとおりの痛みが引いてきていた。
もう動いても問題はないだろう。

「・・・あら、もう大丈夫なのかしら？」

ゆっくり起き上がる俺を見て、永琳はそう言った。

「おかげさまでな。っていうか、あの薬の味の方が傷の痛みより苦し
かったんだけど？」

「そう、改良が必要ね。」

「頼むそうしてくれ、あんなもん誰も飲めねえよ。」

「うくん、何を入れれば更に苦くできるかしら。」

「違えよッ!!」

あれ以上苦くしたら、ガチで死人が出るわ！
しかもコイツ、なんで本気で考え込んでんだよ！

「ふふ、冗談よ。」

「冗談ならもつと可愛い冗談にしてくれ。」

しかもその時の永琳の表情は冗談に見えなかったので、永琳に対してかなりの恐怖を抱いた。

「ていうか、永琳。お前の怪我は大丈夫なのか？」

いよいよ、話の本題に足を踏み入れる。

それを聞いた永琳は、少し間をおいてから口を開いた。

「隼、私ね、もう幾ら重傷を負っても、死ぬことは無くなったの。」
「……はっ。」

衝撃的な告白を軽い感じで言われたので、俺は思わず間抜けな声で聞き返してしまった。

「何故ならば、”死ぬことはなくなった”ということは、”不老不死”であるということだから。」

「お前も、蓬莱の薬つてのを飲んだのか。……って待て、それいつ？」
「いつって、月にいる時には既に飲んでいたわよ？」

月にいる時には飲んでいた、？
それって、つまり、

「はあ、なんだよ、あの時は心配して損した。」

あの時のことを思い出し、少し恥ずかしさがこみ上げる。

「悪かったわね。でも、戦闘への活力にはなったでしょ?」

少し腹も立ったが、まあ結果オーライだと考えて気持ちを押し殺す。

永琳がそれについて、あまり辛い思いをしていないのは納得いかないが。

「それより隼。戦いの決着については聞かないのね。」

「・・・まあ、この静かさとお前の姿を見れば、大体察しはつくよ。」

おそらくは、俺が気を失った後、回復した永琳が月人たちを始末したのだろう。

身体に付着した血は、その返り血か、

「その、あんまり力になれなくて、すまなかった。」

単独で倒したのはあの砲台だけであって、更には俺が幾つかピンチを招いて助けてもらっている。

永琳や輝夜に感謝すると共に、自分の弱さを悔いた。

「貴方は十分過ぎるほどに力になってくれたわよ。特にあの砲台、あんなもの用意しているとは思わなかったわ。」

あの砲台に永琳は関わっていないって、あの男は言っていたな。

永琳の表情からして、それは本当なのだろう。

そういえば、

「輝夜は、輝夜は大丈夫なのか、？」

「安心して、今は屋敷の中で眠っているわ。もう少しすれば起きると思うから。」

その時、輝夜が眠らされた瞬間の時のことを思い出した。

「なあ、永琳。月人の指揮をとってた男がさ、不老不死用の薬を永琳に作らせた、とか言ってたんだけど。」

そう言うと、永琳はかなり怪しげな笑みを浮かべた。

「・・・ふふつ、そう、まんまと騙せたって訳ね。」

「騙せた？それって、どういうことだ。」

「そのままの意味よ。そもそも、不老不死に対する特效薬なんか作れる訳ないでしょ。」

「・・・じゃあ、なんで輝夜は眠っちまったんだよ。」

「あれは唯の睡眠薬。不老不死にだって睡眠薬は効くわよ、だって眠るだけだもの。」

そういうことだったのか。

まあ、永琳が輝夜に対して都合の悪いものなんか作るわけがないわな。

その瞬間、辺りに冷たい風が吹く。

「寒っ、。永琳、後の話は中でしないか？」

「分かったわ、もう少しで姫様も起きる頃だろうし。」

俺と永琳はその場から立ち上がり、屋敷の障子を開けて中に入っ

た。

蓬菜の薬 前編

「あら、おはよう永琳に隼、って、随分とズタバロね。」

屋敷の中に足を踏み入れると、既に起床していた輝夜が座って待っていた。

輝夜の服装を見ると、出血はしていないようにみえる。

「まあ名誉の勲章みたいなものだろ。それより輝夜は？怪我とかしてないのかよ。」

「誰かさんが、寝てる私をここまで運んでくれてくれたおかげで、ね。」

笑みを浮かべながら、輝夜はそう答えた。

「それより永琳？随分と強力な睡眠薬を用意してくれたものね。」

「仕方ないじゃない、別に月人が全員馬鹿なわけじゃないんだから。かなり強力なものを用意しないと騙し通せないわ。」

輝夜は永琳が作った睡眠薬について言及したが、それを永琳は軽く流す。

話し方のせいかな、永琳の言葉には妙な説得力があった。

「ってか輝夜、永琳がそれを作ったって、知ってたのかよ。」

「知らなかったわ。でも、外の会話が丸聞こえだったわよ？」

そこまで大きな声で喋っているつもりはなかったが、

自然と周りに聞こえるような声になっていたのだろうか？

次の瞬間、永琳は雰囲気を変えて話を切り出した。

「さて、団欒話は終わりよ。・・・隼、これが何か分かるかしら？」

そう言つて永琳は、二つの壺のようなものを取り出した。

そしてそれを見た瞬間、俺は得体の知れない何かを感じた。

「・・・蓬莱の薬、つてやつか。」

「ご名答。これについては、もう説明したわよね？」

「ああ、。飲めば不老不死、永遠に老いず死なずの身体になる薬。」

輝夜はこれを飲んだことで、月からこの地球へと追放されていた。

そして、永琳もこれを飲んでいるという。

不老不死、人々が憧れ、欲し続けてきたもの。

しかし不老不死とは、どんな拷問よりも残酷なものかもしれない。

「月ではね、これを服用するということは禁忌であり、罪人とされ重い刑罰を受けることになるの。」

永琳はそのことを淡々と話す。

輝夜も、その話を黙って聞いていた。

「この二つの蓬莱の薬は、私と輝夜の口封じとして翁夫婦と帝に渡すわ。」

「・・・いいのか、それ、？」

「これを飲むことは、月では重罪だけれど地球では違うわ。・・・それに、」

次の瞬間、永琳はより一層重い声で、俺に問いかけた。

「隼はあの日から今日に至るまで、沢山見てきたでしょ？・・・生きたくても生きられなかった、大勢の人たちを、」

刹那、今まで会ってきた人たちとの思い出がフラッシュバックされた。

思い出すだけで、懐かしさと悲しみで涙が溢れそうな記憶。

「だけれど、私は不老不死を良いものだとは思ってないわ。孤独で、残酷なものよ。」

永琳の言う通り、不老不死とは孤独なものだ。

例え親しい人が出来たとしても、必ず自分は生きその人は死ぬ。

出会いと別れの連続を、永遠に繰り返すのだ。

「それでも、不老不死に憧れを抱く人は沢山いるわ。・・・だから、一つの選択肢としてでも、その二組にこの薬を渡す。」

「・・・まあ、俺からは何も言わないさ。ただ、中身を伝えなくて渡したりはするなよ？ちゃんと危険性も説明しろ。」

「分かってるわよ。そこまで私は残酷じゃないわ。」

次の瞬間、輝夜はその場から立ち上がった。

俺は床から輝夜を見上げる。

「隼、ありがとね。表し切れないくらい、感謝してるわ。」

「・・・輝夜。」

俺と輝夜は一切目を逸らすことなく、真剣な眼差しで見つめ合う。しかしながら、話をしている輝夜の顔は、悲しみに包まれていた。

「でも、私は永遠を生きる人、貴方はいつかは死ぬ人。・・・生きていく世界が違うの。」

「・・・ああ。」

「これ以上、貴方に助けを求める訳にもいかない。・・・だからここままで。」

直後、永琳は屋敷の障子を開け外へと出た。

続けて輝夜も外に出る。

「・・・じゃあね、隼。また、いつか会いましょう。」

そう言い残して、二人は暗闇へと消えていった。

その時の永琳と輝夜の表情は、何とも苦しい表情だった。

ただ、次会う時まで、強く生きようと心に決めた。

翌朝、翁夫婦のもとに一人の女性が訪れ、一切の外への言及を禁止する代わりに、“蓬菜の薬”なるものが渡された。

しかしながら、翁夫婦の心は悲しみに打ちのめされている。

「ああ、姫、、」

翁は、去ってしまったかぐや姫へと嘆きながら言葉を漏らす。それを、妻の姫は泣きながら翁を慰めた。

その時、蓬菜の葉が目に入る。

「お、姫や、、この薬を飲めば、、また姫と会えるのでは、、」

「・・・しかし、この薬を、飲んでしまったら、、」

薬に手を伸ばす翁を、姫はしがみついて抑える。

しかしながら、翁はその手を強引に振るい払った！

「姫が去ってしまった今ツ、、この翁に生きる意味などない、、!!」

翁は壺に手をかけ、中の薬を飲もうとした、、!!

その刹那、何の音沙汰もなく二人の首が飛んだ。

一切の悲鳴すらなく、

斬殺さえもなかったかのように、

「・・・どうか、安らかに、。」

赤く塗られた刀を鞘に納め、その剣士はその場から消えた。

蓬萊の葉 後編

夜が明けて、辺りを太陽が段々と照らし始めた時間。
屋敷にいる人たちが目を覚ます前に、咲風隼は屋敷を出て帰路を歩いていた。

屋敷から店まで帰る途中の道は数々の家が立ち並び、
少しずつ、道の周りに佇んでいる家の人たちが、今日という日の始まりとして外へと出てきていた。

その後、

「・・・眼楽。流石に生きてたか。」

「・・・会って直ぐの台詞がそれですか、。」

道のど真ん中にて、二人はピタリと足を止めて相對する。
しかしながら、二人共武器を引き抜く動作には移らなかつた。

「・・・隼君、少し時間ありますか？」

すると眼楽は、すぐ横にある酒屋を指差した。

「酒は駄目なんだが、まあ、いいか。」

俺はそれを了承し、二人は酒屋へと入っていった。

眼楽は、慣れたような仕草で席につき、その向かいに俺は座った。早朝ではあったが、昨晚からいた客たちが残っていた為、店内はかなり騒がしかった。

「さて、何か飲みますか？」

「いや、俺はいい。」

直後、眼楽の目の前に酒瓶が置かれた。

注文をしていないのにも関わらず、である。

「……ああ、僕はこの常連なんですよ。」

困惑した俺の顔を見て、眼楽は酒を飲みながらそう言った。店内には酒の匂いが充満していて、気を抜いたら倒れそうになる。が、なんとか意識を保ちながら、眼楽に尋ねた。

「で、なんの報告だ？」

「……別に、ただ世間話をしようとしてるだけかもしれませんが？」

コトツと酒版を置いて、眼楽は落ち着いた口調でそう返す。

「冗談はいいから、取り敢えず話せ。」

「……はいはい、分かっていますよ。」

次の瞬間、眼楽の気配が一瞬にして変わった。

冗談抜きの、超真剣な雰囲気。

「先程、僕は二人の老人を殺しました。」

「……翁と、その妻か、。」

一瞬で殺された老人が、その二人だと理解した。

そして、何故眼樂が殺したのかも大体察しがついた。

「……罪なき人を殺していい道理はないが、二人にとってそれは最善の道だったかもな。」

恐らく二人は、特に翁は、直ぐに蓬萊の薬を飲んでいただろう。

そうしてしまつては、もう取り返しがつかない。

殺されても死なない、永遠の生を得ることになってしまう。

「僕は彼らが、あの時何に手を出そうとしていたのかは知りませんが、しかし、後戻りの効かないものであるということは直ぐに理解出来ました。」

酒瓶の中身を飲み干して、眼樂はそう言った。

見ると、彼の顔は少し赤くなっている。

「……故に殺しました。彼らが道を踏み外す前に。」

直後、眼樂は立ち上がって、店の出口へと歩いていった。

酔っているのか、少しふらついている。

「ああ、最後に一つだけ。……どうやら、帝直属の部下たちが、富士の山へと登るそうです。詳しい理由は知りませんが、」

そう言い残して、眼樂は去っていった。

「帝の部下が、何故富士山へ、？」

その数時間後、俺は興味本位で富士山へと訪れていた。

周りは草木が生い茂っていて、まるで侵入者を拒むようだった。

焦る理由も特にない為、俺は富士山の景色を楽しみながら、登山気分ですべて登っていた。

その瞬間だった、！！

富士の山に、恐怖に叫ぶ悲鳴が響き渡ったのだった！！

「ッ、！！・・・頂上の方からか、？」

その悲鳴を聞いて、俺は少し気合を入れて、先程までよりペースを上げて登っていった。

そして登ること数十分、俺は一人の少女と出くわした。
白髪を纏い、服には人の血が付着している。

そして、その子の真下の地面には、一つの壺が転がっていた。

「・・・おい、その壺は、何だ、？」

一目見た時点で、その壺が何かは分かっちゃっていた。

しかし、頼むからそれが勘違いであることを祈って、その質問を少女に投げかけた。

しかし、その少女はその質問を返すことなく、かすれた声でこう言った。

「これで、アイツに、復讐が出来る、!!」

その時の少女の目つきは、最早人間のものでは無かった。

少女の復讐心

瞬間、白髪の少女は足元の壺を蹴飛ばしながら、急加速して山を降りようとする！

「ッ、!!」

即座に反応して、俺は少女の前に立ち塞がった。

その横を、蹴飛ばされた壺が中身を溢しながら転がっていく、直後、少女は鋭い眼光で睨みつけた。

「誰、アンタ、。」

「それは俺からも聞きたい。・・・君は誰だ？ここで何をしてた？」

その空間に、緊迫した空気が流れる。

その時、俺は感じ取った。

この子の、異常なまでの殺意を、

が、次の瞬間!!

一瞬にして少女の姿が消える!!

「なッ!?!・・・何処にッ!」

刹那、俺に殴りかかる少女の姿を目視した。

咄嗟に左手を少女の方へ向け、その拳を受け止めに行く!

が、!

少女はそれを確認して動作を変え、身体を放って蹴りにかかる!

「き、切り替えッ!？」

俺は少し反応が遅れ、ガードしきれずに蹴りを喰らう。

痛みはそこまですでもないが、流石に何の盾も無しだと多少の痺れは来る、

「ハア、、、普通の人間の動きじゃねえな。・・・やっぱり、飲みやがったな、蓬萊の薬を、」

「・・・だから何？別にアンタに、関係ないことでしょ、」
「悪いけど、そういう訳にもいかないんだよ、。」

直後！少女は溢れ出る殺意を剥き出しに再び構える。

「邪魔するなら、アンタも殺す。」

「・・・いいぜ、かかってこいよ。」

刹那、少女は地を蹴り急加速する。

そのまま拳を振りかぶって、再び俺の脳天目掛けて振り下ろしてきた。

が、完全に戦闘態勢に入った上、二度目の攻撃。

「悪いけど、通じないよ。」

「な、!？」

拳が命中する直前に身体を逸らして躲し、少女の腕を払いのける。

続けて、少女のもう片方の腕を掴み、元の位置に戻すように放り投げた。

「くッ、このッ、!!」

少し声を漏らしながら、少女は地面を転がった。
・・・が、直ぐに立ち上がり、再び攻撃を仕掛けてくる。

しかし、やはり単調な攻撃。
見切れてしまえば、何の危険も無い。

「・・・取り敢えず、一旦頭冷やせ!!」

突進してきた少女の攻撃を躲して、その背後に加速して回り込む。
そして、少女の頸椎に手刀を打ち込んだ。
そのまま、気を失って倒れる少女を、
地面に倒れる前に、俺は両腕で支えた。

「・・・ん、あれ、ここは、??」

目を覚ますと、見たことのない天井があった。
ハツとして起き上がり周りを見渡すと、様々な小道具のようなものが沢山目に入った。

「ん、起きたな。」

直後、襖を開いて誰かが入ってきた。
私は咄嗟に身構える。

「おいおい、そんな攻撃的になんなって。．．．ほら、飲みなよ。」
するとその人は、お茶の入った湯呑みを差し出してきた。

「．．．別にただのお茶だぞ。」

私が知らない間に疑いの目になっていたのか、その人は私を見ながらそう言ってきた。

その直後、その人は私の隣に座り込んできた。

「まあ、飲んでも飲まなくてもいいさ。．．．俺は咲風隼、隼でいい君は？」

「．．．藤原、妹紅、。」

名乗られたから、名乗った。

昔から、そう教わってきたから。

「．．．いきなりだけど、妹紅はあの山で、一体何してたんだ？」
「それは、。」

私は直ぐに答えられなかった。
少し記憶が飛んでいるのもあるし、単純に言いたくないし、

「．．．じゃあ、質問を変えよう。妹紅は、あの壺の中身を飲んだのかか？」

「．．．壺って、？？」

「妹紅の足元に転がってただろ？」

そう言われて、私はあの壺のことを思い出した。
そして、山での一件の全てを思い出した。

「・・・飲んだよ、蓬萊の薬。」

「え、知ってんのか、？」

そして私は、全てを話した。

あの山で起きたことから、その前のことも全て、

自分の店に少女を運び、適当な寝室で寝かせている間にお茶を入れる。
。

その時、寝室から物音が、

湯呑みを持ってその部屋の襖を開けると、白髪の少女が起き上がっ
ていた。

俺は湯呑みを渡して、その場に座る。

疑われているのか、少女は湯呑みに入ったお茶を飲もうとしない。

まあ、当然と言えば当然だが、

「まあ、飲んでも飲まなくてもいいさ。・・・俺は咲風隼、隼でいい。
君は？」

「・・・藤原、妹紅、。」

自ら名前を名乗って、少女の名前を訊ねる。

すると少女は、少し間を開けてそう名乗った。

その後は、妹紅があこの山にいた経緯やらを全て話してもらった。

「……成る程ねえ。輝夜への仕返し、か、。」

要約すると、

- ・妹紅の父親は、かぐや姫に求婚した五人の貴公子のうちの一人。
- ・その父親はかぐや姫の出した難題に挑んだものの失敗。
- ・仕返しとして、かぐや姫が帝へと送った壺を奪おうとする。
- ・その壺が富士山へ運ばれることを知って、妹紅も富士山を登る。

「その後は、うろ覚えか、。」

どうやら富士山を登ってからの記憶が飛んでしまっているらしい。しかし、それも当然だろう。

普通の人間からすれば、異常な出来事に関わったのだから。

「……だけど壺の中身が、不老不死になる薬っていうことは覚えてる。」

「それは、誰から知った？」

「……そうだ、！あの人が富士山の山頂で壺を捨てようとした時に、いきなり女が現れたんだ。」

思い出したように、妹紅はそう話した。

富士山の山頂に女なんかいる訳ない。

多分、神か何かだろう。

「それで、その女はあこの人の仲間の殆どを殺したんだ。」

「……あの人って言うのは、帝の使いの者か？」

「え？……あ、うん、そう。……それで、その壺を捨てるのは、別の山の方がいいって、それで、。」

山を降りている途中、妹紅はその人を殺して壺を奪い。

蓬萊の薬を服用した、ということだ。

「一体何で殺してまで奪ったんだ？・・・そこまでして、不老不死を得たかったか？」

「・・・少し魔が刺したんだ。後悔が、ない訳じゃない、。」

すると、妹紅は何も言わなくなった。

「よし、じゃあ一つ教えてやる。」

「え、？」

俺は妹紅へ向き直し、真剣な目で妹紅の目を見た。

「お前は輝夜への復讐って言ったが、一体それをした所で、お前の父親に何の得がある？」

「・・・そ、それは」

「復讐なんてした所で、何かが戻る訳じゃないんだよ。ただ失うしかないんだよ、。」

「・・・」

「もうお前は蓬萊の薬を飲んじまった。永遠に生きていく道しか残されてないんだよ。」

しかも、妹紅は一人で、

この先を生き続けなければならない、

「この先の生き方は自由だ。恐らく、沢山壁にぶち当たるだろうよ。・・・その時は、誰かを頼れ。」

「・・・誰か、つて、？」

「それはお前次第だろ。別に俺でもいいし、もしかしたら、お前の大嫌いな人が、その誰かになるかもな。」

「・・・そつ、か、。」

その直後、妹紅は俺のいる反対の方へと振り向いた。
その時の妹紅の顔には、少量の涙が溢れていた。

・・・なあ永琳、輝夜、。

いつか、妹紅と出会うことがあつたら、同じ境遇の人として、仲良くしてやってくれないか、？

最初は、妹紅は攻撃してくるかもしれないけど、
それでも、付き合ってやってくれ、

その後、俺は妹紅を町まで送り届けた。

しかし家には送らなくていいと、妹紅は言った。

「ひとまず、一人で生きていくさ。・・・取り敢えず強くなる、勿論、あんたよりもな。」

「フツ、いつそんなに強気になったんだか。」

そう言つて、妹紅は歩いて行つた。
俺も手を振つて、妹紅の後ろ姿を送つた。
妹紅の姿が、見えなくなるまで、

「…さて、もうすぐ日も落ちそうだし、とつとと家に帰りますかね。」
俺は、自分の店に向かつて歩き始めた。

その瞬間!!

ズドオオオオンツ!!!と大きな音を立てて、
地面がグラツと揺れた!!

「なツ、、!!ツンだよこれ!!」

町の人たちは悲鳴を上げて、次々と家に避難していく。
その時!一人の男性が山へ指差し、大声で叫んだ!

『なんツだア!あの化け物はアア!!』

瞬間、俺は指差された方向を向く!

「いイツ?!?!」

そこに見たものは、、

山を軽く抜かすほどの大きさの、巨人だった、

それも、初めて見る妖怪じゃないッ！

姿は全く違うが、、この雰囲気は、、!!

「・・・まさか、、あの野郎はア!!」

その妖怪は、俺が最も嫌悪を抱いた奴だった。

・・・その気配、、ダイダラボッチ、、

終章

蘇りし山の化身

突如として大地を揺らし、その巨体を露わにした山の化身。

力、スケール、威圧感、その全てが一級品であり、更に驚異的な再生能力すら兼ね備えている。

その巨人は大きな足音を立てながら、ゆつくりを歩み始める、。

「なッ!?・・・あんなものまで蘇らせたのですか!」

『・・・いや、私は何もしていない、。』

少し離れた山の頂上から、その巨人を見上げる者が二人、

『・・・だが、』

一人の男が、不敵な笑みを浮かべた。

『好都合だ、あれほどの化物が暴れ回れば、一瞬で壊滅するだろう、。』

「ッ、」

また同時刻、森の中を駆け抜ける妖怪が二人、

「紫様！あれは一体何者ですか!?!」

「知らないわよ！あんな怪物!!」

焦りの表情を浮かべながら、立ち塞がる木々を全て躲していく。

「とにかく急ぐわよ！あんなのが暴れ回ったら、溜まったもんじゃな
いわ!!」

そしてまた同時刻、日に隠れた森の奥地にて、

「・・・永琳、」

「駄目よ、加勢することは出来ないわ。もし加勢したら、確実に貴方は
多くの人に目視される。」

苦渋の表情を浮かべて、永琳は輝夜にそう言った。

「・・・大丈夫よ、別に私たちが加勢しなくても。きっと、」

再び二人は、森の奥へと歩み始めた。

「……また会ったな。」

「……咲風、隼、。」

山の化身ダイダラボッチの前に、咲風隼は立ちはだかった。
両者数秒間睨み合い、そして次の瞬間、戦闘の構えを取った。
隼は二本の刀を引き抜き、ダイダラボッチはその巨大な腕を振り上げる！

「過去に浸るつもりは一切無い。……捻り潰してくれるツ!!」
「上等だ粉々に切り裂いてやらア!!」

瞬間！拳と刀がぶつかり合った!!
力は一瞬均衡するが、、圧倒的質量差！
次の瞬間咲風隼の身体が吹き飛ばされた！

「なッ！、この威力ッ、!!!」

隼は空中で体勢を整え、周りの木に着地する。
更に追い討ちにと、ダイダラボッチはもう片腕を振り上げた！

「斬れねえなら、削ぎ落としてやるッ!!」

二段解放・極限ッ!!

瞬間、隼の周りに無数の武器が具現化される。

更に間も無く、巨人の腕に放たれた!!

が、その無数の武器が巨人の身体を削ると同時に、その削った部位が元通りに再生された、

「はア!? 幾ら何でも、ウぐッ!!」

瞬間、隼は迫り来る拳に気付かず、その一撃をモロに喰らった、
その勢いのまま、拳は振り抜かれる、

俺は勢いよく後方へ吹き飛び、地面に激突した。

身体に強烈な激痛が走るッ!!

何とか痛みを抑えながら、再びよろけながら立ち上がった。

「ツ、ハア、ハア、幾ら、何でも、再生がツ、」

「咲風隼、少し前の話をしてやろう。」

直後、ダイダラボッチは流暢な声で話しかけてきた。

前回の対決とは、全く違う滑らかな話し方だ、

「あの時、オレはお前らに粉々にされた。だがなツ、あの時程度の攻撃で、このオレの身体全てを消すことが出来たとでも思ったかツ？」

数百年前、俺と須佐男で仕留めきつた筈だと思っていた。

まさか、まだ息途絶えていなかったとは、

「しかしな、死ぬことはなかったものの、流石に直ぐには再生出来なかった。・・・そうだな、」

直後、奴は三本の指を突き立ててきた。

「少なくとも、あと三千年はかかっていたかもな、」

「三千年だと？・・・ならば、何故テメエが今、こうして、暴れてやがるツ、!!」

「・・・フハハッ！いいだろう、あの世への土産に特別に教えてやろう！」

瞬間、ダイダラボッチは何かを投げてきた。

その物体は、俺の手元に飛んでくる、

「・・・ッ!!!」

その物体は、あの蓬萊の薬が入っていた壺だった、
だが何故アイツがこれを持っている!?!?

「・・・ただの偶然だよ。まだ塵以下の大きさだったオレの元に、その壺が転がってきたのだ。」

「ぐ、偶然、だと、??」

「そして、その中に入っていた一滴の水滴を吸収した。するとどうだ、物凄い速度で再生していくツ!力が戻ってくるウ!!」

瞬間!俺の目の前に拳が構えられる!

気が散って見えなかったツ、!!

「最ツ高の気分だツ!これほどの良い気分はそうそう無いツ!!」

避ける間も無く、俺はその拳を喰らった。

激痛と共に、俺の身体は後方へと吹き飛んでいく、

そして、意識が薄れていく、

「隼!!しっかりしなさいツ!!」

その直後!その呼ぶ声に叩き起こされた!

声の方向へ向くと、紫と藍が構えていた。

「紫イ!? ……って退け! 巻き添え喰らうぞ!」

俺はまだ何処にも叩きつけられていない!

このままだと、衝突する、!!

「心配ないわ! 隼、そのまま飛びなさい!」

「は、ハア!?!」

その刹那、俺の飛ぶ方向に、紫のスキマが開いた。

俺はそのスキマへ、吸い込まれるように入っていく、

「あ、危なかつ、うツ!!」

しかし、勢いが殺せないまま、俺はスキマの外へと出る。

更にその先の、地面に叩き付けられた、

「…ゆ、紫、何で地面に繋がんだよ、」

「じゃあ何処に繋げるのよ。というか、早すぎて勢いが殺せなかったのだから、しょうがないでしょ?」

その直後、再び地面が揺れる!

「あの野郎、また暴れ回る気か!!」

俺は直ぐに立ち上がり、戦闘体勢に入る。
が、同時に頭を殴られた。

「痛ツ、紫!?!」

「闇雲に戦ってどうするの。このままじゃ、敗北一直線よ。」

すると紫は、俺の前に出た。

同時に藍も紫の隣に並ぶ。

「私たちじゃどうしようもないけど、動きぐらいは止められるわ。」

「その間に、隼さんは奴を倒す算段を。」

その時、ようやく俺は冷静になれた。

紫の言う通り、あのままやっても勝てる算段なんかない。

攻撃して削ぎ落としていくことは不可能。

強烈な攻撃といえど、前回ほどの威力は出せないし、出しても確実に殺せない、

ならば、

「いや、藍。算段はもう立てられたよ。だけど、時間稼ぎをして欲しい。」

「・・・了解しました。」

直後、二人はその場から飛び立った。

正面には、ゆっくりと迫る巨人の姿。

その巨大に、紫と藍は弾幕を浴びせていく！

「攻撃しても再生されるなら、再生という概念すら無くせばいい。」

俺は右手に全神経を集める。

他の部位、何処にも力が入らない程、その一点に集中させる。

やることはただ一つの槍の具現化。
大百足を殺った時の、創造と破壊の神槍、

「・・・generate command、」

無限

「いくわよー！藍ー！」

その声と同時に二人は飛び上がり、巨人を翻弄しながら弾幕を浴びせる。

空を埋め尽くす密度、色鮮やかに輝き、美しく破裂し散る弾幕の雨。

「くツ、!!、小癩な、!!」

ダイダラボッチは弾幕の雨に対し、大振りに腕を振り回して蹴散らす。

だがその攻撃は弾幕を消すのみで、空中を飛ぶ紫と藍は余裕を持って躲す。

しかし、

「紫様ーこのままでは持ちませんー！」

少し息を乱しながら、紫に藍は訴えかける。

「藍、そんなこと承知の上よー！とにかく全力を出し切りなさい！」

瞬間、紫は弾幕の速度と密度を高める。

同時に藍も飛行速度を上げてダイダラボッチを翻弄し、更に弾幕を強める。

が、しかし！

「先ずは一匹イ!!!」

藍の移動先を読み、ダイダラボッチはそこ一点に拳を振るった！
それに対応しきれず、藍は正面から拳を受ける、

「し、しまっ、!!」

その直前！藍はスキマに消えた！
振われた拳は空を空振る、。

「申し訳ありません、紫様。」

「藍、相手の行動をよく見て動きなさい。あの妖怪は、その辺に彷徨く
野良妖怪などではないのだから。」

ダイダラボッチが暴れ回り、大量に倒れた木の影に二人は身を隠
す。

しかし、ずっと隠れていては時間稼ぎが出来ない、

「さあ、休んでいる暇はないわ!」

「ええー！分かっていきます!」

再び戦闘体勢に入り、紫と藍はダイダラボッチへ攻撃を始める！

が、その飛び上がる直前！

地面を抉りながら巨大な拳がその木の残骸ごと蹴散らした！

「なっ、!?」

「ッ、紫様!!!」

間一髪、飛び上がるのが早かった藍は回避したが、

辺りに大量の砂煙が舞う。

ガラガラと木の破片が転がり、先程までの風景が嘘のように、荒れ果てた残骸の光景が広がる。

「・・・ゆ、紫様!!」

その光景に向かって、藍は叫ぶ。

数秒後、木々の残骸の間から、紫は姿を現した。

「紫様ーご無事ですか!?!」

「ええ、間一髪避けられたけれど、油断したわ。」

拳が命中する寸前、紫は身体を逸らして回避し、傷無く物陰へと移動していた。

しかし、最早その周辺は残骸の山の化し、身を潜む場所など等に消えた。

「……もう盾に出来るものもないわね……。藍、ここからは攻撃あるのみよ。」

「ええ、承知しま、な!？」

気づいた時には既に遅く、二人は瓦礫の山に囲まれていた。

「紫様!これは一体!？」

「……嵌められたわね。」

直後、その周辺を影が覆う。

頭上を見上げると、拳を構えたダイダラボッチが見下ろしていた。

「……藍、出来るだけ引きつけるわよ。直前で躲すわ。」

藍は無言で頷く。

瞬間、二人は攻撃する素振りを見せる。

「……クツ、クハハハハツ!!」

その様子を見たダイダラボッチは、高い笑い声を上げた。

「……何がおかしいのよ。」

「クハハ、先程の妙な空間で躲すつもりだろう?」

「あら、流石に分かっているみたいね?でも、だからどうしたの?」

「……クハッ!、じゃあ、試しに使ってみたらどうだ?」

「えっ、?」

紫はハツとして、至近距離にスキマを開こうとする。
が、スキマが開くことはなかった。

「な、何で!?こんなこと、一度も、」

焦って何度も試すが、一向に能力が使える気配が無い。

「くツ、貴方一体何を！」

「なアに、オレ本来の力を使っただけさ。・・・広範囲では無いが、地面から生気を吸い取ることができる。」

「・・・チツ、芸達者な真似を、！」

間髪入れず、その辺りを拳の影が覆う！

「クハハ！死人に口なしだッ！死ねい!!」

次の瞬間!!

辺り一面に、山火事すらも吹き飛ばす程の突風が巻き起こった!!

突風は二人を囲んでいた瓦礫を空中へと吹き飛ばし、ダイダラボツチすらも少し動かした、

「いや、死人に口なしは、こっちの台詞だッ、!!」

其の右手には、禍々しい気配を纏う透明な槍が握られている。
未だ完成はしていないが、それでも凄まじい気配を放っている。

「なッ！咲風隼!!」

「油断したな、ダイダラボッチ、」

瞬間！槍が完全に姿を現した！

同時に隼は飛び上がり、ダイダラボッチに一気に近づく！

「や、やめろ！、やめろオオ!!!」

「・・・消し飛べ、糞野郎ッ!!!」

ズシヤツツ、

静かに突き刺す音が鳴った、

「・・・あ、あれ、、??」

何で、意識が遠のいていくんだ、？

一体何で、、口から鉄の味がするんだ、、??

恐る恐る下を見ると、

腹部が何かに貫かれていた、

「・・・テ、テメエ、な、に、を、」

俺の腹部を貫いていた何かは、正面即ち奴の方へと伸びていた。

「・・・正直、これが初めての勝負なら、オレは死んでいた。・・・だが！貴様を無警戒で野放しにするとでも!?!」

瞬間、腹部が更に深く貫かれる。

しかし、最早痛みすら感じない、

「話は終わりだ。無念に死ね、咲風隼。」

直後、腹部を貫いたものが引き抜かれ、間髪入れず奴の拳を喰らった、、

「は、隼ッ!!!」

紫の俺を呼ぶ声、恐らく藍も、

だけど何も耳に入らない、

身体が吹き飛ぶ、大量の血を流して、さも無様な姿で、

「さあ、残るは貴様らだけだア!!」

紫はダイダラボッチを鬼の形相で睨む。

尋常じゃない程の殺気が覆う。

「おおっと、怒るのは止めないが、感情的になるのは良く無いぞ？」
「ツ!!このツ!!」

怒りに任せて飛び出そうとする紫を、寸前で藍が止める。

「紫様！落ち着いてください！」

「何よ藍！落ち着いていられるわけないじゃ無い!!」

「感情に身を任せては相手の思う壺です！隼さんならきつと大丈夫ですから！」

「何を見てたのよ！あんなの、助かる訳、」

藍は紫を必死で抑える。

しかし最早戦えるような状態ではなかった。

「・・・興醒めだな。まあいい、」

瞬間、ダイダラボッチは腕を振り上げる！

「藍！揉めてても仕方ないわよ！とにかく、今は、！！」

拳が振り下ろされる前に、紫は高密度の弾幕を放つ。

しかし有効打には程遠い、

「・・・そんな攻撃で、オレに何が出来る？大人しく、死に絶えろ！」

凄まじい風を巻き起こし、ダイダラボッチは腕を振り構えた！

が、その刹那。

音もなく、その振り上げられた腕が切断された、

「・・・な、何、!?」

切断された腕は、まるで燃えるように消失し、やがて空へと消えていく。

更に、何故かダイダラボッチの腕は再生しない。

「な、何故だ、何故戻らない!？」

間髪入れず、もう片方の腕が切断される!

またしても腕は段々と形を失い、消失していった、

瞬間!全てが凍てつくような凶々しい気配が辺りを覆った。

「き、貴様は、!？」

ダイダラボッチの、その更に上、

人の身の丈程の大太刀を握り、漆黒の気配を放つ者の姿があった。身体からは血が流れ、腹部には巨大な風穴が空いている。

「・・・な、貴様なぜッ!身体に穴を開けたはずの貴様が、!!」

刹那、大太刀がダイダラボッチの肩へと振り下ろされ、再び身体が切断される!

またしても、再生されることなく消えていく。

『・・・結末だ』

酷く冷酷かつ、静かな声だった。

「貴様ッ!!」

激情し、ダイダラボッチはその者に体当たりを仕掛ける。

が、その体当たりによつて触れた部位、ダイダラボッチの胸のあたりが吹き飛んだ!!

「な、なんだ、、この能力はッ、、?!?!?」

直後、その者は刀を納刀し、天へと手を翳した。

其の瞬間、その手に天まで届くほどの大剣が具現化される。

大剣は悍ましい程の強風を巻き起こし、漆黒の靈気を纏う。

『戦いの行方は、お前が此の世界から消え失せるという結末だけだ』

その声と同時に、更に大剣から強風が吹き荒れる！

地面に転がった瓦礫が吹き飛び、ダイダラボッチ程の巨体でさえ後退させる。

「ッッ、!!咲風隼アアアア!!!」

雄叫びを上げ、一気に隼へ接近する!!

『終段壊・無限』

刹那、天へと伸びた大剣が振り下ろされた。

その一撃は、ダイダラボッチの身体を真っ二つにし、

その身体は、、一瞬で消失した、、、、

直後、一気にその場を包んでいた気配が消える。

山のような巨人にトドメを刺したその者は、逆さになり地面へと落ちていく、

そして、地面へと到達する前に、黒い炎のような者でその身が消失する。

先程の、切断された腕のように、

「は、隼、!!!」

その姿へ向けて、紫は地を蹴る。

しかし、間に合うことは無く、

「隼ッ!!!」

咲風隼の身体は、一片残らず消失した、

「……ン、な、何だ、ここは何処だ、？」

目を開けると、何も無い世界が広がっている。

「お、オレは、死んでいない、？」

確かにオレは不老不死となった。

だが、奴の攻撃は死を直感するようなものだった。
不老不死なのにも、関わらず、だ。

「……と、とにかく、辺りを探索するでしょう、。」

ダイダラボッチはその世界を歩き始めた。

この先、自分を待ち受けている未来を想像せず、

決断の時

その身を壊して強大な山の怪物を討ち滅ぼした彼の姿を見て、人々は彼をどう見たのか、？

世界を救った英雄、？

はたまた、悍ましき怪物、？

それは見た人、その己のみしか知ることはない、

しかしながら誰もが目に焼き付けただろう。

そしてその光景を見た人々は、生涯記憶の片隅に残り続けよう、

咲風隼

山の怪物と相打ち、その身を滅ぼす、

真つ暗闇、ゆっくりと身体が落ちていく、

ただ一つの痛みも無く、ただ一つの癒しも無い。

『ひとまず、一人で生きていくさ。．．．取り敢えず強くなる、勿論、あんたよりもな。』

瞬間、脳裏に光景が駆け巡り出す。

『でも、私は永遠を生きる人、貴方はいつかは死ぬ人。．．．生きていく世界が違うの。』

途切れながら、映し出されていく懐かしい光景。

『僕は沢山斬りました、良い物も悪い物も。そうして、この剣筋に行き着いた、。隼君、君の斬ってきたものは何ですか？』

言葉もなく、それを眺め続ける。

『隼は英雄だ。少なくとも、私にとっては英雄だ。』

あの時と全く同じ景色、全く同じ声。

『黙れッ！お前なんか、誰も守れない、弱かった僕の気持ち分かるのかアアアアアアアア!!』

全く同じ雰囲気、全く同じ響き方。

『隼、貴方は人間の死について、どう思いますか？』

まるで当時に戻ったかのように、はっきりと映し出されていく数々の光景。

『生きたいですッ！もつともつと皆さんと一緒にいたいッ！』

自分自身も、全くもって変わらない感情。

『俺の夢は、この街の人全員を守ることだ。何かあるって分かかって動かない訳にはいかない！』

やがて、その投映も終わりに近づく。

『おはよう。隼君。』

瞬間、俺の身体は地面に激突する。
痛みは無い、不思議な感覚だ、

「……んん、何処だ、？」

辺りを見渡すと、何処までも広い真っ白な世界。

直後、背後から声がする。

同時に微かな足音。

「……面と向かって会うのは、随分と久しぶりだね。」

「・・・ヴァル、」

振り向くとそこには、一人の女性。

しかし、此度は姿がよく見える。

漆黒の長い髪、整った顔立ち、少し低い身長。

そして、黒と赤で出来た和装。

「どうだい？この和装。君の着ていた服の色を真似てみたんだが。」

和服をちらつかせながら、ヴァルはそう言う。

「ところで、どうだったかな？君の記憶から投映させてもらったんだけど。」

「・・・あの光景、お前が見せてくれたのか。・・・教えてくれヴァル。お前は何だ？」

服を見せるヴァルに対して、俺はそう問いかける。

「・・・そうだねえ、話すと長くなるんだけど、」

「それでもいい、話してくれ、。」

ヴァルは考え込む仕草をする。

辺りに静寂が流れる、

しかし、直ぐにその静寂は破られる。

「隼君、一戦私とどうかかな？・・・話すより、そっちの方が早い。」

「・・・」

ヴァルの言葉に重みが重なる。

顔つきも、先程と変わらないのにも関わらず、真剣みを帯びている。

「・・・分かった。」

「よし、！本気でかかってきて！」

俺は右手に力を込め、一言告げる。

「generate command、、極夜。」

瞬間、右手に使い込まれた黒刀が握られる。

手の形に収まる柄、慣れた重量。

紛れもなく、今まで生きた証の一つ。

「いくぞ、ヴァル。全力で、！！」

「うん、全力で来て。」

瞬間、脚に力を入れ急加速し、一気にヴァルへ急接近する！

「・・・極夜、！！」

見たところヴァルは武器で戦う戦闘スタイルではない。

ならば、恐らく弾幕を、

急接近して一気に叩く、！！

「・・・さあ受けてみる、ヴァル！！」

更に加速させ、ヴァルの上を取る！
この位置なら、最大威力だ、!!

「奈落ッ!!」

瞬間、身体全体の力を乗せ、黒刀を振り下ろす!!

「・・・なッ、ー!」

しかしその一撃は、思いがけない音を立てて止まった！
更に間髪入れず、もう一度同じ音が鳴り響く！

「げ、剣、?!?!」

ガキンと鳴った金属音、それと同時に俺の身体は背後へ吹っ飛ぶ。

「・・・ヴァル、一体何処からそれをッ、!?!」

吹っ飛ばされる身体の体勢を上手くコントロールしながら、地面に着地する。

その途中、剣を握ったヴァルの姿を見た、

「・・・お前、その剣は、!」

ヴァルが剣を鞘から抜き取った仕草などなかった、
更に言えば、ヴァルは鞘さえ身につけていない、!

「一体何処からそれを、と言ったかい?・・・さあね、でも、それは君の相手の台詞だよ。」

「・・・ま、まさか、」

「ふふっ、じゃあ、次はこつちからいこうか。」

次の瞬間！ヴァルの姿が一瞬にして消えた！
間髪入れず、真横に鋭い風が吹く！！

「なッ!?、瞬間移動!？」

「さあ、受けてみて!!」

直後、ヴァルの周りに無数の武器が現れる!!
確信した！この能力は、!!

「generate command!!」

アイギスの盾!!

ガゴン！と鈍い音！、連続して盾に無数の武器がぶつかる！
が、次の瞬間！

「・・・それじゃあ防げないよ!!」

ピシツと盾にヒビが入り、間髪入れずに盾が木っ端微塵に碎ける！

「ッ、！アイギスの盾が、!？」

「ほら、隙あり!!」

続けて第二撃、凄まじい速度で剣が迫る！

「し、瞬間移動!!」

そう叫び、少し離れた位置へと移動する。

その位置から、再びヴァルと相対する。

「ヴァル、お前の、その力は、」

優しい笑みを溢しながら、ヴァルは答える。

「そう、私の能力は君と同じ、『あらゆる武器の具現化』。正確には、元々私の能力だけどね。」

「・・・じゃあ、何故俺は、お前と同じ能力を持っている、？お前が、俺に同じ能力を与えたのか、？」

「・・・いいや、違うよ。」

次の瞬間、ヴァルは俺の真正面に瞬間移動する。
そして、俺を指差してこう言った。

「それは紛れもない君の能力だ。ただ、私はそれを引き出しただけ。」

・・・俺の能力、だと、？

そんな訳、ごく普通の人間が、あんな能力を手に入れる理由が、

「おや、納得いかなさそうな顔をしているね。確かにこの能力は凄まじい能力だ。扱い易さは置いといて、ね、。」

「・・・ああ、とんでもなく負荷がかかる能力だよ、。」

最初の能力使用を思い出す。

まだまだ未熟だった、いっぺん挫けそうになったあの瞬間。

「じゃあ、教えてあげるよ。君が私の同じ能力を持ち得た理由。・・・それは、」

一度ヴァルは間を開ける。

そして、ゆっくりとそれを語った、

「私の本当の名前は、”天照”。君の元いた世界の、天照大神だ。」

その言葉を聞いた瞬間、全身に凄まじい稲妻が走った気がした。まるで、本当に雷に撃たれたのではないかと言うほどの衝撃が、

「あ、天照、!?!」

天照大神、ヴァルは確かにそう言った、
更に、俺の元いた世界の、と言った、

「そして、君が私と同じ能力を得た理由。・・・それは、君が私に最も良く似た、私の遠い子孫だから。」

「・・・し、子孫、？お前に、最も似ている、？」

「うん、考えても見てよ。瞬間移動なんて技、私が与えただけで身につくような技だと思うかい？・・・君には、元々それを身につけるような素質があった。」

確かに、瞬間移動なんて人類にとって夢のような技だ。それを簡単に身につけられたのには疑問を抱いたけど、
というか、俺がヴァルに最も似ているってどういうことだ、？

「ああ、見た目の話じゃないよう。」

まるで俺の考えていることを読み取ったかのように、ヴァルはそう言った。

「性格とか考え方とか、生き方とかの話。昔の私なんて、君と瓜二つだった。」

思い出に浸るように、上を見ながらヴァルは話す。

「そして、今まで君がいた世界は、いわばパラレルワールド、並行世界だ。」

「パラレル、ワールド、」

誰しもが、必ず一度は聞いたことのある言葉。

パラレルワールド、その世界と並行する別世界。

「多少の違いしか無い並行世界もあれば、全くの別物に見える並行世界もある。君の元いた世界と今までの世界は、かなり近い世界かもね。」

「・・・さて、これから君はどうする?」

「えっ、?」

「えっ?、じゃないよ。このままここに居続ける気だったのかい?」

呆れた顔を浮かべて、ヴァルはやれやれといった素振りを見せる。

「・・・いや、でもどうするったって、」

「確かに君の身体は消失した。まあ、どちらにしても君は死んでいただろうけどね。」

瞬間、光景がフラッシュバックする。

俺は血を流しながら空へ浮かんで、でもって、

「・・・最後のあれは、一体、」

「あれはね、私の能力の本来の力。『あらゆる武器の具現化』という能力の真髄だ。」

「・・・能力の、真髄、?」

「うん、”武器”っていうのはね、ただの戦闘の為の道具じゃない。いつ何処で作られたか、誰がどう使ったか、それによって意味は変わってくる。言わば、ありとあらゆる物に対しての、一つの象徴でもある。」

いつ何処で、時代背景、その時代がどんな時代であったかを指す。

誰がどう使ったか、その武器の使用者、どのような用途や感情で扱われたかを指す。

見た目が全く同じ武器であろうと、中身自体は何もかも違う。

「そして、それら全てを許諾した時、又は計り知れない程の圧倒的に強い感情が芽生えた時、この能力は真髄へと辿り着く。君の場合は、後者だね。」

「死の直前、それが最高潮に到達したってことか。」

「そういうこと。でも、まだ君には能力の真髄は早かった。結果として、己の身を滅ぼすことになった。」

「・・・まだ、力が足りなかったのか、」

俺はそう吐き捨てる。

しかし、ヴァルは俺に微笑みかけてきた。

「いいや、君はよくやった。同じ能力を持つものとして、私の子孫として、誇らしいよ。」

「っ、あ、ありがとよ、。」

こんな面と向かって、それも直球に褒められるのは初めてかもしれない。

小っ恥ずかしさ半分、嬉しさ半分だった、

「さて、話は戻るけど、君はこれからどうしたい？」

「・・・どうしたいも何も、俺は死んじまって、」

「私は君がこれからどうしたいかを聞いてるんだ。生死なんか関係ない。」

俺の話を遮ってきたヴァルの言葉は、とても重みがあった。

緊迫感あり、圧迫感あり、そして、安心感があった、

「さあ、決断の時だよ。・・・このまま死を選ぶ？それとも、？」

「・・・ヴァル、俺は、」

T
o
b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

完 p
a
r
t
l.

i
n
f
i
n
i
t
e

w
e
a
p
o
n

戦妖流儀

開幕

・・・アンタらほんツと物好きなヤツらだな、

毎日毎日この甘味処前に集まって、そんなに愚痴のような昔話が面白いかい??

ハア、来ちまったんだったら、暇潰しがてら話してやらア

昔むか、し、いや、そんな大昔のことではねエが、

今のなつてはそれなりに平和だが、数百年前はここはかなり荒れてたんだぜ、?

あらゆる妖怪が跋扈して、力のない人間を襲ってな、

だが、時代というのは流れゆくものでな、徐々に人間の文明は発達し、妖怪の勢力は推され始めた、、

ん?別に良くないか、つて?

それがなあ、物事には、均衡つてもんが必要なんだよ

それに、当然よく思わないヤツだっているだろう?

あゝ、いやいや、面倒な話はヤメだ

じゃあ、昔いた変わり者共の話でもしようか、

その数百年前までは、妖怪つてのはロクなヤツがいねエ、
大体は、己の欲望のままに動く馬鹿な獣だった、
いや、人間も同じだがな、

だが、例外つてのは何処にでもあるモンでな、

そんな、変な妖怪共の、話、、

「はあッ!!」

流れるように振われる竹刀。

木の床を蹴り、正面の相手に一撃。

続けて右前の相手の竹刀を、寸前で躲して二撃。

更に左前の相手の攻撃を払って、間髪入れず三撃目。

攻撃を受けた三人は、声を漏らしながらその場に倒れる。

それを確認したと同時に、その妖怪は竹刀を握った手の力を緩める。

「・・・ふう、、、いだッ!!」

瞬間、頭に強い衝撃が走る。

「ぐ、お、おい！何してんすか！椀さん!!」

その妖怪は頭を押さえながら、目の前の白狼天狗に対して睨みつけ叫ぶ。

「陣君、気を抜きすぎです。もし敵が隠れて残っていたなら、どうする

つもりだったのですか？」

「うっ、で、でもここは道場で、」

「ならばこれからは、ここは紛れもない戦場であると考えて鍛錬に打ち込むように。」

そう言い残して、白狼天狗 犬走権はその場から去る。

頭に打ち込まれた竹刀の痛みにも悶えながら、

鴉天狗の青年、鞍真陣 は去る権を睨みつける。

「あの人、絶対いつか叩き潰してやる、」

文句を吐きながら、床に転がった竹刀を持って道場の中を移動する。

休憩場所に着くや穴や、竹刀を置き座って一息。

布で汗を拭いながら周りの練習風景を見回す。

ふと、五人以上を相手にしてもろともしない、先程の白狼天狗の姿が目に入った。

「・・・はああ、」

陣はそれを見て、深くため息をつく。

ここ妖怪の山では、種族、地位ごとに与えられる仕事が違う。

河童らは主に技術担当。建築や道具の製作などをする。

しかし天狗らは、技術担当もあれば山の警護を担当する妖怪など様々である。

基本的には、下っ端が警護、地位が上がっていくにつれて技術担当へと変わっていく、

鞍真陣は多少の剣の腕前は持っているが、地位としては下っ端の天狗であり、現在は道場で鍛錬を積みつつ、山の警護を生業としていた。

「・・・あ、椀さん、お疲れ様です、」

ブーツと練習風景を眺めていた陣の横に、犬走椀が休憩と座り込んだ。
だ。

陣はチラッと、椀の竹刀が握られた手を見る。

「・・・何ですか。言いたいことがあるなら、言ってもらって構いませんよ。」

「えっ、い、いや！別に何も、」

「・・・そうですか。」

二人の間に、変な空気が流れる。

数秒後、耐えかねた陣はバツ！とその場から立ち上がる。

「あ、あの！俺、少し外の空気吸ってきますー！」

椀の返答を待たずに、陣は走って道場の出口へ向かった。

陣は道場を出てから少し山を下りて、誰もいないことを確認したと同時に真剣を引き抜いた。

丁度背丈ほどの銀色の刀は、太陽の光を反射して陣の顔を照らす。

「…一体どうしたら、あんな風に刀を振るえるようになるんだろう。」

脳裏に椀の竹刀を振るう姿が過ぎる。

陣は最近やつとのことで下つ端天狗三人をギリギリ相手に出来る程になったが、対して椀は更に多い相手を最も簡単にいなしている。

まだまだ、刀の腕が椀に並ぶことはない、

「ふうう、はあツツ!!そりゃあア!!」

刀を真つ直ぐに構えて、バツテンを描くように空を斬る。

「…チツ、遅い!!」

頭の中で理想の動きは想像出来ているが、どうしても身体がそのように動かない。

毎日毎日鍛錬を積んでも、理想に届かない自分に舌打ちをする。

「こんなんじゃないかった、あの時見た剣さばきは、もっともつと鋭く滑らかだった、」

ため息をつきながら、その刀を納刀する。

そして倒れ込むように、落ち葉の覆い被さった地面へと寝っ転がった。

静かな山に、穏やかな風が吹き抜ける。

「って、何してんだよ俺。…はあ、とつとと戻んねえと、」

その直後、十数人ほどの武装した天狗たちが山を下って行くのが陣の目に入った。

更に、静かだった山が徐々に騒がしくなっていく。

「何事だ、？」

陣はそこに呆然と立ち尽くす。
が、その次の瞬間、

「んん？・・・おいアンター！そこで何やってんだい！」

山を降っていく天狗の一人が、叫ぶように声をかけた。
そのまま、その天狗は陣の元に近寄る。

「あ、すいません。少し、休憩を入れていたもので、
「ああそうか、休憩中悪いな。」

そう言つて、天狗は立ち去ろうとする。
が、それを陣は呼び止めた。

「待つてくださいい！・・・この騒ぎ、一体何事ですか？」

「え？・・・ああ、別に大したことじゃあない。どうやら離れの村の子
供達が、間違えてこの山に入っちゃまったみたいでな。」

「その補導、というわけですか？」
「ああ、そうだ。ま、直ぐに終わることさ。」

そう言い残して、再び天狗は山を下って行った。

「なら、俺は一体道場に戻ろうかな、。」

山を下りる天狗たちを見送った後、

服に付着した落ち葉を払って、陣は山を登ろうとする。

が、その瞬間、！！

「・・・ん？あれ、何か変な気配が、」

少し下った場所辺りから、何かの気配を感じ取った。
天狗でも河童でも、妖怪ですらないその気配を、

嫌な予感を感じ、陣はその方向へと走り出していた。

「確か、この辺から、」

木々を躲しながら飛行し、その気配を感じたところへ到着する。

しかし、誰の姿も見えない。

が、その直後、少し進んだ場所にある壁のような岩の横に、何人かの人の子供が歩いていた。

「な、なんだ、さつき言ってた人の子供たちか、！」

ひとまず安心と、陣は肩を撫で下ろす。

そして、その子供たちを補導しに行こうとした。

「おーいー！ここは立ち入っちゃいけないところだよー！」

陣は歩きながら、そう子供たちに呼びかける。

が、その瞬間!!

ピシッ!と、何かが砕けたような音が鳴る。

「……ッ!ま、まずい!!!」

慌てて陣は羽を羽ばたかせ、一気に子供たちの元へと飛ぶ!
が、時すでに遅しであった、

バギイイン!!という爆音と共に、壁のような岩が崩れ落ちた!

「危ないッ!そこ避けて」

必死に叫ぶが、無常にも崩壊した岩は子供たちを襲う、

その瞬間、鞍真陣は見た、

彗星の如き速度で振られる一太刀を、
間髪入れず叩き込まれる、まさに理想の剣筋を、
次に瞬きをした瞬間、既に大岩は粉々までに斬り刻まれていた、
そこに残っていたのは、崩れた岩に怯えていた子供たちと、
岩を一瞬で粉へと変えた一人と鴉天狗、
真っ黒な黒髪に、黒と赤の入り混じった動き易そうな和服。
その右手には、刃こぼれすら目立つ一本の刀。

直後、その鴉天狗はその場を去ろうとする。

「ちよ、ちよつと待ってくれ！」

その呼び掛けに、その鴉天狗はゆっくりと振り向いた。

「あ、あの、あんだ、名前は、」

「・・・咲風、隼、」

その鴉天狗は、静かにそう名乗った。

第一章・妖怪攻防編 目覚め

ゆつくりと瞼を開け、そこに見えた景色。

それは飾り気のない、ごく普通の和室の天井だった。

周りを見渡すと、きちんと片付いた部屋の風景が広がっていた。

そして、背中に温かい毛布の感触と、不自然な違和感、

自分の服装を見ると、何処かで見たような色合いの和服。

それも中々動き易そうな。

「……此処は、？」

起き上がろうとするも、思うように身体が動かない。

まるで、別人の身体を操作しているかのような感覚。

やつのことで力が入ったと思えば、また別の部分の力が抜ける。

「……あつ、起きたんですね！」

襖を開く音と共に、足元の方から一人の声が聞こえた。

動きづらい身体を必死に動かして、その方向へ向く。

「……文？」

そこにいたのは、しっかりと目覚めのある姿。

黒髪に赤い眼、

そして、少し変わった赤い帽子。

「ああ！あんまり動かないほうが良いです！」

「え、？いいいや、大丈夫だよ。」

「大丈夫じゃないです！かなり疲弊してたんですから！」

咄嗟に文は駆け寄り、無理やり動かそうとする身体を止める。

「そ、そっか、じゃあ、少し休ませてもらおうかな。」

文の気迫に負け、有り難く再び寝転がる。

スーツと力が抜け、再び身体に安息が訪れる。

それに合わせて、真横に文は座り込んだ。

「ええつとく、何から聞いたら良いんですかね？」

「・・・そうだね、まあ、返せる限り返すよ。」

そう言うと、文は少し考え込む。

数秒後、文はゆっくりと口を開いた。

「・・・隼さん、その羽、何ですか、？」

「・・・羽？」

「その、背中の、」

恐る恐る、ゆっくりと身体を起こして背中を触る。

そこには、人の背中にはない不思議な感触が、

「・・・」

「・・・あ、あのく、？」
「・・・」

俺の背中には、黒い羽が生えていた、

「・・・文、これ、本物だよね？」

「た、多分、、」

「・・・また、随分と厄介なこと、」

「あつはっは！別に良いじゃない！」

「天魔、良くないよ全然、」

隼がようやく身体を動かせるようになった頃、その家に天魔が訪れていた。

現在は、居間で三人が話し合っている。

「でも、驚きましたよ！山を散歩してたら、地面に隼さんが転がってたんですもん！」

「文、よくそれが俺だと判断できたね。」

文の話では、山の中に倒れていた隼を、自分の家に運び込んだという。

「あややく？一体どれほどの付き合いだと思ってるんですか！」

「・・・そんなにかい？」

文は自慢げに話す。

対して隼は、苦笑いを浮かべる。

「・・・さて隼、その羽は一体何の仮装だい？」

「さあ？俺も知りたいよ。」

背中に生えた羽は、偽物でも見間違えでもなく本物の羽だった。
隼はその羽を広げて、少しはためかせてみる。

「隼さん、一体何があったんです？」

「・・・」

『さあ、決断の時だよ。・・・このまま死を選ぶ？それとも、？』

『……ヴァル、俺は、まだ、やらなきゃいけないことがある。』

『……』

『死ぬわけにはいかないんだよ。まだ、』

『……いいよ、多分それは君の本心だろうし。……ところで隼君。君と私が最初に会った時、私なんて言ったっけ？』

『へ？いや、流石に、』

『そりゃあ覚えてないよね。……だから、こっちが勝手に選ばせてもらうよ。』

『ちよ、お前何言って、』

『さあ、再び君が飛翔する瞬間を心待ちにしてるよ。……君の造語で言うなら、こうかな、generate command!!!』

「……ごめんね、とても話せるような内容じゃないんだ。だから、そういうことにして貰えないかな？」

居間に沈黙が流れる。

が、直ぐにそれは切り裂かれた。

「……分かった。そういうことしておくよ。」

天魔が言うと同時に、文も笑みを浮かべて頷いた。

「それより、隼さん。」

「ん、何だい？」

先程までの重い空気を入れ替えるような口調で、文は口を開いた。

「なんか、、雰囲気変わりましたね！」

「え、そ、そうか？」

「ええつとく、大人っぽくなったっていうか、」

「何、今まで俺が子供っぽかったってことかい？」

「い、いや！そういうことじゃないですけど！」

「……まあ、ありがとう。」

必死に否定する文に対して、小さな笑みを浮かべて隼はそう言った。

「て、天魔様ツ!!」

その瞬間、外から大声で叫ぶ声。

更に室内まで伝わるほど、山の雰囲気为重くなっていく。即座に天魔は何事かと立ち上がり、文の家の玄関へと向かった。続くように文と隼も外へ出る。

「おい！何事かッ！」

玄関を開けたと同時に、山全体に響くほどの声を上げた。

すると一人の白狼天狗が、息を切らしながら天魔の前に走って来て通達をする。

「ハア、ハア、ほ、報告します！」

肩で息をしながら、その白狼天狗は状況を伝える。

「・・・そうか。」

伝え終わると同時に、再び白狼天狗は走り出した。

天魔は考え込むような素振りを見せる。

「天魔様、一体何があつたんです？」

「・・・いや、大したことではない。どうやら、人の子供たちが山に入ってしまったようだな。」

「なるほど、現在捜索中ということですか。」

「ああ、すまないが、文も捜索に出てくれるか？」

「了解しました！」

そう言うと、文は翼をはためかせる。

辺りに風が吹き荒れる。

瞬間、凄まじい速度で文が飛び上がった！

文の姿が一瞬にして消え、数秒で二人の見えない場所まで飛んでいく。

「・・・さて、私も戻らなくては。またな、隼。」

文の姿を見送った後、天魔も飛び上がり山の上の方へと飛んでいった。

家の前に残された隼。

が、直ぐに彼も行動を開始する。

「・・・generate command、」

いつも通りのフレーズと共に、能力を使用する。

が、何も起きない。

「・・・能力も使えなくなっているのか。・・・まあ、別にいいけどね。」

ふと文の家の前を見ると、そこに古びた刀を見つける。

隼はそれに歩み寄り、そっと刀の鞘を持ち上げ刀身を露わにした。

現れた刀身は、刃こぼれが目立ち少々錆びていた。

「・・・さて、これで何処までやれるかな。」

隼はその刀を持ち、和服を整えて下山し始めた。

「……！」

暫く下山していると、ふと嫌な気配を感じた。
人の気配ではなく、何かが崩れ去っていくような気配。

「……向こうの方かな。」

足に力を込めて、思いつきり地面を蹴る。

すると、今までに感じたことのない程の速度で景色が流れていく！
まるで身体全体が弾丸になったかのように！

「おお、凄い！これが鴉天狗か！」

空中で身体を捻りながら、次の木へと移る。
再び足に力を入れて、思い切り木を蹴った。

「……さて、こっちの方で気配がしたと思うんだけど、」

暫く山を下ると、人の声が聞こえた。

辺りを見渡すと、下の方に人の子供たちの姿を確認する。
おそらく、あの子達が山に入ってしまった子供たちだろう。

「よかった、早々に見つけられて。」

俺はその子達の元に歩み寄ろうとする。

が、その瞬間、次は確実に耳に捉えた。

これは、岩が崩れていく音、

それも、このままだと子供たちが下敷きになってしまいう位置の岩から、

「不味い、！」

無意識に、俺は鞘から刀を引き抜いた。

その直後！一気に岩が崩れ落ちる！！

「間に合えッ、」

子供たちの頭上を覆うように崩れる岩に対し、電光石火の如くその刀を振り抜いた。

その一太刀は地面へと辿り着く前に岩の芯を捉え、真つ二つに切り裂いた。

間髪入れず二撃、三撃、四撃、

「・・・はあッ!!」

やがて岩は形を失い、粉微塵になった。

そして、山を吹き抜ける風に攫われ、跡形もなく消えていった。

地面に着地すると、少し離れたところに一人の道着のような服を着た鴉天狗の姿が、

俺は刀に付着した埃を振り払って納刀し、辺りを確認する為下山することにした。

「ちよ、ちよつと待ってくれ！」

瞬間、その天狗が声をかけてきた。
俺は一度足を止め、その声の方向を向く。

「あ、あの、あんだ、名前は、」

突発的にそう言われた。

それも、かなり息を切らしながら。

「・・・咲風、隼、」

その鴉天狗の青年に向けて、俺はそう答えた。

疾走

山の中を静かな風が吹き抜ける。
木々の葉が擦れ合い、ザワザワと音を立てて蠢いている。
その山の中腹にて、二人は出会う、

今、俺の目の前に、一人の鴉天狗が立っている。

それも、直前に凄まじい剣撃を見せつけられた相手だ、

ただ、話しかけたはいいけど、

「……何か要かい？」

「……えっ、いや、」

し、しまった、

ついつい咄嗟に話しかけてしまって、結局何を話したらいいのか分からねえ！

め、めちやくちや気まずい、

「……君の名前は？」

「へっ、？」

俺が何も話せないでいると、先にその鴉天狗の人からそう聞かれた。

かなり静かで落ち着いた声だった。

「あ、その、鞍真陣、です、。」

声につまりながらも、俺は自分の名を名乗った。

「ああ、敬語じゃなくていいよ。．．．少し聞きたいことがあるんだけど、ええつと、陣、でいいかな？」

「へ、？、あ、な、なんでしよう？」

そう返すと、その人は複雑そうな顔でこめかみを少し搔く。

「敬語じゃなくてもいいんだけど、まあいいか。聞きたいのは、今の状況だよ。細かく説明できるかい？」

「状況説明、ですか、？」

「ああ、いまいち理解できてなくてさ。人の子供たちが山に入り込んでしまったっていうのだけは、分かるんだけど。」

「ええつと、そうですね、」

俺は今のこの状況について話した。

「．．．なるほど。じゃあ引き続き搜索しなきゃね。」

その瞬間、山の木々たちが一斉にざわめいた気がした。同時に、山の麓から嫌な気配が、

「何だ、今の、」

全身に鳥肌が立つような、異様なまでに悍しい気配。
突然に身体が痺れたような感覚。

次の瞬間、真横から疾風の如く一人の影が飛び出した。
古びた刀を腰につけ、和服を風に靡かせながら山の麓へと飛び込んでいく。

「ちよっ！何処いくんすか！」

そう叫ぶと、その人は俺の方を振り返り、ニヤリと笑った。
続けて、右手を出して手招きをする。

その一瞬、まるで時の流れが遅くなったかのような感覚を味わった。

直後、既に足は動き出していた。

「なんだよ、、、ついて来いってことかよ！」

一気に足に力を入れて、思いつきり蹴る。
俺を手招いたその影を追うように、木々の中へと入っていった。

秒単位で変わっていく景色。

顔や体に当たりかける木の葉や枝。

俺を招いたその背中を、最高速度で飛行し追う。

「はぁあッ!!」

かなり背中が近づいた辺りで、俺は更に羽を強く羽ばたかせて加速する。

近づく度に強く、強く、段々加速していく。

この人、動きはそんなに速くない!

よし!ここで少し見返してやるか!

そして後2回、加速を入れたところでギリギリまで追いついた!

「しゃア!!隼さん!追いつきましたよ!」

「・・・やるね。」

真横に並び俺はそう叫んだ。

すると、また隼さんはニヤリと笑った。

余裕かましやがって、もう一段加速して追い抜いてやらあ!

「じゃあ、これはどうかな?」

俺がもう一段加速し、追い抜いてやろうとした瞬間、その人は少し減速し横にはけた。

「えっ?ちよ、何を、」

そのまま隼さんは近くの木に近づき、そこに片足を置き、

「さあ、ついて来い!!」

その瞬間！風が荒れ狂った！

真横を目に見えない程の速度で、その姿は駆け抜けていった！

「はッ!？」

続けて速度を落とさず、また次の木を蹴って加速。

さっきの速度とは比べ物にならない！

「なッ、何だよこの人！常識外れが過ぎるっての!!」

俺も必死で全身に力を入れて加速する。

が、全くもって追いつく気がしない！

意味分かんねエ！木を蹴って加速するってどういう技だよ!!

「ハア、！ハア、！、クソッ！追いつかねえ!!」

が、次の瞬間、正面に沢山の木が並んでいるのを確認した。

もはや、隙間ほぼ無しの壁だ。

が、隼さんは全く速度を落とさない！

「ちよ、ちよっと！その速度じゃタダでは済まねえって!」

周りの景色など見る余裕もなく、前方を確認することさえギリギリなこの速度！

もしぶつかりでもしたら骨が粉々に砕けちまう！

その時、隼さんは口を開いて何かを言った。

「減速？通れる隙間があるじゃないか。」

声は聞こえなかったが、口の動きでそう言ったのが理解できた。

その次の瞬間！隼さんは空中で体勢を変え、ごく僅かな隙間を抜けていった！

それも、一切の減速無しに！！

「いッ!？」

直後、何事もなかったかのように再び木を蹴って加速する！

あの人にとって、今は迷うに値しないものだったのかよ！

そう考えているうちに、俺の目の前にもその木々が立ち上がる。

「ーッ!!」

それを躲す為に、上へと方向を変える。

だって上に飛べば何の危険もないんだから!!

「ああッ!!ヤメだヤメだ！俺だってそのくらいやってやるよ!!」

方向を変える直前、俺も体勢を小さくして構えをとる！

木々の隙間、その一点に狙いを定めて一気に飛び込む!!
怖いけど、そんなの言つてらんないもんな!

「――駆け抜けろッ!!」

一瞬、視界が真っ暗になる。

身体に痛みや感触はなく、先程までの迷いが嘘だったかのように、その出来事は一瞬で終わった。

「……こ、怖え、」

その木々の隙間を抜けた先、顔を上げた瞬間、地面に足をつけて立つ隼さんの姿があつた。

「ハア、ハア、どんなもんだ、」

「そうだねえ、及第点かな。」

鬼畜だ、この人。

その一瞬、隼さんの笑みから命の危険を感じた。

真剣

瞬間、山に強く響き渡る悲鳴。

「……急ごうか。」

同時に悲鳴の聞こえた方向に向かって地面を蹴り、一気に加速させて山を下る。

目まぐるしく移り変わる風景、身体に打ち付けられ続ける風。

正面から迫り来る木々を瞬発的に躲し続ける。

その直後、最後の木を避け切ったところで、大きな身体が暴れる怪物の姿を目視した。

「ーッ！あいつかッ!!」

俺は一気に速度を上げて、その影目掛けて刀を引き抜いた。

その瞬間、鋭い金属音が鳴り、俺の刀は手と共に弾かれた。右腕に痺れが襲いかかる。

「なッ!？」

慌てて体勢を立て直し、顔を上げる。

「な、何してんすか!」

「……いきなり攻撃を仕掛けようとしていたのかい？」

先程までとは違う、鋭い眼光でその人は淡々と話す。

「いきなりって!、早く仕掛けないと悲鳴を上げてた人たちが」

「だとしても、それは悪手だよ陣。」

「な、ならどうすれば!」

瞬間、その姿が一瞬にして消えた!

同時に強風が巻き起こる!

「うわッ!」

その強風によって、強制的に目が閉じる。

直後、重い物が倒れ込むような爆音。

更に追撃の如く、二度の強風。

『ギョルルオオ、!!!』

そしてトドメの言わんばかりに、悍しい怪物のような叫び声、

「まあ、ざつとこんな感じかな。」
「うえッ!?」

目を開けると、既に隣に隼さんの姿が、
ただ、腕の上に一人の女性を抱えている。

「取り敢えず、襲われてたのはこの人だけみたいだ。おそらく、山に迷
い込んでしまった子供の母親、だろうね。」
「・・・い、いや、そりやあ分かかりますけど、」

『ギャルルルウウ!!!』

その瞬間、再び悍しい鳴き声が辺りに響く。

「ちよ、倒せてないじゃないっすか!!」
「そりやそうだよ。木で押し潰したただけだし。」

俺は刀を構え直して、その怪物と相對する。
そいつはまるで、そこらの百足をそのまま巨大化したかのような怪
物だった。

「大百足だね。そこまで大きさはなから、妖怪になったばかりのも
のだろうか。」

「・・・強いですか、?」

「まあ大きさにもよるけど、強い部類の妖怪だと思うよ。何より、劍術
使いには天敵だ。」

その言葉を聞き、無意識のうちに刀を握る手を強めた。

更に、不思議と闘志が湧いてくる。

身体が震える、恐怖心からではなく、溢れ出る闘争本能から。

「隼さん、俺一人でヤツの相手をさせてください！」

「……」

半身の状態で、俺はそう頼み込む。

隼さんは少し考えるような素振りを見せ、こう答えた。

「……いいよ。ただし、危なくなったら俺も参戦するから。」

「ありがとうございますッ！」

直後、俺は切先を大百足の方へ向け、殺気の眼光を浴びせる。

同時に足へ力を入れ、一気に加速するよう地面を蹴飛ばした！

「はあッ!!」

至近距離に近づいたところで、更に強く刀を握った。

しかし大百足も、接近する俺に気付いて体当たりを仕掛けてくる。

「が、遅いぜノロマッ!!」

余裕を持って体当たりを躲し、

俺は最大限の力を込めて、刀を振り下ろした！

「いッ!?」

その瞬間、身体全体に強烈な衝撃が走る。

毒針を刺されたかのような、全身が痺れる衝撃だった。

振り下ろした刀は、大百足の体軀によって止まった。

ただ少しの傷跡すら入れることもできずに、

「こ、この鋼鉄野郎、!!」

反応した時には既に遅く、俺はまともに大百足の頭突きを肩に受けた。

痛いッ!とんでもなく痛いッ!!

「ガはアッ、!!!」

俺の身体は吹き飛ばされ、地面に倒れた木にぶつかりようやく止まる。

口には鉄の味、肩には刺すような鋭い痛み、意識が、遠のいていく、

「それじゃ斬れないよ。」

その声を聞き、意識が戻る。

全く感情が籠ってないようで、何処か安心を覚える声だった。

「は、隼、さん、？」

「そういう攻撃の仕方なら、金槌とか使った方が向いてる。いいかい？君が今使っている刀は、斬れることのない木刀じゃないよ？」

朦朧とする意識の中で、多くの騒音の中で、その声だけがはっきりと聞き取れた。

「さあ陣、今の最優先は、”倒す”ことじゃない。」

俺は激痛を抑えながら、再び立ち上がる。

刀を再び構え直して、切先を大百足の方へと向ける。

体軀は大きいが、狙いは一点。

最も切れ込みが入れやすい位置を見極め、そこに刀を振るい落とす。

あの人の言う通り、倒すは二の次。

まずは一步、それも初歩的な一步、

「次こそは、”斬る”！」

瞬間、強く一步を踏み出した、

着飾り無き剣撃

「はああッッ!!!」

鼓動する心臓。

乱れていく呼吸の感覚。

それら全てを押さえつけ、全神経を身体中に集中させる。

刀の切先を大百足の方へ向け、速度を緩めることなく一点を狙い撃つ!

『ギャルルアア!!!』

相手は俺より遥かに大きく、本気で振るった刀さえ通さぬ鋼鉄の体躯を持つ、言わば成るべくして成った強さ!

だが勝ち目がない訳では無い、

一寸でも良い、ただ一寸でも刃が通れば、!!

『ギャルルルルウウー!!!』

接近するや否や、大百足はその巨大な体躯を揺らし、鋭い歯を剥き出しに突進を仕掛けてくる。

ギリギリまで引きつけ、ヤツの体躯の隅々まで目を凝らす。

が、

「くッ、分からないッ、!!」

「どこ見たって鉄壁だッ、

切り込みなんて入る訳ないじゃないかッ、!!

瞬間、ヤツの突進を刀に滑らせるようにして躲す！

「ハア、ハア、ッハア、！」

時間が経つごとに、更に息が乱れていく。

傷も痛みも相まって、残された好機はあと数回か、

「・・・一か、八か、」

いや駄目だツ、！！

そういう考えのせいで傷を負ったんじゃないか！！

考えろ、見極めろ、何処ならヤツに切り傷を負わせられる!!

次の瞬間、けたたましい声を上げて、再び大百足が突進を仕掛けてくる！

これもさつきと同じ攻撃か!?

それとも俺が躲すのを読んでの攻撃か、!?

いやそもそもそこまでの知能があるのか、!?

「ッ！迷ってる時間なんかねエぞ!!」

一秒すら経たぬうちに、ヤツの口内が目前へと迫る！

「いや、違う、」

俺は弓矢で股を狙うように、刀の持ち方を変えた。刀を握った右手は顔の真横、そして刃の真ん中辺りを包むように左手を構える。

傷を負わず一点、この土壇場で見つけた、体の表面は刃が通らない、恐らくどの部位も、けど、

「内側からなら、!!」

瞬間、力強く地面を踏み、ヤツの口内目掛けて一気に加速する！上半身の姿勢は変えず、あくまでも弓矢の如く刀を構えたまま。

直後、視界が一気に変わる。

気色の悪い妖怪の口内、一定の感覚で蠢く壁。しかし、鑑賞している暇などない！

「さあ、撃ち抜くツ!!」

上を見上げ、その一点を狙い刀の切先を向ける。

外せば終わり、俺はこのまま喰われて死ぬ。

まさに絶体絶命、死まであと一歩、

「・・・面白エ、」

刹那、視界が一転して変わった。

分かる、空間全て掌握出来る、

死の直前に訪れる、生存本能の極限！

「ツ!!そこだ喰らえエエ!!」

狙った一点目掛けて飛び上がり、
張り詰めた弓の弦を離すように、右手に構えた刀を真上へ突き出した!

直後!ヤツの口内に俺の刀が突き刺さる。

『ギャルルアアー!!!』

口内に響き渡る絶叫。

「さア!突き抜けてやるツ!!」

俺は更に右手に力を込め、刺さった刀を強く押し込む!
当然強い抵抗を感じる、、だけど!!

『君が今使っている刀は、斬れることのない木刀じゃないよ?』

「斬り進めるように押し込むツ!」

釘を打ち込むような感覚で押し込むのではなく、あくまで刀で斬る
ように!!

その瞬間、異様な感覚に当たる。

しかし硬さは無い、つまりヤツの鋼鉄のような体躯じゃない。
つまり、目的の一点と相違ないツ!!

「遂に見つけたぜ、、テメエの目玉ア!!」

瞬間、手首を捻ってその目玉を抉る!

すかさず一旦刀から手を離して、ヤツの口内に足をつける。

そして瞬間的に力を入れて、刀の刺さった位置目掛けて飛び上がった!

刹那、視界が一気に開ける!

美しい森の景色、夕日がかかった空、周りに飛ぶ血飛沫。

俺はヤツの口内から、風穴を開けて脱出することに成功した。

『ギャルルルアアアアアア!!!』

大百足は悲鳴を上げて暴れ回る。

「ツ!そりゃあ死ぬ訳ないよなツ!」

分かつてはいたが、目玉を抉り抜かれた程度ではくたばらない。
次は更に決定的な一打を！

『ギャルウルルアアア!!』

しかし次の瞬間！雄叫びと共にその大きな体が視界から消えていく。

「なッ!!」

大百足は凄まじい速度で走り出し、俺の近くから遠ざかっていく！
だが逃すわけには、

「ーあ、危ねえ!!!」

逃げていたんじゃない。ヤツは標的を変えたただけだった！
大百足の行先には、無防備にさえ見えるあの人の姿が!!
しかし、動き出したとしても時すでに遅し、

『ギャルルルウウ!!』

瞬間、あの人の姿が、大百足の口内へ消えていった、

しかしその瞬間、大百足の頭が消し飛んだ、
本来に一瞬の出来事だった。

冗談抜きに、瞬きを一回するだけしか出来ないほどの短い時間の出来事、

「な、何が、」

ハツとして上を見上げると、そこには抜刀したあの人の姿が、
それも、何故か服に血がついていなかった。

直後、その人は重量に身を任せるように、頭を失い暴れ回る大百足の体目掛けて落ちていく。

そしてヤツの体に寸前まで迫った瞬間、

その剣撃は、少しの派手さも無かった、

遠目から見れば、ただ素早く刀を振るっているようにしか見えないかもしれない。

しかし、見れば見るほど、一切の無駄が無かった、

全ての一振りが確実であり、全てが必殺の一撃。

刀を振るたびに大百足の体は削れ、
やがて大百足は形を失い、空中に塵となり消えていった、

「な、なんて剣撃、」

俺はそれを、傷の痛みなど忘れて夢中で傍観していた。

先と後

「……陣、直ぐにここから離れるよ。」

「へっ?、ちよっ、待って下さいよ!」

一息つく間もなく、隼さんは古びた刀を納刀し、その場から山を登るように歩き出した。

追うように俺も着いて行く。

心地よいそよ風と共に、微かに生臭い匂いが鼻を刺激する。

「……ここまで離れば大丈夫かな。」

大百足を倒した場所から、少しばかり離れた場所で立ち止まり、隼さんはそう呟く。

「大丈夫って、一体何が?」

乱れた息を整えながら、俺はそう聞いた。

「あの周辺、毒霧が充満してるんだよ。」

「……へ?」

すると隼さんは俺の方を向き、

「・・・陣、ちよつと右手を動かしてみて。」
「え？」

言われるがまま、俺は右手を握ったり開いたりしようとしたが、

「あ、あれ、？お、思うように、動かねえ、。」

慌てて何度も力を入れるが、やはり上手く力が入らない。手に負傷を負ったわけでもないのに、だ。

次の瞬間、その右手をパチンと叩かれた。

「痛っ！な、何するん、あ、あれ？」

しかし、右手には一切の痛みがなかった。それどころか、極小の感覚さえない。

「な、何で、？右手は怪我をしてないのに、。」

少し間を開けて、隼さんは口を開いた。

「・・・恐らく、陣の右手は大百足の毒に侵されたんだ。痺れを催す程度にしか侵されていないようだけど。」

「毒って、い、いつの間に、？」

「君がヤツの目玉をブチ抜いた時、身体に浴びたヤツの体液から侵されたんじゃないかな。」

その瞬間、その時の風景を思い出した。今思えば、気色悪くて寒気がする。

「で、俺がヤツの頭を斬った時、少しばかり毛色の違う匂いがした。」
「・・・それが、毒だ　って思ったんですか、？」

そう聞くと、その人は静かに頷いた。

「そう。だからその毒に侵される前に、全身を斬った。・・・邪魔をして悪かったね。」

「い、いや、俺じゃトドメは刺せなかったし、」

結果として、俺がヤツに対して浴びせられた攻撃は一撃だけだ。

その先の算段もつけれていなかったし、

もしあの場にいたのが俺だけだったらと思うと、

すっかり日が落ち、空に転々と輝きが現れ始めた頃。
軋んだ音を出す戸を力強く開け、刀をそばに置く。
そのまま崩れるように畳に寝転がる。
すぐさま睡魔が襲いかかり、瞼が重くなっていく。

『君は、剣士として三流ですね、』

瞬間、遠い記憶が蘇る。

今でも鮮明に覚えている、あの時の衝撃、言葉の強弱までもが、脳裏に染み付いている。

ふと、首を傾けて自分の刀を見つめる。

「・・・じゃあ、教えてくれよ、」

一体どうすりゃ、一流になれんのさ、」

無意識にそう呟き、そのまま眠りについた。

鴉天狗の青年 鞍真陣と別れ、俺は天魔の屋敷へと訪れていた。どうやら今は留守らしく、今現在、居間で帰りを待っている。

「すまないな。色々と手こずった。で、何のようだい？」

暫く待つと、襖を開けて天魔が入ってきた。

「・・・騒動は片付いたのかい？」

「ああ。負傷者なし、行方不明者なしだ。本当に人間の子供が迷い込んでいただけだからね。」

天魔は軽い感じでそう話す。

しかし俺の表情を見るや否や、一変して表情を変えた。

「その顔を見るに、何か一悶着あったんだね？」

俺は和服の懐へと手をつ突っ込み、一本の獣の爪のようなものを取り出した。

それを天魔へと渡す。

「何これ？」

「百足の足の先端。」

瞬間、猛スピードで拳が飛んできた。

「・・・話を最後まで聞いてくれよ。」

腫れた頬を冷やししながら、天魔に向かってそう言う。

「いきなりそんなもの渡されたら手ぐらい出るだろう。」

「別に本体を渡したわけじゃないんだから、ていうか天魔、虫苦手なのかい？」

「もし本体を渡していたなら、今君はこの世にいなかっただろうね。」

私は虫が嫌いだ、悪いか？」

「いえ、何にも。」

このまま言い争いをしても長くなりそうなので、適当に区切りをつけ話の本題に入った。

「山の麓辺りで、大百足って妖怪と遭遇した。」

「これはそいつの足の一つかい？」

「ああ。・・・そいつはちゃんと始末したから問題ない筈だよ。」

「ただ、..」

天魔と話し合った後、暫く考え込んでから口を開いた。

「見回りを強化するべきだね。」

その言葉に対して、天馬の目を見つめながら小さく頷いた。

二つの頼み

「さて、面倒な話は終わりっ！」

そう言っつて天魔は床に寝転がり、一度深く息を吐いた。張り詰めていた雰囲気が一転、この空間に和やかな雰囲気が流れ始めた。

「はあく、疲れた。隼は疲れてないのか？」

「疲れてるよ、もうクタクタ。」

考えてみれば、目覚めてからハプニングの連続。なんてとんでもない一日だろうか、俺も身体の力を抜いて、床に寝転がる。

暫くの静寂の後、天魔がゆっくりと身体を起こした。

「・・・さて隼、ちよつとついてきてくれないか？」
「？」

「さ、入って。」

その後、俺は天魔に一軒の家へと連れてこられた。

その家の周りには何軒もの家が連なっていて、その全てがそこそこ新しい家のようなだった。

が、

「・・・古いね。」

「まあ、実際古い家だからね。でも、家の中は割と綺麗だよ。」

天魔はその家の玄関をガラガラと開け、家の中へと入っていった。

俺もそれに続いて、家の中に入る。

玄関周りを見渡すと、やはり所々古びた様子が目立つが、それなりに立派な建築をしていた。

「さ、こっちだよ。」

短い廊下を歩き、向かって右側の襖の前で止まった。

「さあ入って。」

「この部屋に何かあるのかい?」

「いいからいいから。」

言われるがままに、俺はその襖を静かに開けた。

そこに広がった風景は、何の変哲もないごく普通の和室。

しかし、部屋の中に小さな風呂敷が一つ、

「天魔、あの風呂敷は?」

俺はその風呂敷を指さしながら、天魔にそう聞いた。

すると天魔は部屋に入り、その風呂敷の元へと歩いていく。

「これは多分君の持ち物だと思う。君が倒れていた位置の、少し離れたところに点々と転がっていたんだ。」

「俺の持ち物？」

俺もその風呂敷に歩み寄り、そばに座った。
合わせるように天魔も腰を下ろす。

「開けてみてもいいのかい？」

「当たり前でしょ、いいから開けてよ。」

少し苛立った様子で、天魔はそう答えた。

「じゃあ、開けさせてもらおうよ。」

俺は風呂敷に手をかけ、ゆっくりとその結び目を開いた。

「・・・!!これって、」

目に入ったものは、一つの腕輪。

一切の汚れもなく、真紅の輝きを放っている。

「良かった、消滅しちゃったかと思ったよ、」

「ん？何言ってるのさ。」

「あ、いや、こつちの話、」

風呂敷の中のものは、この腕輪だけだった。

長年着ていた服はビリビリに破れてしまったし、二振りの刀は能力消失によって消えてしまったのだろう。

俺はその腕輪を手に取り、左腕にはめた。

「・・・じゃあ、そろそろ本題に入りたいんだけど。」
「本題？」

天魔の方を向くと、真剣な顔つきをしていた。

「隼、どういう理由かは知らないけど、君は晴れて鴉天狗になってしまった訳だが、」

「そうだね。まあ、結構楽しませては貰ってるよ。」

そう言うと、天魔は少し苦笑いを浮かべた。

しかし、直ぐに真剣な顔つきに戻る。

「さっきの話に戻るけど、これから先、山の警護を強化していこうと思ってる。・・・だけど、今の妖怪の山の戦力はかなり落ちているんだ。」

天魔の話を、俺は黙って頷きながら聞く。

「まあ、それは特にこれといった争いが無いからなんだけどね。」
「・・・それで？」

瞬間、天魔はニヤリと笑みを浮かべた。

「君に二つほど、頼みがある。・・・まず一つ目、これは頼みというより提案なんだけど、。」

「隼、この山に拠点を立てないか？昔、そんなことを言ってただろう？」

「・・・二つ目は？」

「二つ目は単なる頼みだ。・・・是非この山の戦力強化に、君が一役買って欲しい。」

「・・・なるほどね。」

一瞬、俺は考え込む。

しかし、直ぐに言葉は決まった、

「まず二つ目だけど、今直ぐには答えられない。だから後々答えさせてもらってもいいかい？」

「勿論。で、一つ目の提案は？」

「・・・ああ、俺も出来ればそうしたい。」

そう言うと、天魔は満遍の笑みを浮かべた。

「・・・じゃあ決まりだ、この家自由に使っていいよ。・・・それと、明日の日が上がった頃に私の家に来てくれ。」

「ああ、分かった。ありがとう、天魔。」

「いいって。じゃあまた明日、おやすみ。」

「おやすみ。」

そう言って、天魔は帰っていった。

瞬間、疲れからか一気に睡魔が襲いかかる。

「はあ、疲れた。」

そう吐いて畳に寝転がり、目を瞑った。

気づけば、俺は既に眠りに落ちていた、

朝、破壊音で目が覚めた！
慌てて身体を起こし、その音の方向へと急ぐ。

「ちよっ！朝から何さ!!」

一枚、襖を開けると、障子がぶち抜かれ空き埃が舞っていた。
その埃の中に目を凝らすと、人影が一つ、

「あやや、これはどう隠蔽しましょうか、」

「・・・あ、文、？」

「へ？？」

瞬間、目が合った。

暗雲

一瞬、時が止まったかののように、両者の動きが停止する。
沈黙の中、ガタンと物が崩れる音だけが響く、

「……ど、どうした？こんな朝早くから、」

「……あゝゝ、えゝつとですねえゝゝ、」

文は目を泳がせながら、そう誤魔化する。

「そのゝ、そう！こつちに向かう時に勢い余ってぶつかっちゃいました！本当にすみません！」

数秒後、文は慌ててそう答えた。

「……クハツ、まあ、何でもいいや。取り敢えず上がって？」

俺は笑みを溢しながら、文を家の中に招き入れた。

『障子が開かなかったから、無理やり体当たりして壊してしまったなんて言えない、』』

「速攻でお茶入れてきた。文も飲むかい？」

「じゃあ、一杯いただきます！」

湯呑みを二つ取り出し、即興で入れた温かいお茶を淹れる。それを円形の机の上に置き、文に差し出した。

「……で、朝から何か用かい？」

少しお茶を飲んで、落ち着いたところで文に聞いた。文は少々埃被った服を払いながら答える。

「いやいや、別に大した用事なんてないです。ただ昨日、あの後会えなかったし、まあ近所ですし。」

「へえ、そうか……。え、近所なの？」

「へ？」

俺は立ち上がって、障子を開いて外を見た。

よく思い返してみると、確かに見覚えのある光景だった。

特に隣の家、

「……全然気付かなかった。」

「いくら何でも、周りを見なさすぎじゃないですか？」

「疲れていたし、既に真っ暗だったからなあ……。」

一度開けた障子を再び閉め、元いた位置に座り直す。

「……そういえば、昨日あの後何があったんですか？」

「ん、まあちよつとね。」

お茶を飲みながら、誤魔化すようにそう答えた。
文は少し顔を顰めるが、直ぐに笑みを浮かべた。

「・・・それで、この家は慣れました?」

「昨夜来たばかりだよ?・・・それより、この家を手配したのは文かい?」

「いいや、私は私の家に隼さんを運んだだけですし、」

『私だよ。』

瞬間、背筋に悍ましい程の悪寒が走った。

恐る恐る、二人は背後へ振り向いた。

「・・・あー、おはよう天魔、。ご機嫌いかが?」

「ど、どうされました!?何処か痛むんでしょうか!?!」

そこに立っていたのは、漆黒よりも暗く重い表情をした、天魔の姿が。

「あんた達には、言いたいことが山ほどあるけど、。まず最初に、」

その刹那、雷が二度落ちた、。

「で、何か言うことは？」
「すみませんでした。」

怒りを収めない天魔に、俺と文は頭の痛みを抑えながら、正座して頭を下げた。

天魔は深くため息を漏らす。

「つたく、約束はすつぽかす！速攻で家は壊す！！」

そう吐き捨てながら、天魔は机を叩く。

「わ、悪かったって。お詫びに何かしらするからさ。な？」

「そ、そうですよ！今後はこんなことがないようにしますから！」

俺と文は、二人揃って必死に天魔を宥める。

それを聞いて、天魔は一段と深くため息をついた。

「はあ、もういいよ。」

そう吐き捨て、天魔の前に置かれたお茶を勢いよく飲み干した。

「それで、どうするか決めたかい？」

「・・・昨日の話か？」

「ああ。私としては、早く君に決めてもらいたいのだが。」

先程までの天魔の口調とは打って変わって、一段と冷静かつ真剣な口調でそう言った。

「・・・それなんだけど、一度この山の道場に連れて行ってくれないかな？」

そう言うと、天魔は驚いた顔をする。

「・・・あれ？私、君に道場があるなんて言ったっけ？」

「いいや、言われてないよ。ただ昨日、道着を着た鴉天狗の剣士に会ったんだ。だからあるのかなって。」

その時、彼の姿が頭に過った。

荒削りだったが、確かな闘士、戦いにおけるの切替と対応力。

「ふふっ、性格や口調は変われど、性根は全く変わってないな。」

直後、天魔はその場で立ち上がり、廊下へと通ずる襖を開けた。

「ついてきて、隼。」

妖怪の山から、少しばかり離れた村の跡地、
荒廃しきったその地に、薄暗い暗雲が立ち込めていた、

「アレがやられたのは意外だったが、そんなの妥協範囲だ。まだ状況は、僕の掌にある、!!」

「フン、逆に良かったではないか、儂等の前に雑魚を放っておいて。これで多少は奴らの手も緩まるだろう。」

道場の乱戦

「はあッ！」

「そりやあア!!」

天魔に連れられ歩くこと約10分。

俺たち二人は、立派な作りをした木製の道場に訪れていた。

ドタバタと裸足が駆け回る足音、攻撃と共に吐き出される叫び声。

この雰囲気、いつかの光景を思い出す、

「・・・あれ、そういえば文は？」

「ん?、ん、まあ、ここをあまり好かない奴も多く居るのさ。」

苦笑いを浮かべながら天魔はそう答える。

要するに、文はあまり来たくないということだろうか？

「文はそんなに戦いを好む奴じゃないからね。」

「・・・成る程、やっぱりお前は鬼畜だね。」

その瞬間、この山への二回目の訪問時のことを思い出した。
確かあの時は、

「・・・やっぱりやめよう。」

「ん?何が?」

「いや、何でもないよ、。」。

改めて、こここの道場の鍛錬風景を見つめる。

見る限り、天狗以外の種族は居ないようだった。

竹刀を振るう者もいれば、拳を振る者もいたり、中には木で出来た薙刀を扱う者まで、

各々が自分なりの戦闘スタイルで鍛錬を積んでいる。

まだ荒削りながらも、その熱い空間を見入ってしまった。

「……じゃあそろそろやろうか。」

その時、天魔はそう呟いた。

ニヤリと不敵な笑みを浮かべながら。

次の瞬間、天魔は俺に一本の竹刀を渡してきた。

俺は何となくその竹刀の柄を握った。

「……ん？何さ天、」

瞬間！背中に押し蹴り出す衝撃が走る！

「魔!?!」

「いいからいいから!」

衝撃に対して一度は耐えるも、流石に意表を突かれた上に天魔ほどの力、俺の身体は道場の練習下へと押し出された。

「はいッ！乱戦開始ッ!!」

直後、天魔の掛け声と共に、場の雰囲気が一転して変わる。先程まで鍛錬としての空気だったのが、一瞬で戦場へと成り変わった。

各々が素早く相手を見つけ、力と力、技と技をぶつけ合う。

参った、負けたと思った者は壁の方へはけていき、力ある者だけが次の戦いへと臨む。

勿論、この身もその戦いへと巻き込まれていく!

「取り敢えず、生き残れってことでいいんだな?」

瞬間で体勢を立て直しつつ、一呼吸置く。

竹刀を右手持ちに替え、足を強く踏ん張る。

強制参加は不服だが、これも歓迎と思おうか!

「おりゃあッ!!!」

瞬間、背後から竹刀の一撃を察知する。

すぐさまその攻撃に反射して、身体を仰け反らせて躲す。

「なっ!?!」

その白狼天狗は驚いたような顔をして、慌てて次の攻撃に転じようとする。

が、その一瞬の隙が命取り。

「先ずは一勝っ！」

倒れ込む体勢から一気に身体を捻り、そいつの竹刀を弾き飛ばした。

敵の攻撃からくる隙を突く、反撃の構えからの一撃。

武器を失った白狼天狗は、降参だと手を挙げて端へと去っていく。

「……さ、ちよつと攻めてみようか！」

床を強く蹴り、乱戦下へと身を投じていった。

次の瞬間、目の前に一人の鴉天狗が立ちはだかる。

得物は所持しておらず、顔の前に拳を突き出す構えを見る限り、素手での戦闘スタイルか。

「武器使えないからって、舐めんじゃねえぜ!!」

その鴉天狗の一言が合図となり、そいつは床を蹴飛ばして一気に加速する。

依然として刀は右手、狙いは返の太刀。

「勿論、手を抜くつもりなど毛頭ない。」

瞬間、そいつの左手に強く力が入り、素早い一撃が放たれる。

「さあ受けてみろッ!!」

一瞬の間も無いほど速く、その拳が目前へと迫る!

その刹那、その迫る拳の前に竹刀を構えた。

しかし強くは握らない。あくまで狙いは返しの一撃。

直後、鴉天狗が放った一撃によって、俺の竹刀が弾かれる。すかさずそいつは、トドメと言わんばかりに二撃目を構える。

「……なッ!!」

しかしその構えようとした瞬間、俺はそのまま身体を回転させる。更に弾かれた竹刀に、相手の攻撃の勢いを乗せ、一気にそれを振り抜いた。

見事にその一太刀は、構えていた相手の腕を捉えて弾いた。

「狙い通り。」

すかさず首元に切先を向ける。

「……うわゝ、こりやダメだ。降参降参！」

そう言ってその鴉天狗は両手を上げて、他の者達同様に壁側へと去っていった。

辺りを見渡すと、もう既に殆どの妖怪が敗れ、残っているのはごく僅か。

しかし次の瞬間、一人の白狼天狗が一瞬にして三人の天狗を同時に
撃ち倒した。

これで、生存者は残り二人となる。

刹那、その白狼天狗と目が合った。

技と技の対決

突然として始まった、気紛れな乱戦。

しかし道場に殺伐とした空気はなく、敗れた者は壁際に移動して団欒を楽しむか、集中して試合を観覧している。

そして残るは、あと二人。

「・・・見知らぬ方ですね。」

「ああ、最近この山に滞在するようになってね。咲風隼だ、よろしく。・・・あー、ええつとー、」

「犬走権です。此方こそ。」

互いに名乗り、直ぐに権は竹刀を構えた。

「最後の見てたけど、凄い剣捌きだね。」

「別に、大したことはしてないですよ。」

隼の何気ない言葉に、権は素っ気ないかつ冷静な態度で返す。

もはやその会話は、道場内の騒音に掻き消されて二人以外には聞こえなかった。

「ではもういいですか？いけますよー！」

「ああ、お手柔らかに。」

「はあッ!!」

瞬間、椀は床を駆け、隼に急接近する!

それも、身体の全神経が力へと加わる、正に完璧な瞬間。

ーバーバチンツ!!

二本の竹刀が、音を立ててぶつかり合う。

両者相手の竹刀を押し合い、力同時は均衡する。

「くっ、!まさか反応してくるなんて、!!」

直後、隼はニヤリと笑い、竹刀を握った右手の力を抜いた。

「なっ、!?!」

椀は勢い余って、少し体勢を崩す。

その一瞬に隼は再び右手に力を入れて、椀の竹刀を握る手を狙い撃つ。

「そう簡単には!!」

「うおッ、!?!」

次の瞬間、椀は一度崩した体勢を、思いつきり床を蹴ることで立て直し、その隼の一太刀を払い除けた。

「流石に焦りました。まさか力をいなししてくるとは、!。」

「いやいや、それに対応してくる椀だつて。手を抜いていた訳じゃないけど、次の攻撃は考えてなかった。」

「・・・褒められても嬉しくありません。今の瞬間は、確実に私が劣っていた。」

権は切先を隼の方へ向け、全身で身構えた。

「だから、次は私が凌駕します！」

「いやア、このまま俺が独走するさ。」

直後、権は体勢を低くして、相手の竹刀の下に潜り込むように突進する。

それに合わせて、隼は一步下り間を保つ。

「はあぁッ!!!」

その瞬間、まるで相手が下がるのを狙ったかのように、隼の手元へ正確に突きを放つ。

が、隼はその一撃を竹刀の芯で確実に捉えて止める。

「くっ、これも止めますか、!!」

すぐさま権は竹刀同士を離し、一度距離を取って構え直した。

「権はさ、何で道場で鍛錬を？」

「・・・ただ単に腕が鈍らないようにする為ですよ。強くなって、階級を上げようとかも考えてませんし、現に私は下っ端ですから。」

権のその言葉に、隼は思わず笑いを漏らす。

「下っ端の実力が全員これなら、この山も安泰間違いなしだね。」

その一言に、権もまたキリツとした笑顔を見せる。

「そう言ってもらえると有り難いです。・・・では、それを更に確証の

ものにしましょう！」

「よし、そろそろ決着をつけようか、!!」

瞬間、両者同時に床を蹴った！

が、その直後、

山全体が振動するような、強大な地響きか鳴り響いた。

「ッ!？」

「な、何ですかこの音!？」

道場内が、ザワザワとざわめき出す、

――時間は少し遡り、妖怪の山の麓辺りにて、

「……おやおや、何とも無力そうな鴉天狗だ。」

「お前、この山に何しに来た、!?!」

二人の妖怪が、殺意剥き出しに相對する。

――またその同時刻、山の頂上にて、

「今現在までは順調。奴らの実力を監視しても、儂等に及ぶ天狗は居ない。」

その声の元に、一人の足音が、

「……だが、貴様は誤算だわい。全く感が鋭いのう、天魔ツ!!」

「やあ、お前だったか、鉄鼠。」

二人の眼光がぶつかり合った、

妖怪の山の異変

更に時は遡り、その日の日の出から数時間、

一人の鴉天狗の青年は、凝り固まった身体をほぐしながら空を仰ぐ、

「・・・はあ、だいぶ寝坊しちゃった、。」

普段ならば日の出より少し前に起床し、既に行動を開始しているが、

太陽は既に光り輝いている、

それに、変な姿勢で寝てしまったせいか、体のそこら中が痛い。

「・・・今日は道場行かなくていいや、。」

銀色の刃を持つ刀を携えて、俺は散歩がてらに山を降り始めた。

「・・・ああ、こんなに荒れちゃって。」

少しばかり移動したところで、小さな人間の村の前を横切る。しかし、人の気配など皆無で、民間もボロボロでかなり荒らされている。

おそらくは、力を持った人間たちによって潰されたのだろう。

「寄るのは止めよう。．．．俺には、関係ないことだ、」

振り払うように視界からその廃村を消し、急ぐようにそこから遠ざかった。

歩いている途中、一瞬足元に異様な違和感を感じた。

一瞬、足が止まり身体が硬直する。

「ローローな、なんだこれ、」

一歩後退り、再び一歩を踏み出す。

すると再び襲いかかる違和感、

まるで、その一歩の間に境界線が引かれているかのように、踏み出した瞬間に一瞬違和感を覚える。

無意識のうちに、羽をはためかせて妖怪の山へと飛びだしていた。

低空飛行で飛び、迫る幾つかの木々を躲しながら来た道を引き返す。

突然芽生えた胸騒ぎ、緊張で速くなる鼓動、
が、それ以上に妙な昂りを感じる！

「は、速く飛べる！以前よりも、ずっと速く！」

その訳はこれだ。

特に身体能力が向上したわけでもないのに、昨日からいきなり飛ぶ速度が速くなったみたいだ！

「昨日、あんなに危ない飛行を体験したからか!？」

大きく頑丈そうな木が迫っても、怖気付かず冷静に回避できる。
まるで突然覚醒して、強くなったような気分。

『……って、ただ少し恐怖心を克服できてるだけだろ、俺。』

心の中でそう言い聞かせて、再び気を引き締めた。

そこから数分後、妖怪の山の麓に辿り着く。

普段ならば美しく見えるその山の風景が、何故か異様な空気感に包

まれていた。

俺は更に加速を付けて、一気に山を登り始める。
必死で周囲を見渡し、一切の異変を逃さずかつ速度を付けて飛行する。

「ooooooooo!!」

一瞬、視界に不自然な人影が入った。

天狗でも、河童でもない。全く目にしたことのない、未知の妖怪の姿！

「あいつが違和感の正体かッ！」

空中で身体を捻り、方向をその妖怪の方へと変える。

そのまま強く羽をはためかせて、突進するように加速させた！

が、その直後！

その妖怪は手のひらを俺の方へ向けた！

「ッ！気付かれた!?!」

間髪入れず、その手が輝くと同時に人の頭ほどの弾丸が放たれた。
その弾丸は、一寸の狂いなく一直線に向かって来る。

「一度も見ずにイ!?!」

何とか弾道を予測し、掠るほどのギリギリでその弾丸を躲す。
しかし体勢が崩れ、俺はそのまま地面を転がった。

「……おやおや、何とも無力そうな鴉天狗だ。」

そいつは冷静な声で、そう呟いた。

俺は直ぐに立ち上がり、腰に身につけた刀を引き抜く。

「お前、この山に何しに来た、!?!」

「いやいや、いきなり失礼な奴だ。先ずは、名乗るのが先じゃないのかい?」

嘗めているような雰囲気喋っているが、一切の隙は作っていない。

不意打ちは不可能か、。

「名乗る理由は無い。とつとつこの山から去れ、妖怪!」

そう言うと、そいつは深くため息をついた。

「やれやれ、初対面なんだから、敬語とはいかなくともある程度礼儀は必要だろう。」

「何故侵入者に礼儀を弁えなければならねエ!それとも何だ、お前は客人とでも言うのかよ!」

次の瞬間、その妖怪の周りの空気が、一気に揺めき出した!

更にそいつはとんでもないほどの妖気を纏っている。

「私は犬神^{いぬがみ}。無論、侵略者さ!」

瞬間、奴の周りに大量の弾幕が現れた!

「さあ、君は僕を何処まで楽しませてくれる!?!」

鞍真陣 V S 犬神

禍々しい輝きと共に、大量の弾幕が乱れるように飛ぶ。弾幕を凝視して見切りながら躲す鴉天狗に対し、その相手は眉一つ動かさず弾幕を放つ。

「くッ、！近づけねエ!!」

向かって来るは不規則に乱れる弾幕、前方からの弾丸を躲した矢先、すぐさま別方向から何発もの弾が迫る。

避けきれない弾は刀で叩き落として対処するが、せいぜい一振りにつき一発しか落とせない。

「・・・ほらほら、そんな調子で大丈夫かい？」

不敵な笑みを浮かべて、犬神は更に弾幕を増やす。それも全ての弾に、不規則な軌道を与えて。

「チッ！攻撃豊富過ぎだろッ!!」

一発一発に集中し、その不規則弾幕を防いでいく。

正面の弾をギリギリまで引きつけて刀で落とす、すかさず二方向から迫る弾を身体を逸らして躲す。

しかしながら、いつまでもその行動をし続けるだけの体力は無い。一度犬神との間に木を挟んで射線を切り、奴の背後へ回り込みに走る。

が、

「ーいッ!?!」

上手く射線を切っているにも関わらず、奴は確実に俺の居場所を把握し弾幕を放つ。

俺は一度走り出した足を踏ん張って止め、弾幕をストレスで逃げるように躲した。

その直後、一度弾幕が止む。

「へえ、意外と持ち堪えるじゃないか。」

「ハア、。当たり前だ、そんな簡単には負けられない。」

乱れた呼吸を整えながら、刀の切先を奴へ向けてそう言い返す。しかしながら、犬神は息を一切乱していない。

「答えろお前。この山に何をしに来た、目的は何だ。」

俺がそう叫ぶと、犬神は空へと向いてニヤリと笑う。

「ツ！余裕かましやがってツ！」

その態度が癪に触ったのか、何故か奴への怒りが込み上げてきた。その感情に身を任せ、俺は強く地面を蹴り急接近を仕掛ける。俺が加速したと同時に、犬神は再び弾幕攻撃を仕掛けてきた。抜かれる隙間はあれど、不規則な動きをされれば抜けられない。ならば、！！

「はああッ!!!」

左腕を身体の前に構えて、俺は勢いを止めずに突進する。躲せないのなら、左腕を犠牲にして切り抜けるまで！

「舐めた面に一撃斬り刻んでやるッ！覚悟しろ犬女ア!!」

左腕に弾幕による激痛が走るが、一切足を緩めず奴へ急接近する。そして奴の目前にまで近づいたその瞬間、弾幕を放っていた右腕へと刀を振るった。

「ーッ!!」

しかし、その一太刀に手応えは無かった。

「何!?!、ーッかはッ、!!」

次の瞬間、腹部に強烈な衝撃と激痛が走った。

そのまま俺の身体は空中を浮遊し、木々に強く衝突して止まる。

「なッ、何が、!?!」

痛みを堪えながら身体を起こし、再び犬神と対峙する。

しかしその時、奴の顔を睨み付けた時。

その時見たそいつの表情には、一切の不敵な笑みが消えていた。かといって、怖い表情というわけでもない。

全く隙の無い、まるで千手先までも見据えたような鋭い視線。

「・・・アンタ、名前は？」

冷静かつ真剣な声で、犬神はそう聞いてきた。
数秒、沈黙が流れる。

「・・・なあアンタ、何で私が女だと分かったんだい？」

「・・・何言ってるんだお前。女じゃねえのか？」

犬神の一言に、思わず張っていた力が抜けた。

しかし、依然として犬神の表情は真剣そのものだ。

「顔立ちは女だし、自分のことは私呼びだし。確かに男っぽい喋り方もあるけどよ。・・・ていうか、だから何だっただよ。」

「・・・はあ、そうか。無意識に気を抜き過ぎたか。」

するとそいつは深く溜息を吐いた。

もう先程のような真剣さも、溢れ出る殺気もない。

「・・・さつき私は侵略者だなんて言ったけど、正直そんなの別にどうでもいいのさ。」

「・・・じゃあどういうつもりだよ。辻褄が合っていないぜ、お前。」

完全に殺気が消えてもなお、俺は刀を直ぐに振るえる位置に構えて、犬神にそう訴える。

「いやあ、まあ、ちよいと腹立つジジイがいてねえ。そいつがこの山の侵略を手伝えなんていうからさ。」

「・・・はあ？」

急に何処となく怒りの感情を込めた笑みを浮かべ、そいつはそう語る。

「だから、表向きはしっかりやる気を見せて協力しつつ、侵略成功した瞬間に裏切って潰してやろうと思ってるね。」

「・・・な、なるほど、。随分と悪い性格だな、。」

その話を聞き、俺は少したじろぐ。

計画成功の後に裏切りとは、天国からそのまま地獄に墮とすも同然だろう。

そんな性格の奴を、大事な計画に誘うやつは自業自得かもしれないが。

「ま、下っ端がこの実力なら、あのジジイは直ぐにくたばるだろ。私は山の侵略なんて全く興味ないからね。」

すると犬神は、右手の甲を俺に見せてきた。

「!!」

そこには、刃物で斬られたような傷と血が垂れた跡が。

「このまま続けて、万が一の事でやられたくないし、私はここで逃げさせてもらうよ。良い速度と剣撃だったよ、鞍真陣。・・・あ、それと、ジジイは多分山頂に居るから。」

次の瞬間、犬神は自分の足元に光弾を放ち、辺りは穏やかな光に包まれた。

光が消えた頃には、もうそいつの姿は無い。

「はああ、疲れ、、痛ア!？」

気が緩んだ瞬間、身体のあらゆる箇所^{箇所}に激痛が走る。

そのまま崩れるように、俺は地面に倒れ込んだ。

こつちに近寄る何人かの足音を聞きながら、俺は静かにその場で眠った。

「貴様、何故ここに居る。」

「さあ、それはこつちの台詞だけどなあ、鉄鼠。」

山の山頂にて、二人の妖怪は殺気を剥き出しに相對する。

必殺の一撃

交差し相殺する殺気、段々と薄暗くなっていくその周辺、太陽の光は雲に隠れて届かない。

腰が曲がり杖についてなお威圧感を纏う老人の妖怪に対し、その背後に、

少しばかりかかった前髪はその隙間から冷徹な眼光を覗かせ、己の背丈より少し大きな漆黒の槍を携える鴉天狗。

そいつの纏う気配には、一切の隙が存在しない。

「見てる限り、貴様はあの道場らしき場所にいたじやろうが。まずは儂の問いに答えろ天魔。」

老人らしい所々掠れた声で、その老人妖怪は天魔に背を向けながら問いかける。

「さあ？自分の見たもの全てが真実とは限らないだよ、鉄鼠。」

「相変わらず生意気よのう、小娘。」

空気はまさしく一触即発、片方が少しでも戦闘体制を構えた瞬間、頂上は一瞬にして戦場へと成り変わる。

「で、もう一人は何処にいる？」

「……何じやと？」

老人の妖怪、鉄鼠の眉がピクリと動く。

「しらばつくれたても無駄だよ。どう考えても、今回の騒動をお前一人で起こせるわけないでしょ？」

「……つくづく、癩に触る小娘じゃのう。」

「……瞬間、鉄鼠の周りに大小様々な複数の弾幕が生成される。弾幕は標準を定めた瞬間、一斉に放たれた。」

「……つたく、黙ってても暴露^{バレ}てんのにさッ!!」

弾幕が迫るや否や、天魔は巧みに槍を操りその全てを叩き落とす。風を切り裂く音、弾幕が地面に落ちる衝撃音が、連続して鳴り響く。迎撃しきったその瞬間、すかさず天魔は反撃に出る。体制を低くし、前屈みで地を走り鉄鼠の背中に急接近する。

「……フン、丸分かりじゃ。」

鉄鼠は不敵な笑みを浮かべながら、地面に強く杖を突いた。瞬間、天魔の走行する先の地面に、少し亀裂が入る。

「……チツ、」

それに反応した天魔は、進行方向とは真逆の方向へ強く蹴り、その地面から離れる。

「……フン、まさかそんな単調なことで回避が出来るとな?随分と侮辱してくれるッ!!」

その後、地面の亀裂から一気に裂ける、

「作動『震爆』!!」

瞬間、大地を捲り上げる大爆発が起きる。

まるで土は雪崩のように、木の枝は刃物のように、天魔へと襲い掛かる。

「……この威力は、!?!」

数秒すら経たずに、爆発の粉塵は天魔の身体に覆い被さった、

「……くッ、それが道場にいたお前の正体か、。」

鉄鼠から見て右後ろに、何事もなかったかのような天魔の姿が。

粉塵が覆い被さった場所には、特に誰の姿もない。

「何、単なる残像だよ。ただ、かなりの時間はその場に残せるけどね。」
「フン、だが分かってしまえば大したことはない。次で潰すだけじゃ

からな。」

眉間に皺を寄せて、鉄鼠はそう言い放つが、

「え？そんなこと言ってる場合かい？」

その直後、鉄鼠の脇腹に強い蹴りが入る。

「ーが、ぐはツツ!!!」

「続けてもう一発ッ!!!」

右足で飛び蹴りをした体勢から、天魔は右回りに身体を捻って、鉄鼠の頬にもう一撃左足で叩き込む。

「ーガッ、!!!」

二発打撃を叩き込まれた鉄鼠は、体勢を崩して地面を転がるように吹っ飛んだ。

六回転ほど転がった鉄鼠は、声にならない呻き声を上げながら、ゆっくりと杖を使って立ち上がる。

「改めて質問するけど、中々の妖力を持つ妖怪が、二人揃って何の用だ
い？」

「ーーク、クク、二人揃って、じゃと？あんな小僧はただの駒にしか
過ぎんわい。」

その時、一際邪悪な笑いを漏らした。

「ちよいと褒美をちらつかせるだけで、言った通りに行動をしよる。
全く便利な駒じゃのう。」

体勢を立て直して、再び鉄鼠は杖を突く。
天魔の眼光が、更に鋭くその姿を捉えた。

「儂の能力で見たところ、貴様を潰せばもう征服は同然。天魔、貴様に同情はない。大人しく息の根を止めてくれようツ!!」

そう言い放った瞬間、鉄鼠の妖力が一気に増大していく。
その直後、大量の弾幕が鉄鼠の周りに現れる。
次々に現れる、邪悪な弾幕。数、大きさ、妖怪の中では共に一線級。

「残酷に逝けツ！天魔ア!!!」

!!!
次の瞬間、構えられていた弾幕が、一斉に一点目掛けて放たれた、

「思い上がっていたのは、お前だよ鉄鼠。」

その弾幕は、漆黒の槍の一払いによって全て散った。

「……なッ!？」

間髪入れず、天魔の槍は秒毎に妖気を増していく。
一秒、二秒、時間が経つたびに上がる出力、少しずつ乱れる空気。
最早先程までの原型が無い、まるで別物の槍。

「私の”必殺技”は、誰一人として見た事が無い。存在を知りもしない。」

更に数秒、天魔の周りに強風が巻き起こる。

森はざわめき出し、頂上に少しばかりの光が刺す。

「理由は至極単純。名前の通り、”必殺”だから。」

瞬間、左足を地面を軽く抉る程度に踏み込む。

漆黒の槍の先を、強風に耐える鉄鼠へ標準を定める。

「ぐ、！わ、儂を殺すか!?ま、待て、儂にはまだ財産がある！それをやろう！儂を殺せば全て消えるぞ!!」

「そんな物要らないよ。私が欲しいのは、山の平和だけさ。」

直後、更に強く黒き妖気を纏う。

風も更に強化さて、軽い木ならば根本から抉り倒れていく。

「その為に、悪いけど鉄鼠、お前はここで始末する。」

「くツ!!よセツ!やめろオオオオ!!」

漆黒の妖気を纏う槍、その圧倒的な出力を叩き出す必殺の一撃は、
最大火力で放たれる、!!

「必殺『天上射抜く魔天の槍』」

突き出された其の一撃は、老人の姿を消し飛ばし、轟音と共に天すらも突き抜けた、、

名前

天魔は埃を振り落とすように槍を振り回し、右腕を脱力させてその切先を地面へと向ける。

勝者を称賛するように、太陽の光が雲の間から差し込み山頂を照らした。

「今度こそ君とは決別だ、鉄鼠、。」

天魔は空を仰いで一息つき、下山する方向へ振り向いて歩き出した。

「……いつから見えていたんだ？隼。」

「……お前が勝負を決めるちよつと前、からかな。」

そう告げられると、天魔は深くため息をついた。

「一番見られたくないところからじゃないか。しかも気の知れてる相手って、。」

「な、なんでさ、別に俺とお前が戦うことなんかないんだし、見られて恥ずかしいことでもないでしょ？。」

「君はそれでも私は違うんだよ、。」

すると隼は、少し難しい顔をした。

「ま、まあ、とにかく戻ろう。ほら、お前汚れまくってるし。」

そうやって話を切り替え、隼は山を降りようとする。

その一步を踏み出そうとした時、

天魔は隼の腕を掴んで止めた。

「隼、少しここで話さないか？」

雑音のない静かな山の山頂に、二人は腰を下ろして並んで座る。
聞こえる音といえば、小さな風により揺れた木々の葉っぱが擦れ合う音ぐらいだろう。

「・・・飲むかい？天魔。」

隼は座つたと同時に、隣に座る天魔へ水の入った筒を差し出す。

「いや、いいよ。そんなに喉は渴いてない。」

「そうか？なら良いけど、」

再び隼はその筒を腰に身につけた。

その後暫く双方が口を開かず、沈黙の時間が流れる。

「・・・あの技はさ、私が天魔の座につく前に習得した技なんだ、。」

その沈黙を切り裂いたのは、天魔のその一言だった。
隼はそう話す天魔の目を真剣に見据える。

「これを編み出した時の私はさ、ただ強くなることが全てだったんだ。
正直、周りのことなんかどうでもよかった。

・・・その、つまりさ、あの時の君みたいに、強くなりたかった
んだ。」

「・・・初めて俺がこの山を訪れた時、かい？」

その問いかけに、苦笑いを浮かべてコクリと天魔は頷く。

「でも、私はそれしか眼中になかったんだ。他人なんてどうでもよ
かった、寧ろ蹴落とそうと考えていたと思う。」

「・・・」

「でもそんな時、ちよっとした事件があつてね。

・・・その時思ったんだ、力があるだけじゃ、結局何も得られない
んだって、」

掠れるような声で、天魔は吐き捨てるように呟く。

「そこから思い直したんだ。自分の為じゃなく、他人の為に振るえる
よう強くなろうって。

・・・だからあの技は基本使わない、昔の私の象徴みたいなものだ
から。」

「・・・そうか。」

「そして今の私がある。今は守るものがあるし、自由なことが出来る

わけじゃない。でも、今が一番充実してるよ。」

その瞬間、天魔の表情に光が刺すように笑顔が戻った。
自然と隼の顔にも笑顔が浮かぶ。

「さ、話は終わりだ。これから先も、私はこの山の為に力を使う
さ。・・・それが私、天魔の、」

白嶺千華しらみねせんかの、今の在り方だから。」

そう言つて、天魔はゆつくりと立ち上がった。

しかし、隼の頭の上にはハテナが浮かぶ。

「・・・ん？誰だいその人？」

「私の名前だよ、殆どの人は知らないけどね。・・・あ、知ったからつ
て言いふらすなよ。呼ぶのも禁止だ。」

「・・・じゃあ何で教えたのさ。」

隼がそう言つと、天魔は少し頭をかいて答える。

「まあ、ここまで話した相手は君が初めてなんだ。そんな相手に、名前
を隠すのもあれだろう?」

「・・・うくん、まあ、そうかもしれないけど、」

隼は納得のいかない表情のまま、天魔と同じくゆつくりと立ち上
がった。

「とにかく!これまで通り私のことは天魔って呼べばいいからな!」

「・・・はいはい。分かったよ、天魔。」

その後、二人は散歩でもするように、山の頂上からゆっくりと下っていった。

第二章・西行妖封印編 静寂の朝

早朝、崩れかけた窓の隙間から差し込む光で目を覚ます。

何の変哲もない朝、心地よいそよ風と小鳥の囀り。

まるで再び夢の中へと誘うように、それらは静かな安らぎを与えてくる。

が、その静寂は、コンコンと軽く戸を叩く音により破られる。

「ん、誰だ、？」

寝起きの身体をゆっくりと起こし、服装を整えて玄関へと向かう。

ガラガラと玄関を開ける音が聞こえない為、おそらくは応答があるまで待っているか、もしくは既に居ないと踏み帰ってしまったか。

それにしても廊下を歩く途中、木の軋む音が目立つ。

これは一度床を剥がして、綺麗な板に貼り直すべきか。

玄関にたどり着くと、外に一人の人影が見えた。

俺は玄関の戸に歩み寄り、それに手を掛けてガラガラと開いた。

「はい、どちらさん、」

玄関を開けた先に立っていた人物は、先日道場にて手合わせした相手、白狼天狗の犬走権だった。

格好は昨日と違って私服であり、白い服に紅葉柄のスカートを纏っている。

そして、左手に標準的な大きさの盾、右手に刃の大きな刀を装備していた。

「おや、いらつしやい。応答が遅れてすまなかつたね、権。」
「いえいえ、大丈夫です。・・・それにしても、」

そう言うと、権は家の全体像を見回した。

「あの、随分と、その、風情がある家ですね、」

少し申し訳なさそうな表情を浮かべながら、権は言葉を濁してそう言った。

自然と自分の顔に、苦笑いが浮かぶのを感じる。

「いやあ、まあ、暮らせないわけじゃないし、そこまで酷い状態でもないし、ね。」

「そうかもしれないけど、。でも、流石にアレは直した方が、」

権はより一層悲惨な物を見たかのような反応をする。

そんな酷い場所あったかと思ひ、権と同じ方向を向いた。

その瞬間、記憶がフラッシュバックする。

「・・・」

そこに映った光景は、襖がブチ抜かれた跡。

先日、文によって崩壊した場所だ。

「・・・そうだね。大至急、修理が必要みたいだ、。」

さつきまでは心地よく感じた風が、どつと重く感じた。

「では、隼さん。私はこの辺で失礼します。」

暫く玄関前で談笑した後、権はそろそろと切り出した。

「また今度、道場で手合わせをお願いしたいです。」

「ああ、またいつでも。」

権はそう言つて軽く会釈をし、その場を去つていった。

「・・・さてと。家の修理に取り掛かるか、」

家の修理に必要な物は、家の奥の物置部屋に大体置いてあった。釘や金槌は勿論、ある程度の工具が揃っている。

更にはかなりの数の板、替えの襖までもが用意されていた。

左腕に何枚かの板を担ぎ、右手には釘と金槌を握つて例の部屋の修理に取り掛かる。

直すのは襖だけだと思つていたが、その枠組みが崩壊していた為、先ずはそこから直すことにした。

一度周りを整理し、壊れた部分のある板を外す。
そこに持ってきた板を当て、角の四箇所を釘を刺して金槌で叩く。
強く叩けばその分効率が上がるが、強く叩き過ぎて更に壊れてはた
まったもんじゃない。

少し時間は長引くが、慎重に釘を刺すことにしよう。

「・・・よし、こんなところか？」

板を何枚か貼り替えて、物置部屋から持ってきた替えの襖を取り付
ける。

ひとまずこれで、応急処置は完了だろう。

俺は服に付着した埃を払い、玄関近くの居間へと向かった。

その次の瞬間、玄関の扉がガラガラと開く音がした。

「お、いらつしやい文。」

「お邪魔します！・・・って、随分汚れてませんか？」

次にこの家を訪れたのは、鴉天狗の射命丸文。

「さっきまで家の修理をしていたからね。で、何のようだい？」

「いえ、カンカンと物音がしたので気になって。家の修理の音だった
んです、ね、」

一度、文の思考が停止する。

そしてハッと気付き、慌てた素振りを見せ始めた。

「あ、あのく、ひよつとして私が壊した、」

「ん？・・・ああ、別に気にしてないよ。どうせいつか崩れてただろうし。」

「そ、その節は申し訳ないです、」

その後、居間に移動し文にお茶を出した。

「あ、このお茶美味しいですね！」

「ああ、俺も気に入ってる。」

昨日天魔が差し入れと持って来てくれたお茶だが、苦味がとても丁度いい。

そもそも何処からこのお茶の葉を用意しているのか謎だが、そんなことは今更考えることじゃないだろう。

「・・・そういえば、朝山の中を徘徊してた時、天魔様の屋敷に見知らぬ方が入っていくのが見えたんですよ。」

両者、お茶が残り少なくなった頃、文がそう話を切り出した。

「ふうん、どんな人だったんだ？」

「うん、はつきりとは覚えてないですよ。天魔様に客人なんて珍しいなうって見てたんで、容姿とかはちゃんと把握しなかったんですよ。」

文は顔に手を当てて、うんと考え込む。

俺はその様子を見ながら、残りのお茶を飲み干した。

「あ、そういえば、髪の色が派手な金髪だったような気がします。」

「・・・いやいや、そんな髪色見逃す訳くないかい？」

「あややあ、仰る通りです、」

苦笑いを浮かべて、文もまたお茶を飲み干した。

「それにしても、派手な金髪で天魔の客人か、」

早くも、再会できるかもな、

夕陽の下の再会

家の応急処置を終わらせ居間で一服ついた後、散らかったものを片付けて天魔の屋敷へと出発する準備をする。

服はなるべく軽装かつ、人目にもつかない程度の武装を纏う。

最も慣れている武器は、重量級かつ大きめの刀だが、

何も戦闘へ行くわけでもない為、錆びてないぐらいの小刀で護身は十分だろう。

『私はやめときます。もしその人が隼さんのご友人だった、ちよつと気まずいですし。』

文はそう言って少し前に帰っていった。

気を遣わせてしまったし、今度何かお土産でも持っていこう。

支度を済ませたところで、玄関を開けて外に出る。

丁度沈み始めた辺りの太陽が、眩しいほどに視界を照らしていた。

俺は玄関の扉に簡易的な鍵をかけ、天魔の屋敷へと向かって歩く。

因みに、道なんて覚えていない。それどころか知りもしない。

ただ何となくこの辺だろうという憶測のみである。

『あ、そういえば、髪の色が派手な金髪だったような気がします。』

歩む途中、文の言葉が脳内で繰り返される。

今一度考えてみると、金髪の友人は多数いることに気づく。

そう思うと、妖怪かつ金髪というのは案外珍しくないのかもしれない。
い。

暫く歩いた場所に、自分の借家がある場所以上に建物が建ち並び妖怪達が賑わいを見せる、

所謂、店が並んでいない商店街のような風景だった。それは商店街と呼んで良いのか分からないが、

「あれ？あんた見ない顔だねえ。」

「ん、？」

その街並みを歩いていると、後ろから声をかけられた。振り向くと、そこには背丈が低めの少女が。

青い髪に青い服、まあ、全体的に青い容姿をしている。

「あんた、最近ここに住むようになったの？」

「あ、ああ、少し前に滞在するようになってね。」

「へえ。・・・あ、それじゃあこれ。」

そう言うと、その少女は一枚の紙を渡してきた。

俺はその差し出された紙を手取る。

「折角だから、今度私の仕事場に来てよ。一人で黙々やってると、偶に飽きてくるからさ。じゃ！それじゃあね。」

次の瞬間、俺に手を振りながら嵐のように去っていった。

俺は渡された紙をまじまじと見る。

そこにはおおよそ地図であろう絵が書いてあった。

「な、名前も聞いてないんだけどな、。」

その後、何度も道を間違えた末に、ようやく天魔の屋敷へと辿り着いた。
かなり時間がかかったが、まだ日は沈んでおらず夕焼けも見えていない。

早速屋敷の玄関の前に立ち、コンコンと扉を軽く叩いて鳴らした。

「……あれ、？」

数秒ほど待ったが、一切の返答がない。
声の反応が無いだけでなく、微かな足音すらも聞こえてこない。
試しに扉の取っ手に手をかけてみると、それほど力を入れずともスルスルと流れるように開いた。

「天魔——居ないのかー？」

静かな屋敷の中へと声を発する。
しかし、やはり一切の反応が無い。

「寝てるのかー？……あ、よし、それなら、」

その瞬間、脳内に悪い発想が思い浮かぶ。
やろうと決めれば、もう身体は止まらない。
俺は屋敷の中に入り、声が漏れないようしつかりと扉を閉めた。

そして深く息を吸い込み、

「すうう……。おい!!千」

『やめろオオオオー!!!』

その次の瞬間、強烈な一撃が頬に走った。

「い、痛ツたい、。」

頬に残る痛みを抑えながら、屋敷の中の廊下を歩く。

その真横には、殺意を剥き出しに激怒する天魔の姿が、

「自業自得だ。本来なら死んでいるんだからその程度我慢しろ。」

「いやあ本当にごめん。ちよつと魔が刺したんだ許してくれ。」

「ふん、謝罪なんかで許すか。今度豪華な土産でも持ってこい。」

確かに怒るとは思っていたが、ここまでブチ切れるとは。

これは宥めるのに骨が折れそうである。

「ぞ、そういえばさ。今日は誰か客人でも来てたのかい?」

暫く天魔の機嫌を損ねないように何気ない会話をした後、ここに来

た目的をさりげなく話す。

「え？・・・ああ、来てたけど。」

「来てた？ってことはもう帰ったのか？」

俺がそう返した瞬間、天魔は一瞬考え込んでから口を開く。

「・・・いや、やっぱ今のなし。今日は誰も来てない。」

「・・・へ？いや、今来たって、」

すると天魔は、ギロリと鋭い目を向ける。

「何？なんか言いたいこともあるっ？」

「・・・いや、何でもない、。」

天魔の本名を呼ぶなんてことしなきゃよかったと心の中で反省した。

結局、ただ天魔の屋敷へと散歩に行っただけに終わった。

天魔に殴られた頬は、まだ少し痛んでいた。

先程訪れた商店街のような場所を歩く途中、少しずつ夕焼けが現れ

始めてくる。

流石に先程のような賑わいはなく、各々が夜を迎える準備を始めている最中だ。

俺はその風景を眺めながら、その通りを歩んでいく。

そしてそこを抜けた、その瞬間だった。

よく見知っているような姿が、一瞬小さく視界に映る。

「な!？」

思わず声を上げる。

そのまま反射的に、その姿が映った方角へと地を蹴った。

目の前には美しく夕焼けに照らされた山の風景が広がるが、そんなものお構いなしと言わんばかりに駆け抜けていく。

やがてその姿が再び写り、憶測が確信へと変わった。

俺は更に速度を上げ、一気にその姿へと急接近する。

そしてその姿も同時にピクリと反応して、恐る恐るこちらへと振り向いた。

負の涙

「紫、!!」

その相手の前で足を止め、乱れた呼吸の中でその名を呼ぶ。
振り向いた彼女は、すぐさま表情に驚愕が浮かぶ。

「・・・は、隼、？」

八雲紫は驚きながらも一步踏み出し、少し見上げながら俺の両腕を強く優しく掴んだ。

身体に触れた瞬間、紫の表情は更に驚きを増し疑いの目も強くなる。

「で、でも、貴方の身体は、」

「うん、ごめん。取り敢えず、まだ死んでないよ。」

数秒、紫は感情の混ざり合う眼光で咲風隼の目を見つめる。
まるで時間の進む速度が止まったかのように、まさに永遠とも感じられる程の永く短い時間。

「・・・そう、生きてるのね？」

「ああ、ちょっと変わったっちゃったけど、ね。」

直後、紫は小さく笑みを溢した。

その表情に、自分も笑みで返す。

それを見た紫は俺の身体から手を離して、深く息を吐いて呼吸を整えた。

「じゃあ取り敢えず、」

瞬間、紫は左足で地面を強く踏み、右手を開いて構える。
そして鋭い視線で隼の顔を睨みつけ、空を斬るようにその平手を振り抜いた。

「一発覚悟なさいッ!!」

夕焼けに焦げる山の中に、鋭く高い音が鳴り響いた、

消えかけつつある夕焼け空の下、山の麓へと下っていく。
青空は既に暗闇に隠れ、徐々に夜空が顔を出し始めていた。

”山の夜”というのは恐ろしく静かなもので、昼間に掻き消されていた音響が穏やかに鳴り響いている。

「それで、紫は何しにここへ？」

「…隼、貴方よくそんな直ぐに切り替えられるわね。私まだ少し怒っ

てるんだけど。」

紫は手を額に当てて、呆れるようにため息を吐く。
それに対して、少し赤く腫れた頬をトントンとつついて注目させた。

「じゃあもう一発殴るかい？」

「・・・やめとくわ。別に貴方を殴りたいわけじゃないし、。でも、藍はかなり落ち込んだ様子だったから、次会った時ちゃんと謝ってあげなさいよ？」

「ああ、その時は必ず。」

数秒、二人の間に沈黙が流れる。

山の地面に足跡をつけていく鈍い音すら掻き消すほどの沈黙、空気が雑音を掻き消すというのも妙な例え方だが、

「紫、何かあったのか？」

その時、紫の雰囲気から何かを感じ取ったのか、自然とそう言葉を発した。

「・・・いや、大丈夫よ。特に何も無いわ。」

「・・・」

この問いかけに対し、紫は誤魔化すように話し受け流してしまう。
その対応にただならぬ様子を感じたのか、気付けばこの足は速く動き、紫の正面へ移動し先を塞いでいた。

「な、何よ、別に何も無いって、」

「いいや、嘘は吐かないでくれよ。こんなに長い付き合いなんだから、

そりゃあ反応見れば分かるよ。」

「・・・」

紫は足を止めて、声を出さずに押し黙る。

そして更に表情を暗くし、言葉を詰まらせながら話を始めた。

「・・・今日ここに来たのはね、その、相談がしたかったのよ。」

「それって、天魔にかい？」

「ええ、。貴方が知っていたかどうかは知らないけど、何度かこの山には訪れてるのよ。あと、天魔だけじゃないわ、他にも色んなところに相談してるの。」

その直後、紫は声を震わせながら顔を上げ、俺の目を見据えて一言語った。

「・・・ねえ、隼。両親が亡くなった子に対して、何て言葉を掛けてあげたらいいのかしら、？」

薄暗い夜の中、小さな月明かりを光として玄関にかけた鍵を開け、そのまま居間へと直行する。

それも、一人ではなく、

紫を居間に招き入れると、自分は台所へと向かいしまつておいた菓子類を引つ張り出しちやぶ台にぶちまけた。

「さ、まずは落ち着こう。お茶も出そうか？」

「・・・うん、お構い無く、。」

台所から見た紫は、かなり疲弊しきっていた。

表情に張りがなく、目までもが上の空状態である。

「いいよ、ゆっくりでいい。相談なら、俺は幾らでも乗れるから。何だったら、今日はゆっくり寝て明日相談するっていうのでもいいよ。」
「・・・ありがとう、。さつきは、みつともない姿を見せてごめんなさい。貴方が生きてたことが嬉しくて、つい気を抜きすぎちゃったわ、。」

紫は乱雑に机へ撒かれた菓子の中から小さめな煎餅を選び、一口小さく齧った。

紫があの一語を放った瞬間、その目尻には小さく涙が溜まっていた。

痛みから来る涙ではなく、悲しみから来る涙でもない。

恐らく頭の中が迷いで埋まり、その末に芽生えた困惑と絶望から溢れた涙だった。

そんな紫の姿を見て、無関心でいられるはずがない。

「・・・」

紫は口を開かない。

・・・いや、開かないと言った方が正しいだろう。

確かに紫は全てを話そうとしてくれている。

しかしその通りに身体が動いてくれるかどうかは別の話で、

「・・・うん、もう大丈夫だ。今日はやめておこう、これ以上やっても紫自身が辛くなるだけだよ。」

そう声をかけると、紫は小さく頷いた。

「よし！遅くなっちゃったけど、夕飯の支度でもするか！」

瞬間、ワザと雰囲気をぶち壊すように強く拍手を鳴らした。

そのまま鼻歌を鳴らしてテンションを上げつつ、台所の整理を始めた。

「紫？お腹すいてる？」

俺は振り返って、そう紫に呼びかけた。

徐々に紫の顔にも、笑顔が戻っていく。

「うん、ありがとう、隼、。」

その瞬間で、ようやく本当に紫と再会出来た気がした、。

散り逝く桜の下

時は少し遡り、数日前の事、

一本の華やかな桜の下で、一つの大きな命が生涯を終えた。

その日、その桜は命を向かい入れるように、花びらを空へと舞わせ風で小枝を揺らしていた。

その命を慕うものたちは涙を流し、その水滴により歪んだ視界の中、美しく佇む桜を見上げた。

後にその桜は、こう名付けられた、

『西行妖』と

眼前に広がる、どこか懐かしさを覚えるような街並み。

子供の走り回る騒音、出店の呼び込み、繰り広げられる紙芝居。それらを眺めながら、道の真ん中の少し右を歩く。

「良い街だね。広いし、人も多くて賑やかだ。」
「確かに、貴方が好みそうな街ね。」

翌日、朝から紫に連れられて、とある街を訪れていた。
妖怪の山からは少し遠く、街の中でもかなり敷地が広い。
更には、住居は勿論、出店や娯楽も豊富に揃っていた。

「最近はこの辺りに借家を置いてるの。物資も揃うし、人との交流多いし、ね。」

隣を歩く紫は、いつもの少し派手な服ではなく、街の中でよく見かける和服を着こなしていた。

対して自身だが、特に何も施していない。

そもそも和服であり、色合いも目立ちはしない。

武装に太刀を身に付けていたとしても、この時代のこの世の中では何の問題もない。

「だけど今日は、この街を見せたかった訳じゃないでしょ？」

「そうね。ほら隼、あれを見てみなさい？」

紫はとある方向へ注目させる。

その方向には、一本の桜の木が聳え立っていた。

「詳しくは歩きながら話すわ。取り敢えず着いてきて。」
「・・・分かった。」

紫は慣れたように、その桜の木へと歩き出した。

巨大な桜の木の下に辿り着くと、そこには人集りが形成されていた。

各々が様々な感情を表に出し、順番にその桜の下に花束を供えている。

涙を流す者、桜の木へと楽しげに話し掛ける者、優しげな笑顔で見送る者、中には怒りを露わにする者も、

一方その巨大な桜は、喜怒哀楽様々な感情を包み込むように佇んでいた。

「少し前にこの桜の下で、この街じゃ有名な歌人が亡くなったの。彼を慕う人は多かったみたいで、毎日ここはこんな風に賑わっているわ。」

桜を見上げながら、紫はそう話す。

「その人は生前から、『死ぬ時は桜の木の下で』と決めていたそうなの。よっぽど桜を愛していたんでしょうね。」

その後、少し桜を眺め、

「……じゃあ少し歩くわよ。また着いてきて。」

紫は再び歩み始めた。

その後を追うように歩き出し、桜とその人集りを視界から外した。

その瞬間、その光景から、その桜から、死を纏った邪悪な気配を感じた。

先程まではその場を優しく包み込んでいたその桜が、まるでそれ自体が、生ける者の命を掌に握っているかのようだった。

「……一筋縄ではいかなさそうだ。」

その桜から徒歩数分、紫は大きく立派な屋敷の前で立ち止まった。屋敷の周りを包む草木は完璧に整備され、風情がありつつも古びた気配は見取れない。

そして屋敷の玄関前には、『西行寺』と彫られた表札が飾ってあった。

「この屋敷が、その亡くなった歌人の住んでいた場所よ。」
「……ということは、今はその人の娘さんだけが？」

紫はコクリと首を縦に振る。

「今日は隼、貴方をその子に合わせたかったのよ。今のあの子には、私以外にも話し相手が必要だと思うから。」

俺は無言のまま、紫へと頷いた。

それ確認し少し安心したような素振りを見せ、紫は玄関の横にある小さな戸を開けた。

屋敷の中に入ってから、迷路の中を反則しながら進むような感覚で紫の案内について行く。

屋敷の周りだけではなく、庭を飾る草木までもが整備されており、一見派手さは見当たらないが、完成度で言えば何処の庭にも劣ることはないだろう。

屋敷の廊下を進んだ先で、目的と思われる部屋の前で立ち止まり、声をかけながら襖を開けた。

「幽々子、居るかしら?」

返答は直ぐに返ってくる。

「襖を開く前に聞かなくてどうするのよ、紫。」

その声と同時に、静かな足音が鳴り始める。
やがてその姿が、眼前に露わになった。

「紹介するわ幽々子、私の友人 咲風隼よ。」

歌聖の娘・西行寺幽々子

街の奥に佇む屋敷の一室にて、会話の音が鳴り響き始める。
そして会話を乱さぬ程度に沸騰する水に、偶に混じる小さな咀嚼音。

「改めて、この子は西行寺幽々子。気軽に幽々子って呼べばいいわ。」
「ゆ、紫！そういうのは私が言うことでしょ！」

畳に座布団を敷き、そこに座ったところで紫がそう紹介する。
目の前に座る少女は、着物を正しく着こなし、世にも珍しい桃色の髪をしていた。
想像とは違う和んだ空気に、自然と口角が上がる。

「俺は咲風隼。よろしく、幽々子。」
「ごちらこそ初めまして、隼さん。紫からよく話は聞いているわ。」

その幽々子の言葉を聞いて、紫の顔をまじまじと見ると、ボケたような表情を浮かべてそっぽを向く。
別に恥ずかしい話でもない上、此方としては嬉しいものだが、

「二人は、いつ知り合っただんだ？」

ちやぶ台の真ん中に置かれた煎餅を手に取りながら、同じくそれらを口に運ぶ二人にそう聞く。

紫が一度手に持ったそれを置く。

「一、二年前かしら？私がこの街に拠点を置いて、始めてあの桜の下に行った時に見かけたのよ。変わった子だったから、声をかけたの。」
「それを言うなら、紫の姿だって不自然じゃない。」

紫の話に、幽々子は頬を膨らませる。

「でも、人間の中じゃ珍しいかもしれないけど、妖か、」

瞬間、そこまで言ったところで口を塞がれた。

「あー！あー！あー！隼待って!!」

すぐさま騒ぎ立てて俺の声をかき消す。

そして小声で語りかけてきた。

「な、なにさ、」

「私が妖怪っていうのは伝えてないの！だからそれは駄目！無論、貴方も隠して！」

「あ、ああ、わかつた。」

小声ながらも強いその気迫に押され、納得したようにそう言葉が出た。

座布団の上に座り直すと、幽々子がポカンとした表情を浮かべていた。

「とにかく、馴れ初めはそんな感じよ。」

「な、なるほど、。」

恐ろしい程に早い切り替えに一瞬詰まる。

しかしながら、今紫が必死に止めたように、人間と妖怪には強い隔たりがあるのだろう。

昔も、この時代も変わりなく、。

その後は暫く談笑を楽しんだ。

話題は様々で、自身の昔話や幽々子の思い出の話、俺の知らない紫の昔話なんかも聞いた。

そして、少し暗くなってきた辺りで屋敷から出ようと立ち上がった。

部屋の窓から見える街の様子は、段々と灯をつけ始め夜へと準備を開始している。

「今日は楽しかったわ。ありがとう紫、隼さん。」

「ああ、また土産話でも持ってくるよ。・・・それと、別に呼び捨てで構わないよ?。」

紫が呼び捨てなのにも関わらず、その友人の幽々子が呼び捨てでは無いのが引つ掛かっていたのか、

その一室を出る直前に、幽々子へそう言った。

「そ、そう?・・・じゃあ、また今度ね?隼、紫。」

「ああ、また直ぐに来るよ。」

瞬間、二人は同時に地面を蹴った。

そこに広がっていたのは、惨状だった、

巨大桜の根の元に、数人の人間が転がっている。

死臭がしない為、悲鳴が上がった少し前に亡くなった者たちだろう。

「……自殺か、。」

その遺体を遠目から見ると、襲われたという形跡は何処にも見当たらなかった。

それに、傷口も多くて二つ程度。

他殺だとして、その少ない傷の数で殺められるとは考えにくい。

『あの人を、追って逝ったんだろうな、』

『やっぱり、こうなっちゃうかア、』

悲鳴を聞き、同じように集まってきた街の人の話し声が入る。

「自分もあの世へ向かうなんて、正気の沙汰じゃないわ。」
「……」

その後、俺と紫は直ぐにそこから立ち去った。

そして昼と同様、桜の木から邪悪かつ歪んだ気配を感じ取りながら、

大福の一件

妖怪の山の一角には、十数人程度の天狗や河童が身を休める休憩所がある。

基本的には、山の警備時に怪我を負った者が大半を占めるが、ごく稀に山に住む妖怪以外の者も訪れたりする、。

因みにだが、設備はそれなりに充実している。

特に河童が創り出した傷薬は、塗れば急速に傷が治っていく程である。

今日この日も、数人程この休憩所を訪れていた。

窓から差し込む光に照らされて、痛む腕を押さえながら目を覚ます。

慣れない場所の所為か、かなりの睡眠不足であるが、

「・・・痛ッ、!!」

寝返りをうっただけでも、強烈な痛みが全身に走る。

口から苦痛の呻き声を漏らす。

「・・・畜生、まだ治んねえのかよ、。」

思わず嘆きを天上目掛けて吐き散らした。
しかし何を言つたとしても、傷が治ることはない。

『五月蠅いなあ、黙つて寝てなよ。』

その時、布で区切つた隣の布団から声が聞こえた。
おおよそ、声からして女性だった。

「あ、ああ、すまねえな。・・・あんたも、怪我人か何かか？」

布越しの声にそう聞き返してみる。

「……しかしそれつきり、その声は再び沈黙する。」

「……む、無視か、。」

その直後、静かな足音が近づいてくるのに気がつく。
数秒もしないうちに、その足音は立ち止まった。

「……あ、あんたは、。」

黒色の着物に身を包んだ鴉天狗。
数本の小刀を携えた、咲風隼の姿がそこにはあつた。

「やあ、調子はどうだい？大怪我をしたって聞いたから、お見舞いに来
ただけだ。」

すると彼は着物の中から袋を取り出して、俺の真横に置いた。

「見ての通り、絶賛苦痛の中ですよ。つて、誰から聞いたんですか。」
「天魔にだよ、昨日訪れた時にね。ま、運ばれたのが陣だったとは知らなかったけどね。」

そのまま置いた袋を開けて、横になっている俺の掌に柔らかい何かを置いた。

目を動かして見てみると、大福のような菓子だった。

「じゃ、早く怪我治ると良いな。」

次の瞬間、彼は立ち去ろうとする。

「・・・これ、何処で仕入れたんすか？」

そう聞くと、彼はニヤリと不敵な笑みを浮かべ去っていった。

瞬間、背筋に奇妙な寒気が走ったが、

聞かなかったふりをして、掌の大福を口に放り込んだ。

「あ、隼さん！」

家に帰ると、隣の家玄関から文が現れた。

「あれ？それ、何食べてるんですか？」

「ん、これかい？文も食べるか？」

俺の左手には、先程陣に差し入れた大福が握られている。

「昨日何処かの街に訪れたって言ってましたし、そこで仕入れたんですか？」

「いや、違うけど。」

「へ、？」

次の瞬間、空気を荒らして空から人影が迫ってきた。辺り一面に突風が吹き荒れる。

「隼アー!!私の大福返せエエー!!!」

文はその人影の正体を知り、素っ頓狂な声を上げる。

「て、天魔様!?!...ってことは、」

天魔の気迫に押され、隼は逃げるように走り出した。

「待て待て待て待て!!一旦落ち着きなつて天魔!!」

「問答無用!取り敢えず一発ぶん殴ってやる!!」

瞬間、砂煙と共に山の一角が少し抉れた、

「ご、ごめんって隼、今度良いもの差し入れるからさ、」
「いいよ別に、そんなに怒ってないからさ。」

天魔が大福を確認したところ、天魔がしまっておいた大福とは違うことが発覚した。

今現在は、天魔が必死に隼を宥めている。

「つて、結局隼さんは大福を何処から仕入れたんですか？」

暫くその光景を見ていた文は、ふと尋ねた。

「え？・・・あ、まあ、秘密かな。」

「？」

一方その頃、巨大桜が聳え立つ街。その離れにて、

「藍、ちよつといいかしら？」

「な、何ですか、紫様。」

紫は妖気を剥き出しに、己の式にじりじりと迫る。

「私の大福、貴方食べたわね？」

「・・・へ？」

「ふふ、惚けても無駄よ。さあ、覚悟なさい!!」

「ちよ、紫様!？」

騒音と共に、部屋の中に埃が舞い上がった、

異変発生

闇が明け光に包まれ出した其の街は、一転して動揺と好奇心が入り混じったざわめきに溢れた。

朝から精を出して道を駆け回り、縦横無尽に紙をばら撒く物書き。騒ぎの声を聞き、次々と開けられていく民間、出店。

――噂に敏感な野次馬の群れは、騒がしさに拍車を掛ける。

少女は今、離れの屋敷から、

花びらを乱れ舞わせる桜の木を眺めていた、。。。

『二十人以上の人が失踪、それも全くの音沙汰無く。』か。」

手元には一枚の紙。

色が霞んだその紙の中央には、雑な字でそう書かれていた。

「朝から突然隙間で引き摺り出されたと思ったら、なるほどこれは大事みたいだ。」

幽々子の屋敷を訪れてから数日後、現在紫の住んでいる家に訪れていた。

いや、拉致されていた、が的確かもしれないが、

紫は険しい表情を浮かべて、腕を組んで壁に寄りかかる。

「この事件、貴方はどう見るかしら？」

「・・・さあ？確かめて見なければ分からないよ。『百聞は一見に如かず』ってね。」

そう言い放って、汚れた紙を放り捨てた。

紫は一瞬、困惑した表情を見せる。

「さ、取り敢えず幽々子の屋敷でいいかな？」

「え、ええ、そうね、。」

紫の返事を聞いてから、俺は側に置いた小刀を拾い上げて玄関から街道へと繰り出した。

が、
幽々子の屋敷を目指して、賑わう街道を見渡しながら歩いて行く

やはり今回の訪問は雰囲気が違う。

原因は勿論、失踪事件からくるものだろう。

失踪者が身内にいて動揺し落ち着かなく走る者や、

単なる傍観者、いや、野次馬たちが道で様々な憶測話を繰り広げて

いる。

「ねえ隼、今日はやけに行動が早くないかしら？」

「ん、そうかい？」

向かう途中、紫が唐突にそう言う。

「まあね、この街には早いうちに来るつもりだったし。都合が良かった、って言い方するのもアレだけどさ。」

「そう、まあ、良かったわ。説得する手間が省けて。」

「・・・何さ、俺を説得しなきゃいけないなんて思ってたのかい？」

「ふふ、いいえ。冗談よ。」

紫と街の景観を眺めつつ、会話しながら街道を行く。

街並みを作る技術力は進化しても、それを盛り上げる人々は何ら変わっていない。

だからこそ、賑わう街からは新鮮さと懐かしさを感じることが出来る。

けれど、そんな幸福の空間は、いつの時代も大きな一手によって破壊される。

人の嘆きなど聞き流され、無慈悲に其の世界は崩れ落ちる。

果たして現在まで、一体幾千もの人々が、一方的な破壊の犠牲者となったことだろう。

「・・・最悪の場合、このままではこの街は崩壊する。」

ふと、脳内の言葉が声として漏れた。

紫は真剣な顔つきで、足を止めることなく進む。

「だけど誰が手を下すかなんて分からない。悪意かもしれないし、単

なる純心かもしれない。」

「・・・だったら、関わったからには救わないとね。人間だろうが妖怪だろうが知ったこっちゃないわ。」

紫は右手で、俺の肩を強く、優しく叩いた。

あの巨大桜に近づくとつれて、景観に違和感を感じ始めた。
そして桜の木の下に辿り着いた瞬間、疑問が確信へと変わる。

「・・・ねえ、数日前より、緑が少なくないかしら、？」

「いや、それだけじゃない。。この桜、更に華やかになっている。まるでそこの草木の生気を吸い取ったみたいに。。」

成長というには早熟が過ぎる。

桜は何に一度程度しか見られないからこそ、満開の瞬間により輝く。

それに周りの草木が枯れ果ててしまえば、華やかな景観から一転して妖しく佇むだけの不気味な桜となってしまうだろう。

「と、とにかく、早く幽々子のところに行くわよ。」

「あ、ああ。」

俺と紫はほぼ同時に、足取りを無意識に早めた。

幽々子の屋敷へ向かう途中の草木も、桜の木に近ければ近いほど緑が失われているのが明確になっている。

桜を愛した歌聖の死、後を追う慕い人、次々と失踪する街の人々、そして巨大桜の異様な成長と枯れゆく木々。

これが偶然の出来事であるか否かは、今向かう先で白黒つくだろう。

「……紫、覚悟は出来ているかい？」

幽々子の屋敷の前にて、隣で真剣な表情を浮かべる紫に声をかけた。

「ええ、さあ、入りましょう。」

紫は重く沈みそうな足を持ち上げて、屋敷の門を跨ぐ一步を踏み出した。

迷いの帰路

「……幽々子、。」

桜を庭から見つめる幽々子の姿が、紫の視界に入った。

反射的に一定の間隔で刻んでいた足音が止まる。

遠目から見た幽々子の表情は、数日前と比べて明らかに暗く窶れていた。

「……紫、隼、。」

幽々子もまた二人に気付き、小さく呟いた。

紫は整えられた庭を駆け抜けて、幽々子の元へと近づく。

「ゆ、幽々子、」

紫は一度立ち止まり、そっと幽々子に呼び掛ける。

二人の遮る空白の間に、冷たく荒い風が吹く。

「……ごめんなさい、今日は帰ってもらえないかしら、？」

「っ、」

小さく掠れた声で幽々子は囁く。

立ちすくむ紫を振り切るように、幽々子は屋敷へと歩き出す。

「幽々子、駄目よ、一人で背負い込んで、」

「……待て、紫、。」

手を伸ばす紫の手を、隼はそっと掴んで止めた。

「……帰ろう、今はそっとしておくべきだ、」

「……うん、」

二人は再び門へと歩み帰った。

「ん、見てこれ紫。」

「え、？」

幽々子の屋敷を出た直後、俺は服の中にしまっておいた数枚の紙を差し出した。

紫はその紙を受け取って、そこに並べられた文字を凝視する。

「……な、何よ、これ、」

紫が見たその文章は、殴り書かれたような暴言だった。

単純な誹謗中傷、責め立てるような暴言、中には『燃やす』『火を放つ』と言った殺害の予告まで、

「幽々子のところへ来る途中、何枚か拾ったんだ。……幽々子の屋敷への暴言だろうね。」

「っ、！」

紫は怒りを露わにし、歯軋りをする。

「……まあ、街の人は被害者側なんだから、こういう暴言が来るのは仕方ないさ。」

「だ、だからってこんなこと、!!」

紫は数枚の紙を纏めて握り潰し、道の脇に放り投げた。
捨てられた紙は、風に身を任せて何処か遠くへ飛ばされていく。

「……さてと、一旦帰ろうか。今は様子を見るしか出来ないし。」
「で、でも、放っておいたらまた人が、」

紫の家に向かおうとする俺を紫が止める。

「じゃあどうする？一番疑わしいあの桜の木を、根本からぶった斬るかい？」

「そ、それはっ、」

紫は言葉に詰まる。

桜の木を一本斬るぐらいなら容易いことだろう。

斬った後の処理だって、紫の能力を使えば直ぐに済む。
しかし、

「……幽々子の気持ちを見捨て、そんなこと出来ないよ。」
「当たり前じゃない、そんなの、」

紫は俯く。

拳を強く握りしめて、全身を震わせる。

「とりあえず帰ろう。そんでまた明日、幽々子の屋敷を訪れてみよう。」

「……うん、」

俺は肩を優しく叩きながら、ギリギリ聞こえる程度の声でそう言う。

紫は一瞬置いてから返事をし、そのまま家へと帰路を歩んで行った。

紫の家につき、そのまま玄関口を開けて紫は中へと入っていく。

続いて入ろうとするが、何やら気配を感じて足を止める。

瞬間、家の路地裏へと消える影を見つけた。

すぐさま身体の向きを変えて、路地裏へ行く影を追って行く。

そしてその角を曲がった瞬間、直ぐに影の正体と相対する。

「……やあ藍、久しぶり。」

「ええ、お久しぶりです。隼さん。」

九尾の式神、八雲藍がそこにいた。

しかし再会の喜びを見せる雰囲気ではなく、真剣な顔つきでこちらを見つめている。

「話は紫様から聞いています。何であれ、生きていて安心しました。」
「いやあ、その節は申し訳ない。……それで、本題は何だ？」

藍の表情は更に険しくなる。

「もし、紫様があの桜の木を斬り倒してほしいと言ってきたら、貴方は躊躇なく斬り倒してしまいますか？」

「・・・それは『はい』か『いいえ』で答えなきやいけないのかい？」
「いえ、幾ら言葉を並べて頂いても結構です。・・・偉そうに言ってみません。」

「いや、全然いいさ。・・・そうだな、」

俺は一瞬考え込むが、答えは直ぐに脳から叩き出された。

「紫には迷惑を掛けたし、何かどうしても頼まれたら絶対に助けになるつもりだよ。」

「・・・だけどね、藍の質問のように頼まれても、納得できる決断の理由がない限りは断るよ。」

「・・・では、もし紫様が貴方に術か何かを使って、強制的に斬らせようとした場合は、？」

「・・・その場合は勿論拒絶するし、最悪の場合、紫を手に掛けることになるかもね。」

藍は最後の言葉を語り終わるまで、真剣な顔つきを変えず俺の顔を見つめる。

この質問をするにあたって、どんな回答が来ようとも受け入れる覚悟をしていたのだろう。

そして暫く間を置いて、藍は漸く笑みを見せた。

「失礼な質問をして申し訳ありません。・・・ただ、私はとても安心しました。」

「質問ぐらいなら、幾らでもしていいさ。答えられるかは別だね。」

俺はそう言って、振り返って光が刺す方へ歩み始めた。

藍もまた、背後につくような形で歩く。

「では隼さん、もう一ついいですか？」

「ん、何？」

すると藍は足を早めて、すぐさま俺の前に立ちはだかる形となった。

「今度は『はい』か『いいえ』で答えてください。」

「ど、どうしたの、急に、」

藍は不敵な笑みを溢す。

背筋に嫌な悪寒走る。

「紫様が保管していた大福を盗んだの、隼ですよね？」

「・・・あく、ばれた？」

「その反応は凶星ですね。」

藍は一步詰める。

異様な威圧感に圧倒されたのか、俺は無意識に一步後退りした。

「紫様に言うつもりはありません。・・・その代わり、今度少し付き合っ
て貰えませんか？」

「うわ、一本取られたね。俺も紫も。」

藍の提案を、俺は二つ返事で了承した。

そして家に入る直前、最後に藍が声をかけてきた。

「隼さん、どうか最後まで紫様の助けになってください。私も紫様も心から頼りにしていますから。」

「ああ、幾らでも。」

深夜の探索

「外で藍と何話してたのよ。」

室内に入り居間らしき部屋に足を進めると、紫がお茶を啜りながらひと段落ついていた。

「いや、単なる小話だよ。ここに来てまだ藍と顔を合わせていなかったからね。」

「ふうくん、」

紫は横目で見ながら相槌をし、お茶の入った湯呑みを音を立てずに机の上に置く。

「・・・隼、そんな剣で満足に戦えるの？」

紫の正面に座ろうとした瞬間、紫は俺が身につけた小刀に目をつけた。

「いや、満足には戦えない。だけど小回りが効くし、防御も斬撃もそれなりに熟せる、、、と思うよ。」

「お、思う、なのね、」

「ま、試してないからね。単なる護身用で持ってるだけだし。」

俺は小刀を軽く握って、空を何回か斬り裂いて見せる。

「ね、多少は様になってるでしょ？」

「まあ、貴方がそういうならいいけど、」

再び小刀の刀身に布を巻いて、和装の腰あたりに仕舞った。

そして服を整えてから、紫の正面に座る。

「……いきなりで悪いけどさ、今夜少しばかり探りを入れないか？」
「探り、？」

日が沈み、街の灯りが消え、人々が休息の眠りに入った頃。
盛況な街並みは一転し、不気味な空気感と異様な気配に包まれていた。

二人は街道を屋根の上から見張る。

「すまないな、付き合わせて。」

「何言ってるのよ、私が貴方を付き合わせてるんでしょ？ 面倒ごと
なんだから放り捨ててもいいのに。」

「いや、首突っ込んだからには最後まで付き合うさ。」

街並みに変化は無い。

弱い風に落ち葉が少し舞う程度だ。

様子を凝視する時間に比例して、睡魔により瞼が重くなっていく。

「……特に動きは無いね、不気味さは確かに感じるけど、」
「ええ、」

紫もまた、襲いかかる睡魔の誘いに抵抗しつつ街道を見回す。

「このまま徹夜は厳しいだろうし、交代で見張るか？」

「そうねえ、、取り敢えず、まだ起きてられるわ。」

「了解。」

その直後、物音一つ立たなかつた夜の街から、小さくも騒がしい騒音と足音が鳴り始めた。

次第にその物音は、伝染していくかのように大きくなっていく。

「――行くよ、紫！」

「ええ、慎重にいくわよー！」

俺は屋根の上から飛び降りる。

紫も同時にスキマを開き、屋根の上から街道に降りる。

「な、」

「っ！」

直後、少し離れた一軒の家の戸が開かれた。

中からぎこちない足運びで、一人の男性がゆつくりと外出してくる。

一軒だけではない。

間髪入れず次々に玄関口が開かれ、最初に目に入った男性と同じような足取りで街道に出でる。

そのまま人々は、あの桜の木が佇む方へと歩みを始めた。

「追うわよー隼ー！」

紫は先を行く人々を、慎重に付けていこうとする。
が、

「いや、紫。それじゃあ遅いよ。」

急ぐ紫の背中に向けて声を発する。

振り向いた紫に対して、人差し指を回すように半周させて見せる。

「……そうね、なら急ぐわよ！」

瞬間、紫は宙に浮かび、そのまま桜の木目掛けて加速する。

俺は地面を蹴って飛び上がり、間髪入れず家の壁を蹴り飛ばして屋根の上まで駆け上がる。

生気を抜き取られたかのように揺ら揺らと歩む人々を常に視界に入れ、前を飛行する紫の後を追う。

「……！」

桜の木が明確で視界に入った瞬間、全身に醜悪かつ不気味な妖気が駆け抜ける。

紫は無意識に飛行速度が落ち、俺の駆ける足を動かすことを一瞬躊躇う。

それほどまでに、桜の木の妖気は強大に膨れ上がっていた。

「……って、怯んでどうすんのさー！」

固まりかけた足を右手で叩き、無理矢理にでも速度を上げる。

踏み台として捉えられる屋根の瓦を確実に見切り、立ちはだかる空気抵抗を切り裂きながら進む。

街道を歩く人たちを見張りながら走るには最も適しているが、身体のあらゆる箇所での消耗も激しい。

が、それでも先頭に追い付く気配はない。

「――駄目だわ隼！ 一気に飛ぶわよ！」

紫も同じく察したのか、言い切る前に俺の正面へスキマを展開させた。

そして彼女もスキマの中へと入っていく。

俺は小さく頷き、躊躇なくスキマへと突っ込んだ、

一秒と経たずに、眼前の視界は開ける。

が、その光景を目の前にし、全身の血の気が引く。同時に心臓の鼓動が加速する。

「――なあ紫。」

桜の木に招かれていた人々は、無惨な姿となり桜の下で転がっていた。

傷こそついていないが、顔の血色は消え手足は枝のように細くなっ
てしまっている。

最早人間とは、、、いや、生き物とさえ思えないほどの異形化。

凝視すればするほど感情が揺れる、大きな恐怖と静かな憤怒が込み
上げる。

「お前が許可すれば、一秒一瞬でも速くコイツを斬り刻むが、

。。。どうする？」

妖怪桜の猛攻

——静寂と暗黒の夜——

華やかに咲く一本の大樹は、命を貪り尽くす妖怪桜と化した。

然し其処には悪意といった明確な感情は無い。

生ける者を只管に喰らい尽くし、妖気を止めること無く増大し続ける。

『誰の仕業？』『何の為？』

幾ら奴に疑問をぶつけようが、答えなど返ってはこない。

生物は欲望という感情を持った瞬間、理屈や事情など関係なく本能のまま動く。

奴は思考を持たず感情を手に入れてしまった。

其処に明確な目的や、結末などは一切求めてはいないだろう、

瞬間、一本の枝が針の如く先を尖らせ鞭のように迫り来る。

それも的確に急所、即ち心臓や脳の位置へ。

！

「——ッ!!」

隼は反射的に身体を動かし、肘と膝辺りで挟み込んで止める。

勿論、桜の木に目など付いてはいない。
気配を察知するといった感覚もない。

挟んで抑えた枝は勢いを止めず暴れ、皮膚を刈るように削る。
更に続けて三方向から、急所を狙い先端が放たれる。

「くッ、」

隼は右から迫る刺突に先程挟み込んだ枝を投げつけ相殺し、上方向からの攻撃を眼前で躲す。

更に迫り来る三発目を、左脚で蹴り上げ蹴散らす。

「これじゃあ埒があかないな、」

瞬間、地を蹴飛ばし加速する。

続けて妖怪桜の周りを駆けて、紫のいる位置から距離をとろうとする。

行く先でも妖怪桜の攻撃の手は緩まない。

背中を追うように放たれる刺突攻撃。

次々と繰り出される攻撃の嵐の中、隙間を縫うように駆け抜ける。

「――はあッ!!」

襲い掛かる攻撃に対し、隼は小刀を的確に当てて往なす。

すかさず攻撃の隙間に滑り込んで潜り、桜の木を攪乱させる。

「ッ!?!」

瞬間、先程までの攻撃とは打って変わり、丸太のような枝が薙ぎ払うように襲い掛かる。

地面を引き摺り砂煙を上げて、悪視界の中で隼の腹部を捉えた。

そこに隼の姿は無かった。
直後、空中にスキマが開き再び地面に降り立つ。

「――紫、」

二人の視線が合う。

何倍にも永く感じられるような短い時間、互いの眼を直視する。

「迷ってて悪かったわね、隼。」

紫は小さく頷き桜の木へと視線を移す。

続けて正面に手を翳し、円形の模様を浮かび上がらせた。

「私の結界で妖力を封印するわ。時間はかかると思うけど、絶対に成
功させるから。だから、！」

隼は紫と妖怪桜の間に入り立ちはだかる。

小刀の切先をぎらつかせ、鋭い視線で睨みを効かせる。

「ああ、了解。攻撃は全部防ぐから、紫は気にせず集中して。」

「、！　――ええ！任せたわよ!!」

瞬間、花びらを散らして無数の刺突が襲い掛かる。

「ーーそりゃあッ!!」

十分に引き付けたその瞬間、隼は小刀で空気を切り裂く。
高速で切り裂かれた空気は形を崩し、辺りに突風が吹き荒れる。
その風は障壁となり、無数の攻撃を全て相殺した。

「さア、かかって来なよ。」

正気の状態で、桜の木を見つめる少女が一人、
美しさを失い荒れ狂うその姿に、小さい涙の雫を落とす。

「お父様、」

少女はそう呟いた。
その呟きが意図したものだったか、それとも無意識のうちに溢れた
ものだったかは、
少女を含めて、誰も知ることは無い、

巻き起こる旋風

妖しく輝く月明かりの下、黒き弾丸は漆黒を駆ける。
一步地を蹴るごとに砂煙を巻き起こし、風を荒れ狂わせる。
対するは命を狙い渴望し、集中砲火する美しき怪物。
ただ純粹に、生を刈り取る一点だけを狙い襲い掛かる。

「ーったく、そんなに命が欲しいかい!？」

小枝の刺突攻撃は、軌道を見てからでも対処が出来る。
狙いさえ把握出来れば、その攻撃の軌道から身体的位置をずらすだけ回避が可能だ。
問題は、

「くッ、!!」

太枝の地面を抉る薙ぎ払い。
被弾範囲が広い上、土煙が視界を奪う。
悪化した視界の中では、小枝の軌道を予測するのが一步遅れ回避が難化する。

「全く多彩な攻撃をッ!!」

暗闇と土煙の中を凝視し、連続して迫る刺突を小刀で捌く。
度重なる乱撃により刃が削られ、徐々に刃こぼれが増えていく。

しかし次の瞬間、ピタリと攻撃が止み静寂が訪れる。

「ーッ！まずいッ!!」

息を整える間も無く、背筋に悪寒が走った。

反射的に結界を張る紫の方へ身体の向きを変え、しまっておいた漆黒の翼を開いた。

両脚に地面を抉るほどの力を込め、翼を羽ばたかせると同時に蹴り飛ばした。

身体は空気抵抗を無視し、暴風と共に一気に加速する。

「ーッ！紫！身体をそのまま動かさないで!!」

「っ、隼!?!」

結界に集中する紫が此方を振り向き、一瞬動揺する。が、直ぐに結界へと向き直す。

一方、無数の小枝は紫を狙い、一斉に襲い掛かる。

「間に合えッ!!」

ーッ瞬間、間一髪で紫を抱えて回避する。

その状態のまま身を隠す為、一度物陰に姿を隠した。

しかし再び狙われるのは時間の問題だろう。

「大丈夫か？紫。」

「え、ええ、結界の張り直しなんてことにはなっていない、けど、」

物陰から半身を出して妖怪桜の様子を伺いながら、目紛しく思考を張り巡らせる。

妖怪桜は花卉を散らしながら、妖しく暗闇に揺れている。

「ねえ、隼。」

偶然攻撃対象が変わったのか、はたまた必然的に起こったことなのか。

・・・しかし判断材料が足りない。

未だに何故、奴が急所位置への確に攻撃が出来ているのかさえ理解出来ていないというのに、

「隼!!」

「……いッ?!?!」

直後、紫が俺の耳元で強く叫ぶ。

一瞬身体が飛び上がった。

ふと振り向くと、紫が鋭い眼で此方を見つめている。

「言っておくけど、私は攻撃を避けながら結界を張るくらい造作もないわよ!」

俺は紫の勢いに圧倒される。

しかし勢いだけでなく、妙に納得させられる言葉の重みを感じる。

「貴方はどう？あの化け物の攻撃を全部抑え込むぐらい出来ないのかしら。」

煽る口調ではあるが、眼は依然として真剣だ。
その瞬間、何か枷のようなものが外れた気がした、

「……くっ！あつははー！ごめんごめん！」

この状況にも関わらず、無意識に笑いが込み上げ口から漏れる。
思えば先程までは紫を守ることを意識して戦闘に臨んでいたが、冷静に考えれば余計なお世話じゃないか。

紫の表情にも、少し笑顔が溢れた。

一度深く息を吐き、頬を両手で二回叩く。

「……行くよ、紫。」

紫は隣に並び立つ。

俺は小さく頷き、身を隠していた物陰から表へと出でる。

「さあ、仕切り直そうか化け物桜。」

直後、再び桜の猛攻が襲い掛かる、
!!!

瞬間、無数の枝は謎の障壁により弾かれた。

妖怪桜は枝々を擦り合わせて、唸るような騒音を鳴らす。

その直後、一瞬の好機を逃さず、黒翼を開き一気に加速する。

更に速度を上げながら、間を縫いつつ桜の反対側へと回り込んだ。

『結界の準備をしながらでも、簡単な壁ぐらいは作れるわよ。』

表に出る直前の、紫の言葉を想起する。

”簡単な壁”とは言っていたが、攻撃を全て跳ね返した上、これだけの隙を作り出せるとは恐れ入る。

背後に回ってしまえばこっちのものだ。

「さあ持久戦と行こうか!!」

再び小刀を表に引き抜き、下から上へ掬い上げるように振り上げる。

一秒遅れて巻き起こる旋風、轟音と共に妖怪桜へ衝撃を与える。

辺り一面の空に、大量の桜の花弁が舞う。

間髪入れず小刀を右下から左上へと斬り上げ、続けて左下から右上へと空気を斬り裂く。

再度巻き起こる旋風の二撃。

更には正面に二枚の風壁を作り出す。

「そりゃあッ!!」

妖怪桜の攻撃の矛先が此方を向き、刺突攻撃と薙ぎ払いが同時に襲い掛かる。

が、二枚に重ねた旋風の壁はそう簡単には破れない。
しかし勿論攻撃の手は緩まない、無尽蔵とも言えるほどの攻撃手段
をもって暴れ狂う。

――戦の夜は未だ続く、

花卉の斬風

眠り静まり返った夜の街。

——その一角、土煙と共に轟音と暴風が巻き起こる。

命の削り合い、死戦。

戦の夜は佳境に入る。

「——はあアツツ!!!」

妖怪桜の攻撃の矛先を予測し続け、ただ作業の如く行動を繰り返す。

だが、全ては対処しきれない。

回避先に偶然刺突を合わせられれば、多少の傷は覚悟して動く。

紫へ矛先を向けないよう引きつけ役として巻き起こす風撃も、連発させれば腕に相当な反動が返ってくる。

「くツ、拙いな、!!」

ここまでで既に十発以上は放っている。

が、感情を持たない妖怪桜が攻撃の手を緩めることは決してない。

幾度となく繰り返し襲い掛かる猛攻。

俺は出来るだけ左右交互に地面を蹴って躲し、避けきれない太枝の薙ぎ払いは小刀を滑らすようにして対処する。

「全く逃やしないんだから、少しばかりお茶しながら話でもしないか
ん?。」

時間稼ぎに挑発を仕掛けてみるも、無慈悲にも奴が求めるのは生氣、即ち命のみ。

間髪入れず、急所へと襲い掛かる乱撃。

「ま、そりゃあ乗ってはくれないよねッ!!」

奴の攻撃を心臓命中寸前で捌く。

一瞬、攻撃の手が止まる。

しかしこれはただ矛先が変わったに過ぎない。

「ッ!!……そりゃあッ!!」

まるで空気を引っ張り上げるように空間を切り裂き、より強力な暴風を巻き起こす。

その風は形を形成し、竜巻となり妖怪桜と俺の周りを覆いその場を留まる。

大量の花弁が散る、

瞬間、稲妻が走ったのような衝撃と反動が右腕を襲う。

更に激痛は右腕だけでは止まらず、全身を荒らしながら駆け巡る。

「ア、アがあッ、!!!」

口内から飛び出す血反吐。

心拍数は急激に加速していく。

身体は既に限界を迎えていた。
ただ自身、この鴉天狗として身体を知り得ていなかった。
この身体を前の身体と無意識に錯覚し、知らず知らずの内に自身を破壊していた。

当然、相応の反動は不可避だ。

「ーッッ!!!」

そんな状況の中、妖怪桜はより一層血気盛んに命を刈り取りに迫る。

俺は身体を投げ出して、地面を転がりながら回避する。

「よっ、と、」

口元に付着した血を拭い、ふらつきながらもその場で立ち上がる。
瞼が重く、視界が朦朧としている。

一瞬気を抜けば、その場に崩れ落ちて絶命しかねないほどに身体は衰弱しきっている。

だが、

「ーっつと、危ないな、。また死んじまったら、みんなに怒られちゃうからなあ、」

姿が過ぎる。

だが走馬灯ではない。

記憶、いや、多少なりとも妄想が混じっているかもしれないが、

一気に真横を人が駆け抜ける。

よく知る親友、友人から、少しの関わりしか持たなかった全ての
人々が、

この光景は、何処かで一度見た景色だ、

『ほら、どうする？このまま死ぬかい？』

もう何度も聞いた声。

ぼやけているが、誰かなど直ぐに理解できる。

「ーいいや、今度は死なないさ。」

瞬間、意識と激痛が戻る。

その直後、妖怪桜の三連撃。

俺は一瞬反応が遅れ、咄嗟に小刀で防御する。

「……！」

が、小刀は呆気なく手から弾かれて地面を転がっていく。武器を失い、防御手段は無くなった。

攻撃を全て躲す体力も残されてはいない。

格好の的となったこの身体に、妖怪桜はトドメの一撃を突き刺す。

「……ほんの一瞬、笑みが溢れた、」

次の瞬間、妖怪桜の攻撃は漆黒の旋風によって弾かれる。

その直ぐ直後、一身の弾丸が再び夜を突き抜ける。

間髪入れず、勢いを増しながら巻き起こる黒き竜巻。

「……さ、仕切り直しだ。」

その右手には、一枚の桜の花弁が親指と人差し指の間に挟まれていた。

それ以外、身体の何処にも武装は見当たらない。

隼はその花弁を、先程までの小刀のように振るい旋風を起こす。ただ花弁を振り回している訳ではない。

花弁が一瞬、横が一本の線となり、柔らかな刃と成った瞬間。その状態を保持し、空間に一線の亀裂を斬り込む。

「……はあッ!!」

休息のない妖怪桜の猛攻。

その一撃一撃に対し、花弁の刃で往なしきる。

しかし花弁が硬化した訳ではない為、一度防御や旋風を起こせば容易く破れ去る。

が、花弁が一枚破れるや否や、直ぐ様散り逝く花弁を手に取り、次の攻撃に備える。

この瞬間、隼の目の奥には何も映ってはいなかった。

ただ真つ黒な視界の中、妖怪桜の枝と周りを散る花弁だけを感覚で読み取り続ける。

一切の無駄を捨てた、完全集中状態。

いずれ痺れを切らした妖怪桜は、全方向から刺突や薙ぎ払いを混ぜた総攻撃で襲い掛かる。

その全ての攻撃に対し、花弁で空を斬り旋風を巻き起こし、

直後、その衝突は、巨大な漆黒の竜巻へと昇華する、!!

瞬間、その竜巻の天井から鴉天狗が飛び出す。
黒き翼を羽ばたかせ、地面を目掛けて急降下。
そのまま寸前で身体を捻り、地面を擦りながら降り立つ。

「――紫ッ!!」

「ええ、準備完了よ!!」

直後、その周辺を巨大な結界が覆う。
地面に紫色の稲妻が走り出す。

「さあ、覚悟しなさいッ!!」

妖怪夜桜封印

辺りの空を覆う紫色の巨大結界。

その結界は無作為に稲妻を迸らせ、妖しい輝きと強大な妖気を放つ。

結界に囲まれた妖怪桜は、花や枝を振り回して抵抗する。

同時に奴の妖力が膨れ上がっていく。

その衝突により、轟音を奏でる突風が吹き荒れる。

「くッ、！大人しくなさいッ!!」

一瞬、結界が揺らぐ。

その反動は紫の身体へと直接跳ね返り、後方へと押し返される。

直後、紫の背中に手が添えられる。

「――!!」

紫はその添えられた手から、微かな力と温もりを感じ取る。

「・・・頼む、紫、。あと、もう少し、!!」

絞り出された小さな声。

微力ながらも、その手は紫の精神を後押しする。

少しずつではあるが、妖怪桜と結界の妖力同士が拮抗していく。

「……しかし、それでもまだ足りなかった。」

一度、戦況を拮抗状態に持ち込めたとしても、そこから更に踏み込むことは容易ではなかった。

「くッ、!!これじゃ、抑えきれないっ、!!」

あと少し、何か決定的な力があれば、

紫の足元の地面は、既に踏ん張りが効かないほどに抉れている。辺りを覆う結界もまた、色の鮮明さが薄れてきている。

「……お願い、だから、、止まりなさいッッ!!!」

その瞬間、結界に一線の亀裂が入った、、

「……その時、一人の小さな足音が近づいて来る。」

妖怪桜に誘われた人々のような、正気を失った足音ではなく、

一步一步を確かに踏み締める、何か覚悟のようなものを感じる音

だった。

やがてその足音は、紫の視界に入る、

「っ、ゆ、幽々、子、？」

足音の正体は、紫のよく知る少女だった。

美しく整った和装に身を包み、ゆつくりと桜の下へと歩み寄る。

「ゆ、幽々子、！」

亀裂の入った結界を何とか貼り続けながら、紫は幽々子へ呼び掛ける。

直後、幽々子は振り向いて、小さい笑顔を見せた。

「紫、隼、ありがとう。・・・この桜は、私が連れて行くわ。それが、あの人の娘としての、責務だと、思うから、」

「ーだ、駄目よ、それ以上近づいては駄目、!!」

幽々子は歩みを続ける。

その間にも、紫の結界には次々に亀裂が入っていく。

やがて幽々子は桜の真下へと辿り着く。

そして和装の懐へと手を入れ、一本の小刀を取り出した。

左手で鞘を握り、右手で柄を持って引き抜き刃を表に晒す。

「待って、!!幽々子、お願いだからッ、!!」

紫の目に涙が浮かぶ。

幽々子もまた同様に、瞬きと共に一滴の涙が地面へと零れ落ちる。

「……じゃあね、さよなら、」

——瞬間、結界は強い輝きと共に碎け散る。

光は辺りを包み、暫くの間その場を照らし続けた、

「……ん、」

顔を照らす日の光と、身体中の痛みで身を覚ます。

少し気を抜いて寝返りを打とうとした瞬間、全身に重くのしかかるような激痛が走る。

「ツ、あ、ああア、!!」

俺は、、、咲風隼は、激痛に悶える。

「これまた最悪の目覚めだ。」

何とか呼吸を整えながら、慎重に身体を起こす。

「どうやら動かせないほどの致命傷を負っている部位はないようだ。」

「ハア、ハア、、、で、、何処だ？(こころ)、」

一息つけたところで、俺は辺りを見回す。

「どうやら何処かの室内で寝ていたようだが、視界がぼやけて鮮明には見えない。」

「ふらつきながらもその場で立ち上がり、物や壁を掴みながら光が刺す外の方へと目指す。」

「やっとの思いで光刺す障子の元へと辿り着き、その取手に手を掛けようとした。」

「が、その瞬間、真下の足場が消え、俺は暗闇へと落ちた。」

「なっ、、!?」

「そのまま暗闇の中をゆっくりと落ちていく。」

「…きて…起きて?・隼。」

「…紫、?」

再び目を開くと、紫が俺の身体を揺らしていた。

背中には先程までとは違い、硬く冷たい地面の感触を感じる。

「…良かった、お前が無事そうで安心したよ。」

「人の心配の前に、自分の心配をしなさいよ、。貴方、丸一日は目を覚まなかったんだから。」

紫は俺へと手を差し伸べながらそう話す。

「…そうか。すまないな、少し無茶をし過ぎた。」

手を借りながら、身体を刺激しないようにそつと立ち上がる。

立ち上がってから辺り全体を見渡すと、美しく整った木々や岩で構成された庭園がそこにはあった。

しかし何処か妙だった。

まるでこの世の雰囲気とは思えない、不気味な静寂に包まれている。

「紫、此処はいったい、?」

「…此処は幽霊が彷徨う場所、冥界よ。」

紫は何の重みもなくその言葉を発した。

一瞬、思考が停止する。

「…へ、?」

「ああ、安心して?別に死んだから此処に来たわけじゃないわ。」

紫は俺の足並みに合わせて、ゆっくりと歩き始める。

「私が現世と冥界の境界を繋げたの。私たち妖怪なら、冥界に立ち入っても支障は無いわ。」

庭園を進むにつれて、辺りの様子が少しずつ変化していく。

草木や石ころなどの自然物が減り、やがて石で固められた道が姿を表す。

そして更にその先には、天空まで伸びる石階段が聳える。

「流石にこの階段を登っていては時間がかかり過ぎてしまうから、階段の頂上まで一気に飛ぶわよ。」

紫は正面にスキマを開き、その中へと立ち入る。

続けて俺も中へ入ると、すぐさまスキマから外へと出た。

「っ、!?」

その瞬間、大きな屋敷と一本の巨大な木が視界に入った。

そしてその木は単なる大樹ではなく、

あの妖怪桜だった。

犠牲が創り出した光景

その桜は、何事もなかったかのように静かに佇んでいた。最初目にした時と全く同じように風で靡くその姿に、身体を身構えて一歩後退る。

「……しかし、不安感を煽るあの不気味さは感じられなかった。ただ景色を彩るだけの、何の変哲もない桜の木。」

「……行くわよ、隼。話は歩きながらするわ。」

「お、おい、、気をつけなよ?」

紫は桜の木、いや、その下の屋敷へ向かって歩みを進める。

そしてそこに辿り着くまでの間、桜を見上げながら静かに語り出した。

「あの後、妖怪桜はあの場所から姿を消した。でも妖力の痕跡がほんの少しだけ残っていたの。」

「……ということは、封印は成功したのかい、?」

すると紫は浮かない表情で小さく頷いた。

それは喜ばしい知らせだと思っていたが、どうやらそうではないようだ。

でなければ、そんな表情にはならない。

「そして貴方が眠っている間、私はその痕跡を追ったわ。……そしてこの場所に辿り着いた、というのが昨日の話よ。」

話の区切りがついた頃、二人は屋敷の玄関前へ辿り着く。

その直後、その玄関が中から開かれた。

「……あら？ 貴方は確か、紫、だったかしら？」

何処かで聞き覚えのある声だった。

続けて容姿を見るや否や、急速に心拍数が上がっていく。

そして漸く、この状況の意味を理解する。

「……な、何で、」

そこまで言葉が出たところで、紫は俺とその娘の間へ割って入った。

「ええ、幽々子。昨日ぶりね。」

「ええ、今日も上がってって？ ……ええつと、そちらの方は？」

その質問を受け確信した。

隣で応答する紫も、チラリと俺を見て小さく頷く。

西行寺幽々子は現世を去った。

そして彼女に、生前の記憶は残っていなかった。

その後、俺は紫に妖怪桜の最期を聞かされた。

幽々子が命を犠牲に、桜の木を封印したという結末を。

そして幽々子は記憶が消え亡霊となり、この冥界に滞在しているそう
うだ。

楽観的過ぎるかもしれないが、彼女曰く割と快適らしい、。。。

「ねえ、紫。」

「、？」

その帰り道、紫に俺は語りかけた。

屋敷に入った後は、ただただ何気ない会話を交わし続けた。

彼女は記憶こそ失っていたが、話している雰囲気や口調は何ら違い
は無かった。

その失われた記憶も、蘇らせたいとは思わない。

幽々子は今、この冥界で穏やかな暮らしを始めている。

そんな彼女を再び振り回すのは、少々鬼畜が過ぎる。

「もし幽々子が記憶を失っていることに気付き、それを戻したいとお
前に言ったら、どうする？」

「。。。そうね、多分、手伝うと思うわ。そもそも、私が結界で封印

しきれなかったせいだもの。」

「・・・お前のせいなんかじゃないさ。俺がもう少し身体を把握して戦っておけば良かった。言うなら俺の責任だよ。」

そう言うのと、紫は俺の顔を見上げて少しだけ笑みを見せた。

「隼、今回はありがとう、感謝するわ。さ、帰りましょう?」

「ーああ、行こう。」

紫は正面にスキマを開いた。

「じゃあ、俺はそろそろ山に帰るよ。藍に宜しくね。」

夕日が沈み始めた頃、俺は紫に別れを告げ帰り道を歩み始めた。

スキマで送ってもらおうと思ったが、桜の木があった場所や街の様子が気になった為、そこに寄って帰ることにした。

街の様子は何ら変わらない。

あの夜の騒動がまるで嘘のようだ。

「・・・あの人は、」

そこで、頭の片隅に覚えのある人を見かける。

よく見るとあちこちに、そのような人影が目に入る。

それは、あの妖怪桜に誘われた人々だった。

「人の生氣は、戻ったのか。」

これは幽々子が犠牲の元創り出した光景、

人々にとつては一件落着かもしれないが、それでも誰かの犠牲は必要だった。

既に重々理解していた。

犠牲を出さず、全てを救うことなど不可能だと言うことは。

それを信じたくないから、ここまで戦い続けてきたが、

「クハッ、やっぱ生きてやがったか。」

瞬間、隼は足を止める。

背後から語りかけてきた声に対し、振り返ることなく応答する。

「随分な物言いだね。――先ずは名乗りなよ。」

賑やかな街道の中でも、その声は空間に大きく響き渡った。

「あくく、そうだな。――貴様が最も殺したい相手、と言えは伝わるか？ 咲風隼ア。」

直後、刃の高い接触音が鳴る。

「おいおいッ、そう早まるなよ道の真ん中だぜ？」

「俺は名乗れと言ったんだ。それに、別に騒ぎにはならないさ。」

隼は、一歩後ろに接近する。

「何せ、一撃の元に葬るつもりだからね。」

淡々と告げる。

対する背後の声もまた、一切動揺する様子を見せない。

「なア？ 咲風隼。今日はちよいと提案に来たんだよ。」

そいつは少し穏やかな口調に変える。

だがその空間は、穏やかさの欠片も微塵もない。

「言っておくが、貴様は大罪人だぜ？ 何せ帝を殴りつけたんだもん
なア？」

「――それで？」

背後の声は鼻で笑う。

「その反応、相変わらず貴様は帝が気に入らないのだろうか？」
「ああ、そうだね、否定はしないさ。」

少しずつだが、隼が手に掛けている小刀の刃が姿を露わにしている。

「それは俺も同じだ、あの存在は反吐が出る。そこでだ、一度手を組んで丸ごと潰さねえか？」

「断る。生憎一切そんなものに興味はないんでね。」

問いかけに対し、返答までの時間は零に等しかった。

段々と夕焼けが消え始め、辺りが暗闇に包まれていく。

「即答かよ、少しぐらい人の話は聞いた方がいいぜ？」

「聞いた上での回答だよ。お前こそ、人の話はちゃんと聞きな。」

辺り一体に、冷たい風が吹き抜ける。

それと同時に、小刀が再び納刀され刃が隠された。

「――斬るのはやめだ。」

「ああ？乗る気になったか？」

瞬間、隼は後ろも見ずに背後へ目掛け地面を蹴る！！

「さア、一発喰らって消えなッ!!!」

「ッ、!!」

直後、放たれた裏拳は、そいつの顔面を捉えた。

拳を振り切った後、背後に誰か倒れ込む音、

そして人々の悲鳴が聞こえる。

そして再び、隼は歩き始めた。
一度も背後を振り返る事なく、

「いつか訪れるその目指す時まで、例え茨の道だろうと歩み続けよう。
運命とか宿命だとかじゃなく、己の意思と信念で。」

彼の覚悟は、より強固なものとなった。

第三章・無双剣豪編

豪雨の日の翌日

雨の日、風に揺れる衣服や、縦横無尽に駆け回る子供達は姿を消し、空から水が溢れる音のみが鳴り響く日。

「……その中、雨音を斬り裂き生ける血を散らす者一人、。」

『出逢えば死ぬ』『神隠しに遭う』『彼は人間じゃない』

これらは全て単なる噂、作り話。

本当に死ぬのか？世界から消えるのか？そもそも其の者は真に存在するのか？

真実を知るのは当事者のみである。

つい最近だが、とある街の看板であった桜の木が、たった一夜にして姿を跡形も無く消したという。

「……全く、途方も無い戯言だ。」

だがそれもまた、真実を知るにはその場に居合わせるしかない。

この時点からその真相を掴むには、些か後の祭りではあるかもしれないが、

後の話、例を挙げるならば最初に告げた人物の噂。

それを知るには、ここからでも十分に間に合うだろう。

「……さてと、」

「その人物、何故か胸騒ぎがする、。」

紅く塗られた大剣を携えた。

第三章・無双剣豪編

「あ、隼さん！帰ってきたばかりで悪いんですが、手伝って、っ、って、びしょ濡れじゃないですか！」

家の前にて、文が自宅の屋根の上で何やら作業を行なっている。

「やあ文、ただいま。大丈夫、直ぐ手伝うよ。」

あの日の後、一夜かけてこの妖怪の山に帰ってきた。

紫の言葉通り、桜の木はあの位置から姿を消し、

何故か街の人々も、それを元々存在していなかったかのように、記憶を消失していた。

街の人々にとっては、それが最善の結末だっただろう。

記憶が残ってしまったては、余計な混乱が増えるだけだ。

その後、睡眠を取らず山へ向かって帰ってきたのだが、

途中大雨に出くわし、傘を持っていない俺はずぶ濡れになりながら帰ってくる羽目になった。

そして今に至る。

「少し待っていてくれ、今着替えてくるから。」

急足で玄関の扉を開け中に入る。

ピシヤリ、

「ん、？」

その瞬間、足元に不安定な違和感と感触が走る。

そして段々と、その違和感が足へと染み込み浸透していく。

玄関は、小さな池と化していた。

「あっちゃ、処理に時間がかかるなあ、」

俺はつま先立ちで慎重に歩き、陸に辿り着いたところで履物を脱ぎ捨て乾きがいいように日光に当てる。

と、思ったが、

「いや、また後で履くものだから、日光に当てたところで焼け石に水か、」

後でもう一度この履物に足を突っ込むことになる考えると考えると、気分が憂鬱になる。

あの街でもう少し、生活用品を揃えておくべきだったか、

俺は廊下を歩きながら、濡れた上着を脱ぎ気持ち程度に叩いて乾かす。

それにしてもこの和服、いったいどんな素材で作られているんだろうか。

鴉天狗になった際に着ていた為、恐らくヴァルが、いや、天照が用意したものだとは思うが、

「またいつか会った時、色々聞かせてもらおうかな。」

そうこうしているうちに、目的の部屋に辿り着く。

この家で最初に目覚めた部屋だ。

この家にいる間は、基本この部屋しか使用していない。

何せ居間は一人だと開放的すぎるし、その他の部屋は埃が酷い。

「……ん、何だこの刀。」

適当に手荷物を下ろし、再び玄関へと足を運ぼうとしたその時、部屋の隅に、一本の刀を見つける。

それも見たことのない刀だ。

一切装飾のない鞘、柄、そして何よりその大きさだ。

何せ俺の身長よりも高い。

興味本位でその刀の鞘を掴んで持ち上げる。

「へえ、結構重たいな。」

大きさ相応の重量といったところか。
振り回せなくはないが、相当な筋力が必要だろう。

「後で天魔にでも聞いてみるかな。」

俺は持ち上げたその大太刀を、そつと元あつた位置に立てかけた。

「文、お待ちせ。何を手伝えばいいんだい？」

再び湿った履物に足を入れ、文が登っている屋根の下へ向かう。

「じゃあ下の板を何枚か取ってくれませんか？」

文が言った通り、下には何枚もの板が乱雑に広げられていた。

その中から数枚を持ち、屋根の上に登る。

「ほら、持ってきたよ。」

「ありがとうございます〜！じゃあ穴が空いている場所に固定してもらってもいいですか？」

彼女が指さした場所には、拳一個程度の穴が何箇所も開けられていた。

これでは屋根が屋根の意味を成さない。

「あちやく、これは酷いね。」

「このぐらいだったらマシな方ですよ。酷い家なんか、屋根が丸ごと剥がされてますし。」

先日、この山付近は豪雨に見舞われたそうだ。

俺が帰り道に出くわした大雨は、どうやらその雨雲の残党らしい。

一通り屋根の修理を終えた後、俺と文は家の前で一休みする。

「そういえば隼さん。帰ってくる途中、何か妙な人とか見かけませんでした?」

「うくん、誰も見なかったかなあ。」

昨夜の帰り道の記憶を探ってみるが、

誰かとすれ違った、更に言えば、誰か人を見かけた記憶はなかった。

雨でそれどころじゃなかった為、偶々気付かなかったただけかもしれないが、

「で、それが何か?」

「いや、それがですねえ、」

文曰く最近雨の日の夜になると、辻斬りの剣士が出没する、なんて噂が流れているらしい。

不確かな情報の為、その真偽ははっきりとしないそうだが、

「誰か目撃したって人はいないのかい?」

「現状は性別すら分かっていないんですから、多分いないと思います。」

「へえ、ま、気を付けておくよ。」

「探しに行く時は言ってくださいね！私も是非是非同行しますので！」
「行かないよ、暫くは休みたいんだから。・・・でも、その時は頼りにしてるよ。」

雨夜の辻斬り、か、。

厄介ごとに発展せず自然消滅してくれればいいが、

その刹那、山を照らす太陽の輝きが一瞬雲によって途絶えた。

雨宿りの死闘

――時は少し遡る。

まだ黒き雨雲が空を覆い、地上へと滝の如く雨を降らせていた時間。

高く聳え立つとある一本の大樹の下、一人の妖怪が影から雨雲を眺めていた。

その妖怪の名は、犬神。

これは彼女自身が名乗った名ではなく、彼女という妖怪を恐れたい人々が呼んだ名前だった。

そんな彼女はこの雨の日、雨宿りをしながら雨雲が消えるのを待つ。

「こういう天気は、何もやる気が起きないねえ、」

数日前、あの山を訪れてから私は暫く彷徨った。

あの後の結果がどうであったかは知らないが、ジジイがどうなったかはだいたい想像がつく。

まあ、私は十分な収穫を手に入れた。

「妖怪の山か、折角だし、次は土産でも持って行ってみるでしょう。」

ふとその瞬間、前方から一人の人影が寄って来るのが目に入った。

それも雨を避ける道具を持たずに、

「随分と不気味な人だねえ、」

その人影は、寸分変わらず私の元へと歩みを進めて来る。

更には次の瞬間、右手を背中の後ろに回し、、

「ッ、!!!」

そいつは刀を引き抜いた。

何処にでもある普通の刀のようだが、それを携え歩み寄る姿に、私は異常なまでの殺気を覚える。

「……アンタさ、人に刃を見せつけるってことは、お前を殺すって言うっていることと同じだよ？」

その人影は止まらない。

更に殺気を増大させながら、地面に溢れた雨水を小さく跳ね上げながら近づいてくる。

「なるほどねえ、、じゃあ、今からアンタは敵だ、容赦なく殺すよ。」

瞬間、私は右手の先へと妖気を集中させ、幾つかの弾を作り出す。

更には相手から見えない位置にも何発かの弾を忍ばせる。

狙いは相手を一撃で葬る位置。

「……喰らいなッ!!」

薄く輝く数発の弾は弾幕と成り、そいつ目掛けて放った。

が、その弾幕は、空中にて一瞬にして斬り落とされた。斬られた弾幕は、塵となり辺りの景色を輝きで彩る。それとほぼ同時に、その人影は私の真横へと迫っていた。

「いッ、いつの間にッ、!？」

私が反応し身体を逸らした瞬間、そいつの刀は轟音を鳴らしながら振り抜かれた。

肩の辺りに、鋭い痛みが走る。

『ッ！人間の動きじゃないッ!!』

飛びかけた意識をなんとか保ちながら、隠していた数発の弾丸で応戦する。

が、無常にもその弾幕も斬り捨てられる。

しかし、一瞬だが気は逸らした、!!

「覚えてなよッ！この仮は必ず返す、!!」

私は痛みを堪えながら、地面目掛けて弾幕を放ち閃光を放つ。すかさず私は、その場を離れた。

途中、一度大樹の方を振り向いたが、その時既に人影は無かった、

「……これは、」

翌日、その戦闘のあつた大樹の元に訪れた者が一人。

雨上がりで泥濘む地面の中を進みながら、大樹の真下に残っていた異形な跡を探る。

「誰かがつけた跡だ、。それも、かなり抉れている、。」「

その者は暫く周りを探り、その場を去った。

戦闘の痕跡を全て消して、、

哨戒天狗総大将

早朝、まだ山が寝静まっている静寂の中。

身体を拘束し続けていた包帯を捨て、自由な身体で歩みを進める。

今日は快晴、丁度姿を現し始めた日の輝きに照らされると、不思議と気分が上がる。

地面はまだ所々泥濘みが残っており、木々には雫が垂れている。

そうこうしているうちに、目的地へ辿り着く。

正面には木で作られた立派な扉。

「……よし!!」

扉に手をかけて、勢いよく開く。

久々の道場の光景だ。

その床を見るだけで、闘争心が湧き上がる。

竹刀を撃ち合う戦士の幻想が見える。

「……もう怪我は治ったんですか? 陣。」

「おはよう、樵さん。……ええ! おかげさまで完治しました。」

俺、鞍真陣は、再び戻ってきた。

「ほらほら、あまりにも腕が鈍り過ぎですよ！」

「くッ、！仕方ないでしょ！暫く動かせもしなかったんだから!!」

襲い掛かる椀さんの容赦ない猛攻。

予想はしていたが、ここまで防戦一方になるか!?

刹那、竹刀が手から吹き飛ばされた。

「ッ、!!」

瞬間、重い一撃が頭部に走った。

「ーいつたアア、!!」

「はい、私の勝ちです。」

俺は思わず頭を押さえながら床に転がり込む。

頭への強烈な衝撃からか、天井がぐるぐる回っている。

「どうですか？少しは感覚を戻せましたか？」

「ぐッ、少しは労ってくださいよ、。」

椀さんは竹刀を下ろしてそう言った。

全く病み上がりの相手にすることだろうか、

それとも彼女なりの、いや、剣士としての労り方だろうか、

「ほら、早く起きてください。そろそろ他の天狗たちが来ますよ。」

「・・・はいはい、。」

竹刀の切先を床に突き立て杖のように使い立ち上がる。

まだ視界は安定しないが、最近立て続けに起こる戦闘下に比べれば全然マシだ。

その直後、丁度大勢の天狗が道場入りしてきた。
そして俺を見るや、驚きの表情を見せて大勢が声をかけてくる。

『おい陣！久しぶりじゃないか！』

『もう怪我は大丈夫なのかよ！』

四方八方から質問の嵐。

声が重なって誰が何を言っているのか全く分からないが、

「ーーよし、やるか!!」

不思議と闘志が漲った。

先ずは鍛錬が積めなかった時間を取り返さなきゃな!

床に転がった竹刀を拾い上げ、道着を正しく着直した。

場面は切り替わり、山の中腹の住宅群、その最端にて、、

「隼さん、何読んでるんですか?」

「ん、読むかい?」

程よく涼しい居間にて、隼は巻物に書かれた物語を読んでいる。それに文は興味を示す。

「途中じゃないんですか？」

「いいや、もう一回読んだからね。なんならあげるよ。」

隼は広がった巻物を元の状態に戻し、それを差し出す。

文はわくわくとした表情でそれを受け取った。

「ええつと、『竹取物語』？」

文は表に綴られたその文字を声に出して読む。

すぐさま巻物を開いて、文章を読み始めた。

——その時、

その家に、一人の天狗が近づいていた。

暫くして、文は物語を読み終えた。

「ふう、読み終わりました。この物語、結構長くて疲れますね、。」

大きく息を吐いて、ゆつくりと畳の上に横になる。

長々と綴られた文字を読み続けるのは、中々に根気がいる。

体力面もそうだが、何より睡魔が恐ろしい。

「で、どうだった?」

「内容ですか?・・・まあ、結構面白かったですよ。というか、つまらなかつたら途中で寝てます。」

文の瞼は今にも落ちかけている。

無理もない、読み終えた解放感と部屋の心地よさが合わさってしまえば、眠気は益々倍増する。

「ところで、この巻物どこで手に入れたんです?」

「この前行った街の雑貨店だよ。その店の主曰く、かなり売れ行きがいい巻物だそうだ。」

「はえ、だから買ってきたんですか?」

「・・・まあ、それもあるけど。・・・ところでさ、この物語、一体誰が書いたんだろうね。」

「、、?」

その発言に、文は首を傾げる。

竹取物語、内容は言わずもがな、かぐや姫に関したあの物語。

俺や輝夜、永琳にとっては実話だが、結末を知らない月人に眠らされた人々にとっては単なる噂として幕を下ろしている。

勿論、巻物に書かれた内容は事実とは大きく離れている。

か、空想で書かれたにしては妙に作り込まれていた。

果たして、この物語の作者は何者か、

「・・・さて、昼寝でもするかな。俺も眠い。」

「ちよっと!今のどういう意味ですか!?!・・・って、あー!自分だけ座布団使つてずるいです!!」

その後、玄関口から戸を叩く音が鳴った。

「ん？・・・よつと、はいはい、今出るよ。」

夢に落ちかけていた身体を起こし、睡魔に抗いながら玄関口に向かう。

ぼんやりとした視界の先には、一人の女性の人影が扉越しに映った。

知らない影だ、。

「はい、どちらさま。」

その刹那、眠気は飛び視界が一気に鮮明化する、！！

「っ、！？」

瞬間、振り抜かれた竹刀での鋭い一撃。

俺は咄嗟に反応し、左腕でそれを受ける。

『へえ、今のを防いでくるのか。』

続けて縦斬り・薙ぎ払い・斬り上げの三連撃。

竹刀は空を斬り裂き、高音の風切り音を鳴らす。

「いきなり攻撃なんて、随分な訪ね方だね。」

初撃の縦斬りは右手の甲で弾き、続けて薙ぎ払いを身体を逸らすことで躲す。

そして最後の斬り上げ攻撃は、左手で竹刀の芯を確実に捉えて受け止めた。

その状態のまま、竹刀を捻るように回し相手の手元から離させる。

例えどんなに腕の立つ剣士であろうと、手首の構造から不可能な方向には曲がらない。

「……なッ!？」

しかしその瞬間、相手はわざと竹刀から手を離す。

そのまま右足を軸として身体を回転させ、すぐさま左手で竹刀を掴み俺の手から奪い返した。

両者、再び構え直し対峙する。

「……あつはつは！もう四回ぐらい斬ったつもりだったんだけどね。」

すると彼女は竹刀を下ろして、俺に向き合ってきた。

既に彼女に敵意はないようだ。

「いきなり押し掛けて悪かったね。私は大天狗・飯綱丸龍、哨戒天狗達の大将を務めている。よろしく、咲風隼。」

青い頭巾を被り長い髪を下げた彼女はそう名乗った。

搜索依頼

湯呑みを新しく一個取り出し、それにお茶を注ぐ。
注いでいくに連れて、空中に熱気を放つ湯気が舞う。
それを居間に座っている女性、飯綱丸龍の元へと運ぶ。

彼女は部屋の中を静かに見渡しながら、その場でじつと待っている。

その様子は、何か物を探しているかのようにだった。

「まあ取り敢えずゆっくりしていつてよ。」

「……ん？ああ、すまないな。」

龍は目の前に運ばれたお茶を覗き込み、やがて手に取り一口飲む。
物静かな居間の中を、お茶が喉を通る音が小さく反響する。

『そういえば、文は何処に行ったんだろうか。』

彼女をうちに招き入れて居間に通した時には、既に文の姿がなかったが、

急用でも思い出したのだろうか。

「ん、どうかしたのか？」

「いや、なんでも。」

龍は小さな音を立てて湯呑みを机の上に置く。
半分ほど残ったお茶が波立ち、一瞬光を反射する。

「改めて、私は飯綱丸龍。種族は大天狗だ。」

大天狗、目の前に座る龍はそう名乗った。

「俺は咲風隼、最近この山に住むようになってね。」

文曰く、妖怪の山は縦社会で成り立っているらしい。

その中でも大天狗は上位に位置し、基本的には天狗たちの指揮をとっているようだ。

……よく考えたら、今の俺は鴉天狗、

「あ、そのく、そのお茶はいかがでしょうか？」

「む、な、何だ急に、。別に砕けた口調で問題ないだろう、。」

口から出されたのはぎこちない敬語。

長いこと使っていないなかったからか、棒読みかつ酷い言葉になってしまっている。

「いや、まあ、俺は鴉天狗だ、ですし、」

「や、やめてくれ、。隼は天魔王様に対しても砕けた口調なんだろう？
なのに何で私には敬語なんだ。」

「そ、そうかい？じゃあ、普通に接するよ。よろしく、龍。」

しかし、あまりにも酷い片言な敬語に溜息が出る。

多少の練習は必要だろうか、

考え込む俺の姿を見て、龍は首を傾げた。

「さてと、いきなり本題に入って申し訳ないが、今日はまだ予定が山盛りでな。ゆつくりとお茶をするのは、また今度にしたい。」

「ああ、いいよ。あまり良いもてなし方は出来ないけど、いつでも歓迎するから。」

そう言つて龍は、湯呑みに残つたお茶をごくりと飲み干した。

「……最近、人の背丈以上の大きさを持つ太刀を見かけなかったか？ 鞘も柄もごく普通の模様なんだが、」

「太刀？ うくん、そうだな、。」

瞬間、この家で見つけたあの刀が脳裏に過つた。

「……一本だけ、それっぽい刀が。」

「これじゃないかな。見た目は一致してるけど、」

「ほおう、確かにそれっぽいな！」

俺は龍を寢室（仮）へと連れていき、先日見つけた大太刀を見せてみる。

龍はそれを手に取ると、鞘の模様やらを物色し始めた。

「それっぽいって、龍はどんな刀なのか知ってるんじゃないのかい？」

「いや、私は搜索依頼を受けただけなのでな。どんな刀なのかは知らない。」

「搜索依頼？ そういうのを受けるのも大天狗の仕事かい？」

そう聞くと、龍は首を横に振った。

「いや、これは天魔様の依頼だ。そういった仕事は特に受けていないな。」

「え？何だ、天魔の依頼だったのか。じゃあこの刀、天魔の忘れ物？・・・いや、だったら取りに来るか。」

天魔がこの大太刀を振り回して戦う様子を想像してみる。

確か先日は、この刀に引けを取らないほどの大きさを持つ槍を振り回していたため、何となく想像はつくが、

「・・・まあ、目的の刀かどうかは分からないけど、取り敢えず天魔のところを持っていってみるよ。今日はまだ予定があるんだらう？」「本当か？すまないな、じゃあお願いしよう。」

そう言つて、龍は俺に大太刀を手渡した。

「さてと、そうと決まれば。」

俺はその刀の鞘を、和装の腰辺りに差し込んだ。
大太刀を身につける感覚は久しぶりだ。

「じゃあ、私はこの辺りで失礼するよ。次来る時は、そうだな、何か良い土産物でも持ってこよう。」

「ああ、楽しみにしてるよ。」

そう言つて、龍は家から去って行った。

次は俺も、何か良いものを用意しておくでしょう。

「さて、俺も行くか。」

時刻は午後、太陽が段々と沈み始めた頃。
俺は天魔の屋敷へ向けて、山を登り始めた。

宴会の準備、天魔の苦悩

「全く、準備する側の気にもなってほしいのだが、」

天魔はため息を吐きながらそう呟いた。

屋敷の前に並べられたのは、机や椅子やら焚き火に使う薪など。

そして何十と用意された酒の木樽。

「はあ、よいしょツ、と、!!」

天魔はその大量に用意された酒樽を、何十と重ねて同時に持ち上げた。

「……そこに近づく足音が一人。」

「おいしい、天魔。……って、大丈夫?」

「おお、隼。ちよつと、手伝って、よつとつと、」

高く積まれた酒樽の重心を巧く安定させながら、天魔は隼に呼び掛ける。

「……と、その時、一番上に積まれた酒樽が倒れて落下した。」

「つ……つ……よつと、!!」

隼は落下点に素早く駆け寄り、酒樽をがっしり受け止めた。

樽の中の水分が揺れて、水の跳ねる音が反響する。

「天魔、面倒なのは分かるけど、流石にその量は無理があるんじゃない、」
「夜までには準備を済ませないといけないんだ。こうでもしないと日

が暮れてしまっただよ。」

「準備？一体何のさ。」

「説明は作業しながらするから、少しばかり手伝ってくれないか？」

隼は首を傾げながらも、天魔が持ち上げた酒樽の塔を支えた。

「取り敢えず下ろしなよ。二人で分けた方が楽だからさ。」

「あ、ああ、すまないな。」

天魔はそつと酒樽の塔を地面に下ろした。

そしてちょうど半分のところまで分けて二分割する。

「じゃあ、それ持つてついてきてくれ。」

時刻は正午から夜への折り返し地点。

天魔は酒樽を再び持ち上げ、目的地へと向かい歩き始めた。

「……で、これ何に使うんだ？」

揺れる樽のバランスを取りながら、地面の障害物を避けつつ天魔の後を追う。

今進んでいる小道につまづくような障害物はないが、それでも安定するような地面ではない。

それに加えて、周囲に聳え立つ木々の枝が、樽の進行を妨害している。

これが非常に厄介だ。

少し前を歩く天魔も、運ぶのに苦戦している様子だった。

「朝に何人かの天狗が私のところに来てな、何やら今晚宴会を開きた

いそうだ。だから準備をしてくれって。」

「宴会？でも何で準備してるのが天魔一人なんだい？」

「依頼してきた天狗たちは妖怪の山全体に呼びかけに行つたし、他の妖怪たちも基本的に忙しくて時間がないからな。」

天魔はその場でため息を吐く。

「まあでも、私自身宴会は楽しみだ。最近は何で騒ぐような機会がなかったからな。」

妖怪の山に住む妖怪たちは、大方騒ぎごとが好きだという。

それは天魔のような落ち着いた性格の妖怪とて例外ではないよう
だ。

宴会か、いい思い出がないな、。。。

「・・・にしても、天魔つて役職も大変だね。」

「ーまあ、就きたい奴なんていないだろうな。生ける者の上に立つような存在は、いつだって完璧を求められる。完璧が当たり前、少しでも失敗すれば強く責められる。」

・・・幸い、ここの妖怪はそんなことないが、」

そんな雑談をしているうちに、山の小道を抜け出る。

その瞬間、巨大な広場が姿を表した。

やはり山の中のためまつさらな平地とまではいかないが、気になるような急勾配や崖といったものはないほど整地されていた。

そのおかげか、吹き抜ける風がとても心地いい。

周りを見ると、数十人ほど天狗たちが宴の準備をしている。

「よい、しよつと。。。。さ、この辺りに下ろしてくれ。」

「ん、はいよ、。。。。こいでいいかい？」

天魔はそこに近づくと、酒樽を全て下ろして適当に並べた。

「よし、これで酒の移動は終わりだ。残りのものはそこから準備して
る天狗たちが持つてくるから、」

その瞬間、ふと天魔の目に、隼の身につけた大太刀が目に入った。

「……隼、その刀、」

「え？、ああ、これか、忘れてたよ。これ、天魔が探してるついで
う刀じゃないかな。」

俺は腰に身につけた大太刀の紐をほどき、天魔に手渡そうとする。

「……取り敢えず、場所を移そう。ここじゃ皆が聞いている。」

「あ、ああ、いいけど。」

そう言って、天魔は今来た道を引き返し始めた。

言われるがままに俺は天魔の後ろを歩く。

『あれ？俺、この刀を鞘から引き抜こうとしたっけ？』

歩きながら刀を再度腰に身につけようとした時、刃が少し鞘から飛
び出ていることに気付く。

不審に思いながらも刀の柄を持ち、カチンと音がするように刃を鞘
に納刀した。

休憩所に住まう者

妖怪の山中に今夜の宴が知れ渡ったことよって、山全体の妖怪たちは盛り上がりを見せ、来たる宴の時刻を待ち焦がれていた。

「……ただ一箇所を除いては、」

「全く、騒がしいったらありやしないよ。」

山の中腹にて、静まり返った休憩所がぽつんと一軒。

休憩所という肩書きではあるものの、休憩目的で訪れる者は数少なく、重傷を負った哨戒天狗やらが大半を占めていた。

窓の小さな隙間を吹き抜ける風の音が煩く聞こえるほどの静かな室内にて。

一人の少女が溜息を吐き、編み物をしながらそう呟いた。

その瞬間、休憩所の小さな戸が開けられた。

「……君か。何、まだ怪我でもしたのかい？」

「違えよ、土産持ってきたんだ。また怪我なんかしてたまるかっての。」

鞍真陣は背中に背負った荷物を下ろした。

「で、何その荷物。」

俺が持ち込んできた荷物を見るや否や、そいつは呆れたような口調でそういった。

「お土産だつて。今夜の宴会の食事を一番貰ってきたんだ。まあ、その、ここにいる時色々世話になったからさ。」

「ふ〜ん、」

そいつは淡白な反応を見せたのち、再び壁を背もたれにして編み物を編み始めた。

この休憩所は基本静かであり、賑わいを見せることなどない。けれど、いつ何時であろうと必ず彼女はここにいた。

長い黒髪に白のみで編まれた天狗装束、背丈はおおよそ平均的。顔立ちは整ってはいるが、彼女の表情が変わっているところは見たことがない。

俺がここで怪我の治療をしている間もそれは変わらず、河童の薬の場所だったり患部に巻き付けるための布の場所などを教えてもらったりと、色々世話になっていた。

「やっぱり、宴会には来ねえのか？」

「行かないよ。馬鹿騒ぎなんてしたら身体が保たない。」

淡々とした口調で答えつつ、彼女は編み物を続ける。

「で、でもさ、遠くから見てるだけなら問題ないだろ？」

「・・・その何が楽しいの？」

「うっ、いや、まあ、そうだけだよ、。」

俺がここにいる間は、殆どの時間彼女と雑談をし続けていた。

しかし、雑談は常に俺が持ち掛けた話題であり、彼女は自分のこと

を一切語らなかつた。

自分の身体の状態はもちろんのこと、俺は彼女の名前すら知らない。

身体が弱いということだけは教えてもらったが、

最初は当然気になり何度か質問をしたものの、途中から彼女の素性について尋ねるのは野暮だと感じ、そういった話題を振り掛けることも無かつた。

「……何で、ここにいろかぐらいは教えてくれないか？」

「……」

今日の俺は我慢が出来ず、彼女について質問をした。

すると彼女は編み物の手を止めて、何も言わずに俺に目を合わせてじっと見つめてくる。

その鋭い視線に対し、こちらも一切視線を晒さず合わせる。

数秒、その場に沈黙が走る。

「……私はね、」

やがて、彼女は静かに口を開いた。

「私はこの世界を全く知らない。この山の外の風景は見た覚えがないし、山の妖怪以外の生き物がどうやって暮らしているかとかは一切分からない。」

それは彼女の口から初めて語られた彼女の素性。

編み物の手を止め、休憩所から見える窓の外を見ながら彼女は話

す。

「私が何でここにいるのか、更には私の名前だつて知らない。．．唯一知ってるのは身体が弱く脆いつてことだけ、何でなのかは知らないけど。」

その瞬間、苦笑いを浮かべた。

彼女のそれは、怒り顔や泣き顔やらの他のどんな表情よりも、重く哀しく感じられた。

「――そっか、。すまない、変なこと聞いちまって。」

「いいや、全然変な質問じゃない。むしろ至極一番最初に持ちかける筈のありふれた質問じゃないか。」

勿論、まだまだ聞きたいことはあった。

しかしあんな表情を見たことにより、無意識に好奇心の扉は閉ざされた。

そしてその好奇心は、別の感情へと変化する。

「ほら、そろそろ行きなよ。宴会が始まっちゃ、」

「な、ならさ、!!」

瞬間、俺は相手の言葉を遮った。

一瞬だけ、彼女は驚いたような表情を見せる。

「今度、山の外に行ってみないか？そりゃあ、そっちの身体が優先だけどさ。」

「――!」

「人間の都に行ってみてもいいし、他の山とか、後は海とかさ!．．それはちよつと遠いけどよ、。」

そう言うと、彼女は初めて、俺の目の前で純粹な笑みを見せた。

「ちよ、お、おい！何で笑うんだよ！」

「ふふっ、いや、わざわざ面倒ごとに関わるなんて、物好きだなと思っ
てね、。」

「べ、別にいいだろ、。」

すると再び彼女は編み物に手を伸ばした。

俺は小さくため息を漏らし、彼女に背を向ける。

「――都や海もいいけど、私は“花畑”が見てみたいな。」

「っ、！」

休憩所を去ろうとしたその瞬間、背後から発せられた声に足が止ま
る。

その言葉は部屋中を反響し、勘違いかもしれないが十秒以上もその
場に残り続けたように感じた。

「――ああ！楽しみにしてろよ！」

一度彼女の方へ振り向いてそう叫び、俺は休憩所を後にした。

『さてと、最高の花畑を見つけるって、また大変な目標が出来ちまっ
たな。』

俺はあてを思い浮かべながら、宴会の会場へと足を運んだ。

夜を彩る宴

酌み交わされる盃、熱気を放つ会場、暖かな光を放つ提灯、そして四方八方に散らばる妖怪たち。

――刻は日没、今宵は妖怪たちの宴。

『おい陣！もう始まってんだから、早くお前も来いって！』

会場に着くと、少し離れた場所から俺の名を呼ぶ声が耳に届く。

それに反応して辺りを見渡してみると、もう既に妖怪たちは酒や食に手をつけていた。

何とか隙間を抜けながら、俺は声のした方へと向かう。

「おいおい陣、遅刻だぜ？」

「早くしねえと、酒が無くなっちまうぞー！」

暫く隙間を進んでいくと、道場仲間たちが円になって酒を酌み交わしていた。

俺の姿を見ると、数人が近づいてきて強引に手を引っ張る。

「悪かったって、ちよつと用事があったんだよ。」

俺は円の中に割り込み、仲間たちが差し出してくる盃を受け取った。

酒を飲むのは久しぶりだ、怪我を負っている最中は、単なる水しか飲むことを許されていなかったから。

「よーしーじゃあ改めて、」

俺を引つ張つてきた奴の掛け声に合わせて、その盃を口元へと運ぶ。

「乾杯っ!!!」

合図と共に盃を傾け、勢いよくその中身を喉へと通した。

久しぶりに味わったその味は、美味しくはあつたがほんの少し苦かつた。

——しかし先程から何か変だ。

暫く仲間内で宴会を楽しんでいると、何か今までの宴会と違うような違和感を覚える。

『お——陣！久しぶりだな！』

ほらまた、さつきから矢鱈と話しかけられる。

顔馴染みならまだしも、話したことのない妖怪からも声を掛けられた。

……いや、声を掛けられるだけなら別に気にはしないが、

『陣、聞いたわよ、やるじゃない！』

『つたく良い手柄を上げやがってよ——！』

「お、おう、まあな、。」

何人かに一人は、声を掛けると同時に何故か俺を持ち上げてくる。あまり他人に誉められるのは小っ恥ずかしいため好きではないのだが、

少し落ち着いたところで、道場仲間たちに聞いてみる。

「な、なあ、何で今日はこんなに話しかけられるんだ、？」

そう聞くと、みんなは首を傾げた。

「・・・はあ？そりや当たり前だろ。」

「全く人気者になっちゃったなあ。」

「でも、私たちがだって負ける気はないよ！」

そう言った後みんなは話題を変えて、また宴会を楽しみ始めた。

少しばかり理解が追いつかない。

その瞬間、身体に気配を感じた。

「つて、権さんか。」

振り向くとそこには、草臥れたような表情を浮かべた権さんが居た。

「失礼な反応ですね。お邪魔でしたか？」

「い、いやいや、そんなことは、。」

すると権さんは俺の真横に正座で座った。

そして置かれた酒瓶を手にとると、ため息を吐きながら盃にそれを

注ぐ。

「ず、随分と疲れてますね。」

「色々と報告に行つてたんですよ。今回の件により哨戒天狗たちの鍛錬場である道場の評判が上がったせいで、何故か私まで質問責めに合いましたし。」

権さんは道場内でかなり腕が立つ。

それに礼儀正しく真面目ともあつて、道場の管理を大天狗から任せられているのだが、

「はああ、誰か早く変わつてもらえないでしょうか、」

「いやあ、でも権さん以外の人なんて誰も納得なんか、」

そう言うと、彼女は横目で俺の目を睨み付けてきた。

「……まあいいます。今日はもう疲れました。」

暫く睨みを効かせた後、彼女は盃を口元へと運んだ。

『おい！そろそろ余興が始まるぞ！』

『よっしゃ！宴会にはこれがなくっちゃあねえ！』

『ほらほら、早く行きましょ！』

その直後、この時間まで座って飲み食いをしていた妖怪たちが、段々とざわめき始め、一齐に会場の中心部へと動き始めた。

一緒に飲んでいた道場仲間たちも同様に。

「おいおい、何ぼさつとしてんだ陣！早く行こうぜ！」

そう呼ぶ声を追うように、俺もその場を立ち上がった。

「――あれ、権さんは行かないんですか？」

中心部へと一歩進んだところで、振り返って座ったままの権さんに声を掛ける。

「気が向いたら行きます。私はあまり余興には興味ありませんので。」

「そうですか、じゃあまた後で！」

そう言い残して、俺は宴会場の中心部へと向かった。

「――随分と、賑やかだな。」

妖怪の山の麓を差し掛かった人影が、夜の静寂にそう呟いた。

彼の視線の先には、ごく普通の山の風景が広がっている。

「・・・折角だから、寄っていったみよう。問題が起きそうになったら、謝って直ぐに立ち去ればいいしね。」

人影は薄暗い山の中へと足を踏み入れた。

背中に禍々しい気配を放つ大太刀を携えて。

余興・妖闘祭第一幕

『いけいけエーエー!!』
『やつちまえエーエー!!』

「エーエー今から始まるのは宴の余興であり、最も熱気を放つ大勝負。妖怪間での呼び名は、『妖闘祭』」

山のあらゆる力自慢が己の武を競い合い、宴の場を沸かせるのがこの余興の目的だそうだ。

しかしやはり盛り上がるのが目的の試合ともあって、中々に野蛮な戦闘も多い。

少なくとも、勝ち負けはともかく自分では出たくないというのが本音である。

「つて、ここじゃ見えねえなあ、。」

試合会場に向かうと、既に大勢の妖怪たちが会場の周りを円で囲っていた。

これでは試合が見れない。

俺は少し離れ、会場を一望できる場所を探す。

とはいえ、あまりにも離れ過ぎていると臨場感がない。しかし近い場所は満員で窮屈だ、。そんなことを考えながら、辺りを彷徨っていると、

「おい、こんなところで一体何をしているんだ？鞍真陣。」

突然、背後から声をかけられた。

「……って飯綱丸龍さん。そつちこそこんなところで何を？」

振り返ると、哨戒天狗を纏め上げている大天狗、飯綱丸龍が腰に手を当てて立っていた。

彼女とはあまり話したことがなかったが、自身も哨戒の仕事をしているだけあって多少は面識がある。

「呼ぶなら名前だけでいい。ーーいやな、酒を飲むとたまに暴動を起こす輩がいるのでな。だからその見回りだ。特にこの時間はそれが多い。……で、私の質問にも答えて欲しいのだが、」

「空いてる場所探してるんですよ。生憎、周りは満員だったので。」

そう答えると、彼女は一瞬间を置いてから怪しげな笑みを浮かべた。

それを見たと同時に背筋に悪寒を感じ、一步下がる。

「ーーそうか、ならちよつと来い。」

「え、？」

「試合の規則は把握してるな？」

「え？ええ、まあ、。」

俺は龍さんの後を追いながら、投げかけられる質問に答える。

しかし妙な質問が多い。

身体の調子はどうか？といったような質問は今日で何度もさされて
いる為妙には感じないが、

何も試合の規則を俺が把握している必要があるだろうか？

「龍さん、これ何処へ行くつもりですか？」

「まあまあ、いいから着いてこい。――お前は素手より剣を使う戦
闘の方が得意か？」

「いいからって、。まあ、剣を使う方が得意だとは思ってますよ。」

そう答えた瞬間、彼女は立ち止まった。

目の前には少し朽ちた蔵が佇んでいる。

「さ、ちよつと待っていてくれ。」

すると龍さんは中に入っていく。

戸を開けると空中に埃が舞い上がり、提灯の灯りがそれを美しく輝
かせる。

少しすると龍さんは外へ出てきた。

彼女の手には、鏢と鞘が紐で結ばれて固定された一本の刀が握られ
ている。

「ほら、年季ものだが、それなりに状態はいい刀だ。」

その刀が、俺の目の前に差し出される。

俺は反射的にその刀の鞘を握り受け取った。

試しにボロボロな柄を握って構えてみる。

「さ、これで準備は完了だな。」

「……って、いやいやいや！多少は説明してくださいよ！」

「説明されて理解するもいいが、自分で推測することも大切だぞ？」

「誤魔化さないでくださいよ！」

またしても彼女は話をはぐらかし、今度は試合会場の方へ再び歩き始めた。

全く、少し横暴が過ぎやしないだろうか。

『自分で推測しろったって、』

その瞬間、頭の中で点と点が繋がったかのように、一つの疑惑が絞り出された。

恐る恐る前を歩く龍さんに尋ねてみる。

「……あの、この刀試合で使う物ですよね、？」

前回の宴会での試合を思い返してみると、使われていた刀は全て刃が鞘に収まっていた。

そして今俺が握っている刀はそれに酷使している。

瞬間、龍さんは振り返り、鋭い笑みを浮かべた。

「……今日の試合参加者にあまり腕の立つ奴はいなかったものな。お前なら、見応えのあるものを見せてくれるだろうか？」

「あ、っ、っ、やっぱり、っ、」

彼女に言われてしまえば流石に断れはしないだろう。

こうして、鞍真陣の妖鬪祭参加が決定した。

「おい貴様！……ここへ何の用だ!!」

宴の会場から少し離れた場所にて、
交代制で見張りをする哨戒天狗のもとに、一人の剣客が姿を表した。

哨戒天狗の一人がその剣客に槍の刃を向ける。

「夜分に申し訳ない。灯りの灯ったこの山が非常に美しく見えたもので。ああ、勿論敵意はありません。」

すると剣客は、背中に差した太刀をその哨戒天狗へと差し出した。

「刀もここに置いていきます。信用ならないのであれば、ここで殺してしまっても構いません。僕は一切の危害も与えませんから。」

そう言うと、哨戒天狗たちは耳打ちで相談をする。

『お、おい、どうするよ?』

『いや、流石に部外者を入れるのは、』

『でもよ、もし追い返したら、それこそ俺たち殺されるかも、』

数分の相談の末、哨戒天狗たちが出した答えは、

「よ、よし、いいだろう！ただし、夜が明ける前までにはここに戻ってくるように！」

「ご厚意に感謝します。では、また後で。」

そう言葉を残して、剣客は山を登っていった。

「おい、本当に大丈夫かよ。」

「問題ないだろう。刀も預かったし、あの男にどれほどの実力があつたとしても、山全体を敵に回して素手で対抗できるなんてことはないだろうからな。」

「ま、まあ、そうだな。」

「さ、次の見張りに置き手紙を残しておかねえと。」

その後、哨戒天狗たちは何事もなかったかのように見張りを続けた。

余興・妖闘祭第二幕

「もうっ！一体どこに行つてたんですか！」

「いやあ、ちよつとね。・・・文こそ、急に居なくならなかつた？」

「え、？ーあ、あやややく、それはそのく、。そ、そんなことはいいんです!!」

宴会場へ向けて山の抜け道を歩く俺の前を、文は怒りながら羽をはためかせる。

「どうやら文は俺が家に戻ってくるまで自宅で待機していてくれたらしい。」

「でも、先に行つても別によかつたのに。」

「そしたら隼さん、絶対来ないじゃないですか！」

文は少々ご機嫌斜めだ。

これは宥めるのに相当苦労するだろう。

そうこうしているうちに、やがて宴会場に辿り着く。

「あれ、」

開けた広場に出た瞬間目に入った光景は、とても宴会とはいえないほど静まり返った会場だった。

誰もいないわけではないが、それぞれが二、三人ほどで集まり、その数人ずつが点々と散らばって酒を飲んでいる。

「あ、ちやうど余興試合の時間でしたね。」

「余興、？」

「よかつたら観に行きます？」

文は手を額に当てて髪を少し上げ、周りを見渡しながらそう呟く。

「うくん、まあ、興味はあるよ。」

「じゃあ行きましようー……ここについても誰も居なくてあまり楽しくないですし。さ、あっちです!」

そう言うと、文は一方を指差した。

俺は文に案内されるまま、その余興とやらが行われている場所へと歩き始めた。

「で、余興って何さ?」

歩きながら文に問いかける。

「えーっとですねえ、まあ簡単に言うと、山の力自慢の妖怪たち同士が試合をするんですよ。ここの妖怪は、血気盛んな妖怪が多いですから。」

「へえ、それは確かに盛り上がりそうだね。」

「まあでも、殺し合いをするわけではではないですよ?あくまでも余興ですから。」

文が言うには、普段パツとしないようなごく普通の妖怪が、周りを圧倒するケースもあるそうだ。

脳ある鷹は爪を隠す、というやつだろうか。

「中でも終盤に行われる勝ち残り戦の勝者は、人の都から仕入れてきた極上のお酒が、」

そこまで話した瞬間、文はハッと顔を上げて俺の顔をまじまじと見る。

「ど、どうした、？」

文の目の先は何故か光り輝いていた。

更に追い討ちと言わんばかりに、一歩詰め寄ってくる。

「……隼さん！それに出てください!!」

「……え、ええ、」

準備が済むと龍さんに連れられて、再び会場へと戻ってきた。

既に試合は行われており、技が決まった、もしくは勝敗が決した瞬間に大きく歓声上がる。

「さて、お前には最後の勝ち残り試合に出てもらおうつもりだが、準備運動は必要だろうか？」

「え？え、ええ、まあ、そりや、」

「だからな、この次の試合にも出てもらうことした。・・・ああ、安心しろ、相手は大したことない奴だからな。」

この際何が起ころうとも動じないだろう。

彼女からそう告げられても、すんなり受け入れ覚悟は直ぐに決まった。

少し崩れた装束を真っ直ぐに整える。

「さ、頼んだぞ？この宴会を更に彩ってくれ。」

「ーーええ、やってやりますよ。」

そう答えて龍さんに背を向けて、試合会場へと歩みを始めた。

「さて、今回も無事に終わればいいが、」

一人になった龍はそう呟く。

顎の下に手を添えて、目を瞑り何か考え込む。

「何だろうな、この変な心地は。」

余興・妖闘祭第三幕

踏ん張りを効かせた足は地面を削り上げ、全身を鞭のようにならせた。

「ーはあッ!!」

全体重をかけ振り抜いた一撃。

空気を斬り裂き風音起こすその一太刀は、相手の胴体を捉えて後方へと吹っ飛ばした。

その一撃に耐えかね、相手の天狗は思わず降参を示した。同時に大きな歓声上がる。

「フウ、ありがとうございます。」

鞘に刃が隠された刀を腰に当てて軽く会釈。

対戦相手、そしてこの試合に対して礼儀を払う。

周りの観客は、声援や野次やらを飛ばしていた。

「見事な試合だったじゃないか、陣。」

「・・・」

本番である乱戦の前試合、俺は刀の撃ち合いの末、勝利を収めた。

一度裏方に戻ろうとした時、自身を試合へと放った大天狗が声を掛けてくる。

「どうした？随分疲れているな。」

「そりゃあそうでしょ、試合なんですから、」

乱れている呼吸を整えながらそう返答する。
何故か彼女からはお墨付きを貰っているが、相手とて力自慢の妖怪。

一戦交えて疲労が無いわけないだろう。

「ま、本番まではあまり時間がないが、そのうちに呼吸を整えておくといい。それと、刀の紐を結び直すのも忘れずにな。」

「ええ、分かってますよ、。」

俺は一度地面に座り込み、刀の手入れを行う。

刃を隠す鞘の方に手入れは必要なさそうだが、それを固定するため
の紐はかなり緩んでしまっている。

そうこうしている間に、試合会場から聞こえる騒音が段々と大きくなってきた。

おそらくは出場者たちが続々と集まってきたのだろう。

「……っていうか、龍さんは何やってるんですか？」

「言っただろう、宴会の見回りだ。この試合中だって、規則違反の危険行為を犯す奴が数多くいるからな。――はあ、全く、宴会の日は憂鬱なことが多い。」

彼女は竹刀を肩に乗せて、気怠そうな表情をしながらそう言った。

これ以上龍さんについての質問するのはやめておこう。

機嫌を損ねたら竹刀でぶっ飛ばされかねない。

「さて、そろそろ他の場所へ行かないと。試合、楽しみにしてるよ。」

「……ええ、まあ、頑張りますよ。」

そう言い残して、龍さんは別の場所へ向けて去っていった。

気づけば会場の方の声援は最高潮に達している。

耳を澄ませて聞いてみると、声援というよりは暴言のような野次が

所々飛んでいる。

開始前でこれなら、試合中は更に酷いだろう。
なるほど、龍さんが憂鬱な理由も領ける。

「――よし！いくか！」

最後に紐を固結びで強く結び上げ、腰の布と布の隙間に差し込む。
歩く途中に乱れた装束を整えて、再び会場へと足を踏み出した。

瞬間、大きな歓声が自身を包み込む。

『頑張れ――！』

『やられんなよ――！』

こちらも歓声が殆どだが、ごく稀に野次や暴言が飛び交っている。
おそらく自身に対する妬みだろうと判断し、そのまま横に流した。
『凶に乗ってんじゃねえぞオ！』

『帰れ餓鬼!!』

酔っているせいか、暴言が想像以上に酷い。

その分歓声の方も大きくなってはいるが、

するとその更に盛り上がった様子を見て、他の出場者たちが一斉に
此方を向く。

笑顔を見せてくる人もいれば、鋭く睨みを効かせてくる奴も数名。

「……よ、よろしくお願いします、。」

小さく会釈を返し、一目のつかない隅へと小走りで向かった。

試合が始まるまでは、ここでやり過ぎすとしてしよう。

「おいオメエ、鞍真陣だな？」
「え？ええ、そうですけど、」

一息吐こうとその場に座ろうとした瞬間、ガタイの良い巨体の妖怪が声を掛けてきた。

見たところ、白狼天狗のようだが、。。
気の所為か、何処かで見覚えがある。

「見たところ、俺とオメエ以外の連中は喧嘩っ早いだけの荒くれ者が殆どだ。

つまりこの後の乱戦は、俺とオメエとの一対一と言っても過言じゃねえだろう？だから挨拶をしておこうと思ってな。」

「あ、ああ、よろしくお願いします。」

その瞬間ハツと思い出した。

この白狼天狗、何試合か前の試合で相手を圧倒して会場を大きく盛り上げていた人だった。

「ま、試合終盤で会おう。くれぐれも足元を掬われないようにしてくれよ、鞍真。」

そう言い残して、その人は出場者の人混みの中に戻っていった。

——彼のような自信が欲しい。

再び一人になった時、俺は無意識にため息を吐いた。

少し経つと、会場中に大きな鐘の音が鳴り響いた。

同時に今までで最大の歓声上がる。

『これから最後の試合を開始します！参加者の方は次の鐘が鳴るまでに中央へ集まってください！！』

宴会の主催者たちの一人、かつ試合の司会を担当する天狗がそう呼びかける。

それを聞いて、俺は中央の方へと向かった。

集まった参加者たちをもう一度見渡してみると、やはりさっきの人が言ったように所謂「荒くれ者」のような風貌をした妖怪が多いようだった。

しかしその中でも、あの巨体の白狼天狗は一際目立つ。

そんなことを考えている間に、参加者を締め切る次の鐘が鳴らされるようとしていた。

鐘を鳴らす担当の天狗が、槌を大きく振りかぶる。

——瞬間、客席の方から滑り込むような形で一人、試合会場に飛び込んだ。

それとほぼ同時に、大きな鐘の音が響く。

『参加者はこれで締め切りです！見物者たちはもう中に入らないで下さーい！！』

客席と戦場の間に、長い紐が掛けられていく。

『では参加者の皆さん！人数は確認しましたので広く散らばってくださいー！！』

その合図を聞き、参加者たちは全員四方八方へと散らばっていく。
気の所為か、少し俺の周りが密集し過ぎているような、

『では開始しま〜す!!!』

司会の天狗は、再び鐘を鳴らす合図を送った。

「よし!!こ〜うなりやとこ〜んやってやるッ!!!」

――次の瞬間、開始の鐘が鳴った。

余興・妖闘祭第四幕

鐘の鋭い音色が響いた瞬間、視界が人影に覆われた。咄嗟に四方を見渡すと、剣や拳を構えた複数の戦士が鬼気迫る表情で襲い掛かってくる。

「くっ、!!」

どうやら真っ先に潰すつもりのようなのだ。

俺は駆け出そうとした足を急停止させ、一度背後へと後退する。が、既に背後には別の人影が待ち受けていた。

「ぎ、厳しいな、!!」

直後、背後から襲い掛かる刀の払いを屈んで躲す。

先ずは包囲網を抜けなければ、流石に大人数を相手に太刀打ちできない。

俺は一度体制を立て直し、相手と相手の足の間目掛けて加速する。

次の瞬間、突発的な動きが功を奏したか、俺を囲っていた包囲網が少し乱れた。

『ここだッ、!!!』

それに反応して、右足を強く地面に踏ん張り、風を切り裂きながら一気に加速する。

『おい！そっち塞げよ！』

『馬鹿！押すんじゃねえ!!』

相手の連携は全くと違っていいほど取れていない。

目指した隙間は塞がることなく、寧ろ更に手薄になっていく。

「もらったッ！」

直後、身体が包囲網の隙間を通り抜ける。
すかさず右腕を軸として身体を回し、一人に左足を掛ける。
そのまま相手の足を掬い上げて、体制を崩した瞬間に勢いよく右足を放った。

「グッ、!!」

その一蹴りは見事に相手の腹部へと入った。
そいつがいくら頑丈でも、天狗の蹴りが腹部に入って平気な奴などいないだろう。

思惑通り、相手は腹部を押さえながら降参の意思を示した。

「よしッ！」

そのままの勢いで、俺は素早くその場を離れた。
大人数を相手にして無傷で抜け出し、更には一人脱落。
これ以上ない完璧な結果に、俺は思わず拳を天へと突き上げた。
これに会場は大きな盛り上がりを見せる。
身にかかる声援が鼓動を刺激する。

続けて、前方に新たな相手。
今度は完全な一対一の勝負のようだ。

「君、私と一戦やりましょう。」
「……おう！受けて立つ！」

移動する足を止めて、刀を再度構え直した。
相手の得物も此方と同様、鞘に刃を納めた刀のようだ。

「……では、…、参ります!!」

——瞬間、空間に残像が映るほどの速度で相手は加速し、一気に刀の射程範囲へと迫ってくる。

「なっ、速い、…!!」

「まだまだ、ここからですよツ!!」

間髪入れず、相手は俺の背後に素早く回り込み、横腹を狙っての蹴りを放つ。

対して俺は一瞬反応が遅れ、その蹴りをなんとか太腿を上げて防ぐ。

「へえ、防ぎますか！けど次はどうかかな!？」

すかさず相手は外周を回るように加速する。

俺は何とか視界の中から外れないよう目で追うが、あまり追いつきると目を回しかねない。

「くツ、…!!」

瞬間、視界から人影が消える。

その直後、背後から急接近する気配を感じた。

「さあ…これでトドメですー!」

振り向いて相手の位置を特定しようとするが、時既に遅し、…、

——刹那、鋭い音と共に、左の頬へと強い衝撃が走った。

同時に脳が揺れ、意識が離れていく、…、

「……………まだ、倒れるかアツ!!」

その瞬間、意識が戻り視界が明瞭になる。

すかさず右腕の蹴りで相手を捉え、更に身体を前回転させ、追い討ちを掛けるように逆脚の踵を突き上げる。

「な、何、!?がアツ、」

続けて畳み掛けるように攻撃を放つ。

拳に蹴り、更には刀の斬撃を重ねた、怒涛の連撃。

……………最後に体制を屈め足裏を構え、渾身の一撃を相手へと叩き込んだ、、

数秒後、試合最大の歓声が上がった。

俺は肩で息をしながら、大きな歓声をこの身に受ける。

「うっ、やるね、き、流石に降参だ、」

「お、おい、大丈夫か?」

するとトドメの一撃により倒れていた相手が、ふらつきながらも立ち上がった。きた。

「だ、大丈夫ですよ。安全なところまで、は、何とか行けますから、。」

そう言い残して俺に背を向け、刀を杖のように突きながら会場の外へと歩き出した。

そして外へ出る直前、此方へと振り向く。

「この後の、試合、楽しみにしてますよ。」

辛うじて聞こえるほどの声でそう言って、外へと去っていった。

——その次の瞬間、先程の盛り上がりが霞むほどの、大きな歓声が会場全体に響き渡った。

歓声はあらゆる方向へと跳ね返り、暫くの間その場に残留した。

「な、何でこんな歓声が、？」

——時は試合開始直後、大人数で鞍馬陣を囲んだ場面へと遡る。

「おい、アンタは行かねえのか？」

黒髪黒着物の鴉天狗の元に、巨体を持つ白狼天狗が歩み寄る。

「・・・すまないけど、飛び入りで参戦したんだ。だから何故あんなつているのか分からないんだけど、何事？」

「ま、アイツは今回の主役みたいなモンだからよ。取り敢えず大勢で潰すつもりなんだろうぜ。」

何気なく会話を交わしてはいるが、その場の空気はまさに一触即発状態。

ここは戦場、名目や形式上ではあっても、敵同士が結託、和解をすることなど有り得ない。

「にしても、アンタは災難だな。成り行きで向こうへ行ったりやあ、この俺と初戦から当たることなんてなかったのによオ。」

白狼天狗はそう言いながら、巨大な拳を胸の前に構える。

「へえ、随分と自信家なようだ。・・・でもね、こつちも一応勝たないと、後々面倒になりそうなんだ。」

相対する鴉天狗は頭を掻きながら、腰に差し込んであった刀を片手で引き抜き、切先を相手の方へと向けた。

「……だから、そこを退いてもらおうか。」

「そう来なくっちゃなアア!!」

……刹那、刀と拳が真っ向から衝突した。

余興・妖闘祭第五幕

巨大な拳は幾度となく、鴉天狗の頭上へと振り下ろされる。しかしその連打は悉く間一髪で躲され、ここまで放った二、三十発のうち、未だ命中は一度も無し。

「この野郎！ちよこまか動いてんじやねエ！」

激昂した巨体の白狼天狗、大きく右腕を振り被り渾身の拳を放つ。——しかしその攻撃を空中に浮遊する埃を払うように、鴉天狗は右手で巧く往なした。その一瞬の攻防に、客席が小さく湧く。

「ち、畜生！」

それを見て白狼天狗は更に激昂し、今度はなりふり構わず巨大な拳を振り回す。

が、これも最小限の動きによつて躲される。

「——少し冷静になりなよ。」

「くッ、！」

瞬間、鴉天狗は振り回される拳の一つを手のひらで受け止め、鋭い眼光を持って白狼天狗にそう言い放つ。

対して白狼天狗は少し怯むが、直ぐに負けじと睨み返す。

「——テメエこそ、避けてばつかいないで反撃したらどうなんだ、？そんなんじやいつまで経ってもテメエの勝ちはねえ、！」
「……そうだね。じゃあ、次はこつちの番だ。」

——と次の瞬間、鴉天狗は受け止めていた拳を離し、透かさず飛び上がり相手の顔面目掛けて右足蹴りの姿勢に入る。

それに白狼天狗は咄嗟に反応し、顔の正面に両腕を交差させて守りの体制を取る。

「何、!？」

しかしその右足蹴りは、空中で空振った。

白狼天狗は思わず戸惑いを見せる。

——瞬間、鴉天狗はその蹴りの勢いで身体を前回転させ、逆足を勢いよく振り上げる。

これに白狼天狗は反応しきれず、左足は相手の顎に命中した。

これまた大きく歓声上がる。

「がアツ、」

強烈な一撃を顎に喰らった白狼天狗は、その場で数秒硬直する。

「ね？攻撃を当てたかったら、多少は工夫しないと。」

「く、クソ、ツ、、」

白狼天狗は少しでも粘ろうと地面を踏ん張るが、やがて意識が離れて地面に崩れるように倒れた。

その直後、最大風速の歓声が会場を包んだ。

ふと歓声が向かう方を振り向くと、数人の天狗たちが気を失った先程の白狼天狗の大男を運んでいる様子が目に入った。

そしてその奥には、一人の鴉天狗がそれを見送るように佇んでいる。

「……ありや、陣じゃないか。」

するとその鴉天狗は此方を振り向き、俺に向かってそう語りかける。

「な、何でアンタが？」

「ん？……まあ、色々あつてね、。」

鴉天狗、咲風隼はそう話を濁しながら此方に近づいてくる。

身体を休めてはいるものの、その歩く姿に付け入る先は見つからない。

次の瞬間、俺は腰に携えた刀の柄を握り戦闘体制に入る。

「……いいね、じゃあ勝負しよう、鞍真陣。」

その動きに反応し、隼も同じく刀を構えた。

「言つときますけど、手は抜かない方がいいですよ。」

「勿論。手加減なんかするつもりはないよ。」

緊張と静寂が辺りを包む。

会場は野次や声援に溢れてはいるものの、その空間だけは風の音す

ら無音に聞こえる。

その直後、会場にいる妖怪の一人が盃を地面に落とし、カランカランと軽い音を立てる。

瞬間、その空間の緊張と静寂は破れ、一転して心臓が高鳴るような戦場の空気感へと変化した。

俺はそれと同時に、一気に相手の方へと加速し刀を振りかぶった。

——刹那、両者の刀が交わり威力を相殺し、鋭い音を響かせた。

「くッ！流石に決まりませんか！」

「まあね、でもいい一振りだ。速度も、重量も十分。——だけど！」

間髪入れず隼は次の攻撃へと転じる。

踵を使って一歩後ろへと引き、高速で二撃、斜め十字を描くように刀を振る。

その攻撃は刀を盾に防げはしたが、速度の乗った斬撃による風の衝撃波に一歩押される。

「ッ、！何でその刀でそんな速く振れるんだよッ、!!」

試合で規定されている刀はお世辞にも良い物とは言えず、更に刃は鞘に収まっている為、振るたびに強い空気の抵抗が生じる。

そんな刀を風が起きるほどの速度で振るなど、相当の力量が必要になる筈だが、それをいとも容易く、

「チッ！負けるかよッ！」

俺は押されながらも身体を低くしながら地面を蹴り、すぐさま攻撃に転じる。

脳内の想像は、相手に下段からの斬り上げ、と思い込ませて背後を

取り一撃を加える偽造攻撃作戦。

「そう攻めて来るか、なら、！」

予想通り、相手は俺の攻撃場所を予測して刀を構えてきた。間合いは刻一刻と縮み、衝突まで時間は掛からないだろう。後は根気の勝負、何処まで偽造を続けられるか、

「ここだ、！」

相手との間合いがギリギリまで近づいた瞬間を狙って右足で地面を踏ん張り、隙の生じた逆側へと一気に切り返した。

「——瞬間、考えるよりも先に刀を振り抜いた。」

余興・妖闘祭終幕

「天魔様、ご報告です。」

「ん、何だ？」

とある場所へと向かい歩みを進めている途中、、、

一人の鴉天狗が空中から地面へと降り立ち、膝を突いて私の目の前でそう告げる。

その様子から只事ではないと判断し、私は一度足を止める。

「見廻りの妖怪達が、何者かの山への進入を許可したようです。その者の素性は分かっておりません。が、恐らくは妖怪の類とのことです。」

「何だど？」

私はその伝達に思わず声を出して反応する。

妖怪の山の者は外部者を嫌う。

その為外部からの来客というのは、基本追い返されるものなのだが、、、

その後、その鴉天狗から詳しい事情を聞く。

「・・・そうか、分かった。伝達ご苦労だったな。今宵はもういい。遅くはなったが、宴会でも行つて羽を伸ばしてくれ。」

「――よろしいのですか？外部の者などを招き入れて。」

再び歩みを進めようとする、その伝達の鴉天狗は私に対して疑問を投げ掛けた。

「許可してしまった以上、仕方あるまい。案ずるな、最悪の事態が起きても、全責任は私が取る。」

私はそう話しながら、ふと妖しく光る月を見上げた。

「……今宵は宴会の日だ。そんな日にまで役目を全うしてくれてくれる者に責任を負わせるなんて、あまりに酷な話だと思わないか？」

「……仰る通りです。では、失礼させて頂きます。」

鴉天狗は一礼をして、その場から飛び去っていった。

「さて、まさか見廻りの者たちが進入を許可するとは、。可能性として考えられるのは、その者に脅されて仕方なく通した、か、。」

しかし話によれば、その者は自ら武器は置いていくと名乗り出たとのこと。

その置いていかれた武器である刀の姿も、確かに確認したそうだ。それならば脅されたという線は考えづらい。

「……考察していても仕方がないな。」

私は次の瞬間から、歩みを早めた。

時間はあまり無い。

空に登る月は、段々と頂点へと差し掛かっている。

……真実は、実際にこの目で確かめなければ。

一太刀を放った次の瞬間、その一撃が相手に命中したという衝撃と手応えは無く、振り抜いている途中でビタリと固定される。

すぐさま見上げると、刀身は相手の腕と太腿の間に挟み受け止められていた。

「くっ、、！これでもか、！」

俺の刀身を引き抜こうとする力と、相手の力尽くで挟む力が拮抗し、刀の鞘は木の軋む嫌な音を立てる。

「……そう攻めてくるとは、！やるね。」

「くッ、受け止めておいて、よく言うよ、、！！」

瞬間、俺は足を地面に強く踏ん張らせて、刀に入れる力の方向を逆転させる。

「……引いて駄目なら、！！」

『押して攻撃に転じる、、！！』

「何?!……ぐッ、、！！」

勢いよく押した刀身は相手の腕と太腿の間を抜け、そのまま切先は相手の腰の辺りに命中した。

直後、一瞬生まれた隙を逃さず、相手の腹部目掛けて蹴りを撃ち込みにいく。

「……くっ、させないよッ、、！！」

しかし、流石にこの人もそう簡単には撃ち込ませてはくれない。怯みながらも、隼は脛を盾のように構える。

——瞬間、互いの脚が衝突し、両者同時に背面へと弾かれる。

「・・・厳しいな、さっきの突きと脛への蹴りが思ったより効いている。」

攻撃を喰らった場所に残るズキズキとした痛みには耐えながら、隼は一度体制を立て直し、改めて陣の方へと刀を構える。

足の痛みは戦闘に大きく響く。

このまま長期戦になるのは中々に厳しいだろう。

「仕方ない、、、次で決めよう、！」

切先を陣へと向け、勢いよく地面を蹴り加速した。

「くそッ、決めきれないか、！」

俺は乱れた呼吸を整えながら、再び相手に向き合う。

今ので決めきれなかった以上、次からは裏を描くような攻撃は通用しにくくなるだろう。

かといって正面からぶつかり合えば、打ち負けるのは恐らくこちらだ。

ならば、

「次で、決め切る、!!」

——瞬間、両者同時に加速し、一気に接近する。

『相手に攻撃される前に、初撃で決め切る為にも先手は此方が打つ、!』

俺は低い体制のまま急接近する。

空気の抵抗を斬り裂きながら、相手から目を一切離さず加速していく。

——次の瞬間、相手との距離が寸前のところで刀を左上の方向へと斬り上げた。

が、斬り上げる瞬間が僅かに早く、隼に身体を逸らされて回避される。

「くツ、くそツ、!!」

間髪入れず、隼は隙が生じた陣の右半身側へと抜ける。

これに反応はするも、刀を振り切った時点での体制では防ぎようが無く、

「——はアアア!!!」

直後、隼の刀が俺の肩へと振り下ろされる。

——刹那、強烈な衝撃が全身を駆け抜けた。

「がッ、ッ!!」

「――!?」

そのまま体制は崩れ、顔と地面との距離がゆっくりと近づいていく、

――しかし次の瞬間、地面ギリギリまで差し掛かった辺りで、ハッと意識が戻る。

すぐさま地面に踏ん張りを効かせ、攻撃体制へと移す。

見上げると、彼は目を見開いて俺の方を見つめていた。

まさに絶好の好機、戦闘においてこれほどの瞬間はまず訪れないだろう。

「――ハアアアアッ!!!」

その完璧な好機を逃さず、俺は刀を投げ捨てて相手の懐へと潜り込む。

左足で削るように地面を踏み、右の拳を強く固め、

――刹那、全体重を掛けた渾身の拳を相手の腹部へと放った。

「……陣、お前は、!」

直後、拳に伝わってきたのは確かな手応えと衝撃。

放った拳は空振ることなく相手の身体を捉え、隼の身体を客席付近まで吹き飛ばした。

「と、通った、。」

――次の瞬間、莫大な声援がこの身に降り掛かった。

邂逅

試合終了後、見物していた妖怪たちが次々と元の宴会場へと戻っていく中、俺は試合会場の裏で受けた負傷の応急処置をしていた。

応急処置といっても、ただ袋に入れた氷で冷やしているだけだが、すると、背後から声をかけられる。

「見事な試合だったじゃないか、鞍真陣。」

「……ええ、まあ、ありがとうございます、龍さん。」

振り向いてみると、束で結んだ大量の刀を担いだ大天狗が此方を見下ろしていた。

彼女の表情を凝視してみると、何やら怪しげな笑みを浮かべている。

「……言つときますけど、もう二度とこんな試合には出たりしませんからね。」

俺はそう言い放つと、彼女は怪しげな笑みを変えずに返答する。

「へえ、そうなのか？今回は優勝には至らなかったから、また次回に同意気込んでいるものだと思っていたのだが、」

「……」

——俺が最後に放った一撃の後、起き上がってきた隼さんは刀の鞘を右手に抱え、降参の意を示した。

よって二人の勝負は此方の勝利、と、なったのだが、

「……あ、あれ、力が入らねえ、。」

試合の中で積み重ねられた痛手と疲労が一気に襲い掛かり、飛び交う歓声を浴びながらその場に倒れてしまった。

「……そして目を覚ました頃には、既に試合は決していたのだった。」

「まあ、お前が倒れた後大した戦闘は見られなかったから、実質的な優勝はお前だと口にする者が多いが、結果は結果だからな。」

「そりゃ分かってますよ、俺は試合途中で脱落したんですから。」

龍さんと会話を交わしながら、引き続き怪我の応急処置を続ける。

「……彼女の言う通り、確かに試合の盛り上げに一躍買ったのは事実であり、自身でも活躍できていたと実感していた。」

しかし今一度試合の内容を振り返ってみると、それは褒められたよいうなものではなかった。

俺は今宵の試合中、二度剣撃を喰らっている。

もし喰らった刀の刀身が剥き出しであったならば、

「……くそッ、。」

俺は込み上げてきた感情を、地面に小さく吐き捨てた。

「……まあ、今宵の試合で何か一つでも得られたのであればそれでい

い。命がある限り、生物は幾らでも精進できる。」

その様子を流し目で見ていた龍さんは、フツと小さく笑みを溢す。

「・・・ええ、分かってます、。」

「そうか。ならば、また鍛錬に励むといい。――燃え尽きない程度にな。」

龍さんはそう言い残し、その場を去って行く。

彼女の後ろ姿を、俺は何も言わずに見送った。

彼女の姿が見えなくなると、再びその場に静寂が流れる。

俺は引き続き患部に氷を当てようとする、

・・・が、袋を体に当てた時冷えた感覚が無く、そこで氷が溶け切ってしまったことに気付いた。

「あ、。まあ、いいか、。」

新しい氷を貰ってこようかと思いい立ち上がったが、痛みはある程度引いていた為、もういいだろうという結論に至った。

そのままの足で、俺も宴会場へと戻ろうと歩き出す。

「すみません、少しいいですか？」
「なっ、!？」

——その直後、突然背後から声を掛けられる。

俺は一切の気配が無かったことに驚き、咄嗟に背後を振り向いて一歩距離を取った。

目を向けると、藁で編まれた傘を頭に被った男がそこには立っていた。

更に次の瞬間、その男から異様な気配を感じ取る。

明らかに、この山の者が持つ気配ではなかった。

「——あんた何者だ、。」

俺は腰に携えた刀を鞘から引き抜き、切先をその男の方へと向ける。

しかし此方が刀で牽制しようとも、男は少しも動揺を見せない。

「ああ、驚かしてしまって申し訳ない。僕は単なる旅人なのですが、偶然この山の灯りが目に入りました。勿論、許可は取っています。」

「許可は、取っている、？」

この人の言葉から敵意は感じられなかった為、俺は刀を下ろした。警戒心が足りないと思われるかもしれないが、刀の切先を突き付けるという行為はある種の宣戦布告である。

例え牽制であっても、あまりしたくはない。

「……それで、俺に何の用だ？」

「いえ、そろそろ山から下りようかと思ったのですが、帰り道を見失ってしまって、よければ教えて頂けませんか？」

彼は頬を指で搔きながら、そう返答する。

「帰り道？それだったら、単純に下へと下っていけば山の外に出れるけど、」

「いえ、実は、僕の刀を預けたままでして、。」

その言葉を聞いて、俺はある程度納得がいった。

見回りの妖怪たちは、刀を預けることを条件に山への進入を許可したのだろうと。

それでも少し警戒心が薄い気はするが、

「……それなら、俺がそこまで案内するよ。この後酒を呑むつもりもなかったしさ。」

俺は刀を納刀し、山の見回り天狗が拠点としている場所へ向けて、彼を連れて歩み始めた。

「……余興も終わり宴会は終わりへと近づいているのに、何故こうも落ち着かないのだろうか、？」

宴会場へと戻る妖怪たちを眺めながら、天魔は一人でそう呟いた。
彼女の発言は、果たして思い過ごしに終わるか、
――それとも、

静まりゆく妖怪の山

段々と宴の騒がしさが薄れ、静寂に包まれた森林へと入っていく俺の背後を、彼は無言で歩みを進める。

下山途中の森は不気味な気配に包まれている。

それもその筈、ここは妖怪の巢食う場所。

誰が何もせずとも、辺りには妖気に満ち溢れている。

並大抵の生物ならば、この山に足を踏み入れようなどという思想には至らない。妖気を感じずとも、本能的なこの場所を避ける者が殆どである。

そんな場所に、彼は武器を捨ててまで立ち入った。

何の事情も無いわけがない、と思うが、

「・・・静かですね、この山は。」

「え?・・・あ、ああ、って、そりゃ何処の山も夜は静かでは、」

突然の彼の言葉に俺は少し動揺する。

確かに夜の妖怪の山は、葉が風に揺れ擦れ合う音や小鳥の囀りが鮮明に聞こえるほど静かではあるが、それはどの山でも同じではないだろうか。

寧ろそこらの山よりも、この妖怪の山は騒がしい方だと思うが。

「――僕にとっての山は、厄災を運んでくる畏怖の対象でしかない。けれどこの山からは、そういった忌々しい争いの気配は感じられなかった。」

「・・・な、何言っただ、あんだ。」

流れていく山の景色を見渡しながら、彼は淡々とそう述べていく。

彼の言っている言葉の意味は一切分からなかったが、その淡々とした口調からは、身が震えるほどの『絶望』と『悲痛』を感じた。

数秒、沈黙が流れる。

「……すみません、今のは単なる独り言だと思つて忘れてください。……それより、先程の試合は見事なものでした、鞍真陣君。」

すると次の瞬間、彼は話し方の雰囲気一転させ、先程の余興試合について語り出した。

今度の口調は先程のような負の感情に塗れたものではなく、穏やかかつ愉しげな感情が感じられる。

「あ、見てたのか、。ていうか、俺の名前知ってるんだな。」

「ええ、何やら盛り上がっていましたので。」

「そうか。……でも、さっきの試合は、あまり褒められたものじゃ、。」

龍さんにも試合のことは賞賛されたが、やはり自身の中では納得のいくものではない。

試合中のことを思い返す度に反省点が湧き出てくる。

俺は思わず地面へと俯いた。

「……確かに試合中、軽率な部分は多かつた。もし刃を剥き出しにして戦っていたのなら、君は数回死んでいたでしょう。」

「な、!?!? ……け、結構容赦なく言ってくるんだな、あんた、。」

あまりに躊躇のない駄目出しに、俺は一瞬たじろぐ。

思わず彼の方を振り向くと、彼は真顔で景色を眺め続けていた。

「けれどあれはあくまで試合、『実戦なら、』と考えるのはお門違いですよ。――それに決定打となった攻撃への転じ方は、ほぼ完璧に近かった。」

「そ、そうか?…なんか、率直に褒められるのは複雑な感じだな、。」
「賞賛の言葉は、素直に受け取っておいた方がいいですよ。――でも、改善点を挙げるとするなら、そうですね、。」

その後、俺は山を下りながら、彼と試合についての話題で盛り上がった。

単純に剣を振るう者同士というのものもあるが、何よりも彼の的確な指摘と助言が、俺が彼に対して持つ警戒心を解いていく。

そして目的の場所に着く頃には緊迫とした空気感は消え、遠慮なく語れる程の仲へと化していた。

「ここまで案内すりやあ大丈夫だろ?」

「ええ、今宵は楽しませて頂きありがとうございます。」

月が空の頂点へと昇る頃、彼の刀を回収したのち、山の麓まで辿り着いていた。

俺がそう言うと、彼は返す言葉と共に軽く会釈をする。

「機会があつたら、いつかまた会いましょう、陣君。今度は酒を交わし

ながら、ね。」

「ああ、いい酒を用意してくれよ?」

「ええ、約束しましょう。今宵の御礼として、なるべく良い品物を。――それでは、また。」

そう最後に言い残すと、彼は俺に背を向けて歩き出した。

段々と彼の姿が、暗闇の中に消えていく。

――次の瞬間、俺はハツと思ひ出し叫ぶ。

「おい!ちよつと待ってくれ!」

すると彼はその声に反応し、一度足を止め此方を振り向く。

「あんたの名前、まだ聞いてなかったからさ!」

そう叫ぶと、彼は小さな声で一言言い残した。

「――鬼式眼楽、それが僕の名です。」

そのまま、彼は再び暗闇の中へと進み、やがて消えていった。

鬼式眼楽、次また会えたなら、今度は彼と実際に手合わせしてみたいものだ。

俺は無意識のうちに、腰に身につけた刀の柄を握りしめていた。

「・・・想像以上の収穫だったな。やはり、この山に立ち入って正解でした。」

月明かりだけを頼りに、暗闇と静寂に包まれた道を歩く。しかし次の瞬間、徐々に近づいてくる騒音に気が付いた。その音の正体は数秒もしない内に、目の前へと姿を現した。

「おいテメエ！随分と良い身なりしてるじゃねエか！」

——現れたのは所謂山賊だ。
罪なき人を襲い、所持品を巻き上げ最終的には殺す。

「おい見ろよあの刀！質に持って行きや高くつくぜ！」

「ははッ、思いがけねえ収穫だな、オラ行くぞ！」

六人の盗賊たちは五月蠅い声で喚きながら、刀や棍棒といった武器を徐に取り出す。

「・・・全く、哀れな人たちだ。」

その光景を哀れみながら、背中に携えた太刀を引き抜く。
そして次の瞬間、盗賊たちは一斉に武器を振り上げ、この身へと襲い掛かってくる、い

「――はあ、」

溜息を吐き、刀に付着した血を振り払う。

現場には四方八方に飛んだ血と、頭と身体が分裂した六人の死体が転がっている。

しかしその死に様の表情に恐怖や苦痛の表情は無く、

至って先程と変わらない、傲慢かつ貪欲な醜い顔をしていた。

「最後に伝えておきますが、僕は自分の身を守るという目的で君達を殺したのではなく、君達の生涯を哀れみ手にかけてたんです。

――来世というものがあるなら、今度は良い生涯を送れるといいですね。」

そう言い残し、再び歩み出しその場から去った。

試合の違和感

試合の後、俺は宴会場を離れ天魔の所へと向かっていた。既に会場には騒がしさはなく、妖怪たちは静寂に包まれた夜の気配と、仲間たちとの談笑をつまみに酒を交わしていた。

「もうっ！何やってるんですか！隼さんらしくないですよ！」
「はは、ごめんごめん。いや、完敗だね。」

その道中文に見つかり、この通り責められている。

「何が『いや、完敗だね』ですか！というか、何であれくらいで降参しちゃったんですか！」
「それは、まあ、あの攻撃を喰らった後の会場の盛り上がりを見たら、降参せざるを得ないかなと思つて。・・・それと、相当痛かつたよ？あれ。」

何故ここまで文が怒っているのかは分からないが、取り敢えずそれっぽい言葉を並べて機嫌を直そうとする。
暫くそんな掛け合いが続いたが、幾度の説得により何とか文を納得させることに成功した。

「……それで、今は何処に向かつてるんですか？」
「天魔の所だよ。まあ、ちよつと急用ができてさ。」

少し不貞腐れながら、文は俺にそう尋ねる。
質問に対して此方が少し濁した返答をすると、文は更に顔を膨らませる。

少し心苦しいが、あまりベラベラと喋るような内容ではない為誤魔化すほかない。

「…はあ、分かりましたよ。ただし！今度人の里へ出向くことがあったら、またちゃんとお土産用意してくださいね！」

長きに渡る文の尋問の末、目的地一歩手前のところで文は折れてくれた。

そして小さくため息を吐き、そう言葉を残して疾風の如く宴会場へと飛び戻っていった。

「…今度の土産は、かなり良い物を持ってこないといけなさそうだな、。」

空へと飛んでいく俺の残りの資産を思い浮かべながら、漸く天魔が居るかもしれない場所へと辿り着いた。

「…予想通り、そこには書物を纏めている天魔の姿が。近づいていくと、やがてあちら側も気付き、一旦作業を止める。」

「隼じゃないか。どうした？酒を飲まされそうになったから逃げてきたのか？」

「いや、そんなんじゃないさ。…ちょっと、お前に話があつてね。」

微笑を浮かべていた天魔の表情が、俺の返した言葉によって即座に真剣な顔つきへと変化する。

「なら、少し場所を移そう。君の様子からしてその話は、盗み聞きされていいような軽い話ではないのだろうか？」

「すまない。察しが良くて助かるよ。」

「よせ、長い付き合いだらう？」

すると天魔はすぐさま荷物を纏めて、山の深部の方へ向けて歩き出した。

天魔に連れられてやってきたのは、彼女が天魔としての仕事を全うする為の大屋敷。

その中でも、最も奥に位置される存在すらあまり知られていない小さな小部屋に二人は入る。

そこで天魔は持っていた書物を全て下ろし、真剣な顔つきで此方へと向き直す。

「それで、話っているのは何?」

「・・・そうだね、じゃあ、順を追って説明するよ。」

俺は天魔に対して、自身が余興試合に参加していたことと、そこで何人かの相手との戦闘の未脱落したことを話した。

「へえ、君が脱落か、。是非見てみたかったが、生憎仕事が溜まっていてね。・・・それで、その試合がどうかしたのか?」

「・・・試合中、俺が最後に手合わせした相手、鞍真陣という鴉天狗について天魔に質問がある。」

「――!」

その名前を口にした瞬間、天魔の顔色と表情が変わる。

「……いいよ、続けて。」

「……大丈夫か、？」

「ああ、いいから全部話してくれ。その後で全部話す。」

小部屋に緊迫した空気と凍てつくような静寂が走る。

最奥の部屋なのにも関わらず、外の騒音が鮮明に聞こえるほどに。

「手合わせをしている間は特に何も感じなかったんだ。妙な異変がしたのは最後の最後、勝敗が決まる瞬間、。」

そう話しながら、その時の瞬間を脳裏に映す。

決着の瞬間、俺は陣の攻撃を躲し返しの一振りを打ち込んだ。

正直、これで勝敗は決すると思っていた。

——異変を感じたのは一振りが命中する直前、刀は壁のような抵抗に阻まれた。

それは実際のような硬いものではなく、膜のような柔らかい抵抗であつたが、

それでも、刀の勢いを殺すには十分だった。

命中時に手応えはなく、その後不意を突かれて返しの太刀を喰らい、結果敗北に至った。

「この攻撃を阻む壁のような感覚、同じものではないけれど、似たようなものを俺は二度経験している。」

次の瞬間、脳裏に二人の人物像が鮮明に浮かび上がる。

一人は古き時代に出会った戦神。

そしてもう一人は、太古の時代に殺し合った妖怪、。

「何か知っていることがあれば教えて欲しい。……彼に、鞍真陣に

ついで。」

そう伝えると、天魔は暫く目を瞑りながら、額に拳を当て続けた。やがて彼女は深いため息を吐き、一瞬苦笑を浮かべてから再び真剣な顔つきへと戻る。

「約束は約束だ。私が持っている情報は全て、今ここで君に話そう。——ただし、他言無用を約束してくれ。絶対に、だ。」

「——ああ、約束するよ。急に無理を言ってしまうてすまない。」
「だからよしてくれ。秘匿を貫いてくれるのなら、特に無理な問題でもないからな。……さて、では何から話していこうか。」

そして天魔は語り出した。

物語は、俺が天狗の社会となっていた妖怪の山に訪れる少し前まで遡る。

妖怪の山再統一録

これは、妖怪の山から全ての“鬼”が去ってから、少し後の話である。

当時私は、妖怪の山の経済の安定と、妖怪たちの統治に全力を注いでいた。

「千華さん、このままでは見回りに配属された哨戒天狗の数が不足しています。」

「……分かつている。だがそこを埋めようとすれば、また何処かで人員不足が、。」

その時代は現在の妖怪の山のような縦社会は一切無く、明確な指揮者すら居なかった。

無論、規則なんてものもなく、山は無法地帯の一步手前というところまで差し掛かっていた状態であった。

「……貴方も大変ですね、。」

この一言、当時は飽きるほど聞いた。

前述したように、山は無法地帯の一步手前。

妖怪たちを引っ張っていくような指揮者も居ない。

そんな中で、私は率先して山の統治に勤しんだ。

鬼が支配していた時代、伝達や外界とのやり取りを生業にしていた私は天狗の中でも顔が広く、様々な方面へと助力を頼みつつ作業を進めていった。

いずれ山の妖怪たちは私を次々に慕い始め、無法地帯だった妖怪の山に現在のような団結が生まれ始めていった。

ただ、とある者たちを除いては、

「……千華さん！またあの者たちです！今度は人間の村へと矛先が向けられましたッ！」

「っ、！これで、何度目だ、。・・・その村の状況は、？」

「幸い、嫌な予感を察知した哨戒天狗たちによって未遂に終わりましたが、。それで食い下がるような奴らではないですよ、あいつらは！」

順調に進むかと思われた妖怪の山の再統治。

しかし、それはやはり一筋縄ではいかなかった。

奴らは私たちとは違い何処までも貪欲だった。

その者らの目的は、他所の侵略。

言うならば侵略勢力である。

とある一人の大天狗を筆頭に、その侵略勢力は山の周辺を容赦なく侵略していった。

他の妖怪が住む里や村、更には人の村まで見境なく襲撃を仕掛けたのだ。

全く、この者たちに一体どれほど頭を悩ませたことか。

そして当然その侵略勢力は、私のような侵略には無関心、この妖怪の山のことだけを考え続けるような者たちを敵対視し、やがて対立することになる。

これが原因となり、長い間山の統治は困難を極めていたのだった。

「・・・しかしその侵略勢力は、とある一件により滅びの道を進むことになった。ーーそれも、たった一夜の出来事だな。」
「たった一夜、；、一体何が、？」

天魔にそう尋ねると、彼女は目を瞑り一度考え込む。
やがて躊躇いながらも、天魔は口を開いた。

「ここを逃して話す機会はないな、。丁度いい機会だ、全て話そう。・・・とある、静かな夜のことだ。」

その夜私は、私を慕う者の呼び声に叩き起こされた。

「千華さんッ！大変ですッ!!」

「っ!?ーーな、何だ、何があった、？」

「奴らが、あの都に、!!」

「都、?ーーっ、ま、まさかッ！」

その瞬間、私の脳裏に最悪の未来が映った。

私を起こした天狗が告げた”都”とは、過去に妖怪の山の少し離れた場所に位置していたとある一つの街だったのだ。

それも単なる人里とは訳が違い、経済は発展しており階級社会まで

存在する、言葉通りの”都”である。

そしてその都は、この妖怪の山とも取引を交わしていた。主に食糧や酒、この山では手に入らない木材などである。

そんな今後の山にとっても重要な人の都を、奴らは乗っ取る気だったのだ。

「千華さん、これは流石に、！」

「当たり前前だ！戦う意志のある者は全員出陣させろ！何としても食い止めるんだッ！」

私は戦力を総動員させ、直ちにその都へと向かった。

——しかし向かった先で見た光景は、最悪の未来と同じように見えて違うものだった。

建物は倒壊し、都の人々は血を流してそこら中に転がっている。

ただ私の最悪の想像と違っていた点は、その血を流して転がっている者の中に、侵略勢力の妖怪たちがあちこちに混ざっていたことだった。

妖怪と人間の戦力差は遥かにかげ離れており、いくら人間が抵抗しようとも、弱い妖怪を倒すので精一杯だろう。

しかもここを襲ったであろう者たちは、妖怪の中でも高い戦力を誇る天狗。

それが何故か血を流し、あちこちに転がっているのだ。

当時の私は、そこに立ちすくむしかなかった。

「——そしてここからが本題になる。君が尋ねてきた、鞍真陣について、いっ。」

……結論から言おう。私は彼、鞍真陣について、本人にすら隠し

ていることが幾つかある。君が知りたい情報かどうかは知らないが、私の知っていることは全て、君に伝えよう。」

死から蘇りし鴉天狗

「……その光景は、とても見るに耐えない、まさに地獄のようだった。」

その場を目撃した者たちは、口を揃えてそう話した。

まるで集団で洗脳にでもかかったかのように、それ以外の感想は口にされなかった。

そしてその感想は大袈裟に話された訳でもなく、寧ろそれは優しく包んだ言い回しなほど、その光景は凄惨なものだったのである。

その場に辿り着きその光景を見た私は、直ちに妖怪の山から救援を呼び、戦闘不能となった妖怪たちの回収を命じた。

倒れた妖怪の中には既に息のない者も多く、一切の痕跡も逃さずとというのはかなりの時間を要した。

そうして人間側の救援がやってくるまでの時間で、地獄となった街の後処理を何とか終わらせたのだが、

「それで、処罰の方はどうするつもりですか、？」
「……」

事件以降、頭を悩ませていた侵略勢力は破滅の道を辿っていった。

この事件で多くの構成員が散ったことに加え、勢力の中心人物の殆どが命を落としていたのだ。

そして残された勢力の構成員には、軽い処罰で下つ端への階級下げ、一番重い処罰で永久追放が下された。

「当時、処罰についてはかなり揉めたんだ。私は皆平等に階級下げ、下っ端の役職に就いて貰えばいいと提案したのだが、。」

「――やはり混乱を巻き起こしたことが許せない者も多くいてな。中には追放どころか死罪を求める者だっていた程だ。」

「・・・それでも、処罰は最高でも永久追放になったんだな。」

隼はボソツとそう呟く。

それを聞き、天魔は優しく自分の頭を掻きながら口を開いた。

「ああ、反対に情けをかける者も一定数いたんだ。私もどちらかというところ”そちら”寄りだったのだが、指揮者として片側を鼻負するわけにもいかないだろう？」

その上での判断だ。・・・間違った判断だったと思うかい？」

「いいや、思わないよ。至極真つ当な、天魔らしい判断だ。」

その隼の返答を聞き、天魔は安心したような柔らかい笑みをこぼす。

「さて、話を戻すが、結局その事件が原因で、山には大きな損失が生まれた、。」

侵略勢力は壊滅、そして最初に私の命令で駆けつけた見回りの天狗たちも、殆どが命を落とすことになってしまった。」

そこまで話した瞬間、天魔は一度話を止める。

数秒の間、空気が凍てつくような、短く長い時間、天魔は隼の瞳を鋭く見つめる。

同様に隼もまた、只々天魔の瞳を見つめ返す。

次の瞬間、ようやく天魔が口を開いた。

「その駆けつけた天狗たちの中の一人が、君が興味を抱いた鴉天狗、鞍真陣だ。」

「……！」

「彼はあの事件によって致命傷を負い、救出に入った際、彼は既に仮死状態だった。その場で息を引き取っていなかったのは幸運だったかもしれない。しかし彼は山に運び込まれても目を覚ますことなく、河童の手当が当てられてもそれは変わらなかった。」

天魔は淡々とそう話していく。

仮死状態であったことが幸運、その一言に、失われた人の数が物語られている。

隼は一言も発さない。

ただ真つ直ぐに、眼を天魔へと向けるのみ。

「……その後、侵略勢力への処罰が下され、妖怪の山は徐々に纏まりが生まれていった。

そして君がやってきた。その時のことは君の知る通りだ。別に裏話なんてものはない。」

二人の脳裏に、同時に同じ光景が過ぎる。

唐突に始まった侵入者との戦い。

記憶とはいえ、その様子が二人には鮮明に映し出されていた。

「更に月日が流れた、そんな何でもないある日だ。

——彼が、鞍真陣が目を覚ました。当時上層部では大騒ぎだったよ。あの事件で一度生死を彷徨った者が、息を吹き返したんだからな。

……ただ、それでは終わらなかった。これは彼の知り合いだった者から聞いたものなんだが、「どこかアイツらしくない」というのだ。」

「・・・らしくない、というのは。性格が変わった、ということかい？」

そう隼が尋ねると、天魔は一度言葉に詰まる。

「ーすまないが、あまり良い言い回しが見つからないんだ。ただ、どこか『らしくない』とだけしか、。」

「そうか、。すまないね、お前の感想じゃないのに、深く聞いてしまった。」

「いや、いいさ。・・・私が知るのはここまでだ、これより深く知りたいのなら、実際の当事者に聞いてみるといい。」

天魔はそういうと、部屋にあつた本棚のなかから、何やら書類のよなものを引っ張り出した。

隼はそれを受け取り中を開くと、そこには人や場所の名前が細かく書かれている。

「事件に関わった場所や、人に妖怪たちの名前を纏めた物だ。よければ使ってくれ。」

「ああ、助かるよ。」

隼は書類を閉じ、装束の中へと忍ばせた。

「・・・さてーそろそろ山も静まる頃だ。話はここまでにしよう。」

次の瞬間、天魔はパチンと手を叩き、緊張した空気を払った。

対して隼もまた、表情を崩し首を一度縦に振る。

「そうだね、じゃあまた今度。」

「ああ、おやすみ。」

そう最後に会話し、隼は天魔の屋敷を後にした。

「……おや、見ていたのなら、入ってくれば良かったのに。」

隼が部屋を去ってからほんの数秒後。

部屋の外に一人の人影が現れる。

「無茶を言わないで下さい。あの空気に割って入るなど、一体何処の命知らずか。」

「へえ、例えお前でも無理か？龍。」

大天狗、飯綱丸龍である。

「……良かったのですか？あのような機密情報を、簡単に手渡してしまつて。」

「活用できる奴が見つかったんだ。それに、いずれ目を向けなければならぬ物でもあった。」

一瞬、部屋に再び重い沈黙が流れる。

「……天魔様、貴方には申し訳ありませんが、私はあの者に対して信用しきれません。彼が他人と接する態度を見る限り、悪人ではないの

はよく分かります。しかし、」
「それでいいさ。」

龍が話している途中、天魔の一言がそれを遮る。
思わず龍は口を噤む。

「お前の考えもよく分かる。だから疑え。好きだけ疑惑を向けろ。やり過ぎは良くないが、疑う事は罪じゃない。」

「天魔様、。」

「ただ、あくまでも真実だけに目を向け続けろ。妄想や捏造なんて以ての外だ。他人の情報なんて当てにならない、信用出来るのは己の眼のみと思え。」

「・・・はい、分かっていきます。」

龍が天魔にそう返答すると、天魔は肩の力を下ろして部屋の出口へと向かった。

「今宵は余り飲めていないのだろうか？どうだ、この後一杯。それなりに良い酒を用意してやる。」

「ーお言葉に甘えて。」

深夜、物音のない静寂な山の頂付近にて、カチンと音を立てて二つの盃がぶつかり合った。

疾き再会

「辻斬り事件、ねえ、。というかさ、文。この張り紙、勝手に持ってきて大丈夫なのかい？」

山の宴会から数日経ったある日、射命丸文は一枚の張り紙を土産に、咲風隼の借家へと足を運んでいた。

隼が手にするその紙には、『夜の辻斬り事件』と大々的に綴られている。

「問題ありません！どうせあんな掲示板見てる人なんか居ませんし、もし駄目だったなら謝ればいいだけのことです！」

「そ、そういうものか、。。」

妖怪の山の中腹には、近頃に起きた出来事、事件などを伝える為の、所謂“掲示板”が設置されている。

種族・階級関係なく、誰もが好きなようにその掲示板に張り紙をすることができるのである。

しかし文曰く、山から外部へと足を運ぶ者が少ないのが原因で、そこに貼られている張り紙の殆どが、主に催し物の宣伝だそうだ。

「・・・それで、何で俺にこの張り紙を？」

お茶を啜る文に対し、隼は一度紙を卓に置いて尋ねる。

すると文はお茶を置き、何が企んでいるかのような不敵な笑みを浮かべる。

「さつきも話した通り、あの掲示板に外部の情報が載るなんてごく稀なんですよ。つまり、競合相手が居ないわけです！」

ここで成果を上げれば、山には私の名が広まって、きっと昇格だっ

「てあり得ます！」

「そ、そうなのか？でも、あまり掲示板を見る人は居ないって、」
「で！す！か！ら！この張り紙に目を付けたんですよ！上手くいけば、きつと大反響間違いなしです！」

文はそう語りながら、目に燃え盛る炎と眩しいほどの輝きを宿す。
こうなってしまうえば最早止まることを知らぬだろう。

「ま、まあ、不可解な記事ではあるし、頑張ってみる価値はあるんじゃないかな。文、情報収集とか向いてそうだしさ。」

「そうですね！よし、必ず特種を掴んで見せますよ〜！」

文は拳を強く固め、熱意の炎を更に大きく燃え上がらせた。

「――さて、そろそろ行く時間だ。すまない文、今日は予定があつてね。」

「あやや？また山の外へ行くんですか？」

「ああ、ちよつと友人と約束があつてね。ま、ちよつと買い物に行くだけさ。」

隼はそう話しながら少ない荷物を纏め、懐に仕舞う。

最後に天狗装束の腰辺りに短剣を忍ばせ、もう一度装束の紐を締め直す。

「なら、心配ないですね。隼さん、外へ出かけるたびに傷だらけで帰ってきますから。」

「そ、それについては、諸々申し訳ない、。」

文は不服そうか表情を浮かべる。

「でも、貴方は必ず帰ってくるって、いつも信じていますから。

——それじゃあ！お茶美味しかったです！またご馳走してくださいね〜！」

「・・・ああ、約束するよ」

「さて、俺も行くとするかな。」

文が帰宅してから数分後、隼は玄関の戸を開けて森の中へと進んでいった。

その日、俺は妖怪の山から少し離れた場所、とある森の竹藪の中を偵察に出向いていた。

一人ではなく、白狼天狗の先輩と共に。

「大丈夫だとは思いますが、獣や賊には注意してくださいね。賊は抵抗すれば引いてくれるので何の問題もないですが、獣は恐怖という感

情を持たないものも多くいますから。」

「権さん、しれつと怖いこと言わないでくださいよ、。」

俺はそう言うと、権さんは横目で此方の顔を睨み付けてくる。

今日の彼女は、どうやらかなり機嫌が悪いようだ。

「では和解を試みろ、と？そんなことは不可能です、もし賊に話しが通じるなら、その者はとうに真つ当な生活を送っています。

・・・陣は少し冷酷さが足りません。時には非情になることが出来なければ、実践中苦労しますよ。」

「そ、そうですね。肝に銘じておきます、。」

ここへの偵察を命令された理由だが、どうやらこの森は、近くの人里と妖怪の山を繋ぐ通路として最適なのだそうだ。

あくまでも形は変えず、通路としてだけ使おうらしい。

しかし、この命令が下されたのはつい先程のことだった為、権さんはご機嫌斜めなのである。

「それにしても、権さん。あまりに静か過ぎませんか？獣どころか、小動物の一匹も姿を現さない、。」

「―――そうですね、確かにここまで静寂に包まれているのは、。」

「―――陣ツ！伏せてッ！」

瞬間、耳元で小さくも迫力のある叫びが響く。

更に次の瞬間、背中に権さんの手が置かれ、そのまま強制的にしゃがまされる。

「えッ、!?も、権さん!？」

「いいから、音はたてないでくださいー！」

そう言いながら、彼女はとある一方を指差した。
その方向を見てみると、少し先に人影を見つける。
頭に傘を被り、背中には大太刀、手には盃が添えられている。

「ゆっくり近づきますよ。相手が気付く前に、首に剣を突き立てます。」

「は、はい、！」

俺と権さんは体制を屈めて、無音でその人影に近づいていく。
なるべく慎重に、かつなるべく迅速に。

——が、次の瞬間、その人物は背中から刀を抜刀し、此方の方向へと突き立てた。

「ッ、!？」

「なッ、陣、戦闘準備をしてください！」

直後、権さんは大きな刀を構え、切先をその人物へと向ける。
数秒、竹藪に凍り付くような沈黙が流れる。

「……おや、君でしたか。また会いましたね、鞍真陣君。」

沈黙を切り裂いたのは、その人物の一声だった。
その声は、何処かで聞いたような、聞き覚えのあるものだった。

――次の瞬間、人物の顔を見て疑問が確信へと変わる。

「あ、アンタ、…この前の、…！」

その者は、先日の宴会で出会った剣客、鬼弍眼楽だった。

約束の用事

妖怪の山を出発してから数時間後、

数えきれないほど膨大な量の荷物を背負って、八雲藍と人の里を訪れていた。

「すみません、隼さん。もう少しだけお付き合いですか？」

「あ、ああ、大丈夫だよ。」

事の発端はあの化桜、西行妖を封印した夜の少し前。

俺が紫の饅頭を掻っ払ったことが藍にばれ、それを黙っておく代わりに彼女と一つ、彼女の用事に付き合うという約束をした。

――その約束の用事が、今日。

藍曰く、半年に一回ほどの間隔で頼まれる『大きめのお使い』、だそうだ。

「――やあ、藍。お待ちせ。」

「隼さん、ご無沙汰しています。では、行きましようか。早くしないと、日が暮れて店が閉まってしまいますので。」

「ああ、そうしようか。荷物持ちは任せてくれ。」

「助かります。では、お言葉に甘えて。」

荷物持ちは任せろと言ったものの、藍の買い物物の量は想像の遥か上をいっていた。

いくら鴉天狗とはいえ、流石に多少は重い。

だがそれ以上に、荷物の重心を制御することが何より難しい。

少し気を抜けば、均衡は崩れて大惨事になるだろう。

『・・・とはいえ、後輩の頼みだ。最後まで全力で付き合おう。』

九本の尻尾を隠し人間の姿へと化けた藍の後を追いながら、小さく息を吐いてから心の中で呟いた。

――それから暫く経ち、気付けば夕暮れ。

静寂の夜が訪れる時間になっていた。

買い物を終えた藍と俺は、今まで歩いていた道を帰り道として戻り歩んでいた。

「大変でしたなら、言ってくださればよかったのに。」

「あはは、ごめんごめん。やっぱり人に頼るのは大事だな。」

大量の荷物はというと、使い古された荷車に縛り付けて運んでいく。

買い物途中、ふと裏路地を覗いた時に見つけたものだった。

「それにしても、藍は半年に一回、一人でこれを運んでいるんだろう？ 大変だな。紫も少しは手伝ってくれればいいのにね。」

鈍い音を立てる荷物を引きながら、俺は藍にそう尋ねる。

すると藍は、ばつが悪そう表情を浮かべながら口を開く。

「い、いえ、普段はここまでの量にはなりません。……ただ、今日の買い出しには隼さんが同伴する事を知られまして、。」

『隼がいるなら、買い出しの予算を上げても問題なさそうね。』
と、紫様が、、「」

「ああ、なんだ、そういうことか。紫は自分の式に随分と鬼畜なお使いを頼むんだなと思ったけれど、それならこの量も納得だね。」

そんな他愛ない雑談をしながら、賑やかな人里の街道を歩く。

と、次の瞬間、足音が一つ聞こえなくなった。

「……藍？足を止めてどうしたんだ？」

背後を振り向くと、藍が一軒の店を見つめている。

玄関の扉の上に飾られた暖簾には、『うどん、そば』の蓋文字が書かれていた。

藍は何も言わず、じっとその店を見つめている。

「……そうだ、折角だし、何か食べて帰ろうか？丁度、そこに店があるしさ。」

そう藍に語りかけると、悲しみは物凄い速度で俺の方へ顔を向ける。

「はい！そうしましょう！……あ、でももうお金が、」

「そのくらい俺が払うよ。俺だって、多少は持つてるからさ。」

「ほ、本当ですか!?で、では、ご馳走になります！」

そうして、俺たち二人はその『うどん、そば』屋へと入り早めの夕食を済ませた。

「今日はありがとうございました。お陰で助かりました。」

「いやいや、こちらこそ。誰かと買い物なんて久しぶりだったから、楽しかったよ。また機会があつたら声をかけてくれ。」

美しく輝く夕焼けを背に、大量の荷物を持って帰路を歩む。

人里からはかなり離れ、辺りには草原と森のみ。

買い物をしていた人里から、紫が拠点を置いている街までは少し距離がある。

辿り着く頃には、すっかり深夜になっているだろう。

と、次の瞬間、藍が方向を変える。

すると藍は此方を向いて、先に聳え立っている巨大な竹林を指差した。

「あの森を抜けます。隼さん、行けますか？」

「問題ないよ、行こうか。」

竹林の中は霧と影に包まれていて、どこか神秘的な雰囲気醸し出していた。

足場は大して悪くないため、荷車が地面に痞えることもなく円滑に転がしていける。

「・・・竹林か、。」

少し前に読んだ『竹取物語』のことを思い出す。

あまりにあの夜の出来事と内容が酷似していた為、強く印象に残った作品だった。

『・・・彼女らは無事に生きているだろうか、。』

「隼さん、何か言いましたか？」

「いや、。、何でもないよ。」

そこからは暫く無言の時が続く。

特に会話を交わさぬまま、暫く竹林の中を歩み続けた。

――と、沈黙を切り裂いたのは藍の鋭い声だった。

「――何か聞こえませんか？自然の音ではなく、人工の物音が、。」

辺りの音に耳を澄ませる。

すると微妙かではあるが、藍の言う通り明らかに自然が奏でる音ではないものが紛れ込んでいる。

腰に身につけた短刀を、いつでも引き抜ける位置へと引っ張った。

「普通に考えるなら、人の行商人か何かだろう。賊の可能性もあるけどね、。藍、念の為、いつでも戦闘体制に移れるよう準備だけはしておこうか。」

「はい、慎重に進みましょう。」

物音に気をつけながら、再び竹林の中を進んでいく。

異常な物音は足を進める度に大きくなり、やがてそれが人の話し声であるということを確認した。

――瞬間、竹林の中から、少し開けた場所へと足を踏み入れた。

衝突

時は日が沈みゆく夕方ごろ。

草木生い茂る森林の一箇所にて、盃な酒が注がれる音が木霊する。

「……んはア、まさか、こんな場所で君と再会できるとは、思いも
しませんでしたよ。……よければ、飲みますか？」

鬼式眼薬は持参していた風呂敷を広げて、地べたに座り込み酒を喉
へと流し込む。

一口飲んだところで、盃を天狗の二人へと差し出した。

「え、？あ、いや、今はちよつと、」

そこまで陣が話したところで、背後から権が服を掴み一旦止める。
更に権は服を掴んだところから耳元へと接近し、小声で耳打ちをす
る。

「陣、ちよつと来てください」

「え、あ、は、はい、。」

陣は権に引つ張られるがままに、森の中へと進んでいく。

「すまねえ！少ししたら戻るから、ちよいと待っててくれ！」

「……いえ、僕はここから離れるつもりはありませんから、ごゆつく
りどうぞ」

少し森を進んだところで、権は足を止めて口を開く。

「さて陣。彼は何者ですか？貴方は『宴会の夜に知り合った友人』と

言っていました、、、そもそも山の中で、外部の者と知り合うなんてことは起こり得ないはずですが？」

権は怪訝な表情を浮かべながらそう尋ねる。

権の圧力に押された陣は、宴会の夜に起きた出来事について洗いざらい権に話した。

「ー」と、言うわけでした、」

「・・・なるほど、要するに貴方は、素性も知らない侵入者に対して、簡単に気を許してしまった、ということですね？」

「は、反論の余地なしです、、」

権は額に手を当て、大きくため息を吐く。

「全く、少しは警戒してくださいよ。確かに彼の様子を見る限り、悪者には見えませんが、」

「い、いや、俺だって最初は警戒してたんですよ!?ただ、なんかこう、気づいたら、」

「どんな言い訳ですか、『気づいたら』なんて、」

既に権の背中に携えた剣は、即座にでも引き抜ける位置へと構えられている。

即ち今この瞬間からでも、一瞬で剣を引き抜き戦闘態勢に入れるという意思表示である。

「私は勿論彼に対して常に警戒心を張りますが、貴方も多少は心掛けてください」

「りよ、了解です、」

陣は苦笑いを浮かべながら返事をした。

「わ、悪いな、待たせちゃまって、」
「おや、早いですね」

二人が眼楽の元に戻ると、竹林の方を眺めながら相変わらず一杯の酒を少しずつ飲んでいった。

戻ってくる二人を確認すると、一杯の盃に残されていた酒を一気に飲み干す。

「……ところで、君の名前は？」

次の瞬間、眼楽は椀へと視線を送りながらそう尋ねる。

椀は眼楽に対し、目を細め睨み付けるような視線を返す。

「……犬走椀。ごく普通の白狼天狗です。貴方の名前は彼から聞きましたよ、鬼式眼楽」

椀は一瞬躊躇いながらも、睨み付けた表情を変えないまま返答する。

「ああ、なら僕の紹介はいりませんね。よろしく、犬走椀さん」

「名前だけで結構です。それと、もう少ししたら私たちは行きます。残念ながら酒を飲みながら談笑を楽しむ暇はありませんので」

「ははっ、そんなに殺気を向けないでくださいよ、別に危害を加える気は毛頭ありませんよ。剣士同士、それは分かるでしょう？」

権は更に強く睨みを効かせる

「……しかしそこから数秒後、権は殺気を消し剣を持ち運ぶときの位置へと戻した。

そのまま眼楽に対し小さく頭を下げた。

「それなら問題はないです。失礼な態度をとってしまつてすみませ
ん」

「いえいえ、お互い剣の腕を精進させていきましょう」

その様子を見守っていた陣は、ほっと息をつく。

それもその筈、今の状況は、いつ斬り合いが始まってもおかしくな
かつただろう。

戦う意思のない陣にとっては、最悪の状況である。

「……と、ところでさ、眼楽は何をしにここにいるんだ？」

一刻も早く空気を変えたかつた陣は、真つ先に口を開き話題を提示
する。

「……まあ、ちよつとした野暮用ですよ。少しばかり厄介なもので
すがね、」

「そ、そうなの、か、」

陣は眼楽の返答を聞き後悔する。

明確な返答を貰つたわけではないが、誰がどう聞いても眼楽の返答
は話題に乗り気な様子ではない。

寧ろ、その逆だった。

暫く、その場に凍つたような静寂が流れる。

「・・・陣、そろそろ」

「そ、そうですね。そろそろ山に戻らないと、」

その後特に話すこともなく、椀は陣に耳元でそう告げる。

相も変わらず、眼楽は竹林を眺めている。

竹藪の先の先に目をやり、風に靡く葉の音に耳を澄ませている。

「すまねえ、眼楽。俺たちそろそろ山に戻らないといけないからさ、また、機会があつたら、」

陣は眼楽に別れを告げようと声を発した。

しかしその次の瞬間、陣の言葉を、重く鋭い口調が遮った。

「――荒れる、、」

「一緒に酒でも、、って、え、？」

眼楽の発した言葉に、陣と椀は戸惑う。

先程まで何処か愉しげな口調で話していた者が、妙に威圧感のある口調へと唐突に変化したからである。

「が、眼楽、？あ、荒れるって、、どういう、」

「――静かに、誰か近づいてくる」

眼楽は鋭い目をしながら此方を振り向き、人差し指を口に当てる。

「――陣、武器を構えてください！彼の言う通り、確かに誰か近づいてきています！それも消音して、ゆっくりと、！！」

「えっ、!?は、はい、！！」

陣と椀の二人は、同時に剣の柄を握り体勢を屈める。

それから間も無く、眼楽も同様に背中に背負った大太刀を引き抜いた。

――次の瞬間、椀は反射的に振り向く。

切先を振り向いた方向へと向け、駆り出す左脚に力を貯める。

時間が経過していく。

短くも恐ろしいほどに永く感じられる数秒。

気づけば三人、無意識に息を止める。

その時が来るまで、じつとその場で闘志を溜め込む。

――瞬間、椀が切先を向けた方向から、人影が二つ、勢いよく飛び出した。

同時に椀は力を抑え込んでいた左脚を解放し、一気に距離を詰める。

「――ッ！……って、貴方は、」

が、人影のうち一人の顔を正体を確認して足を止めた。

陣もまた正体を知り、肩の力を抜いて刀を下ろす。

「は、隼さんだったのか、！ふう、安心した、。あー、眼楽、この人は別に危険な人じゃないぞ、

……眼楽？」

陣は眼楽にそう伝えるも、一切返答がない。

それどころか、刀を下ろすどころか未だに殺気を放ち続けている。

「・・・どうやら、賊の類いでも猛獣でも無いようですね。それに、貴方の名前を呼んでいますし、ひよっとして知り合いでしたか？隼さん。」

「・・・隼さん？」

一方、竹藪の死角から飛び出してきた二人。

そのうち一人の九尾の狐もまた、放っていた殺気を消しもう一人にそう尋ねた。

しかし、此方も反応無し。

凍えるような殺気も健在。

殺気を残す二人は視線をぶつける。

一方はまるで物が斬れるかの如く鋭い視線、右手には短刀が構えられている。

方やもう一方は、口に不敵な笑みを浮かべている。

しかし目は至って鋭い視線、更には狂乱を眼に宿している。

——次の瞬間、辺り一体に強風を吹かせながら、短刀と大太刀が火花を散らしてぶつかり合った。

「まさかこんな場所で再会するとはね、眼楽。お前は相変わらず神出鬼没だな、!!」

「あははッ、君は随分と変わりましたね!!」

——此方こそ、また会えて嬉しいですよ、隼君、!!」

瞬間、互いの頬に傷が入り、血の雫が一滴溢れた。

鬼式眼楽の殺気

――両者が衝突した刹那、辺りに鋭い旋風が迸る。

風は竹藪の葉を暴れさせ、木々のざわめきがその場を覆う。

先手を打ったのは鬼式眼楽。

太刀を握った手首を捻り、咲風隼の操る小刀を振り払う。

間髪入れず、息もする間も与えぬ連続斬撃。

「はははッ！自慢の黒刀はどうしましたか！隼君！」

対して隼は小刀を巧みに操り、眼楽の連撃を的確に防ぐ。

「口を動かす暇があったら、もう少し速度を上げなよ、眼楽」

互いに刃を交わしながら口頭で煽り合う。

瞬間、隼は小刀の宙に捨てる。

捨てるといっても、乱雑に投げ捨てたのではなく、まるで空中に浮かんだ机の上に置くように、自然な動きで小刀を手放した。

――直後、一瞬戸惑った相手の隙をつき、隼は眼楽の懐に入り込み腹部に右脚で蹴りを叩き込む。

「!?――ウグツ!!!」

眼楽は足で踏ん張りを効かせるも、威力に耐えきれず後方へと吹き飛んだ。

が、すぐさま体勢を立て直し、地面を少し抉り上げながらも、僅かな程度距離が離れた位置で留まる。

「どうした？随分と隙だらけじゃないか。暫く見ないうちに腕が鈍っ

たかい？」

隼は地面に転がった小刀を足で弾いて拾い上げる。

冷徹な視線を向けながら、眼楽に対し、そう口を開く。

が、俯いていた顔を上げた眼楽の表情は、不敵な笑みが浮かんでい
る。

「いいえ、寧ろ好都合ですよ」

切先を隼へと狙いを定めて、弓の弦を弾くように大太刀を構える。

「この程度の距離が、一番狙いやすい、!!」

——直後、眼楽の大太刀から放たれた突きは、槍の如き衝撃波を
飛ばす。

「——!!」

命中する直後、隼は何とか首を晒し、致命傷になり得る箇所を外す。

結果、眼楽から放たれた無色の衝撃波は、隼の肩の辺りを掠めた。

隼の背後へ、微量の血が飛ぶ。

「君の方こそ、戦闘の技術は向上しているかもしれませんが、殺意の方
は随分と鈍りましたね？」

—————————————————————————
「—————————————————————————
「くッ、相変わらず厄介だ、お前は」

一方、その場に居合わせた他の三人は、息をすることすら忘れたようにその様子を傍観していた。

戦いを止めようともせず、かといってその場から避難しようともしない。

ただその気迫に圧倒され、その場に立ち竦んでいた。

が、眼楽に蹴り、隼に斬撃が命中したところで、ようやく一人が口を開く。

「は、ゝ、隼さん!!」

八雲藍は何とか声を絞り出し、隼へ向けてそう叫ぶ。

そしてその一言が絞り出された瞬間には、既に藍の足は動いていなかった。

両手に妖気を集中させながら、血を垂らす隼の元へと駆け寄っていた。

――が、次の瞬間、大振りな斬撃が隼と藍の間を走り抜けた。

地面には斬撃による抉られたような跡が残る。

「何者か存じ上げませんが、邪魔はしないで頂きたい」

「っ、!!」

瞬間、藍の足は地面に固定されたように動かなくなる。

藍は圧倒されたのだ。

鬼式眼楽が纏う、身を凍らせるほどの強大な殺気に。

「藍、離れて。．．．事情は、後で必ず話すから、」

藍が圧倒され動けないでいるところに、隼は小さく囁く。

一瞬、藍は反論しようとして足を踏み出そうとするが、その足が一步出る前に止まった。

「――御武運を、」

唇を強く噛み締めながら、隼に背を向けた。

突然、眼楽は刃を下ろし、隼の元へと近づいていく。

眼楽の得物は太刀であり、隼の現在の得物は小刀。

太刀を持つ方がわざわざ距離を詰めるなど、戦闘において悪手になる行動だが、

それでも眼楽は近づいていく。

ゆっくりと、ただ道を散歩しているかのように。

「君との殺し合いはもう少し長く楽しみたいですが、生憎今日は時間がない。」

「――ですから、次の瞬間で決着させてもらいます」

「へえ、わざわざ距離を詰めてくれるなんて、接近する手間が省けて助かったよ、眼楽」

隼も小刀を下ろす。

両者武器を下ろし、ただその瞬間をじっくりと待つ。

瞬間、眼楽は隼の小刀の間合いに入った。

――その刹那、両者同時に足を踏み込み、刃を居合の如く繰り出した。

——しかし、衝突の瞬間、両者の間に鋭利な突風が駆け抜けた。

「なッ、!？」

思わず喫驚した隼は地面を勢いよく蹴り、後方へと距離を取る。

その次の瞬間、辺りに異様な気配が迸った。

場に居合わせた全員が、引き寄せられるように一点へ振り向く。

その視線の先には、怪しげな人影が刀を携えて佇んでいた。

顔を隠し、全身を装いで覆ったその人物は、幽鬼の如き足運びで近づいていく。

「——ようやく逢えたよ、貴女に、」

鬼式眼楽の表情は一転した。

強襲・辻斬り剣豪

怪しげな剣客の乱入に、その場にいた全員に強い緊張が走る。咲風隼は一度隅へと離れ、八雲藍ら全員に、視線で“出るな”と合図を送る。

その中でただ一人、闘志と殺気を震わせる者が居た。

――瞬間、鬼式眼楽は突風を纏いて加速する。

「ちよ、！止まれ眼楽、！！」

攻撃を仕掛けに往く眼楽の様子を見て、鞍真陣は思わず声を上げた。

しかし眼楽は一切足を緩めない。

身体を加速させながら、一瞬陣の方を振り向き口を動かした。

「止まりませんよ。この瞬間だけは、誰に阻まれようとも、」

紅く染まった刃の大太刀を携えて、一気に謎の剣客へ距離を詰める。

更に次の瞬間、大太刀は空気を切り裂く鋭い音を立てながら、その者へと振り下ろされた。

が、斬撃は金属音と火花を散らし阻まれる。

「くっ、やはり通りませんか、」

その衝突は目で追えないほど、あまり一瞬の事だった。

眼楽が距離を詰め、完璧な間合いで刀を振り下ろした瞬間、相手は自身の刃を引き抜き、薙ぎ払うように眼楽の斬撃を防いだ。

その間、瞬きすらできぬ僅かな時間だった。

——その直後、その剣客は反撃に出る。

抉るような勢いで地面を蹴り、銀色の頭身を煌めかせて眼楽に斬りかかる。

眼楽はすぐさまその動きに対応し、攻めの太刀から守りの太刀へと転ずる。

その刹那、両者の刃が重なり再び火花が散る。

「ッ、!?」

しかし、眼楽の防御は即興ゆえ甘く、相手の一撃によって弾かれた。更に間髪入れず、相手は斬撃を続行する。

何度も何度も鋭い風切り音を鳴らし、高速の斬撃を繰り返す。

対して眼楽も何とかして体勢を立て直すが、相手の連撃に対応しきれず徐々に押されていく。

「っ、は、速いッ、!!」

——次の瞬間、その剣客は一步後ろに下がり、大きく刀を振りかぶる。

その構えをとった瞬間、その者は強大過ぎる程の威圧感と殺気を放ち始めた。

やがて奇怪な輝きを纏い、辺りに乱雑な風が吹き始める。

「、！まずいッ、！」

その光景から、離れて様子を見ていた咲風隼は前に飛び出し、即座に小刀で斬撃の壁を生成する。

より厚く、より強固に、

一振り一振りに力を込め、かつ速度も落とさず、斬り裂いた風の障壁を形成していく。

——そしてその瞬間は訪れた。

銀色の刃は紫電を解き放ち、辺り全体を悍ましい程の火力で薙ぎ払った。

辺り一面に強大な衝撃波が放たれ、それを追うように突風が巻き起こる。

次の瞬間、剣客の一振りと眼楽の大太刀が衝突した。

しかし力の差は程遠く、眼楽の防御は最も容易く碎かれる。

そのまま眼楽は一振りを直撃で喰らい、防御していた刀と共に後方へと吹き飛ばされた。

「ガ、あがアツ、、、」

言葉に表せないような声を最後に、眼楽は竹林の中へと消えた。

戦場には、眼楽の吐いた血反吐が二滴ほど残る。

一方隼側は、彼の作り出した障壁と、攻撃が直撃ではないことが重なり、誰一人として傷を負うことなく生還した。

しかしながら、まだ剣客の猛攻は続く。

眼楽の姿が消えると、今度は隼へと視線を向けた。

剣客は体勢を屈めて、一気に隼の懐へと接近する。

「そう簡単には近づけさせないよー!」

次の瞬間、隼は一度小刀を鞘へと納め、居合の体勢を取る。そして衝突の瞬間、目で追えないほどの速度で小刀を引き抜いた。剣客と隼の刀が衝突し、今までで最も大きな金属音を鳴らす。

——衝突を制したのは、隼の居合斬り。

剣客は自身の刀が弾かれた瞬間、一度背後へ向けて地面を蹴った。

「ハア、攻撃を相殺するのも一苦労だ」

直後、再び剣客は地面を蹴り加速する。

それを向かい打つように、隼は一瞬背後に視線を送りながら、再び居合の構えを取る。

しかし次の瞬間、剣客は足を捻り方向を変えた。

そして変えた方向の先には、式神を用いて弾幕を形成する藍の姿が。

「そつちには手を出させないよー」

隼はその動きに何とか順応し、剣客の正面へと立ちはだかろうとする。

——しかし、剣客の方が一枚上手だった。

隼が正面に来ると同時に、先ほどと同じ一振りを繰り出す。

「ッ、!?しまったッ、!!」

両者の刃が混ざり合う。

咄嗟に構えただけの隼の小刀は、最も容易く弾かれた。

そこからは眼薬にも繰り出したような、剣客による高速の剣撃。

隼は反射で防御を繰り返すも、徐々に加速していく剣撃を防ぎ切ることなど不可能であった。

――次の瞬間、隼の小刀は大きく弾かれる。

刹那、剣客は刀を大きく振りかぶり、トドメと言わんばかりの一振りを繰り出した。

対して隼も力を振り絞って防御の体勢を取るが、

――隼の小刀は、パキンと鋭い音を立てて碎け散った。

「――!!!」

そのまま隼自身に斬撃が届き、左肩から腕にかけて大きく傷が刻み込まれる。

一瞬で隼の和装に血が滲み始める。

剣客はもう一度、今度は息の根を止めるために刀を構えた。

が、その一瞬の間、相手は反撃してこないだろうと甘えた瞬間を狙い、隼は強く地面を蹴り飛ばして急加速する。

「悪いけど、この程度の傷なら変わらず動けるよ、!!!」

――刹那、剣客の腹部に隼の膝蹴りが直撃した。

思わぬ衝撃に、剣客は後方へと転がるように吹き飛んだ。

「ここだ、藍ッ!!!」

「はい！完璧な頃合いです!!」

更に追い討ちをかけるように、藍は大量の弾幕を貼った。
妖力弾は剣客を囲み、弾幕の檻を作り出す。

「――今のうちだ、ここは引くよ!!」

その隙に、隼は振り向いてそう呼び掛けた。
三人は同時に頷き、荷物を持って竹林の中へと走り出す。

が、次の瞬間、今度は撤退を図ろうとする三人に標的を変え、剣客は再び攻撃に転ずる。

一步も動かず、刀を担ぐように構えて、大振りに振り下ろす。

眼楽と隼の間を割って入った時と同じ衝撃波を、まずは犬走権の背後へと放った。

「、！そんな見え見えの攻撃など、！！」

攻撃が権に命中しかけた瞬間、彼女は足を止めないずに回転し、携えた大剣で剣客の攻撃を弾き飛ばした。

しかし剣客側も攻撃の手を緩めない。

縦横無尽に空間を斬り裂き、斬撃の衝撃波を連発する。

「陣！まだまだ来ますよ！」

「は、はいッ、！！」

権と陣は竹林の中へと入る。

次々と迫り来る衝撃波を斬り落としながら、剣客の射程距離外を指して走り続ける。

「隼さん、こちらです」

「ああ、早く行こう、」

剣客が権と陣への攻撃に徹している隙に、藍は視界の悪い道へ隼を案内する。

装束を破り傷跡の応急処置をしながら、隼と藍の二人は、その戦場

を去った。

やがて楯と陣の二人も剣客の射程距離から外れ、四人全員が撤退することに成功した。

一人戦場に佇んだ剣客は、弾幕の檻の中で刀に付着した血を拭き取り、それからゆっくりと納刀し、乱れた服を整えた。

――突如として始まった竹林の戦いは、負傷者二名を出して終結した。

「ハア、ハア、一度、態勢を立て直さなくてはなりませんか、」

静寂に包まれた山の中、重傷を負った一人の剣士は、一人再戦への闘志を激らせていた。

友人としての

時は既に深夜、静寂に包まれた街の中の、その外れにある一件の小屋の戸が叩かれる。

コンコンと小さくて軽い音が三回ほど鳴った後、その小屋の主は戸を開けて応答した。

「は〜い、っ、つて、藍じゃない。随分と遅かったわね？道中で何かあったのかしら？」

小屋の主、八雲紫は戸を開くと、目の前には自身の式の姿が。背後には大量の荷物が乗った台車が置かれている。

「まあ、いいわ。少し遅いけれど、夕飯にしましょう」

紫はそう言って戸を限界まで開ける。

その瞬間、紫の目の前にもう一人の人影が目に入った。

「やあ、紫。夜遅くすまないけど、ちよつとお邪魔していいかな？」

そこには、左腕を赤く染めた友人の姿があった。

「取り敢えず、これでいいでしょうか？」

「ああ、ありがとう」

藍は隼の左腕に、応急処置用の簡素な白い布を巻き付ける。

既に血は止まっているようで、白い布を巻き付けても血が滲むことはなかった。

「大体の流れは理解したわ。．．．それにしても、貴方にそこまでの怪我を負わせるなんて、随分な手練ね」

紫は居間のちやぶ台に置かれた菓子をつまみながらそう呟く。

「ああ、正直これから先、彼と戦うのは極力避けたいよ。剣筋があまりに、っあ痛ッ、」

隼が体勢を変えようとした瞬間、苦痛の声を上げる。

「．．．その腕、暫くは安静しないと駄目そうね。無理に酷使すると、最悪使い物にならなくなるかもしれないわ」

「．．．ああ、善処するよ、」

隼は鋭い痛みが走る左腕を見つめる。

その様子を見た紫は、深くため息を吐いた。

「善処、ねえ、。勿論、私に貴方がすることを抑制できるような権利は無いし、欲しいとも思わないわ。

．．．けれどね、出来るなら無理はして欲しくない。自分でも分かっているんでしょ？このままの調子で身体を酷使したら、いつか身体が壊れかねないって、」

隼は紫の言うことを流星に聞く。

彼女の意見は全ての的確であり、『壊れかねない』というのは完全に凶星であった。

以前の西行妖の一件、ここでの戦闘で既に隼は、自身の身体の崩壊を危惧していた。

「身体の動かし方が中々替えられないことは分かっているわ。長年付き合っていた戦闘方法だもの。」

だから、早く克服しろなんて言わない。ただ克服できるまで、過度な戦闘は控えて欲しい。これは友人としての頼みよ、隼」

「・・・ああ、分かっているよ。すまないな、心配かけてしまつて」

隼は痛む左腕をさすりながら、紫と藍の方を向いて小さく笑みを浮かべた。

「・・・さーこの話は終わりよ！早く夕飯にしましょう。色々面倒なこと考えていたらお腹空いたわ」

「ええ、そうですね。それでは準備しますので、少しだけ待っていてください」

そう言うと藍は、台車の中からいくつか食材を選び、厨房の方へと持っていった。

「・・・そういえば、ねえ、何で隼は今日の買い出しに付き合っていたのかしら？」

「・・・あ、えくくつと、、、それはだな、、、」

紫は目を細めて、じいっと隼の表情を窺う。

「た、たまたま散歩してたら藍と会ってさ、話の流れで手伝うことに

なっただよ」

「・・・ふうくん、まあ何か隠してるんでしようけど、そういうことにておいてあげるわ」

『危ない、誤魔化せてはないけど何とかやり過ごせた、』

隼は心の中で、ほっと息を吐いた。

それから数十分後、藍が厨房から鍋を運んでくる。

「鍋を作ってきました。冷める前にいただきますよ。」

「あら、いいじゃない。早く食べましょ」

藍は鍋をちやぶ台の真ん中に置き、その鍋を三人は取り囲む。

「それじゃあ、いただきます。」

その夜、三人は鍋をつまみに、何気ない談笑を楽しんだ。

知らない回想

空中を飛び交う火花、次々と崩れ落ちていく建造物、絶え間なく聞こえ

続ける悲鳴や怒号が、その地獄絵図に拍車をかける。

「――どけエ!!!」

その地獄の中、一人の鴉天狗は瓦礫を次々に弾き飛ばし、人間の救助に奮闘していた。

「ハア、ハア、なんてことを、」

その鴉天狗の視線の先の先には、津波の如き侵略を繰り広げる同族の姿があった。

鴉天狗は思わず目を細め、歯軋り音を立てる。

――その次の瞬間だった。

鴉天狗が向けた視線の逆側から、鋭い風切り音が鳴り響く。

と、同時に、鴉天狗の頭上へと、巨大な瓦礫が覆い被さった。

「なッ、、!?!」

・・・回想はそこで途絶えた。

「陣!!」

「は、はいッ、!!・・・って、あ、す、すみません、」

その瞬間、自分の名を呼ぶ大きな声が、意識を回想から引き戻す。左を向くと、立ち止まり目を細めてこちらを睨み付ける椀さんの姿が。

「どうしたんですか？突然何も喋らなくなって、こちらが話しかけても上の空」

「い、いや、なんでもないですよ。大丈夫です」

「・・・それならいいですが、」

そう言うと、再び椀さんは前を向き歩みを進めた。

「・・・いったい何だったんだ、今の風景は、」

突如として脳内に現れた謎の風景。

一切記憶にないその情景は、一瞬にして俺の脳裏に強くこびりついていた。

「いいから早く戻りますよ。道の下見は十分ではありませんが、まずは身の安全の方が先ですから」

「ちよ、は、はい、!!」

考え込む俺を置き去りにするかのようになり、あるいは考え込むような

時間は与えないと言わんばかりに、権さんは足を早める。
少し遅れるような形で、俺はその後を追い、妖怪の山へと向かった。

とある辺境の地、霧がかった無名の山の中腹にて、
穏やかな自然を脅かすような不敵な笑い声が木霊する。

「苦戦しているな、鬼式眼楽。アレは難敵か？」

「おや、久しぶりですね。何故ここに？」

「なに、偶々通りかかったただけだ」

太刀の整備をする眼楽の背後へ、足音なく男は近づいていく。

「そちらはどうですか？」

「・・・順調、とはいかないな。分かりきっていたことではあるが、
やはりあの者たちとの衝突は避けられない」

「・・・」あの者たち」とは？」

眼楽がそう聞き返すと、男は淡々と語り出した。

「まず一人目『妖怪、八雲紫』、一度も接触したことがない上、目的も噂に聞いた程度だが、おそらく衝突は避けられない最も厄介な相手、、、」

「・・・八雲紫、ですか。初耳ですが、警戒しておきましょうか」

眼楽は男の話に相槌を打ちながら、引き続き刀の整備を続ける。

「二人目『咲風隼』、一体どういう事情かは知らないが、今は鴉天狗となり、妖怪の山に拠点を置いているようだ。こちらも衝突は避けられないだろう」

「隼君ですか、彼なら先程手合わせしましたよ。相変わらず、彼は僕の殺気を最大限まで引き出してくれる」

「ああ、知っている。その現場なら見ていたからな。確かに相変わらずの戦闘能力だが、、、」

「……」だが?」

「既に策は練っている。果たして実現できるかは分からないが、成功すれば咲風隼対策は完了といってもいいだろう」

「・・・へえ、」

眼楽はそれを聞き、小さく笑みを溢した。

「そして三人目だが、『……』」

その人物の名前を述べた瞬間、眼楽の表情が変わる。

「これは俺の、というよりも、お前にとつての障壁だな、鬼弑眼楽」

「・・・すみませんが、もうそろそろ行きますので、」

刀を鞘へと収め、山の麓へと歩み始める。

「そうか、では次会う時は、お前の問題が解決した後だな」

「ええ、それでは」

眼楽は背後を振り返ることなく、漆黒に包まれた山の中を進んでいった。

「あれが鬼式眼楽だ。何か感想はあるか？」

眼楽の姿が完全に消えた後、男の背後に、隠れていたもう一人の姿が現れる。

時代にそぐわない奇天烈な格好をし、腰には真紅の刀を携えたその者は、無言のまま首を横に振る。

「・・・特にない、か。まあいいだろう。だが気になったのであれば、直接話してみるといい。俺が言うのもなんだが、かなり狂った奴だからな」

男がそう言うと、その者はまたしても無言のまま、山の中へと消えていった。

「・・・さて、そろそろ俺も動くでしょう。まずは、『八雲紫』。この女との接触からだ、」

男はそう言い残し、霧と共にその場から姿を消した。

剣客の穏やかな一日

——周囲が山に囲まれた、とある小さな廃村。

生気を宿していない大地が広がっているその場所には、ボロボロに崩れかけた民家が並び立ち、いくつかの畑が荒れ果てた姿で残っている。

過去、この廃れた村には少数の家族が、時間すら忘れるような穏やかな日常を過ごしていた。

その村の中でも、最も端に位置する小さな民家にて、

「——ただいま、姉さん。体は大丈夫？」

「・・・ああ、おかえり。って、その野菜は？」

「すごい量だよ。これ、村のみんなが姉さんに、って。待ってて、今から料理するよ」

「わ、私に？」

青年は少しばかり建て付けの悪い戸を開け、背中に担いだ大量の食糧を慎重に運び込む。

その様子を、もう一人の女性は唾然とした表情で眺めていた。

「そんなに沢山、、本当に村の方々には、感謝してもしきれないな、。本当は何かしらのお礼を出来たらいいのだけど、」

「姉さん、まずは病を治すのに専念しなきゃね。その後で、精一杯の恩返しをすればいいでしょ？」

「・・・うん、そうね、。良くしてくれる村の方々のためにも、早く体調を良くしなきゃだよ」

青年は背負った食糧を下ろし、床に腰を下ろす。

そして壁に立てかけてある一本の刀を手に取り、淡い目をしながら

刀身を露わにする。

「それに、、、僕はいつでも動けるから」

「・・・眼楽、、、」

青年、鬼式眼楽と、彼が姉と呼ぶ一人の女性。

この二人は元々、この村の住民ではなく、ここから少し離れた場所に位置する、ここよりもう少し栄えた村からの移民だった。

数年前、とある事情により、二人はこの村に流れ着いたのである。

「・・・でも無理は駄目。折角あの村から逃げ出したんだから、少しずつ歩んでいきましょう?」

「分かってるよ。でも、少しぐらいは無理をしたいから。僕達を受け入れてくれた村の人たちの為、もう一度この刀を握る」

「・・・うん、」

そんな会話を交わしていると、二人の家の元に、忙しない足音が近づいてくる。

――次の瞬間、家の戸が勢いよく開けられる。

「ふ、二人とも!いるか!」

戸を開けた人物は、この村の村長だった。

息を切らしたまま、家の中へとそう叫ぶ。

「いますよ。そんなに急いで、どうかしましたか?村長さん」

「おお!兄ちゃん!それに姉ちゃんも!よかったよかった!!説明している時間はねえんだ!早く行くぞ!」

村長はその場で足踏みをしながら、二人にそう話す。

その真っ青な顔色から、誰の目から見ても緊急事態であることは間

違いなかった。

「大丈夫です。落ち着いて話して下さい。何があつたんですか？」

「落ち着いてる暇なんかねえんだよ！山から猪の群れが降りてきちまつたんだ！早くしねえと、奴らの侵攻の巻き添えを食らっちゃう！！」

「ーそうですか、分かりました、」

それを聞いた眼楽は、一呼吸置いてから立ち上がり、壁に立てかけられた刀を手に取った。

「村長さん、他の方々はもう避難し始めていますか？」

「いいやまだだ、まずは村に一番近え二人のそこから伝えていこうと思つてたからな」

「そうですか、では、他の方々には、家の中で待機するよう伝えてください」

「は、はあ!?何言つてんだ兄ちゃん！例え屋内に籠つてたって、奴らの力なら簡単に突破してくるぞ！」

眼楽は戸から外へと出て、村長が指す山へと歩み始める。

「安心してください、猪は全て僕が殲滅します。この村には一匹たりとも入れさせはしませんから、」

「ちよっ!!待て兄ちゃん！戻つてくるんだ!!殺されちまうぞッ!!!」

眼楽は一度村長の方へと振り返り、小さく笑みを浮かべる。

それから前を向き直し、速度を上げて山へと向かっていった、

「……ん、夢、か……。懐かしい風景だったな、」

とある山の中腹にて、丁度太陽が地上へと顔を出し始めた頃、僕は重い瞼を上げて目を覚ました。

自然ともう一度、僕は夢の世界へと入ろうとするが、耳元で鳴る騒音に引き留められる。

首を捻って騒音の鳴る方へ向いてみると、小鳥が何やら地面に嘴を突き立てていた。

「おや、朝食ですか？ここには気が散るでしょうし、さっさと移動するのでしょうか」

僕は重い腰を上げ、荷物を纏めて下山を始める。

道中、何度か獣に遭遇しながら、数十分かけてようやく麓に辿り着く。

『さて、これから何処へ向かいますでしょうか、』

下山した勢いそのまま、ただ目的もなく静寂に包まれた森林を歩み続ける。

途中、何度か栗鼠や鹿といった温厚な動物には遭遇したが、熊や猪のような危険度の高い動物には遭遇しなかった。

それに加えて、所々で人の痕跡が見つかった。

『……おや、やはり、』

更にそこから歩みを進め、やがて森林の出口へと辿り着くと、多くの人で溢れている町に直面した。

『折角ですし、今日はここで夜を待つとしましょう』

町に足を踏み入れると、直ぐに声をかけられた。

「お、兄ちゃん旅の人か？よかつたらウチの酒場に寄っていけよ！」

呼び止められた方向を向くと、何人かの屈強な男たちが、大騒ぎしながら酒を飲み交わしていた。

まだ昼なのにも関わらずこの様子とは、今日は何か祝い事でもあるのだろうか。

「……では、お言葉に甘えて」

折角の誘いを無碍には出来ない。

僕はそう返事をして、酒場の中へと入っていった。

運命の再戦

「おうオヤジ！酒一杯追加してくれエ！」

店に入ると屈強な男の一人は、長机の奥に立つ髭の生やした男にそう叫んだ。

どうやらその男は、この店の店主のようだ。

店主はその声を聞くと、顰めつ面を浮かべてこちらを振り向く。僕は男に連れられ、その店主と向かい合う形になる席に座った。

「ああ？まだ飲むのか、って、ありや、知らねえ顔だな。お前さん、旅のモンか？」

「ええ、そんなところです。一杯いただけますか？」

「ああ、いいぜ。ほら」

すると店主は、目の前に小さな木樽を置き、そこに酒を流し込んだ。

「金はいらねえ、さあ、乾杯だ」

「・・・！いいんですか？」

「いいんだよ、遠慮すんな。ほら、その辺の”間抜けヅラ共”も待つてるぜ」

不敵な笑みを浮かべた店主のその言葉に、店中から文句が飛び交う。

その賑やかな光景は、とても羨ましい光景だった。

——その一瞬、脳裏に見覚えのある小さな村の光景が過ぎった。

血気盛んに畑を耕す男達、その様子を見守りながら家事をする妻達、老後を穏やかに過ごす年配の方、

「……そして……」

「……姉さん……」

僕は無意識のうちに、小声でそう呟いた。

「……ん？どうした、なんか言ったか？」

「……え、？あ、いえ、何でもありません」

折角の場だ。

今は全て忘れ、この光景を楽しもう。

「では、お言葉に甘えて」

僕は木樽を手に持ち、真上に突き上げた。

同時に、活力の込もった『乾杯』という掛け声が、店の中を響き渡った。

——それから時は経ち、その日の夜。

空に美しい夕焼けが浮かび上がり、そしてそれが消え、転々と星々が輝きを放ち始めた頃。

僕は一人、暗闇に包まれた山道を進んでいた。

「少し、飲み過ぎましたかねえ、」

身体には心地いくらいの酔いが回っていた。

しかしながら、あの場で飲酒を遠慮するのは野暮だろう。

「さて、ここから何処へ向かいましたようか、」

その次の瞬間、微かではあるが、人の気配を感じ取った。

「……こんな遅くに、妙ですね、」

僕は立ち止まり、気配のする方向を凝視する。

運び屋の商人、もしくはは山賊、とは考えにくいだろう。

もしそれらならば、あまりに音が静か過ぎる。

であれば、少人数、もしくは単独の旅人、となるが、

「念の為、接触を試みてみましょうか」

ここは夜の山奥、熊のような獣は勿論、得体の知れない化物や妖怪も跋扈しているのであろう場所である。

少人数、もしくは単独でそこを歩くなど、よっぽどの手練れか、命知らずか、

僕は気配のする方へ方向を変え、足音をなるべく消し、歩み進める。

「……そちらも同じ考えですか、」

少し足を進めた場所で、相手もまたこちらへと近づいてきていることに気付く。

これにより、相手は夜道を何の抵抗もなく歩けるような手練れであることは明らかだろう。

双方、一定の速度のまま、一直線に相手へと近づいていく。

そして何の偶然か、それとも必然の運命か、

二人同時に、木々の少ない開けた場所に出る。

お互い、相手の姿を明確に認識する。

「……さあ、いきましようか、」

途中で既に気付いていた。

このまま歩き続けた先、誰が、そして何が待ち受けているのか。それがどれだけ悲惨であろうと、

既に酔いは無い。

自身の身体、心拍は、恐ろしいほどに落ち着いている。

僕はゆつくりと、背中に携えた大太刀を引き抜いた。

真紅の刃が、一瞬ギラリと禍々しい輝きを放つ。

「……………終止符を打とう、…姉さん、…」

……瞬間、鈍い風切り音と共に、刀同士が交わり火花が散った。

天狗の対談

「……鬼式眼楽と謎の辻斬り剣士が衝突する前日、妖怪の山にて、」

「すまないな、急に押しかけるような形になってしまった、」

「いや、いいよ。ちよつと居間で待っていてくれ、今何か飲み物でも取ってくるから」

咲風隼の借家に、大天狗である飯綱丸龍が訪れていた。

隼は龍を中に招き入れると、居間のちゃぶ台の前に座布団を敷き、そこに龍を座らせた。

そのまま隼は台所の方に向かうと、湯呑みを一つ取り出し龍の前に置く。

そしてその湯呑みに対して、ただの水を注いだ。

「悪いけど、水で勘弁してくれ。今飲み物がこれしかないんだ」

「ああ、いや、全然大丈夫だ。気遣わせてしまつてすまないな」

この時、龍は隼の何気ない体の挙動に、違和感を覚えていた。

「さて、俺に何か用かい？暇つぶしに、って訳じゃ無さそうだけど、」

龍はちゃぶ台に置かれた水に手をつけないまま、隼の目を一点に見つめたまま口を開く。

「…少し気になったんだが、随分と先程から左手を使うのを躊躇っ

ているように感じるのだが、、、これは単なる私の勘違いか、、、？」
「…………！」

龍からの指摘に、隼は一瞬表情を歪める。

少し考え込むと、龍に顔を近づけ小声で囁いた。

「…………この話は、他言無用でお願いしていいかい？」

「ああ、構わない。やはり何かあるのだな？」

隼は和装を捲り、少し血の滲んだ白い布が巻かれた左腕を頭にした。

「…………軽症、とはいかないようだな、その負傷は、、、」

「…………多分、暫くはまともに動かせないかな、、、」

隼はこの通りと言わんばかりに、左腕を慎重に上げ下げさせる。

「…………妙だな、」

それを聞き龍の脳裏に、一つの疑問が浮かんだ。

彼は鴉天狗、名の知れた妖怪、天狗の一種である。

「幾ら重症といえども、天狗の再生力を持つてすれば、”暫くの間機能が停止する”とまではならないだろう。」

「咲風隼、その傷から感じるのには、単なる痛みだけか？」

「ん、そうだな、、、今のところは、痛みしか感じないかな。…………それと、呼ぶ時は名前だけでいいし、呼びづらいでしょ？」

「む、そうか、分かった。妙なことを聞いてすまないな、忘れてくれ」
「…………いや、、一応頭の中に入れておくよ、、、」

そこで龍は、ようやく隼の目から視線を外し、湯呑みを手に取り水

を一口飲んだ。

隼は再び左腕を和装で覆い隠す。

「……ところで、何故他言無用なんだ？身体の容体については、共有すべきだと思うのだが、」

「え？……いや、まあ、心配かけることになるから、ね、」

龍の問いかけに、隼は言葉を濁しつつそう答えた。

その回答に対し、龍は一瞬きよんとした顔を浮かべた。

そして次の瞬間、思わず龍は吹き出す。

「……ぷっ、あつははははっ、！」

「な、!?そ、そんなにおかしなこと言ったか、？」

その笑い声は、普段の飯綱丸龍からは想像し難いものだった。

思わず隼はちやぶ台へ身を乗り出し、龍に笑うのを止めるよう促す。

「くくく、いやいや、すまない。別に変なことは言っていないぞ、君は。ただね、ふふっ、！」

じゃあ何故笑っているんだと言わんばかりに、隼は更に身を乗り出す。

対して龍は笑いを堪えようとするが、結局直ぐに吹き出す始末である。

隼が制止しては、龍が堪え、また直ぐ吹き出す。

このやりとりが暫く続いた、

「……いやいや、すまないな。まさか君がそんなことを言う人物だとは思わなかったものでね。どうやら私は、君を警戒し過ぎていたらしく」

「・・・悪かったね、あんたの印象と違った人物で」
「いやいや、君は別に悪くない。むしろ、私は少し安心した」

「・・・」すると次の瞬間、龍の表情が真剣な顔つきへと一転する。

「さて、長いこと話が逸れたが、ここからの話が私の要件だ。いくつか質問させてもらうが、構わないか？」

「・・・ああ、構わないよ。幾らでも質問してくれ、」答えられる範囲”なら、何でも答えようじゃないか」

「感謝する。ではまず一つ目だが、単刀直入に聞こう。先日、犬走権と鞍真陣の二人が、ただならぬ様子で山に戻って来るのを見かけたのだが、その日一体何があった？」

「・・・少し長くなるけれど、いいかい？」

隼は龍に、一部始終を語った。

鬼式眼薬という人物との関係性、謎に包まれた辻斬り剣士、そして負わされた左腕の傷、

「・・・以上だ、これでいいかな？」

「・・・なるほど、大体は理解した。二人が何故そこに居たのかは、直接聞くことにしよう。・・・それで、君はこれからどう動くつもりだ？」

そう問われた隼は、腰を上げ部屋の隅に散らかっている、小刀や応急処置道具の入った布袋を担ぎ上げる。

「まずはこの後、衝突があった現場に戻ってみようと思う。何かしらの痕跡が残っているかもしれないからね」

「……そうか」

すると龍は湯呑みに入った水を全て飲み干し、隼と同様に腰を上げる。

「片腕使えないのは不安だろうか？私も付き合おうじゃないか。久しぶりに、訛った体を動かしたいのでな」

「えっ、いいのかい？」

「何、丁度最近は仕事が少なくてね。それとも、大天狗である私の力では不満かい？」

それを聞き、隼はニヤリと笑みを浮かべた。

「まさか、なら頼らせてもらうよ、龍」

「決まりだな。ならば早速出ようか。っと、言わなくても君はそうするつもりだろうけどね」

二人は玄関に向かい、履物に足を入れる。

そして隼が戸を開けようとした瞬間、龍が彼を一度引き止めた。

「と、その前に、一度山の武器庫に寄っていかないか？」

「ん、武器庫？」

隼は龍の案に一瞬戸惑うも、直ぐに承諾し、彼女にそこへの案内を頼んだ。

「なら、まだ明るいうちに行こう。武器庫はこっちだ、後をついてきてくれ」

……そこから二人は、山の武器庫へと足を進めた。

いざ、衝突の時

「ず、随分な散らかりようだな、」

「・・・ああ、後々片付ければいいと放置していたのだが、」

武器庫に辿り着いた二人は、中の光景に絶句する。

乱雑に重ねられた武器の山に、息を吹きかければ盛大に舞い上がるだろう大量の埃。

その様子はもはやゴミ置き場である。

「・・・どうする、？やめておくか、？」

龍は隼にそう問いかける。

「・・・いや、少し掃除すれば多少はマシになるさ。口を覆うための布と、あと、箒はあるかい？」

「分かった、今持つてこよう」

隼の返答に龍は二つ返事で承諾し、言われたものを取りに行くため一度その場を離れた。

その間に隼は慎重に中へと立ち入り、乱雑に重ねられた武器を物色する。

その内、一番上に乗っかっていた一本の刀をそっと拾い上げた。

「・・・汚れてはいるけど、戦うには十分かな、。刃こぼれもない」

抜刀し、刃の状態を確かめる。

状態は新品そのもので、一切の刃こぼれもなかった。

しかし、隼は再びその刀を納刀し、そっと元あった位置に立て掛けた。

そしてまた、倉庫内を慎重に物色し始める。

「・・・やっぱり、もう少し長さが欲しいな、」

乱雑に重ねられていた刀の山は、どれも隼にとっては長さが足りないものだった。

そうして物色を続けていると、隼の目に一本の埃被った刀が目に入る。

すぐさまそれを手に取り、刀を軽く構えてみる。

柄の先から切先までの長さは、おおよそ隼の身体の肩あたりまでの高さと同等程度の刀である。

「・・・まあ、これくらいあればいいかな、。刃の状態も、大丈夫そうだ」

隼はその刀に決め、鞘を腰の辺りに差し込んだ。

それ同時に、丁度龍が布と箒を二つずつ持って戻ってきた。

「待たせたな、つと、その刀、もう選んだのか？」

「ああ、直感で決めようかなと思ってね。・・・さあ、軽く掃除しようか」

隼は龍の方に手を伸ばし、掌を軽く開く。

龍はその掌を目掛けて、箒を一本、弧を描くように投げ渡した。箒を受け取った隼は、部屋の隅目掛けて床を軽く掃き始める。

一回、二回と床を掃く度に、多くの埃が舞い上がる。

「うわっ、。想像はしていたが、やはり放置し過ぎたか、。これは骨が折れるな」

最早煙と化した埃の大群に、龍は思わず一步退く。

そしてため息をつきながら、黒色の羽織を脱ぎ、青色の装束着を露わにした状態で武器庫に入る。

「君はその姿のままでもいいのか？埃まみれになるぞ？」

「ん？・・・あゝ、まあ、別にいいかな」

隼は服へ微力に被さった埃を軽く払いながらそう答える。

「そうなのか、てつきりいつも真っ黒の服で行動しているから、服に強いこだわりでもあるのかと思っていたが、」

「・・・まあ、好きで黒い服を着ているのは事実だけどね。特に強いこだわりはないよ」

そんな雑談を交えながら、掃除すること約三十分、

「よつと、こんなもんかな」

「ふう、概ね片付いたな。これなら当分は大丈夫だろう」

倉庫内のつもりにも積もっていた埃は殆ど無くなり、掃除する前のゴミ置き場といったような印象は少なくとも受けられない状態まで片付いた。

「さてと、倉庫内は片付いたことだ、そろそろいくか？」

龍は武器庫の扉を閉めて鍵をかけ、隼にそう言う。

「ああ、今から行っても、暗くなる前までには帰れるだろうからね」
「そうか。なら、すぐに向かおう」

太陽は丁度、二人の真上に位置し煌々と辺りを照らしている。

目的地までは、飛んでいけば往復でも日暮れまではかからないだろうと隼は判断した。

龍は鍵を懐にしまい、武器庫の外に掛けておいた黒色の羽織を再び着た。

「……そういえば、、龍って飛べるのか？」

「何を言う、私は大天狗だぞ？空を飛ぶくらい容易いことだ」

質問に龍は腕を組み、少し呆れた顔で答えた。

「そりやそうか。愚問だったね、悪かった」

隼は黒翼をはためかせて、飛行の準備をする。

「……逆に聞くが、君の羽の動き、少しぎこちなく見えるが、？」
「あ、あく、まあ、気にしないで。別にどこも調子悪いわけじゃないからさ」

「……そうなのか、、ならいいが、、」

——次の瞬間、二人は空へと飛び上がった。

「さ、行こうか」

隼は向かう方向を指差し、その方向へ向けて飛んでいく。

龍はその後に続く。

「正確な場所までは覚えていないから、まずはその現場があつた森まで向かうよ。だからなるべく低空で飛びたいんだけど、いいかい？」
「ああ、構わない」

そんな会話を交わしながら、山に聳える木々の天辺ほどの高さを維持しながら、二人は目的地へと向かっていった。

――妖怪の山出発から、およそ二時間近くが経過した頃。

二人は隼の目的地がある森に足をつけた。

「多分、こっちだったと思うんだけど、」

隼は先日の記憶を頼りに、森の中を突き進んでいく。

龍はそのすぐ背後を、辺りを見渡しながら追っている。

森の中の雰囲気は、昼間とは思えないほど薄暗く、気味の悪い静寂に包まれていた。

時折聞こえる小動物の鳴き声や、風によって擦れ合う木の葉の音が、その不気味さを際立たさせている。

「・・・普通の森だとは思えないな。あまりに不気味すぎる」

「・・・やめておくかい、？」

「何、少し不気味に感じる程度だ、特に恐るほどじゃない。ただ、暗くなるまでにはここから離れた方がいいだろうな」

龍は直感的に、何かしらの異常な気配を感じ取っていた。

そしてそれは、隼も同じだった。

しかし隼は龍とは違い、一度この森を訪れている。

なのにも関わらず、前回来た時と雰囲気が違うのだ。

小動物の囁りや、木々の擦れる音、なんてものは、どこの森でも必ず聞こえる音である。

しかしそういった身近な音が、今この瞬間、二人にはえらく不気味に聞こえていた。

それから歩くこと数分、

「――お、確かこの辺りだったかな？」

「この辺りか？なら、この先に話にあった広場のような場所に繋がるのか？」

「ああ、もう直ぐそこだよ」

二人の向かう先、正面から、眩しい太陽の光が差し込んできていた。

二人は額に手を当てて光を遮断しながら、その光差す方向へと更に歩みを進めた。

そしてその直後、木が一つとしてない開けた広場が姿を現した。

「これは、今まで歩んできた森とは思えないな」

龍は太陽の光を眩しそうにしながら、一言そう呟いた。

薄暗い森の中、突然として現れるこの空間は、初めて辿り着いた者

誰しもが、その異様な光景に圧倒されるだろう。

それほどに、この空間は自然なものとは思えないほど美しく開けているのである。

「どうだ？何か見つけたりそうか？」

隼は辺りを見渡しながら、広場の中心目掛けて歩みを進めていく。

「……うくん、特に変わったところはなさそうだ、」

一通り周りを見渡してみるが、彼の目からでは、特に何の痕跡も見つからなかった。

——次の瞬間、隼はピタリと足を止める。

「……どうした？何か見つけたのか？」

龍もそれと同時に足を止め、隼にそう問いかける。

「いや、何かおかしい、。なんで何の痕跡もないんだ？」

「……ん？どういう意味だ？」

その直後、辺りを煌々と照らしていた太陽が雲に隠れ、辺り一帯が影に包まれる。

そしてその空間に、不穏な空気感が立ち籠め始める。

「先日、ここで戦闘があったんだ。ならどうして、ここまでこの空間は自然なんだ、？」

「……なるほど、そういうことか、」

隼の一言に、龍は納得する。

そう、ここでは大きな戦闘があったのだ。

咲風隼と鬼式眼楽、そして謎の剣客の参戦、

その戦いは木々の葉を散らし、切り裂き、地をも幾多か抉った筈だった。

なのにも関わらず、痕跡一つないことに、隼は疑問を抱いたのだ。

「……ここは一度引こう、隼」

「……ああ、そうしようか」

二人は引き返すことを判断し、来た道の方へと進路を変えた。

……刹那、二人の眼に、一つの人影が映る。

「……ッ！」

「何!? 一切気配を感じなかったぞ!？」

その人影は漆黒の衣服に全身を包み、二人に背を向けてその場に佇んでいた。

直後、その人物は振り返り、二人を冷たい視線で見つめる。

口元には不敵な笑みがこぼれていた、

「面と向かって出会うのは初めてだな、咲風隼」

そして隼へ向け、一言発した。

怨神縁機

——瞬間、まるでその対峙を予期したかのように、辺り一体に荒々しい突風が吹き抜ける。

空を覆う雲は段々と薄暗い色へと変異し、その場の緊張感に拍車をかけていく。

「——さて、探し物は見つかったか？咲風隼」

その男は頭を含めて全身を黒衣で覆い、空虚な瞳だけを服の隙間から見せていた。

黒衣に身を包んだその男は、空気が凍てつくような冷酷な視線を向け、隼に問いかける。

「……その質問なら、答えは“いいえ”さ。じゃあ逆に質問するが、君は何者だ？そして何故俺の名前を知っているのか、答えてくれないか？」

隼は無意識のうちに、腰に身につけた刀に手を添えていた。

そして男の冷酷な視線を相殺するように睨みを効かせながら問いを返す。

「まあ待て、戦鬪の意思は無い。少なくとも今は、な

——私の名は、怨神おんがみ縁機えんき。恐らく貴様が最も殺したい相手、おや、この紹介の仕方は二度目だったか？」

その瞬間、隼は地を蹴ると同時に抜刀し、縁機と名乗る男へと斬りかかる。

対する縁機は右足を一步前に出し、自身の右腕でその一太刀を受けに行く。

直後、鋼同士が衝突する金属音が辺りに鳴り響いた。

「……そうか、前と口調が違うから、正直気付かなかったよ、！」
「おいおい、それはお互い様だろう。いつから貴様はそんな弱々しい性格を演じるようになった？」

両者、力は拮抗し、キリキリと鋼が擦れる音が微かに鳴る。

その次の瞬間、縁機の左手が紫色の光を放つ。

光は縁機の手の中で鞠ほどの大きさの弾に纏まり、やがて眼にも止まらぬ速度で回転を始める。

しかし、既に隼は縁機はその動作に気付いていた。

だが、依然として隼は動かない。

力を込めすぎず、逆に抜きすぎることもなく、敢えて縁機の腕と自身の刀の衝突を拮抗させ続ける。

「ほう、どういふつもりだ？」

隼が敢えて動かないことに、縁機も直ぐに気がつく。
その間にも、紫の弾は膨張を続ける。

「いいから撃ちなよ。ほら、絶好の機会だと思わないかい？」

隼は挑発をかける。

その分かりやすい挑発に、縁機は様々な思考を巡らせる。

……次の瞬間、隼は刀身に込めていた力をふわりと抜き、勢いよく背後へと地面を蹴り後退した。

「さあ、そろそろいい頃合いじゃないかな、！！」

直後、隼の背後から光り輝く無数の弾幕が放たれる。

無数の弾は隼を躲し、一斉に縁機へと襲い掛かる。

「何、!?」

一瞬の出来事に、ほんの数秒動きが止まる。

しかし、すぐさま弾幕に対応するように縁機もまた背後に下がり、左手に構えていた紫の弾丸で応戦する。

弾丸は縁機の正面から襲い掛かる弾幕と衝突し、無数の色が入り混じった閃光を放った。

同時に衝突地を中心に、木々を大きく揺るがすほどの突風が巻き起こった。

「……なるほど、まさかそう仕掛けてくるとはな、」

風が止むと、黒衣によって隠されていた縁機の白色の頭髪が頭になっていた。

縁機は風により目元に覆い被さった白髪を乱雑に払い、依然として冷たい視線のまま隼を、

・・・正確には、隼とその隣の者へと視線を向ける。

「合図すら送ってないのに、まさか俺の想像した通りの援護をしてくれるとは。恐れ入ったよ、龍」

「忘れたのか、私は哨戒天狗の大将でもあるんだぞ?いくら君が特異な戦闘をする人でも、状況に合わせた援護程度なら造作もない」

縁機の視線の先には、恐らく弾幕を放ったと思われる右手の平を突き出し、もう片方の手を腰辺りに当て、冷静な表情で視線を返す龍の姿があった。

それを見るに、縁機の口角が少し上がる。

「なるほど、一人警戒すべき人物が増えたようだ。大天狗か、これまた厄介だな。」

「・・・そろそろか」

縁機はそう呟くと、再び黒衣で髪を覆った。

それから空を見上げて、雲に隠れた太陽の位置を確認する。

「この状況でよそ見とは、随分と余裕だね！」

空を仰ぐ縁機に対し、隼は刀の切先を突きつけ、怒鳴りつけるように言い放つ。

しかし依然として縁機は表情に変化を出さない。

「此方としては、今ここで一戦交える気はないのでな。それに貴様らがその気でも、対処できる策は講じてある」

「へえ、じゃあ試してみようかッ!!」

隼は一度刀を鞘へと納め、居合の構えをとる。

踏ん張りを効かす左足は地面にめり込み、抉り上がる。

「待て、隼！」

「・・・しかし次の瞬間、龍の声により隼は静止する。」

「君が奴とどんな関係であるのかは知らないが、此方が優勢とはいえ相手の手の内が不明な以上、無闇に攻めるのは得策じゃないだろう、！」

「・・・そうだね、その通りだ。つい熱くなりすぎてたみたいだ、！」

龍の言葉に隼は我に返り、冷静さを取り戻した。

「怨神縁機、といったか？ここは休戦としようじゃないか。いくら其方に策があつても、二体一では流石に武が悪いだろう」

龍は縁機に提案を持ちかける。

その龍の意見に対し、縁機はすぐさま了承した。

「ああ、構わない。私の目的は貴様らとの戦闘ではないのでな」

すると縁機は地面に腰を下ろし、黒衣の懐から一升瓶を取り出した。

それから朱色の盃を用意し、一升瓶の中の透き通った液体をそこに注ぐ。

その光景に、隼と龍は思わず目を見張る。

「……どうした、貴様らも飲むか？」

「……生憎、酒は苦手なんでね。それに、さつきまで殺し合いをした相手と酒盛りできるほど、楽観的な性格はしていないんだよ」

もはや狂気的な縁機の質問に、隼は即答する。

「ああ、これは唯の水だ。私はこの後、日が暮れる頃までここに居なければならぬのでな。……それと、奇遇だな。私も酒は苦手だ」

縁機は盃に口をつけ、一口で水を飲み干す。

そうしてまた、一升瓶の中の水を、盃へと注ぐ。

「……丁度今頃、ここから離れた場所で、二人の剣士が激闘を繰り広げているだろう。一人は咲風隼、貴様がよく知る人物だ」

「……眼楽だね」

「ご名答。そしてもう一人は、貴様が以前、まさにこの地で遭遇したあ

の女だ」

縁機の一言に、辺りの緊張感は最高潮に達する。

「どうしてそれを知っている？」

「鬼式眼楽からはそう聞いているのでな。間違っていたか？」

「――あの剣士は何者だい、？何故あそこまでの力を持っているのか、教えてもらおうか」

隼は動揺を隠せなくなる。

対して縁機は、淡々と水を飲みながら語り続ける。

「まあ焦るな。貴様らに隠すつもりはない。

「――あの女はな、」

その後、縁機は何の意味もない雑談話をするかのような口調で、眼楽ともう一人の剣士の正体について語った。

――同時期、鬼式眼楽とその姉の衝突は佳境を迎えていた。